EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03030 3523

早稲田大學出版部

大正三年七月廿五日印刷
大正三年七月廿八日發行

（漢籍國字解全書）

早稻田大學出版部
不許複製

編輯者　早稻田大學編輯部

發行者　早稻田大學出版部
代表者　高田早苗
東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行所　早稻田大學出版部
東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地
振替東京一一二三番　電話番町三七四 二四二二番

日清印刷株式會社印刷

天道運而無所積、故萬物成、帝道運而無所積、故天下歸、聖道運而無所積、故海內服、

水靜則明燭鬚眉、平中准、大匠取法焉、

靜則無爲、無爲也、則任事者責矣、

知天樂者、無天怨、無人非、無物累、無鬼責、

呼我牛也、而謂之牛、呼我馬也、而謂之馬、

夫道於大不終、於小不遺、

世因貴言傳書、世雖貴之哉、猶不足貴也、爲其貴非其貴也、

莊子國字解上 終

手に桓公を取れり、其の旨亦味ふべし、〔斲輪〕斲は陟角反、彫斫と注す、卽ち或は凸凹或は方圓或は曲直に鑿り削りするなり、たゞ削るとのみ讀み去りては味淺し、又百器靈轉の活機は車輪に若くはなし、其の製作尤も微妙の伎倆を要するに想到せざるべからず、然らざれば前節の「意有所隨」後句の「得之於手而應於心」等の文字、其義は解すべきも、亦是れ莊子の謂はゆる形色名聲のみ、〔聖人之言也〕前節の首句、世之所貴道者書也、書不過語と相照す、聖人之言也の一語其の尤も重きを書に置く、俗情自ら呈露す、〔古人之糟魄已夫〕魄は粕と同じ、「說文」に曰く糟粕酒滓也と、「辯正」に曰く人死則不能傳其意、而讀之唯讀其言可知矣と、「發覆」に曰く眞醇已去所餔者糟粕而已、と兩解宜しく合着すべし、而して夫の字は輕き嘆辭なり、故に此の句口氣鋭きに似て、亦自ら婉なり、〔斲輪徐則甘而不固、疾則苦而不入〕成疏は司馬彪に依り、甘緩也、苦急也として、斲輪失所則牢固と云ふのみ、然らば牢固ならざるは所を得たるか、解說頗る明透せず、故に他本多く林解に從ふ、林氏曰く甘滑也、苦澁也、徐寬也、疾緊也、寬則甘滑易入、而不堅、緊則澁而難入と、然れども文義を置きて實を視れば、寬と滑と、緊と澁と殆んと一曲折を存せず、且つ本文徐疾と甘苦と其の別明かなるに、林氏の寬緊、成疏の緩急は殆んど混同して、人を迷はしむるに足る、今按ずるに丁寧に削る、故に徐と謂ふ、而して自ら少しく削り過ぐる意あり、雜ッと削る故に疾と謂ふ、而して自ら削り足らざる意あり、削り足らざる故に苦澁にして入り難く、削り過ぐる故に甘滑にして堅固ならざるなり、卽ち徐疾は斲輪の手加減内にて言ひ、甘苦は材料其の物の配合上にて言ふなり、〔有數存焉於其間〕案ずるに數は甘苦の數なり、其間は不徐不疾之間なり、此の句、焉字の据ゑ樣頗る奇異なり、岡松甕谷云ふ、猶言於其間有數存焉と〔古之人與其不可傳也死矣〕也字の用法も亦奇異なり、宣穎曰く猶者と其不可傳也とは、卽ち意字を變裝せしめたるまでなり、然れども又意の傳ふ可からざることをも兼ね言ふ、此れ亦例に依つて頗る奇筆を弄せり、

名言

古人之糟魄已夫、

【大意】 桓公輪扁の事を擧げて前節の主旨を實證す、

【通釋】 五覇は齊の桓公を首となし盛なりとなす、されば其の道に志ありしや論なし、公嘗て書を堂上に讀みつゝありしが、たまく車輪匠の名は扁と云へる者、輪材を堂下に斲り居たり、公の書を讀むを見て、何に思ひけん憚る樣子も無く、己が執れる槌と鑿とを釋て置きて堂に上り、桓公に向ひ敢て問ふ、君の讀み給ふは何人の言なるやと、問を發したり、公は是れ聖人の言なりと對ふれば、彼れは聖人は猶ほ存在せらるゝやと、重ねて奇問を發しぬ、公は何ぞ其の存在を問はん、業に已に死にたりと曰へば、輪扁無遠慮にも然らば君が讀み給ふ所は古人の糟粕のみ、正味は已に失せたりと重ねて奇言を放ちぬ、桓公これに機嫌を損じたりけん、寡人の讀書に下賤の輪匠風情としていかで彼れ是れ申し得べきや、其の申條立たば可し、立たざるときは生命は無きぞと叱られたるに、輪扁更に臆したる氣色もなく白して曰く、さればなり、臣は臣が仕事より其の理由を推して觀るに、輪材を切り込み之れを仕組まん際、其の斲り方徐なれば、輪材甘滑にして入り易きも堅固ならず、疾くすれば、苦澁しくして入り難し、其の徐ならず疾からざる加減は、之れを手に得て心に應じ、獨り能く成し得る伎にて、到底口舌を以て言ひ難し、そは微妙なる度合ありて、其の間に存するなればなり、夫れ人の親近にして互に心を知り合ふは父子の間に若くものは無きに、臣は此の自得せる妙所を臣が子に合點せしむる能はず、臣が子も亦之れを臣より受くる能はず、されば臣は本年已に七十歳の老齡に及べるも、伎術の承繼者を得ざるが爲め、今尚ほ此の勞を親らして已む能ばざる所以なり、父子の間すら此の如くなるに、況して古人の其の身と其の意（其不可傳也）との最早死亡して千百年を經たるものに於てをや、然らば君が讀み給ふ書中の言は、之れを古人の糟粕のみと申さずして復た何んと申すべきと云ひたりと、至言なる哉、

【解義】 〔桓公讀書〕 天道一篇は本と治世者の爲めに言ふなり、故に其の大尾に於て輪扁が讀書論の對

出從道而來とあり、「林注」には向也、發覆には指すなりとあり皆倶に通ず、〔爲其貴非其貴也〕「辯正」に曰く貴非所當貴、言世之貴出於誤、故不可據也と、然らば上の其字は世人を指し、下の其字は書を指すなり、〔形與色也―名與聲也〕陸氏云ふ書之言、譬則人之形色名聲也と、宣氏胡氏も亦書の言を譬ふとせり、然れども書冊上有る所は文字、文字の寫す所は言語なれば、直に之れを形色名聲と概言するも、不可なきに似たり、〔爲足以得彼之情〕彼之情とは道の實なり、唯嚴武順は彼を著述之人とせり、是れも亦好解となす、蓋し下文の古人之糟魄に照して切なればなり、但し斯く解するときは、先づ本節の首句なる世之所貴道者書也を胡氏の如く、世の貴びて稱道する所の者は書なりの意に解し、彼之情字を心情の義に解せざる可からず、〔知者不言言者不知〕老子の言、道德經に見ゆ、

桓公讀書於堂上、輪扁斲輪於堂下、釋椎鑿而上、問桓公曰、敢問公之所讀者、何言邪、公曰、聖人之言也、曰、聖人在乎、公曰、已死矣、曰、然則君之所讀者、古人之糟魄已夫、桓公曰、寡人讀書、輪人安得議乎、有說則可、無說則死、輪扁曰、臣也以臣之事觀之、斲輪徐則甘而不固、疾則苦而不入、不徐不疾、得之於手而應於心、口不能言、有數存焉於其間、臣不能以喩臣之子、臣之子亦不能受之於臣、是以行年七十而老斲輪、古之人與其不可傳也死矣、然則君之所讀者

春蠶の絲を吐くが如く、盡きんとして盡くるにあらず、斷えんとして斷ゆるにあらず、忽ち又孔子西藏書於周室の一綫緒餘を緣として、更に此に輪扁齊桓が讀書論の一段を說き出し、人を驚倒せしめて然る後に已まんとは、而して此の一節は其の小序なり、全段の旨趣は如何、陸西星曰く莊子之意欲人離口耳黜聞見、心領神會而得之意言象數之外、則有書無書同歸、影響有言無言俱屬筌蹄（本書外物篇に解すべし）、若徒竊古人之緒餘、誦其言而忘其味、誠糟粕是甘而不免爲輪人之所笑矣と、宣穎曰く收篇忽入一段讀書妙論、非爲學究下砭石也、夫書以傳道、猶無足貴者、以其爲糟粕也、況於有爲之迹如五末九變者乎、固知道之在虛也靜也無爲也、平天下者、可以深省矣、雖然千萬世之學究、亦可以深省矣と、

【通釋】　道なる者は虛にして、神なり、豈に之れを形色名聲に求むべけんや、而して世俗の人は識見淺薄にして、其の道を貴んで之れを求むるは、一に書冊上に於てし、遂に又書冊を此の上も無く尊重するに至れり、特に知らず、書冊は唯だ文字を以て言語を寫せる者、即ち人の聲音を文章てふ形色に換へたるものに過ぎざることを、言語其の物は豈に貴ぶに足らんや、其の貴ぶ所は別に意に在り、意は即ち虛意の向ふ所、指す所は即ち神、神靈の働き玄妙の趣きに至りては、豈に言語の能く傳へ得る所ならんや、而も世俗は言を貴ぶに因つて、書を傳へ、從つて又書を貴べども其の實は書を貴ぶに足らざるなり、何んとなれば世俗の貴ぶ所は已に誤れるものなれば、其の貴ぶが爲めに書は貴きものとならざるなり、然かるに世俗は一途に書を貴び、道は悉く載せられて此の中にありと過信するが故に、其の視て見得る者は形と色とに過ぎず、聽いて聞き得る者は名と聲とを出でず、情なき次第ならずや、斯くして世俗は形色名聲を以て、充分に完全に道の實（情）を得るに足れりと信ずれども夫の形色名聲の道に於けるは遠し、斷じて（果）其の實を得るに足らざるなり、されば（則）誠に道理を知る者は默して言はず、言ふ者は反りて知らずと識者の云へるも理りなれども、愚迷の世俗は豈に其の意を識らんや、請ふ更に昔し輪扁が齊桓に說ける所を擧げて、吾が說を證し以て本篇の終を告げん、

【解義】（意有所隨）隨は「成疏」には從也、意之所

と同じ、凡そ器物其の柄を執れば用ふべし、故に以て權要にたとふ、權要を得れば、天下は制すべきなり、「辯正」に曰く、四字倒裝、猶云奮起而操柄於天下と、「而不與之偕」「副墨」に曰く操威福之柄而心不與之偕と、「辯正」に曰く有爲之迹、無爲之心、是心不與迹偕動也と、「林注」も亦同じ、案ずるに此の句上句を連ねて、其の言ふ所は論語の謂はゆる巍々乎、舜禹之有天下也、而不與焉の意に過ぎず、而して下の兩句は其の然る所以を解するなり、「神未嘗有所困也」此の神は神之末也の神と同じからず、精神の神なり、「副墨」に云ふ困即所謂累、所謂遷、所謂與之偕者と、上文に照らすときは詢に然り、善解と謂ふべし、「賓禮樂」「郭注」に曰く以情性爲主也と、即ち賓は賓主の賓なり、疏は乃ち擯斥の擯とす、亦通ず、兪樾は上句の退字に照して、擯を取り、郭注を迂とせるも、必ずしも然らず、陸樹芝曰く通於道之先、合於德之和、知仁義已爲後起、故退之、知禮樂無非外鑠、故賓之と、

世之所貴道者書也、書不過語、語有貴也、語之所貴者意也、意有所隨、意之所隨者、不可以言傳也、而世因貴言傳書、世雖貴之哉、猶不足貴也、爲其貴非其貴也、故視而可見者、形與色也、聽而可聞者、名與聲也、悲夫世人以形色名聲爲足以得彼之情、夫形色名聲果不足以得彼之情、則知者不言、言者不知、而世豈識之哉、

【大意】前段數節連りに堯舜の問答孔老の問答等を引いて、證明已に足れり、尚ほ老子の言を擧げて、通乎道合乎德退仁義賓禮樂至人心有所定矣に終る、全く是れ一篇の大段落、大結末何人か復た言ふべきものあらんや、詎ぞ料らん莊叟の奇胸、蘊蓄測られず、

して其の博大は包容せずといふことなく、淵乎として其の深遠は測度すべからず、是れ道の本體なり、而して其の德の一端形迹上に發現して弊を救ふの用を爲すものを仁義と稱す、されども是れ固より道體神妙の末節なり、世之れを悟らず、仁義を以て大本とし、至極とし、偈偈乎として之れを揭げて、人の性を亂し亂されたる者は、機發し審察して、ひたすら智巧を是れ事とし、遂に以て不信を致すに至る、然らば天下至聖の神人にあらざる以上は、孰れか能く本末を辨別して之を審定するを得ん、夫れ至人とは謂はゆる內聖外王の人にして、世界を支配する者なれば、其の事業たるも亦大ならずや、大なれば物の繁く事の煩はしきは言を俟たざれども、而も其の事物は毫も其の人の累を爲すに足らざるなり、累を爲すに足らざるは何の爲めぞ、蓋し其の人や勿論權柄(棅)を握つて、之れを天下に奮へども、其の心は元來虛靜にして、其の行爲の迹如何に移り易はるも、其の心之と偕に動き、偕に往かざればなり(語を換ゆれば無爲の心は有爲の迹を追はざればなり)、偕に動き偕に往かざる所以は何ぞや、蓋し至人は靈智光明透徹して道體の假僞無きを審知すれば、財利名利を追逐して遷移することを爲さざればなり、約言すれば萬物眞實の理を窮極して、能く其の本を守ればなり、本は卽ち自然なり、無爲なり、虛靜なり、故に澹兮颼兮と澹泊高超して獨り天地を脫離し、萬物を遺却し心閑に神旺して、何の困弊する所あらん、物の以て其の累を爲すに足らずとは、卽ち是れなり、此の如く至人の所爲は、至道に通じ、上德に合して一となり、彼の人工的なる仁義を退けて後となし、禮樂を一時的賓客として在來の主人となさず、至人の心は右の如く實に定まる所あり、定まる所あるの心にあらずば、孰れか能く其の本末を定めんや、世の仁義に泥む者請ふ之れを思へ、

【解義】〔夫子曰〕「成疏」に莊周師老君故呼爲夫子也と、〔廣廣乎淵乎〕淵は深なり、郭慶藩曰く廣廣猶言曠曠也、曠曠者虛無人之貌と、「成疏」に曰く、廣廣歎其寬博淵乎美其深遠と、〔形德仁義神之末也〕「辯正」に曰く、顯德之迹卽稱仁義と、宜穎曰く形其德於仁義と二說其の意同じ、神とは卽ち上句の無不容也、不可測也の神妙なる道體をいふ、〔有世〕卽ち天下を有つを言ふ、〔天下奮棅〕棅は柄

名爲竊」藤澤東畡曰く此の下、恐らくは缺文あらんと、今姑く「郭注」に依りて解す、

老子曰、夫道於大不終、於小不遺、故萬物備、廣廣乎其無不容也、淵乎其不可測也、形徳仁義、神之末也、非至人孰能定之、夫至人有世、不亦大乎、而不足以爲之累、天下奮棅、而不與之偕、審乎無假、而不與利遷、極物之眞、能守其本、故外天地、遺萬物、而神未嘗有所困也、通乎道、合乎徳、退仁義、賓禮樂、至人之心有所定矣、

【大意】此の一節は前二節を連ねて之れを收結するなり、前二節にあつて孔子の主張を駁せるも、成綺が習氣を挫けるも皆老子なり、故に本節亦老子の言を引きて之れを收む、而して孔子の主張する所は仁義に在り、成綺が習氣も仁義より偏せり、故に本節老子の言ふ所も亦專ら仁義は道の末節にして根本にあらず、而も世人以て第一義と爲し、其の累す所とならざる者は鮮し、至人にあらざるよりは、孰れか能く其の粗妙本末を定んといふに在り、本節中或は神或は無假或は眞或は本の諸の字錯出すれば、讀者或は惑はん、「副墨」に云ふ有物混成、先天地生、聖人不得已而名之曰道(老子に出づ)以其無在而無不在也、名之曰神、以其無假也、名之曰眞、對末而言、名之曰本、其定一而已矣と、

【通釋】老子又言へることあり、曰く、夫れ道は至れる哉、天地の大なるも猶ほ其の中に在るより思へば、如何に廣大なる物なるか、到底其の量を窮むる(終)能はず、微塵の小なるも之れを待ちて體を成すより觀れば、如何に微小なるをも遺す所なきを知るべし、斯くも外には無邊にして、内には無漏なるが故に、有りと有らゆる一切萬物此の間に具足して、曠々乎と

謂也とあり、容行とは性に率ひ眞に任せて、自然に物を容受するの行、卽ち牛と呼ぶも馬と呼ぶも、それなりに受けて逆はぬ流儀なるを言ふなり、蓋し服從の意より來れり、他本は多く行也を以て解す、蓋し服膺の意より轉ぜり、然かし全句の通解に至つては、兩者異同なし造句法は略ぼ篇首の聖人之靜也、非曰靜也善故靜也と相似たり、此の兩句成綺が意氣思想一夕にして轉變したるを冷笑するの意亦言外に在り、翫味すべし、〔雁行避影履行遂進〕雁行は斜めに行くなり、是れ成綺が遽に恭しく弟子の禮を執り、遂に進んで敎を請ふの狀を形容したるなり、蓋し老子言畢つて卽ち成綺を背にして去る、成綺遽に其の行迹を追ひ履んで進む、(後より從ふ)、而も師の影を蹈めば無禮なるが故に、之れを避け身を側め、斜歩して以て老子に鴈行の如くに從ひたるなり、案ずるに「家語」に高柴自見孔子、足不履影の注に、謂不從履孔子之影、敬之至也と見えたり、〔而容崖然〕而は汝なり「オマヘ」と云ふが如き、口氣、崖然は崖異之狀と注す、凡そ水邊の平にして、寄付き易き地を汀といひ、高く切り立ちて近寄り難きを崖といふ、故に崖異とは獨り氣高く構へて他と和合せぬ容貌を形容したるなり、〔目衝然〕衝出の貌又突視の狀なり、〔顙頯然〕顙は額なり、頯然は高露發美の貌、或は高聳自雄の狀、或は直聳或は中廣角銳等の解あり、〔口闞然〕「郭注」に虓豁之貌とあり、蓋し「詩」の大雅に進厥虎臣、闞如虓虎とあるより、闞字を解するに虓字を用ひたり、虓は虎の怒り吼ゆるなり、故に疏に言語雄猛など言へども、本文及び注の意は其の口相の畏るべきを言ひたるまでにて、言語聲音に及ばず、豁の字を添へたるにても知るべし、故に他本も多く口呿也と注す、〔狀義然〕「郭注」に踶跂自持之貌とあり、蓋し馬蹄篇の踶跂爲義に取りて解せり、固まりきつて萬事に角を立て、やかましき持前の意なり、故に他本にも嚴毅自矜或は堅固之狀など〻注せり、〔動而持發也機〕持は執持なり、「宣注」に欲動而强持、發則如機迅と、按ずるに庚桑篇に靈臺(心)者有持、而不知其所持而不可持者也、其誠已而發每發而不當とあり亦以て參觀して其の義を悟るべし、〔知巧而覩於泰〕宣穎曰く恃智巧而見於外者、有驕泰之色と、〔邊竟〕竟は境なり、邊蕃の境域なり、〔其

里と注せるは一舍は三十里なればなり、「左傳」僖二十三年の條晉楚治兵、遇於中原、其辟君三舍の如き即ち是れ也、趼の音は「繭」なり故に賈子の勸學篇竝に宋策には百舍重繭に作る、卽ち足跟の皮厚きにて、胝なり、ひどく胝をいらせたる故、重趼といふ、〔鼠壤有餘蔬而棄妹之者不仁也〕「成疏本」には棄妹の下に之者の二字あり、疏に曰く見其鼠穴土中有餘殘蔬菜、嫌其穢惡、故發此譏也と、上句を解し、次に妹猶昧也、闇昧之徒（妹之者）、應須誘進、棄而不敎、豈曰仁慈也と下句を解せり、是れ老子が物を愛惜せず、又怠りて昧者を敎導せざるを譏りたる者と說けるなり、「副墨」には曰く慮齋（林氏）以妹作昧、謂棄蔬於暗昧之地、似覺未妥、不若直以妹解、蓋意妹氏棄蔬於鼠壤、老聖之德主於儉嗇、故責其暴殄（勿體ない事をする）、而疎棄之、成綺因譏其寡恩而不仁と、是れ妹の物を愛重せざるを以て、老子其の骨肉の親愛を棄てゝ遠けしを譏れりと解せり、今按ずるに鼠壤有餘蔬と鼠穴中に殘餘の蔬菜ありとて鼠の偸食に任かすを謂ふ、乃ち且つ鼠の如きすら其の餘惠を蒙りながら、反りて同胞の妹を棄てゝ顧みざるは、眞の仁愛に叶はずと譏れるなり、故に「郭注」は上句を注して曰く、言其不惜物也と、又下句を注して曰く無近恩、故曰棄と、成疏瞶々從ふ可からず、〔生熟—無崖〕崖は猶ほ涯のごとし、宣穎は皆責其不仁、却將不仁夾在中間と言つて、此句も不仁を刺れるものと爲したれども、「辯正」の富而貪得、無厭、言不義と解せるには若かず、蓋し不義と云ふ方は本文の句意に切なるのみならず、前段孔老の仁義問答に照して、更に切なればなり、〔老子漠然不應〕明日成綺をして今吾心正郤矣何故也の問を發せしむるに至れる、玄玄の妙機は、實に此の漠然の兩字中にあり、徒に老子が懷に介せざる形容語のみとして看過すること勿れ、〔巧知神聖之人〕汲汲として巧智を事とし、神聖を以て自ら居る人、卽ち詩の所謂具曰予聖、誰知烏之雌雄の輩なり、老聃初めには神聖之人と揚げ、終りには其名曰竊と抑へ、以て眞面目に濟し切つたる成綺を掌上に翻弄するなり、詼謔の口氣自ら文字上に發露す、〔吾服—有服〕是れ乃ち上句の知巧聖人の如き徒に、區々の人智を以て不自然の行迹を爲すに非ることを云へるなり、服は「郭注」に容行之

牛とか馬とかと爲るがごときものならんが、牛ならば牛にて可なり、拙者は牛を以て居らん、馬ならば馬にて可なり、拙者は馬を以て居らん、君より視て苟も馬たり牛たりの實あらば、是れ已に吾が殃なり、君從つて其の名を與へて牛と爲し、馬と爲すに我れ其の然り然らざるを強辨して受けざらば、更に其の殃を重ねん、是れ昨日君の呼ぶに任せて應答せざる所以なりき、斯かる吾が行は（服）初より昔より一貫して我が身と形影同體、未だ嘗て離れざる行（恒服）にて、今更ら特に行ひて始めて行ひとするにはあらず、事に應じ物に因り性に率ひ、眞に任せて行ふとはなしに、行ひつゝある行なり、と成綺聞き來て慙悔兼ね至りけん、乍ち雁行斜歩其の身を側めて立ち去り、老子が影を避けつゝ追隨し進みて、然らば身を修めんには若何すべきやと、敎を請へば、老子顧みほゝ笑みながら、曰く吾れ汝を觀るに汝が容貌はいやに氣高く、汝が目つきはいやに突き出で、汝が額はいやに突つ立ち、汝が口はいやに突つ張り、汝が素振はいやに角張り、いやに濟ましぬ、是れ猶ほ馬を繋ぎ止めたるがごときものにて、胸には奔騰馳騁の野心欝勃たれども、一時自ら抑制し居るまでなり（動而持）、若し其の心の境に遇ひて發したらんときは敏捷に巧中して、機括の如く、其の目の付け方は是とか非とか、どこまでも立ち入り行き屆きて（察）、微に入り、細に入り（審）、飽くまで智を弄し、巧を競ひて自ら得々たるは、驕慢（泰）の氣色に發現して、之れを證するに餘あり、是れ等は凡て虛妄の行にて、眞實の德にあらず、危險なる哉此の種の人、若しも之れを物騷なる邊境に徘徊せしめなば、人之れを指目して何んと呼ばん、呼んで盜竊と爲さんと疑ひなしといひたりとなり、成綺が狀貌志氣の斯くまで陋劣に歪みて與に道に入るべからざるものは何ぞ、他なし彼の孔子一流の仁義に其の性を亂されたるのみ、

【解義】〔吾聞夫子聖人也〕此の聖人は成綺の胸中にては早くも仁義の二字を以て、其の本體を構成せるものと知るべし、乃ち成綺は唯々聖人のあるのみを知りて、更に聖人を超越したる偉き者を知らざるなり、〔百舍重趼〕「趼正」に百舍を三千里と注し、成疏には舍を逆旅（ハタゴヤ）と解し、司馬彪は百日止宿とせり、何づれにしても遠路の旅行なり、但し三千

其の性を亂すの實蹟を示すなり、蓋し成綺は本と仁義の說を尊奉固守するの人、莊子其の老子を刺る語中に於て隱々に彼が眼孔の小にして、識量の局促なるを敍し、更に老子の語中に在つて彼が狀貌動作の陋劣を寫し、以て其の性情の已に正を失ひたるを推知するに足らしむ、其名爲竊に至つては、罵り得て面白し、而して老子の言貌を敍すること、沖淡洒落にして彼此照映の間、自ら道の高下本末を說き盡し、仍ほ例に依つて無爲自然に歸着す、

【通釋】　性は士字は成綺といふ者あり、何許の人なるかを知らず、老子を訪ね來つて問へらく、吾れ夙に、世評に先生は當代の聖人なる由承り、景慕の念抑へ難きより、遠路をも、いとはずして、拜顏の榮を得んと、三千里程の旅、跟に跡を重ねて、敢て息むともなく、一日も早くと、急ぎに急ぎて參上したる次第なるに、是は抑も如何に親しく觀る所にては、先生は決して聖人とは申し難し、何んとなれば鼠穴（鼠壤）の中に殘餘の蔬菜がありて、卽ち鼠の偸み食ふに任かしながら、骨肉たる令妹を棄てゝ遠ざけられしは、塞に恩愛の顚倒したるものにて、さても不仁の至りなり、又先生の生活を視るに、粟帛（生）、飲食（熟）、何に一つ不自由なく、目前の物すら用ひ盡さざるに、尙ほ足ることを知らず、常に畜積收斂して已むことなきは、是れ不義なり、不義不仁の人いかで聖人と曰ひ得べきや、先生若し異說あらば承らんと、氣焔頗る熾に、論鋒甚だ銳く突き込みたるが（老氏は節儉主義を執りたれば、成綺が目には斯く見えたるならん）案外にも老子は可もなく不可もなき體にて漠然として一言の應答もなし、成綺も呆氣にとられけん、其の儘にして歸りたるが、明日再び老子の許を訪問せり、然るに彼れは全く昨日の意氣を喪ひ、其の述ぶる所を聞くに、曰く昔者は某粗忽にも先生に對し惡言申したるが、今日となりて不思議なる哉、心機一轉、煩惱滅卻せり、此れは是れ何の故ぞ、自身すら解し難し、敢て敎を乞ふと、是に於て老子冷然として始めて之れに答へて曰く、夫れ巧智神聖の人は是れ有爲の人なり、拙者の如きは已に自ら超然として斯かる仲間より脫離したる積りなり、君が拙者を聖人となすも、聖人ならずとするも、拙者に於ては何ぞ與り知らん、君又昨日拙者を不仁とか不義とかと爲したるは、猶ほ

乃本不消我爲也、夫子所云義之與比、孟子所云由仁義行、倶是此意と、〔放德而行〕放は「辨正」、「林注」竝に依と解し、眞經解は倣と訓じ、「成疏」は放任とせり、竝に通ず、但だ疏は放任己德と爲すなり、尙ほ考ふべし、〔偈偈乎〕「集釋」の疏に勵力貌とあり、又用力貌、

士成綺見老子問曰、吾聞夫子聖人也、吾固不辭遠道而來願見、百舍重趼而不敢息、今吾觀子非聖人也、鼠壤有餘蔬而棄妹、不仁也、生熟不盡於前、而積斂無崖、老子漠然不應、士成綺明日復見曰、昔者吾有刺於子、今吾心正卻矣、何故也、老子曰、夫巧知神聖之人、吾自以爲脫焉、昔者子呼我牛也、而謂之牛、呼我馬也、而謂之馬、苟有其實、人與之名、而弗受、再受其殃、吾服也恒服、吾非以服有服、士成綺雁行避影、履行遂進而問、修身若何、老子曰、而容崖然、而目衝然、而顙頯然、而口闞然、而狀義然、似繫馬而止也、動而持、發也機、察而審、知巧而覩於泰、凡以爲不信、邊竟有人焉、其名爲竊、

【大意】前節偈偈乎として仁義を揭ぐるは、却て是れ人の性を亂すものなるを言つて、結收したれば、本節は乃ち士成綺の老子を見たる一條を擧げて、專ら

なり、さても〱君は仁義眞人之性也と曰ふも、君の仁義は人の眞性を亂すものなりと云へりとなり、此の如く孔聖の仁義すら之れを大本至極と心得て、驟に說けば是の如し、况んや形名賞罰の如き末の末なるものに於てをや、

【解義】〔孔子西藏書於周室〕孔子は魯人、魯は東國なり、將に書を周に藏せんとす故に西と言ふ、〔徵藏史〕宣穎曰く徵藏藏書室名、史官名なりと、「成疏」に曰く猶今之祕書官職典墳籍と、〔試往因焉〕「成疏」に曰く何不暫試過往因而問焉と「發覆」に曰く依託也と、〔繙十二經〕「成疏」に云ふ繙覆說之と、宣穎曰く繙音翻、反覆說之と、曰く十二經者詩書禮樂易春秋六經、又加六緯、合爲十二也と、一說云、易上下經、竝十翼爲十二と、又一云春秋十二公經也と、岡松甕谷曰く、十二經終不可知、爲何書、蓋莊生亦大槩言之也と、案ずるに六緯の說は漢代に出づ、信據するに足らず、甕谷氏の說之れを得たり、〔中其說〕「辨正」に曰く於其說之方半也と、宣穎曰く語未盡也と、〔大謾〕大の音「泰」にて太なり、「アマリ」又「ヒドク」の意、謾は汗謾（みだりがはし）なり、繁謾（くだくだし）なり、〔君子不仁則不生〕「成疏」に云ふ、賢人君子若不仁、則名行不成、不義則生道不立と、名行不成とは君子の君子たる名と、行を失ふを言ふ、「論語」の謂はゆる君子去仁惡乎成名とは是れなり、生道不立とは生存の理なきを言ふ、「左傳」の謂はゆる多行不義、將自斃とは是れなり、〔中心物愷〕「成疏」に云ふ愷樂也、忠誠之心、〔眞實心〕願物安樂と、則ち詩の謂はゆる愷悌君子民之父母の意なり、〔兼愛無私此仁義之情也〕「副墨」に曰く兼愛厲仁、無私厲義と、「辨正」に曰く情、實也と、「郭注」に曰く、此常人之所謂仁義者也、故寄孔老以正之と、〔意幾乎後言〕意は於其の反にて、噫と同じ、嘆辭にして、不平の聲なり下の意も亦同じ、幾は近なり、殆なり、後言は盧文弨曰く、舊本後作復、未詳と、而して「副墨」、「辨正」、「發覆」等は皆失言と解せり、宣穎も亦曰く失言幾落人後と蓋し先を占むるを得と爲し、後に落つるを失となすなり、〔天地固有常矣云云〕宣穎曰く數固有字妙、可見無爲不是不爲、

ずと爲し、十二經中の文義を反覆（繙）して、縷々喋々之れを說きたるに、老聃聽きて其の說の半途に至り、俄に之れを制止して曰く、太だ繁謾なり、願はくは其の要點を聞かんと、孔子曰く其の要を申さば仁義の二字に在りと、老聃は其仁義なる者は果して人の本性なりや否やと問へば、孔子曰く然り、人の性なり、賢人君子若し不仁ならば、名行成就せず、不義ならば、生道立たず、故に仁義は是れ眞に人の性なることを知るべし、君子仁義を去りて又將た何をか爲さんと、老聃重ねて其の仁義とは何如なる意味合なるやと、問ひ返せば、孔子辨じて曰く忠誠の心、物の安樂ならんことを願ひ、平等兼愛して一毫の私なきは、卽ち仁義の實情なりと、老聃聽いて嘆じて曰く、噫君が言は殆んど失せり、夫れ齊しからざるは物の情なり、兼ねて之れを愛せんと欲せば、唯だに力の及ぶ能はざるのみならず、旣に之れを愛するに心あれば、是れ自然にあらずして作意なり、道と相ひ去ること遠し、故に兼愛は實際行はるべからざる者なり、而して君必ず之れを行はんと欲す、其れ亦迂ならずや、又其の私無しとは自己を釋てゝ人を愛するの謂なり、夫れ人を愛するは人の己れを愛せんことを期するのみならず、自ら私無からんことを期せば、胸中已に一箇の意心を構成し了る、然らば其の私無しは却つて是れ私有りにて公に非ざるなり、君若し天下の蒼生をして自ら其の養（牧）を失ふことなからしめんと望まん乎、望まば則ち看一看せよ、彼の天地は固より其の常あつて未だ嘗て顚覆せず、日月は固より其の明あつて未だ嘗て消滅せず、星辰は固より其の列位あつて未だ嘗て濫行せず、禽獸には則ち牛は牛伴れ、馬は馬伴れにて、固より其の群あり、樹木には則ち花は紅、柳は綠にて固より其の生立あることを誰れか故意に作爲し强制して然らしめん、天地萬物固より各々自然の理に因りて然るのみ、君も亦此に自得して其の德のまゝ（放）、其の道のまゝ（循）に人間界に行趨せば、其れにて最早至れり、盡せり、又何ぞ無駄骨折りて（偈偈乎）、仁義の看板を擔ぎ出し、强ひて之れを世に行ふに及ぶべき、此の如きは畢竟太鼓を擊ち鳴らして、逃亡せる息子を求むるに異らんや、求むる意の急にして太鼓の聲の大なれば大なる程、其の子は愈々離れ仁義の說の彰なれば彰なる程、道は愈々遠ざかる

問、何謂仁義、孔子曰、中心物愷、兼愛無私、此仁義之情也、老聃曰、意幾乎後言、夫兼愛不亦迂乎、無私焉乃私也、夫子若欲使天下無失其牧乎、則天地固有常矣、日月固有明矣、星辰固有列矣、禽獸固有羣矣、樹木固有立矣、夫子亦放德而行、循道而趨已至矣、又何偈偈乎揭仁義、若擊鼓而求亡子焉、意夫子亂人之性也、

【大意】前文に大道、本末先後の序あることを論ぜり、故に其の引證するに及んで、先づ堯舜の問答を擧げて、以て先明天而道德次之の義に照し、本節は乃ち孔老の問答を引きて、以て道德已明而仁義次之の意を明にするなり、蓋し道德を談ずる者は老子を祖とし仁義を言ふ者は、孔子を宗とするが故に、假りて以て一件の引證文を構成せるのみ、宣穎曰く仁義且亂人性、則自分守形名以下、不言可知、故莫若無爲也と、

【通釋】孔子周德の最早衰微して到底之れを今日に匡輔し難きを覺り、せめては已れが從來修めたる書籍を周室の府藏中に納め置かば、將來或は明主の出でゝ世を匡濟するに際し、其の治化の一助ともならんかと思ひたれば、先づ其の可否を門弟子に咨問せるに、仲由字は子路、孔子の爲めに謀つて云ふ、由承はれば周室の徵藏の史たりし老聃なる者、近頃辭職して靜處に歸養し居るとのことなり、彼れは幸にも記錄を司どる職に居たる者なれば、其の邊の案内は能く知らん、先生書を納め給はんとならば、試に往いて彼れに依託(因焉)せられよ、必ず便宜を得んと、孔子至極尤ものことゝ頷かれ、乃ち老聃を訪問して其の旨を述べたるに、老聃は案外にも許諾せず、是に於て孔子は先づ其學說を以て彼れを心服せしむるに若か

「成疏」に曰く、民有死者、輒悲苦而慰之と、蓋し苦は他の悲哀を體して自心に痛苦するなり、故に轉じて他を哀むの意となる、〔嘉孺子而哀婦人〕嘉は猶ほ愛のごとし、故に轉じて亦哀憐の意となす、孺子は猶ほ稚子のごとし、「成疏」に小兒婦人孤寡、並皆矜愍、善嘉養恤也と、〔發覆〕にも嘉孺子を恤孤、哀婦人を念寡と解せり、莊子固より孤寡を言はずと雖も、文意より推して、其孤兒寡婦なること知らるべければなり、〔天德而出寧〕或は曰く出は地の字の誤なりと、下句の日月照而四時行、雲行而雨施に照らすときは是なるが如し、〔日月照—雲行而雨施矣〕帝王は天德と合す、故に、其の爲す所此の若しと言ふなり、然らば若字は日字の上に冠すべき筈なれども、莊子故らに書字上に挿めるものは、文句の姿態を取らんが爲めなり、宣穎曰く若字安在中間句便錯落と、〔膠膠擾擾乎〕「成疏」に曰く皆擾亂之貌也と、〔子天之合也我人之合也〕合は和合するなり、同一となるなり、上文の謂はゆる與天和者謂之天樂、與人和者謂之人樂とは是れなり、〔古之所大也〕〔所共美也〕「辨正」に曰く大美皆宗之之意と、上文の謂はゆる帝王之德以天地爲宗とは是れなり、〔故古之王天下者奚爲哉天地而已矣〕前四句堯舜に因て古帝王の天地を宗とせるを證明し、かさねて此の兩句を以て、必ず其の然ることを斷定す、故に奚爲哉の三字にて一段文勢を激揚し、而已矣の三字にて肅然として收了す、

孔子西藏書於周室、子路謀曰、由聞周之徵藏史有老聃者、免而歸居、夫子欲藏書、則試往因焉、孔子曰、善、往見老聃、而老聃不許、於是繙十二經以說、老聃中其說曰、大謾、願聞其要、孔子曰、要在仁義、老聃曰、請問仁義、人之性邪、孔子曰、然、君子不仁則不成、不義則不生、仁義眞人之性也、又將奚爲矣、老聃曰、請

面舜之爲レ臣也と相照して、遠くは六二通四一辟於二帝王一之德一者其自爲也、昧然無レ不レ靜者矣の義を證し、中ごろは與レ天和者也、與レ人和者也、及び帝王之德以二天地一爲レ宗を證し、近くは古之明二大道一者先明レ天を證す、關係最も廣くして、而も上節の非二所一以先一也の意を承接するに最も緊なり、是れ證件の首に置く所以なり、

【通釋】　往昔虞舜が帝堯の政を攝する時、嘗て堯に問ひて曰く、陛下が此の天下を治め給ふに、如何に心を用ひらるゝかと、堯答へて曰く頑愚にして告示し難き民に對しても、吾れは決して之れを見捨てゝ、敢て侮慢(敖)することなく、殷勤に敎誨して倦まず、貧乏困窮の民をば尙更ら棄置かずして、常に救恤を加ふるなり、民に死者あれば悲んで(苦)之れを弔慰し、小兒の親を喪ひ、婦人の夫を亡へる者の如きも、亦皆憐愍を加ふ、吾が心の用ひ方は此の如きのみと、舜曰く斯くも民の爲めに恆に聖慮を勞し給ふことなれば其美なるは勿論美なれども、畏れながら其の道狹隘にして未だ以て大とは申し難しと、流石(サスガ)は帝堯のことなれば己れを虛うして問ひて曰く、然らば如何にして可なるやと、舜曰く帝王は彼の天と其の德を合して無爲自然を以て之れを出さば自ら安寧なり、日月高く懸つて倶に六合を熱し、寒來暑往、四時は運行し晝明夜闇常あつて(有經)、錯(アヤマ)らず、雲油然として空を行けば、雨沛然として地に施す、此れ皆自然にして無爲、豈に愛に心あり、養に情ありて然るならんや、而も洋洋乎として化育自ら行はる、帝王の道も亦此の如きのみと(若)、是に於て帝堯幡然として悟り、感嘆して曰く、吾が從來の所爲たる何ぞ膠膠擾擾乎として、自ら煩雜擾亂を事とせしぞ、卿が盛德は實に遠く上天と合し、吾が用心は僅に近く人事に符せるのみなりしと、深く舜の言を嘉納したりとなり、夫れ天地は古の至大なりとせし所にて、千古の聖人名王と仰がるゝ黃帝堯舜もいづれも此の如く極美なりとして宗とせし所なり、されば古の天下に王たりし者は何ん爲る者ぞや、蓋し無爲自然にして唯だ兩儀の德に合せるのみ、

【解義】　〔天王〕舜、堯を呼んで敬稱す、後世の陛下(トヘ)といふがごとし、〔吾不敖無告〕「郭注」に曰く無告者所レ謂頑民也、疏に曰く敖侮慢也、無告謂二頑愚之甚(シクシテ)無一レ堪二告示一也と、〔不廢窮民〕廢は棄也、〔苦死者〕

執の人なるのみ、要するに禮法度數形名比詳の末節は古人にも之れ有れども、臣下たる者の分擔して上に奉事する術にして、君上の億兆を畜養する道にはあらず、而も季世の人は天下の大本治國の要務と爲す、謬れりと謂ふべし、

【解義】〔故書曰〕「成疏」に曰く書者道家之書、既遭秦世焚燒、今檢亦無的據と、但だ少しく鑿せり、〔有形有名〕「發覆」には讀んで以て但有形就有名と爲せり、蓋し大雅烝民の有物有則の字法に倣つて解せり、〔驟而語賞罰〕驟は「説文」に馬疾歩也とあり、故に凡そ迅速なるを驟といふ、此に驟而と云ふは、其の意猶ほ突如といふがごとし、先後の順序を考へずしてそれのみを擧ぐればなり、〔迕道―所治也〕迕は逆なり、違なり、人之所治也は爲人之所治也、〔一曲人也〕曲は「中庸」の謂はゆる其次致曲の曲なり、「中庸」の注に曰く曲猶小小之事と、「朱注」には一偏也とせり兩注合看すべし、〔禮法數度〕上文には度數に作る、此れ偶然に顛倒せるのみ、

昔者舜問於堯曰、天王之用心、何如、堯曰、吾不敖無告、不廢窮民、苦死者、嘉孺子、而哀婦人、此吾所以用心已、舜曰、美則美矣、而未大也、堯曰、然則何如、舜曰、天德而出寧、日月照而四時行、若晝夜之有經、雲行而雨施矣、堯曰、膠膠擾擾乎、子天之合也、我人之合也、夫天地者、古之所大也、而黃帝堯舜之所共美也、故古之王天下者、奚爲哉、天地而已矣、

【大意】上節にて一篇の論說正に完了せり、本項以下は乃ち古來の事實を引きて點證するのみ、本節堯舜問答は前文の明此以南鄕堯之爲君也、明此以北

【大意】此節は形名賞罰の決して先とするに足らざることを極言して、緊しく上節の意に反應しつゝ、遙に前文各節を結束せるなり、一篇の意此に至りて完し、蓋し當時は戰國の世にして、治術を講ずる者形名賞罰より他に、復た良法善策なしと爲るより、其の說漸く盛に、遂に形名賞罰を以て、天下の大本と心得居る者あるに至りたれば、莊子は上節に仁義、分守、形名、因任、原省、是非、賞罰と遞説（テイセツ）したるに拘はらず、特に此の四字のみを本節に反覆して、其の大誤謬たるを辨じたるなり、然れども仁義以下の七事は固より莊子にありては、均しく末節とする所なれば、本節の結尾に臨んで、前文の禮法度數形名比詳を再出して、之を總括し、以て非上之所以畜下也と斷じ、本節を結びつゝ、自（オ）ら無爲自然の大本たるに歸して、全篇こゝに完了す、

【通釋】故に古書にも形あれば名ありなどの語見ゆれば、形名と云ふ事は古人にも之れ無きには非ざれども、而も決して之れを本と心得て、先にしたる所にあらず、古の大道に關して、其の序を語る者は吾が前述したりしが如く、第一着に明天、明天より以下轉變すること五回目にて、形名の事始めて擧ぐるを得、九回目にて賞罰の事纔に言ひ得べきにあらずや、是れ其の末の末にして後にすべきや明白なり、然るに悲い哉季世の人、是れ等には頓着なく、卒然に突如に形名賞罰を治術の金科玉條として、此の上最早加ふべきもの無きが如く、得意氣に說き出づるは、抑も其の本を知らざる者なり、其の始を知らざる者なり、始を知らず本を知らずして、末を本とし、後を先にし、大道の次序を顚倒し、次序に逆ひて之れを說く者は、畢竟人の治むる所、語を換へて言へば、人に治めらるゝ人格にして、安ぞ能く人を治めん、且つ大道の次序に由らず、突如として形名賞罰を主張するは、自身は治の道を充分承知せる積りならんも、實は治の具を知れるまでにて、治の道を知れるにはあらず、眞に能く之れを知るならば、先づ天を明にして其の次序に順ひて此に至らざるべからざればなり、今や然らずして此の如くなる以上は、卽ち天下に使用せられて、天下を使用するに足らず、此れ之れを辯士と謂ふ、何んとなれば未だ大道の實を覺悟せず、徒に辯舌上にて其の說を支持するに止まればなり、是れ固より一偏

爲す所、思ふ所唯だ一に其の天に歸するのみ、天に歸するは自然なり、知謀用ひざるは無爲なり、無爲自然の治を致すべきこと此の如し、謂はゆる太平とは是れなり、天下の事復た以て此に加ふること無し、

【解義】〔因任〕胡方曰く因材任使と、宣穎曰く因人任職と、意竝に同じ、今之れに從ふ、〔原省〕此の語諸家の解尤も異同あり、原宥省試とするものあり、卽ち其罪あるとも暫く之れを宥し、其職に留め置きて試すの意なり、或は能者原之、不能者省減之とするものあり、卽ち微罪ありとも材能あれば大目に見て、之れを宥し、然らざる者なれば之れを免職するの意なり、恕免除廢とする者あり、罪過ありとも恩澤を施して之れを恕免し、其の任を除廢するまでにて嚴罰せざるの意なり、唯だ宣穎は原行省心とせり、其人の性行心術に注意するの意なり、今略々其の義を取りて推尋省察を解することゝ爲せり、〔襲情〕「郭注」に各自行其所能之情とし、「成疏」には咸用本情とせり、蓋し襲は衣を服する義あれば、轉じて「行ふ」或は「用ふ」と解せるなり、

故書曰、有形有名、形名者、古人有之、而非所以先也、古之語大道者、五變而形名可擧、九變而賞罰可言也、驟而語形名、不知其本也、驟而語賞罰、不知其始也、倒道而言、迕道而說者、人之所治也、安能治人、驟而語形名賞罰、此有知治之具、非知治之道、可用於天下、不足以用天下、此之謂辯士、一曲之人也、禮法數度形名比詳、古人有之、此下之所以事上、非上之所以畜下也、

にす、宣穎曰く古人一知所先、則下此者槩々然、不勞自治、看他惟一明天、而道德以下、綱擧目張、然則無爲之爲、不既大乎と、

【通釋】斯かる次第にて本末先後の序の決して顚倒し紛淆すべからざるが爲め、古の大道を明にしたる君子は、先づ第一に本源たる天の是れ如何なるかを明にするより着手す、天は自然のみ、明に自然の理に自得する所あれば、道德從つて明なり、蓋し道の大原は天に出で道を行つて得る所は德なればなり、道德己に明なれば仁義之れに次ぐ、蓋し老子の謂はゆる失德而後仁、失仁而後義なればなり、仁義已に明にして分守之れに次ぐ、蓋し仁義の目により各々其分を得て、之れを守つて爭奪することを爲さゞればなり、分守已に明にして形名之れに次ぐ、蓋し分を守る所あれば、其の形卽ち其の行爲、名卽ち名目、從つて辨別を生じて、各々相當相應せざるを得ざればなり、形名已に明にして因任之れに次ぐ、因任とは其材に因りて任使するなり、蓋し形名相當の責を生ずる以上は勢然らざるを得ざればなり、因任已に明にして原省之れに次ぐ、原省とは其能不能を推尋省察して、謂はゆる三載考績が如き是れなり、蓋し已に因任せる以上は又自ら然らざるを得ざるなり、原省已に明にして是非之れに次ぎ、是非已に明にして賞罰之れに次ぐ、蓋し原省の已に明なる以上は、謂はゆる三考黜陟幽明が如く、能者をば是とし、不能者をば非とし、非なる者をば之れを罰し、是なる者をば之れを賞せざるを得ざるは、是れ亦相ひ隨つて生じ來るべき自然の勢なること勿論なり、因任原省是非賞罰の已に明なるからは、材より言へば愚者知者各々それ相當に其宜しき所を得、身分より言へば貴者賤者、それ相當に其の位を履み、德より言へば仁賢者不肖者それ相應に其の實情を用ひて、炫はず飾らずして必ず各々其の能くする所を分守し、必ず各々其の任ずる所の名目に由りて、自ら其の實を責め、以て之れに負かざらんことを欲するに至る、畢竟するに之れを上下に言へば、人臣となりては此れを以て其の上に事つり、人君となりては此れを以て其の下を養ふなり、之れを外內に言へば外は此れを以て世の事物を治め、內は此れを以て我が身を修むるなり、斯くして天下の能事は畢れり、此の間一點の知謀を用ひずして

人也とあり、蓋し太古の人は上下皆無爲にして簡樸なりしが故に、謂はゆる末學の有るべき筈なければなり、「天尊地卑神明之位也」天地の位の定れるは自ら然るべきに然る者にして、誰か其然る所以を知らん、故に神明之位と曰ふなり、神明とは猶ほ今日の謂はゆる神聖のごとし、「萬物化作、萠區有狀」化は化育なり、作は興作なり、萠は萠芽なり、區は區別なり、卽ち萬物の化育興作するや始め萠芽を生し、區區分別して各々形狀を爲すを謂ふ、「盛衰之殺、變化之流也」殺は等殺なり卽ち等差あること、流は流行なり、「呂註」には萬物始化而萠、既作而區、從微至著、莫不有狀、則盛衰之變化皆有成理、而不可易とあり、「宗廟尙親」宗廟の制は天子に八廟、諸侯に五廟あり中央を太祖の廟とし、左を昭と曰ひ右を穆と曰ふ、子孫各々世次によりて祀る故に親を尙ぶと曰ふ、親は親族血統なり、

是故古之明大道者、先明天、而道德次之、道德已明、而仁義次之、仁義已明、而分守次之、分守已明、而形名次之、形名已明、而因任次之、因任已明、而原省次之、原省已明、而是非次之、是非已明、而賞罰次之、賞罰已明、而愚知處宜、貴賤履位、仁賢不肖襲情、必分其能、必由其名、以此事上、以此畜下、以此治物、以此修身、知謀不用、必歸其天、此之謂大平、治之至也、

【大意】上節に先づ近く人倫より溯つて天地萬物の道一貫して本末に由りて尊卑先後の序あることを泛說し、既に讀者をして其次第の決して紊すべからざるを知了せしめたれば、本節は乃ち專ら人の治を爲す上につきて、先後の序を說き、太平を致す所以を明

重、他處猶激昂言之、惟此處最和平也と、

【通釋】 軍旅刑法治術禮樂等に就いて其一句を專修する末學も、勿論人世に之れ無かるべからざる者なれば、中古以來の古人にも之れに從事せる者無きにあらざれども、さりとて決して本末の尊卑を顚倒して、之れを先にすべきものにあらず、蓋し本なる者は尊し、尊き者は宜しく先んずべく、末なる者は卑し、卑しき者は宜しく後るべく、從ふべきことは自然の道理なり、順序なり、先づ試に之れを人倫上に看よ、君は先んじて臣は從ひ、父は先んじて、子は從ひ、兄は先んじて弟は從ひ、年長者は先んじて年少者は從ひ、男子は先んじて女子は從ひ、夫は先んじて婦は從ふにあらずや、人倫なればとて人爲なるにはあらず、元來尊卑先後あるは天地自然の運行に存する故に、彼の聖人なるもの之れを觀て、法象を取り、人に指示して倣はしめたるまでにて、決して私に工夫し、作爲して人に强ひたるにはあらざるなり、見ずや天は上に覆ひ、地は下に載せて、尊卑を形ちづくる、是れは天地の本然自然の形態にて、最早、思議すべからざるに定れる位置なりとす、而して此の間に行はるゝ春夏は先んじ、秋冬は後れて順環するは、卽ち四時の定れる順序なりとす、又有ると有ゆる萬物の死(化)生(作)も少より壯、壯より老と萠兆區分あるは、卽ち其物に於ける盛衰の等殺、變化の流行にして、亦自ら一定せる先後の順序なりとす、夫れ天地の功化は至神にして測られざるが如きも、而も猶ほ一定せる尊卑先後の序あること此の如し、而るを況んや其一小部分なる人倫の道に於てをや、されば宗廟に於ては親を尙んで、左昭右穆と世次を以て先後あり、朝廷に於ては尊を尙んで官爵の高下によりて先後あり、鄕黨に於ては年齒を尙んで少長にありて先後あり、世間の行事上に於ては賢を尙んで材德の優劣によりて先後あり、是れ等は實に人類內にて强ひて作爲したる規則にあらずして、天地自然の大道より出でゝ聖人の法象を取れる順序次第なり、故に既に道と曰へば必ず順序次第あるべき筈にて、順序次第あるこそ眞實の道なれ、今道を論ずるに其序を失ふ以上は、決して其道にあらず、其道にあざる以上は、安にか道を取らん用ふる所無ければなり、

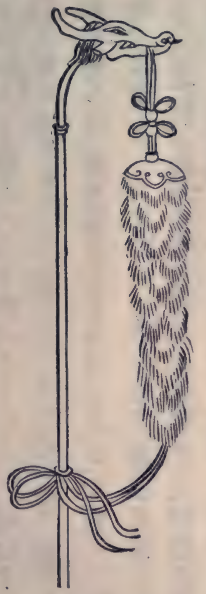
【解義】〔末學者古人有之〕「成疏」の古之人謂中古

三月とす、是れを五服と曰ふ、故に此の條の意は哭泣の仕方にも喪服の著方にも、隆殺を分つといふなり、隆は長ずるなり、豐大なり、殺の音鎩にて、降すなり、削減なり、此の條も林氏は孔子の謂はゆる喪與其易也寧戚の意と同じと云へり、

末學者、古人有之、而非所以先也、君先而臣從、父先而子從、兄先而弟從、長先而少從、男先而女從、夫先而婦從、夫尊卑先後、天地之行也、故聖人取象焉、天尊地卑、神明之位也、春夏先、秋冬後、四時之序也、萬物化作、萠區有狀、盛衰之殺、變化之流也、夫天地至神、而有尊卑先後之序、而況人道乎、宗廟尚親、朝廷尚尊、鄉黨尚齒、行事尚賢、大道之序也、語道而非其序者、非其道也、語道而非其道者、安取道、

【大意】 末學者、古人有之、而非所以先也の兩句は上節の五末云云を結收して、更に下の君先而臣從等の數十句を提起し、以て先後の序あるは、天地自然の法則にして、聖人の之が象を取つて、人倫に用ひたるのものなれば、學者須らく辨ぜざるべからず、然らざれば全く道の實を失ふものなりとの意を說きたり、蓋し前文既に本末を述べたれば、本文は一步を進めて本なる者をば之れを先にし、末なる者をば之れを後にすべく、而して先きなる者の尊く、後なる者の卑きも自然の條理なることを言ふなり、尊卑の先後に於けるは猶ほ要詳の本末に於けると一般なりと知るべし、要するに本節は大學の謂はゆる物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣、と全く其意を同じうす、故に宣穎は云へらく、古人有之、但非所先、可見莊子不是把禮制一切屏絕了、止是要人知得緩急輕

天下用に照して、其君臣を謂へること明なり、〔三軍五兵〕「周禮」地官、五師爲軍の註に萬二千五百人周制天子六軍、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍とあり、世本に蚩尤以金作兵（武器）兵有五、一弓、二殳、三矛、四戈、五戟と見ゆ、又「周禮」の夏官、司兵掌五兵の註に、五兵者戈、殳、戟、酋矛、夷矛とあり、殳を除く外は皆我が國の槍の類にて、矛最も長く、兵車上に建つ、其酋矛は長さ二丈、夷矛は二丈四尺と云



羽旄

ふ、雙枝ありて上に向ふ者は戟、單枝横出して鈎をなす者は戈なり、殳は長さ一丈二尺にして刄無く、車戰の折に敵車を撃攆するに用ふ、蓋し皆周代兵器の主要なる者なり、〔賞罰利害五刑之辟〕「成疏」に曰く賞者軒冕（軒は大夫の車、冕も大夫以上の冠）榮華、故

利也、罰者誅殘戮辱故害也、辟法也、五刑者一劓（鼻切の刑）、二墨（イレヅミの刑）、三刖（足切りの刑）、四宮（勢をきる刑）、五大辟（死罪）と、大禹謨に明于五刑以弼五教とあり、〔禮法度數形名比詳〕禮法は禮儀法則なり、度數は制度分數なり、而して形は容儀にて、衣冠の等級、鹵簿の格式の如き類、名は字諱にて、尊卑公私の稱呼名目に次第ある類なり、比詳は彼此甲乙の間に於て異同等差を比較分別して之れを審定するなり、〔羽旄之容〕羽は翳なり、（カザシ）鳥羽にて作り、舞ふ者之を執る、旄は牛尾にて作り、旗竿の首に附く、いづれも舞樂の飾と爲す、故に容といふ、前の禮法云云の條及び此の條は、孔子の謂はゆる禮云禮云玉帛云乎哉、樂云樂云鐘鼓云乎哉と、其意を同じうすと林希逸は云へり、〔哭泣衰絰隆殺之服〕衰音「崔」線と同じ、喪服にて上を衰といひ、下を裳といひ、首と腕にありていづれも絰あり、絰の音「耋」儀禮の喪服、苴絰の注に、麻在首、在要皆曰絰、首絰象緇布冠之缺項、要絰象大帶とありて、衰戚を表する所以なり、元來衰絰即ち喪服の類に五等ありて、斬衰は三年、齊衰は二年、大功は九月、小功は五月、緦麻は

貴く末は下に處る者の道にして賤し、且つ本は簡にして大要を得、末は煩にして細詳に涉る、故に大要は君たる者の執る所にして逸し、細詳は臣たる者の事とする所にして勞す、さて又末とは何ぞや、夫れ兵は凶器にして、戰は危事なれば聖明の世に在ては專ら文德を修め、武威を偃せて用ひず、四民安堵し、國家無事なり、其德衰へ天下服せざるに及び、已むを得ずして始めて武を用ふに至るなり、故に三軍五兵の運動を見るは、畢竟德の末節なりとす、王者敦厚の敎化漸く衰微して、人民淳樸の風を失ひ、虛僞兇暴日に甚しく、之れを如何ともし難きより始めて、勸懲の法を作爲せざるを得ざるに至る、故に賞罰にて利害を示し、五刑の法を設くるが如きは、畢竟敎の末節なりとす、又明王の治は天地の自然に則つて無爲にして敎化す、何ぞ必ずしも繁瑣を事とせん、故に禮法度數形名比詳を設けて、民を導くが如きは畢竟治の末節なりとす、聖王の樂を作る所以は、元來中心の和悅より發溢して、之を用ひて上は陰陽を調ひ、下は時俗を和げんとするなり、故に專ら鐘皷の音を論じ、羽旄の容儀を飾るが如きは畢竟樂の末節なりとす、喪に居るの本意は、人心自然の愁傷より其哀を致すにあり、故に哭泣の禮、衰絰の服にて、其差等を制するが如きは畢竟哀の末節なりとす、以上の五末節の如きは、いづれも政敎の具、政敎の迹にして、政務の由て出づる所の者にあらず、卽ち精神心智の天命自然の性に率(シタガ)つて運動するを須ちて、然る後に始めて其形迹を現はして之れに隨從する者のみ、是れ其事の本にして要たるを得ずして、末にして詳たる所以なり、されば其道は當さに上に在り、君に在るべからずして下に在り、臣に在るべき所以なり、辨別せざるべけんや、

【解義】〔本在於上―詳在於臣〕此の四句を中分して兩事となし、且つ上下を上古下代と解したるものあれど、之れを一事實を互文にしたるものと視る方、穩當ならん、卽ち本末と要詳とは二にあらず、上下と君臣とは一なり、猶ほ根本大要は君上に在り、末節細詳は臣下に在りと言はんがごとし、之れを互文にしたるは本の體たるは要、要なるが故に本なり、末の體たるは詳、詳なるが故に末なることを發明して下文の三軍五兵五刑禮法等を說くの地とせるなり、上下の如きは上文の上必無爲而爲㆑用㆓天下㆒下必有㆑爲而爲

看すべし、不自說の說字は「集釋」に音「悅」とありて「ヨロコブ」としたれども「成疏」には字の如く自ら說かざるの意とせり、蓋し辯字を承け、且つ不自慮、不自爲に對照せば、此の如くならざるべからざればなり、〔天下功〕「郭注」に功自彼成とあるに就いて、王念孫說をなして曰く、案如郭解則功下須加成字而其義始明、不知功卽成也、言無爲而天下成也、中庸曰無爲而成、爾雅曰功成也と、以下大戴禮、周官、管子荀子等を引きて之れを證し、終りに云ふ、萬物化、萬物育、天下功相對爲文、是功爲成也と其說尤も理あり、今之れに從ふ、〔用人羣之道也〕上節の謂はゆる上必無爲而用天下とは是れなり、

本在於上、末在於下、要在於主、詳在於臣、三軍五兵之運、德之末也、賞罰利害五刑之辟、敎之末也、禮法度數形名比詳、治之末也、鐘鼓之音、羽旄之容、樂之末也、哭泣衰經隆殺之服、哀之末也、此五末者、須精神之運、心術之動、然後從之者也、

【大意】上節君主に就いて專ら其無爲の功德を讃述し、乃ち之れを指して本とし、要とし、此に對して有爲を末とし、詳として、本節に入り、專ら其末にして詳なる所以を說く、要するに前文夫帝王之德以下二節及び此節以下四節を連ねて、無爲と有爲とを照映帶說し去るものにして、往くが如く、還るが如く、一離一合して反覆と錯綜を極めたり、然れども、其針線を尋ぬれば、君臣上下より本末要詳、本末要詳より尊卑先後と論說上の必要より、其語を變換して、前後を縫綴りたれば、序次繹如として斷絕せず、條理井然として紛淆せず、治平を致すの因果、明に見るべし、本篇の謂はゆる虛則實、實者倫矣、と靜則動、動得矣との脚注は、實に此の數節中に在りと知るべし、

【通釋】前既に述べたる所より推せば、無爲は本にして、有爲は末なり、本は卽ち上に處る者の德にして

り帝王の天下に御する上に就き、其道の無爲に如くもの無きことを讃述す、

【通釋】 是の故に三皇の如き、五帝の如き、古代天下に君臨したる者は、皆此無爲に如くもの無きを會得したれば、其智明達にして實は天地の大をも籠絡するに足りながら、垂拱端坐するのみにて、悉く之を臣下の智者に委任して謀を爲さしめ、敢て自ら明察を衒ひて彼れ此れと謀慮を運すことをせざるなり、又其の辯舌巧捷にして實は如何樣にも萬事萬物を彫飾するに足りながら、其言ふべき論ずべきことは又其の職責者に言はしめて、己れは深淵玄默を守り、敢て物識顏に唇舌を弄せざるなり、又其才能は固より四海の事務を窮盡して、之れに當るに足りながら、亦各其職責者に任せて、敢て自ら巧者振して之れに干與し、之れを掣肘することを爲さざるなり、看よ天は萬物を生産するに情あるにあらざれども、萬物各々自ら化生して窮らず、地は萬物を長成するに心あるにあらざれども、萬物各々自ら成育して已まざるを、帝王は固より之れを宗として、之れに倣ふ者なれば、亦無爲に居て其智を用ひず、其辯を弄せず、其能を使はずして、天下の事却て之れによりて立派に成就（功）す、蓋し此の如くならば臣下各々悦びて自ら進んで其事に任じ、其責を盡せばなり、予故に曰く天より神變なるは莫く、地より富饒なるは莫く、帝王より廣大なるは莫しと、彼の日月を轉じ、四時を運し雲烟を開闔し、雷霆風雨を鼓舞する等を看よ、何ぞ天の神なるや、山岳を列ね河海を開き、城邑原野を包ね、人獸蟲魚を生じ、草木金石凡百の寶貨を殖し、且つ藏するが如きを看よ、何ぞ地の富めるや、九五の位に居り萬乘の威に跨り、四海の內を有ち、億兆を臣妾として一人之れを總統するを思へ、何ぞ帝王の大なるや、予故に又曰く帝王の德は全く天地に配合して異なることなしと、然れども然る所以は、亦是れ一箇の無爲より流出して、運而無所積の形迹のみ、此の無爲なる者は誠に天地の化に乘駕し、萬物の間に馳騁して、天下億兆の人羣を運用すべき妙機要道なり、帝王の之れを體して常とする所以は此に存す、

【解義】 〔知雖落天地〕知の音智、落は絡と同じ、籠絡なり、包絡なり、〔辯雖彫萬物不自說也〕「成疏」に彫萬物を「彫飾萬物」とし、林氏は「言其巧也」とせり、合

て應接に暇なく、自ら受動者の位に落ちて、天下の用となり、汲々として日も亦足らざるなり、是れ古人の無爲を最上の德として貴びたる所以にして、遂に自ら君臣上下の分を生じたり、然れども分の既に生じたる以上は、各々分に從ふべきことにて其德を貳三にするは不可なり、無爲は卽ち君德、有爲は卽ち臣道なり、若し上は無爲なるに、下も亦無爲ならんか、是れ下の上と其德を同じうする者にして、臣たる持前を失ふなり、下は有爲なるに上も亦有爲ならんか、是れ上の下と其道を同じうしたる者にして、主君たる所爲を失ふなり、決して倶に之を濫るべからず、されば上たる君は飽くまでも無爲にして物に任せて、天下の才能を用ひ、下たる臣は飽までも有爲にして職に稱ひて其用を爲さば、國家は治り天下は化せん、是れ實に百代易ふべからざる要道なりとす、（此等は莊子中にあつて頗る眞面目なる文字にして議論も亦正大明確なり）、

【解義】〔以無爲爲常〕「辯正」に曰く三句歸結在此句と、宣穎曰く天地道德、總是無爲、故法之終身と、〔同德、同道〕宣穎曰く此德字以體統言、此道字以設施言と、卽ち德は持前なり、道は所爲又は仕方なり、普道の道德とは自ら分別あり、〔不臣、不主〕岡松甕谷曰く不臣猶言不得臣道不主倣是と、此解他本に比して最も明白なり。

故古之王天下者、知雖落天地、不自慮也、辯雖彫萬物、不自說也、能雖窮海內、不自爲也、天不產而萬物化、地不長而萬物育、帝王無爲而天下功、故曰莫神於天、莫富於地、莫大於帝王、故曰帝王之德配天地、此乘天地、馳萬物、而用人羣之道也、

【大意】前節は有爲無爲を對して其相待つて不易の道を爲すを言ひたれども、有爲は無爲の用にして迹、卽ち方なり、而して臣道は君德內の一端なれば、此節再び前の古之人貴夫無爲也の句に立戻りて、獨

臣、下有爲也、上亦有爲也、是上與下同道、上與下同道則不主、上必無爲而用天下、下必有爲爲天下用、此不易之道也、

【大意】上文叮嚀に天樂を説きつゝ、聖人之心以畜天下也に歸收し、既に暗暗に治を爲すの種子を蒔き了れり、乃ち靜而聖、動而王の仕組に從つて、聖人之心を一轉して新に夫帝王之德の一句を提起し來り、いよいよ天下を平治する要道に論入せり、斯の篇の主腦は實に此に在り、而して本節は其序幕なり、先づ無爲と有爲を分別對立して、上の宜しく無爲なるべく、下の宜しく有爲なるべきを説けり、然かるに本篇中既に明此以南鄕堯之爲君也、明此以北面舜之爲臣也等を以て君臣上下均しく無爲を本とすることを説きたれば、文字上、言論上に在つては全く撞着衝突を生せり、是れ讀者の惑ふ所、註解者の異論のある所なれども、深く莊子の意中を斟酌するときは、必ずしも撞着せず、次の兩解によりて然る所以を翫味すべし、「副墨」に曰く此又自無中翻出箇有爲者、爲臣道之當然、然前言明此北面舜之爲臣也、則臣亦當無爲矣、林膚齋以爲看莊子不得如此拘泥、非是、蓋前以心而言之、此以分而言之也、若臣道雖有所爲、無慮靜恬淡寂寞無爲者以主之、將日見其擾雜而庶事其用隳矣と、「集釋」に曰く、夫工人無爲於刻木、而有爲於用斧、主上無爲於親事、而有爲於用臣、臣能親事、主能用臣、斧能刻木、而工能用斧、各當其能、則天理自然非有爲也、若乃主代臣事、則非主矣、臣秉主用、則非臣矣、故各司其任、則上下咸得而、無爲之理至矣、

【通釋】夫れ帝王の德たる卽ち聖人の心にして、天地を以て宗本と爲し、道德を以て主旨と爲し、天下を覆載し、萬民を生生せしむるも、本と功名心に出づるにあらず、我物顔をするにあらず、物に應じ、事に順ひ、千變萬化するも、常に無爲を以て一貫するなり、無爲なれば智境寛曠にして、其魂疲れず、自ら主動者の地位に立つて天下を運用するも、綽々然として餘裕あるなり、之れに反して有爲ならんか、思慮局促し

天行と共に健に、靜なるや地儀と共に安し、動靜は異なれども一心は無心に定まる、無心に定まるの一心は以て天下に王たるに足れり（大宗に應ず）、斯かる人は謂はゆる其死也物化なれば、其鬼は後に祟を爲すこと無し、其生也天行なれば其魂は常に疲るゝことなし、死生は異なれども一心は無心に定まる、無心に定まるの一心は以て萬物を服せしむるに足れり（大本に應ず）、更に悉く前說を約言せば、只是れ一箇の虛靜を以て天地の理を推尋し、萬物の情に通達せば、天地萬物我れと和合せざるはなし、此を卽ち天樂と謂ふなり、終りに更に約言せば天樂とは何ぞや、聖人の心天下を畜養する所以の者是れのみ、以上天樂を掲げ出して、之が爲めに縷々として說き去り、說き來ること二百餘言に至れり、然れども實は天樂の爲めにあらずして、聖人之心以畜天下也の結末一句の爲めに斯くも天樂を說けるなり、

【解義】〔與陽同波〕波は猶ほ流のごとし、但故らに活動的に波と言ひたるは、流石は莊子が筆たる所以にして、一起一伏一去一來靈動の狀見るべし、〔無人非〕非は讀んで誹となすべし、誹謗なり、〔其鬼不祟其魂不疲〕前に無鬼責の句ある故、各本注解概ねそれを承けたる者とせるも、無鬼責の鬼は他の鬼神をいふなり、天怨、人非、物累と對するを以て知るべし、此の鬼は天樂を知る者の鬼なり、其魂と對し且つ其字を冠するを以て明なり、若し否らずとせば、其の字の指す所は何者ぞ、岡松甕谷曰く其鬼不祟、以死時言、所謂生安死順、無慊於心故也、其魂不疲、謂生時、形體健全、魂氣無疲倦、と、善解と謂ふべし、〔以畜天下也〕畜は許六反、音「旭」、養なり、「易」の師卦にも君子以容民畜衆とあり、宣穎は涵育を以て解す亦取るべし、

夫帝王之德、以天地爲宗、以道德爲主、以無爲爲常、無爲也、則用天下而有餘、有爲也、則爲天下用而不足、故古之人貴夫無爲也、上無爲也、下亦無爲也、是下與上同德、下與上同德、則不

成疏に乘二儀（天地）以覆載とあり、蓋し猶ほ天地をして覆載せしむと言ふがごとし、其の施設の大にして妙なるを謂ふ、〔謂之天樂〕〔此之謂天樂〕上の天樂は天と和する人の自得せる天樂なり、下の天樂は莊子の謂ゆる吾が師に於ける天樂にして、卽ち天樂の實體なり、語は同じきも自ら一隔膜あり、且つ謂之は之を名づけて何々といふの意、之謂は猶ほ是れが卽ち何々なりの意、邦讀にては同じきが如くに聞ゆれども、語氣自ら別なり、

故曰、知天樂者、其生也天行、其死也物化、靜而與陰同德、動而與陽同波、故知天樂者、無天怨、無人非、無物累、無鬼責、故曰、其動也天、其靜也地、一心定而王天下、其鬼不祟、其魂不疲、一心定而萬物服、言以虛靜推於天地、通於萬物、此之謂天樂、天樂者、聖人之心以畜天下也、

【大意】此節は天樂を歎美するの終結なり、前に莊子曰〻の數句を挿んで天樂の實體を暫く述べたる故に、是に至つて故曰を以て再び初めの與天和者也に反應し、天と和合する者の天樂を敍して、其の大本大宗たるに歸結するなり、

【通釋】吾が師の天樂たる此の如し、故に曰く能く明白に此の天樂を會得したる者は全く天と和合せる者なれば、其生ける間は天の運行と共にして滯る所なく、其死するときは物の變化に混じて惑ふことなく、靜にしては陰と德を同じくして其體は寂寞たり、動きては陽と波流を合して其用は靈活なり、されば天樂を知る者は天の怨みも無し、我れ則に違ふことなければなり、人の誹りも無し、我れ世に戻らざればなり、外物の爲めに累さるゝことも無し、此れ物情に宜しければなり、鬼神の爲めに呵責せらるゝことも無し、我れ幽明に負かざればなり、故に曰く（前の故曰以下の數句を更に約說す）、天樂を知る者の動くや、

人樂といひ、天下と和合するところを名づけて天樂とはいふなり、莊子說きて此に至つて忽ち自己が平日口にする數句を挿入して、文勢を鼓舞し、以て之を歎美して曰へらく、吾が師か吾が師か吾が師は他にあらず、卽ち自然の至道のみ、是れ此の吾が師は時としては、無慈悲にも萬物を粉々に破碎(虀)するが如き觀あれども、決して吾師の暴戾の所爲と爲すべからず、何んとなれば是れは此に消すれば彼に長じ、彼に合すれば此に散ずる物の變態に過ぎざるのみならず、吾が師の無爲によりて其物自身各々然かすることなればなり、又吾が師は常に萬物を生々せしめて慈澤萬世に及んで無窮なる觀あれども、之を稱するに仁を以てすべからず、何んとなれば仁とは兼ね愛するの名稱のみ、吾が師には固より虛無なれば此等の心無く、是れ亦物に放任して生生せしむるまでなればなり、吾が師は天地に先つて千古萬古の太古よりも其齡は長ずれども、之を稱するに壽を以てするを得ず、何んとなれば壽とは年期の比較上長久なるに稱するものなるに、吾が師は本來不滅不生なればなり、吾が師は能く天をして覆はしめ地をして載せしめ、此の間に日月星辰山川水陸より以て動植金石に至るまでを、森然燦然として能くも彫刻したれども稱するに巧を以てし難し、何んとなれば巧とは作爲上の妙なるを言ふのみ、而かるに是れ亦吾が師は萬物各自の能くするまゝに任せて、未だ嘗て干與せざればなり、斯く勞も無く苦も無く所在其適する所に隨つて爲すこと無くして、能く爲し、自ら然るに、能く然りにて卽ち全く自然の成行に放任して而かも此の間に吾が師の樂を忘れたる眞樂は存せり、此を之れ天樂と申すなり、

【解義】〔與天和者也〕「辯正」に曰く和、猶ㇾ合也と、「郭注」には與二天地一無ㇾ逆也とあり、他の諸解は謂はゆる與ㇾ天爲ㇾ徒とせり、其意皆同じ、〔均調〕成疏に曰く、均は平也、調順也と、〔莊子曰〕林希逸曰く此數句與二大宗師篇一同、却又著二莊子曰三字一、前曰二許由之言一、今以爲二自言一、可ㇾ見件件寓言、豈可下把作二實話一看上と、〔吾師乎吾師乎〕「成疏」に曰く莊子以二自然至道一爲ㇾ師、再稱ㇾ之者歎二美其德一と、〔虀萬物〕虀は當に虀或は韲に作るべし、虀と同じ、碎なり、宣穎曰く肅二殺萬物一如二虀粉一と、下の澤及萬世と相對す、〔覆載天地〕

味あり、又聖の字は上文の玄聖素王の約、王字は帝王天子の略と知るべし、〔無爲也而尊〕也字の用法奇なるが如くなれども、前節の無爲也則任」事者責矣の也と法を同じうす、〔樸素〕樸は木の未だ削らざるなり、素は絲の未だ染めざるなり、卽ち地の儘、有の儘にて何の飾も無きをいふ、

夫明白於天地之德者、此之謂大本大宗、與天和者也、所以均調天下、與人和者也、與人和者謂之人樂、與天和者謂之天樂、

莊子曰、吾師乎、吾師乎、韲萬物、而不爲戾、澤及萬世、而不爲仁、長於上古、而不爲壽、覆載天地、刻彫衆形、而不爲巧、此之謂天樂、

【大意】此節は新に天樂人樂の兩語を掲げ出して、帝聖の胸中自ら廣大無邊の樂あることを說き、後節に連ねて反覆し、其趣味を歎稱しつゝ然る所以を述べたり、文脈固より虛靜無爲を輾轉承接し來れるに相違なきも、其意は無爲也則兪兪、兪兪者憂患不能處云云を源頭として、更に此に發明し運而無」積を以て之を貫けるものなり、又初は人樂の語をも掲げたれども、本と人の注意を惹けるまでにて、人樂は固より天樂の規模中を出でず、是れ天樂のみを反覆し、天樂のみに歸結したる所以なり、

【通釋】夫れ天地の德は無爲のみ能く此に曉然として自得すること明々白々たらば、帝王天子の德、玄聖素王の道を具備して、卽ち萬有の大本、天下の大宗たるものと謂つべくして、全く天と和合同體を爲せる者なり、然る上は虛靜無爲の地に居て運して積む所無きの妙を得たる者なれば、又能く天下の萬有を均平ならしめて偏らず、天下の物情に順應し(調)て逆はず、以て人とも和合し得る所以なり、和合てふものは、前きに謂はゆる兪兪者は憂患も處ること能はざるの境界なれば、其人と和合するところを名づけて

することと陶堯の如くなるは言を待たず、位無くして下に居るも玄聖老君の如く素王孔子の如き道となりて百代に仰がれん、以上は君たると臣たるとを論せず、有位なると無位なるとを問はず、均しく無爲より得たる功德にて、其至れる者なり、次なる者に就いて言へば、此を以て世を遁れ迹を晦し、靜閒悠游せる許由巣父が如き輩となりたればとて、江海に放浪し山林に吟嘯する天下の隱士は、其高風を慕ひて服從せざるはなきなり、將た又此を以て迹を顯し進んで時の廟堂に立ちて、一世の民を愛撫する伊尹呂望が如き倫となれば、功は自ら大に名は自ら顯れ其結果、萬民の歸依する所より天下大同全く一に定まりて、熙々たる治平を致すべきなり、畢竟止まるべきに止まりて處る（靜）ときは、自ら百代に崇敬せらるゝ聖人、行くべきに行きて出づる（動）ときは、自ら四海に歸服せらるゝ帝王たるべき根本を索むれば、即ち虛靜、即ち恬淡寂漠、即ち無爲のみ、無爲にして求めずして自然に此の至尊最貴を得るなり、無爲なるものは本と道德の質、質は固より樸なり、素なり、何の文も無く、飾も無なきが如くなれども、其尊貴せらるゝ此極に至る以上は、天下何物か能く之と美を爭ひ得る者あらんや、

【解義】〔南鄉北面〕鄕は嚮と同じ、君は北に坐し、南向きになり臣下を見るなり、「易」の說卦に聖人南面聽天下、嚮明而治とは是れなり、臣は南に在りて北向きになりて、君に對するなり、故に北面といふ、〔堯舜云云〕支那古代にありて君臣の盛なること、堯舜より先きなるはなし、而して堯は孔子の云へりし、大いなる哉唯だ天に則るの態度にて、上に立ち、舜又溫恭にして攝位に居り禹稷皐陶の徒其下に相揖讓しつゝ、各其職に任じ、庶績咸な熙る、故に莊子故らに此に點出し、又暗に上節の無爲也則任事者責矣の句と相ひ照せるなり、〔閒游〕閒の音「閑」、心に「ヒマアキ」のありて氣樂に游び暮すなり、〔進爲〕「集釋」に曰く顯迹出仕也と、蓋し爲すこと無きの道によりて、進んで爲すこと有るなり、〔靜而聖、動而王〕猶は處れば聖たり、出づれば王たりと謂はんがごとし、莊子別に內聖外王の言あり、亦此れと意を同じうす、故に宣穎は靜而聖の下に內體、動而王の下に外用と注せり、動靜出處內外體用相聯環して各々

く不レ能レ居ニ於其心一と、

夫虚靜恬淡寂漠無爲者、萬物之本也、明レ此以南鄕、堯之爲レ君也、明レ此以北面、舜之爲レ臣也、以レ此處レ上、帝王天子之德也、以レ此處レ下、玄聖素王之道也、以レ此退居而閒游、江海山林之士服、以レ此進爲而撫レ世、則功大名顯而天下一也、靜而聖、動而王、無爲也而尊、樸素而天下莫レ能與レ之爭レ美、

【大意】　此節再び前節と同句法を以て提起し、反覆して虚靜恬淡寂漠無爲の功德を讃美するなり、但し前節は事理上より推說し、此節は事實上より指示し、以て斯の道の政敎の本源にして、治平の極、天地位し萬物育するの功化も此より出でざるなきを言へり、「集釋」に曰く夫無爲之體大矣、天下何所レ不レ爲哉、故主上不レ爲二冢宰（宰相）之任一、則伊呂（伊尹呂望）靜而司尹矣、冢宰不レ爲二百官之所一レ執、則百官靜而御レ事矣、百官不レ爲二萬民之所一レ務、則萬民靜而安二其業一矣、萬民不レ易二彼我之所一レ能、則天下之彼我、靜而自得矣、故自二天子一以下、至二於庶人一、下及二昆蟲一、孰能有爲而成哉、是故彌無爲而彌尊也と、而して明レ此以南鄕より以下の四句は、君と臣との無爲、以レ此處レ上より以下の四句は爲政者と爲敎者との無爲、以此退居より以下の四句は隱遁者と出仕者との無爲の美を言ひ、靜而聖より以下の四句は前十二句を約したる總體の讃辭と知るべし、

【通釋】　夫れ虚靜恬淡寂漠無爲は已に天地の平、道德の質なること前述の如くなる以上は又萬物萬事の根本たることも勿論なり、されば果して能く斯道を心に明にして南向きに坐して君臨せんか、自ら盛德ありて陶堯の如きを得ん、北向きに坐して臣事せんか亦美績ありて虞舜の如きを得ん、又此を以て位を得て上に居らんか、帝王天子の德となり天下に光被

に休息せしめて、故らに作爲する所なければ、虛空と其德を合して累さるゝ所なし、虛空と其德を合する以上は、眞智こゝに出でゝ眞實の道に會すること勿論なり、眞實の道は卽ち自然の條理(倫)なり、又既に虛ならんか、其心の恬淡寂寞にして拘はる所なく靜なるは、勿論なり、拘はる所なく靜なれば、其動く所以を失はずして自在の妙あり、斯く能く動かば物に事に其宜しきを得ざらんや、又既に恬淡寂寞にして靜ならんか、其の他と競はず自ら功に居らずして無爲なるは勿論なり、斯く無爲にして天下に臨まば、百官有司各々其才の能くする所を以て其職事に任じ、自ら其責に當るべし、何の績か擧らざらん、又既に無爲ならんか、其心は常に從容和樂して愉々然たらん、愉々然たらば憂患も外より侵入して內に居留すべき餘地なければ、其身自ら寧康にして壽命も長久なること疑を容れず、要するに眞の實にして理あるは實より來るにあらずして、却て虛より生じ能く働いて宜を得るは動より得るにあらずして、却て靜より生じ人々をして事に任じて自ら責に當らしむるの成績を擧げ得るは有爲に由るあらずして却て無爲より生ず、無爲は獨り他を斯くならしむるのみならず、又我が心身を樂ましめて壽命を保つ所以なり、豈に天地の平準にして道德の本質ならずや、帝王聖人のこゝに休息するも宜なるかな、

【解義】〔恬淡寂漠〕恬淡は「アッサリ」、寂漠は「ヒッソリ」、漠の字他本多く寞に作る、同義なり、此四字は已に宣穎の云へる如く、全く靜字の趣を形容したる語に過ぎず、是れ下の讃美の語に其形跡を見ざる所以なり、〔道德之至〕道德の至極と解しても義理通ぜざるにあらざれども、郭氏に從つて道德の本質實體と視る方、文意に照して味あるが如し、況して下の刻意篇に明に道德之質に作るに於てをや、郭慶藩曰く至與質同、至實也、禮雜記使某實、鄭註實當爲至、史記蘇秦傳趙得講於魏、至公子延、索隱曰至當爲質、漢書東方朔傳非至數也、師古曰至實也あり、〔實者倫矣〕倫とは序なり、理なり、卽ち條理の正しく備りて、錯亂せざるなり、其道の眞實なること知らるべし、〔兪兪〕兪は愉と同じ、從容として心に自得して和樂する貌、〔憂患不能處〕處は居なり、宣穎曰

ち聖人の心は外物の自身が爲るまゝに順應して、決して此方より智を勞して之を取扱はざるが爲め屈撓せざるなり、〔平中準大匠取法焉〕中は猶ほ合と言はんがごとし、乃ち準の用に適合するなり、準は今本多く准に作る、乃ち準繩の準にて、俗に謂はゆる水盛のことなり、 前漢書律歷志に「準者所以揆平取正也」とあり、大匠は土木建築に於ける大工匠なり、其水盛にて建築經營の初に地面基礎の高低邪正を測量して手始めを爲す取法焉とは是れなり、此事は「周禮」秋官の匠人に見えたり、焉の字は平中準の三字を含蓄す、

夫虛靜恬淡寂漠無爲者、天地之平而道德之至、故帝王聖人休焉、休則虛、虛則實、實者倫矣、虛則靜、靜則動、動則得矣、靜則無爲、無爲也則任事者責矣、無爲則兪兪、兪兪者、憂患不能處年壽長矣、

【大意】 竈にあるときは熱、燈臺にあるときは光と效用上其名を異にすれども、結局一個の火に過ぎざると一般に虛靜恬淡寂漠無爲も前の一個の靜字を承けて之を敷衍したるまでにて實は一個の虛なり、靜なり、無爲なり、然れども斯くしたる意は其名目に就き各方面より交互に順次に讚美して以て其の功德を知らしめんとするなり、各句末の矣の字頗る味あり、宣穎曰く虛靜之源也、從虛落靜、從靜落無爲、連用四矣字錯落讚歎と、又曰く提句八箇字、下止落出虛靜無爲、其恬淡寂寞四箇字、止算靜字下形容到無爲之字と、

【通釋】 夫れ虛靜恬淡寂漠無爲は名を異にして實を同じくす、實を同じくして名を異にする所以のものは、唯之を言ふ方面に由れるのみ、故に連環して功德の歸する所は一なり、實に是れ天地の平準道德の本質(至)にして至れり盡せり、されば天下の治を爲す帝王も萬世の敎を立つる聖人も結局皆こゝに其思慮を休息せしめて、本據とせざるはなし、既に思慮を此

り、乃ち帝王の道に或は縱横或は表裡何れよりも悉く通達することを謂ふ、〔昧然無不靜者矣〕「宣注」に萬物自成、天下自歸、海內自服、而其自處也則闇昧之中無有不靜者矣と、又曰く運而無所積、則是動而不止、却以靜字接之妙妙、試思動靜、是一是二、可與言道也と、

聖人之靜也、非曰靜也善故靜也、萬物無足以鐃心者故靜也、水靜則明燭鬚眉、平中準、大匠取法焉、水靜猶明、而況精神聖人之心靜乎、天地之鑑也、萬物之鏡也、

【大意】上段の無不靜者の意を承け、唯だ虛なるが故に、能く靜、靜なるが故に、能く動きて物各々自得することを云ふ、

【通釋】然れども聖人の靜なりといふことは、靜てふことは、善美なるが故に靜なるを務むと曰ふ譯柄にはあらず、若し然るときは是れ故意に靜を粧ふものにして、眞正の靜にあらず、乃ち聖人の心は外界の萬物が決して之を撓め動すに足らざるが故に、本來靜を求むるに意なくして、自然に靜なるなり、彼の水を見よ、靜にして波立たざるときは澄清明瑩にして、人の微細なる鬚眉をも照映するなり、又平正にして水盛に用ひられ、城郭樓臺を經營する大なる工匠も先づ法則をこゝに取るなり、非情の水すら靜なるときは、其明にして働きあること此の如し、而るを況して人の靈妙至極の精神而かも、大德ある聖人の心の無爲自然に靜なるに於てをや、其光明は實に廣大なる天地無量の萬物を漏さず照映する寶鑑明鏡なり、豈に僅に靜水の人の鬚眉を照すと同日に論ずべけんや、蓋は其胸中謂はゆる運而無所積にて或る一事一物に積滯することなければ、天地萬物去來其まゝに映り、我も其まゝに判斷處理して毫も其爲めに撓まされて曇を生ずることなければなり、故に正中準の働きも同時に行はるゝこと勿論なり、

【解義】〔萬物無足以鐃心者〕鐃は撓と同じ、「發覆」に順物之自爲、昧然不覺、是以不撓也と云へり、即

可見運處即是靜、靜處正是運、動靜一機、非達天德者、其孰能知之と、

天道運而無所積、故萬物成、帝道運而無所積、故天下歸、聖道運而無所積、故海内服、明於天通於聖、六通四辟於帝王之德者、其自爲也昧然無不靜者矣、

【大意】 天道帝道聖道の三者を分掲して、運而無所積は是れ一貫せる道たることを說き、以て謂はゆる無爲は乃ち其實有爲なることを言ふ、宣穎曰く運而無所積一句、便道盡化體也、天道帝道聖道、總是一道、總是一初、帝配天者也、聖法天者也、又曰く開口便從運處說靜、莊子之學、豈寂滅者(佛敎)可同日語哉と、

【通釋】 君子の政治を爲すは無爲を尙べども何の方案も無く、施設も無くて謂ふにはあらず、彼の天道は常に運動して或る一處に積滯すること無きが故に、萬物は其化を享けて成就せり、帝王の道は常に運動して或る一事に積滯すること無きが故に、天下は其の化を慕うて歸從せり、聖人の道は常に運動して一行に積滯すること無きが故に、海内の億兆は之に服從せり、以上の如く天道帝道聖道の三道共に皆運動し積滯する無きを以て要旨と爲せり、されば此の天道に明曉し、聖道に通達し、帝王の德に六通四辟して縱橫自在に明通せる者、乃ち眞の聖人君子と申す人は如何許り活動を續け通すかと云はんに、反りて彼れ自らに爲すことは一切私智を使はずして、自然に任せて昧然と何事をも思慮せずして、無智の如くにして至つて靜ならざる者は無きなり、此れ豈に帝王の道を學ぶ者の當に學ぶべき所にあらずや、

【解義】 〔運而無所積〕 運は動なり、轉なり、積は滯なり、蓄なり、〔故萬物成〕「成疏」に天道運轉、殺育蒼生、照之以日月、潤之以雨露、鼓動陶鑄、曾無滯積、是以四序(四時)回轉、萬物生成也と云へり、〔帝道聖道〕 帝道は萬物を治むる政を云ふ、聖道は萬物を導く敎を云ふ、〔六通四辟云云〕 辟は闢と同じ、開なり、六通は六合の通ずるなり、四辟は四方の闢くるな

古弔反、纆徽は繩なり、搢紳の飾は外形を拘束するを以て、纆徽に譬ふるなり、〔睆睆然〕瞑目の貌、又窮視の貌、

名　言

無欲而天下足、無爲而萬物化、淵靜而百姓定、

夫道淵乎其居也、漻乎其淸也、金石不得無以鳴、

視乎冥々、聽乎無聲、冥冥之中獨見曉焉、無聲之中獨聞和焉、

執留之狗成思、猨狙之便自山林來、

螳螂之怒臂以當車軼、則必不勝任矣、

有機械者必有機事、有機事者必有機心、

執道者德全、德全者形全、形全者神全、

禿而施髢、病而求醫、孝子操藥修慈父、其色燋然、聖人羞之、

孝子不諛其親、忠臣不諂其君、

知其愚者非大愚也、知其惑者非大惑也、大惑者終身不解、大愚者終身不靈、

大聲不入於里耳、折楊皇荂則嗑然而笑、

厲之人夜半生其子、遽取火而視之、汲汲然唯恐其似己也、

百年之木破爲犧尊、靑黃而文之、其斷在溝中、比犧尊於溝中之斷、則美惡有間矣、其於失性一也、跖與曾史有間矣、然其失性均也、

五聲亂耳使耳不聰、五色薫鼻困惾中顙、五味濁口使口厲爽、趣舍滑心使性飛揚、

天道第十三

天道とは篇首の二字を以て題目とせるなり、乃ち世の爲治者の爲めに無爲の道を說ける者にて、大體無爲は只是れ爲而不爲に在ることを云へり、首段に運而無所積とあるは卽ち爲而不爲の意なり宣穎は曰く要說無爲、先托出靜字一層、要說靜字、先托出運而無所積一層、夫靜之爲無爲、人所易知也、運而無所積之爲靜、人所未易知也、運而無所積、則純是動、何以言無不靜耶、此處須親見得運而無所積之體、則劃然矣、運而無所積、乃至一者爲之也、倘有貳則不能運矣、則有所積矣、故道者其爲物不貳也、不貳者一也、一則靜也、

て其の自由を得たりと爲すべきか、天下豈に是の如き道理あらんや、

【解義】〔破爲犧尊〕犧尊既に前に見ゆ、又一に曰く犧は讀みて沙と爲す、尊は罇と同じ、俗に樽に作る、鳳凰の象を尊に刻み、其の羽の形ち婆娑然たり、故に名づく、淮南子の俶眞篇の高注に「犧尊猶疏鏤之尊」と、蓋し犧尊は衆物の形を刻畫して飾りとなせる者にて、六尊の中に在て最も華美の器たれば、古人以て文飾の盛なる者の代表と爲せり、阮湛が「禮圖」に「犧尊飾以牛、於尊腹之上畫爲牛之形、則因犧從牛、望文生義矣」と、是れ郭慶藩の説なるが、錄して參考と爲す、〔因㥞中顙〕氣の逆衝することなり、㥞は音「シユン」、又音「ソウ」、塞なり、因㥞とは「釋文」に「刻賊不通也」とあり、顙は額なり、「ヒタヒ」と訓す、乃ち鼻官が五臭に強く刺激せられて塞りて通せず、爲めに顙額を痛ましむるなり、〔使口厲爽〕厲は病なり、爽は傷なり、「成疏」に「穢濁口根、遂使鹹苦成痾、舌失其味也」と、〔趣舍滑心〕趣は取なり、滑は亂なり、〔使性飛揚〕飛揚は輕躁浮動して定らざるなり、「成疏」に「順心則取、違情則舍、撓亂其心、使自然之性馳競不息、輕浮躁動、故曰飛揚也」とあり、〔乃始離跂〕離跂は力を用ふる貌、已に前に見ゆ、〔鳩鴞之在於籠〕鴞も鳩の類、既に齊物論篇に見ゆ、〔以柴其內〕柴は梗塞すること、外物篇にも「柴生乎守」の語あり、亦此の柴と同義なり、〔皮弁鷸冠〕皮弁は皮を以て造れる冠なり、鷸は音「イツ」、又音「ジユツ」、一に鷸に作る、鳥の名「釋文」に「一名翠似燕、紺色出鬱林、取其羽毛以飾冠」とあり、

皮弁

〔搢笏紳修〕搢は揷なり、紳は大帶なり、脩は「成疏」に依れば、長裾を謂ふ、按ずるに修は長なり、紳修は大帶の長きことなり、〔內支盈於柴柵〕支は柱なり、盈は滿なり、柴は藩落、「マガキ」と訓す、又塞と同じ、柵は「シガラミ」と訓す、取舍の心胸中に、支柱充塞せるを以て、柴柵に譬ふるなり、〔外重纆繳〕纆は音「墨」、繳は音「シャク」、又

明らかにせり、

【通釋】 百年も經過せる木を破りて酒を盛る犧尊てふ器に造り、青や黄の色彩を用ひて、文飾し誠に立派なる物なり、而して其の切端は溝中に棄て顧みず、さて此の犧尊を溝中に在る切端に比較するときは、其の一は美にして一は惡なるは固より非常の間あり、されども其の天然の本性を失へる上より言へば、共に人に賊はれ全く同一にして、甲乙なきなり、今其れと同じ道理にて世に大惡人と云はるゝ盜跖と、大君子と云はるゝ曾參史鰌と、其の行義は一は凶暴極れる者、一は忠孝の賢人にて相違すれども、其の人の本性たる虛無の道を失へる上より云へば、全く同一にして甲乙なきなり、さて其れに就いて連想したるは先づ物の本性を失へる事件に就て云へば、大端五つあり、其の一に曰く青黄赤白黑の五色は世人の目を眩惑し、本眞の道理を看破する能はず、遂に目をして折角の明を失はしむ、二に曰く宮商角徵羽の五聲は、世人の耳を攪亂し、遂に耳をして折角の聰を失はしむ、三に曰く羶薰香腥腐の五臭は人の鼻を強く衝き困めて、窒息を感じ、頭痛を起さしむ、五に曰く趣舍とて物事を取りたり、捨てたりすることは、人の心を亂だし、本性をして外物の爲めに飛揚して落ち付かざらしむ、此の以上五つ者は皆共に人生の害なり。而かも揚朱黑翟は乃ち始めて離跂とて力を用ひて各々己が所能を振り舞はし、折角の本性を失ひ、生命を傷け、自ら以て得たりと爲せり、此れ既に自然の眞理に乖くが故に、吾が輩(莊子一流)の謂ふ所の得には非るなり、全體得なる者は眞性を保有して失はざるを得と爲せるに、今彼の仁義禮法を以て心身を約束し、眞性を矯め困苦して得と爲す可きことあらんや、若し左樣なる故を以て得と爲すときは、彼の鳩鴞の鳥が樊籠に囚はれて居るを以て、其の自由を得たる者と爲す可きか、決して然らざるなり、且つ夫れ趣舍する心と聲色の慾とが其の胸中を柴塞し、皮弁鷸服の冠と搢笏紳修の裝束とが、其の外形を拘束し、内は利欲の柴柵に關き止められ、外は官祿の纆徽に重さね重さね卷き付けられ、睆睆然と目を瞑り繩束の中に囚はれながら、自ら此を以て其の自由を得たりと爲すときは、是れ彼の罪人が臂を組み交せ、指を累ねて縛られ、虎豹が網や檻の中に捕はれて在るも、亦皆以

惑、不足與定數、擧天下之大而皆惑、誰與擧而指之、自分兩義と、今姑く前說を用ふ、〔其庸可得耶〕庸は何と同意義なり、「左傳」の昭十二年にも其庸可棄乎の語あり、〔厲之人〕厲は音「ライ」、癩病なり、「成疏」には醜病人とあり、楊升庵曰く古文用之字、「南華」（莊子）厲之人、又以麗姬稱麗之姬、南沛稱南之沛、呂覽（呂氏春秋）楚丹姬稱丹之姬、家語、江津稱江之津、樂府桂樹稱桂之樹と、

百年之木、破爲犧尊、靑黃而文之、其斷在溝中、比犧尊於溝中之斷、則美惡有閒矣、其於失性一也、跖與曾史、行義有閒矣、然其失性均也、且夫失性有五、一曰五色亂目、使目不明、二曰五聲亂耳、使耳不聰、三曰五臭薰鼻、困惾中顙、四曰五味濁口、使口厲爽、五曰趣舍滑心、使性飛揚、此五者、皆生之害也、而楊墨乃始離跂、自以爲得、非吾所謂得也、夫得者困、可以爲得乎、則鳩鴞之在於籠也、亦可以爲得矣、且夫趣舍聲色、以柴其內、皮弁鷸冠、搢笏紳修、以約其外、內支盈於柴柵、外重纆繳、睆睆然在纆繳之中、而自以爲得、則是罪人交臂歷指、而虎豹在於囊檻、亦可以爲得矣、

【大意】人の本性の無心無爲なるべきに反して、區々の行義學術を用ひて、智見を開發するは、徒に天良を破壞するに止まるを論じ、以て無爲の天德たるを

て今や天下を云へる大鳴り物を騒ぎ立てゝ惑はすときは、予（莊子）一人が如何に吾が說を聞かんことを求め向ふことあるも、其れ何ぞ得べけんや、されど其の一人の力にて奈何とも爲し得べからざるを知りて而かも强ひて之を得んとするは、此れ又詰り一つの惑ひなり、されば之を放釋して推さず、自然に任かし置くに若くはなし、强ひて推さずして自然の解決に任かし置くときは、彼此物我共に逍遙の樂を得て誰か其れ憂患に比し近くものあらんや、癩病を病める人夜半に己が子を生みしが、闇黑なれば、急ぎて火を取り來りて之を視しが、其の心には汲汲然と甚だ遽たゞしくして、唯だ其の生れたる子が父たる己に似んことを恐るゝが、若し彼の世俗に諛ふる事が非なることを知るに至れば、矢張り自ら相戒めて己を枉げて、俗に殉ふが如き卑屈なる行を爲さざるべし、乃ち畢竟彼は未だ自覺に達せざるを以て、此の如き卑むべき行を爲して耻ぢざるなり、

【解義】〔終身不靈〕靈は知なり、曉なり、〔予雖有祈嚮〕祈は求なり、兪樾曰く祈疑所字之誤と、乃ち言ふ、天下皆惑、予雖有所嚮往、不可得也、祈所字形相似、故誤耳と、〔大聲不入於里耳〕大聲は咸池（黃帝）大韶（舜）の音樂を謂ふと「成疏」に見ゆ、里耳は里俗の所聞なり、〔折楊皇荂〕荂は一本に華に作る、字同じ、折揚皇華は共に古への小曲なり、中山城山は曰く、共に古代の雅曲なり、或は曰く皇華は皇々者華（詩經に見ゆ）の詩なりと、〔嗑然而笑〕嗑然は笑聲なり、「成疏」に曰く玩狎鄙野、故嗑然動容、同聲大笑也、昔魏文侯聽於古樂、悅焉而睡、聞鄭衞新聲、欣然而喜、即其事也と、城山は曰く笑とは老子に下士聞道大笑の笑にて、其の妙味を解せざるを以て笑ふなりと、〔以二缶鍾惑〕城山曰く二ノ缶鍾を以て左右に分ちて之を鳴らすときは、聽く者惑ふを謂ふと、此に由れば、缶は「ホトギ」と訓ず、秦國の人之を擊ちて歌を節することと、「史記」及び「十八史略」等に見ゆ、鍾は鐘と古字相通ず、又缶鍾は量器の名なり、郭嵩燾曰く小爾雅、釜二有半、謂之藪、藪二有半、謂之缶、缶二謂之鍾、缶鍾皆量器也、缶受四斛、鍾受八斛、以二缶鍾惑、謂不辨缶鍾二者所受多寡也、持以爲量、茫乎無所適從矣、上文一人惑二人惑、據人言之、此以二缶鍾惑、據事言之、盡人皆惑、而誰與明之、操量器而

是故高言不止於衆人之心、至言不出、俗言勝也、以二缶鍾惑、而所適不得矣、而今也以天下惑、予雖有祈嚮、其庸可得邪、知其不可得也而強之、又一惑也、故莫若釋之而不推、不推、誰其比憂、厲之人、夜半生其子、遽取火而視之、汲汲然唯恐其似己也、

【大意】 末俗の至道に於ける愈〻迷うて愈〻離れ、復た換回すべからざるを歎息し、自然の推移に任かして其の覺醒を待たんより外なきを言ふ、宣穎曰く看他用譬喩數番、頓挫不勝留連致傷、至末一轉、却就無可奈何中、忽用自寬、此是老莊勝場、不然、幾無處收煞也、忽代一喩陡住、章法峭絶、

【通釋】 然れども自ら其の愚を知る者は大愚にはあらず、自ら其の惑へるを知る者は大惑にはあらず、大惑なる者は終身の久しき解悟せず、大愚なる者は終身の久しき知り曉らず、今之を歩行に譬ふるに、三人共に行く中に、其の一人が惑ふとも、往く所の者二人は猶ほ其の目的地に至るべし、何んとなれば惑へる者少ければなり、然るに三人の中にて二人が惑ふときは、頻に心を勞して而かも目的地に至らず、何んとなれば惑へる者多數にて勝てばなり、僅かに三人の中にても尙ほ此の如し、然るを況して今や天下の人人が皆惑へり、予れ（莊子）一人が如何に求め嚮ふ所ありと雖も其の目的を達するを得べからず、此れ亦悲み傷む可きならずや、大聲とて高雅なる音樂は反りて里巷の俗人の耳には入らず、折楊皇華と云へる俗曲は鄙近にして解し易き故に、何人も嗑然と聲を發して笑ふなり、是の故に高尙なる言論は衆人の心に印象を與へず、道理の言が世に出で顯はれざるは、紛紛たる俗言が勝てばなり、又若し二つの缶と鍾との鳴り物を以て左右に分かれて鳴らすときは、聞く者は果して孰れを聽かんかと惑へるに、而かも況し

派に飾りて、人々に感心を致させて、我が味方徒黨を多くす、是れにて能く其の終始本末を繕ひ保ちて罪に坐せず、衣裳を垂れて立派に裝束を爲し、美麗なる彩飾を加へ、鹿爪らしく容貌を動かし威儀を繕ひ、以て一世の人に氣に入る樣に爲し、而かも己自ら世に諛諂せずと謂へる、彼の僞君子者流と又彼の僞君子者流の徒弟と爲りて、其の是を是とし、非を非とすることを共通して、一派の説を立てながら、自ら衆人並の凡庸者と謂はずして高く自ら標榜せる人は、共に愚人の至りと謂ふべきなり、

【解義】〔孝子不諛―不諂其君〕諛は僞なり、諂は欺なり、〔道諛之人〕郭慶藩曰く道は諂と同じ、本書の漁父篇に希意道言、謂之諂とあり、又「荀子」の不苟篇に非諂諛とあり、「賈子」の共醒篇に君好諂諛、而惡至言とあるを「韓詩外傳」に並びに道諛に作る、是れ其の證なり、蓋し諂と道とは聲の轉ならんと、〔嚴於親〕嚴は聲なり、〔勃然怫然〕共に嗔る貌、〔不相坐〕坐は罪に座せざるなり、「成疏」に能保其終始、合其本末、衆既從之、故不相罪坐也と云へり、一説に坐猶安也とあり、乃ち合譬飾辭して衆人を欺き聚むるも、本と枝葉の言語を以てする者なるが故に、始終本末辻褄の合はざれば、落ち付かざるを謂ふ、此の説亦用ふ可し、〔垂衣裳設采色〕服の上を衣と曰ひ、下を裳と曰ふ、衣裳に紅紫の色相間へて彩色を爲し、以て服の華飾と爲す、「副墨」に曰く垂衣裳、設采色、動容貌、高自標致之學人、此段、分明譏貶一時聚徒、講學之人務空談、而無實行者と、

知其愚者、非大愚也、知其惑者、非大惑也、大惑者終身不解、大愚者終身不靈、三人行而一人惑、所適者猶可致也、惑者少也、二人惑則勞而不至、惑者勝也、而今也以天下惑、予雖有祈嚮、不可得也、不亦悲乎、大聲不入於里耳、折楊皇荂則嗑然而笑、

也、是終始本末不相坐、垂衣裳、設采色動容貌、以媚一世、而不自謂道諛、與夫人之爲徒、通是非、而不自謂衆人、愚之至也、

【大意】 世の俗論に媚ぶる者多くして、至理の言は容れられざるも、其の實是非は已に自ら判然たるを論じ、以て自己の主張必しも無益にあらざるを言ふ、陸方壺曰く孝子以下、自常情發出一段奇論、與上文不相蒙と、廣瀨旭莊も亦以て前章と別文と爲せり、

【通釋】 全體世上の議論に囚はれて事を爲せるが過てるなり、今先づ忠孝の大節に就いて云はんに、孝子は孝を以て其の親に事へて敢て諛はず、忠臣は忠を以て其の君に事へて敢て諂はず、是れ臣子大節の盛なる者なり、若し親の言ふ所なれば悉く道理と爲し、親の行ふことなれば悉く善行と爲し、是非を問はず一途に唯だ親に從ふのみなるときは、世間は之を不肖なる子と謂はん、君の言ふことなれば悉く道理と爲し、行ふことなれば悉く善行と爲し、是非を問はず壹途に君に從ふのみなるときは、世間は之を不肖なる臣と謂はん、而かも未だ此の世間の言が豈に必らず間違ひ無き者なるや否やを知らず、何んとなれば今夫れ世間の道理と爲すことは、亦同じく之を道理と爲し、世間の善行と爲すことは、亦同じく善行と爲して是非を問はず、壹途に世間に隨從なすも、世間は之を道諛即ち諂諛の人と爲して貶斥せざるなり、されば彼の世間なる者は固より子から視たる親より嚴めしくして、臣から視たる君より尊きことなるか、決して左樣なる筈にあらざるに、何が故に君親に對しては壹途に隨從するを非として、世間に對しては壹途に隨從すべしと爲すや、豈に矛盾の極ならずや、亦その本人に於ても之を世に諂びる人と謂はゞ、勃然と怒りて顏色を變じ、諛人と謂はゞ怫然と怒りて顏色を變ずべし、而かも矢張り諂人は身を終るまでも諂人に相違なく、諛人は身を終るまで諛人に相違なし、乃ち諂諛の名を惡みながら、矢張り諂諛の行を改めずして唯だ世論に媚ぶるのみ、又學徒を聚め學問を講じ、廣く譬喩を合せて人々に解り易くし、辭令を立

與」有虞氏の時、放伐を用ひずと雖も洪水あり、禹稷をして之を治めしめたれば、是れ武王の放伐せしと均く亂れたるを治めしなり、〔天下均治之爲願〕本と文章に於て天下爲願均治とあるべきを倒字法を用ひたるなり、即ち天下は皆均く治平を願へるなり、〔藥瘍也〕藥は古音「躍」と讀みて療と通ず、療は治なり、瘍は音「陽」頭創なり、〔禿而施髢〕髢は音「テイ」髮なり、「ソヘガミ」又「カヅラ」と訓ず、〔以脩慈父〕脩は「成疏」に理也とあり、理は治なり、世話を爲すこと、林希逸は脩は羞也と云ふ、羞は進むるなり、〔其色燋然〕燋は音「樵」燋悴の貌、〔聖人羞之〕「成疏」に依れば孝子は藥を慈父に進めて世話をなせども心配して瘠せ衰へ、決して之を誇り顏して功勞に伐らず、聖人が世の禍亂を救ふも猶此の如く決して己が功勳とせざるのみならず、反りて之を已むを得ずして爲したる者として羞づるなり、「宣注」は曰く言不如養親使不病也と、今之を用ふ、〔上如標枝〕標は「コズヱ」と訓ず、樹杪なり、「王注」に如樹枝無心而在上とあり、〔而不以爲義〕「王注」に自然合義と云へり、下句亦例推すべし、〔蠢動至不爲賜〕賜は恩德なり、蠢は微動なり、「ウゴメク」と訓ず、蠢蠢として動けども相互に使役するが故に、別に其の働ける者を恩德として謝せざるなり、

孝子不諛其親、忠臣不諂其君、臣子之盛也、親之所言而然、所行而善、則世俗謂之不肖子、君之所言而然、所行而善、則世俗謂之不肖臣、而未知此其必然耶、世俗之所謂然而然之、所謂善而善之、則不謂之道諛之人也、然則俗故嚴於親而尊於君耶、謂己道人則勃然作色、謂己諛人則怫然作色、而終身道人也、終身諛人也、合譬飾辭聚衆

りしを虞舜が更に之を治めたる乎、抑も天下が亂れて後ちに虞舜が之を治めたる者なるかと、赤張滿稽曰くそれは如何にも君の云はるゝ通り、天下が既に平治なれば、萬民の志願は滿足せしが故に、尙ほ何ぞ態々虞舜を推し立てゝ天子と爲すを計るに及ばんや、卽ち天下が亂れたればこそ彼を天子と仰ぎたり、彼の虞舜は頭瘡を病みて居る者を治療せしと一般なり、若し病まざれば初めより治療の必要なきが如し、今頭髮が禿げたればこそ添へ髮を施したり、又病めばこそ醫療を求めたりすれ、禿げざれば添へ髮は入らず、病まざれば醫療は無用なり、親に孝行なる子が、藥を執りて、慈愛ある父に進め、其の顏色が心配の餘り憔悴せるは、世間の俗眼より觀るときは流石に孝子なりとて感服致さんも、聖人は彼の親を善く養はざるによりて病氣を致したるを以て、反りて其の孝行顏を爲すを羞づるなり、卽ち凡て何に事も事がありて後ちに騷ぐより無事の先きに治めて事なからしむるに如かず、太古至德の世には賢者は賢者の位に居り、能者は能者の職に在るが故に、別に賢者を抽き出だして尊ぶに及ばず、能者を選り分けて使ふに及ばず、上に立つ尊貴の者は宛かも樹標の枝が自然的に高く上に在るが如くに思うて、位が高きとて別に其の氣に留めず、下に在る人民は野生の鹿の放縱自得せるが如く、何等の驕り野心も無し、其の行爲は既に義の實なる端正なりながら、此を以て義と爲すを知らず、仁の實なる親愛なりながら、忠と爲すを知らず、信の實なる道理に當りながら、此を以て信と爲すを知らず、蠢き動きて相互に使はれ、用事を爲すを以て互迭的に此れを以て恩惠を施したりとは爲さず、卽ち凡て義仁信賜の事實は具はり有れども、其の名稱を喋々と云はず、されば事を行うて而かも跡方なく、夫れ夫れに事が有れど而かも世に傳はらざるなり、卽ち凡て自然の儘に任かすときは、無爲にして事跡は世に殘らざるものなり、

【解義】〔門無鬼〕門は姓にして、無鬼は名なり、鬼は一に畏に作る、〔赤張滿稽〕赤張は姓にして、滿稽は名なり、〔故離此患〕離は遭なり、「集釋」に不及二虞舜之揖讓一、故遭二離征伐之患一と、〔天下均治〕「成疏」に依れば均は平なり、均治は平治を謂ふ、「宣注」は均は皆なり、古今皆治まるを謂ふ、〔其亂而後治之

混は混同して分別なく、冥は冥闇にして形色なきことにて、一と虛との體たるを謂ふ、「通義」に曰く不曰神人而曰混冥混冥卽神也、謂不可以形骸觀也、

門無鬼與赤張滿稽觀於武王之師、赤張滿稽曰、不及有虞氏乎、故離此患也、門無鬼曰、天下均治、而有虞氏治之耶、其亂而後治之與、赤張滿稽曰、天下均治之爲願、而何計以有虞氏爲、有虞氏之藥瘍也、禿而施髢、病而求醫、孝子操藥、以修慈父、其色燋然、聖人羞之、至德之世不尚賢、不使能、上如標枝、民如野鹿、端正而不知以爲義、相愛而不知以爲仁、實而不知以爲忠、當而不知以爲信、蠢動而相使、不以爲賜、是故行而無迹、事而無傳、

【大意】有虞氏の上世に如かざるを論じ、無爲の方に是れ天德たることを言ふ、宣穎曰く初爲有虞氏說入、後借之爲千萬世痛哭、嗚呼有虞氏尚未免聖人羞之、況武王乎、況武王之下乎、此便更不用措詞と、

【通釋】昔し門無鬼と赤張滿稽との二人、共に周の武王が殷を伐つ師を觀たり、その時赤張滿稽歎息して曰く、さても殘念なるかな、予輩は昔しの敦厚なる有虞氏の時代に及ばずして、薄俗なる後世に生れたるが故に、此の如き兵力を以て相爭ふ殘酷なる事を見るに遭へりと、門無鬼因りて問うて曰く、君は左樣に有虞氏を慕はしく云へるが、さて其の有虞氏からして既に問題の世たり、全體彼の天下が既に平治な

曠遠を照らし及ぼすが故に、昭曠と名づく、要するに天の命を推し窮め、卽ち自然の本性に順ひ、人の情を矯め繕はず、眞心を盡し天地自然と共に樂みて世の煩さき萬事は、皆消え失せて、萬物悉く其の本眞に復歸し、人の心も行も皆同じく、人間最初の虛無の道に相叶うて總てが玄冥なる道理に混同するを以て、此を是れ混冥と名づく、神人とは卽ち混冥なるが故に、到底も言語を以て形容すべからずと承知すべし、

【解義】〔諄芒將東之大壑〕諄芒は人の名にして、大壑は海なり、「通義」に曰く皆莊子擬名、擬景、以發胸中之蘊者と、蓋し諄は多言なり、芒は茫と同じ、多言なれども渺茫より出づる義にて、卽ち無心の言と云へる意味なり、東之大壑とは海は宏深なれば、以て其の心を大道に游ばしむるを喩へて云ふ、特に東と指したるは莊子の當時支那は唯だ東方に海あるを以てなり、〔適遇苑風〕「左傳」の杜注に不期而會曰遇とあり、苑風とは苑より出づる風にて、卽ち其の才の限極ある者に喩へたるなり、〔橫目之民〕人の目は橫に面に生ずるを以て、汎く人類の形容辭と爲したるなり、是れ莊子の獨創せし名目なり、〔官施至其能〕「通義」に曰く在位者稱職、遺逸者得升と、〔手撓顧指〕撓は動なり、手撓とは乃ち手を動かし指揮すること、顧指は其の人を顧みて指揮すること、左思の吳都賦にも搴旗若顧指の語あり、一本に顧を頤に作る、頤を擧げて指揮するなり、〔居無思行無慮〕「成疏」に德人凝神端拱、寂爾無思、假令應物行化、曾無謀慮とあり、〔共利之之謂悅〕謂は爲と通ず、謂悅とは以て悅びと爲すなり、下句の之爲安も亦宜く同例を以て解すべし、〔怊乎若嬰兒至失其母也〕怊乎は悵悲の貌、儻乎は心に主なきなり、乃ち迷へる貌、怊乎云云は當惑の餘り、心に歸する所を知らざる模樣にして、儻乎云云は踏み迷うて由る所を知らざる模樣なれば、共に茫然無心の狀にして、乃ち上文に爲せる事の自然に出でたるを形容して云へる者なり、〔此謂德人之容〕容は迹なり、卽ち其の形ち著はれたる迹方の概略と云へる意なり、〔上神乘光〕光は三光にて、乃ち其の德の日月星の上に出づとて、高く萬有の上に超越するを謂ふ、〔與形滅亡〕形ありと雖も見えざることにて卽ち無我を謂ふ、〔致命盡情〕致は推して極むること、〔之謂混溟〕

廣深にして如何程其の內へ注入しても滿ち溢れず、又如何程其の外へ酌み出だしても竭き果てず、誠に測る可からざるなり、故に吾は將に此處に游びて樂まんとすと、苑風問うて曰く、さて先生には此の目の面に橫に著きて居れる民卽ち吾々の同類を救ひ助けんとする尊意は無きか、吾願くは聖治と申して、彼の聖人の人民を治むる仕方を伺ひ度しと、諄芒曰く何にかの問ひかと思へば格別の事にもあらず、彼の聖治の事なるか、夫れ聖治と申すものは官を設け、政を施して其の都合宜きを失はず、人材を拔き擧げて才能ある者を失はず、畢く其の實情の事を見て、其の當に爲すべき事を行ひ、其の行其の言倶に躬親く自ら爲して他人は之に化し、又座ながら手を動かし顧み向きて指揮を爲して、四方の人民は倶に懷き至りて從はざるは莫し、此れを卽ち聖治と申して、世人の歆羨する者なりと、苑風曰く然らば願くは德人卽ち有德の人とは如何なる者かを伺ひ度し、諄芒曰く德人と申す者は靜かにして居るときは、物事を思ひ考ふること無く、動きて事を行ふときは慮り計ること無く、卽ち動靜共に心中甚だ虛坦淡泊にして、毫も道理の是非事物の善惡を念頭に留め置かず、四海の內、多數の人と共に利益を同くして、之を何よりも悅びと爲し、又共に滿足を同くし、之を何によりも安しと爲す、されば四海の人民が德人を仰ぎ賴ることは、餘り慕へる熱心の結果、怊乎と何にか恨めしき模樣にて、宛かも嬰兒が其の母を取り離したるが如く、儻乎と氣拔けがして宛かも行きながら其の道を失うて迷へるが如く、何の分別も考へも付かずに、一心不亂に、之に賴るなり、又嗜欲寡くして貪り取らざれば、世の財用は自然に餘裕あり、而かも人民は餘裕の自りて何れより來れる原因を知らず、淡泊にして滋味を貪らざれば、飲食は十分に足りて而かも人民は其の從りて十分に足れる原因を知らず、卽ち何時と無く知らず識らざる中に自然に富み裕かになるなり、以上の如きが德人とて、偉き人の所行が形迹に著はれたる所なり、苑風曰く然らば神人卽ち神聖不測の人とは如何なる者かを伺ひ度しと、諄芒曰く上等の神人は高く大空に光かれる日月の上に騰り乘て而かも形體は滅亡して見えず卽ち其の德の高きは天と同くして其の形ちは一向に見當らず、此れを智は明らかに

諄芒將東之大壑、適遇苑風於東海之濱、苑風曰、子將奚之、曰、將之大壑、曰、奚爲焉、曰、夫大壑之爲物也、注焉而不滿、酌焉而不竭、吾將游焉、苑風曰、夫子無意于横目之民乎、願聞聖治、諄芒曰、聖治乎、官施而不失其宜、拔擧而不失其能、畢見其情事、而行其所爲、行言自爲、而天下化、手撓顧指、四方之民、莫不倶至、此之謂聖治、願聞德人、曰、德人者、居無思、行無慮、不藏是非美惡、四海之内共利之、之謂悦、共給之、之爲安、怊乎若嬰兒之失其母也、儻乎若行而失其道也、財用有餘而不知其所自來、飲食取足而不知其所從、此謂德人之容、願聞神人、曰、上神乘光、與形滅亡、此謂照曠、致命盡情、天地樂而萬事銷亡、萬物復情、此之謂混冥、

【大意】 無爲の德は乃ち能く爲す所以なるを言うて天德は虚無たることを證す、

【通釋】 諄芒なる者將に東に向うて大壑の處に行かんとす、適ま苑風なる者に東海の濱に出で遇ひたり、苑風因て之に問うて曰く子は將に何處に行かんとし給ふやと、諄芒答へて曰く予は將に大壑に行かんとす、苑風更に問うて曰く大壑に行かれて何を爲さんと思ひ給ふや、諄芒曰く夫れ大壑の物柄は如何にも

相違あり、又人物も高尚ならざれば、會得し難し、吾と汝との如き者何ぞ以て之を識るに足らんやと、されば餘りに自ら力を揣らずして、過高及び難きを爲さずとも、先づ著實的に進行すべきなり、

【解義】〔假修渾沌氏〕假は眞の反對にて、此れ渾沌氏の術を眞に得たるに非るを云ふ、渾沌は解已に應帝王篇に見ゆ、渾沌氏とは泰初時代を假名して云へるなり、乃ち莊子が理想的時代なり、〔知其一不知其二〕徒に古を守るを知りて、今に順ふ能はざるを謂ふ、「通義」に曰く滯於一而不通於萬也と、〔治其內不治其外〕道を抱き素を守れども、時に隨ひ變に應ずる能はざるを謂ふ、「通義」に曰く守其心而不屑於物也と、〔夫明白入素〕以下乃ち其の渾沌の術を言ふ、明白は心智に就いて云ふ、入素は質素に深く叶ふこと、〔無爲復朴〕無爲は淳朴なり、行爲に就いて云ふ、復朴は初めの淳朴に立ち返へること、〔體性抱神〕神は卽ち性の由りて有る所の者、故に神を抱持せんとすれば、性を體して身に離る可からず、上文に形體保神、各有儀則、謂之性とあり、亦宜く參考とすべし、〔汝固將驚耶〕王引之曰く將猶其、固猶必、と其の說は「經傳釋詞」に詳かなり、邪は也と同じ、兪樾の說に依れば、固は胡と通じ、胡は何と通ず、「管子」の侈靡篇に公將有行、故不送公とあり、「墨子」の尙賢中篇に故不察尙賢爲政之本也とあり是れ皆故を以て胡と爲せるを證すべし、乃ち此れは眞の渾沌に遇へば世と相同じくて、別に人に飛び離れたる行爲あらざれば驚かざるを言へるなりと、姑く一說と爲して存す、〔何足以識之哉〕「通義」は曰く、且渾沌之世、用渾沌之道、今非其時、「郭注」に曰く在彼爲彼、在此爲此、渾沌玄同すと、蓋し渾沌とは幽玄の理、混同して相離れざるの謂なれば古今內外に通じて一なる者なり、故に特に之を區別して言ふ能はず、若し强ひて內外古今を區別して云ふときは、是れ既に渾沌と謂ふ可からず、故に孔子其識る可からざるを云うて、子貢をして彼の假修者に惑はざら使むるなり、「通義」に曰く事求可、可欲之善也、善以爲賢、而要信以成之、此正通於一、萬事畢者也、不亦用力少見功多乎、惜乎子貢之用其知、不於動而未形之幾、而馳於機械、猶幸漢陰丈人之一斥折衷於尼父(仲尼)也と、

知らずとて、即ち渾て物に順ひて我意なく、往く先き皆自然の道に任かすことを謂ふ、〔汒乎淳備〕汒は茫と同じ、淳備は淳厚圓備にて、即ち德神皆共に完全なること、〔得其所謂〕謂は爲と通ず、所爲は所行の事を謂ふ、〔警然不顧〕警然は「成疏」に誕慢の容とあり、甕谷曰く警は敖と同じ、倨傲の貌と、〔儻然不顧〕儻然は「成疏」に無心の貌とあり、甕谷は物と相偶せざる貌と云へり、〔風波之民〕「成疏」に夫水性雖澄、逢風波起、我心不定、類彼波瀾、故謂之風波之民也とあり、

反於魯、以告孔子、孔子曰、彼假修渾沌氏之術者也、識其一、不知其二、治其內、而不治其外、夫明白入素、無爲復朴、體性抱神、以遊世俗之間者、汝將固驚邪、且渾沌氏之術、予與汝何足以識之哉、

【大意】解義中に載する所の「通義」の說を參看すべし、

【通釋】子貢旣に魯國に歸り、孔子に委細の事を告せしに、孔子の曰はるゝには成程汝ぢの驚くも道理なるが、然し彼は唯だ僅かに古しへの渾沌氏とて、泰初虛無の術を假りに修むる者にて、眞の至極せる道を得たる人にはあらず、乃ち知識に於て其の一つを知り、其の二つを知らず、行爲に於ては其の內的を治めて、其の外的を治めざる者なり、夫れ眞の至極せる道に於ては鮮明潔白にして、何等飾り氣なき素朴なる處に入り、全く自然に順ひ、何等の爲す所なくして樸質に復歸し、人の最初に受け得たる性を緊りと身に着け、精神を抱き持ち、以て世間なみの仲間入りして、毫も衆人と異なりたることを爲さず、即ち有形無形に拘らず、凡て自然の道理に順ふ者なり、されば汝ぢは渾沌の道を假修する人を見てすら左樣に驚くことなれば、若し眞の渾沌を得たる人に逢ふときは、將に固より驚くことならん、誠に其の驚き方は想像し遣らるゝなり、且つ彼の渾沌氏の術は時代も古今の

するを求むべし、斯くして勞力を使用する少く、而かも成功を見る多き者は是れ世に尊き聖人の道なりと、然るに今は唯だ然らず、道理を執持する者は德行完全なり、德行完全なる者は形體完全なり、形體完全なる者は精神完全なり、精神完全なる者は聖人の執れる道なり、されば當世に生れて多數の人民と竝びに行動し、何に事をも自然に順ひて、自身は何れに往くを知らず、卽ち一切無我なるときは茫乎と深遠にして德形神共に淳和に圓滿なることなり、されば彼の功利機巧の事は必らず彼の丈人の心には忘られて思ひも寄らぬことならん、抑も此の如き偉き人は固より特立獨行して、己が志に叶ふに非れば行かず、己が心に合はざれば爲さず、たとひ天下の人の擧りて之を譽め、其の爲す所の事を成し得るとも、苟も己が氣に入らざれば傲然と高く構へて振り向かず、亦天下を擧りて之を非難し、爲めに其の爲す所の事を失ふとも、儻然と無頓著にて衆人の沮止を受けず、要するに非難さるゝも譽めらるゝも、共に我が本眞の道德に何等の損益を與ふる無く、泰然とし超越する者を完全なる修德の人と申す可きかな、之に反して我等の如く精神の定らずして常に動搖する人は、宛も風に吹かれて起れる波瀾の如くなるより、之を名づけて風波の人と申すべきなりと、右の如く子貢は一時深く感心を爲せり、

【解義】〔卑陬失色〕卑陬は「成疏」に慙怍の貌とあり、又「釋文」には愧懼の貌ともあり、〔項項然〕項は音「キョク」、項項は自失の貌、又局局と通ずとも云ふ、〔事求可功求成〕「成疏」に夫事以適時爲可、功以能遂爲成、とあり、陸樹芝曰く按事求可、功求成、昧者以爲語近功利、必非孔子之言、不知聖賢之學、固不計功謀利、若用於世、則夫子固云期月已三年有成矣（論語に見ゆ）、豈必不可、豈必不成乎、又曰篤恭而天下平（中庸に見ゆ）無爲而天下歸、獨非用力少而成功多乎と、〔執道者德全〕此の句より、下の而不知其所之に至る五句は、上文に物得以生謂之德、物成生理謂之形より、是謂元德同乎大順に至る八語を宜く參考すべし、〔託生與民竝行〕託は委託なり、乃ち一身を人間界中に置きて、衆人と與に行止を同うすることにて、卽ち上文にある同乎大順の意なり、〔而不知其所之〕自ら己の往く先きを

ぐを得ざらしむる無れとなり、

子貢卑陬失色、項項然不自得、行三十里而後愈、其弟子曰、向之人何爲者邪、夫子何故見之、變容失色、終日不自反邪、曰、始吾以爲天下一人耳、不知復有夫人也、吾聞之夫子、事求可、功求成、用力少見功多者、聖人之道、今徒不然、執道者德全、德全者形全、形全者神全、神全者、聖人之道也、託生與民並行、而不知其所之、汒乎淳備哉、功利機巧、必忘夫人之心、若夫人者、非其志不之、非其心不爲、雖以天下譽之、得其所謂、警然不顧、以天下非之、失其所謂、儻然不受、天下之非譽、無益損焉、是謂全德之人哉、我之謂風波之民、

【大意】別に辨説を要せず、

【通釋】是に於て子貢は卑陬と、痛く自ら卑下して、顏色を變へ、項々然と、しほ〳〵として自ら落ち付かず、行くこと三十里ばかりにして、始め氣附きて元の態に復したり、子貢の弟子は怪み問うて曰く、さて前刻の丈夫は一體何を爲す者なるぞや、吾が先生は何が故に彼を見て容を變じ色を失ひて終日の間自ら元の心に立ち反り給はざりし乎と、子貢曰く　吾只今まで大いに過てり、昔し吾は天下に於て　我が師たる孔子一人のみと思ひて、復た彼の丈人の如き偉き者あるを知らざりしなり、吾は嘗て之を我が孔夫子に聞けり、夫れ事は當時に行ふ可きを求め、功は能く成就

於于とのそり〳〵として鷹揚に見せ掛けて、衆人を高壓的に籠絡し、獨弦哀歌とて如何にも獨り調子に琴を彈き哀れなる歌を唱ひて、虛名を天下に賣り弘めんとする者に非らずや、此の如き者に從ふとは誠に早や氣の毒なる次第なり、然し今の內に汝ぢ將に汝ぢが神氣を忘れ、汝ぢが形體を毀ち、卽ち全く汝ぢが心を入れ換へ、身を取り代へたるが如く、全く只今までの心得違り方を打ち棄てゝ仕舞へば、始めて眞の大道に叶ふに近からんか、今汝ぢ自身を治むる能はざるに、而かも何ぞ天下を治むるに暇あらんや、汝ぢ早く去られよ、さて碌でも無き話を爲して、吾が仕事を邪魔なす勿れと、

【解義】〔過漢陰〕漢は水の名、水南を陰と曰ふ、〔見一丈人〕丈人は長老の稱なり、古へは男の身長は一丈を以て定めと爲す、故に男子を丈夫又は丈人と曰ふ、〔方將爲圃畦〕圃は菜蔬を種る地なり、「ハタケ」と訓ず、畦は田圃の界なり、〔鑿隧而入〕隧は地道なり、乃ち地道を鑿ち、旋轉して下り、以て水處に至るを謂ふ、〔搰搰然〕力を用ふる貌、〔一日浸百畦〕「說文」に五十畝曰畦とあり、〔挈水若抽〕挈は提なり、抽は引なり、「崔本」に抽を流に作る、〔數如泆湯〕數は音「サク」、疾なり、泆は音「逸」、又溢に作る、李禎曰く、疾速如湯沸溢也と、甕谷曰く湯は蕩と同じ、泆湯は水の洋溢して至るを謂ふと、〔其名爲槹〕沆は桔沆なり、「ハネツルベ」のこと、〔有機械者云云〕胡大靈曰く凡機皆如沆之以木代手足、於木又使之爲其所本、不能、總舍自然之理而用非理之類、故是有爲之況と、〔神生不定〕生は性と通ず神生は卽ち精神を謂ふ、〔道之所不載〕道の取らざるを謂ふ、〔瞞然慙〕瞞は音「ハン」慙づる貌、〔於于以蓋衆〕於于は氣の舒ぶる貌、郭嵩燾曰く應帝王篇、其覺于于、說文于於也、象氣之舒、是於于字同、於于猶于于也と、愚按ずるに越國を「左傳」に於越と曰ひ、荀子に于越と曰ふ、亦以て於于の二字相通ずるを觀るべし、「郭說」是なり、〔獨絃哀歌〕「循本」に高其調以振響於天下也と云へり、甕谷曰く獨絃は獨り自ら絃を鳴らすなり、此れ間暇無事の時琴瑟を鼓して自ら遣るを謂ふと、〔而庶幾之乎〕而は則と通ず、庶幾は近なり、道に近きを謂ふ、〔無乏吾事〕乏は廢なり、又字の如し、乃ち吾が農事を乏絶して相繼

下乎、子往矣、無乏吾事、

【大意】 眞の虛無の宗旨に通ずる者は有無を一貫して合致する者なるを說く、宣穎曰く機械數語、由淺而深、蓋機端一開、勢所必至、君子所以防其漸也と、

【通釋】 孔子の弟子子貢、南方楚國に游び、北の方晉國に反りしが、途中漢水の南を過ぎし時、一老人の方に田圃を爲らんとするを見たり、態々隧道を鑿ち、其の中を迂回して井の中に入り、水を汲める甕を手に抱き、又もとの隧道より出でて田圃に水を灌げり、搰搰然と頻りに骨を折りながら、其の割りに功績を見ることは寡かりければ、子貢は之を氣の毒に思ひ、注意して曰く左樣に骨折らずとも、此に便利なる機械あり、之を利用するときは一日に百畦の田地を浸し潤ほし、力を使用することは寡くして功績を見ることは多し、夫子豈に之を欲せざるかと、田圃を爲れる老人は之を聞き、面を仰向けて子貢を視詰めて曰く、其の機械は如何なる使ひ方なるかと、子貢曰く木を鑿ちて機を作り、後方は重くし前方は輕くし、其の力にて水を汲み出だすこと、宛かも物を引き拔くが如く、其の早きことは湯が沸き溢れ出るが如くにして、誠に手數は省きて便利なる機械なり、其の名を槹と曰ふ、卽ちはね釣瓶と申すなりと、之を聞くと田圃を作る老人は忿然と血相變へて蔑意を含みながら、笑うて曰く、吾は之を吾師匠より聞けり、機械を用ふるものは、必らず投機的の事を爲し、投機的の事を爲すものは、必らず機變的の心を有てり、機變の心が胸中に存在すれば、天然の本性たる純一虛明の德は缺けて備はらず、純一虛明の德が缺けて備らざれば、神性が動搖して定らず、神性が動搖して定らざる者は、純粹なる道からは卻けて相手にせざる所なり、されば今汝ぢが云へる機械位のことは、吾は知らざるにはあらず、唯如何にも左樣なる事は羞かしくして爲ざるなりと、子貢は之を聞き、瞞然と大に愧ぢ、面を俯して何の對へをも爲さざりき、閒くありて圃を作る老人は問うて曰く先刻から問答に忙しくて、聞くことを忘れ居りしが、全體貴君には何にを爲す者なるやと、子貢答へて曰く貴君も聞き給ひしならん、魯の孔丘と申す人あり、拙者は卽ち魯の孔丘の徒弟なりと、是に於て圃を作る老人は曰く、されば貴君は豈に彼の博學を衒うて、自から聖人を氣取り、其の態度は、

由於上之搖蕩也、則其所以搖蕩民心者、正大異於後世之搖蕩矣と、〔進其獨志〕獨志は獨一の心志、乃ち生れ付たる志なり、「宣注」には除其害道之心、進其得一之志とあり、〔溟涬然弟之〕溟涬は「郭注」に自貴之謂とあり、乃ち手前を自慢すること、弟は上の兄の字に對して、肯て後れざることを謂ふ、或は曰く「郭說」の自貴の字解すべからず、恐らくは自貴の誤ならんと、林西仲曰く、溟涬は惛然の貌と、

子貢南遊於楚、反於晉、過漢陰、見一丈人、方將爲圃畦、鑿隧而入井、抱甕而出灌、搰搰然用力甚多、而見功寡、子貢曰、有械於此、一日浸百畦、用力甚寡、而見功多、夫子不欲乎、爲圃者仰而視之曰、奈何、曰、鑿木爲機、後重前輕、挈水若抽、數如泆湯、其名爲槔、爲圃者忿然作色而笑曰、吾聞之吾師、有機械者、必有機事、有機事者、必有機心、機心存於胸中、則純白不備、純白不備、則神生不定、神生不定者、道之所不載也、吾非不知、羞而不爲也、子貢瞞然慙、俯而不對、有閒、爲圃者曰、子奚爲者邪、曰、孔丘之徒也、爲圃者曰、子非夫博學以擬聖、於于以蓋衆、獨弦哀歌以賣名聲於天下者乎、汝方將忘汝神氣、墮汝形骸、而庶幾乎、而身之不能治、而何暇治天

各々其の個人的志操を進ましむるなり、即ち要するに人々の本性の自然に順ひて爲せるが故に、民に於て其の由りて然る所を知らず、乃ち何時と無く自ら化するなり、此の如き者は豈に堯舜の民を敎ふるに對して、溟涬と惛く、「ボンヤリ」として彼が弟分と爲たるを甘んじて、後れ從ふものならんや、即ち自ら堯舜に向うても、左程に劣るとは思はざるなり、されば今爲政者に於て天下を一德の下に同くして、悉く道德に同化せしめんと欲するならば、恭儉公忠などと左樣なる題目を騷ぎ立つるよりは、先づ己が心を不用の地に安んじ置くが第一なり、

【解義】〔蔣閭葂〕蔣一に將に作る、葂音「ベン」、又音「バン」、蔣閭は姓、葂は名なり、或は曰く姓は蔣にして閭葂は名なり、〔季徹〕季は姓にして、徹は名、「釋文」に蓋し魯の季氏の族なり、〔必服恭儉〕服は行なり、〔而無阿私〕阿は曲なり、〔民孰敢不輯〕孰は誰なり、輯は和なり、〔局局然笑〕局局は身を俯して笑ふ貌、又大笑の貌とも云ふ、〔螳蜋之怒臂〕螳蜋は蟲の名、「カマキリ」と訓す、〔以當車軼〕軼は轍と通ず、車輪の僻りし迹なり、「ワダチ」と訓ず、此には車輪の動く處を謂ふ、〔危其觀臺〕觀は「タカドノ」又は「モノミ」と訓ず、「左傳」の僖五年の觀臺の注に臺上構屋、可以遠觀者也とあり、〔多物將往〕多物は萬物と云ふが如し、萬人を謂ふ、〔投迹者衆〕投迹は足を運びて行くことにて、此の處は眞似を爲す者の多きを謂ふ、「成疏」に顯耀動物（人）、物（人）不安分、故擧足投迹、企踵者多也とあり、一説に其自爲處危を句とし、其觀臺多物を句とし、將往投迹者を句とす、乃ち魯君の自居るや危し、宛かも觀臺上に多くの物を積みて、人に示して其の心を挑發する時は、將に往きて足を向け之に湊るが如く、徒に外榮を張りて、人心を擾亂するを謂ふなりと、亦通ず、〔覤覤然〕覤は音「ゲキ」、驚懼の貌、〔汒若於夫子〕汒は一に芒に作る、茫と通ず、汒若は茫然に同じ、〔言其風也〕兪樾の説に依るに、風は凡と通ず、大凡なり、風の字はもと凡の聲に從ふ、故に通用するを得るなり、〔搖蕩民心〕搖蕩は猶ほ鼓舞と云ふが如し、陸樹芝曰く搖蕩二字是開説、須活看、言大聖之治、亦似搖蕩民之心志、使之成敎易俗者、然其所以搖蕩者、乃正擧其後起之賊心、滅而去之、一若民性之自爲、初不知其

由然、若然者、豈兄堯舜之敎民、溟涬然弟之哉、欲同乎德而心居矣、

【大意】別に說明を要せず、

【通釋】蔣閭葂と云へる人あり、季徹と云へる人に見えて曰く、魯國の君が小生に申さるゝには、請ふ先生の敎を受けんと、小生は固辭したれども、君の御許可を得ず、是非に及ばずして既に政を爲す道を告げたり、然し未だ其の說が果して道理に中れるや否やを知らず、請ふ今試に之を申し上げん、幸に吾が夫子には敎を垂れよ、さて小生は魯君に申して曰ひけるに、必らず君よりして先づ恭儉の事を實行し、身を愼み物事を內輪に引き締め、公平忠直の人を拔き出だして用ひ、阿り私しすること無れ、然るときは國民孰か和らぎ治まらざらんやと、季徹は之を聞きて局局然と俯きながら笑うて曰く、若しも先生の言はるゝ通りなれば、其の說が帝王と爲りて天下國家を治むる德に對しては、宛かも彼の螳蜋が至て細き臂を勢ひ強く張りて、車輪に敵對するが如く、如何に力を入るゝとも必らず其の任に勝へずして、失敗の外なきなり、且つ是の如く恭儉公忠の德を明かに揭げて國民に臨まんか、其の危險なることは、魯君自らが居處を爲すに、其の觀臺とて宏壯なる宮殿を危く聳かして作り、態と人目に附き易き樣に爲し、多くの人々は將に之を目掛けて、往き從はんとし、必らず足迹を向けて赴く者が多くならん、卽ち恭儉公忠てふ誘引物を以て、人心を挑發するが故に、天下の人心が騷がしくして落ち付かざるなり、左樣なることにて何んとして帝王の德に當るべきや、大間違なる事なりと、蔣閭葂は覤覤然と驚き懼れて曰く、小生は不材にして先生の御言に對して、茫若と暗く分らざるなり、然しながら願くは先生の其の大凡の事を仰せ聞かされんことを切に願ひに堪へずと、季徹曰くされば一と渡り申さん、大聖人が天下を治むるにも、徹頭徹尾其の儘に放任せよとにはあらず、乃ち矢張り彼の人民の心を搖蕩して、一應搔き立て動かすことなれども、其の搖蕩たるや民をして善き敎化を成し、惡しき風俗を易へ、其の物を賊ふ心を悉く擧りて滅し去りて、皆

而も汝なり、卽ち孔子を指す、若の上に以の字を加へて看るべし、〔有首―無耳〕首は身の上に在り、趾は下に在るを以て、形體を總括して首趾と云ふ、有首有趾とは形體を具ふるを謂ふ、無心は知慮なきなり無耳は聞見なきなり、〔有形―盡無〕有形は形體なり、無形無狀とは神を謂ふ、皆存とは卽ち上文の形體保神の謂にして、形と神と合へるなり、盡無とは上の衆の字に對照して其の極めて少きことを言へるなり「通義」に曰く形神相依相成者曠世而罕見と、〔此又非其所以也〕以は用なり、力を用ひて爲すこと、〔有治在人〕有治は治てふ名目のあるなり、在人は人の自ら意を以て名づけたる者にして、自然に存するに非らざるを謂ふ、此れ上文の有人治道若相放の言に對して云ひ、其の徒に人智を用ひて事を爲すは、已に大いに謬りなることを喩したるなり、〔是之謂入於天〕入は冥合することを謂ふ、天は自然なり、卽ち虛無を謂ふ、

將閭葂見季徹曰、魯君謂葂也曰、請受敎、辭不獲命、既已告矣、未知中否、請嘗薦之、吾謂魯君曰、必服恭儉、拔出公忠之屬、而無阿私、民孰敢不輯、季徹局局然笑曰、若夫子之言、於帝王之德、猶螳螂之怒臂以當車軼、則必不勝任矣、且若是則其自爲處危、其觀臺多物將往、投迹者衆、蔣閭葂覷覷然驚曰、葂也汒若於夫子之所言矣、雖然願先生之言其風也、季徹曰、大聖之治天下也、搖蕩民心、使之成敎易俗、舉滅其賊心、而皆進其獨志、若性之自爲、而民不知其所

昭然明白ならしむるときは、是れ其の人は聖德と申すべきかと、老聃は曰く否是れ彼の胥易技係とて區々たる末技の交換に止まりて、徒に形體を勞苦し心神を怵れしむる者なり、譬へば狸を執ふる狗は技能あるが爲めに繫ぎ止められて愁憂の思をなし、猨狙は敏捷なるが爲めに、反りて人に捕はれて深山茂林の中より稠人中に來りて弄び苦めらるが如し、乃ち其の本は皆己が區々たる智能を恃みしより自から苦みを取るなり、さても汝ち孔丘よ予は汝ぢが力にては聞けもせず、言へもせずと云ふ極めて深妙なる道理を說き聞かさん、凡そ上は首あり、下は趾あり、先づ一と通りの身體を具へながら、心なく耳なく、卽ち知識聞見の働き無き者は世に衆し、卽ち先づ此れが世間竝の人なり、而して凡そ形體ある人と形狀なき道とが能く一致して偕に存する者は、世間を盡くして、何に物にも無しと斷言するも、殆ど不可なきなり、凡そ物として其の動止と死生と廢起と、此れ又其の自力を用ひて左樣に變化さするにあらず、皆な自然の作用卽ち道の効力なり、故に物を治むると申すことは、人の勝手に名づけたるにありて、自然の關知する所にあらず、されば凡て萬物を忘れ、又天然を忘れて一切を構はざるもの、其の名を忘己と云うて、卽ち自己をも同時に併せて忘るゝなり、此の忘己の人こそ、是れ天に仲間入りしたるものにて、卽ち道の本意なる虛無に叶ひたる人にて、眞の聖人と申すべし、彼の區々智術を弄びて治を爲す者、豈に道を知る聖人などと申すべきや、到底話に成らぬことなりと、

【解義】〔治道若相放〕此れ倒裝文法を用ふ、卽ち若相效治道と云ふ意味にて、若し先王の治道に相倣うて法を立て、敎を興すを云ふ、或は曰く若は苦の誤なりと、〔離堅白若縣寓〕離は離析なり、卽ち條理を分析すること、堅白は公孫龍等の唱ふる所の一種の詭辯なり、已に逍遙遊篇に解せり、縣は懸なり、寓は宇と同じ、懸寓とは日月を天宇天上に懸るが如く、至つて明白なるに喩ふ、〔胥易技係〕內篇の應帝王篇に解せり、〔執留之狗〕留は釋文に又貓に作り、或は狸に作るとあり、王先謙曰く留留牛　卽ち氂、牛留氂雙聲字、蓋氂牛身大、逍遙遊篇所謂若垂天之雲者、此狗能執之、故謂之執留之狗と、郭嵩燾曰く留止也、謂繫而止之也と、〔予告若而所不能聞〕若は汝なり、

に曰く言既合於鳥鳴、德亦合於天地、天地無心於覆載、聖人無心於言說、故與天地爲合也と、「其合緡緡」緡は音「ビン」、合なり、「是謂玄德云云」「成疏」に依れば、是謂玄德の四字を一句とし、深玄の德と謂ふべし、故に大初に同じくして大に天下に順へるなりと解せり、「通義」は八字を一句とし、玄同の德にして宇宙に順達する者と謂ふべしと解せり、倶に通ず、「通義」又曰く自有一而未形、至各有儀則謂之性、言一起於無而成萬之故、自性修反德、至大順、言萬法歸於一無也と、

夫子問於老聃曰、有人治道若相放、可不可、然不然、辯者有言曰離堅白、若縣寓、若是則可謂聖人乎、老聃曰、是胥易技係勞形怵心者也、執留之狗成思、猨狙之便自山林來、丘予告若、而所不能聞與而所不能言、凡有首有趾無心無耳者衆、有形者與無形無狀而皆存者盡無、其動止也其死生也、其廢起也、此又非其所以也、有治在人、忘乎物、忘乎天、其名爲忘己、忘己之人、是之謂入於天、

【大意】　此又無爲の天德たることを言ふ、

【通釋】　孔子嘗て老聃に問ひて曰く茲に人あり、其の治むる所の道に於て若し專ら相模倣して法度を立て敎化を興さんとし、人情道理を無視して天下の不可を可とし、不然を然とし、其の事凡て衆心に違ひながら、能く持論を維持すること宛かも彼の當今詭辯家が常に誇りて、吾は能く堅白同異の說に就き、其の條理を分析して述べ立つること、日月を宇宙に懸くるが如しと云へるが如くに如何にも雄辯滔滔として

抱陽、沖氣以爲和とあり、乃ち道は虛無なるが動いて陽となり、又靜かにして陰と爲り、陰陽交りて三と爲り、此より次第に相生じて萬物を生ずとの事なり、以て莊子本文と互に參考と爲すべし、〔有一而未形〕一は中に含みてあれども、未だ外に形として露はれざる模樣を謂へるなり、〔物得以生〕得以生とは得之以生と云ふが如し、乃ち物は上句に云へる未だ形れざる一を身に受けて生ずることとなり、「通義」に一雖起而未露、正萬物所得以生之本、虛靈之竅也とあり、〔謂之德〕德は得なり、乃ち萬物此を得て生ずるよりして德と名づくとなり、〔且然無間〕且然は猶且と云ふがごとし、間は間隔なり、乃ち上の未形とは理を指して云へるにて、理中に已に萬象森然、分布の兆を包含し、無形ながらも間隔なく流行しつゝあるを天命と名づくとなり、「通義」に此無（卽ち本文の一を指す）雖未形露、而其機則燦然之分、已具於中、而有不得已者、活潑無情、無勉強、無怠慢、無一息之停、是天之所付（物）、物之所受（天）之命とあり、〔留動而生物〕留動は運動を留むるなり、「通義」には其運動不已、適然一留、則成物之生理也とあり、「釋文」に留を或は流に作るとあり、乃ち流行せる命を謂ふ、〔物成生理〕物既に成りて各々生理を具ふるを謂ふ、生理とは一身生活の機關卽ち五官の類なり、〔各有儀則〕儀則は法則なり、「通義」に物既成、形神合矣、則生生之所成、爲我之形、於是百骸所事、皆有法則、所以保護此神、是天能也、故謂之性とあり、按ずるに上の命は天に就いて云ひ、此の性は人に就いて云ふ、「郭注」には夫德形性命、因變立名、其於自爾（自然）則一也と云へり、乃ち上文の物得以生より本句に至るまでに擧げたる各種の名目は唯だ其の見地によりて名は變はれども、其の意は皆共に自然の理を指して云へるなり、〔性修反德云云〕修は自ら愼しむなり、反は外より本處へ歸るなり、初は卽ち泰初なり、「通義」に得其修、而能反其未形之德、造於極致、則與泰初本來之無、渾然不二、其虛其大、無塵可棲、無物不容とあり、〔合喙鳴〕喙は鳥の口なり、「クチバシ」と訓ず、喙鳴は鳥の啼き聲にて、無心なるを謂ふ、齊物論篇にも鷇音の語あり、相參すべし「郭注」に曰く無心於言自言者、合於喙鳴と、〔喙鳴合與天地爲合〕喙鳴合は合喙鳴の倒語なり、「成疏」

【大意】 無爲の道の虚無の天德に叶ふを言ふ、「辨正」に曰く此段亦述古人之言而失其名專取同乃虚以下只一太虚也と、

【通釋】 泰初とて造化最初の時には音も沙汰も無くして、何に物をも無し、若し强ひて何に物かありやと云へば、唯獨り無と名づくるもの有るのみ、然れども既に此の如く何に物をも有ること無しとすれば、其の實固より名の有るべき筈なければ、此の無と云へる名も、後より付けたるものにて、泰初に當りては未だ有らざるなり、然るに此の無物無名の中よりして、或る一つの物が起ることとなるが、此の或る一つの物あれども、未だ形ちに現はれずして現れんとする兆機を含めり、萬物は此の兆機を受けて生ずることを得るものなるが、之をば名けて德と云ふ、此の未だ形ちに現はれざる者各々分け前あり、且此の如くに活動して絶え間なきもの、之をば名づけて天命と云ふ、天命の動き行はるゝを留めて物を生み產す、其の生み產したる物は共に成りて各々物の生理を具ふ、之をば名づけて形と云ふ、此の形體にて精神を擁護保持し、各々儀範法則ありて亂れざるをば名づけて性と云ふ、此の性が修りて宜しくなるときは上に述べたる德に立ち反り、德が至極するときは、そこで泰初と同じく爲り、泰初と同じきときは、そこで始めて虚無と爲り、虚無と爲るときは何等の範疇制限も無ければ、そこで大と爲り、恰かも鳥の喙を動かして囀るが如く、其の言論は自然的にて私意あらず、故に天地自然の德と合致し、而かも其の合へる狀態は緡緡と他より觀れば愚なるが如く、昏きが如し、是れぞ眞の玄德無意識的にて同乎と盡く同くして、何等にも逆はず、大に順ふと謂ふなり、

【解義】 〔泰初有無〕泰は無上の謂なり、泰初とは天地未開の時、造化の初を謂ふ、無は有の對詞にて既に有なければ固より無もなし、然れども今文章にて述ぶるときは何等かの形容なかるべからず、故に有無と云ふ、〔無有無名〕有無二字の間に則の字を加へて看るべし、其の語法は「詩經」大雅蕩の篇に有物有則と云へると同じ、「宣注」は泰初有無無を一句とし、竝不得謂之無と云ひ、有無名を一句として、可謂之無而不能名と云へども非なり、〔一之所起〕「老子」に道生一、一生二、二生三、三生萬物負陰而

禹往きて子高を見しに、子高は耕作をして野に在り、禹は趨りて下方に就き立ちて敬意を表し、因りて問うて曰ひけるに、昔し帝堯が天下を治めし時、吾子は立ちて諸侯たりしに、堯が舜に天下を授け、舜が此の予れ禹に授くれば、吾子は諸侯たるを辭退して野に下だりて、耕作を爲せり、此の如く急遽に變られしは何か仔細の有るならん、願くは之を伺ひ度しと、伯成子高は答へて曰ひけるに、昔し堯が天下を治むるや、自然の道理に任かし、無爲を以て治めしかば人の善事を褒賞せざるも、人民は自然に勸み勉めて、善を爲し、人の惡事を懲罰せざるも、人民は自然に畏れ戒めて惡を爲さゞりき、然るに今や子は盛んに善を賞し、惡を罰しながら、其の政が不自然なるが故に、人民は貴所の目的に反對して不仁ならんとし、世の道德は此れより衰へ、刑罰は此れより立ち、次第に人心風俗は惡しくなりて、後世の亂は此處より始ることならん、此の如き危き世に居るは宜からず、貴所は何ぞ速かに立ち去らざるや、折角吾が仕事を爲すを邪魔をして、廢落すること無れと、俋俋乎と首を低れて地を掘り返し、耕しながら復た顧みて言語を交はさざりき、

【解義】〔夫子闔行邪〕夫子は禹を指して云ふ、闔は盍と同じ、又曷に作る、何不の約語なり、〔無落吾事〕落は廢なり、吾事は農事を謂ふ、〔俋俋乎耕〕俋俋は耕す貌、又首を低れて耕す貌、人の行く貌又勇壯なる貌とも云ふ、

泰初有無、無有無名、一之所起、有一而未形、物得以生、謂之德、未形者有分、且然無間、謂之命、留動而生物、物成生理、謂之形、形體保神、各有儀則、謂之性、性修反德、德至同於初、同乃虛、虛乃大、合喙鳴、喙鳴合、與天地爲合、其合緡緡、若愚若昏、是謂玄德、同乎大順、

【解義】「堯觀乎華」華は地の名、今の華州なりと云ふ、此の一段も亦寓言たり、又十八史略卷の一に見ゆ乃ち莊子の本文より採れるなり、「我以女爲聖人」「成疏」に曰く我始言、女有無雙照、便爲體道聖人、今既舍有趨無、適是賢人君子也と、「鶉居而鷇食」鶉は音「ジユン」、鳥の名、「ウヅラ」と訓ず、釋文に鶉居謂野處也、又如鶉之居、猶謂野處也と、鷇は音「カウ」、鳥の子なり、鷇食とは鷇の食は必らず母の哺を仰ぎて自ら營むなし、故に疏食に甘んじて、滋味を貪らざるに喩ふるなり、「去而上僊」僊は仙と同じ、上僊は仙人と爲るなり、「三患莫至」三患は卽ち上文の多懼多事多辱なり、「辨正」に曰く謂有道無道老死之患と、「封人曰退已」一說に已は矣と通ず、

堯治天下、伯成子高立爲諸侯、堯授舜、舜授禹、伯成子高辭爲諸侯而耕、禹往見之、則耕在野、禹趨就下風、立而問焉曰、昔堯治天下、吾子立爲諸侯、堯授舜、舜授予、而吾子辭爲諸侯而耕、敢問其故何也、子高曰、昔堯治天下、不賞而民勸、不罰而民畏、今子賞罰而民且不仁、德自此衰、刑自此立、後世之亂自此始矣、夫子闔行邪、無落吾事、悒悒乎耕而不顧、

【大意】堯舜無爲の治は禹の有爲の政に勝ることを言ひ、以て仁義聖知の絕つべきを示す、莊子の常套たり、或は疑ふ文章も卑弱なり、蓋し後人假託の作にして、莊子の眞筆にあらずと、

【通釋】帝堯天子と爲りて天下を治めし時、伯成子高は立て諸侯と爲りて、或る一國を治めしが、堯は天下を舜に讓り渡し、舜は又禹に讓り渡したり、伯成子高は諸侯の位を辭し一平民と爲りて耕作を爲せり、

男の御子が多く生れ給ふやう祈禱仕らん、堯曰く辭退せん、是に於て封人又曰くさても怪むべきかな、長壽富榮にして男子多きことは何人も皆欲する所なるに、陛下に限りて欲し給はざるは全體如何なる義にやと、帝堯曰くさらばよ、今男子が多きときは自然に煩累が生じて懼れを多くし、富むときは金錢財寶が盛んになれば、隨うて事業繁多なり、壽命長きときは種々の憂目に逢うて恥辱多し、是の三つの者は皆無爲の天德を養ふ所以に非らず、故に敢て辭退をなすと、封人曰く此れは亦意外なるかな、始めは私に於ては陛下を以て大悟徹底して有無を一體となし給へる大聖人なるかと思ひしに、今は此の如く一々心配を爲し給へるを觀れば、勉强的に虛無を願へる君子なり、全體人間界の事を左樣に嫌ひ厭ひ給へるにも及ばざるべし、天が萬民を斯の世に生み降だすには、必らず各々相當なる職を授くるなり、されば男子多しとて各々之に職を授くるときは父たる者に於て何ぞ懼るゝことかあらん、富榮なるも己獨りにて之を私有せずして人をして各〻其の富みを分ち有して、公共に利益を享けしめば、別に何ぞ多事なることとあらん、夫れ聖人は鶉居とて宛かも鶉の野に翔り回はるが如くに、一定の住とては無く、氣隨に居り、而して穀食とて生れ立ちの鷇鳥が親鳥の哺を仰ぐが如くに、他食を仰ぎて生活し、鳥の飛行して行き度き處に行きて而かも足迹の彰かなる無きが如く、物事に伴れ動きて、强ひて我が功業を貽すことを爲さず、天下に道行はれて太平なるときは、世の萬物と皆俱に昌え、天下に道なく亂るゝときは自分獨り己が德を修めて閑靜無爲の地に就き、千歲も久しく生きて最早人世を厭き足るときは斯の世界を去りて天に上りて神仙となり、彼の空に浮べる白雲に乘り、天帝の居給へる處に至らば、彼の前に宣べ給ひし三箇條の患は至ることも無く、其の御身も常に殃ひ無かるべし、左すれば壽命長しとて何ぞ恥辱かあらん、畢竟陛下の辭退なし給ふは、未だ有無一貫の悟りを得ざるが故なりと、右の如く言ひ畢はりて封人は堯の手許を去れり、是に於て帝堯は翻然として己が非を悟り、封人の後に隨ひ追うて曰く、請ふ今一應篤と伺ひ度しと、封人は之を郤け、最早別に何事をも申すまじ、速かに退き給へと曰ひて、遂に立ち去りけり、

は臣下に禍するを謂ふ、下文の南面之賊也の句亦以て類推すべし、「辨正」に曰く以上一揚一抑結之、言雖得道之緒餘、其實失道也と、又曰く禍賊與篇首可爲君而主人卒相反、並言不能與天地同大也と、

堯觀乎華、華封人曰、嘻聖人、請祝聖人、使聖人壽、堯曰、辭、使聖人富、堯曰、辭、使聖人多男子、堯曰、辭、封人曰、壽富多男子、人之所欲也、女獨不欲、何邪、堯曰、多男子則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養德也、故辭、封人曰、始也我以女爲聖人邪、今然君子也、天生萬民、必授之職、多男子而授之職、則何懼之有、富而使人分之、則何事之有、夫聖人鶉居而鷇食、鳥行而無彰、天下有道、則與物皆昌、天下無道、則修德就閒、千歲厭世、去而上僊、乘彼白雲、至于帝鄕、三患莫至、身常無殃、則何辱之有、封人去之、堯隨之曰、請問、封人曰、退已、

【大意】　聖人は無心無爲なることを言ひ、以て天德の實例を示す、

【通釋】　帝堯は嘗て華と云へる地に游觀せしに、華の封疆を守れる封人と申せる官を勤め居る人が白して曰く、さて聖人よ、臣請ふ聖人を祝福し、聖人をして長壽を保ち給ふやうに祈禱仕らん、帝堯曰く辭退せん、封人曰くさらば富み榮え給ふやうに祈禱仕らん、帝堯曰く辭退せん、封人又曰くさらば聖人をして

して其の訛傳せるを見はさんが爲めに其の系統を具列せしなり、〔可以配天乎〕配天は天子と爲るを謂ふ、又其の德天に同じきを謂ふ、卽ち上文に云へる天德の意なりとの說あり、〔吾藉王倪以要之〕藉は因なり、要は致なり、卽ち王倪に因て天下を齧に傳へ致さんと欲するを謂ふ、〔殆哉圾乎〕殆は近なり、危なり、圾は岌と同じ、危なり、〔聰明叡知〕叡は聖なり、知は智と同じ、〔給數以敏〕給は捷なり、數は音「朔」、急なり、敏は速なり、上句の聰明叡智は其の性を云ひ此の句は卽ち其の性の用を云ふ、林希逸曰く應事之間、以其性之敏故應之捷給、此其過人處と、〔以人受天〕人智を挾みて天道に合はさんと求むるを謂ふ、「辨正」に曰く以智巧求中物理、卽以智巧求合天也、所謂勞神明爲一（齊物篇に見ゆ）也と、〔審乎禁過〕此れ乃ち上の以人受天の事實なり、審は明なり、〔不知其過〕「郭注」に曰く過生於聰智、又役知以禁之、其知彌甚矣と、〔彼且乘人而無天〕且は將なり、乘人は乘は行なり、人の事を行ふを謂ふ、甕谷曰く乘猶言駕、以己智駕衆人之上、而蔑棄天道と、謙按ずるに乘は載なり、其の事を爲すや、專ら己が智を載せて行ふを謂ふなり、〔本身而異形〕「管見」に依れば齊物論に肝膽楚越也とあるが如く、私智を以て物理を蔽ふときは、卽ち人の身は論なく己が身と雖も亦相知らずして形ちを異にすと爲すなり、亦以て一說と爲すべし、〔尊知而火馳〕火馳は火の馳するが如く、其の急なるを謂ふ、〔爲緒使〕緒は緒餘なり、卽ち緒餘なる末事に使用することなり、〔爲物絯〕絯は束なり、又拘掛なり、物毎に拘掛するなり、〔有族有祖〕族は屬なり、子孫本支相共に聯屬するを以て、同系の家を概稱して族と曰ふ、「宣注」に凡聚族必有宗祖と、「管見」は曰く謂齧缺之學亦有宗有君、指得被衣之餘緒也と、此の說に依れば齧缺の學も亦多少の師傳系統あれ共未だ完全ならざるを謂ふ、〔以爲衆父父〕衆父は竝一と通りの父にて、一家の父なり、衆父父は竝み一と通りの父の父にて、父は固より尊からざるにあらざれども、衆父の父、卽ち總一族の祖先は又更に尊きものなり、此れ齧缺は卽ち上句の有祖と云へる祖たる人にして、或る部分の道を得たるも未だ完全なる者にあらずとなり、〔北面之禍也〕禍北面也の倒裝法なり、卽ち臣下に在るとき

き、天地と與に大なるを得ざるを言ひ、以て上文の天德に非れば、道を得る能はざることを反說せり、

【通釋】 昔し帝堯の師匠を許由と曰ひ、許由の師を齧缺と曰ひ、齧缺の師匠を王倪と曰ひ、王倪の師匠を被衣と曰ひけるが、或る時帝堯は許由に問うて曰く先生の師たる齧缺の賢なることは天德に配して天下の君たるを得べきか、若し然らば吾は齧缺の師匠たる王倪に賴みて、之を迎へて吾が帝位を讓らんと欲すと、許由は之を止めて曰く左樣なる無法をせられては殆いかな岌乎たり天下や、いざ吾之を語らん、彼の齧缺の人柄たるや、聰明叡智にして、能く世話敷に用達をなして敏捷なり、其の性質固より常人に過ぎ踰えて恰悧なるが、又餘り智に過ぎて區々たる人智を以て天理に合さんと求めて、過度に精神を用ひ疲らせり、彼れ齧缺は餘りに自ら己が過ちを禁止することを明審して、而かも是れ反りて己の過ちは其れよりして出生し起れることを知らず、此の如き者は爭でか今天下を與へて天に配せしめんや、彼は將に凡ての事に對し區々たる心を乘せて行ひて天然を無視し、無爲の化の有り難きことを知らざらんとす、彼は將に己が一身を本とし、而かも己と人との形ちを異にして、人我の別を爲さんとす、彼は將に專ら知識のみを尊崇して、而かも其の智を用ふることの急なる火の馳するが如く、火急に用ひんとす、彼は將に細緒卽ち小事に使役せられんとす、彼は將に紛々たる外物に絯束せられて、囚はれんとす、彼は將に四方を顧みて諸の事に應接して暇あらざらんとす、彼は將に衆多なる事物に對して、一々皆其の宜きに叶ふを求めんとす、彼は將に外物と與に移り化し、而かも屢變改して恒久に一定すること有らざらんとす、以上の如き情態なれば何ぞ以て天に配して天下の君たるに足らんや、然しながら今之を譬ふるに、玆に一門一家聚りて一大族を爲すときは、必らず其の宗祖あり、彼の齧缺も亦以て一門一派の父と爲すべし、而かも衆父の父たる卽ち總本家總一統の父と爲すべからず卽ち天地萬化の本宗たる資格は無きなり、故に彼れ齧缺は國家を率ゐて治まらしめ亦亂れしむるものなり、北面して人臣たるときは天下を禍するものなり、亦南面して人君たるときは天下を賊へるものなり、

【解義】 〔堯之師曰許由云云〕 此れ師傳の遞致より

して云へるなり、下の喫詬罔象皆同じ、〔使離朱索之〕離朱は目の明らかなる人、既に前に見ゆ、〔使喫詬索之〕喫詬は司馬彪は多力なりと云へり、郭嵩燾は曰く廣韻喫同嚱、嚱聖也、詬怒也、怒亦聲也、集韻喫詬力諍是也と、「宣注」には言辯なりと解せり、〔乃使象罔〕罔は無なり罔象とは象あるに似て、實は無きことにて、蓋し無心の義に喩ふるなり、城山曰く象罔は卽ち形象と罔兩なり、「通義」は曰く智者思惟也、離朱者明也、喫詬者言也、三者皆足以蔽眞性、象罔、無形無影、是所謂無己也、無己卽得矣、得無所得也、知明言皆曰索之、而象罔不以索贅、謹嚴哉莊文也と、

堯之師曰許由、許由之師曰齧缺、齧缺之師曰王倪、王倪之師曰被衣、堯問於許由曰、齧缺可以配天乎、吾藉王倪以要之、許由曰、殆哉圾乎天下、齧缺之爲人也、聰明叡知、給數以敏、其性過人、而又乃以人受天、彼審乎禁過、而不知過之所由生、與之配天乎、彼且乘人而無天、方且本身而異形、方且尊知而火馳、方且爲緒使、方且爲物絯、方且四顧而物應、方且應衆宜、方且與物化、而未始有恒、夫何足以配天乎、雖然有族有祖、可以爲衆父而不可以爲衆父父、治亂之率也、北面之禍也、南面之賊也、

【大意】知識聰明を役使する者は終に自然の道に乘

黄帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘、而南望還歸、遺其玄珠、使知索之而不得、使離朱索之而不得、使喫詬索之而不得也、乃使象罔、象罔得之、黄帝曰、異哉、象罔乃可以得之乎、

【大意】知覺聰明の以て道を得べからず、必らず無心の人にして始めて能く道を得べきことを言ふ、「辨正」は曰く此段附上段、爲一段、引古人寓言、以證上段非一人之私言也と、

【通釋】道の神聖にして偉大なるや、亦一例證あり、昔し黄帝は嘗て赤水と云へる川の北に遊び、有名なる高山崑崙の邱に登り、それより南方を望みて還歸せしに、帝の持てる玄珠の寶を遺亡せり、因て帝は知識をして玄珠を探索せしめたれども、竟に見當らず、更に彼の明視家なる離朱をして探索せしめたれども亦見當らず、又更に能辯家なる喫詬をして探索せしめたれども、亦見當らず、乃ち有象無象の間に在る象罔をして探索せしめしに、象罔は之を見當てゝ持ち歸れり、黄帝嘆息して曰ひけるには異なるかな、知識其他をして探索せしめしに得ずして、象罔が反りて之を得べきかと、

【解義】〔黄帝遊乎赤水之北〕此の事亦莊子の寓言なり、赤水は水の名、赤は五色中に在りて南方に配當せらる明色なるを以て、南方の陽に因みて明處に喩ふ、北は陰なれば玄境に喩ふ、〔登乎崑崙之丘〕崑崙は崑崙山なり、其の絶高の地なるを以て玄境の極處に喩ふ、〔而南望〕南は陽明の方なり、此れ已に玄境の極處に遊び、久く守る能はずして復た明處を望むことを言ひ、以て終に聰明を恃みて無爲に安んずる能はざることに喩ふるなり、〔遺其玄珠〕遺は遺亡なり、玄珠とは玄は深遠の名、珠は珍寶なれば、以て道の眞に喩ふるなり、「通義」に曰く山海經、赤水極南、崑崙四海之中最高、今曰其北、猶在八埏之内也、曰登邱、則趨高矣、又曰南望還歸、則趨高好明、所以失玄珠也と、〔使知索之〕索は求なり、知はもと知識のことなれども、此處は寓言なれば人物に看做

神而能精焉、故其與萬物接也、至無而供其求、時騁而要其宿、大小長短修遠、

【大意】上段に接して王德の王德たる所以を說く、

【通釋】王德の人は其の平生の存々として注意せることは、內は冥々に反視し無聲に反聽し、以て本源を立て、冥々たる無形の中に獨り海日新たに升れる曉天の如き光明を見、寂寂たる無聲の中に鑾和の互に鳴り奏するが如き妙音を聞き、以て爲すこと有りて鬼神に通ずることを爲す、故に深きが上にも深く退き藏れて、而かも能く萬物に應じ、俱に逝くことを爲し、神なるが上にも神に渾化して而かも能く精密に條理を爲せり、右の如く其の德廣きが故に其の心萬物と應接するや、至て虛無にして、而かも能く物の求めに供給して盡きず、時に外に馳せ出て而かも能く其の宿止する善き處を得て、事の大小、時の長短、地の近遠、何れに往くとしても宜からざること無くして、世の不同なる者をも皆能く之を同うするを得るなり、されば其の位こそ未だ王者たらざるも、其の德已に十分王者の資格ある者なり、故に之を王德の人と謂ふ所以なり、

【解義】〔冥冥―曉焉〕此れ道は冥然として形ち無く寂然として聲なきも、其の實は寂滅に非ることを言ふ、林希逸曰く冥々無形也、視乎無形而其見曉然、人以爲無聲而我之所獨聞、如八音之相和と、〔而能物焉〕「郭注」に窮其原而後能物物とあり、卽ち能物とは能く衆多の物を物として用ふるを謂ふ、故に「成疏」には窮理盡性、故能物物也と云へり、宣注は至不測矣、而物由此生と云へり、此れ能物を物は深深として不測なる處より生出すと也、二說俱に通ず、〔而能精焉〕能く精微を窮むるを謂ふ、〔而要其宿〕宿は歸宿なり、其の歸宿すべき所を要し、敢て漫然として底止する所無きに非るを謂ふ、〔大小長短修遠〕修は長なり、長の字と複す、「通義」以て近の字の誤と爲す、今之に從ふ、「辨正」に曰く倒裝之詞、要其宿者、不論大小長短皆然也、是不同同之之意と、

れば、金石其物も亦固より道の作用に由りて生じ、其の特性たる善鳴も亦道の作用に由りて具はることを擧げて、道の有らゆる萬物に行き亘らざること無きを說きたるなり、〔不考不鳴〕考の下、宜く則の字を加へて看るべし、考は擊なり、「通義」に曰く金石、雖有聲、非人考擊則聲不發、是人之考金石、亦道之所體也と、蓋し金石は素より善鳴の性德を含めども、人之を擊たざるときは自ら鳴らず、而して人の金石を擊つは金石に限りて擊てば、聲を發することを知ればなり、是れ亦道の作用に外ならずとなり、〔萬物孰能定之〕以上の事例に由りて觀るときは萬物（人も金石も皆包含す）の能は果して天に由るか、人に由るか、彼に由るか、此に由るか、定むべからずとなり、〔素逝而恥通於事〕素は眞なり、逝は往なり、扑眞清高なるが故に、物務に通ずるを以て恥と爲すなり、藤澤東畡曰く素は染まざるの謂にして、素逝とは逝て天然を失はざるを謂ふ、恥は知の誤なりと、又は心の誤なりと、按ずるに此の句、下文の通於神と相對す、藤說蓋し是ならん、〔立之本原〕城山曰く本源は素逝を謂ふ、〔其心採之〕出は應ずるを謂ふ、採は感ずるを謂ふ、乃ち物の來感するにあらざれば、心は出應せざるなり、〔故形非道—德不明〕「成疏」に道能道生萬物、故非道不生、德能鑒照本原、故非德不明、老子云道生之、德蓄之也と、「通義」は曰く萬物之形、非道不生、其生非德不明、如金石之鳴德（金石特有の德）也、金石無聲、孰知其爲金石、考金石德也、人不考焉、孰見人之能、又孰見金石之德と、此れ例を上文金石云々に取りて說明したるものなるが、亦以て參考とすべし、〔存形窮生立德明道〕此れ上句を承け、王德ある者の行を說きしなり、「通義」に曰く王德者務存其形、盡有生之常分、以終其天年、惟立德如上篇天德、仁大寬富以明、其道而已と、〔蕩蕩乎忽然出勃然動〕蕩蕩は廣大なる貌、郭注に忽勃皆無心而應之貌とあり、〔而萬物從之乎〕「通義」は曰く一乎字見王德者無心於萬物之從、而物自從之耳、猶曰聖人作而萬物覩と、

視乎冥冥、聽乎無聲、冥冥之中、獨見曉焉、無聲之中、獨聞和焉、故深之又深、而能物焉、神之又

至て深靜なり、亦漻乎と海の清澄なるが如く、其の行動は至て潔白なり、金石の鳴り物も、此の道なるものを得ざれば、以て鳴ること無し、その故は金石は固より其の中に鳴るべき聲を有すれども、他より物ありて撃たざるときは、金石自身のみにては鳴らず、此の鳴るべき性質を含みながら自ら鳴らずして、撃てば鳴るものは果して何物がありて然らしむるか、萬物の中、果して何物が然らしむるかと能く取り極めるものは無し、此れ乃ち無形の道が何物と云はず、總べてに分賦して有るが故なり、道の神聖不測なるや此の如し、夫れ王德ある人は素逝とて素眞に任かして逝きて小賢しく物事に通ずるを恥と爲す、然し全く通せざるにはあらず、物事の本源を立て定めて要點を握れる故に、其の明智は鬼神に通して、鬼神同様何に事をも知らざるなし、故に其の德は廣大にして天地と同し、凡そ其の心が物に伴れて外に出でゝ種々なる想を爲すは、心が物を呼び付くるにあらずして物の方より心を引き出だすことは、宛かも或る物が來りて心を採るが如き情態あり、されば人たる者は既に形體てふものを以て、世に生れたる以上は已はもと天下に心なしと雖へども、矢張り天下の一物なれば彼れ來りて感ずれば、我亦應ぜざる能はず、而して形は卽ち道に非れば、生せず、生せし形は德に非れば明かならず、因りて上の如く本源として立て智は神に通ずることを務むるなり、彼の形を存して其の生命の有らん涯りを窮めて、天壽を全くし、德を立て其の道の本源たることを明らかにするものは、豈に天下に王たる德を具ふる者にあらずや、されば其の物に當り事に接し、應感自由自在なる狀態は蕩蕩乎と廣大無邊にして、忽然と速かに出て勃然と盛に動きて、而かも萬物は之に從うて倶に逝くものなるか、此の如き人を帝たる王德ある人と謂へるなり、

【解義】〔漻乎其清〕漻は音「リユウ」、清澄なる貌、「成疏」に淵則歎二其居寂以深澄一、漻歎二其雖レ動而恒潔一也と云へり、〔金石不得無以鳴〕得の下宜く則の字を加へて看るべし、不得とは道を得ざるなり、通義に曰く金石非レ道不レ具二有聲之性一、可下以見中無二物之不一レ體上也と、蓋し道はもと有レ物混成、先二天地一生、寂兮寥兮、獨立而不レ改、周行而不レ殆、可三以爲二天下母一とあるが如く、天地萬物の樞紐根源たる玄理を形容したる名な

の道を得るを謂ふ、〔行不崖異〕「字典」に不和物曰崖とあり、崖異は他人と相和せずして異なるを謂ふ、〔故執德之謂紀〕紀は要を紀すること、「辨正」に擇術得其要也とあり、或は曰く故の字當に刪るべしと〔循於道〕「崔本」に循を脩に作る、〔韜乎其事心之大也〕韜は藏なり、包容なり、「郭注」に曰く心大、故事無不容也と、此れ能く其の事を包容するは、乃ち其の心の大なるが故なりとの意なるが、俞樾は曰く事は傳と通じ、傳は立なり、事心とは立心なり、「郭注」の如きは是れ心足以容事の義にして、事心にはあらず、「呂氏春秋」の論人篇にも事心乎自然之塗」とあり、事心を以て連文と爲せる證とすべしと、中山城山曰く事恐らくは爲の誤なり、爲の字は心之大の三字を管すと、〔沛乎甚爲萬物逝也〕沛は流るなり、逝は往なり、萬物の歸往する所と爲るを謂ふ、岡松甕谷曰く爲萬物逝は與萬物逝なり、與は爲と通ず、說、王引之が「經傳釋義」に見ゆと、〔不拘一世〕拘は拘止なり、〔顯則明〕明は彰なり、「郭注」に不顯則默而已とあり、乃ち本句の反面よりの解釋にして、顯とは智を顯すことを謂ふ、

夫子曰、夫道淵乎、其居也、漻乎其清也、金石不得無以鳴、故金石有聲、不考不鳴、萬物孰能定之、夫王德之人、素逝而恥通於事、立之本原、而知通於神、故其德廣、其心之出、有物採之、故形非道不生、生非德不明、存形窮生、立德明道、非王德者邪、蕩蕩乎、忽然出、勃然動、而萬物從之乎、此謂王德之人、

【大意】上段と同じ、而し此の段專ら道の字に就いて、其の意義を洗發す、宣穎曰く描寫道字、如涼月空霄清光滿映、從字句之外直透視出來と、

【通釋】尙ほ道の體段を詳論せんに、夫子又曰く夫れ道てふものは淵の深きが如くにして、其の位地は

之れ卽ち天なり、自爲的に言はずして無爲的卽ち他動的に凡て物事の來れるに因り之に應ずるときは、天理を能く呑み込み會得したるものにて、之れ卽ち德なり、尙ほ其の德に就いて小分して云へば、其の心能く公平にして偏頗なく、博く人を愛し、物に都合宜しく爲せる點は、之れ仁と謂ふ、萬物萬形にして種々同じからざる中に就いて、之を自然の儘に任かして同一視する點は、之れ大と謂ふ、行ひ方は和光同塵にて、崖異とて高く突き立ちて人に異なることを爲ざる點は、之れ寬と謂ふ、萬物萬形各〻同じからざること有る點は、之を富と謂ふ、さて以上の如く德に、又內譯あり、而して之を明らかにし行ふ上に於て言へば、乃ち此等の大德を善く執り成して行くを之れ紀と謂ひ、德の成就したるを之れ立と謂ひ、道に循ひて行ふ、之れ備と謂ひ、外物を以て己が志を挫かざるを之れ完と謂ふ、さて此の十箇の名目の義を明らかにするものは、誠に韜乎と凡てを包括して其の私心を洗ひて道を收め容るゝことの大いなるや、又沛乎と益んなるかな、其の萬物と共に逝きて活動することや、左樣なる人は黃金を山中に藏め、珠玉を淵底に藏め貨財を貪らず、貴富に近かず、卽ち外物を以て一身を累さず、長壽を樂まず、夭死を哀まず、通達を榮譽とせず、困窮を醜惡とせず、卽ち壽夭窮達は一切打ち忘れて、一世の利益を拘へ止めて、己れ一個の私分と爲さず、皆公共的に萬物の自然に任かし、天下に王となるを以て、己が居り場處の顯榮とも思はず、卽ち一身の榮譽を覺えず、又若し顯榮なるときは公明にして、決して曖昧なる行爲をなさず、凡て物我の隔てを忘れて、萬物を一府と心得、深く自然變化の道理を悟りて、死生を同狀と心得たるものなり、

【解義】〔夫子曰〕夫子は司馬は莊子なりと云ひ、又老子なりと云ふ、中山城山は下文に夫子問於老聃の文に徵して、夫子を孔子なりと云へり、「宣注」亦同じ、〔不可以刳心焉〕刳は去なり、洗なり、「成疏」に法道之無爲、洗去有心之累とあり、〔無爲爲之謂天〕成疏に率性而動、天機自張とあり、此れ人の事を行ふや、無爲的に自然に順ふときは、自ら天道に叶ふとなり「辨正」は言天得之則爲天、無爲爲之、指得之之實と云へり、此れ天は無爲的に動きて天となるとなり、〔無爲言之之謂德〕無爲的に言ふときは自然

以下之に傚ふ〔記曰通於一云云〕記は書の名、又、老子所作と釋文に見えたり、蓋し、古書の文句なり、通於一とは一は卽ち天を指す、上文に技兼於事、事兼於義、義兼於德、德兼於道、道兼於天とあり、宜く參すべし、〔無心得而鬼神服〕無心於得とは陸樹芝曰く、無心於必得なり、卽ち自然の功に任かして是非に得たしと思はざること、王先謙は曰く以無心得者無不服也と、今前説を用ふ、

夫子曰、夫道覆載萬物者也、洋洋乎大哉、君子不可以不刳心焉、無爲爲之、之謂天、無爲言之、之謂德、愛人利物、之謂仁、不同同之、之謂大、行不崖異、之謂寬、有萬不同、之謂富、故執德之謂紀、德成、之謂立、循於道、之謂備、不以物挫志、之謂完、君子明於此十者、則韜乎、其事心之大也、沛乎、其爲萬物逝也、若然者、藏金於山、藏珠於淵、不利貨財、不近貴富、不樂壽、不哀夭、不榮通不醜窮、不拘一世之利以爲己私分、不以王天下爲己處顯、顯則明、萬物一府、死生同狀、

【大意】夫子の言を引きて上段の說の己が私見臆說に非ることを見めす、

【通釋】尙ほ此の義に就いては、昔し孔夫子は語りて曰へらく、夫れ道と申すものは廣大無邊にして、天地萬物を載せて包含せるものなり、誠に洋々乎と水の盈ち盛なるが如く、大いなる者なるかな、されば道を學ぶ君子は、先づ己が心を刳うて悉く私欲を去らざれば、道の廣大なるを容るゝこと能はず、就いては請ふ道の內容を說かん、他働的に自然に爲すものは

身分を觀察して、與奪を決するときは上たるべきは上と爲り、下たるべきは下と爲りて、君臣の義は明らかなり、道に依りて人の才能を觀て、優劣各々其の處を得るときは、天下の官職は治まり、道に依りて泛く事物を觀るときは、皆各々萬物に應接すること備はりて困窮せず、蓋し道の功效や概ね此の如し、されば人主が眇たる一身を以て、其の念が天地に通ずるものは、道を能く身に合點會得したる德なり、萬物に宜く行はれて差し障りなきことは道なり、上の能く人民を治むるものは禮樂刑政等の事なり、能く其の事を成熟して習へるものは技藝なり、而して技藝は事の中に兼ね統べられ、事は義の中に兼ね統べられ、義は德の中に兼ね統べられ、德は道の中に兼ね統べられ、道は天の中に兼ね統べらる、乃ち何に事をも推し尋ねて行かば、皆な無爲なる天に歸一するなり、されば古への天下の人々を畜養する者は、無欲にして何の野心も無く、而かも天下は滿足し無爲にして何の行動をも爲さず、而かも萬物は自然に風化し、淵靜として奧床しく靜かにして、而かも百姓は落ち付き定まると云へることとあり、又古き記錄に云へり、大根源たる一に通じ曉れば、餘の萬事は悉く畢はり、物を得んとするに心なく、即ち無慾なるときは能く鬼神の心に叶ひ、氣に入りて彼は我に服從すと、況や我が同類同感なる人に於てをや、其の心服するや復た論を俟たず、

【解義】〔天德而已矣〕天德の二字は前段の君原於德、而成於天の意を承けて云ふ、〔以道觀言〕道は天地萬物自然の理を謂ふ、即ち上句の無爲なり、觀は依りて考察し、道に合へば取り合はざれば舍つること、又天下の君位自から正くして億兆聽從することを謂ふ、「郭注」は曰く無爲者自然爲君と、〔以道觀分〕分は職分なり、「郭注」に各當其分無爲位上、有爲位下と、前篇に無爲而尊者天道也、有爲而累者人道也、主者天道也、臣者人道也と宜く參看すべし、〔行於萬物者道也〕「宣注」は道は蓋し義の字の訛ならんと爲せり、藤東畡は曰く上の通於天地者德也の德と宜く位を易ふべしと、〔能有所藝〕藝は藝術として習へることを謂ふ、「通義」に曰義即藝、就心曰義、就事曰藝と、〔技兼於事〕兼は統なり、支配する義なり、乃ち技藝は事の爲めに支配せらること、

の主宰者は人君に在り、而して人君は至一なる道徳に本づきて天然の道理に相叶へる點に於て成就して、遂に人民の主となれるなり、此の如く道と申すものは天地人物の根原にして、神妙不可思議なるが故に之を名づけて玄と曰ふ、

【解義】〔天地雖大云云〕此れ道に就いて云ふ、〔萬物雖多云云〕此れ徳に就いて云ふ、〔故曰玄〕「老子」に同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門とあり、「王注」に玄冥也と云へり、蓋し玄の色たるや、黒中に赤を掲げ、一色か二色か識別すべからず、故に有無混同して名狀すべからざるを譬へて玄と曰ふ、「宣注」に曰く玄者天地之根也、卽一之所在、均之所出也、後面若干文說無心無爲、都發此一個(玄)字と、

古之君天下、無爲也、天德而已矣、以道觀言、而天下之君正、以道觀分、而君臣之義明、以道觀能、而天下之官治、以道汎觀、而萬物之應備、故通於天地者德也、行於萬物者道也、上治人者事也、能有所藝者、技也、技兼於事、事兼於義、義兼於德、德兼於道、道兼於天、故曰、古之畜天下者、無欲而天下足、無爲而萬物化、淵靜而百姓定、記曰、通於一而萬事畢、無心得而鬼神服、

【大意】上段を承けて無爲は卽ち天德に順ふ所以を說く、

【通釋】されば古への天下に君たる聖王は無爲にして自然に順へるが、卽ち是れ上に述べたる天德とて、德の天と合一したるものに外ならず、故に凡そ事を爲すや皆な道を以て旨と爲す、卽ち道に依りて言語を觀察して取捨するときは、天下の君主は法令を出だすこと正しくして、其の職に適ふべし、道に依りて

宣穎曰く崔瞿誤認治則能善人心、却不知治正是攖人心、老子說來其流弊遂至不可救、此一段所以痛駁治字之害處也、黃帝一問、廣成子不取其治天下、而告以治身、雲將數問、鴻蒙不取其治人、而語以心養、此二大段所以發明在宥之微處也、夫在宥豈一味廓落而已、後二大段（世俗之人及び賤而不可不任の二段）又用己意發明、一反一正と、

名言

至道之精、窈窈冥冥、至道之極、昏昏默默、無視無聽、抱神以靜、形將自正、

必靜必清、無勞女形、無搖女精、形乃可以長生、

天地有官、陰陽有藏、愼守女身、物將自壯、我守其一、以處其和、

愼女內、閉女外、多知爲敗、

大人之教若形之於影、聲之於響、有問而應之、

覩有者昔之君子、覩無者天地之友、

天地第十二

天地は篇首の二字を取りて名づく、本篇の要旨は道の本原は天より出で固より形而上にして、聲の聞くべきなく、臭の嗅ぐべきものなく、唯だ玄なるのみ、故に人須らく無心無爲にして始めて能く道を知ることを得べし、決して一毫の機巧をも用ふべからずと云ふに在りと、是れ宣穎の說なるが、先づ我が心を獲たり、宣又云ふ、此篇是散散遂段夾敍將去と、

天地雖大、其化均也、萬物雖多、其治一也、人卒雖衆、其主君也、君原於德、而成於天、故曰玄、

【大意】人君の天均に則りて、一德を立てざる可からざることを言ふ、

【通釋】凡そ事物は皆統一に歸するものなり、彼の天地は如何に廣大なりと雖、其之を化し行くことは均く自然に適順するにあり、萬物如何に多數なりと雖も、其の治まりて條理整然として育ち遂ぐることは至一なる德に在り、人民如何に衆多なりと雖も、其

然りと、予は謂らく此の段恐らくは下文天地篇の文辭の錯簡せしならんと、

【備考】 本篇の大意は、君子の天下に臨むは、もと其の本意にあらず、種々の事に迫られ、已むを得ずして然るなり、故に無爲を主として、衆民を在宥するを德と爲し、別に天下を治むるを以て心と爲さず、されば天下の民は其の性淫せず、其の德遷らず、民の上たる者喜怒平らかにして、賞罰も中る、蓋し天下の自治に因て、爲治の勞なければ、民從ひ易くして法は撓れざるなり、後世の天下に君たる者は、其の世を輔け民に長たる要を失ひて、專ら賞罰を以て事と爲し、上には儒墨曾史の是非あり、下には桁楊桎梏の拘制ありて、爲政者は其の勞に勝へず、民も亦手足を措く所なし、然るに猶是仁義聖知を以て天下の情を得るに足ると爲し、之を尊び之を惜み、家々傳へ國々效らうて、而も其の民を撓すの具たるを悟らず、されば今や斷然悉く擧りて之を絕棄せんか天下の寄託する所、淵雷の發見する所の者是に在る有りて、國政は人心を槍攘するに至らず、人心は蠱壞に至らず、從容無爲にして、萬物の吹噓鼓舞に任ずるときは、それにて事足れり、又何ぞ天下を治むるを爲さんやと、是れ首段の大意なるが、次ぎに崔瞿の問と老聃の答とを掲げて、爲治者の罪は人心を攖するに在りて、此れ乃ち桁楊桎梏の自て來れる所にして、桀跖の利を爲す所以の者なることを明らかにせり、されば黃帝の道を空同に問ふや、廣成子は告ぐるに神を抱き形を正くして淸靜長生の要を以てす、蓋し身は本たり家國之に次ぐ、未だ身治まり而かも國亂る者は有らず、故に今の天下に君たる者能く力めて廣成子の言を行はゞ、則ち三代の治復し難からず、天地を取り陰陽を官することは皆吾が無爲中に在り、此れを在宥の道と爲し鴻蒙の雲將に告ぐるに亦體を墮し、聰を黜け、根を守り、離れざるを以てす、此れを治身の道と爲すなり、其の篇末に君臣禮法を歷敍して殆ど遺すなし、又天道人道の分は有爲無爲の別に在りて相去るや倖からざるが如しと雖へども、其の心に根ざし事業に見るは一なり、特に以て君臣の分を表し其の當さに爲すべき所を正たすのみ、老子曰く公乃王、王乃天、天乃道と以上は宋の褚伯秀が本篇の總論なるが、全篇の概旨を通覽するに便なれば今譯載して參考となす、

ざることを謂ふ、〔一而不可不易〕一は純一なり、易は音「イ」、簡易なり、道の眞意は純一なれども、其の義は簡明にして容易ならざるときは行はる可からざるを謂ふ、又一説には曰く易は音「エキ」、變易なり、道は本と共に由るべき者なれども、唯だ單一なるのみにして自在に變易せざるときは、亦眞の道に非ざるを謂ふと云へり、〔成於德而不累〕累は瑕なり、「ワヅラヒ」と訓ず、善く智德を成就して瑕累なきを謂ふ、林希逸は曰く不累、不累積、以爲高と、即ち己の人格を成就することは德に在れども、必しも強ひて累積して世の企て及び難き過高なる事を務めずとなり、此の説に依るときは、此の句は前文の中而不可不高者德也と互に矛盾せり、是れ莊子の言もと詼謔的にして一律にすべからざる所以なり、〔薄於義而不積〕莊子は老子に道廢而德、德廢而仁、仁廢而義と云へるが如く、亦共に義を以て輕しと爲せり、故に義は物事に就きて時と處とにより行はざる可からざるも、薄んじて積み累さねずと云へるなり、乃ち義は全く一時的都合に要するものにて時過ぐれば忘るべきを謂ふ、「成疏」に先王蘧廬、非可實重、已陳芻狗、豈積而散とあり、「辨正」は曰く薄風雷相薄之薄、依泊也、乃不以爲己有、而不屑其餘也と、此の説に依れば、薄於義とは義に密接して行ふなり、餘義は前説と同じ、〔物莫足爲〕物は庶物にて、人民も含みて其の中に在り、莫足爲とは骨折りて務むるに及ばずとて、乃ち上文に不可不任なり、不可不因なりと云へるに反映して、物の卑賤取るに足らざるを謂ふ、〔而不可不爲〕骨折りて務めねばならずとて、乃ち上の不可不任なり、不可不因なりの義を指して言ふ、〔無自而可〕自は從なり、行き先き何れも不可となり、「郭注」に曰く不能虛己以待物、則事事失會と、〔有爲而累者〕累は係累なり、事の繁雜にして係累多きこと、按ずるに上段の世俗之人皆喜人之同己云云より以下の文章、之を莊子の他文に較ぶるに頗る卑弱にして、其の手筆に似ず、朱得之曰く玩其詞氣義理、或東漢已後擬莊者、意以莊文鄙事法、而薄仁義、若爲之補過耳、文辭平易、與時文不遠と、宣穎は賤而不可不任云云の一段を評して曰く、此段意膚、文雜、與本篇義不甚切、不似莊子之筆と、王先謙も又曰く案宣疑是也、然郭象有注、則晋世傳本已

ず、時と場合とによりては權道を取りて常義に違へるが如き跡方あり、擧動身體等禮誼に順うて爲せども、是れ又時と場合とによりては必しも諱み避けざることあり、事柄に接するときは謙遜すべきも是れ又事體に因りては必しも辭退せず、法律を以て取り揃へて如何に嚴重になせども餘り干渉して紛亂には至らしめず、民を恃みて輕侮せず、物に因り順ひ、何事をも物の自爲に任かして棄て去ることを爲さず、要するに物は宜く自然に任かすべくして、人爲を以て彼れ此れと手を出だして爲すべからず、而かも又一方より云へば、是非に或る程度までは人の力を以て爲さゞる可からず、卽ち能く注意して天然と人作との調和を執るこそ尤も必要なる事柄なれ、蓋し天然の理を明らかに知らざる者は德に於て未だ純全ならずして雜駁なるなり、道に通達せざるものは自りて進みて可なることなく、適ま踐み出たすときは直ちに迷ふべし、道に明らかならずして昏暗なる者は誠に悲むべきかな、抑も全體何をか道と謂ふか、天の道あり、人の道あり、其の別如何とならば凡て物事を爲すこと無く、靜かにして尊き者は天道なり、物事を爲して累ひを生ずる者は卽ち人の道なり、之を人倫上にて云へば主君の職務は天道なり、無爲にして靜かなればこそ神聖として尊き所以なり、臣の職掌は人道なり、爲すことあり、煩累の多きは臣子當然の責任なり、左れば均く道とは云へども、天道と人道と其の相互に離れ去ることは遠きなり、注意して察せざる可からざるなり、

【解義】「賤而不可不任」任は身を以て之に任すること、賤とは道より物を觀たる辭にて、卽ち物は道より賤けれども人に於ては亦身を以て物に任し當らざる可からずとなり、「通義」に曰く「此段始於任物因民、卽貴以賤爲本高以下爲礎（老子に見ゆ）之義」と、「匿而不可不爲」匿は藏なり、人事の細屑なるものは世に顯はれずとて隱藏するものなれども、打ち舍て置くことは不能なることを云ふ、「節而不可不積」節は節度なり、「ホド」と訓ず、禮義には或は文あり或は節ありて其の宜きに叶へるを貴ぶことなれば、節すると共に、亦一方には積まざるべからざるを謂ふ、「中而不可不高」德は中庸を尊ぶことなれども、亦其の德を養成するに於ては自から高尙ならざる可から

可、不明於道者、悲夫、何謂道、有天道、有人道、無爲而尊者、天道也、有爲而累者、人道也、主者、天道也、臣者、人道也、天道之與人道也、相去遠矣、不可不察也、

【大意】 上段既に獨有の至貴たるは合乎大同に在りて、總べて己を忘れて衆に因るが故なることを言へり、本段は乃ち又其の旨を承けて衆に因るの實論を示せしなり、

【通釋】 凡て天下の事物、何れも各々定まり居れるなり、賤くとも任かして從はざる可からざる者は物即ち是れなり、地位卑くとも因りて順はざる可からざる者は人民なり、即ち物と民とは卑賤なりとも因り順うて任かさざるときは、亂を生ずるなり、我が前に匿れて見えざれども、一旦著はれ起りたるときは是非に爲さゞる可からざる者は事なり、精微なる道理より觀れば麤雜なれども、是非に陳べ說かざる可からざる者は法制なり、人情に遠ざかるとも是非に居らざる可からざる者は義なり、餘り親しく近づきて人情に狗ひ過ぐるとも廣めざる可からざる者は仁なり、節目箇條は繁多なれども、多く積まざる可からざる者は禮なり、能く其の性に中り順へども高尙ならざる可からざる者は德なり、道理は純一なれども、實行上易くせざる可からざる者は道なり、其の功效神妙なれども爲さざる可からざる者は天然なり、即ち如何に我が性に順ひ叶ふとも、卑劣なるは德に非らず、純一なる理といへども難行の事は道にあらず、如何に神聖なれども是非に働きて爲さゞる可からざる者は天なり、是れ皆本來極り切りたる自然法なり、されば聖人は此を鑑みて、天道の自然なるを觀るも、人爲的の工夫を出だして、助くるをなさず、身の德を成就するも過言の行を積み累さねて、人の及び難きことを爲さず、道理より事を割り出だして取扱へども、謀計策略を雜へず、仁と常に出逢ひて合ふことを務むるも、必ずしも之を唯一の道とは恃まず、凡て事を爲すは義に遵ひ由らざるべからざるも、必しも義を積み累さねて凡てが盡く義に叶ふを務め

撓自動也、提挈萬物、使復歸自動之性、卽無爲之至也と解せり、此に依れば、汝等萬物を提げ持ちて、天然自動の本性に戻し歸さんとするなり、「通義」は曰く挈指神、就天地公共者言、汝指形、就一人之自有者言、適往也、復來也、之猶於也、撓撓、世俗之擾擾者、此句猶佛氏言終日背負死屍走來走去也と、乃ち精神と形體を持ち運びて世俗の紛紛たる間を往來すとなり、今姑く後説を用ふ、〔出入無旁〕旁は傍と同じ無旁とは依り傍ふ可き物のなきこと、獨立獨歩の意味なり、〔與日无始〕「成疏」に與日俱新、故無終始とあり、〔惡乎得有有〕下の有は羣有なり、萬物を謂ふ、上の有は無の反對なる有なり、有有とは萬物として見認むることなり、「成疏」に已既無矣、物焉有哉と云へり、〔頌論形軀〕頌は頌贊なり、論は論述なり、頌論とは乃ち批評を爲すこと、〔合乎大同〕大同は大道に合同することを言ふ、〔大同而無己〕而は則と通ず、

賤而不可不任者、物也、卑而不可不因者、民也、匿而不可不爲者、事也、麤而不可不陳者、法也、遠而不可不居者、義也、親而不可不廣者、仁也、節而不可不積者、禮也、中而不可不高者、德也、一而不可不易者、道也、神而不可不爲者天也、故聖人觀於天而不助、成於德而不累、出於道而不謀、會於仁而不恃、薄於義而不積、應於禮而不諱、接於事而不辭、齊於法而不亂、恃於民不輕、因於物而不去、物者莫足爲也、而不可不爲、不明於天者、不純於德、不通於道者、無自而

人も本來は無一物にして、唯だ外方より問ふものが有りて之に應へて、其の心に懷ふことを言ひ盡くして、天下衆物の相手となるなり、其の情況を云へば無嚮とて一と處のみにて無く、行く先きに居り、無方とて一方のみで無く總ての方面を行りて、決して一處一事に拘泥停滯せず、汝ち達の形を挈へ持ちて、此の撓撓と紛擾せる世の中に適きつ復りつして、端なく窮りなき場處に遊び居て、出入に傍ひ倚るべき物なく、日と倶に新たにして何時に終ることもなし、即ち申さば獨立獨行して千變萬化何頃より始まり、何頃に終ると云ふこと無し、其の形體の活動振り、即ち其の身の行爲を評論せんに、誠に一點の障り無く、大同とて衆人と大いに同じき點に於て合一せり、大同なるときは復た自他の區別を爲して自己の考へなし、自己の考へ無きときは、惡くにか形ち有る萬物有りと見認むるを得んや、乃ち自己も無きと同時に物も無きなり、然るに此の萬物の有を有と覩て、之を用ふる者は昔しの君子即ち三代の王者の如きが是れなり萬物無きことを觀て無と見認めたるもの、萬物の造化する天地と同等の地に立ちて互に朋友たり、是れ他に無くして、我れ獨り有せる天德より名けて至貴と云へる所以なり、

【解義】〔聲之於嚮〕嚮は向と同じ、又嚮は響と相通用す、應帝王篇に嚮疾强梁の嚮を響と解せると同じ、形聲の二句共に其の敎の外より來れる物に相應して起り其の間に異同を爲さざることを喩ふ、〔爲天下配〕配は匹なり、先づ來りて大人の心を感ぜし物を主人と見立て、來れる外物に心を感ぜし大人を配匹に見立てゝ云へるなり、乃ち天下の物に對して各々相當の相手と爲ることとなり、〔處乎無響〕無響は無聲なり、「成疏」に處ㇾ寂也、無ㇾ感之時、心如二枯木一、寂無二影響一也と云へり、「通義」は響は嚮と通ず言二居無一ㇾ不ㇾ在也と解せり、即ち必らず何れに向ふとも一定せざる場處に居るとて、苟も往く先き何れにも居ることなり、二説孰れも通ず、〔行乎無方〕方は方角なり、無一定の方角に行くとて、物に應じて變化窮りなきことなり、〔挈汝適復之撓撓〕挈は持なり、此の句は古來頗る諸家の解を費せども皆終に顯明ならず、疑らくはもと脱誤あるならん、今姑く一二説を摘擧せん、「郭注」に依れば挈ㇾ汝適復二之撓撓一と讀みて、撓

三王は聖知仁義を天下を治むる利器となせり、今徒に此れに泥みて反りて其の己が身を喪ふ大患たるを知らざるを謂ふ、〔幾何僥倖云云〕幾は豈と通ず、豈は何なり、幾何は豈何と同じ重語なり、「成疏」に曰く未嘗不身遭殞敗萬不存一、故曰幾何と、此れ本文を彼の僥倖にして而かも人國を喪はざる者は幾何かあるやと詰問せる辭に見たるなり、亦通ず、〔一不成而萬有餘喪〕「成疏」に依れば、其の成るものは一つも無くして亡ぶるものは其の數甚だ多くして敗亡に餘りありとなり、〔不可以物物〕「郭注」に依れば、大物なればとて有せる土地一つの物と思ふときは、既に己が心は土地其物に動され奪はるゝなり、故に物を物と爲す可からずして能く其の外に超出すべしとなり、〔而不物故能物物〕己れ能く物の外に超出して、始めて多く物を物として自由に用ふることを得べしとなり、「通義」に曰く有土大物也、有而不與焉、斯可以物天下之物、若執而有之爲物役矣と、兪樾は上句の不可以物を一句とし、物而不物を一句と爲せり、此の說に依るときは大物を有つ者は以て之を物なりと思ふ可からず、斯る大物をさへ別に大物と思はずして始めて能く物を物として利用することを得べしとなり、

大人之教、若形之於影、聲之於響、有問而應之、盡其所懷、爲天下配、處乎無響、行乎無方、挈汝適復之撓撓、以遊無端、出入無旁、與日無始、頌論形軀、合乎大同、大同而無己、無己惡乎得有、覩有者、昔之君子、覩無者天地之友、

【大意】上段を承けて獨有の至貴たることを明らかにす、

【通釋】何を以て獨有の人を至貴と謂ふかと尋ねんに、己獨り大德ある人の敎へは宛かも形と影と聲と響との關係あるが如く、乃ち影は形の大小に隨ひて映り、響は聲の高下に隨ひて應ふるものなるが、今大

全く他人の國を以て萬一の僥倖を求むるなり、豈に何ぞ僥倖を以て國を治めて、其の國を喪はざる者あらんや、左樣なる人にして能く他人の國を保存することは、萬分中の一にも無し、而して其の他人の國を喪ふことは、一事が成らざるときは外の萬事は十分過ぎ喪亡することあり、然るに悲いかな、土地を有てる國君たる者は、其の事を知らざるは、誠に氣の毒なる次第なり、全體土地を有てる者は、卽ち貴且富みて世界の大物を包有せるなり、世界の大物を包有せる者は、宜く超然として衆物の上に立つべく、而かも衆物を己と同じき物と視做して、相抗敵すべからず、誠に此の如くにして乃ち始めて能く衆物を吾が物と爲して主宰することを得るなり、さて此の衆物を物として主宰する者は、物外に超越して、衆物に混同するに非ることを明らかに知れる者は豈獨り僅かに能く天下の百姓を治むるのみならんや、尙ほ上進して六合の中に出入し、九州に遊び、何人も及ぶ能はず、己獨り往き獨り來りて、實に世界無雙天下無敵の神人たり、是れぞ名づけて外人に能はずして己獨り能くすることなれば、獨有と謂ふなり、此の獨有の人は何人も及ぶもの無くして、百姓の尊戴する者なれば、是れぞ至貴卽ち絕對に貴きものと謂ふ、

【解義】〔以出乎衆爲心也〕「成疏」に依れば、必らず己が功名を顯はし、羣衆に超出せんと欲するなり、「宣注」は言己超出於衆、皆當從己也と云へり、今其の說を用ふ、〔曷嘗出於衆哉〕「郭注」に衆皆以出乎衆爲心、故所以爲衆人也、若我欲出乎衆、則與衆無異、而不能相出矣とあり、此れ乃ち己獨り衆人に超出せりと思へるは、世間衆人の考へ皆同く然り、故に唯以出乎衆人爲心者は、己も亦同じく衆人の意見と一にして超越する者と謂ふ可らずとなり、〔因衆以寧云云〕「郭注」に依れば因衆以寧を一句とし、所聞不如衆技衆矣を一句とす、乃ち其の意は凡そ事は衆人に因りて爲すときは安寧なり、何んとなれば己れ如何に賢なりと雖も、一人の聞見の力は終に衆人の技能の多きに如かざればなりと云へるなり、「釋文」もまた因衆人之所聞見、委而任之、則自寧安と云へり、王先謙は曰く、並無獨見、但因聞衆論、遂執一而安之、則反不如能集衆技者之信爲衆矣と、〔此攬乎三王之利云云〕攬は取なり、用なり、

如衆技衆矣、而欲爲人之國者、此攬乎三王之利、而不見其患者也、此以人之國僥倖也、幾何僥倖而不喪人之國乎、其存人之國也、無萬分之一、而喪人之國也、一不成、而萬有餘喪矣、悲夫有土者之不知也、夫有土者、有大物也、有大物者、不可以物物而不物、故能物物、明乎物物者之非物也、豈獨治天下百姓而已哉、出入六合、遊乎九州、獨往獨來、是謂獨有、獨有之人、是之謂至貴、

【大意】己が私見を張りて天下を治めんとする者は天下公衆の心に因りて自然の治に任するに如かざることを言ひ、以て在宥の微旨の存する處を示すに在り、

【通釋】世間の人々は皆共に他人が己と意見を同くするを喜びて、他人が己と意見を異にするを惡めり、然しながら己の意見に同じきを欲し己の意見に異なるを欲せざる事は、何に故かと云へば、己が他の衆人より超出すれば、衆人は當さに己に從ふべしと心に考へ思へばなり、さて彼の衆人より超出するを以て、心に思ひ考ふる者は矢張り衆人と差したる違ひなく、何ぞ嘗て衆人に超出することを得んや、何れも特別抜き出てたる所見もなく、但衆人の論議を聞くに因りて、遂に其の聞ける所を固執して其の義に止り安んずることなれば衆技卽ち各々衆人の所長を集むるの信に衆議たるに如かず、然るに唯だ衆論を壓服したる己が獨斷の見を以て、他人の國を治めんと欲する者は、此れ徒に昔し三代の王者が國を治めし聖智仁義の舊道德を以て利と爲し、而かも其の害たることを見認めざる愚なる者なり、此の如きものは

行けり、

【解義】〔意毒哉〕意は噫と同じ、歎辭なり、「郭注」「成疏」の說に依れば、毒は害なり、人を治むるは反りて人を害することの甚しきを謂ふ、「通義」は毒訓治、言有治天下哉と云へり、此に依れば毒の反訓は治なれば、噫今別に天下を治むてふ者あらんやと解して、雲將の願合六氣以育羣生と云へることが、既に根本的誤謬たるを云へるなり、今此の說を用ふ、〔僊僊乎歸哉〕僊僊は輕擧の貌、鴻蒙は雲將の執着して通放せざるを嫌ふ、故に其の輕擧して罷め去らんことを勸むるなり、〔意心養〕意は噫と同じ、心養は養心と同じ、唯心を養ふべきを言ふ、「郭注」に夫心以用傷、則養心者、其唯不用心乎と、「成疏」に曰く其術列在下文と、〔徒處無爲〕徒は空なり、處は居なり、何に事をも爲さずして居ること、〔倫與物忘〕倫は「成疏」に理也とあり、「王注」は倫は人倫(人類)と釋し、人倫庶物皆泯其迹とありて、自他共に渾て相忘れて同體の思ひを爲すことなり、〔大同乎涬溟〕涬は音「ケイ」、涬溟は天地自然の氣なり、「宣注」に與浩氣同體と、〔解心釋神〕解は解散なり、釋は釋放なり、「宣注」に解其黏釋其縛とあり、〔莫然无魂〕莫は漠と同じ、漠然は無知なる貌、魂は物を知り事を爲すを好むものなるが、今無魂とあれば卽ち何の知もなく爲も無きことなり、〔萬物云云〕云云は紜紜と同じ、繁多なる貌、「成疏」に衆多往來、生滅不離、自然歸根とあり、〔渾渾沌沌〕渾圓なる貌、卽ち知識なきこと、〔終身不離〕其の根本を離れざることにて、知識を開かざるを謂ふ、〔乃是離之〕之は道の眞にして、自然の本性を指さす、「通義」に曰く萬物紜紜、各歸其根、動極必靜、自然之理也、何容知識於其間哉、但當渾々沌々、守而弗失、知識一萌則離道矣、〔无闚其情〕闚は窺と同じ、窺ひ測るなり、

世俗之人、皆喜人之同乎己、而惡人之異於己也、同於己而欲之、異於己而不欲者、以出乎衆爲心也、夫以出乎衆爲心者、曷常出乎衆哉、因衆以寧所聞不

來物を治むると云ふことが有らんや、此れが第一謬れり、彼れ此と思はず、僊々乎と淡(アッサ)りと歸らるべし、雲將曰く吾は天道樣たる先生に遇ふことは仲々難し、今折角謁を得たれば願くは一言たりとも高敎を伺ひたしと、鴻蒙曰く噫心の養ひこそ肝要にして、一體君が左樣に奈何せんなどゝ疑ひ悶(モダ)ゆるが心の養ひを失へるなり、今汝ち徒處とて只空く居て何に事をも爲すことなくんば、萬物は吾より化せずとも、物の方から自然に化するなり、爾ぢが形體を墮して、身體手足の働きを強めず、爾ぢが聰明を黜けて一切の智慧を用ひざるときは、人類と庶物と相互に忘れて一つと爲り、隔てなく大いに涬溟なる自然の氣と同じく、卽ち己が身心共に萬物自然と合體して一團の思ひを爲し、凝り固れる心を解き、精神の束縛せらるるを釋きて、漠然として智魂なく、卽ち何等の物事をも心に覺え知ること無く、無我無宙と爲れば、萬物は云云と衆多なるが、各々自ら其の根本たる虛靜に立ち歸らん、各々其の根本たる虛靜に立ち歸るときは、何等の事を知ることも無し、さすれば渾渾沌沌と凡てが渾圓として身を終るまで離れず、卽ち其の知識を開かず、一生純樸にして終らん、然るを若し彼の小(コ)賢(ザカ)しく、何が故に宇宙萬物は斯の如く爲る道理あるかを知らんとするときは、人智の開くると共に自然の本を離れて眞情を失へるなり、されば汝ぢよ物の根本は無名にして、何の唱號も無きものなれば、今に及んで殊に其の名を問ふ必要も無し、物の根本は無情にして何の心も無きものなれば、今に及んで、殊に其の情を窺ひ知る必要も無し、然るに彼れ此れと騷ぎて詮議を務むるは豈に謬らずや、凡そ物は打ち遣りて置けば、彼れ固より自然に生ずるなり、何にも吾人が入らざる餘計なる世話を燒きて、自己の本性を殘ひ幷せて、物の眞情を傷ふに及ばんや、雲將之を聞きて成程と感じければ、鴻蒙に禮謝して曰く、誠に有り難し、天道樣よ此の我が身に降し給ふに、有難き德を以てし、我が身に敎へ給ふに靜默を以てし給ひぬ、我が躬に於て此の道理を反求して、乃今始めて之を會得(エトク)合點したり、誠に只今まで眞の有り難き道が近き我が身に在ることを知らずして、遠く外物を逐うて求めんと爲したるは、大いなる過ちなりしと、是に於て大いに滿足を表し、又再拜稽首し起ち、辭謝して

放也〕放は倣と同じ、效なり、民之放とは民に倣效せられて、手本と爲るを謂ふ、〔亂天之經云云〕自然の常則を天經と曰ひ、萬物の眞性を物之情と曰ふ、二者共に皆自然に外ならず、今既に有心故意的を以て之を治めんとするときは、是れ其の自然常則を亂だし、眞性に逆らひ、決して自然の化の行はるゝを得ざるなり、〔玄天不成〕玄は深遠不測の意なり、天道は深遠にして、測るべからず、故に玄天と曰ふ「通義」に曰く鴻蒙就箴其(雲將)失、謂汝徒多言多事、以亂天道、逆物理、敗其默默之天、故飛走草木昆蟲皆失其所、此治人之過也と、〔禍及止蟲〕蘇輿曰く止は豸と同じと、此の説に依れば、「爾雅」の釋蟲に有足謂之蟲、無足謂之豸とありて、止蟲とは有足蟲と無足蟲とを謂ふ、又一本に昆蟲に作る、「成疏」に昆、明也、向陽啓蟄と云へり、陽氣の節に向ひし時土中より出づる蟲を謂ふ、〔意治人之過也〕一本に意を噫に作る、嘆辭なり、

雲將曰、然則吾奈何、鴻蒙曰、意毒哉、僊僊乎歸矣、雲將曰、吾遇天難、願聞一言、鴻蒙曰、意心養、汝徒處無爲、而物自化、墮爾形體、吐爾聰明、倫與物忘、大同乎涬溟、解心釋神、莫然無魂、萬物云云、各復其根、各復其根、而不知、渾渾沌沌、終身不離、若彼知之、乃是離之、無問其名、無闚其情、物故自生、雲將曰、天降朕以德、示朕以默、躬身求之、乃今也得、再拜稽首、起辭而行、

【大意】前文雲將の疑惑猶未だ全く解けざるを以て鴻蒙告ぐるに先づ疑心を舍きて、何に物をも思はざるが、養心の第一秘訣なるを以てしたり、

【通釋】雲將稍〻喩れども猶未だ全く喩らずして曰く、然らば吾は之を爲すこと奈何せん、鴻蒙曰く噫元

可なるものなり、我は此の上に又何をか知らんや、卽ち我が智慧を別に働かし用ふるに及ばざるなり、雲將曰く然り、然しながら、我に於ては自ら以て己は猖狂なりと爲せども、他の人民の方からして、予が往く所に隨ひ伴て離れざるが故に、我は人民に對して致し方なく、不本意ながら、民の隨伴を許せしが、今は仲々人民に見效はれる身となりて致し方無くも之に從へり、されば何にか一言の敎へを伺ひ度しと、鴻蒙曰く天道之常經を亂だし、萬物の眞性に逆らひ、玄天とて奧深き天道の化育は成り行はれず、されば之が爲めに鳥獸までに禍を及ぼし、獸の羣り聚れるを解散し、鳥は皆夜分に鳴きて一向落ち付かず、尙ほ災害は延きて植物類に及び、草類木類まで未だ霜ふらざるに先だち落ち、禍は昆蟲とて陽明に向うて出づる蟲類に及び、凡そ天地間有らゆる物皆悉く迷惑を感ぜざるは無し、吾之を意ふに此れ全く區々の人智を弄び、小器用らしく人を治むるより起りたる過ち也、

【解義】「有宋之野」有は發語の辭、宋は國の名、今の河南省開封府に在り、「天忘我邪」雲將鴻蒙を尊敬して天と稱す、前文の黃帝廣成子を稱して天と曰へると、其の意同じ、「浮遊不知所求」浮遊は定處なく、隨意に遊涉して、係著せざることなり、不レ知レ所レ求とは必らず一所をのみ求めざるなり、「猖狂不知所往」猖狂は心の佚み遊びて物に拘らざることなり、不レ知レ所レ往とは必しも一事を目指して赴かざることなり、「遊者鞅掌以觀无妄」无妄は眞なり、岡松甕谷の說に依れば、鞅掌は「詩疏」に依れば、事煩不レ暇レ爲ニ容儀一とあり、乃ち餘り煩忙なるよりして行儀を粧ひ飾る間の無きことにて、此の處にては遊を以て事と爲し、因て道の眞意を觀察せんとして、他事に及ぶに暇あらずとなり、「宣注」に有レ鞅在レ掌言ニ出遊一也と、乃ち鞅は馬の羈絆「ムナガヒ」にて、鞅掌とは卽ち鞅が手掌中に在ることにて、此れ遊者の出行の趣を馬車に乘ずる上に就いて云へるにて、此の處は遊者出行して天地眞機の發動を觀察すとなり、二說俱に通ず、今前說を用ふ、「自以爲猖狂」此れ本とは鴻蒙と同志なりしを謂ふ、「通義」に曰く浮遊不レ知レ所レ求、數句發明、有ニ以敎一レ之、而雲將猶未レ悟、乃自陳ニ其猖狂不レ得レ已レ於レ民之狀一と、「不得已於民」民に迫られて致し方なくことを爲すを謂なり、「民之

なり、「成疏」に曰く、萬物咸稟自然、若措意治之、必乖造化、故掉頭不答と、

雲將不得問、又三年、東遊、過有宋之野、而適遭鴻蒙、雲將大喜、行趨而進曰、天忘朕邪、天忘朕邪、再拜稽首、願聞於鴻蒙、鴻蒙曰、浮遊不知所求、猖狂不知所往、遊者鞅掌以觀無妄、朕又何知、雲將曰、朕也自以爲猖狂而民隨予所往、朕也不得已於民、今則民之放也、願聞一言、鴻蒙曰、亂天之經、逆物之情、玄天弗成、解獸之羣、而鳥皆夜鳴、災及草木、禍及昆蟲、意治人之過也、

【大意】雲將の未だ鴻蒙の敎意を諒解せざるに因りて、申さねて其の招ける過失を擧げて之を警戒せり、

【通釋】雲將は鴻蒙が不知を以て答へしは反りて深意のあることを知らず、質問の要領を會得せずして止みしが、其の後ち又三年して東方に遊びて、宋國の野を過ぎしとき、恰も鴻蒙に遭へり、雲將は大いに喜び行きて、小走りに進み近づき問うて曰く、さても有り難や、珍らしや、天道樣には我を忘れ給ひしか、天道樣には我を忘れ給ひしか、我は先年扶搖の枝を過ぎしとき拜謁せし雲將なり、今又再拜稽首し、願くは鴻蒙足下に伺ひ度しと、鴻蒙曰く浮遊と申して、恰も水に浮び游ぐが如く世に處て執着せざるときは、貪り求むることを知らず、誠に澹泊無欲なりき、猖狂とて心放佚にして物に拘らざるときは、自ら往き赴く所を知らず、即ち自ら適して樂めるのみ、凡そ天地間生物の遊動する氣は鞅掌とて、紛紛擾擾として現出するものなるが、それにて無妄とて眞の自ら動く所を觀察して行くのみ、即ち天地造化が神妙なる機動を傍觀するのみ、此の上に我は何をか知らんや、乃ち凡ての事物に對し、吾が貧弱なる智慮を用ひずして

【通釈】　雲將と申す神が或る時、東方に遊びて、扶搖と申す神木の枝を經過せしとき、恰も鴻蒙と申す元氣を掌る神に出で遭ひたり、鴻蒙は今を盛りと髀を拊て、雀躍と小躍りして、此より遊びに出でんとする時なりき、雲將は之を見て惝然と氣を拔かし、贄然と手を拱きて立ち問うて曰く、御老人は全體如何なる人ぞや、而して御老人は此所に何をか爲さんとし給へるかと、鴻蒙は之を聞きながら矢張り髀を拊で雀躍して止まず、雲將に向ひ對へて曰く、予は此より遊ばんとすと、雲將因りて曰く、我不肖なれども願くは一つ伺ひ度き事ありと、鴻蒙は下方より仰ぎて雲將を熟ら〳〵視詰めて曰く、吁御免蒙りたしと、雲將强ひて問うて曰く、只今天氣調和せず、地氣は欝り結ばれて開通せず、六氣は調はず、四時の序は節あらず、全く宇宙間の氣は狂ひ亂れて居れり、因りて今日我は彼の六氣の精華を調和し、氣候を取り直して、羣生卽ち萬民を救ひ育てんとす、さて實際に之を爲す方法は如何にせば可なるか、敢て敎へを仰ぎ度しと、鴻蒙は矢張り拊髀雀躍し頭を掉り斷わりて曰く免せよ〳〵左樣なる難件は吾は存じ知らず、存じ知らずと、

【解義】　〔雲將東遊〕雲將は莊子の寓言にて假設の人なり、「成疏」に雲將雲主將也とあり、卽ち雲の神なり、〔扶搖之枝〕東海に生ぜる神木なりと云ふ、或は曰く扶搖は風なり既に逍遙遊篇に見ゆと、扶搖の枝とは風の生ずる樹木を謂ふなり、或は曰く扶搖は卽ち扶桑にて、日の出る處にある大木なりと、〔適遭鴻蒙〕鴻蒙は自然の元氣なり、又海上の氣なりとも云ふ、此れ亦莊子の假託して人と爲したるものなり、〔拊髀雀躍〕髀は一に脾に作る、股なり、「モヽ」と訓ず、雀躍は跳躍なり、「通義」に曰く猶今孩童以兩手拍兩股、且跳且行而嬉戲也と、〔惝然止贄然立〕惝然は自失の貌、贄然は不動の貌、〔叟何人邪〕叟は長老の稱なり、孟子の梁惠王篇に王曰叟不遠千里而來とある叟と同じ、我が邦の俗言に御老人と稱すると同じ、〔雲將曰吁〕吁「釋文」に亦作呼とあり、相通ず、「說文」に吁驚也とあり、「尙書」の堯典の傳註に吁疑怪之辭と云へり、〔地氣欝結〕上句の天氣不調と共に陰陽の氣降らず、亦升らざるを謂ふ、〔六氣不調〕六氣は陰陽風雨晦明なり、既に逍遙遊篇に見ゆ、〔六氣之精〕精は精華なり、〔掉頭曰吾弗知〕掉は搖

皇天、故稱曰皇、皇者中也、光也、弘也とあり、王は「字典」に王大也、君也、天下所法、又主也、天下歸往謂之王とあり、乃ち此の道を得たる者は上なるときは、其の德天地に侔しくして、皇と稱すべく、下なるとも亦能く天下の法となり、天下の歸服を受けて王たることを失はずとなり、蔡邕の「獨斷」に曰く、上古庖犧氏神農氏稱皇、堯舜稱帝、夏殷周稱王と、〔百昌皆生〕百昌は百物は昌盛なるを以て、故に百昌と曰ふ、〔入无窮之門〕上文の彼共物无窮に應じて、死生不二の理に達することを謂ふ、〔遊无極之野〕上文の彼其物无測に應じて、廣大無極なる道を樂むことを謂ふ、〔當我緡乎遠我昏乎〕緡昏の二字相通ず、「釋文」に緡泯合也とあり、自然に相合うて隙間なきことなり、當我とは我に嚮うて近づき來るなり、遠我とは我に背きて遠ざかり去るなり、乃ち人の嚮背去就に任かせて、我は一つに無心を以て之に應することを謂ふ、〔而我獨存乎〕「通義」に依れば、前段に長生を語りて、千二百歲入無窮之門とあるは、有形的肉體の長生を言ひ、此段の與日月參光、與天地爲常而獨存とあるは、無形的神の長生を言へるなり、

雲將東遊、過扶搖之枝、而適遭鴻蒙、鴻蒙方將拊脾雀躍而遊、雲將見之、倘然止、贄然立曰、叟何人邪、叟何爲此、鴻蒙拊脾雀躍不輟、對雲將曰、遊、雲將曰、朕願有問也、鴻蒙仰而視雲將曰、吁、雲將曰、天氣不和、地氣鬱結、六氣不調、四時不節、今我願合六氣之精以育羣生、爲之奈何、鴻蒙拊脾雀躍掉頭曰、吾弗知、吾弗知、

【大意】此又上章と同じく、無爲の化は、私智私功を容れずして、自然に任することを言ふ、

獨存乎、

【大意】 上意を承け、更に層進して、無爲の道は自然に契合して、此を以て神を養ふときは大小の地往くとして可ならざるは無く、且無窮の長生を精神上に得べきことを言ふ、

【通釋】 是に於て黃帝又再拜稽首して曰く、誠に有り難き敎へなるかな、廣成子よ吾は子を天と謂うて深く尊敬を致すなり、廣成子亦又告げて曰く來り進めよ、余は更に汝に語り聞かさん、全體彼の天地萬物は其の實は窮り無く存すれども、世の人々は皆な之を以て終り有るものと爲し、又其の實は際限を測ること無きも、世の人々は皆な之を以て極りあるものと爲せり、吾が此の自然道を得るものは上に於ては皇となり、下に於ては帝となり、吾が此の自然の道を失へる者は、上に於ては僅に斯の世に日月の光を見て、人竝に生きて居るが頂上にて、下に於ては死して土と爲るのみ、今夫れ凡百の昌ふる物皆もとは何れも土中より生れ出て、而かも死して復た土に返るが物の通則常態なり、然し吾は自然の道を得て是れより汝と別れ去り、窮り無く永存せる門に入り、以て極り無く廣大なる野に遊ばんとす、乃ち吾は日月と光りを竝べ、吾は天地と永久を同くし、正しく我に近づき當るときも、緡乎として善く合うて一體と爲り、我に遠ざかるときも昬乎として毫も迹方なし、斯の如く至道と一致合體するときは至道の亡び盡きざると共に、世の人々は其れ盡く死するとも、我が精神は獨り永久無限に存在せんか、卽ち長生して盡くることなきなり、

【解義】 「謂之天矣」 天とは廣成子の淸高なる道德を稱贊して、天の尊きに比して云へるなり、「彼其物無窮」 無窮は終始に就いて云ふ、「成疏」には曰く死生變化、物理無窮、俗人愚惑、謂有終始と、乃ち物理はもと死生變化窮り無きものなるを、俗人は眼前の移り易はる事に迷うて、物に始め終りありと謂ふとなり、「彼其物無測」 無測は淺深に就いて云ふ、測は說文に深所至也とあり、深さの極點なり、「成疏」には曰く萬物不測、千變萬化愚人迷執、謂有限極と、「上爲皇而下爲王」 皇と王と共に天子の稱なれども、「尙書序疏」に稱皇者以皇是美大之名、言大於帝也と、「風俗通」に三皇(伏羲神農黃帝)道德元泊、有似

治身の道を問はれたるを喜びたるなり、〔窈窈冥冥〕窈冥は深遠にして見るべからざる模樣なり、「老子」の上經に道を論じて窈兮冥兮、其中有精とあるを、「王注」に窈冥深遠之歎、深遠不可得而見、然而萬物由之、其可得見以定其眞、故曰窈兮冥兮、其中有精也と云へり、莊子の此文と互に參考すべし、〔無視無聽〕以下四句は實的の身を治むるよりも先づ虛的精神を鍛錬すべきことを言へるなり、〔必靜必淸〕以下三句は工夫を凝らして精神を鍛錬して、虛無の道理に合はすべきことを言へるなり、〔目無所視〕以下三句は形體を鍛錬して、虛的の精神の靈活なるに合はすべきことを言へるなり〔形乃長生〕上文既に乃可以長生とありて、又此の語あるは、前者は精神に就いて云ひ、後者は形體に就いて云へるなり、乃ち以上は身を治めんとすれば先づ心を錬るべきことに就いて、其の用功の次第を示したるなり、〔我爲女遂於云云〕以下四句は我が今日の此言は汝ぢが爲めに直ちに陰陽の至極なる處を示し盡くして、女ぢと共に同く、大虛の本原即ち道の眞理に立ち返らんと欲して蘊底を傾けて述べたることを云へるなり、〔天地有官云云〕官は官職なり、藏は收藏なり、「通義」に曰く大抵天地陰陽萬象、各々有其職、不必參之以我、但愼守女身、如上所云、民人各得其養、羣生自得其遂矣、是以我惟守此一之虛、而與物無乖戾、故久而不衰也と、

黄帝載拜稽首曰、廣成子之謂天矣、廣成子曰、來余語女、彼其物無窮、而人皆以爲終、彼其物無測、而人皆以爲極、得吾道者、上爲皇而下爲王、失吾道者、上見光而下爲土、今夫百昌皆生於土而反於土、故余將去女入無窮之門、以遊無極之野、吾與日月參光、吾與天地爲常、當我緡乎、遠我昬乎、人其盡死而我

久にして天壽を全くし得べきや、其の尊說を伺ひたしと廣成子聞きて驚喜し、蹶然と飛び起きて曰く、誠に斯くありてこそ流石に聖人なり、如何にも其の問ひは至極尤なる質問かと思はるゝなり、先づ子よ此の方へ近く來られよ、いざ吾は女ぢに至道を語り聽かさん、さて至極の道の奥意と申すものは、窈窈冥冥と奥深く遠くして容易に求め難く、昏昏默默と昏く靜かにして、俄かに至り易からず、されば先づ身を治むることを含いて、心を鍛錬せよ、卽ち目を以て視る無く、耳を以て聽く無く、肉體の作用は姑く舍きて精神を大切に抱持して靜かにして騷がざるときは、其の形ち卽ち身は將に自然に正しからんとす、因りては必らず心を靜かに、必らず氣を淸らかにし、女ぢが形體を苦しめ勞する無く、汝ぢが精神を搖かし使ふこと無きときは、乃ち女ぢが心は健全にして乃ち長生すべし、夫れ斯の如くにして目に何物をも見ず、耳に何に事をも聞かず心に何等を知ること無きときは女ぢの精神は自然に汝が形體を守護せんとす、此の如く汝ぢの形體は安全なるを得て長生すべし、故に願くは汝ぢが內部卽ち精神を愼み養うて、女ぢが外向き卽ち身體の活動を閉止せよ、餘り多智を恃みて思慮身體を過度に勞するときは失敗を爲すなり、我は汝ぢが爲め大いに明らかなる處の上に進み、彼の至極せる陽氣の本源に至らん、亦汝ぢが爲めに窈冥の門とて靜かに奥深き門口、卽ち深淵靜寂なる道理の根本に入り、彼の至極せる陰氣の本源に至らん、卽ち汝が爲めに道の陰陽表裏を問はず、知り得る限り言ひ得る限りの處を語り聞かさん、然しながら其の實今更に吾が說き聞さざるも、元來汝ぢが本身に備はれるなり、全體世界の組み立ては至妙至神にして、天地には各々役目あり、陰氣陽氣は亦相互に藏め陰は陽に根ざし、陽は陰に因みて生ずるなり、我は其の淡泊純一なる處を能く守りて、其の天地陰陽の調和せる場處に居れるが故に、自ら長く健康なることを得たり、されば我は己が身を修むること一千二百歲の久きに亘り、而して吾が形ちの模樣は未だ嘗て昔し少壯時代と何等の變りなし、

【解義】〔復往邀之〕邀は音「要」、請なり、求なり、〔載拜稽首〕載は再と通ず、一本に再に作る、〔蹶然而起〕蹶然は驚きて起つ貌、黃帝の治天下を舍きて

閒居三月、復往邀之、廣成子南首而臥、黄帝順下風、膝行而進、再拜稽首而問曰、聞吾子達於至道、敢問治身奈何而可以長久、廣成子蹶然而起曰、善哉問乎、來、吾語女至道、至道之精、窈窈冥冥、至道之極、昏昏默默、无視无聽、抱神以靜、形將自正、必靜必清、无勞女形、无搖女精、乃可以長生、目无所見、耳无所聞、心无所知、女神將守形、形乃長生、愼女內、閉女外、多知爲敗、我爲女遂於大明之上矣、至彼至陽之原也、爲女入於窈冥之門矣、至彼至陰之原也、天地有官、陰陽有藏、愼守女身、物將自壯、我守其一以處其和、故我修身千二百歲矣、吾形未常衰、

【大意】　虚無自然の道に合致せんと欲すれば、天下を治むるより先づ身を治むべく、身を治むるより先づ心神を煉る可きを言ふ、

【通釋】　是に於て黄帝は退き自ら天子の位に居ながら天下を治むることを見切りて、閑靜なる特別の室を營み築き、清潔なる白き茅を席きて心身を清め、戒め、閑居すること三月ばかりして、復び空同の上に往きて廣成子を訪へり、其の時廣成子は南方に枕して臥したりしが、黄帝は下手の方に順ひ膝摺しながら進み再拜し、首を地に低げ、敬意を表し畢はりて問うて曰く、吾が夫子は至極の道に通達し給へりと承りたり、就いては敢て己が身を治むるは如何にせば長

矣、而佞人之心翦翦者、又奚足以語至道、

【大意】纔かに天下を治めんとすれば、已に天下の元氣を傷殘して、道に非れば未だ容易に至道を語る可からざるを言ふ、

【通釋】廣成子は答へて曰く汝ぢは自ら以て己れの所爲は既に道に叶へるものと爲さんなれども、仲々左樣にあらず、全體汝ぢが我に問はんと思へることは物の質朴なる處、卽ち未だ世に傷はれざる最も初生のものなり、然るに汝ちが官職に就けて働かしめんと思ふものは、物の殘ひ破れたる處、卽ち既に世に用ひられたる餘り物なり、且つ汝が天下を治むるに就いては、天地の化育に惡影響を來たし、雲氣は簇がらざる内に雨下り、草木は黄ばみて凋まざる内に、既に枯れ落ち、日月の光明は益々已に荒み昏くなれり、是れ皆な汝ぢが餘り智巧を弄び過ぐるより人和を傷ひ、遂に天地の和を失へるなり、汝ぢは佞人の心の翦翦と小さかしく、徒に齷齪として媚びを天下に求むる人なれば、又奚ぞ至極の道理を語り聽かしむるに足らんや、到底汝等は至道の解るものにあらず、

【解義】「而所欲」而は汝なり、下の而所欲官、而治天下、而佞人の而の字皆同し、「物之質也」質は形質なり、「成疏」には所問粗淺不過形質とあり、「宣注」に依れば質朴なり、「老子」に朴散而爲器とあり、朴は素質にて道の混圓として未だ物事に觸れ當らざる者を謂ふ、莊子の此の質も之と同じと看たり、今之を用ふ、「所欲官者」官は上の欲官陰陽の官にて、卽ち之を役に立てゝ使ふの意、「物之殘也」「宣注」に依れば、卽ち老子の朴散の餘にて、既に盛りを過ぎ去りし物と云ふ意なり、「而治天下」治天下の三字卽ち黄帝の病根を抉出して云へるなり、「不待族而雨」族は簇と同じ「ムラガル」と訓す、聚なり雲簇りて雨ふれば其の澤多し、簇からずして雨ふるときは、其の澤少し、此にては萬物の雨澤に浴すること少きを謂へるなり、「不待黄而落」草木の早く凋落するを謂ふ、司馬曰く殺氣多きなりと、「日月之光益以荒矣」以は已と同じ、荒は光の昏晦なるを謂ふ、「翦翦者」翦翦は淺短なる貌、又狹少なる貌、

黄帝退捐天下、築特室、席白茅、

すは反りて天下を擾亂する所以なれば、在宥を以て天下に臨むに如かざるを言ふ、天下を治むる事是れ黄帝の病根と爲す、

【通釋】　昔し黄帝立ちて天子と爲ること十九年なりしが、命令は思ふ通りに天下に行れて行屆けり、或る時黄帝は廣成子と云へる賢者が空同と云へる處に居ることを聞き、態々往きて之に會見せり、黄帝問うて曰く我は吾子が至極の道に通達し居ることを聞けり、敢て至道の精髓とは如何なるものなるかを伺ひ度し、吾が考へには何卒天地の精氣を取りて五穀の生育を佐け豐稔ならしめ、善く民人を撫養して病氣をして作らざらしめんと思へり、吾又陰陽二氣をして各々其の職掌に就きて自然の命せる掟通りに働きて獨り民人を養ふに止まらず、尚ほ進んで廣く萬物を育てしめんと思へるが、さて之を實行するには如何が致すべきものなるか、敎へを伺ひ度し、

【解義】　〔立爲天子十九年〕十は成數にして、九は盈數なれば、十九年とは永年の義を意味して云ふ、其の說は已に養生主篇の庖丁の段に見ゆ、〔令行天下〕四字是不滿之詞と宣注には云へり、乃ち餘り嚴なるが故に、人民が畏れて命令を奉ずる結果なれば、道德自然の風化より觀れば、此の如きは美事にあらずと爲すなり、〔廣成子〕蘇東坡は曰く「山經」を按ずるに、廣成子、大易の屯蒙に封を治め、日月を運行すとあり、蓋し古への賢人なりと、〔空同之上〕司馬の說に依れば北斗の下山なり、「爾雅」に北戴斗極爲空同とあり、或は曰く梁國（今の河南省）虞城東三十里に在りと、〔以佐五穀〕五穀は黍、稷、菽、麻、麥なり、〔欲官陰陽以遂羣生〕官は官職なり、遂は順なり、成なり、羣生は萬物なり、「官陰陽」とは能く陰陽を調和し、各々相戻らずして、其の作用を爲さしむることを君主が官吏を任命して其の職務を掌らしむるに比喩して云へるなり、林希逸曰變調陰陽使萬物遂生也と、「成疏」には曰く欲象陰陽設官分職也と、

廣成子曰、而所欲問者、物之質也、而所欲官者、物之殘也、自而治天下、雲氣不待族而雨、草木不待黃而落、日月之光、益以荒

仁義を叫びて天下を治めんとすとも、其の根本を匡だせば、彼の聖知が桁楊の連鎖と爲りて、益々桁楊を世の役に立たしめ、仁義が桎梏の穴や栓と爲りて益々桎梏を世に長方の物となさしめたる事は無きかと疑はるなり、又此と同時に彼の世に賢人君子と稱せらるゝ曾參史鰌の行爲が結局反動的に大惡凶暴なる桀跖の行爲の嚆矢、卽ち前驅となりたる事は無きかと思はるゝなり、卽ち詰り聖知仁義と云へる知識や道德を喧しく論ずる門戸が開けし故に、一方は其の反動が起り姦智非行を逞くして、世に罪人が多くなり、亦曾史の如き餘りに嚴格方正に過ぎたる人が出でゝ人情を矯め過ぎたるが故に、其の反動が起りて桀跖の如き大惡凶暴なる行を爲す人が出でたるものと吾は信ずるなり、故に昔し老子も寧ろ世間に聖人を絶ち亡ぼし智慧を取り棄てゝ仕舞へば、反りて天下は質樸無邪氣に立ち歸へりて、大いに治まるべしと云へり、されば天下を在宥するが宜しきか、天下を治むるが宜きか、別に明辯を用ひずして可ならずや、

【解義】〔桁楊接槢〕接槢は「成疏」に械楔也とあり、卽ち「首枷手枷のクサビ」なり、希逸曰く卽ち今の枷中の横木なり、「釋文」に接槢桎梏梁也、淮南子曰大者爲柱梁、小者爲接槢也とあり、〔桎梏鑿枘〕枘は「釋文」に柱頭枘也、鑿頭厠木、如柱頭枘とあり、卽ち鑿は穴にして、枘は穴にはめる栓なり、桎梏は必らず穴あり、之に栓をはめて、用を爲すものなり、〔桀跖嚆矢〕嚆は「字林」に大呼也とあり、「崔本」に蒿に作る、曰く蕭蒿可以爲箭と、此に依れば嚆矢は「ヨモギ」の軸を用ひて作れる矢なり、「向注」に嚆矢矢之鳴者とあり、今の響箭なり、此れ曾史の桀跖が暴虐を爲す先聲たることを謂ふ、

黄帝立爲天子十九年、令行天下、聞廣成子在於空同之上、故往見之曰、我聞吾子達於至道、敢問至道之精、吾欲取天地之精、以佐五穀、以養民人、吾又欲官陰陽、以遂群生、爲之奈何、

【大意】此又黄帝の事を引き天下を治むることを爲

【解義】〔釿鋸〕釿一に斤に作る、「マサカリ」と訓ず、鋸は「ノコギリ」と訓ず、肉刑の時に用ふる道具なり、〔縄墨殺焉〕縄墨は已に逍遙遊篇に解せり、此にては法律を謂ふ、〔椎鑿決裂〕椎は「ツチ」と訓す、鑿は「ノミ」と訓す、木に孔を穿つ器なるが、此にては刑具を謂ふ、崔譔云く肉刑故用椎鑿と、決は裂なり、〔天下脊脊焉〕脊は籍と通ず、踐籍せること、〔大山嵯巖〕大山は大いなる山なり、嵯は湛と同じ、深なり、一に大山は泰山に同じ、即ち山東省にある高山となせるは非なり、〔殊死者相枕〕殊は斷なり、決なり、誅なり、相枕は死體の相互に枕として重さぬるを謂ふ、〔桁楊者相推〕械の頸及脛を夾める者皆通して桁楊と曰ふ、「クビカセ」「テカセ」と訓ず、相推相望は其の數の多きを謂ふ、〔離跂攘臂〕離跂は足を分て力を用ふる貌、攘臂は人間世の篇に解せり、此にては俗に云ふ脚力を入れ、大腕を振て歩くことなり、〔意甚矣哉〕意は噫と同じ、嘆息の辭なり、〔其無愧而不知恥甚矣〕愧恥共に「ハヂ」と訓ずれとも、伊藤東涯の「操觚字訣」に依れば、愧は醜の字より來り、手前の見苦るしきを人に對してはづること也、恥は恥辱などゝ熟語して、もと我があしきことあるを人に知られて心にはづと思ひ耳まで赤くなること也、廉恥の恥は恥を恥ぢと思ふなりと云へり、按ずるに本文に既に甚矣哉とありて又下に甚矣とあり、上下に同義の語を用ひて上は哉の字を加へて一宕を爲し、下は甚矣と決定して云へり、史記の信陵君傳贊に有以也名冠諸侯不虚耳と既に有以也を以て起し、又不虚耳を以て結び殆ど同義の辭を始終したると、其の文法相類す、蓋亦古文の一法なり、

吾未知聖知之不爲桁楊接摺也、仁義之不爲桎梏鑿枘也、焉知曾史之不爲桀跖嚆矢也、故曰絕聖棄知而天下大治、

【大意】今日の如き大亂を釀生したるは、もと聖人の智を好み、人心を攖亂せしに由れば、之を追咎せざるべからざるを言ひ、以て天下は宜く在宥すべく、之を治むべからざる意を申明せり、

【通釋】吾より觀るときは今頻りに儒墨の徒が聖智

鑿決焉、天下脊脊焉大亂、罪在攖人心、故賢者伏處大山嵁巖之下、而萬乘之君、憂慄乎廟堂之上、今世殊死者相枕也、桁楊者相推也、刑戮者相望也、而儒墨乃始離跂、攘臂乎桎梏之間、意甚矣哉、其無愧而不知恥也甚矣、

【大意】 上段を承けて、後世に至るに隨ひ、爲治の弊益甚しきを致せしは、もと儒墨の祖述せる聖人好知の罪なるを言ふ、

【通釋】 以上の如くに一たび人心を攖亂してより後世に至るに隨ひ道德破壞し到底收拾すべからざる弊害を生ぜしかば、是に於て遂に天下を器械的に攻め付けて釿鋸即ち「マサカリ」「ノコギリ」の刑罰を以て制し、繩墨即ち「ナワ」「スミモリ」の如くに一定した る法律を以て殺し、椎鑿即ち「ツチ」「ノミ」にて施せる肉刑を以て決裂し、天下は脊脊焉と踏みあひ蹂りて大に亂る、其の罪はもと昔しの聖人が仁義を以て人心を攖亂して黠智を開きしに在り、此の如く大亂に至りしが故に有德の賢人は世俗の煩累を避けて深く隱れて、大山嵁巖の奥深き地に潛り在り、而して萬乘の大國の君主は廟堂政府の上に憂へ慄れて心配せしむ、今の世は又更に甚し、殊死とて死刑に處せらるる者は相互に枕り重さなり、桁楊とて足かせ頸かせを入れられたる罪人は多くして相互に推し合ひ、刑戮せらるゝ者は相互に望め合ふ程多きなり、然るに彼の儒者墨者の徒は此の大亂に及んで、稍々此を救はんと氣附きたるらしくして、過去聖人の失敗にも懲りず仁義聖智の說を天下の多くの人が桎梏手かせ足かせの刑を蒙りたる間に立ち、離跂攘臂とて足に力を用ひ、手に力を入れて唱ふるに至りては、是れ實にけしからぬ次第なり、噫さても／＼甚だ歎かはしき事にて、彼等の己の不明不德にして愧づる無く、而かも世に耻ぢと云ふ道あるを知らざることは甚だし豈に言語道斷なる義にあらずや、

德不同、而性命爛漫矣、天下好知、而百姓求竭矣、

【大意】上節を承けて後世三代に至りて更に人心を擾亂する甚しきことを言ふ、

【通釋】黃帝一たび仁義を以て人心擾亂の端を開きしより、堯舜に至りて、已に其の煩勞に勝へざりしが世が又延きて、三王の時に及んでは、天下の人心又大に驚駭せり、乃ち仁義てふ題目の下に於て人を批判を爲すが故に、下なる者は不仁不義の名を負うて夏桀盜跖の徒と爲り、上なる者は仁者義者の名を得て曾參史鰌の徒となり、而して孔敎を奉ずる儒者墨學を唱ふる墨家に至るまで、皆各々此の仁義てふ名目に緣り縋りて敎を立て、是に於て其の己と同じき者は之を喜び、己と異なる者は之を惡みて喜びと怒りと相互に疑ひ、或る意見ある者は之を智とし、或る意見なき者は之を愚とし、相互に智と欺き愚と欺き、己が說を善とし、人の說を否とし、相互に善否を以て非議し、我が言行は信とし、人の言行は誕として相互に譏謗して、天下の治まることは愚か、反りて益々衰微したり、而して此の如く是非の論紛々として起るに伴れて、尊き玄同の至德は消散して、眞正の性命は爛漫と亂れ散りて、世は益々浮薄詐欺の惡俗となり、天下の人々智を好みて巧みを弄ぶこと甚しくなりて、百姓は思慮を過勞する結果、智慧分別も體力も共に疲れ果てゝ、何等の要求も竭きて出來得ざるなり、

【解義】〔上有曾史〕曾は曾參、史は史鰌已に上に見ゆ、〔誕信相譏〕誕は虛妄なり、信は信實なり譏は誚なり「ソシル」と訓ず、〔大德不同〕大德は奧深く大いなる眞德にして、謂はゆる玄同の德なり、〔性命爛漫〕性命は此にては生命と同じ、火にて熱するを爛と云ひ、水にて敗るを漫と云ふ、爛漫は散亂すること「成疏」には喜怒是非、熾然大盛、故夭年夭枉、性命爛漫とあり、〔天下好知〕知は智と同じ、〔百性求竭矣〕養生主篇に以有涯之身、而好無涯之知とあるが如く、人の能力は本と際限あるに拘らず、際限なき事物に向ひ、好んで智を用ふるが故に、遂に之が供求に應する能はずして困敗するを謂へるなり、「成疏」には聖人窮無涯之知、百姓焉不竭哉とあり、

於是乎釿鋸制焉、繩墨殺焉、椎

骨折りて、其の五藏即ち内部の心神を焦し痛めて、仁義の徳政を爲し又其の血氣即ち外部の身體を矜かに愼みて、眞面目に法律制度を規定せしも、仲々天下多數の人は承服せずして、流石の聖人も勝ち終ふせざる場合あり、堯は是に於て最も大惡人なる驩兜を崇山に放逐し、三苗を三峗に投竄し、共工を幽都に流罪にせり、此の如く矢張り罪人を出だせしは堯舜が天下の人々に勝ちて、悉く感化する能はざりしものならん、彼の黄帝一たび人心を攖擾するときは忽ち其の禍此の如し、

【解義】〔股無胈〕胈は小毛なり、又白肉なり、或は曰く胈は紱に作るべし、紱は蔽膝（膝を蔽へるもの）なり、「成疏」には曰く心形瘦弊股瘦無白肉、脛禿無細毛と、〔愁其五藏〕五藏は五臟と同じ、心を謂ふ、既に上文に見ゆ、〔矜其血氣〕矜は莊矜なり、鉗束なり、血氣は身體を謂ふ、又矜は苦なり、此れ「孟子」の苦其心志勞其筋骨とあると同じく、種々思慮を勞苦するを謂ふ、〔養天下之形〕形は形體にして表面に見はれたる物體を謂ふ、「孟子」に當堯之時天下猶未平、洪水横流、氾濫於天下、草木暢茂、禽獸繁殖、堯獨憂之、擧舜而敷治焉、舜使益掌火、烈山澤而焚之、禽獸逃匿とあるが如き、即ち「莊子」の謂はゆる養天下之形ものなり、〔放讙兜於崇山〕讙一に驩に作る、讙兜は人の名なり、下文の共工の黨にして共に堯の命に從はず、故に堯之を放逐せり、崇山の名南方の遠地なり、〔投三苗於三峗〕三苗は苗族の君にして、「成疏」に其國左洞庭（湖）、右彭蠡（澤）、居豫章、近南岳（湖南省の衡山）、とあり、亦堯命に從はざる凶惡の一人なり、三峗一に三危に作る、山の名、成疏に即秦州西羌地とあり、投を崔本には殺に作り、「尚書」には竄に作る、〔流共工於幽都〕共工は官の名「左傳」に少昊子有不才子、天下謂之窮奇とあり、「釋文」に共工は即ち窮奇なりと云へり、幽都は即ち幽州なり北方遠裔の地、

施及三王、而天下大駭矣、下有桀跖、上有曾史、而儒墨畢起、於是乎喜怒相疑、愚知相欺、善否相非、誕信相譏、而天下衰矣、大

かなる力は能く其の本來の剛强の氣を矯め揉て柔かならしむるを謂ふ、〔廉劌彫琢〕廉は利なり、劌音「ケイ」、割なり、彫は雕刻なり、琢は琢磨なり、乃ち鋭利なる刀劍の割斷は玉石を雕刻琢磨するが如くに、本來の剛氣を削弱消磨せしむることを謂ふ、〔其熱焦火〕其の躁急なることを焦火の物を焚くに喩へて云ふ、〔其寒凝氷〕其の戰き慄へることを、凝結せる氷の寒きに喩へて云ふ、〔再撫四海之外〕其の迅速なることを云ふ、撫は臨み治むるなり、〔其動也縣而天〕縣は懸と同じ、乃ち心一たび動くときは虚く空中に懸りて其の制止すべからざること宛も天の如しとなり、「釋文」には希高慕遠、故曰縣天とあり、〔僨驕而不可係〕僨は憤と同じ、僨驕とは亢戾なる狀なり、「郭注」には不可禁之勢とあり、不可係とは制すべからざるを謂ふ、〔其唯人心乎〕人心は此の如くなれば復た攖る可からざるを謂ふ、孟子の告子上篇に孔子の語を引きて操之則存、舍之則亡、出入無時、莫知其鄕、惟心之謂與とあり、昔人云莊子此語形容人心同一妙手而加詳焉と、

昔者黃帝始以仁義攖人之心、堯舜於是乎股無胈、脛無毛、以養天下之形、愁其五藏、以爲仁義、矜其血氣、以規法度、然猶有不勝也、堯於是放驩兜於崇山、投三苗於三峗、流共工於幽都、此不勝天下也夫、

【大意】始めて仁義を唱へて天下の人心を攖擾せし禍は、黃帝堯舜の仁義を以て天下を治めしより起れることを言ひ、人心の攖すべからざるを示せり、

【通釋】今古代に溯りて云へば、昔し黃帝起りて始めて仁義の德てふものを頻りに申し立てゝ、折角靜穩なる人の心を攖亂せしより、天下始めて智慧が著きて詐欺爭鬪の思ひを生ぜしかば、次きの時代の天子なる堯帝舜帝は爲めに非常に大苦勞を爲し、天下を奔走して殆んと寸時も休息の間無ければ、兩股の間は互に摺れ合うて胈卽ち小き毛がなく、脛にも毛なし、斯く奔走勞苦して天下の人々の形體を養ふに

【大意】天下を治むるは反りて天下を擾亂することを言ひ、以て深く區々たる人々を弄びて天下に臨むの非なるを說けり、宣穎曰 崔瞿誤認治則能善人心、却不知治正是攖人心、老子說來其流弊遂至不可救、此一段所以痛駁治字之害道也と、

【通釋】崔瞿と云へる人あり、老聃に問うて曰く、天下を治むること是非に必要なり、若し先生の仰せの如くに天下を治めずして放任するときは、何所に於て人の心を取り直して善くすべきか、即ち天下は思ひ思ひに我が勝手のみを營みて亂れんとすと、老聃因りて曰く先づ其の人心を善くすと云へるが大いに誤れるなり、汝ち愼みて人心に障り觸るゝことと無かれ、さて人心と申すものは實に捕捉すべからざることにて、物事に排抑せらるゝときは頻りに降下して卑屈縮小となり、亦進み升るときは頻に昂奮して抗上し此の一上一下の間に下るときは、束縛せられて囚徒の如く、上るときは奮鬪して殺傷せらるゝが如し、淖約と柔かにして本來なる剛强の氣を柔らげ弱はめ、宛かも刀劍を以て廉劌彫琢とて即ち刺し割り雕刻し琢削するが如くに、折角の剛氣を削り弱はめて仕舞ひ、其の熱さ加減即ち躁急なることは物を焚き焦す火の如く、其の寒さ加減即ち戰兢なることは凝結せる氷の如く、其の疾さは一寸俯仰する間に早や再度をも四海の外即ち外國を巡り來りたるなり、其の心の落ち付けるときは深淵にして而かも靜かなり即ち何等か物ありて心底に潛め居れるなり、其の心が動くときは遠く懸け離れて而かも天の如く、僨驕とて妄に強く驕り、而も係ぎて置くべからざる者は他の物にあらず、其れ唯だ人の心なるが人の心は實に油斷すべきにあらず、

【解義】〔安臧人心〕安は於何なり、臧は善なり、淑なり、共に「ヨクス」と訓す、宣穎曰く引崔瞿問語緊接上何暇治天下來と、〔無攖人心〕攖は引なり、「ヒク」、撓亂（ミダス）なり、「成疏」に宥之放之、自合其理、作法理物、則攖撓人心と、〔人心排下而進上〕以下數句人心を形容して言ふ、排は排斥なり、「郭注」に排之（人心）則下、進之則上、言其易搖蕩也と云へり、〔上下囚殺〕囚殺は囚はれ殺さるゝが如くに、上下共に苦痛して自適せざるなり、〔淖約柔乎剛强〕淖は音「綽」、約は柔かなる貌、淖約として柔

身より貴きこと無しと爲せる者にして、始めて天下を寄せ預けて安心すべし、又如何なる物を以てすとも己が身より愛すべきもの無しと爲せる者にして始めて天下を委ね託して危險なる事なかるべし、換言すれば如何なる利害榮辱も以て其の心身を動かすを得ざる人にして、然る後ちに始めて、天下を付託すべしとなり、〔苟能無解其五藏〕苟は誠なり、解は解散なり、藏は臟と同じ、五臟とは五性なり、乃ち五臟に藏れる仁義を解き散ずる無くして深く中に收め蓄ふることを謂ふ、駢拇篇に多方乎仁義而用之者、列於五藏とあり、以て參考とすべし、〔無擢其聰明〕擢は顯擢なり、乃ち耳力目力を外部に擢き出だして、聲色に溺れざることを謂ふ、〔尸居而龍見〕尸は神尸なり、「カタシロ」と訓ず、神尸の祭に涖むときは無爲を貴ぶ、故に無爲にして動かざるを尸居と曰ふ、龍見は龍の現出するなり、龍は最も變化活動の多き靈物と稱せらる、故に其の德盛にして速かに遠方に普及するを龍見と曰ふ、〔淵默而雷聲〕淵は深なり、默は不言なり、雷聲は雷の如く高大なる聲にして、乃ち名譽の高きことを謂ふ、〔神動而天隨〕人の精神方に動きて天機自ら赴くことを謂ふ、宣穎曰く此皆貴愛其身之責也、如此則自有下文之效と、〔萬物炊累〕炊累は動き升ることなり、又累は微塵の聚ることにて埃塵の自ら動くが如く、萬物同く天機によりて自ら作り自ら息むを、吾に任かして行くことを謂ふとの說あり、又炊累は萬物皆吾が生育の範圍內に在り、炊氣の積累して溫なること、宛も春の和暖なるが如きを謂ふとの說あり、

崔瞿問於老聃曰、不治天下、安臧人心、老聃曰、汝愼無攖人心、排下而進上、上下囚殺、淖約柔乎剛强、廉劌雕琢、其熱焦火、其寒凝氷、其疾俛仰之間而再撫四海之外、其居也淵而靜、其動也縣而天、僨驕而不可係者、其惟人心乎、

以託天下、愛以身於爲天下、則可以寄天下、故君子苟能無解其五藏、無擢其聰明、尸居而龍見、淵默而雷聲、神動而天隨、從容無爲、而萬物炊累焉、吾又何暇治天下哉、

【大意】此れ在宥するときは天下を治むるを務めずして自然に治まることを言ふ、宣穎曰く無爲二字即在宥之訣也、究所謂無爲者、君子乃於身內著精神、而萬物自化、則又何暇計及於治哉と、

【通釋】されば性命の情に安んずる君子は無を欲するが故に、時と場合とにより餘義なく天下に臨みて君たるときは、物事の自然に任かして無爲なるに越ゆるものはなし、唯だ其れ無爲にして始めて其の性命の情に安んずべきなり、されば己の身を第一に重んじて天下を治むるよりも貴しとする者は、妄に利欲に迷ひて其の身を失はざるが故に、安心して天下を託すべし、己が身を外なきものと爲して、天下を治むるよりも愛惜するものは妄に外物に溺れざるが故に安心して天下を寄せ預くべし、故に君子は苟に能く五臟を解きて其の智慮を絞り出だし、聰明を擢きて其の才能を働き竭くすこと無く、乃ち何かに付けて智力を出ださず、唯だ尸居とて靜かに居て動かざるも龍の見るゝが如く、文章自然に外に見はれ、淵默とて深く呑み込みて聲を出たさざるも、雷の鳴るが如く大いに聞え、形ちは働かざるも精神が働きて、自然の道が隨ひ伴れて物事別に手を下たさずして爲さゞるも、自然に出來上り、萬物は宛かも炊氣の蒸發して上るが如く、續々と動き累さなりて生ずるなり、右の如く、自然の理法に順ふときは、吾又何ぞ故らに天下を治むる暇あらんや、即ち左程政治などに勞力を用ふることなく、打ち舍て置きて自然に治まるなり、

【解義】「不得已而臨莅」不得已とは餘義無しとの意なり、乃ち君子は本來天下に於て何等の心もなし、故に其の臨みて治むることを不レ得レ已と云ふ、「故貴以身於爲天下」本句及び下句の愛以身云々の二句共に「老子」に出づ、乃ち如何なる物を以てすとも己が

なり、古聖の迹方を慕ひ有難く感ずるか、是れ世間の藝術を助長するなり、專ら智計を愛するか、是れ世間紛々相爭ふ疵病を助長するなり、以上の如く其の德と思ひ込みて爲すに隨ひ、反りて益々非德に陷りて本性に遠ざかるなり、されば彼の天下の人々が其の本性に安んずるときは、此に述べたる聰明仁義禮樂聖智の八德を有する人は多少の差はあれども、部分的に有する人人は之を其の儘に存續して行くも、別に障り無くして可なり、亦此の八德を部分的に有せざる人々は、之を或は失して無くなすとも別に障り無くして可なり、若し天下の人々が其の本性に安んぜざるときは、此の八德は乃ち始めて臠卷傖囊とて窮屈に急遽にして、天下を掻き亂だすものなり、然るに天下は玆に始めて之を尊敬し、愛惜し、仰ぎて模範と爲せり、甚だしいかな、天下人人の大いに惑へるや乃ち彼の八德は豈唯一時的之に過りて用事が濟めば去るが如きものならんや、乃ち上述の八德に對し齋戒し、心身を淸めて極めて眞面目に之を言ひ、跪坐し態度を愼み、極めて謹愼的に之を身近に進め親み、又鼓を擊ち歌曲を奏して之を舞はしめんとす、乃ち出來得る力を竭くして之を歡迎するなり、現今の時弊は此の如きものなるが、今更吾人が如何に踏み留りて爲すあらんとするも、亦致し方なき次第なり、

【解義】〔是淫於色也〕淫は溢なり、過なり、「スグル」と訓ず、乃ち色に熱心なり過ぎて他事を顧み思はざることと、〔是相於技也〕相は助なり、王之夫は曰く與之偕而自失曰相、卽ち連れ添へる中、終に卷き込まるゝことなり、技は浮華なる技能を謂ふ、〔是相於疵也〕疵は過惡なり、「成疏」に說聖迹、助世間之藝術、愛智計、益是非之疵病也と、〔之八者〕之は此と同じ、八者は聰明仁義禮樂聖智を指す、〔存可也亡可也〕八者の存亡共に其の眞性に損益するなきを謂ふ、〔臠卷傖囊〕臠は音「レン」、臠卷は拘束せられて舒伸せざることと、傖囊は槍攘と同意にて、騷ぎ喧きこと、

故君子不得已而臨蒞天下、莫若無爲、無爲也而後安其性命之情、故貴以身於爲天下、則可

唯だ其れのみに腐心競逐して、其他を念はざるなり、〔性命之情〕即ち性命の本情にして、直正なる性命のことなり、「辨正」に曰く善惡愈多、則賞罰愈不可廢、賞罰不廢、則善惡愈不能靜と、

而且說明邪、是淫於色也、說聰邪、是淫於聲也、說仁邪、是亂於德也、說義邪、是悖於理也、說禮邪、是相於技也、說樂邪、是相於淫也、說聖邪、是相於藝也、說知邪、是相於疵也、天下將安其性命之情、之八者存可也、亡可也、天下將不安其性命之情、之八者、乃始臠卷愴囊而亂天下也、而天下乃始尊之惜之、甚矣天下之惑也、豈直過也而去之邪、乃齊戒以言之、跪坐以進之、鼓歌以儛之、吾若是何哉、

【大意】上段を承け更に進んで天下を治むるときは唯だ賞罰性命の亂あるのみならず、八德の進むに隨うて其の病叢り生じ、遂に後世に至るまで其の弊毒滋に甚しきを免れざるを言ふ、

【通釋】既に性情に安んぜざる非德たる以上は、其の德を務むる程、益々其の本性を傷害すべし、彼の離婁の如き明なるを有難く感ずるか、是れ美色にのみ耽溺せるなり、師曠の如き聰なるを有難く感ずるか、是れ妙聲のみに耽溺せるなり、偏に仁愛のみを有難く感ずるか、是れ虛無にして私なき天德を亂るなり、是非を裁斷する義理のみを有難く感ずるか、是れ事物に因應して固定せざる眞理に悖り逆らへるなり、進退動作の曲折に富める禮儀を有難く感ずるか、是れ益々虛僞を助長するなり、高尚優美なる音樂を有難く感ずるか、是れ益々絲竹金石の淫聲を助長する

度に人を樂ましめ、一は過度に苦しましめ、樂しむ者は非常に喜び、苦しむ者は非常に怒り、爲めに喜怒をして其の平常の居据り處を失ひ、身の居り場處をして不安にして、常の定りなく思慮をして、紛亂して自得せず、物事半途にして止み、有終の美を成さざらしむ、是に於て天下は始めて喬詰卓鷙とて、不平の心を生じ、不平の行ひを爲し、而て後ちに一方は凶惡なる盜跖、一方には小賢しき曾參史鰌の如き行ひあり、故に善惡共に其の數非常に多くなりて、天下を擧りて其の善を賞するとも到底褒め切れず、亦天下を擧りて其の惡を罰するとも到底行き亘らず、されば如何に天下の大を以てすとも、善を賞し惡を罰するに足らず、右の有樣にて彼の夏殷周三代以還の爲政者は、匈々と喧びしく噪ぎて、終に賞罰を以て本事とし、是れ日も足らず、何ぞ其の己が本來性命の眞情を安んじて、恬愉なることを得るに暇あらんや、

【解義】〔毗於陽〕此れ上の人樂其性の句を承けて云ふ、毗は助なり、竝なり、卽ち偏倚の意なり、毗於陽とは陽氣に偏するを謂ふ、〔毗於陰〕此れ上の人苦其性の句を承けて云ふ、毗於陰とは陰氣に偏するなり、兪樾曰く毗は「爾雅釋詁」に毗劉暴樂也とある毗にて、暴樂は爆爍と同じく、剝落の義なれば、毗陽毗陰とは陰陽の和を傷ふを謂ふ、喜は陽に屬し、怒は陰に屬す、故に大に喜べば陽を傷り、大に怒れば陰を傷る、故に四時不至、寒暑之和不成なり、「淮南子」の原道訓に人大怒破陰、大喜墜陽とあり、正に此と同義なり、今姑く其の說を用ふ、〔其反傷人之形乎〕「成疏」に人多疾病、豈非反傷形乎とあり、〔使人喜怒失位〕以下四句は堯桀の治を爲すに相反對にして、仁暴の異ありと雖も、其の人爲的細工を以て人の本性を易へ亂だすことは均く同一なるを謂ふ、「成疏」に此皆堯桀之流、使物(人)喜怒太過、以致斯患也と、〔中道不成章〕中道は中途なり、成章「說文」に依れば、音樂の終るを一章と曰ふ、故に其の文字音と十とより成れり、十は數の終りの意を示したるなり、因て事を成し、文を成すを章と曰ふ、「孟子」にも不成章不達とあり、「莊子覈玄」に曰く成章謂成事之美也と、〔喬詰卓鷙〕喬詰は意の不平なること、卓鷙は行の不平なること、〔匈匈焉終以賞罰爲事〕匈匈は讙譁なり、競逐の謂なり、人々皆賞を慕ひ、罰を畏れ、

可添一箇樂と、卽ち人性はもと靜かなるが持前なるに、今樂てふことが生ずれば恬靜ならずして、其性を失へるなり、〔天下瘁瘁焉〕瘁は憂なり、病なり、心配すること、〔是不愉也〕愉は樂なり、「タノシミ」と訓ず、「副墨」に曰く性上不可添一箇苦と、卽ち人性は本來快樂の無きと共に苦痛も無きものなるに、今一の苦痛を生じて愉樂ならず、是れ亦其の本性を失へるなり、「成疏」に曰く堯舜政代斯異使物失性均也と、〔非德也〕德乃天德、卽性也と「宣注」は云へり、

人大喜邪、毗於陽、大怒邪、毗於陰、陰陽幷毗、四時不至、寒暑之和不成、其反傷人之形乎、使人喜怒失位、居處無常、思慮不自得、中道不成章、於是乎天下始喬詰卓鷙而後有盜跖曾史之行、故擧天下以賞其善者不足、擧天下以罰其惡者不給、故天下之大、不足以賞罰、自三代以下者、匈匈焉終以賞罰爲事、彼何暇安其性命之情哉、

【大意】例を人の心身上に取りて、過度の喜怒は傷害を招くを言ひ、以て干涉的政治の天下を亂だすに至ることを說けり、

【通釋】何を以て右の如く云へるかなれば、一例を擧げて云はんに、何に事をも度に過ぐるときは弊害あり、人事に就いても人大に喜びて嬉しきことが過度なるときは、陽氣を傷ひ、大に怒りて瞋恚の心が過度なるときは、陰氣を傷ひ、陰陽の氣竝に傷ふときは、春夏秋冬の四時は亂れて順序通りに至らず、寒暑の節は狂ひて調和を成さず、反りて人の健康をも害ひ、身體を傷ふに至るなり、是れ既に物の過度の弊は天下の害となるを知るべし、今堯桀の二主は一は過

して自然に任かして政を爲すが爲めとなり、本句の義を說きて其の義を得たりと謂ふべし、蘇輿は曰く任存也、存諸心而不露是善非惡之迹以使民相安於渾沌正胠篋篇含字之旨と、〔淫其性也〕淫は淫僻なり、即ち本性の美點を喪失することを謂ふ、〔遷其德也〕遷は遷改なり、「成疏」に性者禀生之理、德者功行之名とあり、卽ち人の持前たる生れ付きより云へば、性と云ひ、踐み行へる實效より云へば德と云ふ「成疏」又曰く若不任其性自在恐物淫僻喪性也、若不宥之、復恐效他其德遷改也と、

昔堯之治天下也、使天下欣欣焉人樂其性是不恬也、桀之治天下也、使天下瘁瘁焉人苦其性是不愉也、夫不恬不愉、非德也、非德也而可長久者、天下無之、

【大意】天下を治むるの弊害を言ふ、宣穎曰く堯桀一例、眼孔甚大と、

【通釋】全體治むるてふ事が、既に間違ひ居れり、昔し帝堯は仁政を以て天下を治めし時、天下の億兆をして欣欣然として滿悅せしめ、人々皆各々其の性に於て快樂を感じたり、是れ乃ち餘計なる事を爲して、折角靜かなる本性を動かして恬靜ならざらしめたるなり、夏の桀王は虐政を以て天下を治めし時、天下の億兆をして瘁瘁焉と憂悲せしめ、人々皆各々其の性に於て苦痛を感じたり、是れ亦餘計なる心配を掛けて安樂なる本性に乖きて愉快ならざらしめたるなり夫れ堯の仁と桀の虐とは固より大差違あれども、彼の民の恬靜ならず、愉樂ならざることとは、共に決して本來の德にあらず、卽ち人間の不自然的所行なり、苟も不自然的にして而かも永續して長久なるべきこと、是れ道理に於て天下に有り得べからざるなり、

【解義】〔人樂其性〕性は人性にして、此にては人民の心を謂ふ、卽ち堯の時、童謠の立我蒸民莫匪爾極を歌ひ、擊壤鼓腹の老人の鑿井而飯、耕田而食と云へるが如き皆堯の仁政の民心を樂ましめたる證例なり、〔是不恬也〕恬は靜なり、「副墨」に曰く性上不

むるときは、天下は自然に治まれることを謂へるなり、宣穎曰く在宥二字是一篇之主、治字是反對之病、在宥則性命之情安、并不必治天下矣、治則天下多事、更不能安性命之情矣と、

聞在宥天下、不聞治天下也、在之也者、恐天下之淫其性也、宥之也者、恐天下之遷其德也、天下不淫其性、不遷其德、有治天下者哉、

【大意】先づ在宥の妙義を説けり、聞在宥天下、不聞治天下也の二句、蓋し一篇の義を括盡せり、

【通釋】天下の萬物、各々自然の性ありて存せり、故に天下を治むるに在宥とて、天下自在の道に任かし、寛容にして迫らず、自然に治まるやうに爲すことを聞けども、有心故意に齷齪として必らず之を治めようとして天下を治むることを聞かず、扨て又何が故に在宥を必要とするかとならば、天下の人々に對しその自在の性に任かすと云ふものは、餘り他より干渉して折角の本性を戕ひ淫僻ならしめて、喪失せんことを恐れてなり、又天下の人々を寛宥に取扱ふと云ふものは餘り物事を束縛窮屈に爲すときは反動の餘り、折角の美德を遷し變せんことを恐れてなり、然るに今自在寛宥にして天下其の本性を淫僻にせず、亦其の美德を遷さゞるときは最早天下を治めずとも、既に治まりたるものなり、尚ほ此の上に何れに於て天下を治むるてふ苦勞千萬なることを爲さんや、

【解義】〔聞在宥天下〕在は自在なり、宥は寛なり、「郭注」に曰く人之生也直、莫之蕩、則性命不過、欲惡不爽、在上者不能無爲、上之所爲而民皆赴之、故有誘慕好惡、而民性淫矣、故所貴聖王者、非貴其能治也、貴其無爲而任物之自然也と、此れ其の意、人の本性はもと眞直なれば、他より攪亂せざるときは、素直に治りて行くものなるに、唯爲政者が己が功名を衒はんとて、種々なる巧みを弄ぶが故に民性も遂に誘惑せられて、淫僻に陷ることなれば、世の聖人を聖人として貴ぶ譯は、何にも聖人が能く世話を燒きて天下を治むるが故にあらず、唯彼れ聖人が無爲に

則己之自以爲是者也、求以立異、而不知本體之本同、果於非人、而不見在己之非是、正謂頡滑堅白解垢同異之徒、雜篇所謂惠施公孫龍日以其知與天下之辨持、持則爭、爭則亂と、〔悖日月之明〕悖は亂なり、「ミダル」と訓ず、又薄食なり、乃ち日蝕月蝕を致すを謂ふ、〔下爍山川之精〕爍は音「シャク」、又音「ヤク」、消なり崩竭なり、〔墮四時之施〕墮は壞なり、「ヤブル」と訓ず、施は施行なり、〔惴耎之蟲〕惴一に蝡に作る、又喘に作る、音「セン」、耎は音「ゼン」、「成疏」に附地之徒曰喘耎とあり、即ち喘息蠕動する蟲類のことにて、蝸牛蛇蛆の屬を謂ふ、〔肖翹之物〕「成疏」に飛空之類曰肖翹とあり、肖は小なり、翹は輕飛なり、即ち蝶蛾の屬を謂ふ、〔種種之民〕種種は謹愨なる貌、即ち「スナホ」なる樣子なり、又淳厚なる貌、〔役役之佞〕李頤曰く役役鬼黠貌と、佞は才なり、〔恬淡無爲〕恬はしづかなること、〔啍啍之意〕啍は意「シュン」、啍啍は己を以て人を教誨する貌、又音「コウ」哼と同じ、哼哼は小智なる貌、又音「トン」、啍啍は多辯なる貌、

名言

善人不得聖人之道不立、盜跖不得聖人之道不行、脣竭則齒寒、魯酒薄而邯鄲圍、聖人生而大盜起、川竭而谷虛、丘夷而淵實、聖人已死、則大盜不起、聖人不死、大盜不止、

彼竊鉤者誅、竊國者爲諸侯、諸侯之門、而仁義存焉、魚不可脫於淵、國之利器、不可以示人、絕聖棄知、大盜乃止、擿珠毀珠、小盜不起、焚符破璽、而民朴鄙、掊斗折衡、而民不爭、弓弩畢弋機變之知多、則鳥亂於上矣、鉤餌網罟罾笱之知多、則魚亂於水矣、削格羅落罝罘之知多、則獸亂於澤矣、知詐漸毒頡滑堅白解垢同異之變多、則俗惑於辯矣、

在宥第十一

此れ亦篇首句中の二字を取りて篇名となせり、在宥とは本篇の正文に解釋せしが如く、彼の天下を治むるに意を用ひて齷齪として爲せるとは正反對にして、凡て物事自然の道に任かして自由ならし

悅夫役役之佞、釋夫恬淡無爲、而悅夫啍啍之意、啍啍已亂天下矣、

【大意】智を好むときは、亂を致すこと深きを說き、以て結と爲す、宣穎曰く、致收反反覆覆、有不盡之慨焉と、

【通釋】亂を好むが故に、天下の人々は皆自己が知らざる事柄を尋ね求むることを知りて、而かも自己が知れる事柄を尋ね求むることを知ること有らず、亦皆自己が善しとせざる事柄を非斥することを知りて、而かも自己が美しとする事柄を非斥することを知らず、即ち己が本分に安んぜずして徒に本分以外の知識を增さんことを求め、亦己が意見と合はざる他人の事を非難することを務めて、己が爲す事も矢張り天理に違ひて、自然なることを悟らず、是を以て天下は互に爭うて大に亂るゝなり、又智を好むが故に、其の結果、人々其の眞性を失ひ、乖戾の惡氣は天地を動かし、上の天に於ては日月の光明を悖り亂だし、下なる地に於ては、山川の精氣を爍消し、天地の中間に於ては四時の流行を妨げ敗り、之が爲めに惴耎の蟲とて喘へぎ動ける蟲類、肖翹の物とて小羽にて輕く飛ぶ蟲類に至るまで、其の本性を失はざるは莫し、誠に甚しきかな、人が智を好める結果の天下を亂だすことの大いなることは、實に何共形狀し盡くすこと能はざる者なり、彼の夏殷周三代より以下の天下は何れも皆是れなるのみ、乃ち折角種々と淳厚なる民を捨てゝ、徒に彼の役役と小賢く立ち廻はる輕薄才子を悅び、彼の折角恬淡にして何等の營み爲すことを爲ざる者を釋きて徒に彼の啍啍と多辯なるものを悅べり、此の啍啍と多辯なる者こそ即ち是れ天下を惑はし亂だす者なり、然るに天下の人之を悟らずとは如何にも慨嘆の至りならずや、

【解義】〔故天下〕故とは上を承くる辭也、即ち上段の天下每每大亂、罪在於好知の二句を承けて說けるなり、辨正に曰く以下承上二句反覆咏嘆、與大學桃夭三節同文法と、〔皆知其所不知云云〕〔副墨〕に曰く蓋求其所不知者、求以異乎人也、所已知則同乎人者也、非其不善、見在人之不是也、所已善

れば畢は鳥を捕ふる網なり、弋は杙と同じ、「クヒ」と訓ず、杙を施して畢を張るを畢弋と謂ふ、〔機變之知〕仕掛道具を以て巧みに欺く智慧なり、〔鉤餌網罟罾笱〕鉤は「ツリバリ」と訓ず、一本に釣に作る、義同じ、餌は魚餌なり、「ヱサ」と訓ず、網は「アミ」と訓ず、罟は細き網なり、罾は音「ソウ」、方形にして綱維を以て四隅を釣り擧げる網にて、今の四ツ手網の類、笱は音「コウ」、竹を曲げて魚を捕ふるもの、魚梁なり「ヤナ」と訓ず、〔削格羅落罝罘〕削格は李說に所以施羅網也とあり、郭嵩燾は曰く長枝爲削、削格謂刮削之、格者格拒之意、削格羅落皆所以遮要禽獸、「漢書」鼂錯傳、爲中周虎落、顏注謂遮格之とあり、此の說に依るときは、削りたる木を建てゝ、禽獸を遮り止むるもの、羅落は上の畢弋と同じ、「爾雅」に鳥罟謂之羅とあり、鳥網なり、罝は音「ソ」罝罘は共に兎を捕ふる網なり、〔知詐漸毒〕知は智と同じ、知詐は智巧、詐は僞なり、李頤曰く漸漬之毒不覺深也と、漸毒は漸漬毒害於物と「成疏」に云へり、郭慶藩は曰く、漸詐也荀子議兵篇、是漸之也、正論、上凶險則下漸詐矣、皆欺詐之義、李說失之と、〔頡滑堅白解垢同異〕頡滑は「成疏」に滑稽也、亦姦黠也とあり、一に曰く不正の貌と、解垢は詭曲の辭なり、王先謙曰く頡黠借字、堅白同異、既に前篇に解せり、〔天下每每〕每每は昏昏の貌、郭慶藩は曰く夢夢と同じ、「爾雅」の釋訓に夢夢訰訰、亂也とあり、夢を每に爲るは甍を甋に爲るが如し、皆古字なりと、案ずるに此の說に依れは、每は音「ボウ」、

故天下皆知求其所不知、而莫知求其所已知者、皆知非其所不善、而莫知非其所已善者、是以大亂、故上悖日月之明、下爍山川之精、中墮四時之施、喘耎之蟲、肖翹之物、莫不失其性、甚矣夫好知之亂天下也、自三代以下者是已、舍夫種種之民、而

往來縱橫して彼此相交結すること、「管子」の匡篇にも車不レ結レ轍とあり、「高注」に結交也と云へり、〔上好知也〕知は智と同じ、

上誠好レ知而無レ道、則天下大亂矣、何以知ニ其然一邪、夫弓弩畢弋機變之知多、則鳥亂ニ於上一矣、鉤餌網罟罾笱之知多、則魚亂ニ於水一矣、削格羅落罝罘之知多、則獸亂ニ於澤一矣、知詐漸毒頡滑堅白解垢同異之變多、則俗惑ニ於辯一矣、故天下每每大亂、罪在ニ於好一レ知、

【大意】上を承けて備に智を好むときは、亂を生ずることを言ふ、宣穎曰く、亂在レ於レ好レ知、連ニ類廣譬、

【通釋】上たる者智を好むときは宜く治まるべき筈なるに、反て天下大亂とは何を以て之を知るか、姑く他物に就いて云はんに、夫れ弓弩畢弋機變の知慧を用ふることが多ければ、鳥も空に安んぜずして必ず亂るべし、鉤餌網罟罾笱などと云へる機械を用ふる智が多ければ、魚は水中に安んせずして必らず亂るべし、削格羅落罝罘などと云へる機械を用ふる智が多ければ、獸は澤中に安んぜずして必らず亂るべし、智詐漸毒頡滑堅白同異など云へる詭辯を用ふる智が多ければ、世の人々は其の天眞に安んぜずして、必らず辯口に惑はさるべし、されば凡そ天地間何に物に限らず其の亂るゝ機智一び動くときは、機事起り機事起れば機禍深し、故に天下が每每と昏きが上に昏くなりて大に亂るゝことは、其の罪は人の智を好むに在り、さらば智ほど天下の害毒たるものはあらず、

【解義】〔畢弋〕知は智と同じ、李云く畢は受網なり「成疏」に網小而柄、形似ニ畢星一(二十八宿の一)、故名曰レ畢とあり、弋は「射ぐるみ」と訓ず、絲を以て矢に繫ぎ、射て中れば絡まつて落ち來るやうに仕掛を爲したる物なり、郭嵩燾曰く「說文」に率畢也、捕ニ鳥畢也一、「詩」畢之羅之、鳥罟亦謂ニ之畢一、李說非と、此に依

用ひて約束の信となして世は治まり、人々別に深き嗜慾なければ各々己が食物を甘しとなし、己が衣服を美しとなし、其の風俗を樂み其の居處に安んじ、恬淡にして其の分位に止れり、されば當時鄰國の互に境土を接して相望み雞犬の吠え鳴く聲は距離相近くして互に聞こえ、人民は別に利益を求むる必要なければ老いて死するに至るまで卽ち一生涯相互に往きつ來つを爲さず、各々其の鄉土に樂み安んぜり、無欲無求にして道德を抱き持つこと此の如き時代は至極の治れる世と申すより外なきなり、然るに今代は世道次第に下だり、遂に人民をして頸を延ばし踵を擧げ、卽ち如何にも待ち遠き思ひを爲して、其所に賢き人ありと往きて學ばざるべからずと糧を裹み背負ひ、首に戴きて賢者の居れる處に赴かしむるに至る、左するときは內に向うて其の老親を振り棄てゝ孝養を顧みず、外に對しては己が事へまつる君主の御用を棄てゝ仕舞ひ、四方を巡り果てゝ其の地に印せる足跡は各國諸侯の境內に引き接き、其の乘れる車輪の跡は、千里の遠方の外に相互に結びて、縱橫十文字に往來すること甚だ衆し、則ち是れ何に因るかと云はんに、全く人の上たる者が餘り智を好めば此の如き過ちあるなり、

【解義】〔容成子―神農氏〕此の十二氏は竝に上古の帝王なり、但當時史籍未だ有らざるを以て、其の次第、前後を知るなしと「成疏」に云へり、〔民結繩而用之〕當時上下和ぎ人心淳樸なれば、人と約するに唯だ繩を結びて信を表するのみにして、別に書券の類を用ひざるなり、「易周」の繫辭にも上古結繩而治、後世聖人易之以書契とあり、〔甘其食美其服〕「郭注」に適故常甘、當故常美、若思失侈靡、則無時慊矣とあり、乃ち其の食が口に適するが故に常に甘しと思ひ、其衣が恰當なるが故に、常に美しと思ふなり、若し心一び奢侈に傾くときは、從來の衣食にては寸時も愉快をも覺えずとなり、〔則至治已〕已は矣と通ず、〔贏糧而趣之〕贏は裹なり、「ツヽム」と訓ず、趣は赴なり、〔車軌結乎千里〕車軌は車轍と同じ、轍は車迹なり、「ワタチ」と訓ず、岡松甕谷は曰くもと軌は車輿に於て後に當る横木のことなれども、轍の廣狹は軌の長短によりて各々差異を生ず、故に古人每に轍を謂うて軌と爲すと、結は交なり、車輪の迹、

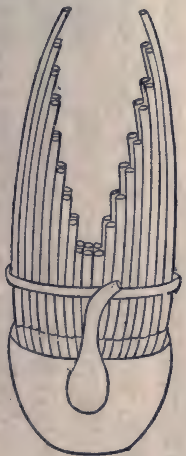
眞、人皆自得、率レ性全レ理、故與ニ玄道ニ混同スとあり、乃ち幽玄なる道理と合同して一となるなり、〔故曰大巧者拙〕此の語は「老子」に出づ、故に故曰と冠したるなり、〔天下不鑠〕鑠は燒亡することなり、〔皆外立其德〕瞽曠より以下の數子皆其の本心を外物に役し、以て各々其の德を立つるなり。〔以爚亂天下〕爚は音「ヤク」火光の銷ゆるなり、爚亂とは散亂することなり、〔法之所無用也〕法は正法を謂ふ、乃ち正法より云へば、皆當に去るべきものとなり、「副墨」には法猶ニ佛氏所レ謂正法之法ニ言此輩人正法無レ用、抑未法耳と云へり、

子獨不レ知ニ至德之世ニ乎、昔者容成子、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏、當ニ此時ニ也民結レ繩而用レ之、甘ニ其食ニ美ニ其服ニ樂ニ其俗ニ安ニ其居ニ隣國相望、雞狗之音相聞、民至ニ老死ニ而不ニ相往來ニ若ニ此之時ニ則至治已、今遂至レ使ニ民延レ頸擧レ踵、曰某所ニ有ニ賢者ニ贏レ糧而趣レ之、則內弃ニ其親ニ而外去ニ其主之事ニ足跡接ニ乎諸侯之境ニ車軌結ニ乎千里之外ニ則是上好レ知之過也、

【大意】古代の至德を言うて今世の然らざるを見めし、而して其の咎を上たる者が知を好むの過に歸せり、

【通釋】子は獨り至德の時代を見ざるか、至德の時代は如何と云へば昔しの天子に容成子大庭氏伯皇氏中央氏栗陸氏驪畜氏軒轅氏赫胥氏尊盧氏祝融氏伏羲氏神農氏以上十二人の帝王相繼で出でしが、是の時に當りては至て質朴正直なる風俗なれば、未だ文書契劵の約束を證するもの無く、相互に繩を結び之を

自然美を維持すべし、人々各々其の聰を含有するときは天下は憂へ累はず、人々各々其の智慧を含有して天下は惑はず人々各々其の道德を含有して天下は邪僻ならず、然るに彼の曾參史魚楊朱墨翟師曠工倕離朱の如き各々一方の代表的人物は、皆外向其の德を立てゝ其の實質は虛しく、以て天下の人々を爚亂とて消散せしむる者なり、是れ正當なる法より云へば、無用なるものにて皆當に除き去るべきなり、



竽

【解義】〔擿玉毀珠〕擿は音「テキ」、又音「タク」、擲と同じ、投棄なり玉珠共に「タマ」と訓ず、山より出づるを玉と曰ひ川より出づるを珠と曰ふ、〔而民朴鄙〕「郭注」に除矯詐之所賴、則無以行其姦巧とあり、成疏に之を釋して符璽者表誠信也、矯詐之徒、賴而用之、故焚燒毀破可以反樸還淳而歸鄙野矣と云へり、〔掊斗折衡〕掊は擊なり、折は毀なり、乃ち破壞すること、〔殫殘天下之聖法〕殫は盡なり、殘は毀なり、聖法は上文にある五德を指して云ふ、〔擢亂六律〕擢は拔なり、擢亂とは六律の管を擢き取りて、其の長短の調子を亂だすなり、〔鑠絕竽瑟〕鑠は音「シャク」、燒斷なり、鑠絕とは焚きて棄つるなり、竽は笛の一種、形ち笙と相似たり、管を匏內に施し、簧を管端に施し、吹きて聲を發するなり、其の狀圖の如し、瑟は「コト」と訓ず、長さ八尺一寸、潤さ一尺八寸、二十七絃あり、〔天下始人含其聰〕始人とは此に始めて人每にと云ふ義にして、人始とあるとは意味同じからず、混淆すべからず、故に「注郭」に曰く若乃毀其所貴（六律文章の類）、棄彼任我、則聰明各全人含其眞也と、成疏又其の意を申べて曰く、然後人皆自得物（外物）無喪我（本性）、極耳之所聽而反聽無聲、恣目之能視而內視無色、天機自張、無爲之至也、豈有明暗優劣於其間哉とあり、〔攦工倕之指〕攦音「リ」、折なり、工倕は堯の時の巧者の名なり、倕は音「垂」本書の達生篇にも工倕施而蓋規矩、指不與物化、不以心稽とあり、宜く參考すべし、〔攘棄仁義〕攘は郤なり、「シリゾク」と訓す、〔始玄同矣〕玄同の二字は「老子」に出づ、「成疏」に物不喪

て之あればこそ、人も畏れ服するなれ、一たび之を他人に見(シメ)すときは忽ち大盜に利用せられて爲政者の大害となるが故に、妄に人に示すべからず、彼の謂はゆる聖智と申すものは天下の利器なれば、妄に天下の人に明かに示すべき者にあらず、されば今英斷一決して聖智を根絶棄却して全く用ひざるときは、天下の人人智慧の開くべき様なければ、姦智黠材の生ずる無くして、前に述べし大盜賊は乃ち自然に止まん、珠玉を擲棄破毀して寶重せざるときは之を獲たりとて利益にならざれば、小盜賊は自然に起らず、符璽を焚き破るときは信を知らざると同時に詐欺も萌さざれば、民は自然に質朴鄙野になりて虛僞の行爲なかるべし、斗斛を掊(ワ)り權衡を折りて物の輕重を知るべき方法を杜絶するときは、民は反りて正直に爲りて互に爭はず、天下の有らゆる聖人の法儀を盡く除き去り、人民に知能を働かすべき便宜を與へざるときは、人民は何れも純粹なる天良の徳性に立ち戻りて、是に於て始めて胥與に萬事を相談相手として論議すべし、乃ち其の義に關して更に少しく精く述べんに、彼の音樂に就いて云へば、聲調を整ふべき六律を拔き去り、混亂し竽瑟の鳴り物を焚棄し、瞽曠其人の耳を閉塞して聲調を辨する能力を失はしめて、天下の人々始めて人每に其の天賦の聰を含有すべし、彼の色彩に就いて云へば文章の美を滅し廢し、五采の觀を離散せしめ、離朱の如き人の目を膠にて着け合して開かしめずして、天下始めて人每に其の天賦の明を含有すべし、鉤繩を毀ち絕ち規矩を棄て去り、工倕の指を折りて技巧を弄ぶ能はざらしめて、天下始めて人每に其の巧みを含有すべし、此の如くするときは如何に落ち行くかと疑ふ人もあらんなれども、決して然らず、古語にも至極大いなる巧みは反りて拙(ツタナ)きが如くに見ゆとあり、此れ巧技の一件のみならず、萬事が卽ち是れにて餘り人爲的智慧を弄ぶは折角の自然を毀害するものなり、されば道德に就いて言はんに、彼の曾參史魚の行跡を削りて世に消滅せしめ、楊朱墨翟の口を鉗(ハサ)みて議論を吐かしめず、彼等が主張せる仁義を攘斥廢棄して、天下の道德は始めて人每に玄同とて何邊となく自然に同くなりて相爭はざるべし、右の如くにして人々各々自ら天賦の明を含有すれば、天下は燒かれ亡びずして粧ひ飾らずして

と訓ず、小を斧と曰ひ、大を鉞と曰ふ、

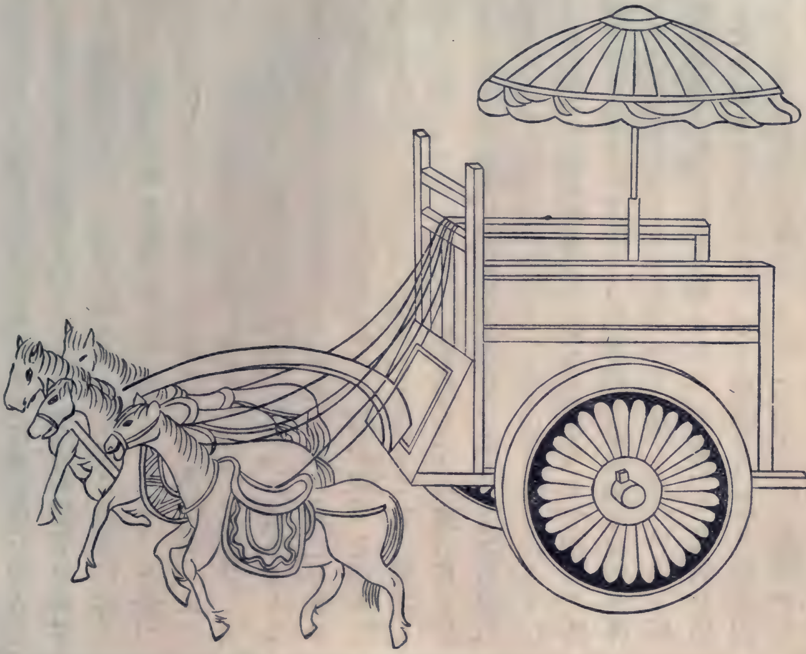
故曰魚不可脫於淵、國之利器、不可以示人、彼聖人者、天下之利器也、非所以明天下也、故絶聖棄知、大盜乃止、擿玉毀珠、小盜不起、焚符破璽、而民朴鄙、掊斗折衡、而民不爭、殫殘天下之聖法、而民始可與論議、擢亂六律、鑠絶竽瑟、塞瞽曠之耳、而天下始人含其聰矣、滅文章、散五采、膠離朱之目、而天下始人含其明矣、毀絶鉤繩、而弃規矩、攦工倕之指、而天下始人有其巧矣、故曰大巧若拙、削曾史之行、鉗楊墨之口、攘棄仁義、而天下之德始玄同矣、彼人含其明、則天下不鑠矣、人含其聰、則天下不累矣、人含其知、則天下不惑矣、人含其德、則天下不僻矣、彼曾史楊墨師曠工倕離朱者、皆外立其德、而以爚亂天下者也、法之所無用也、

【大意】上段の聖智は盜賊の利と爲るを言へるより、更に層進して天下の害と爲ることを言ふ、

【通釋】故に古人も言へるあり、魚は淵中に居ればこそ生活を爲し居れ、一たび水を離るれば忽ち死す、故に魚は淵を脫るべからず、其れと同じ道理にて、國の利器即ち治國の術は唯だ爲政者が承知すべき者に

怒、乃發兵、與齊攻魯、梁惠王常欲擊趙、而畏楚救、楚以魯爲事、故梁得圍邯鄲」と、又許愼が「淮南子」の注を引て曰く、楚會諸侯、魯趙俱献酒於楚王、魯酒薄而趙酒厚、楚之主酒吏、求酒於趙、趙不與、吏怒乃以趙厚酒易魯薄酒、奏之、楚王以趙酒薄、故圍邯鄲也と、今後説を用ふ、〔聖人生而大盜起〕「郭注」に夫脣竭、非以寒齒、而齒寒、魯酒薄、非以圍邯鄲、而邯鄲圍、聖人生非以起大盜、而大盜起、此自然相生必至之勢也と云へり、〔夫川竭而谷虚〕虚は水の虚く無くなること、川谷は共通の水なれば一方が竭くれば他の一方は亦隨うて自ら虚くなるなり、〔丘夷而淵實〕夷は平なり、丘は「ヲカ」と訓す、土の高處なり、實は塡實すること、淵の深きも丘の高き土を以て塡むるときは丘の平坦に爲ると共に、淵は土が實ちて全く埋まるなり、〔聖人已死則大盜不起〕陸樹芝曰く川丘二句、陪出聖人、谷而無復有川則自虚、淵而塡之以丘則自實、理之顯然者也、聖人死而大盜不起、亦猶是已、〔爲斗斛以量之〕斗は「前漢書」の律歴志に斗者聚斗之器也とあり、俗に一升桝と云ふもの、斛は音「コク」、十升曰斗と「説文」に見えたり、此にては

俗に云ふ一斗桝なり、〔爲之權衡〕權は稱錘なり、「フンドウ」と訓す、衡は斤兩なり、「ハカリノサホ」と訓す、權は往來して物の輕重を稱りて、其の中を取る器械衡は權を任へ、物の輕重を平均にするもの、共に約して「ハカリ」と云ふ、〔爲之符璽〕符は、割り符なり、「成疏」に符者分爲兩片、合而成一とあり、璽は王者の玉印なり、〔竊鉤者誅〕鉤は腰帶環なり、〔而仁義存焉〕仁義禮法皆其の手に由りて出づるを謂ふ、王引之曰く存焉の二字は焉存に作るべし、焉は於是と同義、乃ち仁義於是乎存の意なり、「聘禮記」に及亨發、氣焉盈客とあり、「晉語」に焉始爲令とあり、「管子」の揆度篇に民財足則君賦斂焉不窮とあり、「左傳」の僖十五年晋於是乎作爰田、晋於是乎作州兵とあるを、國語には晋焉作轅田、焉作州兵とあるが如き卽ち其證なり、〔故逐於大盜〕逐は隨なり、大盜の術を隨うて用るなり、〔揭諸侯〕揭は擧なり、諸侯の位號を稱擧すること、〔軒冕之賞〕賞するに軒冕を以てすること、軒は大夫の乘る車なり、冕は大夫の戴く冠なるを以て共に高位高官を謂ふ、〔斧鉞之威〕威するに斧鉞を以てすること、斧鉞共に「ヲノ」



軒

冕

斧　鉞

曰く蝎當讀爲蝎其尾之蝎、「說文」豕篆說解曰、蝎其尾、故謂之豕、是也、蓋蝎之本義、爲負擧、蝎其尾、卽擧其尾也、此云唇蝎者、謂反擧其唇以向上と、是れ亦一說とすべし、〔魯酒薄而邯鄲圍〕魯は國の名、邯鄲は趙國の都なり「釋文」に曰く楚宣王朝諸侯、魯恭公後至、而酒薄、宣王怒欲辱之、恭公不受命、乃曰、我周公之永長於諸侯、行天子禮樂、勳在周室、我送酒、已失禮、方責其薄、無乃太甚、遂不辭而還、宣王

法度の上に又聖人知者が工夫せられたる法を治めんとするときは、法愈々出でて益々盗賊が惡事を爲す上に利用せられて、詰り聖人の數を重さぬるに非らずして盗賊の數を重さぬる次第となるなり、今先づ其の例證を少しく擧げて云はんに、聖人はもと世の人々が互に相欺きて私利を營むを防がんが爲めに、之が斗斛即ち大桝小桝を造り物の多少を量ることゝすれば、大盗は其の斗斛をも併せて其の儘之を竊みて用ひ、聖人は之が權衡を造りて物の輕重を稱ることゝすれば、大盗は其の權衡をも併せて其の儘之を竊みて用ひ、之が割り符印璽を造りて證據の用となすときは、大盗は其の符璽其儘併せ竊みて之を用ひ、聖人は之が仁義の行を示して之を矯め直さんとすれば、大盗は仁義其儘併せて竊みて用ふ、凡て聖人が防禦手段を講すれば講ずる程彼れ大盗は益々狡智を揮うて己が勝手なる方に利用せり、然し此れは餘り妄斷的の論に聞ゆれども抑も亦其の證佐あり、何を以て之を知るかと云はんに、均く盗賊なれども、彼の鉤を盗める小泥坊は直ちに法律に處せられて誅戮せられ、之に反して國家を竊み奪へる大盗は更に益々尊榮にして諸侯となり、既に諸侯と爲りし以上は外面に種々樣々なる恩惠善行を爲て其家には仁義の名擧が永く存在することゝなれり、左すれば是れ豈に大盗が國を竊むときは仁義聖知の法をも幷せて竊める者にあらずや、されば大盗たる利益を逐うて、我も我もと爭うて諸侯の名號を高く唱へ、聖人がもと治國の具に供したる仁義を竊み、斗斛權衡符璽の利益までを幷せて竊む大膽不敵なる姦物に至ては、たとひ軒冕之賞とて高官大祿の褒美を與へしとて其の位の事にて善事を勸むる能はず、斧鉞之威とて死刑に處せんと威せばとて其れ式の事にて惡事を禁止する能はず、卽ち大利益の存ずる所は如何なる勸誘壓迫が有らうとも、人は皆な排除して利益に向つて進む者也、されば前に述べし此の他に重くて盗跖を利して益々其の惡事を助長して禁止すべからざるに立ち至ら使むるものは、是れぞ此に著明なりしが如く、聖人の過失なり、卽ち聖人が人智を開發せしより起りし結果と謂はざるべからず、

【解義】「唇竭則齒寒」竭は盡なり、唇竭とは唇の無きを謂ふ、「左傳」に唇亡齒寒とあると同義なり、俞樾

竊國者爲諸侯、諸侯之門而仁義存焉、則是非竊仁義聖知邪、故逐於大盜揭諸侯、竊仁義幷斗斛權衡符璽之利者、雖有軒冕之賞弗能勸、斧鉞之威弗能禁、此重利盜跖而使不可禁者是乃聖人之過也、

【大意】聖人と大盜と各々善惡の兩極端に立ちながら、此の兩者が意外の密接なる關係を有し、遂に世は善人少くして惡人多きが爲めに聖智の善意を以て發明せし諸文明も、反りて盜賊に利用せられて天下の惡事を助長するに至ることを言ひ、以て道德に依らずして智術を弄ぶ弊害を痛論せり、

【通釋】さて聖人と大盜とを一束にして攻擊するは頗る酷論に聞ゆれども、右の如く云へるは何ぞと云へば、古語にも唇と齒とは利害痛痒を相感ぜざるが如きも、唇が反囘して上に向ふときは直接に風氣を受くるが故に、齒は爲めに冷えて寒し、魯の酒が薄きと厚きとはもと趙國に無關係なれども、趙は魯國の酒が薄きが故に、其の都なる邯鄲は楚國の兵に圍まれしことあり、聖人と大盜とは何等の誘引的關係なき筈なるに、聖人が生れ出づると智德を明かに示せるが故に、大盜は之を己に利用して起るなり、されば今其の智德の鼓吹者たる聖人を先づ擊ち仆し、一方には盜賊か囚はれを解き放して、而して後ちに天下は始めて淳朴の世に立ち戻りて世は泰平と爲りて治まるべし、一體物は原因結果の互に關係せるものなり、川の水が竭くるときは谷間の流は爲めに空虛と爲り、高き丘の土が平かなるときは淵の深さも爲めに埋まりて、土が實つることゝなるなり、聖人が已に死して無くなるときは大盜も智慧の假り所が無き故に自然世に起らず、されば天下は太平にして何等の事故なかる可し、尙ほ繰り返して云ふやうなれども、智慧の淵源たる聖人が死せざる以上は、世の大盜賊は何時に至るとも止まず、故に世の爲政者は盜賊の止まざるを取り押へんが爲めに、既に設けられし

弘施」萇弘は周に仕へし賢臣なり、忠義を以て殺さる、事は春秋哀公三年に見ゆ、施は音「シ」、裂なり、「淮南子」に萇弘鈹裂而死とあり、〔子胥靡〕子胥は伍員の字なり、呉王夫差に事へ、讒を以て殺さる、靡は糜と同じ、糜爛なり、其の尸を江中に投して糜爛せしむることを謂ふ、「崔注」に爛之於江中とあり、〔故四子之賢云云〕陸樹芝曰く引四子之死見聖人之道、賢者得之、不足以保其身、而反以害其身、以跌起大盜假之、反足以濟其惡也と、〔夫妄意至聖也〕確據すべき者無くして度る故に妄と云へり、意は度なり、「ハカル」と訓ず、億と同じ、「論語」の先進篇に億則屢中とあるを、「漢書」の貨殖傳に引きて億を意に作る、即ち其の證なり、乃ち意を以て推し度ること「成疏」に室中庫藏、以貯財寶、起妄心斟量商度、有無必中、其驗如神、故言聖也とあり、聖は智の深きものを聖と曰ふ、〔知可否智也〕可否は事爲に就いて云ふ、成疏に知可則爲、不可則止、識其安危、審其吉凶、往必克捷、是其智也とあり、〔不得聖人之道〕「成疏」に聖人之道、謂五德也とあり、即ち上文の聖智勇義仁の德を指して聖人之道と謂ふと解したるなり、

故曰、脣竭則齒寒、魯酒薄而邯鄲圍、聖人生而大盜起、掊擊聖人、縱舍盜賊、而天下始治矣、夫川竭而谷虛、丘夷而淵實、聖人已死則大盜不起、天下平而無故矣、聖人不死大盜不止、雖重聖人而治天下、則是重利盜跖也、爲之斗斛以量之、則并與斗斛而竊之、爲之權衡以稱之、則并與權衡而竊之、爲之符璽以信之、則并與符璽而竊之、爲之仁義以矯之、則并與仁義而竊之、何以知其然耶、彼竊鉤者誅、

を積み與ふるものに非るか、世間の云へる至極の聖人たる者は反りて大泥坊の爲めに貨物の守り番をなす者に非るか、予は左樣に思へるが何を以て其の然るを知るかと云はんに、昔し夏の忠臣龍逢は桀王に斬られ、殷の忠臣比干は紂王に剖れ、呉の伍子胥の死體は呉王夫差に水中に投げ込れて爛れ、周の萇弘の身は晉君に腸を刳れて死せり、かれ四子の忠賢なる身を以て而かも其の身は以上の如く各々誅戮に遭へり此れ皆本は其の聖智の才德あるを以て人の嫉惡を受けて害せられたるなり、されば昔し盜跖の徒黨は巨魁の盜跖に尋問して、我が盜賊仲間にも矢張り人並に道德と申すものがあるかと云ひけるに、流石の盜跖なり、曰く苟も人たらん者は何れに適くとして道德の無きことと有らんや、卽ち如何なることにても必らず道德は無くて叶はざるなり、夫れ先づ人家に入らざる前に於て、當て推量にて妄に人の室中に藏めてある者を意ひ考へて、有無の見當を付くることは智慧の深き聖なり、他の手下共に先だちて冒險的に入ることは勇なり、引き揚げの際に他人より後れて出づることは義なり、事の行ふ可きと否とを知りて判斷を爲すことは智なり、贓品を分配する平均にして偏頗なきやうに爲すことは仁なり、此の聖勇義智仁の五者が具備せずして、而かも能く大盜たることを成就せし者は天下に於て未だ一人も有らざるなり、是の點よりして觀察するときは、善德ある人も聖人の道を得ざれば、世に立ち行くを得ず、盜跖も聖人の道を得ざれば亦世に立ち行くを得ず、乃ち善惡双方共に各々自分の方へ聖人の道を利用するものなるが、要するに天下の善人は其の數甚だ少く、而かも不善人の數は甚だ多きものなれば、聖人が天下に利益を與ふることは甚だ少くして、而かも天下に損害を與ふることは甚だ多き割り合ひなり、

【解義】〔所謂至知者〕至は至極なり、知は智と同じ、前節は單に知と云ひ聖と云へるに對し、本節は至の字を加へて至知至聖と云へり、乃ち更に一層を推進して論せしなり、陸樹芝曰く、就聖知推上一層、加一至字、方拍到正意、却仍用前文筆法、漸々引入、極波洞層摺之妙と、〔龍逢斬比干剖〕龍逢、比干の事は既に人間世篇に解せり、殷の紂王比干の心を剖て之を觀しこと亦史記及び十八史略等に見ゆ、〔萇

にして、莊子は乃ち威王の子宣王と同時なれば、十二世と云ふべからず、是れ前に擧げし「通義」等の其の疑作たるを論ぜし所以なるが、兪樾は曰く疑莊子原文、本作世世有齊國也、古書遇重字、止於字下、作二字以識之、應作世世有齊國、傳寫者誤倒之、則爲二世有齊國、於是其文不可通、而從田成子追數至敬仲、適得十二世、遂臆加十字於其上耳と、按ずるに此の說從ふべきに似たり、王先謙は曰く姚云、自田常（卽ち田成子）至王建十世、上合桓子無宇、釐子乞、爲十二世、田氏自桓子始大故合言十二世と、

嘗試論之、世俗之所謂至知者、有不爲大盜積者乎、所謂至聖者、有不爲大盜守者乎、何以知其然邪、昔者龍逢斬、比干剖、萇弘胣、子胥靡、故四子之賢而身不免乎戮、故跖之徒、問於跖曰、盜亦有道乎、跖曰何適而無有道邪、夫妄意室中之藏、聖也、入先、勇也、出後、義也、知可否、知也、分均仁也、五者不備、而能成大盜者、天下未之有也、由是觀之、善人不得聖人之道不立、跖不得聖人之道不行、天下之善人少、而不善人多、則聖人之利天下也少、而害天下也多、

【大意】更に一段を進めて聖智の天下に大害あることを說く、而して其の害を擧ぐるに盜賊を利する點より推出す、

【通釋】尙又進んで云へば物が大なれば大なる程其の害も隨うて大なり、嘗試に之を論ぜんに世間の云へる至極の智者たる人は反りて大泥坊の爲めに利益

狗は共に畜中の物なれば、其聲の相聞ゆるは以て人家の稠きことを知るべし、〔罔罟之所布〕罔は網と同じ、罟は細き網なり、共に「アミ」と訓ず、布とは山村に獸を獵し水澤に魚を漁せんが爲めに網罟を布けるなり、〔耒耨之所刺〕耒は犁なり、「スキ」と訓ず、耨は音「トウ」、鋤なり、「スキ」と訓ず、或は曰く鋤の柄なり、所刺とは農作の爲めに地を掘ることを云ふ、「成疏」に齊即太公(呂尚)之後、封於營丘之地、逮恒公、九合諸侯、一匡天下、百姓殷實、無出三齊、是以雞犬鳴吠相聞鄰邑棟宇相望、罔罟布以事畋漁、耒耨刺以修農業、境土寬大、二千餘里、論其盛美、實冠諸侯」とあり、〔闔四竟之內〕闔は合なり、竟は境と同じ、乃ち四境の內を合せて一と爲すこと、〔宗廟社稷〕宗廟は祖先を祀れる靈屋なり、宗は尊なり、廟は貌なり先人の貌を髣髴として寄する處なるを廟と云ふ、社は土地の神を祀る處、稷は五穀の長なれば因て穀物の神を祀る處を稷と名づく、「白虎通」に人非土不立、封土立社示有土也とあり、「禮記」の祭義篇に建國之神位、右社稷而左宗廟とあり、乃ち凡そ國都は社稷を右に立て、宗廟を左に置きて王宮其の間に在るを以て定制と爲せり、〔邑屋州閭鄉曲〕市街村落の事なり、「司馬法」に六尺爲步、步百爲畝、畝百爲夫、夫三爲屋、屋三爲井、井四爲邑とあり、又五家爲比、五比爲閭、五閭爲族、五族爲黨、五黨爲州、五州爲鄉とあり、鄭玄は二十五家を爲閭、二千五百家爲州、萬二千五百家爲鄉也と云へり、「成疏」に置此宗廟等事者、皆放效堯舜以下聖人立邦國之法則也と、〔田成子一旦殺齊君〕田成子は齊の大夫陳恒なり、田はもと地の名にして、恒の祖先敬仲の釆邑なるを以て陳氏を改めて田氏と爲せり、成子は其の諡なり、陳恒其の君簡公を弑し、安平より瑯琊に至るまでの地を割きて自から封邑と爲す、恒の曾孫太公和に至り齊の康公を海上に遷し自立して齊侯と爲る、〔並與其聖知之法而盜之〕田成將さに齊を簒はんとして、公量を以て貸し(多貸)、私量を以て收め(寡收)恩惠を民に施し人心を攬りしこと「左傳」に見ゆ、便ち仁義の法を借りて其の盜賊の謀を濟せし跡尤も見るべし、故に莊子特に此を以て喩へしならん、「郭注」に曰く不盜聖法、乃無以取其國也と、〔十二世有齊國〕太公和が齊國を簒ひしより威王に至るまで三世

啼き聲は相互に聞え、網罟を布きて漁獵を爲す所や耒耨にて耕作を爲す所は、四方二千餘里に及び、四方の國境を限りて以内卽ち其の國中に於ては宗廟社稷建立し、邑屋州閭鄕曲とて家屋市街村を治むる仕方は何ぞ嘗て古への聖人を法則とせざらんや、皆悉く聖人の掟通りに爲せり、是れ宛かも前に述べたる彼の泥坊を豫防せんが爲めに嚴重なる固めを、篋嚢の類に施せしと同じ、然るに齊の大臣田成子と云へる人は一旦謀反を企て、其の主君齊侯を殺し、遂に其の國を盜み取りしが、然しながら豈に獨り其の國のみを盜み取りしならんや、兼て聖智なる人が定め置きたる法則までを併せて其の儘そつくりに盜み取れり故に彼の田成子は成程一方には人の國を奪ひし盜賊の惡名を負ひしと共に、一方には古への堯舜の如き聖王と同一に極めて安全なる地位に立てり、外外の國に於ても小國は畏れて敢て之を非議せず、大國も亦敢て之を誅滅せんとせず、其の子孫十二世の間齊國を領有して富貴尊榮を極めたり、されば是れ正しく反りて齊國を竊み併せて齊國の聖智の人が立て定められたる法則をも盜みて、彼れ自身を守る者ならずや、是れ彼の聖知は反りて盜賊の守り番たるに過ぎず、されば奚ぞ彼の前に述べし泥坊は反て唯だ盜品の入れ物が堅固ならざるを恐るゝ者に異ならんや、

【解義】〔胠篋探嚢發匱〕胠は脅なり、「ワキ」と訓ず、篋は竹を以て造れる籠なり、胠篋とは筐の傍を開くを謂ふ、探は手を以て物を取るなり、匱は匣なり、「ハコ」と訓ず、俗に櫃に作る、〔攝緘縢固扃鐍〕緘縢は共に繩なり、「ヒモ」と訓ず、攝は結束すること、扃は管鑰なり、鐍は鎖なり、扃鐍共に今の錠前の類なり、〔所謂知也〕知は智と同じ、〔揭篋擔嚢〕揭は擧なり、「アグ」と訓ず、擔は荷なり、「成疏」に攝緘縢固扃鐍者、以備小賊、然大盜旣至、負揭而趨、更恐繩約關鈕之不牢固、向之守備、翻爲盜資、是故俗知不足可恃と、〔鄕之所謂〕向は嚮と同じ、又鄕に作る、「サキ」と訓ず、〔鄰邑相望〕「釋名」に鄰、連也、相接連也とあり、「周禮」の地官遂人に五家爲鄰、四鄰爲里と云へり、邑は「周禮」の小司徒に四井（一井は方里九百畝）爲邑、四邑爲丘とあり、此の處の鄰邑は唯だ市街村落の槪稱と看るべし、〔雞狗之音相聞〕雞

聞、罔罟之所布、耒耨之所刺、方二千餘里、闔四竟之內、所以立宗廟社稷、治邑屋州閭鄉曲者、曷嘗不法聖人哉、然而田成子一旦殺齊君而盜其國、所盜者豈獨其國邪、並與其聖知之法而盜之、故田成子有乎盜賊之名、而身處堯舜之安、小國不敢非、大國不敢誅、十二世有齊國、則是不乃竊齊國、並與其聖知之法、以守其盜賊之身乎、

【大意】 小盜防御の備は反て大盜の利用にせらるを說きて、仁義法制は凡民を制馭すべきも傑起の姦雄あるときは反て野心を逞くする利器と爲ることを言ふ、宣穎曰く譬喩突起甚奇、守物之智、適足爲巨盜資、此人情所易明者、就小處寫入、喩意快絕と、

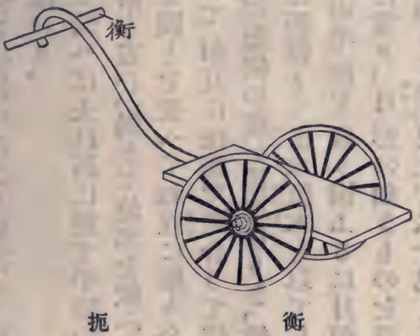
【通釋】 將に篋脇を開き嚢底を探り、櫃中を發きて物を竊み取る樣なる泥坊の爲めに嚴重なる守備を爲さんとすれば、必らず緘縢即ち封じ紐を結び、扃鐍とて錠鍵を固くおろして容易に開くべからざるやうに爲すならん、此れが世間に謂へる智者の爲なり、如何にも堅固至極なるに似たれども、一旦大泥坊が至るときは其の匱を背に負ひ篋を手に掲げ嚢を肩に擔ひながら趨りて、反りて唯だ緘縢扃鐍の固くならずして途中にて開かんことを氣使はるゝなり、されば前きに謂へる智者たるものは反りて大泥坊の爲めに盜品を積み重さねて手數を省きて遣りしものにて、寔に愚の至りならずや、今試みに之を論述せんに世俗に云はゆる智者は卽ち此の大泥坊の荷積を爲すと同樣にて、世俗の謂はゆる聖人と崇め敬ふ者も亦此の大泥坊の番守りと同樣ならずや、寔に情無き次第なり、扨て又何を以て其の然るかを知るかと云はんに、一つ例證を擧げん、昔し齊の國は周代の大國にて村里は相引き續き人戶の稠密なるよりして、家畜雞犬

胠篋第十

胠篋は篇首の二字を取りて名づけしなり、上篇既に馬性の矯誣に由りて天良を毀害せられたるに比して、世の好智害道の弊を論せしを以て、此篇又因りて彼の智術の百弊を釀生するは、聖人の仁義を以て天下に倡道せし故智を姦雄が假用して其の私利私欲を營むに由れることを論ぜり、宣穎曰く仁義聖知、本教天下爲君子、莊生從局外看破未足爲君子之資而反以助盜賊之用、蓋天道一陽、即有一陰、人事一利必有一害、通長算來、果然有之、不是莊子謬爲怪談也と、「通義」は本文中に田恒が齊君を殺して國を簒ひ十有二世有齊國とあるを以て、田恒は孔子と同時なるに合はず、又魯酒の薄きを以て楚が趙を伐ちしは其の後世なるを、本文は擧げて唇齒の論に竝べ指して往昔の故事と爲せる等の事を援きて、此非莊子之文、不然莊子年幾四百乎と云ひ、以て後世の莊文を擬襲して作れる者と爲せり、然れども文章上より觀て此等の作は莊子に非れば固より爲す能はずとは、古今人の説多く然りと爲す、蓋し古文の名篇もと後人の妄竄に由りて疑ひを世に貽せる者亦頗る多し、獨り莊子のみに非るなり、姑く信以て信を傳へ、疑以て疑を傳へて可なり、

將爲胠篋探囊發匱之盜、而爲守備、則必攝緘縢、固扃鐍、此世俗之所謂知也、然而巨盜至、則負匱揭篋擔囊而趨、唯恐緘縢扃鐍之不固也、然則向之所謂知者、今乃爲大盜積者也、故嘗試論之、世俗所謂知者、有不爲大盜積者乎、所謂聖者、有不爲大盜守者乎、何以知其然邪、昔者齊國隣邑相望、鷄犬之音相

相踶、分明是一箇畫馬圖也、〔馬知已此矣〕知は智と同じ、已は止と義同じ、「成疏」に馬知之知解、適盡於此と〔加之以衡扼〕衡は轅前の横木にて馬頸に交叉するものクビキと云ふ、扼は軛に同じ「クビキ」なり、〔齊之以月題〕題は額なり、「ヒタヒ」と訓ず、月題は馬の額上にて顱邊に月の如き形を爲すを謂ふ、「サカヤキ」と訓ず、〔馬知介倪〕知は智と同じ、介倪は李頤曰く猶睥睨也と、睥睨とは邪めに視ること、「ニラム」と訓ず、「成疏」に介は獨なり宣注に倪は睨と通ず、獨立して睥睨するなりとあり、〔闉扼鷙曼〕闉は曲なり、鷙は抵なり、曼は突なり、馬の頭を曲げて扼に級し、抵突して人を禦ぐこと、〔詭銜竊轡〕詭は詐なり、竊は盜なり、「宣注」に詭銜は其の



銜を吐出し、竊轡は其の轡を偸み嚙むことに解せり、〔而能至盜〕能は態と通ず、舊本みな態に作る、「郭注」に馬性不同、而齊求其用、故有力竭而態作者と、「集解」に能を態に作る、王先謙曰く充其所知而態至於盜と姑く一説として存す、〔赫胥氏〕上古の帝王なり、〔含哺而熙〕食物の口中に在るを哺と曰ふ、熙は嬉と同じ、「タワムル」又は「タノシム」と訓ず、〔民能已此矣〕已は止なり、〔屈折禮樂〕解已に上文に見ゆ、〔縣跂仁義〕縣は懸と同じ、跂は企と同じ、縣とは懸擧企及して人をして共に慕はしむるなり、「成疏」に高縣仁義令企慕とあり、乃ち高く仁義の行を衆人に懸け示し、之をして跂て及ばんことを願はしむとなり、「宣注」は懸空跂慕と解せり、此に依れば徒に仁義なる空想に耽りて之が實現を企つることを謂ふ〔踶跂好知〕踶跂の解、已に上に見ゆ、

名言

蹩躠爲仁、踶跂爲義、而天下始疑矣、澶漫爲樂、摘僻爲禮、而天下始分矣、

純樸不殘、孰爲犧尊、白玉不毀、孰爲珪璋、道德不廢、安取仁義、性情不離、安用禮樂、五色不亂、孰應六律、

乃始踶跂好レ知、爭歸レ於レ利、不レ可レ止也、此亦聖人之過也、

【大意】再び馬に就て喩を作し、下文を引起す、但起處の馬喩は伯樂が馬の天性を傷へるを言ひ、此の處の馬喩は馬が因りて奸智を生長せることを言ふ、乃ち前喩に一歩を進めて説けり、

【通釋】再び元へ返りて云へば夫れ馬に於て平陸の地に居れば、飢ゑて、野艸を食ひ、渇きて池水を飲み、喜ぶときは双方より頸と頸とを交へて相互に靡り合ひ、怒るときは背を向けて相互に後蹄で踶合うて爭ふ、馬の知識と申さば先づ此位の處が程度なりき、然るに彼の馬體に加ふるに衡扼とて横木頸木を以てして之を車に繋ぎ、又馬の毛竝を取り揃ふるに月題とて馬の額上の顱邊に當り、月形の如きものを造りて飾るときは、馬も亦隨うて猾智を生じ、介倪とて目を睨み張り闉扼鷙漫とて頸を曲げて扼に當てゝ衝突をなし、詭銜竊轡とて計を巧みて銜を外し、人目を掠めて轡を噛み、亂暴を極はむ、されば馬の如き誠に淺薄なる智慧と伯樂が餘りに馬を意地くり廻はして玩びし罪なり、今之を人類に引き直して見るも亦同然なり、彼の上古に當りて赫胥氏の時代には天下の人民平生靜かに居るときは、自ら何事を爲して可なるやを知らず、動きて行くときは亦自ら其の行先きの何處なるかを知らず、口に物を頬張りながら樂みて腹鼓打ちて呑氣に遊びしが、當時の民度は先づ此位の處が關の山なりき、然るに後世聖人が出でゝ勉強して禮樂を行ひ以て天下の人の形體を矯め正たし勉強して仁義を行ひ、以て天下の人々の心を慰め安ずるに至るに及んで、人民の能力も亦隨うて發達し勉強して智を好み、我れ先きと爭うて皆共に利益一點張りに歸し趣きて、竟に制止すべからず、時の移り世の變るに隨ひ、益々激烈となれり、因て前の馬を論ずる筆法より推すときは、此れ亦聖人が智術を以て、人民に臨みしより、之が反動を引き起せしものにて全く聖人の過ちなり、

【解義】〔交頸相靡〕頸は領なり、靡は摩と通ず、希逸曰く相靡相摩擦也と、〔分背相踶〕踶は蹈なり、馬の相蹈むときは必らず後に向ひ蹄を揚ぐるが故に、此の如く云へり、希逸曰く喜則交レ頸相靡、怒則分背

「禮記」の樂記に先王之制禮樂也、非以極口腹耳目之欲也、將以敎民平好惡而反人道之正也とあり、又禮節民心樂和民聲」とあるが如きは皆禮樂の性情に關する甚だ切なるを云へり、莊子は又老子と同じく、禮樂を擯斥せる者なり、故に禮樂を以て性情を離つものと爲せり、「成疏」に禮以撿迹、樂以和心、情苟不散、安用和心、性苟不離、何勞撿迹とあり、乃ち禮樂は性情既に散離すればこそ之を治むるが爲めに必要なれ、若し性情完全にして渾一たるときは、初めより和心撿迹の用なきを謂ふ、〔孰爲文采〕五色の人を迷はし亂はすことは文采の炬赫なるに由れるを謂ふ〔孰應六律〕五聲の混亂することは六律の紛起するに因るを謂ふ、「郭注」に曰く、此皆變樸爲華、棄本崇末、於其天素有殘廢矣と、宣穎曰く歷證其言之不謬、前用犧尊珪璋、後用文采六律、將仁義禮樂、夾在中間、蕩漾活潑と、

犧尊

夫馬陸居則食草飮水、喜則交頸相靡、怒則分背相踶、馬知已此矣、夫加之以衡扼、齊之以月題、而馬知介倪、闉扼鷙曼、詭銜竊轡、故馬之知而能至盜者、伯樂之罪也、夫赫胥氏之時、民居不知所爲、行不知所之、含哺而熙、鼓腹而遊、民能已此矣、及至聖人、屈折禮樂、以匡天下之形、縣跂仁義、以慰天下之心、而民

る不自然の行爲あるよりして、人民は反りて之を疑ひて信せず、澶漫とて、「ダラシゲナク」音樂を爲し、摘擗とて、手足を屈め折りて禮義を爲し、人の心は蕩けて、貌は詐僞多くなり、天下の人人始めて相分かれて、復た太古の一而不ㇾ黨と云ふが如き美風を見るべからず、されば天下の物は皆もと人智の區々を恃みて小細工を施すが爲めに、天眞の良性は破壞せらるゝなり、彼の純樸なる全木も人が殘ひ削らずして天生の儘なるときは、誰か之を犧尊とて酒を盛る器と爲さんや、白き寶玉も人が碎て毀たざれば誰か之を珪璋として用ひんや、其れと同じ道理にて、道德が廢棄せられずんば、安くにか仁義と云ふものを態々取り出だして言はんや、人の性情が離れ散らずして渾全たるときは、安くにか禮を用ひて、身を檢束し、樂を用ひて心を融和する必要を感ぜんや、色が全く融合して一となり、今更混淆せざれは誰か文采を爲して、人目を炫惑せんや、五聲が全く一調にして今更淆亂せざれば誰か六律に相應へて遞に調子の變化を弄ばんや、夫れ折角なる純樸を殘破して、犧尊の如き器を爲りしは全く工匠が私智を弄びし罪なり、道德を毀害して仁義の行を爲して苦めることは、聖人が妄動を喜べる過ちなり、總べて天下の有らゆる事物は、皆是の如く虛無の眞理に乖ひて、徒に有爲の功を建てんと欲せしより、紛々擾々たる禍害を起せるなり、

【解義】〔蹩躠爲仁〕蹩躠は音「ベッセッ」、「成疏」に用力之貌とあり、「宣注」には跛者行不ㇾ正貌とあり、乃ち勉強して仁を行ふこと、〔踶跂爲義〕踶は音「テイ」、跂は音「キ」、踶跂は「成疏」に矜恃之容とあり、「宣注」に起ㇾ足用ㇾ力貌〔澶漫爲樂〕澶は音「タン」、澶漫は縱逸の貌、〔摘僻爲禮〕摘僻は「成疏」に曲拳之行とあり、曲拳は禮を爲す容なり、既に人間世篇に見ゆ、郭嵩燾は曰く摘僻當ㇾ作二摘擗一、「楚詞」王注擗析也、摘者摘ㇾ取之、擗者分ㇾ拆之、謂二煩碎一也と、〔孰爲犧樽〕犧尊は宗廟祭祀の時に酒を盛る器なり、刻して牛首の形を成す故に犧尊と曰ふ、又犧を讀みて、「サ」と爲し、牛首を刻せしに非ずと爲す説もあり、天地篇に詳かなり、〔孰爲珪璋〕珪は上鋭にして下方なる玉、半珪の玉を璋と曰ふ、〔安取仁義〕老子に大道廢有二仁義一とあり、老莊の一派は仁義を以て道德の無用の物と爲せり、故に此の説あり、前篇の駢拇篇を參看すべし、〔安用禮樂〕

チ」と訓ず、〔澤無舟梁〕水道の未だ通ぜざるを謂ふ、舟は船なり、梁は橋なり、「成疏」に人知守分、物皆淳樸不伐不奪、徑道所以可遺、莫往莫來、船橋於是乎廢とあり、〔連屬其鄉〕人人各々外に出でず、其鄉に隨うて居り、自から連屬を爲すこととなり、〔可攀援而闚〕闚は窺と同じ、〔族與萬物並〕族は聚なり、並は相並びて立つなり、〔惡乎知君子小人哉〕「成疏」に既而巢居穴處、將與鳥獸而不分、含哺鼓腹、混羣物而無異、於何知君子、於何辨小人哉と、〔同乎無知〕同乎は無知なる貌、既に前に見ゆ、知は智と同じ、〔其德不離〕「郭注」に知則離道以善也とあり、乃ち其の智を弄び外物を以て、自から善くせんと爲ざるが故に、其の自然に生れ付たる持ち前の性分は無智に同じき故に、渾然として本性の儘にして相離れずとなり、〔是謂素樸〕素樸は質素樸實なること、〔而民性得矣〕得とは失の反對にして、卽ち失はずして持ち耐ふること、「成疏」に夫蒼生所以失性者、皆由滯欲故也、既而無欲素樸、眞性不喪、故稱得也とあり、

及至聖人、蹩躠爲仁、踶跂爲義、而天下始疑矣、澶漫爲樂、摘僻爲禮、而天下始分矣、故純樸不殘、孰爲犧樽、白玉不毀、孰爲珪璋、道德不廢、安取仁義、性情不離、安用禮樂、五色不亂、孰爲文采、五聲不亂、孰應六律、夫殘樸以爲器、工匠之罪也、毀道德以爲仁義、聖人之過也、

【大意】末世の聖人の所爲は民の常性に悖れるを言ひ、申ねて聖人の過ちなることを斷ず、

【通釋】然るに後世の聖人に至るに及んでは太古の無爲なるに反し、務めて有爲を以て天下を治めんとせり、乃ち仁義禮樂に力を入れて、蹩躠とて、勉强して仁道を行ひ、踶跂とて、骨折りて義を行ひ、種々な

を作り、各々生活の業を營めるは何れも同じき持ち前なれば、之を大同の德と稱す、此れ渾一にして決して或る一方に偏せず黨せず、至極に圓滿にして中分なきことなるが之を名付づけて天放と申して、即ち天然に任かして自由なることゝ謂ふなり、かるが故に上古至德の世は民の性は眞淳にして何等の野心企慕なければ、其の足の運び振りは塡々と遲く重くして輕率ならず、其の目付きは顚々と專一的なり、是の時に當りては人々自から其の處に滿足して他鄕に移住する觀念もなければ、往來共に殆んど無きが故に山に徑路もなく、澤に舟橋もなし、萬物は羣りて多く生し、各々其の鄕里に連らなり續きて居り、禽獸は聚りて各々社會を爲し草木は發達を遂げて長ぜり、人々淳樸にして物を害せざるが故に、萬物も人々に狎れ親しみ禽獸も繫ひて相手として共に遊ぶべく、鳥鵲の巢も人は木を攀ぢて其の中を窺ふを得べし、夫れ至德の世には人々同じく禽獸を相手にして居り、人々聚りて萬物と一所に竝び立つを得べし、此の如くなるときは孰が同類か異類かも分たれざれば、何ぞ況して同一なる人類中に於て君子小人を知り分つことを得んや、同乎とて皆何れも無智に同くして其の德は渾然として離れず、萬物何れも各々淸廉にして無欲に同じくして後世の浮華許り多きに異れり、是を素樸の民と謂ふ、此の如く素樸なるときは民の本性各々自得にして、至極盛德なる時代と申すなり、

【解義】〔吾意善治云云〕「義海」に曰く、前論治道之弊、欲有以革去之、故此謂善治者不然と「成疏」に善治之術、列在下文と云へり、〔是謂同德〕「成疏」に德、得也、率其眞常之性、物各自足、故同德と、郭象曰性之不可去者衣食、事之不可廢者耕織、此天下之所同而爲本也、守斯道無爲至矣と、〔一而不黨〕「成疏」黨は偏なり、「宣注」に渾一無偏とあり、蘇輿は與天爲一、泯善惡之黨と、乃ち自然と合一して善もなく惡もなく渾然たるを謂ふと也、〔命曰天放〕天は自然なり、放は解放なり、天放とは天の解放せる者にして養生主篇にある古者謂是帝之懸解とある義と相同じ、〔其行塡塡〕塡塡は質重なる貌、又重遲なり、〔其視顚顚〕顚顚は專一なり、「成疏」に守眞內足、塡塡而處無爲、自不外求、顚顚而游於虛淡とあり、〔山無蹊隧云云〕蹊は徑なり、隧は道なり、共に「ミ

性を賊ひ敗る者の過ちと同じきなり、即ち其の善く天下を治むる者と譽めらるゝ程、隨うて益々民性を敗ると同理なり、

【解釋】〔陶者曰我善治埴〕陶者は窰なり、陶器を造る職人なり、埴は音「シ」粘土なり、〔圓者中規云々〕規は「ブンマハシ」、矩は「サシガネ」と訓ず、既に前に解せり、〔曲者中鉤〕鉤は曲なり、下句の繩と共に工匠の用ふる定木を謂ふ、〔此亦善治天下者之過也〕「集解」に其過與治天下者等とあり、即ち伯樂、陶の物の本性を矯むる過ちは、彼の政事家が天下を治めて民性を矯むる過ちと同等の意なり、宣穎曰く用將二喩（前節の馬と本節の陶匠）作一總束、帶起治天下一句と、又曰く上文曰稱善治、此又曰世々稱爲善治、畫出世人以聲附聲、毫未致察と、

吾意善治天下者不然、彼民有常性、織而衣、耕而食、是謂同德、一而不黨、命曰天放、故至德之世、其行塡塡、其視顚顚、當是時也、山無蹊隧、澤無舟梁、萬物羣生、連屬其鄕、禽獸成羣、草木遂長、是故禽獸可係覊而遊、烏鵲之巢、可攀援而闚、夫至德之世、同與禽獸居、族與萬物並、惡乎知君子小人哉、同乎無知、其德不離、同乎無欲、是謂素樸、素樸而民性得矣、

【大意】眞正善治の政は自然の本性に順ひ拂亂せざるに在ることを言ふ、宣穎曰く善治云々二語、緊接轉入正意と、

【通釋】吾は意ふに眞の善く天下を治むる者は、左樣に善治馬とか善治埴木とか云へるが如く譽めそやすことを爲さざるなり、全體を云へば彼の人民に先天的に極りたる常性ありて寒暑を凌がん爲めに織りて衣服を作り、飢餓を凌がん爲めに耕作して食物

「ト、ナフ」と訓す、「操觚字訣」に依れば整は齊也、束ねて少しく撃ちて正からしむる也と註す、つま辻、りんとそろへ、くひちがひなきやうに、することなり、齊は整也無偏頗也、莊也、肅也、正也、出入こじなしに一様にそろふこと也、物のさきを、きりそろへたるやうに、ぎやうぎなる也とあり、「成疏」に整之以衡梔、齊之以鑣轡とあり、〔橛飾之患〕橛は馬銜なり、「クツワ」と訓す、橛一に橜に作る「史記索隱」に「周輿服志」を引て、鉤逆上者爲橛、橛在衡中、以鐵爲之、大如雞子と、郭慶藩は云へり、飾は馬纓を飾るなり、卽ち「クツワ カザリ」を加ふること、〔鞭筴之威〕筴は策と同じ、鞭策共に「ムチ」と訓す、「成疏」に帶皮曰鞭、無皮曰策、倶馬杖也とあり、

陶者曰、我善治埴、圓者中規、方者中矩、匠人曰、我善治木、曲者中鉤、直者應縄、夫埴木之性、豈欲中規矩鉤縄哉、然且世世稱之曰、伯樂善治馬、而陶匠善治埴木、此亦治天下者之過也、

【大意】　又一喩を設けて前理を申明す宣穎曰く陶一喩、匠一喩雙叙、下總一折、馬性叙在前、埴木性煞在後、文法倒轉と、

【通釋】　陶器を造る者は曰く我は善く粘土を扱ひ、圓形なる器は規に叶ひ、方形なる器は矩に中りて、卽ち方圓共に巧みに法則に中るやうに爲すべしと、木匠は曰く我は善く木材を扱ひ、曲れる處は鉤に叶ひ、直き處は縄に叶ひて、卽ち曲直共に法則に中るやうに巧みに爲すべしと、然しながら粘土や木材の本性は固より人の細工物に使はるゝが目的で生れ來りたるものに非れば、其の方圓が規矩に中り、曲直が鉤縄に中ることを望むが如き心は、毛頭も之なきなり、然れども世々の人は之を稱讃して曰らく、流石は伯樂は善く馬を扱へり、而して陶工木匠は善く粘土や木材を扱へりと、此の話は亦全く天下を治むる者が民の本性を矯めて種々なる人工的仕事を加へ、善く天下を治むる者と譽められながら、反りて民の本

られて、死する者が十中に二三なりき、尙又飮食の度數までに干渉し、馬を饑渴せしめ、馬を馳け廻はし、又馬を整齊して相慣らし、前には橛飾とて馬銜を嵌め膺纓を垂れて進歩を妨げ、後ちには鞭策を用ひて頻に擊て退くを得ざらしめ、馬は之が爲めに進退に窮して死する者已に半數以上に達せり、是れ其の天性を迫害せし結果にて、實に寒心すべき事ならずや、

【解義】〔馬蹄可踐霜雪〕蹄は馬足の甲なり、「ヒヅメ」と訓す、〔齕草飮水〕齕は音「コツ」「カム」と訓す、〔翹足而陸〕翹は擧なり、陸は跳なり、「ハネル」と訓す、郭慶藩曰く「釋文」引崔本足作尾可從「文選」江賦注引莊子正作尾、陸作踛、踛音「六」、說文踛曲脛也、讀若逵、踛卽逵之異體、本文作陸、乃踛之譌と、〔義臺路寢〕義は儀と同じ、儀臺は禮儀を行ふに用ふる場所なり、兪樾曰く儀臺猶言容臺、淮南子覽冥篇、容臺振而掩覆、高注曰容臺行禮儀之臺、儀與容異名同實と、路寢は正室なり、路は正なり、大なり、〔乃至伯樂〕伯樂はもと天星の名也、馬を典るを以て遂に善馭者の孫陽の異名となれり、孫陽は秦の穆公の時の人なり、〔燒之剔之〕燒は鐵を燒て炙るなり、燒印をなすこと、剔は音「テキ」剃なり、毛を剃ること、〔刻之雒之〕刻は馬蹄を削ること、雒は司馬彪は謂羈絡其頭也と云へり、乃ち雒を絡と相通と爲して、馬首を絡ふと解せり、郭嵩燾は上の四句は專ら馬身に就いて下文の羈馽阜棧に至りて始めて銜勒の事に及べば、雒は當に烙に作るべし、火鐵を烙となす、杜甫が詩に細看六印帶官字とあり、六印亦火印に作る、乃ち燒之剔之は其の毛色を理むるを謂ひ、刻之雒之は其の表識を存するを謂へりと、兪樾も同說にて今官馬以火烙其毛皮爲識、卽其事矣と云へり、〔連之以羈馽〕羈は音「キ」、勒なり、馬首を絡ふもの、「オモヅラ」と訓す、馽は音「テキ」馬の前兩足を絡ふもの、〔編之以阜棧〕編は列なり、阜は音「サウ」槽櫪なり、馬飼桶とも云ひ、又馬閑なり、馬の部屋とも云ふ、棧は音「サン」木を編みて床となし、馬の脚を安んじて濕氣を禦ぐもの、床のこと、〔馳之驟之〕馳は控轡而驅曰馳と「品字箋」に云へり、又「詩經」の注に小曰馳、不馳而小疾曰驟、又凡疾速曰驟とあり、乃ち驟は馳よりは、しづかにして馬をあゆまする也と、「操觚字訣」に見ゆ、〔整之齊之〕齊整共に

義に曰く此篇意不多而詞費、其擬莊之作乎、大意只是法立而弊生、見至德之治非以明民、將以愚之也、愚則天性不鑿、立法則加損於性外、矯揉而爲之、故曰以智治國、國之賊と、宣穎曰く前後用譬喩、錯落洗發、如雨後青山、最爲醒露と、

馬蹄可以踐霜雪、毛可以禦風寒、齕草飲水、翹足而陸、此馬之眞性也、雖有義臺路寢、無所用之、及至伯樂曰我善治馬、燒之剔之、刻之雒之、連之以羈馵、編之以皁棧、馬之死者十二三矣、饑之渴之、馳之驟之、整之齊之、前有橛飾之患、而後有鞭筴之威、而馬之死者已過半矣、

【大意】先づ題意を叙し馬を御する方を以つて民を治むる道を明かにす、此篇首尾彤容馬之性情喜怒、曲盡其態、雖畫筆之工、曾不是過、然則人心之善否、又安能逃其精鑒哉と、是れ朱得之の評なるが、先づ我が心を得たり、

【通釋】 智術を以て天下を治むるの不可なることは、請ふ養馬の事に就いて之を喩へん、馬は野生の儘に爲し置くときは蹄の堅きは十分に霜雪の寒さを踐むに堪ふべく、毛の厚きは以て風威寒氣を禦ぐに堪ふべく、而して飢ゑては野草を咬み、渴けば川水を飲み、心に感ずるあれば足を高く揚げて跳走ることは、此れ馬の眞個の天性なり、されば彼の人類が立派に壯大なる宮室として好める儀臺路寢の設けありとも、馬其物に於ては全く之を使用すること無きなり、馬の本性は先づ是の如くなるに名高き伯樂と申せる人が出づるに及びては種々小賢しき智慧を弄びて、我は善く馬を取扱ふとて之に燒印を爲し、之が毛を剃り之が蹄を削り、之が首を縛り又幾匹となく之を連ねて羈馵とて首を縛り、足を縛り之を編列するに、皁棧とて馬部屋の中へ追ひ込みて排列せしめて飼養するを以て、馬は其の束縛と驅逐とに天性を迫害せ

注」に此舍己效人者也、雖效之若人而已矣とあり、乃ち其の意は假りに其の目的の如く達し得るも、徒に人の爲を見效ひしに過ぎずして、既に自己の本領を沒却せるものとなり、〔是同爲淫僻〕淫は滯なり、僻は邪なり、「郭注」に苟以失性爲淫僻、雖所失之塗異、其於失之一也とあり、王先謙曰く大宗師篇に狐不偕・務光・伯夷・叔齊・箕子・胥餘・紀他・申屠狄是役人之役、適人之適、而不適其適者也、莊子以全生爲大、故於伯夷一流人、深致不滿、此所見與聖人(孔子)異也と、〔余愧乎道德〕「宣注」に謙詞とあり、乃ち莊子自から非才にして道德を爲す能はざるを愧づと謙遜して云へるなり、〔上不敢爲仁義之操〕操は操守なり、「宣注」に既不能爲道德、又何敢妄爲致傷乎とあり、又曰く莊子將仁義淫僻例視、何有上下之目、此上下二字、就俗見言之と、愚案ずるに下句に下不敢爲淫僻之行とあるを觀れば、莊子は仁義を除去したる行を以て淫僻と爲して盜跖一流の人を指して云へるなり、「通義」に曰く、若其不自得適、一徇乎人、則是同爲淫僻耳、賢不肖也、奚擇、南華(莊子)自謂、上下不敢而安於性命之自得、斯爲道德之正也歟と、

名言

鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、故性長非所斷、性短非所續、

小惑易方、大惑易性、

小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下、

伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上、二人者所死不同、其於殘生傷性一也、

馬蹄第九

馬蹄は篇首の二字を取りて名となす、其の例、前篇と同じ、大意は馬も野生の儘に放任して置く時は、自然に能力ありて自由に生活し得べきものなるを、馬を養ふ人が種々なる干渉を爲すが故に、馬は反りて束縛鞭策の煩に堪へずして多く死すとの論を以て說き起して、彼の聖人が仁義を以て天下を治め、人の本性に拂れる政治を爲すが故に、人は益々分かれ爭うて亂世と爲れることを論じたり、「通

得者也、適人之適而不自適其適者也、夫適人之適而不自適其適、雖盜跖與伯夷、是同爲淫僻也、余愧乎道德、是以上不敢爲仁義之操、而下不敢爲淫僻之行也、

【大意】仁義は終に性外の物にして其の能く之を行ふ者は亦淫僻の行たるを免れざるを言ひ、以て本文を結ぶ、宣穎曰く結處（余愧乎道德云々の語）現出自己、歸束到道德上去、是一篇大章法と、

【通釋】さて又全體自から内になる自我を見ずして徒に外になる彼のみを見、又自から我が身に會得せずして、徒らに彼を會得せんとし、即ち外のみを見て内を見ること無き者は、是れ人の得を得と爲して己が德を自得せざる者なり、他人の適意を適意として己が適意を適意とせず、即ち人の事のみを務めて己れの事を抛擲するものと申すべし、此にては畢竟外物を以て我が本性を易ふるに過ぎず、夫れ他人の適意を適意として自から己が適意を適意とせざる時は、大惡人と呼ばるゝ盜跖と、高潔君子なる伯夷との差異ありと雖も、是れ同く共に正道に外れたる淫僻の者たり、即ち其の所行は相反すれども外物の爲めに己が本性を移し易へたる點は相同じきなり、余は道德上に於ては及ばざるを愧づれども、然しながら上に向うて即ち道德以外に乘り出だして敢て仁義の行を爲さず、又下に向うて即ち道德の範圍を蹂躪して淫僻の行を爲さず、乃ち凡て世評に云へる善惡に拘はらず、本性より外の事は一切見合はして爲さず、以て其の天良なる至淳の德を完全に保たんと欲するなり、

〔解義〕〔不自得而得彼云々〕得は「玉篇」に獲也とあり、「韻會」に凡有求而獲皆曰得とあり、即ち或る目的の物を手に入るゝこと也、上句は不見に就いて云ひ、本句は得に就いて云ひ、下句は適に就いて云ふ、見は目を用ひて見ることにて、得の前にあり、適は心に樂むことにて得の後にあり、乃ち一層は一層より深切に云へるなり、〔而不自適其適者也〕「郭

あり、〔通知曾史〕通は通達にて、仁義の道に通達せるを謂ふ、曾史は曾參史魚の二人既に前に見ゆ、〔非吾所謂臧〕吾は莊子自から謂ふ、臧は善なり、〔屬其性於五味云云〕五味は甘辛酸鹹苦なり、按ずるに儒家の見解に依れば「孟子」の盡心下篇に口之於味也、目之於色也、耳之於聲也、鼻之於臭也、四肢之於安逸也、性也有命焉、君子不謂性也とあるが如く、味色聲臭の口目耳鼻に於ける人の生るゝと同時に、各其の好む所ありて、亦先天的性命に屬することを云はれしが、是れ五味と人性と全く相關せざるにはあらず、莊子今此等の類を擧げて一切之を外來の刺激によりて起るものと爲し、仁義と與に本性に有らざるものと觀たるなり、〔通如兪兒〕兪兒は黄帝の時の人にして能く緇澠(二水の名)の水を別ちしと云ふ、〔屬其性于五聲〕、宮商角徵羽を五聲と謂ふ、〔通如師曠〕師曠已に前に解せり〔通如離朱〕離朱已に前に解せり、〔臧於其德而已矣〕其德は自然に受け得たる良德を指さす、〔吾所謂臧―仁義之謂也〕此の句は上句と相複す、「宣注」は曰く此句疑是言味之訛と、「辨正」には曰く此言爲仁義故與下文類、與上文不複と、乃ち前者は上文に屬其性於五味云云とあるより推して、此の非仁義之謂也の句を以て下文の聰者云云明者云云の例の如くに味に關しての説明ありたるを、後人傳寫の時、上文の辭に涉りて相訛せしならんと疑ひ、後者は下句に在其性命之情而已矣とあるに照らして、此の處は仁義を實行する上に就いて云ひ、上文の吾所謂臧云云の語と同一語例なれども、彼は仁義の道を指して云へるのみにて、自然同からざれば重複せずと云へるなり、前説是なるが如し、〔自聞而已矣〕「成疏」に見彼聞他、心神馳奔、耳目竭喪、此乃愚闇、豈曰聰明、若聽耳之所聞、視目之所見、保分任眞、不蕩於外者、即物皆聰明也とあり、此れ耳目を外聞外見に疲らさず、心を靜かにして自然に任かして行くときは志氣内に收りて何に物を聞見するも直ちに眞理を通曉すとなり、「史記」の商君傳に趙良の言を載せて、反聽之謂聰、內視之謂明とあり、亦此と同じ、

夫不自見而見彼、不自得而得彼者、是得人之得而不自得其

謂其見彼也、自見而已矣、

【大意】以下作者の所見を述べ以て前段を總括す、「辨正」に以下猶自我言之則如此、是覆擧通篇之意、而總結之也と、

【通釋】さて以上說き來りしことに就いて吾より之を批評するときは、一體彼の贅疣的なる仁義を以て吾が生れ付きたる固有のものと心得て、其の本性に結び着くるに至りては如何に其の道に通ずること曾子史魚の如くにして、世の人は之を善なりと云ふとも、吾が謂ふ所の善にはあらず、五味を其の性の固有とし本性を五味に結び着くるに至りては、其の道に通達なること彼の有名なる味を分別せる兪兒其人の如くにして世人は之を善しと云ふとも、吾が謂ふ所の善にはあらず、五聲を其の性の固有とし本性を五聲に結び着くるに至りては、其の道に通達なることと、彼の師曠其人の如くにして世人は之を善しと云ふとも、吾が謂ふ所の善にはあらず、五色を以て其性の固有と爲し、本性を五色に結び着くるに至りては、其道に通達なること離朱其人の如くにして、世人は之を善しと云ふとも、吾が謂ふ所の善にはあらず、吾が謂ふ所の善とは彼の仁義を指して謂ふにあらず、其の本性なる天良の德を善とするに外なし、吾が謂ふ所の善とは彼の仁義を實行するを指して謂ふにあらず、其の本然なる性命の眞情に順ひ任ずる外なし、吾が謂はゆる聰とは人自らが他の餘所事を聞くを目して聰と謂ふにあらず、自から己が力にて聞き得る範圍に止むるのみ、卽ち物事が自然に聞ゆるときは、聞けども必らず其の他を聞かんと務むるにはあらず、吾が謂はゆる明とは世人が能く他所を見るを目して明と謂ふにはあらず、自ら己が目に映り入りたるを見るのみ、卽ち自然に見るときは見れども强ひて其の外を見んと務むるにはあらず、要するに自然に聞き自然に見るを尙んで其の耳目の官能を濫用するを避け、視感聽感を內に收藏し、質素飾りなきに復歸せしむるが是れ吾等の理想的觀念なり、

【解義】〔屬其性乎仁義〕屬は係屬なり、「ツヅケル」と訓ず、「宣注」には强合と解せり、莊子の說に依れば本性と仁義とは元來同じからざるものを强ひて合はして一と爲せるは誤れりと見たるなり、故に此の說

【通釋】尙ほ推し廣めて云へば、今天下の人々盡く外物に殉して本性を易ふるものなり、但其の中にて彼れが殉する事が仁義に屬するときは、世俗は彼の伯夷の如く之を君子と謂うて尊敬し、若し彼が殉する事が貨財の業に屬するときは、世俗は之を彼の盜跖の如くに小人と謂うて卑蔑す、然れども其の身命を棄て、外物に殉するに至りては皆同一にして擇ぶこと無きなり、然るに世俗は此の所に於て其の名に殉せしは君子として尊敬することあり、利に殉せしは小人として卑蔑することあり、然しながら彼が天性を殘ひ本性を損する點に於ては、彼の盜跖も矢張り伯夷と異ならざるのみ、されば名は兩人相同じからざるも實は既に同じきなり、此の上は惡くにか彼は君子なり、此は小人なりと云へる區別を其の間に爲すを用ひんや、全く右樣なることは無用の義なり、

【解義】〔則俗謂之君子〕則は而と同義に用ふ、俗は世俗なり、「成疏」に從於仁義、未始離名、逐於貨財、固當走利、唯名與利、殘生之本、即非天理、近出俗情、君子小人、未可正據也と云へり、〔則盜跖亦伯夷而已〕世俗より云へば君子小人に分つも若し傷生を損し性より云へば盜跖も伯夷と異ならずとなり、「宣注」に曰く不說伯夷亦盜跖、偏說盜跖亦伯夷、俱是筆鋒之橫處快處と、

且夫屬其性乎仁義者、雖通如曾史、非吾所謂臧也、屬其性於五味、雖通如兪兒、非吾所謂臧也、屬其性乎五聲、雖通如師曠、非吾所謂聰也、屬其性乎五色、雖通如離朱、非吾所謂明也、吾所謂臧者、非仁義之謂也、臧於其德而已矣、吾所謂臧者、非所謂仁義之謂也、任其性命之情而已矣、吾所謂聰者、非謂其聞彼也、自聞而已、吾所謂明者、非

ち己が本性を易へしことは均く一なるなり、彼の小人が利に殉して本性を易へ、聖人が天下に殉して本性を易ふるも、亦此と同じき道理なり、伯夷は名譽の奴隷となりて首陽山の下に餓死し、盜跖は利益の奴隷と爲りて東陵の上に死せり、此の二人の死せし事柄は大いに同からざれども、彼が外物に殉して天生を殘ひ本性を傷ふ點に於ては皆倶に均しきなり、卽ち何れも皆外物を以て本性に易へしものにて奚ぞあながちに伯夷は道理に叶ひて、盜跖が不道理と限らんや、皆倶に同じくして輕重得失は無きなり、

【解義】「臧與穀」「方言」に「齊之北鄙、燕之北郊、凡民男而婿婢、謂之臧、女而婦奴、謂之獲」とあり、乃ち臧は下部男なり、穀或は獲に作る、義同じ、穀は下部女なり、「挾筴讀書」筴は策と同じ、竹簡なり、古代は紙なし、皆簡冊を以て書を寫す、長さ二尺四寸と云ふ、「博塞以遊」塞は賽と同じ、博塞は今雙陸の類、「成疏」に投瓊曰博、不投曰塞とあり、瓊は卽ち骰子の類、「伯夷死名於首陽之下」伯夷は孤竹君の子、弟叔齊と共に周武王の殷を伐つを諫むれども用ひられず、武王の天子と爲るに及んで、二人去りて首陽山に隠れ、薇を採り糧と爲し、周粟を食はず、遂に山中に餓死す、首陽山は今の山西省蒲州河東縣に在り、「盜跖死利於東陵之上」盜跖、名は跖と云ふ、常に巨盜を爲す、故に盜跖と稱す、東陵は山の名、又今の山東省の太山なりとの說あり、「所死不同」伯夷は名に殉して死し、盜跖は利に殉して死するを謂ふ、「宣注」に依れば伯夷盜跖の死を拈出して殉名殉利の一代表者と爲せり、前文にある大夫殉家、聖人殉天下するも矢張り利の爲め名の爲めなれば、故に玆には唯死名死利の二事を擧げ、他を概括して云へるなりと、

天下盡殉也、彼其所殉仁義也、則俗謂之君子、其所殉貨財也、則俗謂之小人、其殉一也、則有君子焉、有小人焉、若其殘生損性、則盜跖亦伯夷已、又惡取君子小人於其間哉、

「成疏」に五帝以上、猶扇無爲之風、三代以下、漸興有爲之教、澆淳異世、步驟殊時、遂使捨己効人、易奪眞性、殉物不及、不亦悲乎とあり、〔以身殉利〕殉は從なり、「シタガフ」と訓ず、殺身從之曰殉と「釋文」に見えたり、〔以身殉家〕「周禮」の「鄭注」に大夫之邑曰家とあり、又「左傳」に大夫皆富、政將在家とあり、此にては大夫は己が領地を經營するが爲めに身命を棄てゝ從事するを謂ふ、〔以身殉天下〕天下を經營するが爲めに身命を棄てゝ從事するを謂ふ、「副墨」に曰く小人以身殉利、是以利易性也、士則以身殉名、是以名易性也、大夫則以身殉家、是以家易性也、聖人以身殉天下、是以天下易性也と〔故此數子〕數子猶言數等人と「集解」に云へり、〔事業不同云々〕事業は前に云へる利名家天下の業を謂ふ、名聲は小人士大夫聖人の名を謂ふ、

臧與穀二人、相與牧羊、而俱亡其羊、問臧奚事、則挾策讀書、問穀奚事、則博塞以遊、二人者事業不同、其於亡羊均也、伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上、二人者所死不同、其於殘生傷性均也、奚必伯夷之是而盜跖之非乎、

【大意】　別に解說を要せずして明らかなり、

【通義】　倘一喩を設けて云はんに下婢の婿たる臧と奴隷の婦たる穀と兩人相與に羊を牧畜して居りしが、或る時兩人共に其の飼へる羊を取り逸して、行衞不明となりし、因りて臧に全體何を仕事として居て、自己が飼へる羊を取り失ひしかと問ひしに臧は書冊を耽り讀み居りし爲めに其の間に羊を失へりと答へたり、因て穀に何事を爲して居て羊を失ひしかと問へり、此れは博塞とて雙陸勝負の事に游び耽りしが爲めに其の間に羊を失へりと答へたり、さて此の臧穀二人の仕事は良と不良の別はあれども、其の羊を亡ひし點に於ては何れも俱に外物に本心を奪はれ卽

家、聖人則以レ身殉ニ天下一、故此數子者、事業不レ同、名聲異レ號、其於傷レ性以レ身爲殉一也、

【大意】上文末句の惑の字を承けて小惑大惑を分別し、仁義の大惑に屬して人性を變易する慘毒なることを言ふ、

【通釋】さて又その惑ひと申すものは、實に驚く可き事にて小なる惑ひは方角を取り易へて東西を顚倒し、大いなる惑ひは自分の本性を取り易へて上に申せし彼の常然の眞性を戕ふに至る、何を證據として之を知るかと云はんに、彼の有虞氏の時代に仁義てふ贅疣の如き厄介物を高く揭げ呼號して天下の人心を攪亂せしより以來、天下の人々は大いに之に惑はされて、遂に仁義の途を辿らんと苦勞奔走せざるはなし、爲めに折角の淳素なる天良を破壞し、朝夕何事も仁義仁義と噪がざるはなし、是れ豈に仁義を以て其の本性を易ふる者にあらずや、されば予試に之を論せんに、此れ獨り彼の有虞氏のみにあらず、其の後ち夏殷周の三代より現代に至るまで天下の人々何れも身外の物を以て己が本性を取り易かへざるはなし、卽ち或る目的物を獲んが爲めには己が生命を犧牲に供して、我が天良の眞性を喪失する者滔々として皆是れなり、賤劣なる、小人は貨利の爲めに犧牲と爲りて天良を喪ひ、比較的賢れる士君子は名譽の爲めに犧牲と爲りて天良を失ひ、一國の政事に與れる大夫は自家經營の爲めに犧牲と爲りて天良を失ひ、天下の大聖人と云はるゝ明王は天下を治平するが爲めに犧牲と爲りて天良を失へり、此の小人より聖人に至る數種の人達は其の營める事業の淸濁は固より相同からず、其の名譽の隆汚亦稱號を異にして一は世に卑まれ、一は世に尊ばるゝに相違はあれども、詰り其の天良の本性を傷害し、己が身命を以て物の犧牲と爲せる點に於て皆同一に歸するものなり、

【解義】〔自虞氏—以撓天下〕虞氏は卽ち有虞氏、舜の國號なり、招は擧なり、撓は亂なり、〔天下莫不奔命於仁義〕奔命は奔馳して命に從ふなり、乃ち在上者が仁義を以て天下を治むる命令に勉强して赴き從ふこと、〔自三代以下者〕者の字句法前文と同じ、

は「ウルシ」と訓ず、皆物を粘着せしむる資料なり、「成疏」に夫待繩索約束、膠漆堅固者斯假外物、非眞牢者也、喩學曾史而待仁者、此矯僞非實性也と、〔是侵其德也〕成疏に侵傷也、德眞智也、既非本性、所以侵傷其德也と、〔屈折禮樂〕肢體を屈折して禮樂を爲すこと「集解」に禮樂周施是屈折也とあり、〔呴俞仁義〕呴俞は呴嘔なり嘔と俞と音近きを以て假借して用ふ、氣を以て溫むるを煦と云ひ、體を以てするを嘔と云ふ、伴りて顏色を呴俞して仁義の貌を粧ふこと、〔此失其常然〕常とは永久不變の謂なり、常然とは本然の性を謂ふ、本然の性は矯揉造作を待たず、自然に正固にして天下人々の同く稟けて固有し古今を歷て二なく須臾も虧くべからざるものなるを以て常然と云へるなり、尙ほ下文を看よ、〔曲者不以鉤云云〕「成疏」に夫天下萬物、各有常分、如蓬曲麻直、首圓足方也とあり、此れ曲者云々より方者云々までの本文の意を釋したるなり、又曰く水則冬凝、而夏釋、魚則春聚而秋散とあり、此れ附麗云々の二句の意を釋したるなり、而して又斯等は咸な自然に出て物を假るにあらず、豈に鉤繩規矩膠漆纆索の加ふべきあらんやと云へり、〔附離不以膠漆〕離は麗なり、麗は着なり、「ツク」と訓ず、附着すること、〔不以纆索〕纆は音「墨」「スミナワ」と訓ず、索なり、「成疏」に在形既然、於性亦爾、故知禮樂仁義者、亂天之經者也とあり、〔天下誘然〕「宣注」に誘然若有導以生者とあり、〔仁義又奚連々〕連連は相續ぐ貌、此れ道德を尊みて仁義を賤みて云へるなり、〔遊乎道德之間〕「宣注」に道德の二字、此に又一點せり、〔使天下惑也〕惑の一字を下だして下文を帶起せしむ、

夫小惑易方、大惑易性、何以知其然耶、自虞氏招仁義以撓天下也、天下莫不奔命於仁義、是非以仁義易其性與、故嘗試論之、自三代以下者、天下莫不以物易其性矣、小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉

の生れつきの性を削り弱めたるなり、繩約膠漆などの種々なる着け合はせたり、又は束ね合はせたり爲す品物を待ちて、然る後ちに始めて固まるものは是れ既に自ら其の持ち前たる德を侵害したるなり、人の性も全く其の通りにて自然に正く固き筈なるに、進退の動作を禮樂をなすが爲めに屈折し、言語顏色を仁義をなすが爲めに、喣俞とて喜ばしく樂しげに見せ、以て天下の多勢の心を慰めんとするは、卽ち此れ人の常然の本性の眞を失ひたるものなり、天下に常然てふ者あり、常然とは之を曲ぐるに鉤を以てせず、直くするに繩を以てせず、圓くするに規を以てせず、方にするに矩を以てせず、附着するに膠漆を以てせず、約束するに纆索を以てせず、卽ち自然の活動に隨うて或は曲がり、或は直ぐ、或は圓く、或は方とも爲り、又或は互に附着することもあり、約束して緊く締ることもあり、されば天下に於て多き人々は誘然と宛かも誘うて引き出だす者がありて、生ずるが如く、而かも如何なる徑路を辿りて生ぜしや、自分ながら知らず、卽ち自然に生ずるなり、同焉と何れも同樣に得て厚薄輕重なく、而かも如何なる手續に由りて得せしや、自分ながらに知らず卽ち自然に得たるなり、かゝるが故に古今の區別なく、永久に然く一定の道行きを履みて人爲を以て之を虧損すべからざるなり、されば仁義の道などゝ別に取り立てゝ申して、又た奚ぞ連々と相續き繫ぎて、彼の膠漆や纆索などの如く强ひて別物を一つに附着し、又は窮屈に束縛することを爲して道德の道に割り込みて遊ぶ必要あらんや、全く左樣なる事を爲すときは、徒に天下の人心を迷はし惑はしむるに過ぎざるなり、何等の效果なくして反りて大害あるものなり、寧ろ初めより左樣なる無駄骨を折りて害毒を貽さんよりは自然に任かして虛無順應なるに如かんや、

【解義】〔鉤繩規矩〕鉤は「カギ」と訓ず、物を曲ぐる道具、繩は物を直くする道具、規は「ブンマハシ」と訓ず、圓形を畫く道具、矩は「サシガネ」と訓ず、方形を畫く道具、〔是削其性〕其とは汎く鉤繩規矩を待ちて正くなる物を指す、性は天性なり、「成疏」に鉤曲、繩直、規圓、矩方也、夫物賴鉤繩規矩而曲直方圓也、此非天性也、喻人待敎迹而後仁義者非眞性也と、〔繩約膠漆〕約は束縛なり、膠は「ニカハ」と訓じ、漆

篇睢目明、又望也、是睢爲望視之貌、仁人之憂天下、必爲睢然遠望、故云然、睢與蒿古音相近、故得通用、詩白鳥翯翯、孟子作鶴鶴、文選景福殿賦作睢睢、蒿之通睢、猶翯之通鶴與睢矣と、〔而饕富貴〕 饕と貪なり、饕は音「トウ」「左傳」の注に貪射曰饕とあり、〔故意仁義〕 意は抑と通ず、「論語」の學而篇の抑與之與とあるを、「漢石經」に意に作り、「墨子」の非命篇に意將以爲利天下乎とあり「晏子春秋」の雜篇に意者非臣之罪乎とあり、漢書の叙傳に其抑者縱橫之事、復起於今乎とあり、抑者と意者とは同じ、竝に此の句法と一例たり、或は意者と云ひ、或は單に意と云ふ、義は亦同じと郭慶藩は云へり、〔自三代以下者天下〕 三代は夏殷周なり、自三代以下者の句法は、蘇與曰く莊子有此文法、胠篋在宥篇屢見と、〔何其囂囂〕 囂々は讙聒なり「カマビスシ」と訓ず、

且夫待鉤繩規矩而正者、是削其性也、待繩約膠漆而固者、是侵其德也、屈折禮樂、呴俞仁義、以慰天下之心者、此失其常然也、天下有常然、常然者、曲者不以鉤、直者不以繩、圓者不以規、方者不以矩、附離不以膠漆、約束不以纆索、故天下誘然皆生、而不知其所以生、同焉皆得、而不知其所以得、故古今不二、不可虧也、則仁義又奚連連如膠漆纆索、而遊乎道德之間爲哉、使天下惑也、

【大意】仁義の無用たるを叙し、仁義を以て道德の間に遊ばんと欲する者は、枉げて自ら憂を多くするものなることを説けり、

【通釋】その上に鉤繩規矩などの種々なる器械を待ちて、然る後ちに始めて正くなるものは、是れ自ら其

以下者、天下何其囂囂也、

【大意】此れ復た手足の喩を以て起して仁義に駢枝なる者の憂あることを言ふ、

【通釋】其の上に彼の手足の喩に就いて申さんに、拇指に駢合して四本指と爲れる者は之を決裂するときは泣き、手に傍枝が出で六本指と爲れる者は之を齕み破るときは啼けり、此の二者は一は六本にて常數の指より一本餘りあり、一は四本にて常數より一本足らざれども、何れも共に憂へ悲みを見る點に於ては一なり、卽ち皆同じく駢なり枝なる故を以てなり、其れと同一の道理にて只今世の仁人は何れも蒿目とて心配らしく遠方を打ち眺めつる模樣にて、世間の患難を念頭に掛けて、心配することとなるが、此れ不仁なる人が天成なる性命の本眞を養ふことを務めずして、徒に其の良情美質を決潰して、私慾に溺れて富貴を貪り取る事とは各々其の爲し方こそ異なれ、何れも天性の正しき外れたることとは一なるなり、されば憶ふに仁義と申すものは實に外より附け加へたるものにして、人の性情卽ち正性にあらざるか、然らざれば、夏殷周の三代より此の方天下の仁義の德を懷ける人が、何故に、囂々として多言多辯を勞して世の爲め民の爲めとて左樣に蒿目して憂ふることとなるか、卽ち駢拇枝指を氣に掛くるが故に、決齕せられて悲めると全く同じ理にて、仁義てふものを頻に振り舞はさんとするが故に、自ら此の憂き目に逢へるなり、

【解義】〔決之則泣〕決は決裂なり、離折なり、「ワカツ」と訓す、泣は「說文」に無聲出涕也とあり、〔齕之則啼〕齕は音「コツ」齒を以て物を斷するなり、「カム」と訓ず、〔或有餘於數或不足於數〕上句は枝の六指を生ずるを謂ひ、下句は駢の四指たるを謂ふ、「宣注」に有餘不足、本是長短邊說話、今幷入駢枝內、行文變化と云へり、〔其於憂一也〕「成疏」に駢枝二物出自天然、但當任置、未爲多少而惑者不能忘淡、固執是非、謂枝爲有餘、駢爲不足、橫欲決駢齕枝、成於五數、旣傷造化、所以泣啼、故決齕雖殊、其憂一也とあり、〔蒿目而憂世之患〕蒿は艸の名、「ヨモギ」と訓ず、蒿目とは憂へを帶びて、物を見る模樣なり、「宣注」に愁視則睫毛豪茸如蒿と、又曰く蓬首蒿目は皆古人用字法之巧と、兪樾は曰く蒿是睢之假字、玉

至正之道一也の語を反承して説けるなり、〔不失其性命之情〕情は實なり、此句は下の意仁義其非二人情一乎の意を伏す、〔故合者—不爲不足〕不爲とは正性の上より觀て然りと爲ざることなり、駢は駢拇の駢なり、跂は「義海」及び「宣注」共に岐の誤と爲す、王先謙曰く跂岐同と、即ち前文の枝指の義なり、此の四句は上の二句は形態を以て言ひ、下の二句は長短を以て言ふ、共に性命本然の正しきに率ふを以て、初めより駢枝餘缺に意を置かざることを謂ふ、〔長者不爲有餘云云〕駢枝は上文に既に有れども長短の二字は此に又添加りて下の鳧鶴二喩を起し、一譬を重ねて本性の外に加減の要なきを明にしたるなり、〔鳧脛雖短云云〕本然の性には一毫の加減を容れざるに喩ふるなり、鳧は音符、「カモ」と訓ず、「禽經」に鴨鳴呷呷、其鳴自呼、鳧能高飛、而鴨舒緩不レ能レ飛、故曰二舒鳧一とあり、脛は「ハギ」と訓す、脚なり、「成疏」に自然之理、亭二毒衆形一、雖三復脩短不二同、而形體各足レ稱レ事、咸得二逍遙一而惑者、方欲下截二鶴之長一續二鳧之短一以爲上レ齊、深乖二造化一、違二失本性一、所二以憂悲一とあり、〔故性長非所斷云々〕長短共に各々妙處あるを言ふ、〔非所去憂也〕去は除去なり、此れ言外に其の本然の性に率ふときは憂を去らざるも憂自から去ることを含みて云へるなり、「成疏」に稟レ性受レ形、僉有二崖量一、脩短(形)明暗、(智)素分不レ同、此如二鳧鶴一非レ所二斷續一、如レ此即各守二分内一、雖レ爲無レ勞レ去レ憂、憂自去也と、〔意仁義其非人情乎〕意は抑と通ず「オモフ」と訓す、噫と同じ、下文に故意仁義其非仁義乎に照すときは後説を可とす、仁義を舊本に仁人に作る、今「通義」「宣本」に依りて改む、蘇輿曰く、此言二仁義束縛、使三人失二其常性一、而多二憂患一、在宥篇、愁二其五藏一以爲二仁義一、即此旨、此縁二下仁人一而誤と、

且夫駢レ於レ拇者、決レ之則泣、枝レ於レ手者、齕レ之則啼、二者或有レ餘レ於レ數、或不レ足レ於レ數、其於レ憂一也、今世之仁人、蒿レ目而憂二世之患一、不仁之人、決二性命之情一而饕二貴富一、故意仁義其非二人情一乎、自二三代一

彼至正者、不失其性命之情、故合者不爲駢、而枝者不爲跂、長者不爲有餘、短者不爲不足、是故鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也、意仁義其非人情乎、彼仁義何其多憂也、

【大意】 前段の意を發明し、人々各々正性あり、正性各々天賦の良能あり、良能各々分量あれば、一毫も人爲を以て强岐すべからざることを言ふ、

【通釋】 然らば至正の道とは如何なるものかと云はんに、彼の至正とは人々其の天より受け得て生れ來れる性命の本眞を失はずして、天然の儘に任かして行くこととなり、されば足の拇指が連らなりて四本指たればとて、別に駢指とも思はず、手の技指が傍より出でゝ六本指たればとて、別に岐指とも思はず、卽ち何れも不具と云へば、不具に相違なきも、爲めに餘計なる物とも不足なる物とも思はず、又長短の物に就いても同じことにて、天性の長短は決して餘計不足の感は無きなり、されば鴨の脚は短きとも別に不自由を感ぜざれば、他の物を取りて續くときは、必らず憂ふるならん、鶴の脚は長きに過ぐれども、自から差支を感ぜざれば、斷ち切りて短くするときは必らず悲むならん、されば天性の長き物は他より斷ちて短くすべからず、天性の短き物は他より補うて續くべからず、何れにしても左樣なることは其の心配を除き去ることにあらず、されば憶ふに彼の仁義は其れ人の天成の情にあらざるか、若し天性の情なりせば、仁義を行へばとて別に苦痛迷惑を感ずべき筈なきに如何なれば彼の仁義を行ふに當りて、種々なる衝突矛盾が起りて、憂き患難の多きこととなるや、是れ全く仁義と申すものは人生固有の性情にあらざればこそ、右の如きことが起るなり、

【解義】 〔彼至正者〕 至正を舊本多く正正に作る、今「義海」及び俞樾の說に依りて訂す、此れ上文の非

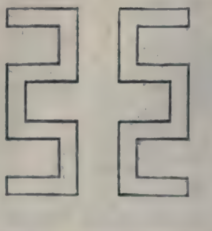
内にて黃鐘、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射の陽聲を謂うて、大呂、夾鍾、中呂、林鍾、南呂、應鍾の陰聲を該包したるなり、〔金石絲竹〕金は鐘、石は磬、絲は琴瑟、竹は笙簧なり、〔黃は大呂〕陰陽の律に就いて各其の一を擧げて他を包該したるなり、〔師曠是已〕師曠は晉の大夫なり、音律を善くし、鬼神を致せりと「釋文」に見ゆ、師は樂官を師と曰ふ、曠は其の名なり「史記」に師曠冀州南和人生而無目とあり、孟子にも師曠之聰不以六律不能正五音とあり、〔枝於仁者〕仁義を過度に標擧すること宛かも一指に枝を生ずるが如きを謂ふ、文法は、前の駢於明者と同じ、〔擢德塞性〕擢は拔去すること、塞は杜塞すること、德は性より出づるもの、故に擢と云ふ、性は天性にして德の淵源なり、故に塞と曰ふ、乃ち自然の性德を拔去杜塞して自ら天良を喪亡すること、王念孫は曰く、塞は擢と義相類せず、搴に作るべし、其の形相似たるを以て謬る、擢搴共に拔取の義なり、搴又攓に作る、「淮南子」の俶眞篇に俗世之學、擢德攓性、內愁五藏、外勞耳目、（中略）以招號名聲於世と、又今萬物之來、擢拔吾性、攓取吾情とあり、皆其の證なりと、〔以收名聲〕名聲は名譽なり、收は取なり、卽ち「淮南子」にある招號名聲と同じ、〔使天下簧鼓〕簧は笙なり「フエ」と訓ず、鼓は「ツヾミ」と訓ず、共に鳴り物なれば喧囂の義に喩ふ、「集解」に天下喧攘如簧如笙、以奉不能及之法式也とあり、〔纍瓦結繩〕纍は累と同じ、瓦は當作丸と、「義海」にあり、「宣注」も亦此に從ふ累丸は圓轉の義を取りて、辨說滑稽の巧なるに喩ふるなり、結繩は繩を結ふが如く言論聯貫の妙なるに喩ふるなり、〔竄句游心〕竄は竄入なり、字句を點竄して古典名言に附會すること、游心は心思を游蕩するなり、〔堅白同異之辯〕既に齊物論に解せり、公孫龍、惠施の徒の主張せし詭辯なるが、其の本は墨子に出づること、予が墨子國字解に於て詳述せり、宜く就いて參看すべし、〔而敝跬譽〕敝は弊と同じ、勞疲なり、跬譽は一時の譽に近づくなり、郭嵩燾云く跬猶咫也、言半步爲跬、司馬法一擧足曰跬、跬三尺也、跬譽者、邀一時之近譽、勞敝於有近譽、無實用之言、故謂之駢於辯、楊朱墨翟稟性多辯、故特擧之と、「宣注」には跬譽を毀譽に作れり、

み累さね、取り結びて、彼の堅白同異なる詭辯の間に或は字句を點竄して注ぎ入れ、或は心思を游ばし動かして跬譽とて、僅かに一寸許の名譽を求むる無用の言句に精力を疲敝せしむるものに非るか、而して其の人果して誰ぞやと問はゞ楊朱墨翟の二人が卽ち是の代表たり、されば此以上の數子は皆何れも謂はゆる多駢旁枝の道卽ち不必要なる贅物にして、天下の至て正しき道德の眞面目にはあらざるなり、

【解義】〔駢於明者〕駢於明とは目の明を過用するなり、駢は卽ち上文の駢拇の駢を過多の義に活用して、修辭的に此の如く云へるなり、〔亂五色淫文章〕五色は青黄赤白黑なり、淫は凡そ其の正を失ふを淫と曰ふ、故に淫色淫酒又は書淫（過度に書籍に耽ること）等の稱あり、今の俗言の耽溺と同じ、文章は青與赤爲文、赤與白爲章と、「考工記」に見えたり、此にては汎く色采の義に用ゆ、〔青黄黼黻之煌々非乎〕黼黻は「考工記」に白與黑謂之黼、黑與青謂之黻とありて、「爾雅」の「郭註」は黼文如斧、黻文如兩己相背とあり、乃ち黼は白黑相交る文にて斧の形を畫き黻は黑青相交る文にて兩箇の己の字ガ相背ける形を畫きて其の能く斷ずると惡に背きて善に向ふ意とを示したるなり、皆王侯等の禮服の章に用ゆ、今此所に

黼

黻



ては立派なる模樣色彩の意に用ゆ、煌々は光りのきら〳〵として目を眩惑する貌、非乎とは「宣註」に言這個不是駢者乎、下同とあり、「通義」に曰く、以下四非乎不但是文法、亦反語之詞也、蓋曰若此言者、人豈以爲不是乎と、乃ち上文の義を纒め結ぶに反語を用ひて辭を奇峭に爲したるなり、「史記」の伯夷傳に天道無親、常與善人、若伯夷叔齊可謂善人者非耶とあるは、全く此の文法と同じ、〔離朱是已〕離朱は黄帝の時の人なり、百歩の外に在りて秋毫の末を見ると云ふ、一に千里鍼鋒を見ると云ふ、「孟子」に離婁之明とあるは卽ち是れなり、朱と婁と音通す、〔亂五聲淫六律〕五聲は宮商角徵羽なり、六律は十二律の

不及之法非乎、而曾史是已、駢於辯者纍瓦結繩竄句遊心於堅白同異之間、而敝跬譽無用之言非乎、而楊墨是已、故是皆多駢旁枝之道、非天下之至正也、

【大意】無用の意義を明らかにして、上文を承け、仁義道德の正に非ることを暢述す、而して離朱以下當時推重せる名家を前後に點竄し、一樣に摧挫の筆を用ふ、華藻の文縱横の氣竝に觀るべし、

【通釋】今聊か其の例證を擧げて云はんに、彼目の作用上に就て常度を乘り踰えて、宛も拇に駢あるが如くに必要ならざる事を爲す者とは、彼の五色の眞相を混亂し、色采の立派なる處に耽溺する者にして、青黄黼黻の色が煌々と光明を放てる處を指したるに非るか、而して其人は果して誰ぞやと問はゞ、昔しの視力の絶倫を以て著名なる離朱なるが即ち此代表者たり、聽即ち耳の作用上に就て常度を乘り踰えて無用の働が多き者とは彼の五聲の正音を渾亂し、呂律の美聲に耽溺する者にして、金石絲竹黄鐘大呂の音樂が面白き音色を吐く處を指したるに非るか、而して、其の人は果して誰ぞやと問はゞ、昔しの耳聰を以て著名なる師曠なる者が即ち是の代表者たり、さて以上は譬喩なるが行爲の上に就いて云はゞ、常度を乘り踰えて宛かも手指に枝指あるが如くに必要ならざる事を爲せる者とは、天成の德を擢き去り自然の性を閉ぢ塞ぎ、即ち折角貴重なる人の生れ付きの良き處を戕ひて、徒に外觀虚榮を衒らひ、區々たる名譽を自分の身に收め取り、其の結果天下萬民をして笙簧を吹き鼓を打つが如く、各々其の調子を合はて喧しく囃立てゝ企て及ぶこと能ざる苛法を奉じ行はしむるに非るか、而して其の人果して誰ぞやと問はゞ、孝行なる君子を以て名高き魯の曾參衞の史魚が、即ち是の代表たり、辯說の上に就いて宛も拇の駢あるが如くに必要ならざる事を言ひ振らす者とは、頻りに碌でもなき贅辯を弄ぶこと、宛かも瓦を纍々と累ね、繩を紛々と結ぶが如く頻りに無用なる言語を積

きことにて餘計なる事を云ふ、列は配列なり、五臓は「黄帝素問」に肝、心、脾、肺、腎爲五藏」とあり、藏は臓と同じ、宋の王應麟が「小學紺珠」に「漢書」の翟奉傳の注を引て肝靜仁、心躁禮、脾力信、肺堅義、腎敬知とあり、此れ莊子以後の説なれども五行配當の説は既に「書經」の洪範の篇（殷の箕子の作）に見ゆれば、莊子の時代に於て亦五性を五臓の中に配列して説きたるやも知るべからず、或は本句の語あるを以て、本篇を莊子の親作にあらずして、漢代の人に成りしならんと疑ふ者もあり、五性は仁義禮智信なるが信を仁義禮智に加へたるは漢の董仲舒より始まれり、「宣注」に五性列於五藏以配五行」とあり、卽ち仁は木、義は金、禮は火、智は水、信は土と又紺珠に見えたり、「非道德之正」正は本然なり、「義海」に曰く、老莊之學、非好爲高大而故薄仁義也、蓋尊道德則仁義在其中、然當時所謂仁義、皆多駢旁枝而非正者、故不得不闢而闢之、若仁義根心安行中理、其去道德也何遠と、「多方駢枝於五臓之情」通義は多方の二字を以て衍文と爲せり按ずるに此の句は上句の駢於足枝於手云々の二喩を承けて駢枝の二字を連用し、以て仁義の五臓に列するの非なることを正喩渾合的に説きたるものなれば「通義」の説是なるが如し、但姑く舊本に依りて二字を存するのみ、

是故駢於足者、連無用之肉也、枝於手者、樹無用之指也、多方駢枝於五藏之情者、淫僻於仁義之行而多方於聰明之用也、是故駢於明者、亂五色淫文章、青黃黼黻之煌煌非乎、而離朱是已、多於聰者亂五聲淫六律、金石絲竹黃鐘大呂之聲非乎、而師曠是已、枝於仁者擢德塞性以收名聲使天下簧鼓以奉

【大意】 拇指贅疣の兩喩を引きて、仁義の道德の正に非る論議を起す、道德の二字首腦たり、

【通釋】 人の拇指と第二指と相連り合うて一指と成るを駢拇と云ひ、或は指の傍らに又一指が多く出でて木に枝があるが如くなるを枝指と云へるが、全體此の駢拇枝指は人の生れ付きなる性より出來たるものなるか、決して然らず、則ち人の普通に持ち前とせるものより餘れる物なり、附贅縣疣とて肉に附着せる「タンコブ」又は垂下れる「イボ」は、人の形ちより出て來たるものなるか、決して然らず、則ち性よりは餘れる物なり、以上の事と同じく仁義てふ者の上に餘計なる道を組み立て、之を用ふる者は人の五臟に配列して差支へなき者なるか、決して然らず、則ち天然的なる道德の正當なるものにあらざるなり、上の論點より推すれば足に駢拇がある者は全く無用なる肉を連らねたるものなり、手に枝指がある者は全く無用なる指を樹たるものなり、以上は譬へなるが、此の道理にて推すときは、五臟の實理に於て駢枝的に普通竝に外れて餘計のものたるは、是れ彼の仁義の行爲に淫僻し聰明の作用を餘分に使ひ過ぎたる人なり、

【解義】〔駢拇枝指〕既に篇題の下に解せり、〔出於性哉〕性はもと儒敎にありては「中庸」に天命之謂性とあり、韓退之は性也者與生俱生と云へるが如く、理を指して稱すれども、莊子の謂はゆる性は形質に屬して理に屬せず、乃ち其の意に依れば天は人の形質を生じ、各々之が作用を具へて、萬事を辨ずるに足れば、今更駢拇枝指の如き無用の形を生ずるは、反りて之が爲め折角既に有用の機關を妨ぐる者なり、〔天豈に此の如きをなさんやとなり、〔而侈於德〕而は則と通用す、侈は多き貌、溢なり過なり、「スギアマル」の義なり、德の字又輕く看るべし、德は得なり、「宣注」に比於人所同得則爲剩餘矣と、〔附贅縣疣〕既に太宗師篇に於て解せり、〔出於形哉〕駢拇枝指贅疣共にまた形の病なれども、駢拇枝指は人の生るゝと同時に、卽ち先天的に持ち來れるものなれば、性を以て云ひ、附贅縣疣は人の生れし後ち卽ち後天的に生ずるものなれば、形を以て云へるなり、〔而侈於性〕「宣注」に比於初生則爲剩餘矣と、〔多方乎仁義―道德之正〕方は道術なり、多方は道術の多

駢拇第八

此れ篇首に駢拇枝指出乎性哉、而侈於德とある語の上の二字を取りて篇名となせる也、駢は合なり、大なり、駢母とは足の大拇指と第二指と相連合して一指となるを謂ふ、枝指とは手の大拇指の枝傍に一指を生じて六指を成せるを謂ふ、駢拇枝指は皆共に通常以外の餘計なるものなれば、彼の仁義禮智信の如きも本來天性の虚無本體より視るときは宛も指に駢拇枝指の贅物あると相同じきを以て、此に之を論じて云へるより、遂に以て篇名となしたるなり、「義海」に依れば本書の內篇の命題は本と作者に於て深意ありて名づけしが、外篇雜篇は郭象の註を作くりし時に刪修して唯だ篇首の字を取りて之を名づけしも其の大意は亦自ら其の中に存せり、卽ち內篇に於て既に道德性命の理を詳述したれば、外篇に於て首として性外の物にて當に有るべからざる者の有ることは猶形に駢枝贅疣の有るが如くなることを論じたるなり、老子は世の區々たる智能を自ら矜り自ら見はすを喜ぶ者を論じて、自見者不彰、自伐者無功、自矜者不長、其在道也曰餘食贅行(「老子」上篇第二十五章)と云ひ、以て其の道に遠ざかれることを明らにせしが、今莊子は其の意を敷演して滂流浩瀚なること此の如しとあり、蓋し或は然るならん、宣穎は曰く聖門言仁義卽是性、莊子却將仁義看作性外添出之物、蓋他(莊子)止就源頭處、一直下來、不肯多着一字、老子曰、不知其名字之曰道、道之一字還是借說的、何況說到仁義、莊子、就是這一樣見解、他都就最上處、理會下一截事、使一切掃却、又曰く引仁義而合性則爲駢、言其牽聯外物也、由性而分仁義則爲枝、言其旁出非本也、篇中將仁義與聰明口辯之用、聲色臭味之欲、作一派鋪寫、其眼光直是最高、其筆力直是辣と、

駢拇枝指、出乎性哉、而侈於德、附贅縣疣、出乎形哉、而侈於性、多方乎仁義而用之者、列於五藏哉、而非道德之正也、

て强ひて耳目を開くと共に、天良の喪ぶるを言ふ、「義海」に曰く渾沌無所分別、待之固亦盡善、使儵忽不能忘情而思所以爲報、則渾沌之德、未能不德、故不免夫恩害相生之累、日鑿一竅、患由漸入也、七日而渾沌死、則情竇開而沖和喪、宜矣、是以帝王之跡著、而大道之體亡也と、此渾沌が善く情を係けて待遇せし結果、儵忽も報恩の心已み難く、遂に鑿竅の事あり、反つて渾沌の死を速くせしが、渾沌に於て老子に大德不德、是以有德と云へる至極の德あるも、人は德を外に示さゞるものなるに、今渾沌の恩情を儵忽に係けしより、自からも死する禍を引き起したるものなれば、世の爲政者は此を鑑みて妄に己の抱負を衒ひ示して、之が爲めに反りて人に甘く引き込まれて禍を取る無れと戒めしとの意なり、亦宜しく參考として存すべし、

名　言

鳥高飛以避矰弋之害、鼷鼠深穴乎神丘之下以避熏鑿之患、

虎豹之文來田、猨狙之便、執斄之狗來藉、

衆雌而無雄而又奚卵焉、

無爲名尸、無爲謀府、無爲事任、無爲知主、

至人之用心若鏡、不將不迎、應而不藏、故能勝物而不傷、

外篇

外篇とは內篇に對する辭にして其の義は既に內篇に於て解釋したれば今は之を略す、宣穎は曰く外篇者何、隨事敷折、拔技遡流、雖皆衞道之言、然較之專透宗旨者、則外矣と、又曰く外篇十五首、各因一時有感而作、其命題、但取篇首兩字、非若內篇之特立一個題目也と、乃ち外篇は均しく莊子が筆に成りしと雖も、其の要旨精義は既に內篇に於て部分的に又秩序的に類を分ち序を逐うて述べたるとは同からずして偶感偶發に隨うて筆したるものなれば、既に內篇に於て彼が意旨を了解せし者は外篇を讀むに方りては頗る其の勞を省くの便あり、故に予が解說も時に簡略に從ひ復た一々內篇の例に倣はざるものあり、讀者請ふ之を諒せよ、

て左樣なる利害を持たず、唯、全く其の名の如く渾々沌々として滿圓なるのみ、左れば此の竅を開通して遣はせば嘸かし悦ぶならん、先づ試みに七竅を鑿ち見んと、是に於て毎日日程として一竅づゝ鑿ちし處、何かは以て堪ゆべき、恰度七日目にて渾沌は死し失せたり、世の知識知識と云うて、徒に人爲的細工を以て、折角の天良を毀害するものは皆是れ此の類なり、

【解義】〔南海之帝爲儵〕海は晦なり、遠方は晦冥なる故に海と云ふ、帝は主宰の神なり、爲は謂と同じ、儵は音「淑」、神速なること、南方は陽に屬し顯明なるが故に其の主宰の神を儵と名づく、乃ち儵然として神速に現象の有るに喩へたるなり、〔北海之帝爲忽〕忽も神速なること、北方は隱に屬し幽闇なるが故に其の主宰の神を忽と名づく、乃ち忽然として其の形の無きに喩へたるなり、〔中央之帝爲渾沌〕渾沌は崔說に無孔竅也と、卽ち俗に云ふ「ズンベラボウ」として穴の無きこと、李說には清濁未分也とあり、此れは陰陽の和合を形容せりと見たるなり、乃ち儵忽の二名は神速の義にて、陰陽の有爲に譬へ、渾沌は陰陽の和合にて其の無爲に譬へたるなり、「宣註」に中者陰陽所渾、以喩自然と、〔遇於渾沌之地〕遇は不期而相會曰遇と、「左傳」に見えたり、卽ち豫約せずして偶然相會すること、「義海」に曰く、南華經(莊子)所謂渾沌、猶道德經(老子)所謂渾成、沖虛經(列子)所謂混淪、皆以況道之全體、本來具足、不假修爲者也、然而世有隆替、道與時偕、儵化而爲有(陽)、儵化而爲無(陰)、道體於是乎裂矣、自一(無)生二(渾沌儵忽)、猶未至於鑿矣、及時相遇於渾沌之境、則物(儵)交物(忽)、而心(渾沌)猶新火相加、理無不燃者と、〔渾沌待之甚善〕「成疏」に有無二心、會於非無非有之境、(儵忽の渾沌の地に會するを謂ふ)和二偏之心執、爲一中之志、(渾沌は儵忽を渾合して一團とすること)故云待之甚善也、(渾沌は陰陽を分別せずして同等と爲す)と、〔謀報渾沌之德〕德は恩德なり、德の字妙味あり、もと下文の如く渾沌の竅を鑿ちしことは、儵忽二帝の謝恩の意に出でたるが、反りて恩を讎にして報ゆる不結果に陷りしことを著はさんが爲めに、特に先づ茲に德の字を點せしなり、〔人皆有七竅〕竅は穴なり、兩目一口兩耳兩鼻を合はせて七竅と曰ふ、〔七日而渾沌死〕自然に順はずし

乎天也、體盡無窮、至無見無得、狀虛之用と、「宣註」には而無見得を無意於有得と解せり、乃ち己が天性を盡くすを務むれども、必らず之を遂げ得んとて心を勞せず、自得に得るに任かすとなり、此の說亦通ず、〔亦虛而已〕亦は天に對して云ふ、上解の「通義」の說を看るべし、〔不將不逆〕將は送なり、逆は迎なり、既に前篇に見ゆ、「宣註」に來則應とあり、「通義」に曰く、若鏡證虛之象、不將不逆以下、狀鏡以表鏡之體と、〔應而不藏〕「宣註」に去不留とあり、「成疏」に夫物有去來、而鏡無迎送、來者即照、必不隱藏、亦猶聖智虛凝、無幽不燭、物感斯應、不以心、既無將迎、豈有情於隱匿哉と、〔故能勝物而不傷〕「通義」に曰く、鏡之爲物、姸媸（美醜）取決於我、是勝物也、彼此無損、故曰無傷と、至人之用心以下は、既に上句に亦虛而已矣とありて、上文を結びし上に、又此の四句を着けて、箇の虛の字の意義を解釋したるなりと、宣穎は云へり、

南海之帝爲儵、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌、儵與忽、時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善、儵與忽謀報渾沌之德、曰人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死、

【大意】聰明の智は反りて天成の德を喪亡することを言ふ、此段は上段の故能勝物而不傷の意を承けて七竅開而渾沌死を述べ、不能勝物而傷の意を說けり、

【通釋】南海の神帝を儵と名づけ、北海の神帝を忽と名づけ、中央の神帝を渾沌と名づけたり、儵と忽との二帝が或る時に互に中央なる渾沌帝の處に出で遇ひたり、渾沌は二帝を待遇すること甚だ善く行き屆きたり、是に於て儵と忽と相談して渾沌の恩德に報いんと謀りて曰く、普通の人は何れも兩目兩耳一口兩鼻の七箇の竅がありて、目にて物を視、口にて食ひ鼻にて息をなして、大に便利なるが、此の渾沌に限り

を窮はめ盡くすときは、天の本來虛無なると同じく、人も亦虛無の德に至るのみ、彼の壺子が心の据ゑ處は全く是の道を執りしなり、全體至德ある人の心の働かし方は、宛も明鏡の物を映し照すが如し、鏡は全く虛明にして一點の塵垢をも止めざれば、物影の映るに隨うて照らし、後に在りて送らず、前に廻りて迎へず、物に應じて象徵を現はして、久しく形ちを留め藏めず、全くその當面の儘を示すのみ、されば鏡は能く多くの物に打ち勝ちて、其の妍媸美惡の決定を與へながら、照らす鏡も疵が付かず、照さるゝ物も反抗を起こさずして彼我共に何等の傷みなくして完全なるなり、彼の壺子は卽ち其の通りにて、最初より一點の盤れる心が無くして、全く至虛至明なるが故に物に打ち勝たざるを得ずして、季咸は遂に失敗せざるを得ずして自失して走れるなり、此の事に就いて觀るも、自然の道に任かして虛無なるときは物に勝ち、區々の人智を恃みて技巧を弄ぶものは、負くることを知るべきなり、

【解義】〔無爲名尸〕尸は主なり、名譽の主人公とならず、卽ち名譽の焦點地に立たずとなり、「郭注」に因レ物則物各當二其名一也とあり、物事に任かして爲すときは、名譽は各々其の物に分かれ付きて、己が名譽を獨り脊負うて立たざるが故に、隨うて名譽の奴隷とならざるなり、〔無爲謀府〕府はもと府庫の府にて「クラ」と訓ず、物を聚め藏むる處なれば、謀慮の寄り聚まり場處と云ふ意味にて、謀府と稱したるなり、俗言にて云へば謀の問屋と同じ、「郭註」に使レ物各自謀也とあり、〔無爲事任〕任は責任の任と同じ、引き受くること、「郭注」に付レ物使二各自任一とあり、〔無爲知主〕知は智と同じ、「郭注」に無レ心則物各自主二其知一也とあり、是亦各自の物其の働きを利用して、己は其の間智慮を勞して干涉せざること、「通義」に曰く首四句(名謀事知の四句)戒二不虛之習一以起二下文一と、〔體盡無窮云々〕體は體認なり、我が身に親しく着くることにて、實行するを謂ふ、朕は迹なり、「通義」に曰く無窮道之大也、無朕道之微也、身恆二此道一曰レ體、動靜無レ愧曰レ盡、周遊不レ離曰レ遊と、〔盡其所受乎天而無見得〕其は自己を謂ふ、所受於天とは天より受けたる本性なり、「通義」に曰く、無レ見無レ得、性體本然之虛也、天固虛也、我亦虛也、故曰レ盡二其所受

て、復此より加ふる無きを以て、終に變せざることを云ふ、「宣註」に道無復加とあり、又曰く引季咸壺子事、明帝王當虛己無爲、立於不測、不可使天下得相、其端以開機智、其取意微渺無倫、以上引五事、爲證と、王且曰く古者帝王之治天下、必有不測之用、故使人不可得而相、孔子曰、君子有三變、(「論語」に見ゆ)望之儼然、及其卽之、又變而爲溫、然聽其言也、又變而爲厲是豈可執一而相哉、夫變一而已、就之如日、望之如雲、其仁如天、其知如神、若此之多變、然則聖人出而治天下、使人不可得而相者、固所以取天下而用之之道也歟と、

無爲名尸、無爲謀府、無爲事任、無爲知主、體盡無窮、而遊無朕、盡其所受乎天、而無見得、亦虛而已、至人之用心若鏡、不將不逆、應而不藏、故能勝物而不傷、

【大意】前段の季咸壺子の對照を承けて、虛無なれば能く物を制することを言うて、應帝王の道は入聖人の道と異ならざることを說きて結と爲せり、「義海」に曰く名尸謀府事任知主、言季咸恃智謀、而任事要名也、體盡無窮以下、言壺子之道、不可測識、至人則指壺子明矣、非有心於勝物而不能不勝、使季咸自失而走是也、惟其不爭、所以善勝物、又惡能傷之哉、蓋明任道則其味無窮、任技則其能有限也と、

【通釋】天下を治むるには虛無に依るべきことは前條に述ぶる通りなるが、されば名譽の主となりて、衆人の目標に立つ地に居る無れ、謀慮の集め蓄へ處なる府となりて、多くの野心を包藏する無れ、智能の責任者と爲りて、何事にも己が人一番先きに立ちて、智慧を傾注する無れ、彼の季咸の如きは、卽ち全く智謀を恃みて物事に心を費し、任じて名譽を要めんとなせばこそ大失敗を來せしなり、道の廣大にして窮り無きものを此の身に體認して、一より十まで露聊かも愧ぢざるやうに盡して、道の精微にして朕迹もなき幽玄神妙なる場所に周り遊びて、己が天より受け得たるものにして、眼に見えず手に掛からざる本性

出來ざる至妙至神なる道理と云ふことにて、虛無の根本義を指せるなり、〔吾與之虛而委蛇〕之は季咸を指すなり、委は音「イ」「委蛇」は隨順なる貌、「列子」に猗移に作る、音義共に同じ、「郭註」に無心而隨物化と、〔不知其誰何〕誰何の熟語は此文を始めと爲す、「タゾ」「イヅレ」「ナンゾ」と訓じ、皆共に名指を爲して尋ぬることにて、物の名目又は形容の義に用ふ、不知は壺子自ら覺知せざるなり、「林註」に曰く無心而順物、故虛而而委蛇、不知其人是誰是何也、〔因以爲弟靡〕此れ靜止の時に就いて云ふ、因とは季咸に因るなり、弟靡は不窮の貌と釋文に見ゆ、「列子」に茅靡に作る、「郭註」は弟を頽と讀み、變化頽靡とあるを、「成疏」には頽者放任、靡者順從、夫上德無心、有感斯應、放任不務、順從於物と釋せり、尙ほ下解を看よ、〔因以爲波流〕此れ擧動の時に就いて云ふ、波流は「釋文」に崔本作波隨、云常隨從之とあり、王念孫は上文の蛇何靡の二字に就いて蛇を音「婆」、何を音「宜」に讀み、隨を蛇と同音に婆と讀みて、倶に叶韻と爲せり、「林註」に曰く、彼(季咸)且爲弟靡、因以爲弟靡、彼且爲波流、因以爲波流、此言壺子之變化在己也と、呂惠卿曰く其止也、因以爲茅靡、其動也、因以爲波流と、〔然後列子〕然後は季咸逃逸の後なり、〔三年不出一如食人〕三年は久しき年月の意なり、必ずしも三箇年を限るにあらず、三年不出は俗務を屛けて出でざること、爲妻爨は飯を炊ぐなり、夫妻の位の高下榮辱を忘れて、妻を助けて食事を世話するなり、食は音「シ」飼と同じ、人は貴く豕は賤しと別つて爲さず、淸淨不潔を忘れて、動物を飼ひ畜ふに、人の常食物を用ひ與ふるなり、〔雕琢復朴〕雕琢は外方の華飾を謂ふ、朴は素朴なり、「郭注」に去華取實とあり、〔塊然獨以其形立〕塊然は無心なる貌、「成疏」に外除雕琢、內遺心智、槁木之形、塊然無偶也とあり、〔紛而封哉〕紛は紛擾なり、封は「成疏」に守也とありて、雖復涉世紛擾、和光接物、而守眞、本確爾不移とあり、「列子」には恀然而封戎に作る、李楨は六句竝韻、食豕二句、人親爲韻、雕琢二句、朴立爲韻、紛而二句、戎終爲韻、哉字傳寫の譌と云へり、「崔本」には紛而を亂貌と注し、封戎散亂也とあり、此に依れば而は爾と同じ、紛而は紛爾にて、紛然と云ふが如し、〔一以是終〕一は專一なり、乃ち最頂上の道にし

は曰く、早く彼が後を追ひて伴れ來れと、列子急に走りて之を追ひしが、季咸の走り方が早きが故に、追ひ付かずして、反りて壺子に報告して曰く、已に其形は滅てしまひ、已に往方は見失ひてしまひ、殘念ながら私は追ひ付かざりきと、是に於て壺子は曰く、成程彼の逃ぐるは尤もなり、先刻彼に對するとき、吾は彼に示すに未始出吾宗とて、極く〳〵太初の虚無の道理を以つてしたり、此れは如何なる事かと云はんに、先づ吾が心は全く眞の虚無となりて、何に事をも考へずして委蛇とて專ら隨順一方にて、何に物をも胸中に無ければ、實に茫々漠々として、自から之を何んとも彼とも名づけ樣を知らず、唯々其の物事に因り隨ひて、或は弟靡とて推し窮まらざることを爲し、又因りて波流とて、宛かも波のまに〳〵流れ行くが如く、常に物に伴れ移りて毫も滯りなかりき、故に彼より此の方を見ては、此の方に善も惡しきも一向捕へ樣なければ、彼に於て吉凶の判斷を下だすこと能はず、其の術窮して逃れ去りたるなり、卽ち畢竟彼は僅かに術數の末技に止まりて、未だ大道の本體に達せざる者なりと、扨て只今まで列子は久しく壺子を師として事かへたれば、自分は最早上達せる積りなりしに、今年の事に因りて自分ながら己は未だ最初より本當の學問を爲さゞるものなりと考へて歸り、此より三年の間一切外交を止めて門外に出でず、自分にて其妻の爲めに炊事を爲し、又豕を飼養するに普通の人を飼養するが如くなし、卽ち勞働を厭はず、身分の貴賤を忘れて、一切の事柄に對して親疎の別を置かず、皆悉く平等に取り扱ひ、雕琢とて外觀的なる華やかなる飾りは盡く棄て除きて、本眞なる質朴に立ち復へり、塊然と無心無智の貌にて、何等の思慮野心を持たず、獨り己が形體のみを以て立ち、宛かも槁木死灰の如くに爲り、如何に紛擾の世事に出で遇ふとも、其の守りを失はざるやうに爲して、彼は專ら此の道を行ひて永き世を終へたり、

【解義】〔已滅矣已失矣〕滅は其の形を見ざるなり、失は往く所を知らざるなり、〔吾不及已〕已は矣と通ず、但辭を變じて云へるのみ、〔未始出吾宗〕宗は宗主宗旨の宗にて、今言ふ主義と同じ、王先謙は深根冥極不ㇾ出ㇾ見吾之宗主ㇾと釋せり、乃ち極めて奧深くして、最初より吾が主義として言語文章にも表現の

作りて、回流所鍾之域也と云へり、此に依れば潘は渦巻の有る場所なり、「宣註」は審音盤、水盤聚處とあり、淵は「管子」の度地篇に水出地而不流命曰淵とあり、「フチ」と訓ず、按ずるに此の淵は大魚の水中に潜り棲みて淵を成すものなれば、上文の善者機に比して云へるなり、〔止水之審〕止水は止りて流れざる水なれば、上文の杜德機に比して云へるなり、〔流水之審〕此れ流水が地勢によりて渦巻の形ちを成すを以て、上文の衡氣機に比して云へるなり、〔淵有九名〕「列子」の黃帝篇に九名を擧げて曰く、鯢旋之潘爲淵、止水之潘爲淵、流水之潘爲淵、濫水之潘爲淵、沃水之潘爲淵、氿水之潘爲淵、雍水之潘爲淵、汧水之潘爲淵、肥水之潘爲淵、是爲九淵焉とあり、

明日又與之見壺子、立未定、自失而走、壺子曰、追之、列子追之不及、反以報壺子曰、已滅矣、已失矣、吾弗及已、壺子曰、鄉吾示之以未始出吾宗、吾與之虛而委蛇、不知其誰何、因以爲弟靡、因以爲波流、故逃也、然後列子自以爲未始學而歸、三年不出、爲其妻爨、食豕如食人、於事無與親、雕琢復朴、塊然獨以形立、紛而封哉、一以是終、

【大意】　此れ未始出吾宗の相を示せしを說く、卽ち至虛全無にして、一絲の微も兆すことなく、萬象倶に空にして、何等の名狀形容をも爲し得ずして、物事に因りて伴れ移りて、假に物としては一向の手掛りもなき處を現はせるなり、宣穎曰く此一節尤微之微者也、學道至此、纔爲入聖、帝王至此、纔爲存神と、

【通釋】　是に於て列子は明日又季咸と與に壺子を見しが、季咸は其の場に立ちて未だ安んせざる内に、茫然自失して碌々挨拶もせずして逃げ走りたり、壺子

平如衡矣、又曰、鯢桓之淵、況天壤也、有鯢在焉、靜中有動也、止水之審爲淵、況地文也、純乎止水、則靜矣、流水之審爲淵、況太冲莫勝也、半流半審、得平衡之意、皆取乎淵者、不離乎渾藏不測之地也、其喩意精妙絶倫と、

【通釋】〔是に於て列子は又明日季咸と與に壺子を見たり、季咸退出して列子に謂うて曰く、寔に困りたることなり、貴所の先生は動靜が如何にも不齊にて一定せず、吾の力にては之を相して見極はむることを得ず、然しながら中るか中らざるが試みに復た之を相し見んと、列子は入りて其の事を以て壺子に告げたり、壺子曰く、ハア〳〵季咸は左樣に申さるゝか吾は先刻彼に示すに太冲莫勝とて、尊き虛無の氣象は何に事にも爭ひて負け勝ちのなき模樣にて、何れの一方にも偏倚せざる處を示したれば、彼は最早捕捉して云ふべき固定的形相なきを以て、吾を不齊と謂へりしならん、是れ殆んど吾が衡氣機と申すものを見しならん、全體に水の深く溜る處を淵と名づくるが、その淵にも又各々種目あり、鯢桓の審とて大魚の盤まり、棲みて水深くして渦巻く處を淵と名づけ、止まれる水の靜かに渦巻く處を淵と名づけ、流水の渦巻く處を淵と名づく、淵は凡て九種目あり、此の以上のものはその九種類の淵中にての三種類に居るものなり、今吾が彼に示せる相形も亦彼の淵の如く、多くの種類あり、今迄に彼に示せしは其の部分的にして全體にはあらず、尙ほ澤山に示すべき形相あり、試みに今一應彼を同伴して來れ、

【解義】〔太冲莫勝〕太は尊稱にて冲は虛なり、無勝は互に勝負の無きことにて、爭はざれば勝負なきを以て、不爭を無勝と云ふ、「宣註」には冲漠（虛無）之氣、無所偏勝、勝字列子作朕とあり、朕は迹なり、〔吾衡氣機〕衡は平なり、平均に行き亙りて勝ち負けの無き氣心の發動せる處を衡氣機と曰ふ、「成疏」に卽迹、卽本、無優無劣、神氣平等、以此應機、小巫近見、不能遠測、心中迷亂、所以謂齊耳と、〔鯢桓之審〕鯢は大魚なり、簡文曰鯨魚也、クヂラの魚兒を鯢と曰ふ、此にては大魚と解すべし、桓は盤桓なり、「ワダカマル」と訓じて棲息を謂ふ、審は當に潘に作るべし、潘の省字なり、「説文」に潘大波也、從水潘聲とあり、「列子」に皆潘に作る、「釋文」は「崔註」を引いて潘に

瘳と曰ふ、「說文」に疾瘉也とあり、「徐注」に忽愈如抽去之也と、〔吾見其杜權矣〕杜は閉藏なり、權は稱錘なり、杜權とは閉藏の中に稱錘の移動すべき者あるが如く、死中に活意あることを謂ふ、〔吾示之以天壤〕壤は地なり、「成疏」に謂示以應動之容也、譬彼兩儀覆載萬物、至人應感、其義亦然とあり、〔名實不入〕名も實も其の間に塡め樣も無きこと、乃ち天地間の萬物を覆載して廣大無邊なるが如く、生氣の渾圓充滿して、其の間に向うて何等の名も實も之を形容して指定することと能はざるを謂ふ、〔而機發於踵〕踵は「クビス」と訓ず、本なり、「宣注」に一段生氣、自踵而發とあり、前の大宗師篇に、眞人之息以踵、衆人之息以喉とあり、參考すべし、〔吾善者機〕「郭註」は機發而善於彼、彼乃見之とあり、乃ち一方の我より發したる善機は、能く天地の自然に叶へるが故に、一方の彼は其の模樣を見て取り善と爲して、全然有生と云へりとなり、又善は「易」の繫辭に、繼之者善也とある善の如く、卽ち一元氣の相續ぐは、乃ち天の萬物を生ずる所以なれば、善者機とは活意生氣の發動を謂へるなり、「林注」は善者可欲之謂、彼之所見曰機、壺子自謂爲權、權則所見者粗、機則所存者妙故也と云へり、此に依れば、壺子自身を本位として、粗的に云ふときは杜機と曰ひ、季咸より見て精的に云へば、善者機と曰へるも、其の實は同じき物を指したるなり、

明日又與之見壺子、出而謂列子曰、子之先生不齊、吾無得而相焉、試齊、且復相之、列子入以告壺子、壺子曰、吾鄕示之以太冲莫勝、是殆見吾衡氣機也、鯢桓之審爲淵、止水之審爲淵、流水之審爲淵、淵有九名、此處三焉、嘗又與來、

【大意】衡氣機の相を示せるを說く、卽ち動くにも非らず、靜かなるにもあらず、陰陽倶に渾する處を現はせるなり、宣穎曰く、衡氣機妙、既太冲莫勝、則兩

灰均其寂魄(寞と同じ)此至人無感之時也と、(是殆見吾杜德機) 殆は近なり、杜は塞なり、機は發動なり、杜德機とは吾が德を塞げる機なり、「成疏」に至德之機、開而不發、示其凝淡、便爲濕灰、小巫庸瑣、近見於此矣と、「通義」は曰く、杜則楗閉莫窺、機則微有可覩、此至人潛德內蘊之貌、有非術者所能測識也と、

明日又與之見壺子、出而謂列子曰、幸矣、子之先生遇我也、有瘳矣、全然有生矣、吾見其杜權矣、列子入以告壺子、壺子曰、鄉吾示之以天壤、名實不入、而機發於踵、是殆見吾善者機也、嘗又與來、

【大意】前章は地文の相を説き、此章は天壤の相を説く、一層より一層に深入す、

【通釋】是に於て列子は明日又季咸と共に壺子に見え、出でゝ列子に謂うて曰く、誠に幸ひなり、貴所の先生壺子の自己に遇ひしことは先生の病の屹度瘳ることなり、此れならば全く生くることありて大丈夫疑ひなし、何んとなれば今自分は先生の杜權とて杜閉せる中に何邊か活氣の萠しあることを見たりと、列子は之を聞きて嬉しく思ひ、奥へ入りて此の言を壺子に告げたり、壺子は曰く左もあらん、此又故あることなり、先刻季咸に逢ひしとき、自分は彼に示すに天壤と申して、宛も天地の中に何物かありて動かんとする機を以てしたり、抑も天壤とは如何なる形容詞を以て名狀して宜しきか、又如何なる實物が有ると斷言して可なるものか、名も實も之に宛て塡むべからず、卽ち形容指定し得ざるものにてありながら、一種の活機は最下體たる踵底より發動せる處を天地に泥へて形容したる語なり、然るに今彼は左樣に申すならば、是れ殆ど吾が善者機と申せる生意ある形相を見たるなり、されば汝ち明日試に又彼と同伴して來るべし、吾今一應之を試みんと、

【解義】(有瘳矣) 瘳は音「リユ」、疾の速かに愈るを

伏則不動、故不震而不可謂無有也、故不止、杜德機妙、一杜字較退藏二字更爲精爽、機者其徵也と、

【通釋】 是に於て明日列子は季咸を伴れて與に壺子に謁見したり、季咸は篤と壺子を相して終はり、其の場を退き出でゝ列子に謂うて曰く、ア、如何にも氣の毒なるかな、其所許の先生壺子は死するに相違なし、到底活き長らへることは無し、而かも死期は何十日などゝ多き日數を數へずして、極めて近日ならん、如何となれば、吾は壺子の人相を見しとき怪しき相を見たり、濕灰とて宛かも濕りたる灰の如く、顏色氣焔が一向に揚らざることを見たり、此の趣にては氣の毒ながら最早死期が近づけりと、列子之を聞き師弟の情哀みに堪へず、入りて泣涕して涙の衣襟を沾しながら季咸の言を以て有りの儘に壺子に告げたり、壺子は曰く、如何樣是の如く彼が申さるゝか、此れは故あることにて、實は先刻吾は彼に示すに地文と云へる相を以てしたり、地文とは地理的色相にて、宛かも彼の大地が萠然と何にか物を萠しつゝあれども、未だ著しく目に見えて震動せざると共に、全くに止みもせず卽ち動きさうにて動かざることなるが、是れ乃ち吾が具へ居る生意を深く奧に仕舞ひ込みたる模樣の杜德機と云へるものを見て、左樣に申さるゝなり今一度汝は彼を伴れて來れよ、吾は又別手のものを示さん、

【解義】 〔不以旬數矣〕 十日を旬と曰ふ、十日を以て數へざる內に早くも死すとなり、〔見濕灰焉〕 濕灰は濕れたる灰なり、乃ち元氣の衰へて氣焔の揚らざることを謂ふ、〔泣涕沾襟〕 襟は衣襟なり、「エリ」と訓ず、〔鄉吾示之以地文〕 鄉は嚮と同じ、地文とは文は象なり、其の外に見はれたる相貌は、生氣內に沈墜して外に揚らざること、宛かも地氣の下層に潜伏して上に發揚するを得ずして、種々の象を現はすが如くなるより名づけて地文と云へるなり、〔萠乎不震不止〕 此れ乃ち上の地文の義を自釋したるなり、萠乎は動かんと萠しつゝある模樣なり、震は動なり、〔列子〕には罪乎不誫不止に作る、俞樾曰く、罪讀爲嶵、說文作嶵、云山貌、震卽誫之異、不誫不止者、不動不止也、故以嶵乎形容之、言與山同也、今罪誤作萠、止誤作正、失其義と、「列子」の「張註」に「向註」を引きて曰く、不動亦不自止、與枯木同其不華、死

但彼の季咸が技術を見たるのみにて、未だ其の術の由來する所を知らざるに、而かも遽かに其の神妙なることを輕々しく稱するは、宛かも衆雌の雄なくして卵を生むが如く、到底眞機を得る筈なしと云へり、〔衆雌而無雄云々〕「宣注」に雌之得卵、必雄交之、今無雄、何得有卵、譬如己未與以實、列子何得知道也と、又曰く衆雌無雄、笑盡天下人矣〔而以道與世亢必信〕亢は抗と同じ、「列子」に抗に作る、信は人をして己を信ぜしむるなり、必信とは乃ち己の信用を人より取るを務むるを謂ふ、夫は語助「カナ」と訓ず、「集解」に依れば、信は讀で伸と爲す、汝の道尙ほ淺し、而かも乃ち世と對抗して必らず伸びんことを求むとなり、而は爾と同じ、亦列子を指す、此の道の字は輕く看るべし、卽ち列子が已に得たる道にて前に云へる文なり、實を謂ふにあらず、乃ち汝は汝が得たる皮相的の道を以て世人と對抗して、必らず彼をして己を信ぜしめんとす、是れ已に我が心に一物あれば、彼をして能く看破し、其の隙に乘ずるを得せしむるなり、「宣注」に汝揚其能以取信於人、自處先己淺露矣と、〔故使人得而相汝〕人は季咸を指す、己の蘊蓄が淺薄なればこそ、他人に乘ぜられて其の胸底を窺測するを得せしむるなれ、苟も己が蘊蓄にして深遠なれば、仲々季咸の如きものに批評せらるべきに非ずとの意味を含蓄して云へるなり、

明日列子與之見壺子、出而謂列子曰、嘻、子之先生死矣、弗活矣、不以旬數矣、吾見怪焉、見濕灰焉、列子入、泣涕沾襟、以告壺子、壺子曰、鄕吾示之以地文、萌乎不震不正、是殆見吾杜德機也、嘗又與來、

【大意】以下壺子の虛無の道を以て季咸を折服したることを說く、本節は先づ有無の間なる地文の相、杜德機と名づくるものに就いて云ふ、宣頴曰く、地文妙、示之以靜、則伏於大陰也、(此れ文と云ふべからず)萠乎不震不止、非無生意也、(卽ち地文なり)然

又奚卵焉、而以道與世亢必信夫、故使人得而相汝、嘗試與來、以予示之、

【大意】先づ列子の弱點ありて、季咸に乘ぜられたることを言ひ、下文の壺子が三變の相を示せることを喚起す、以道與世亢必信夫の句、是れ列子が病根と爲す、

【通釈】壺子は答へて曰く、是れ全く汝が未熟なるが故なり、何にも彼が偉き譯にあらず、只今まで吾は汝を弟子として敎へたるが、此は唯だ道の上皮的なる文章言語を敎へ盡くしたるに止まりて、未だ道の精髓的なる眞實理趣を敎へ盡さず、卽ち汝は吾が道に於て未熟なる者にありながら、僭越にも自分免許にて、最早吾は道の奧意眞實を得たる者と爲せるか、此れ既に第一着が間違ひ居れり、今譬へば多くの雌鳥あるとも、雄鳥がなきときは何とて獨身にて卵子を得ることぞや、卽ち道には文と實との二つあり、合體してこそ始めて妙味妙用を生ずるなり、然るに今汝は僅かに其の一にして末節なる文を得たればとて、未だ一方の肝要にして本體なる實を得ざれば、固より彼の衆雌あるとも一雄なきときは其の子の生誕せざると同じ、汝の說が成り立つ筈なきなり、汝は其れにも關せずして、汝が未熟なる道を以て世間と對抗するときは、必らず引けを取るまじ是非に伸びんと求むるに相違なきなり、汝は此の野心が有るが故に、彼の季咸の羂に汝が胸中を見透かされて、甘く彼が相術に一杯掛けられたるなり、先づ論より證據であるが、汝一つ試みに季咸を伴て來れ、予が一つ面會して遣はさん、

【解義】〔吾與汝〕與は「成疏」に授也とあり、敎授すること、〔既其文未既其實〕既は盡なり「文は文辭言語なり、實は道理趣味なり、乃ち皮相の處を傳へて、未だ精髓を傳へずとなり、〔而固得道與〕而は爾なり、列子を指す、固は固執なり、與は歟と同じ、反語なり、乃ち汝固く以て已に道を得たりと爲すとも、決して未だ道を得たりと爲すべからずとなり、「通義」に依れば、吾與汝とは汎く吾輩と衆人との謂にして、單に己と列子とを限れるにあらず、乃ち我輩衆人共に

至焉者矣、

【大意】　季咸と壺子の事を借りて、抗爭の野心あるものは外間より乘せられ易く、之に反して冷靜なるものは、他より隙を窺うて侵すべからざるを言ひ、以て虛無恬淡の道は乃ち天下を治むる要具なることを說けり、而して此段先づ列子に藉りて、二人相見るの楔子と爲す、宣穎曰く以道與世抗、必信、故使人得而相汝、可知從來帝王、都是暴其所長、期民信從、故天下得窺其意嚮、以爲趨避と、

【通釋】　鄭國に神妙なる巫あり、其の名を季咸と云へり、季咸は人の死生存亡若くは禍福壽夭の事を前知し、其の事の有るべき歲月日を約定して豫言するに、其の的中の至妙なること鬼神の如く、實に不思議極まれるを以て、鄭國の人は季咸を見れば、直に己が前途の不吉なる事を言ひ中てらるゝを恐懼の餘り皆棄てゝ走り避くるなり、然るに列子は季咸の豫言が必らず的中するを見て、心醉とて心底から迷信して、如何にも神妙不思議なりとて、歸りて其の師たる壺子と云へる賢者に告げて曰く、始め私は先生の道を以て天下最上一にて二となきものと思ひ居れり、然るに今季咸の事を聞くに及びては、世には上に上がありて失禮ながら先生より更に偉きものありと、

【解義】　〔鄭有神巫〕巫は「ミコ」と訓ず、女を巫と曰ひ、男を覡と曰ふ、巫祝の解已に人間世に見ゆ、神巫とは神異なる巫なり、「列子」の黃帝篇亦此の事を載す、宜しく參考すべし、〔曰季咸〕季は姓にして咸は名なり、「列子」に有神巫、自齊來居鄭、曰季咸とあり、〔期以歲月旬日〕十日を旬と曰ふ、「成疏」に占候吉凶、必無差失、剋定時日、驗若鬼神と云へり、乃ち歲月時日を指し、吉凶を預言して間違ひなきことなり、〔皆棄而走〕「成疏」に不喜預聞凶禍、是以棄而走也とあり、乃ち餘り凶禍の豫言が的中するを以て、恐て逃げること、〔心醉歸以告壺子〕心醉は「成疏」に中心羨仰、恍然如醉とあり、乃ち敬慕の余り、宛かも酒に醉へるが如く、恍惚として夢中の心地なること、

壺子曰、吾與汝既其文、未既其實、而固得道與、衆雌而無雄、而

者、不貳事不移官とあるが如く、凡そ技術を以て上に事ふる者は、必らず終身其の技術に專ら關繫せしめて、轉業轉職を許さゞるが古代の制なれば、因て專門的に事物に囚はれて、自由のきかざるものを技係と云へるなり、〔勞形怵心〕怵は音「チユツ」、恐なり、怵心とは心を驚動して恐るゝこと、「宣註」に形神兩不能適、智能之累、何以異此、言學聖人而愈遠也と、〔虎豹之文來田〕文は文章なり、「アヤ」と訓ず、田は田獵なり「カリ」と訓ず、來は自ら招き致すことなり、乃ち虎豹は皮毛の文章ありて物の飾りと爲るが故に、人に獵獲せらるゝを謂ふ、〔猨狙之便〕猨は猿と同じ、狙もまた「サル」と訓ず、既に齊物論篇に見ゆ、便は便捷なり、成疏に猨狙以跳躍便捷恆被繩拘とあり、〔執斄之狗來藉〕斄は音「ライ」、又音「リ」、崔云旄牛也と「釋文」に見ゆ、又斄は音狸にて、義も相通ず「タヌキ」と訓ず、藉は繩なり、又繫なり、「成疏」に狗以執捉狐狸每遭係頸とあり、天地篇にも執狸之狗、猨狙之便の語あれば、本句の斄は亦狸の字に解すべし、「義海」も至大之牛狗豈能執と云へり、〔陽子居蹵然〕蹵は音「シク」容を改むる貌、〔化貸萬物〕貸は施なり、施は「ヒク」と訓ず、延なり、「儀禮」喪服の註に、在旁而及曰施とあり、風化廣く施きて、萬物に遍く及ぶことなり、〔而民弗恃〕恃は賴なり、乃ち餘り其の德が偉大なるが故に、人民は深淵なる德澤を蒙りながら、自から氣附かずして、我等は自然の下に生活すれば、君の恩澤に賴らずと思へるとなり、〔有莫擧名〕莫は無なり、擧は唱へ稱すること、其の有せる道德を何共形容して唱ふるを得ず、乃ち大なるが故に、口に言ひ難きなり、〔使物自喜〕物々各々自から其の樂みを得ること、〔立乎不測〕岡松甕谷曰く、居於不可測度之地、而無跡可尋、故曰立乎不測而遊於無有と、

鄭有神巫、曰季咸、知人之死生存亡、禍福壽夭、期以歲月旬日、若神、鄭人見之、皆棄而走、列子見之而心醉、歸以告壺子、曰、始吾以夫子之道爲至矣、則又有

せに古への明王に比すべきや、古への明王は寧ろ此の如き智能を惡み給ひしものなりと、陽子居は其の敎への意外なるに驚き、蹵然と態度を改めて曰く、誠に不束なる質問を致して恐縮に存ずるが、今一應押し切りて臆面もなく伺ひ度し、全體先生の仰せの明王が天下の治め方は如何なるものなるかと、老聃答へて曰く、然ればなり、明王の治め方は其の功績は滿天下を蓋うて、何人も及ぶもの無く、而かも其の功は決して自分より出でざるに似て、一向毫も何に由りて然るかを心にも掛けず、感化は廣く萬物に施し行き亙りながら、國民も亦皆自然に此に至れりと思ひて、明王の御蔭に賴れりと爲さず、何等かの物がありて然かする樣に覺ゆれども、去りとて何に物が爲すかと確乎と指名して擧げ唱ふこと無し、卽ち何共形容なし難きものありて、溫き恩愛ある情は萬物をして自然に嬉しく感せしめ、如何なる物か推し測るべからざる神聖の位地に屹立して、而かも何事も無き空虛恬靜なる場所に游びて樂める者、是れぞ明王の治なり、

【解義】〔陽子居〕陽は姓にして、居は名なり、子は男子の通稱なりと「釋文」の李說に見ゆ、或は曰く、是れ乃ち「孟子」に、墨子と共に排斥して楊墨と云はれたる楊朱のことなりと、〔嚮疾彊梁〕嚮は響と通ず、響疾とは響の聲に應じて疾やかなる如く、神智の敏捷なること、又其の事に嚮ひて進むの捷疾なる義とも云へり、强梁は勢の强きこと、「宣註」は四字を釋して、趨事甚勇能也とあり、乃ち材能を形容したるなり、〔物徹疏明〕物は事物なり、徹は通なり、事物の道理が能く通徹して開明なること、乃ち其の智たるや、物として達せざるなく、事として通せざるなきことなり、疏は塞の反對にして開くること、「宣註」には燭物甚明智也とあり、〔胥易技係〕胥は胥徒なり、「周禮」の鄭註に、胥徒民給徭役者とあり、人夫として官用を給するもの、易は治なり、「孟子」に易其田疇とあり、「禮記」の檀弓に易墓とあるを、皆易を讀みて治の義となせり、胥易とは胥徒の役に供し事を治むるを謂ふ、是れ郭慶藩の說なるが、今之を用ふ、又一說に胥は相なり、易は改易なりと解すれども、非なり、技係とは技は伎と同じ、巧技なり、係は繫と同じ、束縛すること、「禮記」の王制に、凡執技以事上

王之治、老聃曰、明王之治、功蓋天下、而似不自己、化貸萬物、而民不恃、有莫擧名、使物自喜、立乎不測、而遊於無有者也、

【大意】前章と同じ、但前章は自然に順ふことを正面よりして説き、此章は反面よりして説き、前章は問少くして答多し、此章は問多くして答少し、是れ行文上の變化に屬す、虎豹猨狙斄狗の三喩、以て智能の反て累を致すを説く、又其の一歩を進めて説けるを見るべし、宣穎曰く、老子數語、寫盡帝王氣象、可立乎不測一句、引動下文一大幅文章（鄭有神巫章を指す）と、

【通釋】陽子居と申せる人が、老聃に見えて曰く、古への明王と申すは、如何にも見上げたる偉き方々なるが、今此所に人物がありて、其の人柄は嚮疾彊梁とて、物事を爲すに機敏にして勇氣あり、物の道理は透き徹りて、筋道が立ちて明らかなるも、尚自から滿足とせず、益々道を學びて倦み退屈せず、進取的向上的氣象は溢れん計りに盛んなり、是の如き者は古への明王に比すべき人なるか、如何と、老聃は答へて曰く、否とよ、是の人物が古への聖人卽ち明王に對しては、宛かも小役人共が互に入れ易りて當番に事を取り扱ひ、技師共が技藝に此身を係ぎ縛られて、形體を勞働し心智を驚動さする者と同樣にて、徒に目前の局限的に汲々として、形心兩つながら疲れ果てゝ、到底も大本大體に心掛けて着目するなどは思ひ寄らざれば、仲々古への聖人卽ち明王に比すべからざるなり、其の上に其所許は、頻に智能を唯一の武器と心得て、左樣に云はるゝが、全體人は智能程、身を誤り易きものはあらず、試に見られよ、彼の虎豹の二獸は、餘り身に麗はしき毛のあるが爲めに、人の田獵を引き起し、猿狙の二物は、餘り身體の敏捷なるが爲めに、人に玩用せられ、能く斄を執ふる狗は、亦重寶がられて共に人に繫ぎ縛られて、利用さるゝことを來たすなり、此れ皆何れも其の身に特長的の文章智能が有るが故に、反りて爲めに自由を束縛せらるゝに至るなり、されば、物の智能程物を苦しめ縛りて困難せしむる者はあらず、左樣なる智能があればとて、何

也、王逸註二楚辭惜誦篇行婞直而不一レ豫兮、亦曰豫厭也、無名人深怪二天根之多問一、故曰何問之不豫、猶レ云何許子之不レ憚レ煩（孟子）也と、此れ不豫とは饜き足らずして執强きことと釋したるなり、又豫預なり、不預とは我が事に預り關係せずとて、天根が問ひの突飛にして、切實ならざるを咎むるなりと解せし說もあり、何れも皆通ず、今姑く成疏を用ふ、「予方將與造物者爲人」已に大宗師の篇に見ゆ、「莽眇之鳥」成疏に依れば、莽眇は深遠なること、鳥とは其の飛行して迹なきを以て、活動の微妙にして痕迹を留めざるに喩ふるなり、「釋文」には莽眇は輕虛の狀なりとあり、王先謙は淸虛の氣、鳥の若く然るを謂ふと云へり、「六極之外」六極は六合のこと、已に大宗師篇に見ゆ、「無何有之鄕」太虛の地なり、已に逍遙遊篇に見ゆ、「壙埌之野」埌は音「狼」、壙埌は曠蕩と義同じ、廣大にして滯礙なきなり、「汝又何帠以治天下」帠は音「詣」、又音「藝」にて法なり、又一本に寱に作ると「釋文」にあり、兪樾は曰く、帠は未だ何の字なるを詳かにせず、疑らくは臬の字の訛ならん、故に司馬彪も法と訓せしなり、然れども臬は寱の假字にて、「一切經音義」に通俗文を引きて、夢語謂二之寱一とあり、此の所は無名人、蓋し天根の所問は昏夢の語と同じと謂へるなり、郭慶藩又「一切經音義」に、三倉に寱于歲反、謊言也とあるを引きて、謊言は卽ち夢語と異る無しと云へり、此れに據れば、帠は臬の訛にして臬は寱と同じ、「タハコト」と訓ず、「遊心於淡」嗜欲なきなり、淡は淡泊恬靜なることを謂ふ、「合氣於漠」氣は形氣なり、漠は寞と通ず、寂寞の鄕なり、無聲無臭のこと慕ふ所なきなり、

陽子居見二老聃一曰、有レ人於レ此、嚮疾彊梁、物徹疏明、學レ道不レ勸、如レ是者、可レ比二明王一乎、老聃曰、是於二聖人一也、胥易技係、勞レ形怵レ心者也、且也虎豹之文來レ田、猨狙之便、執斄之狗來レ藉、如レ是者、可レ比二明王一乎、陽子居蹵然曰、敢問二明

けるやう、何卒天下を治むる方法を伺ひ度しと、無名人一喝して曰ひけるに、早く其所を去れよ、汝は鄙陋なる人なるぞ、何ぞ物の問ひ樣の不愉快なるか、寔に不都合の至なるぞ、左樣のことは予の取り合ふことならず、予は只今將に造物者と仲間友達とならんとしつゝあるなり、若し斯世を厭き足ることあらば、此の上に彼の莽眇と輕虛なる鳥に乘りて、上下四方の六極以外に出でゝ、無何有の鄕とて何等も有る無き處、卽ち空虛の世界に遊び、壙埌の野とて廣々として當り障り無き卽ち自由自在の場處に居らんとす、是の如きときは、彼の謂はゆる天下の如きは眇たる一小物にて、初めより之に手を著けて治むる抔と云ふことが既に煩さき限りなり、汝は又何の謊言ぞ、その煩るさき小ポケなる天下を治むる抔の事柄を左も業々しく申し立てゝ、予が心を感じ動かさんとするか、左樣なる不愉快なる話は最早止むべきなりと、散々に叱り付けられしが、天根は鈍根にして未だ無名人の深意を曉ることと能はざれば、更に又推し返へして問はれたり、無名人は曰く左程に思ふことなれば、汝宜しく自分の心神を淡泊無欲の處に落ち付け、飾らず貪らず、汝が形氣卽ち身體を寂寞虛靜の地に置き据ゑて、騷がず悶えず、物事自然の道理に順うて私心を其の間に容れ己が勝手氣儘を働かざるときは、天下は別に事々しく法律規則などを以て威壓束縛を加へざるとも、自然に治まりて太平無事なることと請け合ひなり、

【解義】〔天根遊於殷陽〕天根は人の姓名にして、亦莊子の寓言なり、殷は山の名なり、陽は山南を陽と曰ふ、〔蓼水之上〕蓼水は川の名にて、「成疏」に蓼水在趙國界內」とあり、〔遭無名人〕遭は遇なり、期せずして相見ること、俗に「デアフ」と云ふ、〔請問爲天下〕爲は治なり、「成疏」に天根遨遊於山水之間、適遇無名人而問之、請問之意、在乎天下」と云へり、蓋し天根は世を超越して自然を樂まんと爲しながら、未だ世事を忘るゝ能はざるなり、是れ彼が病根の存する處と知るべし、〔何問之不豫也〕不豫は數說あり、司馬彪曰く嫌不漸豫太倉卒也と、此れに由れば、不豫とは漸々に豫地を爲さずして、唐突に問へるを咎むるを謂ふ、簡文曰く豫悅也と、「成疏」に所問之旨、甚不悅豫我心」と、兪樾曰く「爾雅」釋詁豫厭

範圍內に止めて、敢て強制的に分外の事を爲さずとなり、〔矰弋之害〕矰弋は鳥を捕ふる網と射ぐるみなり、既に前に辯せり、〔鼷鼠深穴乎神丘〕鼷鼠は俗に「ハツカネズミ」と謂ふ小鼠なり、神丘は「成疏」には社壇なりと釋し、世人の崇敬する社壇の下に深穴を構へて、居るときは、神靈を汚さんことを恐れて、敢て火で熏べ、又は穿ち鑿らずとの意に解せり、「宣註」は、神丘を名山と解せり、今前說を用ふ、「郭注」に曰く、禽獸猶各有以自存、故帝王任之而不爲、則自存也と、〔而曾二蟲之無知〕而は汝なり、曾は乃なり蟲は鳥獸の通稱、今の動物と云ふが如し、既に逍遙遊の篇に解せり、二蟲は鳥と鼷鼠なり、知は智と同じ、「宣註」に二蟲尙知避患、曾謂人反無知、可以斯德驅之乎と云へり、按ずるに、此の句正に上の是欺德也の句に顧應して結を作せるなり、「成疏」には而汝也、汝曾不知此二蟲不待敎令而解避害全身乎と解すれども、宣說の直截簡瞭なるに如かず、

天根遊於殷陽、至蓼水之上、適遭無名人而問焉、曰、請問爲天下、無名人曰、去、女鄙人也、何問之不豫也、予方將與造物者爲人、厭則又乘夫莽眇之鳥、以出六極之外、而遊無何有之鄉、以處壙埌之野、汝又何帠以治天下感予之心爲、又復問、無名人曰、汝遊心於淡、合氣於漠、順物自然、而無容私焉、而天下治矣、

【大意】虛靜恬淡は己を修むると共に、天下を治むる道なることを言ふ、宣穎曰く游心於淡、合氣於漠、是宥密修己之道、順物自然、無容私焉、是變化治人之道、帝王之事盡矣と、

【通釋】天根と申せし人あり、殷山と申す山の南方に遊びて、蓼水と申す川の上に至りしに、恰も無名人と申す人に出で遭ひたりしかば、因りて問うて曰ひ

と鼷鼠程の智慧も無しとは、決して受け取れぬ話なり、されば在上者其人も矢張り同じ人間でありながら、如何に人民なればとて愚弄して治むべきものにあらず、

【解義】〔肩吾見狂接輿〕肩吾狂接輿共に古への賢人なり、既に前篇に見ゆ、〔日中始〕古への賢人の姓名なりと「成疏」「釋文」に見ゆ、兪樾は日は日者にて、中始は人の名なり、即ち日者中始何以語女と云ふと同じ、「左傳」の文七年に日衞不睦とあり、襄の二十六年に日其過此也とあり、昭七年に日君以夫公孫段爲能任其事とあり、皆な日の一字を以て日者の義と爲せり、亦以て證とすべしと云へり、日者とは「サキニ」と訓じ、先頃の意なり、〔以己出經式義度〕「成疏」は經の字を句と爲して式を用なりと釋し、必須己出智以經綸、用仁義以導俗と解せり、此の説に依れば、以己出經式義度と讀むべし、王念孫は義を儀と通ずと爲し、儀を法なりと釋し、經式儀度の四字、共に法度を謂ふと解せり、「通義」に曰く、以己出經式義度、言凡所以範圍天下、必經常之道、標示準繩、必此心所安者、皆由己出、猶曰聲爲律身爲度也、此二句己與人對、經與義對、式與度對と、〔是欺德也〕「成疏」に欺誑之德非實道と云へり、梁の簡文帝は欺は忘なりと云へり、〔猶涉海鑿河而使蚊負山也〕涉は徒涉なり、「成疏」は溟海宏博深廣難窮、而穿之爲河、必無成理と、此に依れば涉海鑿河を一串して、深廣なる海中に於て穿鑿して河を造らんも、必らず溺れて成就すべき理なしと解し、又「釋文」に李説を引きて、涉海必陷波、鑿河無成也とあり、此に依れば、涉海と鑿河とを二事に分ちて解せり、今後説を用ふ、〔而使蚉負山〕蚉は蚊と同じ、「宣註」に曰く、以至微負至鉅、必不能勝、上句喩造作難爲之事、下句喩民不堪命と、〔治外乎〕先づ故らに一句を以て詰問し、下句直ちに正意に向ひ説き去る處、亦文筆の矯健を見るべし、上文に云へる經式義度は、即ち是れ治外なり、〔正而後行〕「郭注」に各正性命之分也とあり、乃ち自然の本性に順ふことにて、廣瀨淡窓は如鳥飛魚沈不假作爲と云へり、〔確乎能其事〕確乎は堅實なる貌、「成疏」に順其實性於事有能者、因而任之、止於分內、不論於外者也とあり、乃ち堅實的に本性の自然に順ひ事を爲すに於て、其の能ふる

乎、正而後行、確乎能其事而已矣、且鳥高飛以避矰弋之害、鼷鼠深穴乎神丘之下、以避熏鑿之患、而曾二蟲之無知、

【大意】　國家天下を治むるには、自然の道に由る外に方法なし、彼の區々の智術を恃み人を强制するものは、終に失敗に歸すべきことを言ふ、

【通釋】　肩吾或る時狂接輿を見舞ひしに、狂接輿は之に謂うて曰く、君は近頃彼の日中始から何か話を聞きしか、願はくは吾に語られよと、肩吾は答へて曰く、彼れ日中始は我に告げて曰へらく、凡そ人君と爲りて國を治むるものは、先づ己が身を中心と爲し、それより割り出だして經式儀度とて凡ての常則制度を出だし、卽ち身を以て率先して政法を行ひゆかば、人々誰か聽從して感化せざらんやと、狂接輿之を聞きて曰く、一應成程尤もらしき言なるが、是れぞ正しく欺德と申して、世を欺ける似而非なる道德にして、決して誠實の道にあらず、若し果して斯の如き不心得なる考へを以て天下を治むるときは、譬へば、大海を徒渉りし、大河を始め鑿つが如く、或は溺死し或は不容易にして、共に成功覺束なき義にて、到底爲政者としては失敗の外なし、而して被治者たる國民側に於ては、亦負擔の重きに堪へざること、宛かも眇たる蚊の大山を負ふ如く、又到底支へ得べき事ならず、全體聖人の國を治むる仕方と申すものは、豈に徒に常則制度の末に汲々として、外を治むるを急となさんや、先づ己が身に反省し其の性分を正しくして、確乎と堅固に己が爲し堪ふる事を能く行ふのみにて此の外、非分の事を爲さず、卽ち自然の道に順うて民を治むるのみ、尙又其の上に己が身より凡ての法度を割り出だすと云ふことが既に間違ひたることなり、人は各々相當なる智慧あり、決して己れ獨り智者振りて、籠絡的手段を執るべからず、鳥は高く飛びて、人に矰弋を以て射らるゝ危害を避け、鼷鼠は深く神丘の下に穴づくりして、人から火で熏され物で鑿られて捕へらるゝ患を避くることを爲せり、彼の眇たる動物すらも各々相當に自衛的智慧あるに、而かも萬物の靈長たる人類にして、曾ち此の二蟲卽ち鳥

々は無智なる貌、〔一以己爲馬〕一以は或以と其義同じ、「成疏」は或馬或牛、隨人呼召とあり、卽ち前篇に呼我爲馬、應之曰馬、呼我曰牛、輒應之曰牛とありたると同じ、「宣註」は不見己之有異とあり、乃ち自ら以て牛馬と同じくして、別に己と牛馬と異れる點を發見せずとなり、〔其知情信〕知は智と同じ、情は實なり「マコト」と訓ず、「左傳」の哀公八年に、魯有名而無情とあるを、「杜註」に有大國名而無情實と解せり、信も又同じく「マコト」と訓ずれども、信は詐の反にてもと言語のちがはぬことにて、汎く間違ひなきに用ふ、實は虛の反對にて、みいりのしかとしたること、內のからのものにて無き意なり、此にては其の內外に「ズッシリ」としてちがひなくあること、〔其德甚眞〕德は道德なり、眞も又「マコト」と訓ず、假の反對にて「ホンモノ」にて、にせものにあらずと云ふ意なり、〔而未始入於非人〕「郭注」に依れば、泰氏の如きは空々寂々何等の意念なければ、始めよりして人を是とし人を非として黑白を分ち爭へる區域に立ち入らずとなり、「義海」には以泰氏覺臥自得、知德知情愼眞、未始入于非人、則道合乎天、何有出入、道合乎天、而人歸之と云へり、此れ大意「郭注」に同じ、「偶說」に曰く、未始出於非人、不能超乎人之外、若人於非人、則又遺乎人之羣、未始入於非人、正是處乎人之羣、超乎人之外と、此れ非人を人外の義に解し、未始出於非人とは人外に超越すること能はざることにて、若し之に全く反して非人に入るときは、世間の仲間に爲ることとなれども、未始入於非人とあるときは、身は世間の人に仲間して、心は人の外に超越することを謂へるなり、此れ又一說として存すべし、

肩吾見狂接輿、狂接輿曰、日中始何以語女、肩吾曰、告我君人者、以己出經式義度、人孰敢不聽而化諸、接輿曰、是欺德也、其於治天下也、猶涉海鑿河、而使蚉負山也、夫聖人之治也、治外

【解義】〔齧缺王倪〕二人共に既に齊物論に見ゆ、〔四問而四不知〕「辨正」に辭而不答、以其體之虛用之大難於言也とあり、「成疏」、「宣注」、「集解」等の註者は多く齊物論に據りて、初めは子知物之所同是乎と問ひしに、吾惡乎知之と答へ、次ぎに子知子之所不知乎と問ひしに、亦吾惡乎知之と答へ、次ぎに然則物無知乎と問ひしに、吾惡乎知之と答へ、次ぎに子不知利害、則至人固不知利害乎と問ひしに、至人神矣云々而況利害之端乎と答へたるを指して云ふと解する者あれども、「論語」に季文子の多思して行ふことを、季文子三思而行と云へるが如く、四問四答とあるは、唯だ其の度數を多く問ひ多く答へたりと看て可なり、「通義」に曰く、四問四不知、洗問者之心也とあり、〔因躍而大喜〕「成疏」に曰く、齧缺得不知之妙旨、仍踊躍而喜歡、走以告蒲衣子、述王倪之深義と、「辨正」は曰く已悟也と、〔蒲衣子〕古の賢人、成疏に依れば、即ち被衣子のことにて、年八歲にして舜之を師とし、帝位を讓れども受けずとあり、崔曰く、被衣は即ち王倪の師なり、「淮南子」に齧缺問道於被衣とあり、〔而乃今知之乎〕而は爾と通ず、「ナンヂ」と訓ず、「辨正」に怪其悟之晚也とあり、〔有虞氏〕有は助語なり、虞は舜の國號なり、「通義」に依れば、有虞とは思度の有ると云ふ義にて、泰氏とは世に泰然として心の思ひなしの義なり、此れ皆莊子が假りに名を設け擬して、上古の風を表はせしものなりと、〔不及泰氏〕泰氏は上古の帝王なり、無名の君なりと「釋文」にあり、「成疏」には、太昊伏羲と云へり、〔其猶藏仁以要人〕其猶とは「遺憾ながら」と云ふが如し、即ち其の事は美ならざるにあらざれども、未だ十分善を盡くせりと云ひ難きの辭なり、藏は包藏なり、要は要結なり、心の內に仁德を包藏し、人を懷けて己の方に引き寄せて從はしむること、崔云く懷仁心以結人也と、〔而非始出於非人〕「郭注」に依れば、非人とは是人の反對にて、人を非とする義にして、此れ未だ始めよりして人に對して是非の心を抱くことを免れずとなり、「義海」には蓋以仁爲善、不能不虞而出之、未始出於非人、德合乎人と云へり、乃ち有虞氏は思度して仁を行ふものにて、非人的即ち自然的に至らずして、勉强的たるを免れずとなり、〔其臥徐々〕徐々は安穩なる貌、〔其覺于々〕于

于、一以己爲馬、一以己爲牛、其知情信、其德甚眞、而未始入於非人、

【大意】信に道を知れる者は、區々の智慮を用ひずして、自然に順ふ者なるを言ひ、以て天下を治むる者は、智を卻けて眞率を尙ぶべきを說けり、宣穎曰く、仁義治世、非不美、然稍出有心、不如相忘之大、觀於泰氏、則帝王之尊可知矣と、成玄英曰く、夫帝王之道、莫若忘知、故以此義而爲篇首、老子云不以智治國、國之德者也と、

【通釋】齧缺は王倪に向うて四たび問を發して道の事を尋ねしに、王倪は四たびながら知らずと答へたりき、若し通常の人なりとせば、定めて不氣嫌ならんも、流石は齧缺なりき、反りて小躍りして大に喜びて蒲衣子の所へ行きて、王倪の知らずと答へたるこそ誠に道の眞意を得たるものなれと告げたり蒲衣子は曰く汝はヤレ〳〵只今になりて始めて其の道理を承知致せしや、此れ實に分り切りたる話なるぞ、昔し有虞氏と云へる帝王ありしが、聖人なれども、其の德は更に古しへの泰氏と云へる帝には及ばざりき、彼れ有虞氏は成程聖賢に相違なきも、矢張り胸に仁德てふ一物を蓄へ藏めて、人民を是非に己に懷け從はしめんと思へり、而して亦其の目的の如く人を懷け得たり、而かも、此の事は未だ最初よりして、人爲に非る自然の社會を超出せずして、乃ち不自然に屬せり、泰氏の時代は其の臥するに徐々と安閑にして、其の眼の覺むるときは于于と愚鈍にして、凡べて眠覺共に無神經なるが如し、或は自分を馬と呼べば因て馬と心得、或は自分を牛と呼べば因て牛と心得、卽ち自から帝王の尊位を忘れて、人々の批評に任かせ、馬とも爲り牛とも爲りて、自から安んじ甘んじて居れり、其の知識は誠に毫も詐ること無く生の儘にして、德は甚だ眞實なり、而かも未だ最初よりして人爲に非る自然的社會に心掛けて入るにもあらず、卽ち不自然的とかの類は渾べて相忘れたり、是れ泰氏が有虞氏に勝れる所以なるが、左樣のことにて、古しへより眞の道を知る者は反りて渾べて知らざるものにて、何にも今更王倪のみを怪むに及ばざるなり、

一民之性傷、則天心傷其一矣、爲君者體天之心、惟在乎不拂民之性而已と云へり、是れ天人はもと其の源を一にして、人々各〻小天を具へて性とすれば、苟も一民の微も其の性を傷ふときは、畢竟天の部分的を傷害するに歸すれば、人君たるものは深く天心を體認して民性に悖戾すべからずとの意なるが、其の見地亦儒敎の主張と同じきが如くなれども、莊子も齊物論に於て百骸九竅六藏賅而存焉、吾誰與爲親、汝皆悅之乎、其有私焉、如是皆有爲臣妾乎、其臣妾不足以相治乎、其遞爲君臣乎、其有眞君存焉と云へるが如く、人身の奧には何等か自然に主宰的其物ありて、互に感通共鳴して、凡ての事物に對應することあるは、已に認め居れり、而して此の眞宰を擁護するには、果して如何なる方法を以てすべきかと云はんに、莊子は又語を繼いで曰く、如求得其情與不得、無益損乎其眞、一受其成形、不亡以待盡と云ひ與物相刃相靡、其行盡如馳、而莫之能止、不亦悲乎と云ひ、而して其の能く萬物に應じ萬物を處するに於ては、彼是莫得其偶、謂之道樞、樞始得其環中、以應無窮と云ひ、天地一指也、萬物一馬也と云ひ虛無因應の圓活靈妙にして、衆物一體感通の神理を論述せしを觀れば、其の應帝王の道を觀示するに於て、深く天心を體し民性に順うて悖らざるを以て寶典と爲すこと、固より其の所にして復た怪むに足らざるなり、「辨正」には曰く、問帝王之道、亦以無成心而因是應之也（成心因應共に齊物論に見ゆ）又曰く、以上六篇（逍遙遊以下）通爲道德家言、此篇爲事功家言、幷講事功者、亦欲引之歸此道也、士除講道德者、則講事功者而已、此外則凡民非可與言之人、故言止於此（應帝王）と、

齧缺問於王倪、四問而四不知、齧缺因躍而大喜、行以告蒲衣子、蒲衣子曰、而乃今知之乎、有虞氏不及泰氏、有虞氏其猶藏仁以要人、亦得人矣、而未始出於非人、泰氏其臥徐徐、其覺于

泉涸、魚相與處於陸、相呴以溼、相濡以沫、不如相忘於江湖、

夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死、

夫藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者負之而走、昧者不知也、藏小大有宜、猶有所遯、若夫藏天下於天下、而不得所遯、是恆物之大情也、

浸假而化予之左臂以爲雞、予因以求時夜、浸假而化予之右臂以爲彈、予因以求鴞炙、浸假而化予之尻以爲輪、以神爲馬、予因而乘之、豈更駕哉、

偉哉造化、又將奚以汝爲、將奚以汝適、以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎、

父母於子、東西南北、唯命之從、陰陽於人、不翅於父母、

今大冶鑄金、金踊躍曰、我且爲鏌鋣、大冶必以爲不祥之金、今一犯人之形而曰人耳人耳、夫造化者、必以爲不祥之人、

魚相造乎水、人相造乎道、相造乎水者、穿池而養給、相造乎道者、無事而生定、

天之小人、人之君子、人之君子、天之小人、

韲萬物而不爲義、澤及萬世而不爲仁、長於上古而不爲老、覆載天地刻雕而不爲巧、

應帝王第七

應帝王とは應に帝たり王たるべき道を述ぶる義にして、卽ち政を爲す者は無心無爲にして、自然の化に順ひ忤ふこと無くんば、是れ帝たる王たる道に叶へることを謂へり、蓋し天の億兆人民を斯世に生ずるや、之が統率者なければ亂るゝを以て、君王を置きて己に代りて治めしむるものなれば、尙書の舜典には之を論じて天工人其代之と云へり、乃ち謂はゆる天子たるものは、能く天意を體認して政を爲すべきは固より其の宜なれども、天意とは果して何を指して云へるかに至りては、亦唯だ「尙書」の秦誓に天視自我民視、天聽自我民聽と云へるが如く、一に之を民心に驗するより外なきなり、されば宣穎は本篇の旨趣を論じて、夫天之心何心也、民之性卽其心也、一氣所化、摶爲芸生、芸生之數莫可紀極、要未有不各具一天者也、故

生と變り無しとなり、

【解義】〔霖雨十日〕雨三日以往爲霖もと「左傳」に見ゆ、「成疏」亦云ふ、〔父邪母邪〕父と母と諧韻たり、今韻に依れば父は虞の韻、母は有の韻にして同韻ならざれども、古韻は有虞の二韻多く相通ず、〔天乎人乎〕天と人と諧韻、天は今韻の先にあり、人は眞にあれども亦相通ず、〔不任其聲〕連日飢ゑて憊れたれば、其の聲斷續して長く續かざるなり、〔趨擧其詩〕趨は卒かに疾きこと、乃ち急卒に其の詩を歌うて音曲に叶はざるを謂ふ、「宣註」に其聲甚悲放、若力不勝と、〔曰吾思夫使我至此極者〕是より以下は、必ずしも哀まず必ずしも樂まず、故に其の聲が歌ふが如く亦哀むが如くに聞ゆる所以にて、畢竟富貴貧賤を擧て命に安んじて、自然に順うのみなることを云ふ、其の不任聲而趨擧其詩に至りては、子桑の別に答釋を與へざるものは、乃ち飢餓困苦は是れ皆外界の境遇に關して、精神上に於て何等の榮辱損害を感せざることは、已に分明なるを以てなり、〔然而至此極者命也夫〕命の所爲なることを知れば、之に順ふのみとの意なり、宣穎曰く命者何、大宗師持撓萬化、無臭無聲、然而行者已行、生者已生、不可謂無所受、(受は命を受くるなり)則不可謂無所授(授は命を授くるなり)也、提出命字、乃大宗師化權所在、烏得不順乎と、按ずるに、人の天道に對して最も疑惑を生じ易きものは、死生貧富より大なるはなし、故に莊子の道を論ずるや、篇中死生の公案を提出して之が解決を試み、終に死生の一觀に歸着し、生必ずしも喜ばず、死必ずしも哀まざることを反覆述說し、最後に貧富も亦同じく命に出づれば、富必ずしも羨むに足らず、貧必ずしも耻づるに足らざることを言ひ、以て天地萬物の一體大道の普遍にして誣ふべからざることを示したるなり、

名言

古之眞人、其寢不夢、其覺無憂、其食不甘、其息深深、眞人之息以踵、衆人之息以喉、屈服者其嗌言若哇、其嗜欲深者、其天機淺、

凄然似秋、煖然似春、喜怒通四時、與物有宜、而莫知其極、

以德爲循者言其與有足者至於邱也、而人眞以爲勤行者也、

命也夫、

【大意】人の貧富幸不幸は皆もと命に出で、命は自然の理數にして、天地と雖も亦自ら之を主宰する能はざるを說き、以て道を知る者は命に安んじて、妄に福利を冀はざるを言ひ、以て全編の結となせり、「辨正」に曰く、「天地有形、則似有情、常言命出於天地、猶似有可希冀、今說到天地不能自主(本文天豈私貧我哉參照)則希冀路絕矣、此於命不可違方說得透と、

【通釋】子輿は子桑と友人たりしが、嘗て長雨が十日に及びし時、子輿は歎息して曰く、此の如く長雨が續くときは、彼の子桑は貧困なる故に、多分飢ゑ疲れて居るならんと、乃ち飯を裹みて之に食ましめんと思ひ、子桑の門前に至れば、子桑の聲は樂みて歌ふが如くにも聞え、亦哀みて哭するが如くにも聞ゆ、やがて琴を彈じて曰ひけるに、此の貧困なること、果して誰れの所爲なるぞ、吾が父か吾が母か、將た天の所爲なるか、人の所爲なるかと、其の哀さは如何にも緩りと其の長き聲を出だし兼ぬる模樣ありて、疾口に其の歌を一通り唱へて居れり、子輿は家の內に入りて曰ひけるに、扨ても氣の毒なるかな、子が詩吟をすること、何が故に左樣に哀れ苦しげなることにや、子桑答へて曰く、吾は全體誰が此の貧乏に至らしめたるかと考ふれども、終に思ひ當らざるなり、我が兩親は吾が子を慈愛こそすれ、豈に吾が貧困なるを望まんや、されば我が兩親が吾を貧困ならしめたるに勿論あらず、されば天地が然らしむるかと思へば、天は決して私かに偏りて物を覆ふことなく、地は決して私かに偏りて物を載することなく、卽ち天地共に固より公平正大なれば、他人を富まして我のみを貧ならしむる道理なし、然し我を貧困に爲す者を求め探して見れども、何等の手掛りもなし、されば我が此の極貧に至ると云ふものは、唯だ命卽ち自然の理數自然の成り行きと申すものと、吾は自から信ずるが故に、凡て命に任かしてあれば、別に今に及んで、必ずしも哀まず、亦必ずしも樂まず、畢竟左樣なることは初めより吾が念頭に存せざるなり、但其聲に堪へずして趨かに歌を擧ぐることは、久しく食はずして飢て居るが故なり、此れ肉體の關係に止まりて、我が心は別に平

束矣、故忘禮樂在忘仁義後と、〔回坐忘矣〕坐忘とは坐ながら忘るゝ義なり、卽ち身は其處に坐ながら、心は萬事を打ち忘れて茫然たる意味なり、齊物論に坐馳の語あり、坐忘の坐は此と同じ、幷せ考ふべし、〔墮肢體黜聰明〕墮は毀壞なり、肢は四支、卽ち手足を謂ふ、黜は退け除くこと、聰明は、聰は耳に屬し、明は目に屬して、其の官能を謂ふ、「成疏」に聰明之用、本乎心靈、既悟一身非有萬境皆空、故能毀廢四肢百體、屛黜聰明心智者也と、前文の齊物論篇に、身體と精神の關係を論じて、百骸九竅六藏、賅而存焉、吾誰與爲親、汝說之乎、其有私焉云々の一段、亦宜しく參照すべし、〔離形去知〕「成疏」に外則離析於形體、一一虛假、此解墮肢體也、內則除去心識、悗然無知、此解黜聰明也とあり、乃ち形體の全く虛假たるを看取せるが故に、己が肢體に重きを置かずして、心識の終に幻影たるを悟了せるが故に、己が聰明に依らずとなり、〔同於大通〕大通とは大道なり、「成疏」に道能通生萬物、故謂道爲大通也とあり、〔而果其賢乎〕而は爾と通ず、「ナンヂ」と訓ず、顏回を指す、陳詳道曰く、枝海以爲百川、則見川不見海、合百川以歸海、則見海不見川、道海也、仁義禮樂百川也、回得道而忘仁義禮樂、是覩海而忘百川、然猶未忘道也、至於離形忘物、去知忘心、冥然無所係心、則道果何在哉、與我兼忘而已矣、此回之所以賢也と、

子輿與子桑友、而霖雨十日、子輿曰、子桑殆病矣、裹飯而往食之、至子桑之門、則若歌若哭、鼓琴曰、父邪母邪、天乎人乎、有不任其聲而趨擧其詩焉、子輿入曰、子之歌詩、何故若是、曰、吾思夫使我至此極者而弗得也、父母豈欲吾貧哉、天無私覆、地無私載、天地豈私貧我哉、求其爲之者而不得也、然而至此極者

私は坐忘を致せりと、孔子蹵然と心配らしくして尋ねて曰く、坐忘と申すことは、予も始めて聞くことなるが、全體如何なる事を申すものなるか、顏回對へて曰く、坐忘とは坐ながらにして忘ると申すことにて、先づ自分が四肢百體の働きを廢止し、凡ての身體機關を自然に任かし、決して人的作用を爲さず、耳の聽く働き目の明かに働くことを排斥して、耳に何事をも聞かず、目に何事をも見ず、卽ち心は自分の形體を離脫し、智慧を取り除けて、大通とて大道に一致して、全く同體となることを名づけて坐忘と申すなりと、孔子之を聞き了り、嘆息して曰く、成程其れは見上げたることとなり、既に同じとあるときは、何物何事をも皆同じく視て、好惡の私心なきなり、既に大通とあれば、是れ變化極りなきことなるが、則ち或る一物に執着して常態に拘はることなきなり、此の如くなれば、玄妙不測なる大道の眞意を得たる者なるが、嗚呼爾は果して其れ賢人なるか、吾は仲々に爾の師匠どころでは無し、今よりは吾より爾の後へに從ふて學びて、吾は爾の弟子とならんと、深く感服の意を表せられたり、

【解義】〔回益矣〕「郭註」に以レ損レ之爲レ益也とあり、乃ち益は損の反對なり、而して下文の對を觀れば、仁義を忘れ禮樂を忘れ、遂に肢體聽明を黜けて坐忘に至る、乃ち愈〻進みて愈〻損するものなるを、今反りて之を愈〻損する每に回益矣と云へるは、老莊の道は虛無を以て主とするが故に、次第に事件を損すれば、次第に虛無に近づきて道に入る譯なるを以て、益と云へるなり、〔回忘仁義矣云々〕碧虛曰く、愛レ物之謂レ仁、利レ物之謂レ義、利屬二乎外一、忘レ之則可、於レ道則未也と、乃ち愛利の觀念は、皆共に外物に對して起るものにて、今之を忘るゝときは、卽ち外物を忘れたる效證なれば、虛無の道より觀て可なれども、畢竟外物を忘るゝに止まりて、猶未だ全く善しと云ひ難しとなり、〔回忘禮樂矣〕碧虛曰く、禮者體之威儀、樂者心之冲和、係二乎內一、忘レ之則可、於レ道則未也と、乃ち禮樂は皆共に身體に關するものにして、今之を忘るゝときは、卽ち自己を忘れたる效證なれば、道より觀て更に可なれども、畢竟身の檢束、心の修養を忘れたるに止まりて、猶未だ全く善しとは云ひ難しとなり、孫月峰は曰く、忘レ仁忘レ義、止是去二是非心一、忘二禮樂一則全然不二拘

衆形」「成疏」に、天覆地載、以道爲源、衆形雕刻、咸資造化、同禀自然、故巧名斯滅とあり、〔此所遊已〕此れ上文の汝將何以遊夫遙蕩恣睢轉徙之塗」とあるに顧應し、以上の如く心を自然に遊ばすときは、天地萬物悉く我と一たるを見ることとなるが、此の境域こそ汝等の遊ぶ所なれと云はれたるなり、

顏回曰、回益矣、仲尼曰、何謂也、曰回忘仁義矣、曰可矣、猶未也、它日復見、曰回益矣、何謂也、曰、回忘禮樂矣、曰可矣、猶未也、它日復見、曰、回益矣、曰何謂也、曰回坐忘矣、仲尼蹵然曰、何謂坐忘、顏回曰、墮枝體、黜聰明、離形去知、同於大通、此謂坐忘、仲尼曰、同則無好也、化則無常也、而果其賢乎、丘也請從而後也、

【大意】前章の仁義擯斥に加へ禮樂の道の中に在らざることを言ひ、坐の義を說き、形體聰明一切の人的を離脫して、道の本源に通ずべきことを指示せり、大概前章と同じ、但愈進みて愈微に入れり、

【通釋】顏回或る時孔子に白して曰く、誠に嬉しきことには、私に於ては益を得たりと存ぜりと、孔子尋ねて曰はるゝに、其れは何の點に付いて斯く申せるか、顏回答へて曰く、それは此の回は頓と仁義の事を打ち忘れて、毫も念頭に浮び出だすこと無し、此れ人爲的を離れて自然的に入りし證據と存ずるなり、孔子曰く、其れは可なり、然し猶未だ其れ位にては濟まされずと、佗日顏回は復た孔子に見えて曰く、私は益を得たりと存ぜりと、孔子曰く、其れは何の點に付いて申せるか、顏回曰く、私は最早頓と實際的なる禮樂の事を打ち忘れたり、孔子曰く、其れは可なり、然し猶未だ其位にては濟まされずと、他日顏回は復た見えて曰く、私は益を得たりと存ずるなりと、孔子曰く、其れは何の點に付いて申さるゝか、顏回曰く、

しより決して衰へず毫も變らずして、自ら以て老人長者として誇らず、其の伎術の巧妙を語らば、萬物を覆ひ載せる天地を又其の上より覆ひ載せて、天文地文種々なる象形を宛かも彫刻師が物を彫刻するが如くに、種々なる形ちに造り成せるは、世間何者の巧伎か之に如くものある、而かも吾師は此を以て自分の巧伎と爲さず、凡て此の如く其の實際の量は最大絕對に有しながら、決して伐りて己が功名と爲さず、是れ吾が大宗師卽ち道の眞相なり、此れ吾が曩きに汝に遊ばんと告げたる所の遙蕩恣睢轉徙の塗と申すもの是れなり、未だ知らず、汝亦能く此の道に進みて行かんと欲するか、

【解義】〔噫未可知也〕噫は歎聲、至道は深玄にして臆測言語を以て傳ふべからず、故に嘆じて未可知と云へるなりと、「郭註」に見ゆ、然れども此れ上の意而子の懇請を容れて、先づ其の願意に對し、一應の許可を與へて、後に答ふる辭と見る方優ならん〔吾師乎吾師乎〕吾は親みて云へる辭、吾師とは道を指して謂ふ、吾道と云はずして吾師と人格化して云へるは、本篇を道の奧義を說きながら、大宗師と號すると其の意又同じ、〔䪡萬物而不爲義〕䪡は音「セイ」、碎なり、「成疏」に至如素秋霜降、碎落萬物、豈有情斷割而爲義哉とあり、乃ち秋氣來り霜露降り、萬物を枯らし散らして、義の事實は既に行はるれども、自然は此を以て己が義を爲せりとは思はざるなり、按ずるに、此れ及び下句、共に仁義を排斥して云へるなり、上文の堯謂我汝必服仁義の語と對して看るべし、義は宜なり、分なり、と「字書」にありて、「孟子」にも義人之正路也（離婁上）と云ひ又「尚書」に義刑、義殺（康誥）等の語ありて、人を刑殺するも義の力に賴ることを云へるが、分別の義、肅殺の義は兼愛の仁、好生の仁と共に人世の須臾も離るべからずと爲せる儒道の主義に對して一擊を試みたるなり〔澤及萬世而不爲仁〕澤は恩澤なり、「成疏」に靑春和氣、生育萬物、豈有情恩愛而爲仁哉と、乃ち春の陽氣が來りて萬物を生育し、仁の事實は既に行はるれども、天は之が爲めに、己が恩愛を施して仁澤を行へりとは思はずとなり、〔長於上古而不爲老〕道の天地の前に在るを言ふ、而して千古萬古常に此の如くなれば、初めより老少と名を付すべからざることを謂ふ、〔刻雕

不レ為レ義、澤及二萬世一而不レ為レ仁、長二於上古一而不レ為レ老、覆二載天地一、刻二彫衆形一而不レ為レ巧、此所レ遊已、

【大意】　大道は仁義に在らざることを言ふ、乃ち人爲的所作を黜けて本眞に反るときは、大道に隨うて自得すべきことを說く、是れ亦大宗師に從ひ就くの途を指示すると共に、道の本體は自然に外ならざることを敎へたるなり、宣穎曰く、從二虛空一畫出大宗師、不レ為レ義不レ為レ仁、將二堯的仁義兩字一打落、其是非兩字、更不二必言一、不レ為レ老不レ為レ巧、又陪二說兩句一、と、莊子書中、此處始めて仁義を擯斥したる語を揭げたり、然れども莊周の意は仁義の本體を排斥するにあらず、但仁義の名目を藉りて、其の野心を逞しくする者を惡むに由り、遂に仁義を幷せて攻擊排斥せしなり、後人の謂はゆる射レ敵先射レ馬、擒レ賊先擒レ王の手段と知るべし、卽ち本章に云はゆる韲二萬物一と云ひ、澤及二萬世一と云へるが如きは、眞の仁義亦此に外ならざることは別に深く研究せずして明かなれば、宣穎が評して、莊子著書、却是要二學道人、親見二道體一、稍二涉支離一、便與二道體一不レ似、故特盡與指レ之、所レ謂要レ盡二眞容一、添二不レ得一毫彩色一也と云へるは、亦宜しく玩味すべし、

【通釋】　許由之を聞きて曰く、サテモ〳〵成程左樣なる天意なるか否かは、予には未だ何共知るべからざるが、折角夫程までに言はるゝに因て、我は汝が爲めに大道の大略を申して聞かさん、さて吾が先生の事なるよ、吾が先生の事なるよ、吾が先生と仰ぎ奉る方は、如何なる方かと申さんに、卽ち大道の異名にして、謂ゆる大宗師の事なり、此の先生の偉き德と申せば、其の裁斷力の强きことは、大義に據りて天地間の萬物を紛碎して、何事も殘り置くことなく思ひ切りて殺戮しながら、先生は自ら以て義と爲さず、其の恩愛心の厚きことは、大仁にして誠に和氣藹々として、恩澤は萬世に亘りて盡きざるものながら、自から以て仁と爲さず、其の生命の長きを語らば、何物より眞先きに生れて、卽ち天地開闢の以前より有りて、現今に至り、將來に及び窮り無きことにて、卽ち太古の又昔

【大意】眞の道を知る者は仁義を言はずして、而かも大仁大義の實を有することを言ひ、以て世の幻氣的小仁小義の取るに足らざることを論せり、

【通釋】意而子亦退かずして曰く、左樣に仰せを蒙れども、愚不肖者を敎ふるが是れ賢智者の天職に候はずや、彼の有名なる美人の無莊が其の美を失ひ、力士なる據梁が其の力を失ひ、聖智なる黄帝が其の智を失ひて、何れも其れ〳〵の自分が固有せる才智を恃みとせずして融然相化するは、其の道他にあらず、皆鑪錘の間とて、宛かも鍛冶師が器械を用ひて、金鐵を鎔鑄して物を造るが如く、偉大なる道德を以て、彼等を化するに因りて、各々己が舊習を去りて、善道に入れるにあらずや、只今吾の先生に於けるも亦同じき道理にて、卽ち現に自分が此の如く先生を見ることを得たるは、此れ豈に彼の造物者が我が黥を息げ平らかにし、劓を補ひ繕ひ、卽ち堯に傷害せられて不具となりし元の完全なる身體に引き戾し、更に我をして完成したる身體を乘せて、先生に隨ひ奉りて、尊き敎を受けしめんとの天意なるやも知れず、

【解義】〔無莊之失其美〕無莊は古しへの美人なり、失其美とは道を聞きしが故に、復た容貌を粧飾せずして、自ら其の美たることを忘れしを謂ふ、下の失其力失其智皆同例を以て推解すべし、〔據梁之失其力〕據梁は古しへの多力なる人なり、〔黄帝之失其智〕無莊以下皆唯だ代表的に各々美人、力士、聖智の名高き人を擧げたるのみ、〔皆在鑪錘之間〕鑪は竈なり、「カマド」と訓ず、火を焚く器なり、錘は物を鍛へ成す器なり、林西仲曰く、至人有敎、能使人失其本質、況在後受傷者乎と、〔息我黥而補吾劓〕息は蕃殖の意、〔使我乘成〕乘は載と同義、成は備と同義と倣して看るべし、郭慶藩曰く、黥劓則形體不備、息之補之、復完成矣、言造物者使我遇先生、安知不使我載一成體、以相隨耶と、此の說に依れば、今や自分が先生に相見ゆるを得たるは、本と天が自分の毀損したる眞性を憐み、元の如く完全に爲し給ひて、先生に引合はせ、其の敎を受けしむるが爲めならんとなり、

許由曰、噫未可知也、我爲汝言其大略、吾師乎、吾師乎、𩐋萬物

の中に進むことは叶はざるとも、責めて大道の垣根にても厭はざれば、游びて道の一端をも尊敎を乞はんと願ひまつるなりと、許由猶之を拒絶して曰く、左様なる筋にはあらず、一體盲者とて明目暗と申すものは、眼睛既に役に立たざれば、人の眉目顔色の好きを觀る資格は無し、瞽者とてめしひものは、是れ亦前同者にて、靑黃黼黻の美しき色模様を觀る資格なし、其れと全く同じことにて、今汝は既に彼の堯に山々に傷け殘はれて居るものなれば、到底道的不具者にて、大道の眞意を聞き取る資格なしと、

【解義】〔意而子〕古の賢人なり、〔堯何以資汝〕資は資給なり、資益なり、〔躬服仁義〕服は服行なり、〔明言是非〕是則明賞ニ其善ニ非則明懲ニ其惡ニと、「成疏」に云へり、〔而奚來爲軹〕而は汝なり、奚は何なり、軹は音「シ」、語助の辭、「集解」に只と同じと、〔黥汝以仁義〕黥は鑿額なり、額に入れ墨を爲すこと、古しへ五刑の一なれば、共に借りて眞性を毀害せるに喩ふ、李云く、毀ニ道德ニ以爲ニ仁義ニ不レ似ニ黥乎と、〔劓汝以是非〕劓は割鼻なり、鼻を斬ること、此れ亦五刑の一にして、喩意は上句と同じ、李云く、破ニ玄同ニ以爲ニ是非ニ不レ似ニ劓乎と、〔遙蕩恣睢轉徙之塗〕遙蕩は逍遙放蕩なる意、恣睢は縦任なり、放任と同じ、轉徙は變化なり、塗は道なり、乃ち廣大無邊無礙の自由なる境なり、至道の地を謂ふ、「宣注」に曰く、遊ニ此境ニ全在レ順レ之、若服ニ仁義ニ而明ニ是非ニ則膠執不レ通矣と〔吾願遊於其藩〕藩は藩籬なり、「マガキ」と訓ず、此れ上の何遊ニ遙蕩恣睢轉徙之塗ニ乎とあるを承けて、其の塗に游ばずとも其の藩籬になりと遊びたしと、己が不肖を謙遜して云へるなり、〔夫盲者云々〕眼睛はあれども、物を見ざるを盲と曰ひ、眼に眹縫なくして、鼓皮の如きを瞽と曰ふと、「成疏」に見えたり、〔無以與乎靑黃黼黻之觀〕解已に逍遙遊篇に見ゆ、

意而子曰、夫無莊之失ニ其美ニ、據梁之失ニ其力ニ、黃帝之亡ニ其知ニ、皆在ニ鑪錘之間ニ耳、庸詎知夫造物者之不下息ニ我黥ニ而補中我劓上、使ニ我乘レ成以隨中先生上邪、

意而子見許由、許由曰、堯何以資汝、意而子曰、堯謂我、汝必躬服仁義而明言是非、許由曰、而奚來爲軹、夫堯既已黥汝以仁義、而劓汝以是非矣、汝將何以遊乎遙蕩恣睢轉徙之塗乎、意而子曰、雖然吾願遊於其藩、許由曰、不然、夫盲者無以與乎眉目顔色之好、瞽者無以與乎青黃黼黻之觀、

【大意】仁義は道の支流なれば、苟も大道に順ひ自然に逍遙するときは、必ずしも區々として仁義を唱へ、仁義を行ふに及ばざることを言ふ、「辨正」に曰く、此段見得安排去化と、

【通釋】意而子と申せる隱君子がありて、許由を訪問せしに、許由は之に語りて曰く、さて汝は當時聖人の評ある帝堯に敎を受けしと聞きしが、彼は何か貴所の身に取りて資益することを敎へたるか、意而子答へて曰く、帝堯は我に語るらく、汝は必ず仁義の道を行ひ、明々白々に物事の是非を言ひ切りて、卽ち道德を實踐し、亦道理を廣く世に示せよと云はれたりと、許由は之を聞き、驚愕して曰く、それならば、汝は奚んぞ態々此處に來れるか、此處は汝の來るべき所にあらず、偖ても情け無きことをしたり、彼れ帝堯は最早折角完全なる汝の身體に向けて、無慙にも汝の額に入れ墨するに、仁義てふ厄介なる雕り物を以てし、汝の鼻を切るに、是非てふ毒刄を以てしたり、憐むべし、汝も此の如く山々に傷けられては、最早取り返し樣もなし、何ぞ彼の遙蕩恣睢轉徙之塗とて、廣々と自由にして變化極り無き面白き境遇に自由に往來することを得んや、最早大いなる疵物となりては、圓通妙融の利かざるものとなれり、斯の如きものは此處に至るとも致方なければ、宜しく早く立ち去るべしと、意而子曰く、其の尊敎は一應成程なれども、拙者も折角志して參りたれば、縱ひ今日となりて大道

厲乎天」厲は戾と同じ、至なり、「成疏」に、且爲魚爲鳥、任性逍遙、處死處生、居然自得、而魚鳥既無優劣、死生亦何勝負 而係之哉と云へり、〔今之言者其覺者乎其夢者乎〕言者とは魚と爲り鳥と爲りしことを言へる者を指す、「呂註」は、汝方夢爲鳥爲魚、亦不知其夢、則今之所言、爲覺爲夢、殊未可知、以明孟孫則忘吾而特覺者也と云へり、此れ夢に鳥となれば高く飛び、魚となれば深く潛みて、眞の魚鳥と同じきより推せば、今吾が汝に言へることも、果して夢らしき眞なるか、眞らしき夢なるかを知らずとなり、亦一說として存すべし、〔造適不及笑〕造は至なり、適は適意なり、不及とは不暇なり、間に合はぬこと、「宣註」に、人但知笑爲適意、不知當其忽造適意之境、心先喩之、不及笑也、及忽發爲笑、又是天機自動、亦不及推排而爲之、是適與笑不自主也と、藤澤東畡は曰く、言我至適地、未及開口笑、而其適意事、既推移矣、假令奏笑、亦其笑不能及推移之速と、此れ人は面白き場合に至ると、笑はんとする間に既に其の事は推し移り、縱ひ笑ふとも、最早後れて推し移りし跡となるなり、下文の安排の語に照らすときは排は「郭注」に從うて推移の義と解するに如かず、今按ずるに、及は「論語」に駟不及舌の及にて、追及のことなり、乃ち本句兩語の意は、務めて適意の境に至るときは、自然に可笑しくして噴き出だして笑ふの早さには追及すべからず、然れども笑も故らに作意して顏色に彰はすときは、其の間に適意の事は既に推移して亦追及すべからずとの義なり、要するに、兩者共に人爲的を去りて、自然に任かしてこそ興味あれとのことなり、〔獻笑不及排〕獻は章なり、章は彰と同じ、意適することとあれば、笑を顏に彰はす、故に献笑と曰ふと、釋文に見えたり、排は推移なり、又列なり、餘は上句の解に見ゆ、〔安排而去化〕去は忘却の意なり、自然の推移に安んじ任かして、死生の變化を忘却することを謂ふ、〔入於寥天一〕寥天は寥廓の天なり、一は同なり、「郭注」に安於推移、而與化俱去、故乃入於寂寥而爲一也とあり、「呂注」及び林西仲は、寥天一を連屬して各三件にと看て、寥而不紛、天而不人一而不二之域と解し、又一說に進んで寥天の至一なる地に入ると解せるもあり、

に道の眞相を知れるを謂ふ、〔人哭亦哭〕强ひて己が見を主張せず、人に隨うて同じく哀を發すること、乃ち前の駭形を爲して、哭泣等を行へることを謂ふ、〔是自其所以乃〕此の句は、莊子が獨創の奇語なりとて、古來解說紛々たれども、要するに、是乃其所以如此との意を、特に乃の字を最下に移して、如此の二字を省略したるものと看れば可なり、而して意味は是とは上文の且彼有駭形云々より以下を指定して、右の如くなればこそ彼が哭泣無涕、中心不慼、居喪不哀の事あるなれとなり、徐廷槐曰く、乃字住句奇創、韓孟鬪雞聯句、昌黎云、爭觀雲塡道、助叫波翻海、東野剚瓜深難解、嗔晴時未怠、一噴一醒然、再接再礪乃、注引書之礪乃鋒及、莊子是其所以乃爲證と、一說に乃の字の下、恐らくは爾の字を脫せしならんと云ひ、藤澤東畡は又下の首に在る且也の二字を取り、且の字と乃の字と合して、宜の字に作り、「郭注」に、夫常覺者、無往而有逆也、故人哭亦哭、正是自其所宜也とあるに照らして、莊子の古本には、是自其所宜也に作りしならんと云へり、「且也相與吾之耳」吾之とは吾自から吾が身を吾が身として愛すること、乃ち尙ほ的切に云へば元來吾人自身も全く暫く斯の世に幻出したるものを見て、相互に是れ吾が本體なりと思ひ極めたる位にて、其の他に深き信據すべき意義ありて、吾が身が卽ち吾本體と確定したるにあらずとなり、〔庸詎知吾所謂吾之乎〕庸詎は豈の重語にて、「アニ」又は「ナンゾ」と訓ず、已に前篇に見ゆ、吾が身を吾が本體と思ひ定むるとも、之が果して眞の吾が本體たるか、吾が本體に非ざるかを知らずとなり、又一說に上句の相與吾之の吾は、世人が一般に自から吾が身を吾と爲すを謂ひ、本句の吾所謂吾之の兩の吾の字は、倶に至人より觀たる吾にして、世人は相互に近く吾が身を吾と思へるに過ぎざれとも、至人の吾と觀ずるものは、決して右の如く局限せるものにあらず、古今に亘り上下を通じ、到る處に常存する眞理を謂ふなりとあり、「郭注」に、死生變化、吾皆吾之、玄同內外、與化日新、豈知吾之所在と、卽ち死も吾が本體とし、生も吾が本體とし、變化に隨ひ吾が本體とする者、各同じからざるに似たれども、本と玄同にして、唯だ化と日新なるに過ぎず、故に到る處、皆同一の吾なりと知るべしとなり、〔而

ときは全く魚の氣持ちとなり、矢張り深く泳ぎて淵底に沒するならん、然し此の如く云ひながら、未だ識らず現夢に魚鳥と爲りしことを談ずるものか、是れ果して覺めて居る者なるか、將た矢張り夢みて居る者なるか、卽ち詮じ詰むれば、吾人の正體は全く魚鳥にして夢に人となり居れるか、若くは矢張り人にして夢に魚鳥となれるか、皆未だ知るべからず、要するに人は自から活動しながら、自分に何の理由なるかを知らざるも、凡そ物事は適意に至る者は笑ひに及ばず、笑ひを献ずる者は物事の推移に及ばず、卽ち噴き出して笑ふときは面白味も後れて生じ、故意に笑ふときは面白さの推り移りし跡となるものなり、是れ乃ち何共言ひ難き天機の妙用にして、自然の働の不思議なり、然しながら、此れは何等かの物ありて、冥々知らざる間に之を排列して然らしむる者なり、此の自然の推排に安んずると共に、化し去る悲しみを打ち忘れ、萬事一切を自然の運に任かすときは、乃ち寥天一と申して、空寂虛無なる天の至一の境に入り、聲も無く臭も無き眞に神聖無二の域に達するなり、

【解義】〔彼有駭形而無損心〕彼は孟孫才を指す、駭形は形を驚かし動かすことにて、平生の態度と異れるを謂ふ、損心は心を損耗することにて、平生の精神と異ならざるを謂ふ、孟孫才は萬物變化の理より觀て、死生の一たることを覺れるが故に、世人と同樣に其の母の死に對し、外形は平生の態度と異なれども、精神に至りては平生と同じく、毫も損累を感ぜざれば、哭泣に涙なく、哀感せずとなり、〔有旦宅而無情死〕旦は「アシタ」と訓ず、朝旦なり、變化の新なるに喩ふ、宅は舍なり、情は實なり、「マコト」と訓ず、乃ち形體の變改して生より死に移るは、宛かも新宅に移轉する如く、而かも精神は之が爲めに滅亡せざれば、眞實の死なしと云へるなり、「釋文」に依れば、旦宅を「李本」に怛侘に作る、驚惋の貌とあり、「崔本」には靼宅に作る、「岡松本」には旦宅に作る、且荷且也、宅居也、且宅謂受生暫居世也、無情死德充符所謂心未嘗死也とあり、〔孟孫氏特覺〕特は獨なり、覺は夢の覺むることにて、迷の解けたるを謂ふ、此れ上文の吾特與汝其夢未始覺邪とある覺を承けて、孟孫の既

且汝夢爲鳥而厲乎天、夢爲魚而沒於淵、不識今之言者其覺者乎、其夢者乎、造適不及笑、獻笑不及排、安排而去化、乃入於寥天一、

【大意】眞に死生一觀の人は、生を樂み死を哀まざると共に、又必ずしも故らに普通の人情に悖りたる死を喜び、生を惡むことを爲さゞるを以て、形迹上は喪禮は喪禮として行へり、然れども既に死生を一觀すれば、哭泣に涙なく、喪に哀まざることを說き、以て和光同塵の妙用、卽ち齊物論の因是の眞味を發揮せり、

【通釋】又此の如く死生の故を悟れるものが、何が故に矢張り母の死には眼に涙なく、心に哀感せざるにせよ、矢張り哭泣して一通りの喪禮を行ひしかと云へば、彼の孟孫才は其の母の死去に臨み、外形に於ては駭き變りたる模樣あれども、內實に於ては之が爲めに己が心を損し傷ふことなし、其の仔細は旦宅とて、夜の明けたる如き新しく易はれる居宅はあれども、實に死亡せる者はあらず、卽ち精神を宿せる形體は日に變り行くことあるも、主人公たる精神は實に死すること無し、是れぞ本然の道理なる、今や我と汝とは共に此の世の夢を夢みて芒然たる中に、彼の孟孫氏は格別に夢が覺めて、能く此の呼吸を呑み込み居れり、されば生死の幸不幸がありては、其の實均しく虛無なるが故に、殊更に世人に忤ふにも及ばざれば、他人が喪に逢うて哭泣すれば、亦同じく哭泣を爲せり、然しながら別に之が爲めに非常に悲しみもせざれば、是れ彼が此の如く爲して世間並に喪を行ひながら、涙なく感ぜず哀まざる所以なり、尙又、此れに就いて申し度きは、彼の世間の何人も相與に自我てふものを認識して、之を自我と定むるより外なきなり、然しながら更に立ち入りて云へば、惡くにか自我を認識して、自我と定むるものが果して眞の自我なるか否かを知らんや、先づ一例を云へば、汝が夢に鳥となるときは、全く鳥の氣持ちになりて、矢張り高く飛んで天上に至るならん、亦汝が夢に魚となる

の說を用ふ、〔不知所以生云々〕「宣註」に、生死付之自然、此其進於知也とあり、〔不知就先云々〕前文の、又惡知死生先後之所在と同義なり、先とは生を指し、後とは死を指す、就は去の反對にして、執着して離れざること、不知就先は不知所以生の故なり、不知就後は不知所以死の故なり、上句の不知と本句の不知と、不知の二字を連下して、暗に世の智者の物知り顔を衒ひ、頻に死生觀を說くに對照して、智巧を用ひず、生死を擧げて自然に付することが、是れ反りて尋常智者の及はざる者なるを說き、以て上文の進於知矣の解說を爲したるなり、一說に就は孰の字の訛なりと云へり、〔若化爲物〕若は順なり、自然の變化するに順ひて、化して異物と爲ること、〔以待其所不知之化已乎〕待は豫期すること、已は止なり、「宣注」に曰く、順其所以化、以待將來所不可知之化、如此而已と、王先謙は曰く、死爲鬼物化也、鼠肝蟲臂（前に見ゆ）所不知之化也と、「辨正」に依れば、不知所以生、不知所以死は生死を分別せざるなり、不知孰先、不知孰後は勝負を知らざるなり、其所不知之化は造化の化なり、已乎とは此を外にしては他なきことにて、卽ち生死の分別勝負を見ず、故に生を求め死を患へずして、其の自然に至るを待つのみと解せり、岡松甕谷曰く、物人也、上化謂造化、下化謂死、若順也、順造化生生之運、而爲人、以待終其世、故曰若化爲物、以待其所不知之化、雖孟孫氏、不能豫知其死、故曰所不知之化と、此の二說、亦各一說とすべし、〔且方將化〕「宣註」に依れば、此より以下、惡知已化哉に至る四語は、正に上文にある、所不知之化の義を申さねて明かせしものにて、乃ち化と不化との、總て我が關係する所に非るを說ける也、甕谷曰く、人之死生繫於天、或有病已重、以爲將死、而更能保幾歲之壽者、故曰方將化、惡知不化哉、或有以爲能保生、而病入于膏肓、其實已死者、故曰方將不化、惡知已化哉と、

且彼有駭形、而無損心、有旦宅而無情死、孟孫氏特覺、人哭亦哭、是自其所以乃、且也相與吾之耳矣、庸詎知吾所謂吾之乎、

外なし、卽ち何物に化するとも、全く自然に任かすのみ、其の又未だ知るべからざる化とは如何と申さんに、將に此より或る物に化せんとする場合に方りて、何くに於て其の實は化せずして、依然故の自身たらざるを知らんや、卽ち自身には化しつゝある樣に覺ゆるも、未だ化せざることもあり、亦一面より云へば化せざらんとする場合に方りても、何くにか其の實は已に化して居ることを知らんや、卽ち自身には化せざる樣に覺ゆるも、已に現に化して居ることもあり、凡て斯の如くに化と云ふ者は、己が當事者にてありながら、自身に知る能はざる者なり、さればこそ自然の變化に任かすより外なきなり、果して然りとすれば、彼の孟孫才が母の喪に泣かず哀しまざるは、全く其の死の悲觀するに足らざるを知ればなり、今や吾は特り汝と區々として方內に在りて、名敎禮敎の中に束縛されて居ること、是れ全く迷ひてふ大いなる夢を見ながら、未だ覺醒せざる者なるか、卽ち彼孟孫は已に醒めたる人にして、彼を咎むる吾人が反りて夢中の人ならん、

【解義】〔進於知矣〕進は過なり、知は字の如くに「シル」と訓じて、孟孫が居喪の道を盡くせしことは、彼の喪禮を知れる者より過ぎたりと解するものと、知は智と同じく、彼の行爲は自然に眞理に叶うて、世の智術を用ふる者より進めりと解する說とあり、孰れも通ず、〔惟簡之而不得〕「郭注」に依れば、簡は簡擇なり、「エラブ」と訓ず、彼の孟孫は死生を簡擇すれども、死生はもと循環して來去するものなれば、其の異なる所を發見せずとなり、「宣注」には、簡は事を略するなり、喪禮は守るに及ばざるを知れども、世俗の相因るものなれば、獨り簡にするを得ず、故に未だ哭泣居喪の事を免れずと解せり、〔夫已有所簡矣〕「郭注」に依れば、此の句を下の孟孫氏云々に連ねて、一旦は簡擇したれども、終に生死の異れる道理を發見せざれば、能く自然の變化に任かすのみ、而して生を樂しみ死を哀しむを爲さずとなり、「宣注」は、哭泣居喪の事は爲せども、已に涕なく戚まず哀まず、是れ已に事を簡略にする所ありと解せり、「集解」に曰く、蘇輿曰く、二語（上句と本句）泛言、不屬孟孫氏說、姚云常人束於生死之情、以爲哀痛、簡之而不得、不知於性命之眞、已有所簡矣、似較宣說爲優と、今其

賢人と「成疏」に云へり、〔哭泣無涙〕哭泣の下に無涙の字あるときは、哭泣を爲さゞるにあらず、然れども涙なきを云ふなり、「成疏」に體無爲之道、知生死之不二、故能跡同方內、心居物表、居母氏之喪、禮數不闕、威儀詳雅、甚有孝容、而涙不滂沱（流れる貌）と云へるは、之を獲たり、

仲尼曰、夫孟孫氏盡之矣、進於知矣、惟簡之而不得、夫已有所簡矣、孟孫氏不知所以生、不知所以死、不知就先、不知就後、若化爲物、以待其所不知之化已乎、且方將化、惡知不化哉、方將不化、惡知已化哉、吾特與汝、其夢未始覺者邪、

【大意】孟孫才の哭泣無涙、心中不感、居喪不哀は反りて其の深く死生の故に達せるより來れるを説き、以て先づ顏回の怪疑を解けり、宣穎曰く、寫孟孫才看得生死關破、吾（孟孫）與母、總在太宗師變化中、又安所容其涕感哀痛也耶と、

【通釋】孔子答へて曰く、それは汝の怪むことが過てり、彼の孟孫才は喪に居る禮を遺憾なく盡して居れり、其の點は寧ろ世の禮を知る者よりは彼の方が進みて居るなり、一體世の人々は、常に生死の觀念に疑惑を抱きて迷へるが故に、喪禮などは虛禮なりとて簡略にせんと思ひながら、亦一面には矢張り死を悲觀して、其の禮を簡略にするを得ざれども、信に人生の根本より觀るときは、生死は勿論同一にして、唯循環的に廻り來るに過ぎざれば、已に此の點に於て、自然に簡略にすべき性質を有せるものなり、然るに、今彼の孟孫才は自分が斯の世に生じ來りしと死するとが如何なる處より然るかを知らず、卽ち生死は全く自然の成り行きに任かして、生に就いて離れざるべきか、死に就いて離れざるべきかを知らず、凡て自然に任かすのみ、自然の變化に順うて、現在の己が身に未來に於て知るべからざる物に化するを待つより

なれば、彼等の方外人と吾等の方内人とは、著しく異れるものなり、

【解義】〔敢問畸人〕畸とは不耦の名なり、卽ち彼の三子は、子貢より視れば修行無有にして、徒に形體を遺忘し、友の死を哀まずして歌ふが如きことを爲して、世の人道と耦合せざれば、因て之を畸人として、其の仕方如何を問ひたるなり、〔畸於人而侔於天〕侔は等なり、「ヒトシ」と訓ず、意義既に通釋に述べたれば略す、〔天之小人人之君子人之君子天之小人也〕全く天人の相反することを言ふ、亦既に通釋に述べたれば略す、

顔回問仲尼曰、孟孫才其母死、哭泣無涕、中心不戚、居喪不哀、無是三者、以善喪蓋魯國、固有無其實而得其名者乎、回一怪之、

【大意】此れ又死生を一にして、善く忘るゝ者は其の形迹は世人と異らざれども、禮俗に囚はれずして世に超越せることを言ふ、大概前章と相同じ、而して尙、一層を進めて說けり、而して本節は先づ顔回の孟孫を疑へる言を借りて、其の端を發す、

【通釋】孔門の顔回、或る時孔子に問うて曰く、世には奇怪なる事もありと存ずるなり、當魯國の孟孫才は其の母の病死致せしに、埋葬喪禮は世間並に致せども、母の死を哭泣するに、眼には一滴の涙を流さず、外貌に喪服は絡へども、心中に悲感することなし、喪中に曾て哀傷せず、以上の三者無くして、徒に形式一遍の喪を勤めしに過ぎざるに、善く親の喪を勤めたる孝子と譽められ、其の評判は當國一杯に廣がりて、到る處之を稱せざるは無し、彼は全く形式上の喪を行うて、一片誠意の外に見はるゝなきに、是の如しとすれば、天下には固より其の實意なくして、虛名を得る道理があるか、眞逆左樣なこと有るべき筈なしと思へども、眼前に此の孟孫才の實例あれば、回は專ら之を奇怪なるものと思へり、先生は此事を如何に思ひ給へるか、

【解義】〔孟孫才〕孟孫は姓にして才は名なり、魯の

「辨正」の說に依りて解したるが、「宣注」は、造之爲言生也、得水不拘多少而養可給矣、隨分量相安、而生可定矣と云へり、王先謙の「集解」は、造詣也、造乎水者魚之樂、造乎道者人之樂、魚得水則養給、人得道則性定、生性字通と、此の二說に依れば、魚は池を得て養給し、人は道を得て性定まると解す、今「宣注」の說を用ふ、〔魚相忘乎乎道術〕江湖は水の盛なる處、術は巧みなる方法のことにて、道術とは道を巧みに活用すること、「宣注」に愈大則愈適、豈但養給生定而已とあり、卽ち相忘に至りては自然と冥合して、何れか自然なるか自己なるか、頓と自ら辨別せす、上文に謂はゆる、與造物者爲人、而遊乎天地之一氣の地に達せるなり、

子貢曰、敢問畸人、曰、畸人者、畸於人而侔於天、故曰天之小人、人之君子、人之君子、天之小人也、

【大意】 天人の同じからざるを言ひ、生死を忘るゝ三子は、天より視れば造物者と友たる君子にして尸に臨みて歌へる三子を人より視れば、禮義に背ける小人なるを言ひ、以て區々の人智を以て、眞人を窺ふの謬れるを說けり、辨正は曰く、此別一時之言、引之以發明上文孔子之意、是教子夏奉天、而不參以人也と、

【通釋】 子貢は孔子に問うて曰く、世に畸人と申して、風常人と異るもの有りと承はりしが、今敢て畸人とは如何なる人柄を指すかを伺ひ度しと、孔子答へて曰く、畸人とは、畸は異りて遇はざる義なるが、何物と異りて遇はざるかと云へば、世の人と異りて遇はずして、天と善く遇うて侔しきものなり、故に天と人とは人物を品評する上に於て、その標準が同じからず、天から視たる君子は、人から視たる小人なり、同時に人から視たる小人は、天から視たる君子なり、されば彼の三子の如きは、人から視れば世間の禮義に背き、親友の尸體を眼前に横へながら相互に歌ひて、如何にも友情なき小人なれども、天から視れば死生を淡泊に忘れて、進みて造物者と友人仲間となりて、誠に偉き君子なり、斯くの如く大逕庭の有ること

て、事物に囚はれて自由の働きを得ざる者なり、仲々左樣なる高尙の事に手は屆かざるが、然し天の束縛を脫せざる身ながらにも、汝と共に前に述べたる方外に遊ばんと思ふなり、子貢曰く、若し然らば如何にせば其の目的を達し得るか、憚りながら其の方法を伺ひ度きなりと、孔子は曰く、魚は水てふものによりて生き、人は道てふ者によりて相生くるなり、水に相生くる者は、池を穿ち開きて水を得るときは、養育も給りて生活し、道に生くる者は、夫れ夫れの分量相應に安んじて事嘆しく爲さゞれば、事定まりて氣安く一生を終ふ可し、されば固より魚は江湖の中にありて相忘れ、人は道術の中にありて相忘ると云へり、卽ち水の益、盛なるに因りて益、自然の樂を得、人は道の益、大なるに因りて、益、自然の德が進んで、前に述べしが如き死生先後を知らざる聖域に達せる者也、

【解義】「何方之依」「成疏」に依れば、方は矢張り區域の義に解して、上文を承けて、方內方外の內に就いて、孔子は何の道に依りて進むかと問へるなり、又方は方法なり、卽ち單に由りて進む道と解して、必ずしも方內方外の方に拘らずして可なり、「丘天之戮民也」戮民は刑戮を受けたる民にて、罪人と云ふが如し、孔子既に方內に囚はれ禮義に束縛せられて、逍遙自由を得ざるを以て、自ら天の罪人と云へるなり、前文の德充篇に、叔山无趾が孔子を天刑之、安可解乎と評せし語、以て參考とすべし、「雖然吾與汝共之」雖然とは戮民にて囚はれて居る身なれども との意を含めて云へるなり、與女共之とは子貢が夫子何方之依と問へるに對して、吾は此の外に何等の汝に隱せる方法は別に無しとの意にて云へるなり、「魚相造乎水」造は詣なり、「イタル」と訓ず、相造とは共に詣るなり、「辨正」に曰く、非水無以相益、故相愛 必相造乎水」と、下の人相造乎道も亦例推すべし、「相造乎水者—無事而生定」此の二句は上の二句を直に承けて、其の由て然りし所以を明にす、卽ち魚が共に水に詣るものは、全く人が前きに池を穿ちて水を潴へあるに因りて、魚は之に入りて格別勞せざるも、養分が給足するなり、人が共に道に詣れるも、道は本より自然に人に存して、人の作爲を待ちて成るにあれども、塵事を省き私欲を退くるときは、左程に苦まずして道に叶うて定まり安んずるなりとの意なり、以上は

此の說に依れば、異物は死生を指して、同體は同じき境涯にて死生の變ありと雖も、心は同境涯に處るが如く、依然變りなしとなり、〔忘其肝膽〕毛利貞齋曰く、肝膽は五臟の中、肝を云ひて心脾肺腎の四臟を籠め、六府の一つを擧げて、大腸小腸胃膀胱三焦を裹めりと、〔遺其耳目〕遺も忘なり、貞齋曰く、耳目を說いて六根より九竅までを總べて其の中に在りと、「成疏」に既知形質虛假、無可欣愛、故能內則忘於臟腑、外則忘其根竅故也、「宣註」には、外身視死偶然耳と、〔不知端倪〕端倪は分際なり、倪一に淣に作る、山巔曰端、水滸曰倪とあり、此にては往來生死共に其の極を知る莫きこと、〔芒然彷徨〕芒然は無知なる貌、彷徨は徘徊と同義なり、「ブラブラ」すること、〔憒憒然〕憒音は「クワイ」、憒々は煩亂の貌、〔以觀衆人之耳目哉〕觀は釋文に示也とあり、碧虛曰く、墮形體、故忘肝膽、黜聰明、故遺耳目、出自虛無、入於空洞、溷世莫染、自得方外之趣、安能爲繁僞之禮、以示衆人哉と、

子貢曰、然則夫子何方之依、曰丘天之戮民也、雖然吾與汝共之、子貢曰、敢問其方、孔子曰、魚相造乎水、人相造乎道、相造乎水者、穿池而養給、相造乎道者、無事而生定、故曰、魚相忘乎江湖、人相忘乎道術、

【大意】孔子の言を借りて、死生存亡を相忘るゝ眞人の位地に達する方法を說く、相忘の二字是れ骨子たり、宣穎曰く、此夫子所心得者、擧示子貢如此、豈天之戮民哉と、

【通釋】子貢因て孔子に問うて曰く、彼の三人共の事は只今の敎により承知致したり、されば敢て伺ひ度きは、我が先生に於かせられては、何の方法に依りて道を會得し給ふや、孔子答へて曰く、何方などゝ申す大業なることは吾等の當る所にあらず、吾は申さば天の戮民と申して、天帝より御繩を頂戴して縛られて居る罪人同樣なるものにて、卽ち我が天分とし

外は卽ち上に云へる方之內と方之外とにて、方外とは禮の精神にして、方內とは禮の形迹なり、內外の勢殊なれば、相互に關係せざること、〔與造物者爲人〕爲人とは王引之の說に依れば、人は偶なり、爲偶と云ふが如し、應帝王篇に、予方將與造物者爲人とあり、「淮南子」の原道訓に、與造化者爲人とあり、皆本文と同義なり、林希逸は與造物者爲人とは、卽ち是れ造物と友たるなりと、〔遊乎天地之一氣〕一氣とは陰陽の未だ剖判せざる氣にして、卽ち萬物混沌として一たる最初を謂ふ、「莊子數玄」に曰く、一氣云眞性也、夫形雖爲萬物、而眞性泰然獨存、是故遊眞性者、形骸爲逆旅也と、「林註」に曰く、與造物者爲人、則造化不足擬其用、遊乎天地之一氣、則天地不足極其壽と、〔附贅縣疣〕贅は「イボ」と訓ず、「釋名」に贅屬也、橫生一肉、屬著體也とあり、贅は皮肉の外に附着するものなるを以て、附贅と云ふ、疣は「コブ」と訓ず、又肬に作る、「釋名」に、肬丘也、出皮上聚、高如地之有丘也とあり、縣は懸と同じ、縣疣とは疣の倒に懸るものを謂ふ、卽ち形の無落離と降れる疣なり、〔決𤴯潰癰〕決は斷なり、破なり、絕なり、𤴯は音換、癰疽の屬、潰は「ツブル、」と訓ず、「ツユル」と訓ず、もと水の橫に漏れて四方に溢れ出づることなれども、此にては腫物の膿血多く出づるを謂ふ、癰は癰疽なり、附贅縣疣は身に附きたる餘り物なれは、卽ち此の身を以て天地間の長物と爲すに喩ふ、決𤴯潰癰は決潰して始めて快愈を覺ゆるものなれば、卽ち人の生存を以て勞苦と爲し、死亡を以て休息と爲す意に喩へたるなり、〔假於異物云々〕假は因なり、異物は人の形體を構成する各原素を謂ふ、支那學者の謂はゆる水火木金土の五行、印度佛敎の地水火風の四大、歐洲學者の六十餘原素の說の如き、何れも精粗の別あれども、人の形體の構成は單純的に由らずして、錯綜的に因るものとなせるは一なり、莊子の本意、其の物を指して云へるかは詳かならざれども、要するに各原素を以て形體を構成せりと見たるなり、〔託於同體〕託は寄託なり、物の性形は各異なりと雖も、旣に形體を成せる上に就いて觀れば、共に一體となりて靈魂も之に寄託せるなり、「辨正」に曰く、假於異物、指死生、託於同體、身雖有處死生之異、而心如處一境、是異者其寄寓、而一者其實依也と、

式に囚はれて爲したることにて、我れこそ陋劣なる遣方なりし、彼等は仲々人間界の事などに心を牽かさるゝものならず、方に將に進んで天地萬物の根元たる造物者と同じ仲間の人物となりて、天地の一氣即ち混沌鴻濛として窮極なき境に活動せんとせり、苟も此境に達して、人間界を振り顧みるときは、彼は人の生るゝと云ふことを以て附贅縣疣と同樣とし、實に厄介にして餘計なる物と爲さん、死と云ふことを以て既に決疣潰癰とて、化膿し決潰（ツブレ）たる腫物の如くに思ひて、ヤレ〳〵此れにて重き累を却して、打ち寛（クツロ）ぎたることゝせん、全體左樣の者なるが故に、又何くに死が劣るか生が優れる物なるかを知らんや、右樣のことは全く初めより心頭に浮べざるなり、此の世に生るゝと申すものは、種々なる元素を取り合はせて形體を爲して生れ、既に生れたる後は、四肢百骸皆人々と同一なる身體の上に託し居り、其の肝膽を忘れて情思なく、其の耳目を遺却して聰明もなく自然の推し行く儘に任かして、終りては始め、始めては終はり、循環して繰り返し捲き返し、其の推し究はまる端倪（ヘンバシ）を知らず、芒然と凡ての事を相忘れて、世間塵垢の外に彷徨してさまよひ、恬淡無爲の業の上に逍徉とぶら〳〵して相樂むものなり、されば彼の二人等は又此の上に何くに於て能く憒々然と昏く取り放（ハナ）したる情態、愚にも付かぬ世間並（ナミ）の煩（ウル）さき禮法を行ひて、家人の耳目に觀せしめにして誇るが如きことを爲さんや、到底彼等は左樣なる煩瑣の末に囚はれて居ることは出來得ざるなり、

【解義】〔脩行無有〕「成疏」に脩ニ己德行一、無レ有ニ禮義一と解せども、無レ有ニ修行一の倒語なり、乃ち己の行を脩むること無きなり、〔無以命之〕命は名なり、名づけ樣も無しとの意なり、言語道斷なる義なり、〔遊方之外〕「成疏」に依れば、方は區域なり、寰宇若くは世界と云ふが如し、彼の二人は死生を同觀して、世教に囚はれ形迹に拘はることを爲さずして、其の心を高尚にし世外に超出して、自由に遊動すとなり、即ち佛家に謂はゆる出世間法と同じ、又、方は常なり、常教の外に遊ぶと解せるものあり、〔遊方之內〕世間の中に在りて是非を判定し、禮儀法制を用ひ、哀樂を衆人と共にして、其の心を常に區域の內に游動することを謂ふ、即ち佛家の入世間と同じ、〔外內不相及〕內

而歌、顏色不變、無以命之、彼何人者邪、孔子曰、彼遊方之外者也、而丘遊方之內者也、外內不相及、而丘使女往弔之、丘則陋矣、彼方且與造物者爲人、而遊乎天地之一氣、彼以生爲附贅縣疣、以死爲決疣潰癰、夫若然、又惡知死生先後之所在、假於異物、託於同體、忘其肝膽、遺其耳目、反覆終始、不知端倪、芒然彷徨乎塵垢之外、逍遙乎無爲之業、彼又惡能憒憒然、爲世俗之禮、以觀衆人之耳目哉、

【大意】孔子の彼の三子を稱贊する言を借りて、達德の人は死生を擧げて倶に相忘れ、其の心には死も無く生も無きを言ひ、世俗の禮法を以て固く律すべからざるを說き、謂はゆる禮意に達するものなることを示せり、

【通釋】子貢は立ち反りて孔子に委細如上の事を告げて曰ひけるに、全體彼の二人は如何なる人柄なるか、德行に就いては是れと申して一廉に修むることを致さず、身分の形體卽ち身體の行跡を外所ものにして一向自ら構はず、朋友の尸體を橫たへたる處に於て、歌ひて一向平氣にて顏色も變らず、實に何共之を名づけ形容すべき辭なし、全體彼れ二人は如何なる人物なるかと、孔子答へて曰はるゝに、彼れは我等仲間とは全く方角違ひの人なるぞ、彼の二人等は方之外とて、道の外に超出して活動し、自然の理趣を追へる者なり、而して丘卽ち吾は方之內、卽ち世間道の內に入りて或る範圍中に活動せる者也、もと方の外と方の內とは相互に遠ざかりて關係せざるに、吾が汝を使者として態々往きて彼等の仲間の死を悔み申さしめたるは、彼が惡しきにあらず、全く吾が禮の形

外方內、故寄尼父（孔子）琴張とあり、此に依れば、此の本文の事は全く莊子の寓言にして、實事にはあらず。〔或編曲或鼓琴〕曲は薄なりと「成疏」に見えたり、薄は「ヒフ」と訓じ、養蠶の時用ふる笊籬に似たる器にて、葦を以て造る者なり、曲は又笛に作る、「方言」に、宋魏陳江淮之間、謂之曲、自關而西、謂之薄とあり、漢の丞相周勃微なりし時、薄曲を織りて生と爲せしこと、「史記」の本傳に見えたり、編曲は乃ち薄曲を織るなり、蓋し賤者の業なり、「宣注」は編曲を解して歌曲を編次すると云へり、下文の或鼓琴和而歌の句に照らすときは、此の說優なるに似たり、今之を用ふ、〔嗟來桑戶乎〕來は語助、岡松甕谷は曰く、哉と通ず、孟子に盍歸乎來の來も亦此と同じと、戶は下の戶と共に一韻とす、〔而已反其眞〕而は爾と通ず、「ナンヂ」と訓ず、桑戶を指す、反其眞とは人の本眞に反ることにて、死して最初の虛無になるを謂ふ、〔而我猶爲人猗〕猶は「崔本」に獨に作る、猗は相和聲也と成疏に見ゆ、歌唱の餘聲にして、兮の字の如きなり、〔臨尸而歌〕「禮記」の檀弓篇等に依れば、里有喪、舂不相杵とありて、隣里の間にても喪事ある時は、舂くに杵の相方と爲りて、高聲を發することを遠慮すべしとあり、況して親友の死に臨みて歌へるを以て、子貢は驚怪して問へるなり、〔是惡知禮意〕單に禮と云はずして、禮意と云ふ、是れ玩味すべき所也、禮はもと聖人の天理に基つきて、人の履行すべき法則を制したる者なれば、各々一定せる形式儀則あり、然れども「禮記」の樂記篇にも、中正無邪、禮之質也とあるが如く、禮は眞率にして私邪なきを以て本位となせり、故に禮も本意に就いて云へば、天理に循うて詐らざるに在り、人の生ずるも天理なれば、死するも天理なり、生死共に同じく天理たれば、生死の跡に泥みて、歌哭の別を立つべき樣も無し、若し然らずして、徒に名目に拘り形迹に囚はるゝときは、反りて眞情に悖りて、謂はゆる相與於無相與、相爲於無相爲とは正反對なる結果となるとの意なり、宣穎曰く、禮意二字、至精至微、若阮嗣宗（竹林七賢阮籍の字）曰禮豈爲我輩設則淺矣、

子貢反以告孔子曰、彼何人者邪、脩行無有、而外其形骸、臨尸

而笑曰、是惡知禮意、

【大意】 禮の主意は本眞に從ふに在ることを言うて前節の相與於無相與、相爲於無相爲の意義を提明し、三人者の莫逆の友たる所以を言外に暗示す、

【通釋】 其の內に何事も無く漠然と靜かに打ち暮せしに、彼の三人中の一人なる子桑が病死し、未だ葬らざりしが、孔子は其の不幸を聞かれて、弟子の子貢を使として、往きて弔意を述べ、尙ほ侍して喪事を助けしめたり、然るに彼の子反子琴は、或は歌曲を編成し或は琴を彈し、互に打ち合はせて歌うて曰ひけるには、嗟呼桑戶よ、嗟呼、桑戶よ、汝は死して已に汝の本眞に立ち反りて、虛無の聖域に入りたり、然るに我は何事ぞ矢張り相變らず人と爲りて、此の煩累多き世界に居るかと、右樣の次第にて、仲々に死を哀むどころに非らず、寧ろ之を羨み慕へる情態なりければ、子貢は孔子の弟子にて、生平より喪禮などは深く注意して居れば、大に驚き、小足にて早くと傍に進みて曰ひけるに、如何にも諸君の爲され方は、吾が腑に落ちぬことなり、憚りながら問ひ參らすが、全體人の死體の在る處に臨みて歌ふことは禮儀なるか、歌と申すものは吉事にこそ用ふれ、此の愁嘆深き場所に用ふるとは、實に心得難きことにこそと、之を聞きて孟子反子琴張の二人、ソラ始まりたりと云ふ樣なる態にて、互に面を見合はせながら、笑うて曰く、ハア〳〵是れ汝達にして何ぞ禮の本意を知らんや、汝達の禮と云へるは、全く形式的勉强的に行へるものにて、禮の奧深き本意と申すものは、決して汝が思へるごとき者にあらずと、一言の下に排斥して取り合はざれば、流石に孔門十哲中にて雄辨家を推されたる子貢も、返す辭なくして立ち歸りたり、

【解義】 〔莫然有間〕「成疏」には、莫無也、三人相視、寂爾無言、俄頃之間、子桑戶死とあり、「崔注」に莫定也、間頃也とあり、甕谷は曰く、莫は漠と通ず、虛靜なる貌と、乃ち靜かにして少く時日を隔てゝと云ふ義なり、按ずるに上文の二節、子輿子來の死は共に俄而の二字を冠用せり、終に此の本句は變辭を用ひて斯の如く云へり、其の實は亦俄頃の意に過ぎざるのみ、〔仲尼使子貢〕子貢姓は端木、名は賜、子貢は其の字、孔子の弟子、「論語」にも、言語宰我子貢とありて、謂はゆる孔門十哲中の雄辯家なり、「成疏」に、欲顯方

なり、〔孟子反〕孟は姓にして、子反は字なり、或は曰く、「論語」の雍也篇に、孟之反（魯の大夫）不伐とある者は、卽ち是の人なりと、〔子琴張〕琴は姓にして、張は名なり、「論語」に琴張あり、「左傳」にも琴張あり、又此と全く別人なるか詳かならず、此れ等は莊子の寓言なれば、深く論ぜずして可なり、〔孰能相與於無相與〕與は互に交ること、無相與とは深く相與せんと心構へして相交らぬこと、卽ち野心的の交際にあらざるなり、〔相爲於無相爲〕爲は事を行ふなり、無相爲とは形式立つて事を爲し行けぬこと、相與相爲は心構へ若くは形式に傾きたること、眞の無邪氣なる心より出づるにあらざれば、尊ぶべきにあらず、〔孰能登天遊霧〕天に登り雲霧の中に遊ぶとて、高く世外に超越することを云ふ、按ずるに、孰能の二字を再び下だし、上の、孰能云々は世外に超越するに就いて云ひ、此の孰能云々は善く物と推移して相忤らざるに就いて云へり、〔撓挑無極〕撓は音「ジヨウ」、挑は音「テウ」、撓挑は宛轉の意、卽ち循環すること、無極は已に前に解せり、極は極り無き處、卽ち下句の無所終窮と同意にして、下句は重言したるに過ぎず、本書の在宥篇に、復之撓撓、以遊無端とあるもの亦同意なり、〔相忘以生〕相忘るゝも普通の忘れ樣でなく、生存までをも忘るとの意なり、乃ち生死ほど人に取りて大切なるは莫し、今之を忘るゝ時は、他の萬事を忘るゝことは勿論なれば、故に此の如く云へるなり、〔無所終窮〕「成疏」に、終窮死也、相與忘生復忘死、死生混一、故順化而無窮也と云へり、此に依れば、終窮とは究極して推し詰りの義にして、既に最大切なる生存すら忘るゝが故に、萬事を打ち忘れて、凡て自然の推移に隨うて變化の窮り無きなり、

莫然有間、而子桑戶死、未葬、孔子聞之、使子貢往待事焉、或編曲、或鼓琴、相和而歌、曰、嗟來桑戶乎、嗟來桑戶乎、而已反其眞、而我猶爲人、猗、子貢趨而進曰、敢問臨尸而歌、禮乎、二人相視

として造物の命を拒絕して、肯て死に就かざる辭なり、〔成然寐遽然覺〕成然は「成疏」には閑放の貌にして、寐は寢なり死に譬ふ、遽然は驚喜の貌、覺は寤なり生に譬ふとあり、岡松甕谷は曰く、成然は恬々として睡に就く貌、蓋し人の將に死せんとするや、神已に昏憒にして、將に睡らんとする者の狀の如く、已にして忽ち復た一たび開朗を成す、故に成然寐遽然覺と曰ふ、從容として死に就く狀態を言へるなりと、遽然覺の下に、向崔の二本に發然汗出の一句あり、無係則津液通也と注し、又榮衞和通、不以化爲懼也と注せりと、「釋文」には云へり、今按ずるに、成然遽然の二句は、共に紀事の文にして、子來が死に臨みて安然たる狀を述べたるなり、

子桑戶、孟子反、子琴張三人、相與語曰、孰能相與於無相與、相爲於無相爲、孰能登天遊霧、撓挑無極、相忘以生、無所終窮、三人相視而笑、莫逆於心、遂相與友、

【大意】前の子輿子來の二章は、倶に能く死生を齊うするを言ひ、此の章は不死不生の理を闡發するに在り、而して本節は先づ三人の莫逆の交を締結せしより說き起して、相與於無相與、相爲於無相爲の二句、尤も主意の在る所と爲す、

【通釋】子桑戶と孟子反と子琴張と云へる三人ありて、一日互に相談じて曰く、全體今の世に或る必要的に迫られて相與みすることでなくして、無心的に自ら相與みし、互に斯の事を爲すべしとの意なくして、自然的に互に爲す程の人あるか、誰か俗間的事柄を超脫して、高く天に登り雲霧の上に遊び、無極とて極り無き浩蕩たる天界に撓挑とて遊戲的に娛み、互に一切を打ち忘れて、生死を度外に置き、自然に任かして生活し、終り窮まること無きものぞ、今の世間には此の如き人物は實に寂寥たるかなと、然るに此の三人共に何れも皆其の希望抱負は同じければ、互に面を視て莞爾と笑ひ、不言の內に默契して、互に其の心に逆ふこと莫く、遂に相與に無二の親友となれり、

【解義】〔子桑戶〕子は尊稱、桑は姓にして、戶は名

在れば、妻子繞りて之を哭し泣くなり、〔叱避无怛化〕叱は呵する聲なり、叱避の下共に各に矣の字を加へて看るべし、怛は音「タツ」驚なり、化とは生死はもと一にして、死は生の變化との意にて、死と云はずして化と云へるなり、〔倚其戸〕「成疏」に、倚戸觀化、與之而語とあり、卽ち病室の戸に倚り、患者の次第に危篤に陷るを見ながら相語るとなり、〔爲鼠肝乎〕鼠肝蟲臂は、共に至微至賤のものと爲すに喩へて云へるなり、五臟を取りて鼠の肝と爲し、四支〔手足〕を取りて蟲の臂と爲さんとの意なりと、「成疏」には云へり、〔父母於子〕子於父母と云ふべき文を、倒裝句法を用ひたるなり、〔陰陽於人〕此れまた人於陰陽と云ふべき文を、倒裝句法を用ひたるなり、〔不翅於父母〕郭注に依れば、自古或有能違父母之命者矣、未有能違陰陽之變而距晝夜之節者也とあり、乃ち子が親に對しては、絕對的に服從すべき筈なれども、或る時によりては、親の敎命に違ふこともあれど、陰陽の變り行き晝夜の移り易はるに對しては、何人も皆共に不可抗力と諦らめて、拒ぎ違ふものはあらずとなり、〔彼近吾死〕彼は陰陽を指す、近は迫なり、速なり、迫りて速かにする意なり、〔我則悍矣〕悍は一に捍に作る、抵抗すること、〔彼何罪焉〕此の彼もまた陰陽を指す、言ふこゝろは、彼の陰陽は妄に罪なき吾人が死期を速めて死せしむるは、如何にも陰陽が曲事にして罪あるが如くなれども、本來人の生は陰陽が爲したるものにて、其の死も亦陰陽の爲業なれば、卽ち生死共に彼れ自ら生じ自ら殺すことにて、他より干涉して之を罪して咎むるの理なしとなり、〔夫大塊載我以形〕本句より乃所以善吾死也に至るの解は、已に前文に見ゆ、〔今之大冶〕冶は鑄匠曰冶と、字書に見えたり、鍛冶師のことなり、「イモノシ」と訓ず、大冶は有名なる鑄匠なり、〔我且必爲鏌鋣〕且は將と同じ、鏌は音「バク」、鋣は音「ヤ」、鏌鋣は古への良劍の名なり、「成疏」に、吳人干將、爲吳王造劍、妻名鏌鋣、因名雄劍曰干將、雌劍曰鏌鋣とあり、此の事もと「吳越春秋」に見えたり、〔不祥之金〕祥は善なり、不祥は不善なり、不吉のこと、〔今一犯人之形〕解已に前に見ゆ、犯は遇なり、また範と同じ、〔人耳人耳〕物に生るゝからには、人に限る、人に限ると云ふ意にして、乃ち悍然

的服從を甘んぜざるべからず、然るに、今や人に於て彼れ造化が都合ありて吾の死することを速かにせんとするを、我れに於て承諾せずして、飽くまで生存を貪らんとするときは、是れ我が人類が悍然として其の命を拒み逆らふものなり、彼れ造化に果して何の罪責かある、尚一つ進んで考ふるときは、彼の大塊たる天地が、此の吾人に形體てふものを宛てがうて之を載せ、吾人に生存てふものを宛てがうて之を苦勞させ、吾人を佚樂せしむるに老年てふものを宛てがうて佚樂をさせ、吾人を休息せしむるに死去てふものを宛てがうて、世の煩累を絶ちて休息さすることなり、かるが故に、吾が生存を善く大切に取り扱ふことは、是れやがて吾が死去を善く大切に取り扱うて行く譯となるなり、譬へば、今大いなる鍛冶師がありて、金物類の鑄つくろひを爲すに、其の中なる金屬の或る者が、踴躍し跳ねまはりて曰く、我等は平凡なる器具類に鑄らるゝことは大不服なり、必ず彼の世に寶劍と崇め重んぜらるゝ鏌鋣の劍と爲らんと、鍛冶師は之を聞きて、何如なる感を爲すか、必ず是れは怪しからぬ奴なり、己が分際をも思はず、右樣の苦情箇間敷ことを唱へ出だすは、誠に不吉なる金屬なりと爲さん、それと同理にて、今造化の恩惠にて一たび人の形體を鑄型に當てはめられて、人類と生れたりとて、頑固に何處までも吾は必ず人とならん、人とならんと云うて、他の物に變化することを拒み禦ぐときは、彼の造物者は亦必ず是れは怪しからぬ不祥不吉なる人物なりとなさん、今や一たび天地を大いなる火鑪と爲し、造化を以て大いなる鍛冶師と爲して、乃ち前の譬の如く、造化生々のことを金屬が鍛冶師の手に成れるに、凡ての物が造化に因りて成ることに見立つるときは、假りに鼠肝にせよ蟲臂にせよ、凡そ有りと有らゆる物に就いて、何物に爲り何れの處に往くとして不可ならん、即ち如何なる物に爲るとも、其の命令通に從はざるべからずと、右の如く言はれて、子來は成然として安樂に眠り、蘧然として忽ち夢が覺めたるが如く、安らかに此の世を去りにけり、

【解義】〔俄而子來有病〕「成疏」に依れば、子輿語訖、俄頃之間、子來又病とあり、〔喘々然將死〕喘は「アヘグ」と訓ず、喘々は氣息の急なること、又惴々に作る、〔環而泣之〕環は繞なり、既に危篤臨終の際に

我以死、故善吾生者、乃所以善吾死也、今大冶鑄金、金踊躍曰、我且必爲鏌鋣、大冶必以爲不祥之金、今一犯人之形、而曰人耳人耳、夫造化者必以爲不祥之人、今以天地爲大鑪、以造化爲大冶、惡乎往而不可哉、成然寐、蘧然覺、

【大意】死亡に臨める時に就いて、生死存亡の一體たるを言ふ、餘は前節と同じ、宣頴曰く、父母一喩、讀之氣降、鑄金一喩、讀之意悚、寐覺一喩、讀之神超、前兩喩中、夾一段正論、如層峰起伏、末一喩、兩句陡住、如峭壁斬然、小小亦具音致と、

【通釋】然るに、今度はまた俄かに子來が病氣に罹り、餘程危篤に陥り、氣息は喘々として將に死せんとせしが、其の妻子共は病牀を取り圍みて、別を惜み悲み泣けり、其の所へ子犂が往きて訪問し、此の狀を見て、妻子を退かしめて曰く、コラ其所を避けよ、折角變化しつゝある處を、左樣に未練を溢して妨ぐること無れと、因りて子犂は病室の戶に倚りて、熟く〴〵と子來の容態を視ながら、子來と語りて曰く、如何にも偉大なる哉造化の主や、サテ既に汝を人として生みながら、又此の上に何物に汝を化せんとして斯の如くするか、將た何れの處に汝を伴れて適かんとして斯の如く死を迫れるか、汝の臟腑等を取りて以て鼠の肝と爲さんとするか、但しは汝の手足を取りて蟲の臂にても爲さんとするか、全體何の目的にて斯樣なる病氣を與へたるか、實に造化の自由なる力には驚き入りたるかなと、子來は曰く、是れは最早天命と諦むるより外なきなり、今それ人間界にて父母が子に對しては、子たる者は何等の苦情は出だすことなく、東西南北何れの方へなりと、唯父母の命令に從うて向ひ働かざるべからず、況して彼の陰陽二氣が人に對しては、仲々に子が父母に對するが如き關係に止まらず、更により以上重大なる關係を有し、絕對

出於彈、故因卵以求時夜、因彈以求鴞炙耳、齊物論云、見卵而求時夜、見彈而求鴞炙、與此文大同、亦其明證と、「因以求鴞炙」已に齊物論篇に解せり、「以神爲馬」「成疏」に、尻無識而爲輪、神有知而作馬と云へり、卽ち天が物を化するには、無識なるものには無識同士に、有智のものには有智同士に、各々其の似寄りたる物に化するを云ふ、「得者時也云々」得とは生を謂ひ、失とは死を謂ふ、養生主の篇に、適來者夫子時也、適去者夫子順也とあり、今此の處は來去の二字を變じて得失と爲すのみ、意義は相同じ、「郭注」に、當所遇之時、世謂之得、時不暫停、順往而去、世謂之失と云へり、卽ち得と云ひ失と云ふも、皆世人より名づけたるものにて、其の實は自然に生れ出て、亦自然に順うて去るのみ、別に何れが損益など〻云ふべきにあらずとなり、「哀樂不能入也」入とは外より內へ入り來ることにて、もと哀み若くは樂むと云ふは、己が心內より生ずるに非らずして、外界より心に注ぎ込みて生ずとの考へより、入と云へるなり、乃ち此にては哀樂の事を以て吾が心を動かす能はざるを謂ふ、「所謂縣解」縣は懸と同じ、束縛せられて不自由なるなり、縣解とて束縛が解けて自由になること、前篇の帝之縣解とあるが卽ち是れなり、「物有結之」外物が頑强に固結して解脫せしめざること、乃ち生を貪り壽を願ふ心に囚はれて、爲めに凡ての自由を失ふことなり、

俄而子來有病、喘喘然將死、其妻子環而泣之、子犂往問之、曰、叱、避、無怛化、倚其戶與之語曰、偉哉造化、又將奚以汝爲、將奚以汝適、以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎、子來曰、父母於子、東西南北、唯命之從、陰陽於人、不翅於父母、彼近吾死、而我不聽、我則悍矣、彼何罪焉、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息

爲此拘拘也〕將とは將來を豫側する辭、乃ち病勢の此より更に甚からんとするを恐れて云へるなり、拘々は彎縮して伸ひざる貌、「カヾマル」と訓ず、卽ち身體の牽き着けて伸びざることなり、此れ先づ一嘆して下文の病狀を語る前提としたるなり、〔曲僂發背〕曲僂は「クヾセム」と訓ず、「成疏」に、傴僂曲腰背骨發露とあり、卽ち脊椎病にて、腰が曲り背部の骨が突き出づること、又發背は瘡が背部に發する也との說もあり、〔上有五管〕五管は五臟の管なり、此の解は已に德充符の篇に見ゆ、〔頤隱於齊〕頤は「オトガヒ」と訓ず、顋なり、齊は臍と同じ、「ホゾ」と訓ず、腰の曲まるに依て、頭の低れて臍の蓋を爲すを云ふ、於は「を」と訓ず、〔句贅指天〕句は項と通ず、句贅は項椎なり、卽ち其の形ち贅瘤に似て上に向ふを謂へるなり、〔陰陽之氣有沴〕沴は音「テン」、又音「レイ」、「ミダル」と訓ず、「字彙」に陰陽氣亂曰沴とあり、「林注に曰く、人受陰陽之氣而生、今有此疾、是二氣災沴之所致と、乃ち人は もと天地陰陽の 氣を 受けて生る、然るに今此の疾あるは、二氣の亂れ狂ひしより起るとなり、以上を子輿の言と爲す、〔其心間而無事〕

以下二句は紀事の文なり、間は閑と同じ、「シヅカ」と訓ず、忙の反對なり、心閑とは心ののどやかなる模樣なり、無事とは病氣を治せんともせざるなり、無頓著なること、〔跰躚而鑑於井〕跰は音「ヘイ」、躚は音「セン」、跰躚は曳疾貌とありて、病氣を引きずりながら行くこと、鑑は水を鏡にして病體を映し視るなり、〔曰嗟乎夫造物者云々〕初發の辭を疊み返して云ひ、深く嘆息の意を洩らしたるなり、又將の又はその上と云ふ意味にて、前件に加へて云ふ辭なり、岡松甕谷は、先是吾之一身、莫非造物所使、今又令有此病、故曰又將以予爲此拘拘也と云へり、藤澤東畡は、上文の偉哉夫造物云々の十四字を以て子祀の言とし、以予の予は蓋し子の字の誤ならん、下文の子來有病云々の文例と竝び按ずれば、其の問者の言なるを知るべしと云へり、此れ別說なれども參考と爲す、〔浸假而化〕浸は漸なり、假は格なり、「イタル」と訓ず、漸々に進み格りて甚しくなることなり、〔以爲雞予因以求時夜〕時夜は夜時を報じて鳴くこと、王先謙は、雞の字を疑うて卵の誤と爲せり、曰く、時夜卽雞也、既化爲雞、何又云因以求雞、惟雞出於卵、鴞

自身の影を水に照らし、其の形貌の變り掛りたるを見て嘆息して曰く、あゝさても驚き入りたる事なり、彼の造物者は既に予を滿足具體の人に生み付けながら、その上に將に予輩を以て此の有樣なる拘々として彎曲せる形貌となさんとするかと、見舞に來れる子祀は子輿の語を聞き咎めて曰く、左樣に嘆息するを見るときは、全體汝は此の病に罹りたるを惡めるか、子輿は答へて曰く、否とよ、予何ぞ之を惡まんや、吾は元來生死存亡は人の一體の如く同じきものなることを知れるが故に、予は如何なる物になるとも可なり、假りに造物者が浸假とて漸々に進め化して、予が身の左臂を雞となせば、その時予は其の命令の儘に雞と爲りて夜時を作るまでなり、又浸假して予が右臂を化して彈となせば、予は亦其の儘に彈と爲りて鴞炙即ち鳥の炙り物を求めんとす、又浸假して予が尻を化して車の輪と爲し、予が精神を化して馬と爲せば、予は因りて其の化したる車なり、馬なりに乘りて行かん、豈に更めて別の馬なり、車なりに乘りて行く要あらんや、乃ち造物者が命令せる範圍内に於て、予が行動を取ればそれにて宜しきことにて、別に彼此と煩悶するにも及ばざるなり、その上に全體彼の人が此の世に生るゝを得るは、恰度生れ時に出でくはしたればなり、定命を終へて死するは、亦その死に時に順へるなり、此の生れ時に安んじて死に時に順ふときは、生るゝも、我が進み好みて生れたるにあらざれば喜ぶ譯なく、死するも、その時節が到來して死することにて、皆な共に元來吾てふ本體に取りては、何の故障もなく損得もなきこと故に、他よりして哀み樂みの感じは吾が心に入り込み來りて思ひを動かすこと能はざるなり、古しへの縣解と申して、煩累の束縛が解けて効かざるものなり、而も世に自から其の束縛を解く能はずして縛られ居る者は、もと自身より束縛を解く能はざるに因りて、外物が來りて之を束縛することあるなり、その上に彼の有らゆる物が天に勝つこと能はざることは久し、何にも今更に予が造物者に負けて、其の命令の儘に從ふとも、不思議は無きことなり、吾又何ぞ獨り造物者が我に斯の如き奇病を與ふるを惡まんや、

【解義】「偉哉夫造物者」偉は大なり、美なり、造物は造化の神にして、即ち自然を指して云ふ、「將以予

於齊、肩高於頂、句贅指天、陰陽之氣有沴、其心閒而無事、跰躚而鑑於井、曰嗟乎夫造物者、又將以予爲此拘拘也、子祀曰、女惡之乎、曰亡、予何惡、浸假而化予之左臂以爲雞、予因以求時夜、浸假而化予之右臂以爲彈、予因以求鴞炙、浸假而化予之尻以爲輪、以神爲馬、予因而乘之、豈更駕哉、且夫得者時也、失者順也、安時而處順、哀樂不能入也、此古之所謂縣解、縣而不能自解者、物有結之、且夫物不勝天久矣、吾又何惡焉、

【大意】 前節を承けて、彼四人者の眞に死生の一體たるを知れることを證明す、而して此段は生存中に在りしことに就いて說けり、

【通釋】 然る處、未だ間もなく、四人の一人なる子輿が脊椎病に罹りたり、友なる子祀は之を訪問せしに、患者の子輿は語りて曰く、さても偉大なるかな、彼の造物主と申す者は、實に驚き入りたることなり、彼は此より將に予輩の身體を以て、此の見らるゝ通りの拘々として彎曲せる狀態に爲して仕舞はんとするか曲り僂むける病が背部に發し、五臟の管は轉倒して上に向ひ、身體の俯し勝ちなるに伴れて、頤は下に垂れて臍を押し付け隱くし、左右の双肩は衝き立ちて頂よりも高く句贅と申して項に突き出でたる瘤の如きものは、天を指して聳え立てり、是れ何に因るかと云へば、陰陽の氣卽ち萬物を造る原素が亂れて、順序を失へるより起りたれば、人としては致し方なしと、此の如く云ひながら、子輿は何等か信念あるならん、其の心靜かにのんびりして、一向に此の病氣を氣に留めず、跰躚と足を曳きずりつゝ、井戸の處に行きて

體者、吾與之友矣、四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友、

【大意】人の虛無より出でゝ斯の世に生れ、生れて死するには、宛かも肉體に首あり、脊あり、尻あるが如く、乃ち此の三者具はりて人の一體を總成せると同樣に、亦無と生と死の三者具はりて、人の一理を完成せるものなれば、何れにても其の一を闕けば不可なるを以て、世の徒に生を悅び死を惡むの謬れることを言ふ、

【通釋】子祀、子輿、子犁、子來と云へる四人の者がありて、相互に語りて曰く、有無死生は物こそ變はれ一貫したる道理なり、世の人々に於て孰か能く無形を有形に比較して、人體の頭首と見立て、出生を人の脊に見立て、死去を人の尻と見立てゝ、卽ち初中終の位地に由りてこそ、首なり脊なり尻なりと變はれども、其の實は一體なるが如くに無生死の三者は共に同物と爲すものがある、又孰か死生存亡と云ふ者が互に反對のものなれば、其の實は首から脊に下り又尻に下れども、總べて吾が一體たるときと同樣なることを知るか、苟に能く此の理を徹底して悟れるものあらば、吾は願はくは之と親友と爲りて交際せんと、四人相互に面と面と見合はせ嗎然として笑ひ、心に何等の蟠り逆ふこと莫く、洵に氣合が善く合うて、遂に相與に至て復と無き親しき友となれり、

【解義】〔子祀子輿子犁子來〕共に四人の名、成疏に四人未詳所據、觀其心跡、竝方外之士とあり、蓋し當時の隱者ならん、〔以生爲脊〕脊は脊椎なり、首と尻の間に在るを以て中央の位地に喩ふ、〔以死爲尻〕尻は音羙、「シリ」と訓ず、其の終に喩ふ、「成疏」に、人起自虛無、故以無爲首、從無生有、生則居次、故以生爲脊、死最居後、故以死爲尻、死生雖異、同乎一體、とあり、〔莫逆於心〕林希逸曰く、心皆自悟、而相契相順也と、乃ち四人共に心の中に自ら死生存亡の一理なるを悟りて、意氣の投合すること、後世親友を呼んで莫逆之友と爲すは此より始まれり、

俄而子輿有病、子祀往問之、曰、偉哉夫造物者、將以予爲此拘拘也、曲僂發背、上有五管、頤隱

思ふこと、「成疏」には、需、須也、役、用也行也、雖復私心自許、智照漸明、必須依教遵循、勤行勿怠、懈而不行、道無由致とあり、此の說に依れば、需役とは勤行を待つの意と解したるなり、東畡は需は待なり、役は用なり、時を待ちて用ふることにて、時變に明かなるなりと、〔於謳〕於は烏と同じ、歎息の聲、謳は歌謠なり、「宣註」に、詠歎歌吟、寄趣之深とあり、贊歎して歌ひ趣味を玩味すること、東畡は謳は煦なり、元氣の蒸出することゝ解せり、〔玄冥〕玄は幽昧なり、冥は闇會なり、道は幽昧にして無形なれ共、自然に冥合して現出することあり、乃ち有としては定形なく、無としては全く無にも非ざるを以て、言ひ難き處を形容したる稱なり、「郭注」に玄冥者、所以名無而非無と云へり、東畡は形の見るべからざるを謂ふと解せり、〔參寥〕參は三なり、寥は絕なり、虛無にすること、參寥とは第一に有を絕ち、第二に無を絕ち、第三に有無を幷せて共に絕つなり、乃ち至道の極意は無にも非ず、有にも非ず、全く有無を離れて、空々寂々たるに在るを謂ふなり、「宣註」は參悟空虛とあり、乃ち心を向けて空虛の理を悟ることなり、東畡は寂寥と同義にして、聲の聞くべからざるを謂ふと解せり、〔疑始〕始は本なり、疑始とは始あるに似て未だ嘗て始あらず、端倪すべからざることにて、卽ち自然の異名なり、又東畡の說に依れば、女偊の答意を連釋すれば曰く、道を求めんには必ず先づ載籍を觀て誦讀し、又之が義を洞明すべし、以上は博文の事に屬し學問の功を謂ひ、又其の義を攝保して處置し、隨時之を用ひて、此の道は元氣の蒸出する所なるを知る、然れども其の蒸出する所を推すに、形としては玄冥にして見るべからず、聲としては參寥にして聞く可からず、是に於て其の始の如何を疑ふに至る、然れども其の始の疑ふべくして、而かも明にすべからざる者、是れ道の自然に出づる所以なるを合點すべし、予が悟道の順序竝に道の自然なることは、是の如きなりと亦一說として存すべし、

子祀、子輿、子犁、子來、四人相與語曰、孰能以無爲首、以生爲脊、以死爲尻、孰知死生存亡之一

ことにて、卽ち眼で書物を讀み得て道を知るに至れりとなり、而して瞻明は聶許と申す者に聞けり、聶許とは獨り眼で書物を見るのみならず、自から覺えず口中に成程と囁きて悟りを開きて道を知るに至れるなり、聶許は需役と申す者に聞けり、需役とは嚅きて口をモゴ〳〵しながら、實行に勉めて道を知るに至れり、需役は又道を於謳に聞けり、於謳とは詩的に歌ふことにて、卽ち實行も餘り嚴重窮屈にせずして、詩的趣味を玩味しながら、優游自得して道を知るに至れりとなり、於謳は之を玄冥と申す者に聞けり、玄冥とは卽ち詩趣も人工的に依らずして、奧床しき自然を玩賞して道を知るに至れりとなり、玄冥は之を參寥と申す者に聞けり、參寥とは空虚を大悟せる義にて、忘ち自然を味ふにも、一切の事を打ち忘れ、眞味を悟り道を知るに至れりとなり、參寥は之を疑始と申す者に聞けり、疑始とは凡そ宇宙間の根本原理を究むることにて、徒に物を打ち忘るゝにあらず、原理を推し究めて道を知るに至れりとなり、

【解義】〔副墨之子〕副は貳なり、「ソヘル」と訓ず、墨は翰墨にて文字のこと、虚無の道理は書籍文字に由りて傳ふれば、文字は道を傳ふるに於て、其の副貳たる關係あるを以て、文字のことを副墨と名づけ、又文字は次第々々に殖え行くものなれば、道を父に見立てゝ、之を子と云へるなり、乃ち副墨と名づくる忰と云ふが如し、〔洛誦之孫〕洛は聯絡の絡と意義同じ、誦は誦讀なり、書物は文字を聯絡して讀誦するものなるが故に、讀書を爲すことを洛誦と名づけたり、道理を誦讀することは、書物文字に因みて起ることにして、宛かも道を父とし書籍文字を子とすれば、その孫に似たるより斯く云へるなり、乃ち誦讀と名づくる孫と云ふが如し、〔瞻明〕瞻は視なり、至なり、見解の洞徹することを謂ふ、〔聶許〕聶は囁と同じ、附耳の小語なり、「サヽヤク」と訓ず、許は許可なり、乃ちさゝやき許すとて、其の悟り得たる義理を未だ敢て公然と發表を爲さゞれども、口中に私語して心に欣悅することとなり、藤澤東畡は曰く、聶は攝と同じ、保なり、許は處なり、聶許は之を攝保して處置する也と、〔需役〕需は嚅と通ず、嚅と義同じ、役は事なり、乃ち義理を念へども、未だ確乎と得るにあらずして、初中終に口中にさゝやきながら心に仕事として考へ

際限なきと共に、迎ふることも際限なく、毀つことも際限なきと共に、成ることも際限なしとなり、〔其名爲攖寧〕攖は觸なり、「フル」と訓ず、迫なり、「セマル」と訓ず、亂なり「ミダル」と訓ず、寧は安なり、攖寧とは物事に觸れながら心の寧きことなりと云ひ、又上に述べし物我生死の見解、若くは將迎成毀の事機、紛々として外より迫れども、爲めに毫も其の心を動すこと無く寧きなりと云ひ、又他より亂せども寧きなりと云ひ、世の縈着く物に縈着かれながら、心は安きなりと云ふ、諸說紛々たれども、要するに外物の壓迫の爲めに心の動かざることなり、尙下句の攖而後成者也の語は、乃ち作者が本句の自解と承知すべし、

南伯子葵曰、子獨惡乎聞之、曰聞諸副墨之子、副墨之子聞諸洛誦之孫、洛誦之孫聞之瞻明、瞻明聞之聶許、聶許聞之需役、需役聞之於謳、於謳聞之玄冥、玄冥聞之參寥、參寥聞之疑始、

【大意】道を知るは讀書研究の力に賴ることを言ふ、副墨之子より疑始に至るまで、許多の人名を撰出し、而かも其の實は此の如き人あるに非ず、全く讀書に關係ある事件物件を假りに人格化して云へるなり是れ莊子の寓言なることを知るべし、謂はゆる滑稽にして、文を以て戯と爲す者、亦此等の處に於て見るべし、

【通釋】南伯子葵は女偊の道に關する知識の豐富なるを驚嘆して曰く、誠に貴所の高說には敬服したり、然し貴所とて別に是れと云ふ師匠なきに、獨り何れの處に於て左樣に深く道を聞かれしや、女偊は答へて曰く、何にも外に於て聞く處ありしにあらず、全く讀書學問の工夫より之を發明したるなり、之を人格的に譬へて申さば、先づ初め道を副墨の子なる者より聞けり、副墨とは書物の文字のことにて、卽ち物より道を發見せりとなり、而して副墨の子は道を洛誦と申す孫に聞けり、洛誦とは誦讀のことにて、卽ち書物は又誦讀して道を知るに至れりとなり、洛誦の孫は瞻明と申す者より道を聞けり、瞻明とは眼で見る

遺忘するときは、煩累の多分は已に去りしなり、以下能外物とは、更に層進して一物だも心に掛くる無きことにて、煩累の幾ど盡きたるを謂ひ、又能外生とは、已に一身を幷せて物と共に忘れて、煩累の盡く無くなりしを謂ふ、〔而後能朝徹〕朝は旦なり、徹は清明なり、心の忽ち豁然たること、平旦の清明なるが如くなるを謂ふ、〔而後能見獨〕獨とは一なり、見獨とは宇宙萬物もと皆な一にして二ならざるを悟ることなり、〔能無古今〕「成疏」に、任造化之日新、隨變化而俱往、不爲物境所遷、故無古今之異とあり、乃ち凡そ物事は何れに移り易はるとも、己は凝滯せずして之と共に移り易りて行くが故に、境遇時代の上に就いて、更に異なりたる感じはなきことを謂ふ、〔能入不死不生〕不死不生とは、自然の境域卽ち造物者と對等の者となることを謂ふ、下句の解を見よ、〔殺生者不死生生者不生〕此の二句は、卽ち上の不死不生の義解なり、「列子」の天瑞篇に有生不死、有化不化、不生者能生生、不化者能化化、生者不能不生、化者不能不化、故常生常化、常生常化者、無時不生、無時不化とあり、言ふこゝろは、天地間に生成する萬物は自から生ずるにあらず、又種々に變化せる萬物の形は自から化するにあらず、乃ち別に生ぜる者がありて能く萬物を生じ、又化せざる者がありて、萬物の變化を自由にするなり、卽ち天地間に生ずる萬物は、能動的に生ずるにあらず、不生のものありて他動的に生ぜしむるなり、萬物の變化するものも亦能動的に變化するにあらず、不化のものに他動的に變化せらるゝなり、此の如きが故に、萬物は常に生じ、常に化して止まずとなり、此れ凡て萬物は造物者（自然）が生じ、造物者が變化せしむると共に、造物者自身は初めより物と爲りて生ぜず、化せず、全く物外に超越して居るとなりと見たる說なるが、莊子の此の意も、亦之と同じくして、造物は死生の外に超越せるが、人も亦能く無古今の地に進むときは、其の德全く造物と同じと說きたるなり、諸注聵々共に語りて詳かならず、今之を省く、〔無不將也〕將は送なり、送迎を將迎と云ふことは「列子」の書にも亦多く有り、此より以下、無不成也に至る四句は、たゞ是れ道の各處に變現するも、皆同一自然の者たることを云ふなり、乃ち道は圓通靈活なるが故に、送ることの

の日新は物境に隨うて移り變はるも、其の實眞理の一貫は時代に因て異ならざるを知りて、古今の別なきに至る、此の見地に進みて後に、始めて能く人生の最大問題たる死生の解決が出來得て、不死不生と申して眞の自然なる聖地に入るなり、不死不生とは如何なる義かと云ふに、由來造物者、卽ち天は萬物死生の度外に立つが故に、生ける物を殺し、或る程度にて生命を奪へるが、左樣なる力あるものは、萬物に隨うて共に死せず、亦萬物を生み作ることがあるが、此れ又萬物と共に生れず、乃ち造化は全く初めより人物の死生に伴うて、消長憂喜を爲すものにあらず、謂はゆる見獨の地位より修行を積めば、此の造化と同一なる聖地に入り進むなり、されば道と申す物の性質たるや、萬殊萬物を送りて、其の終りを見屆けざるはなく、亦萬殊萬物を出で迎へて、其の始めを成就せざるはなし、又一方より云へば、物として道が毀壞せざるはなく、亦物として道が成らざるは無し、卽ち凡て事物の終始成毀、一として道の作用に由らざるはなきなり、是れ物之無所不將の遯而皆存と申すものなるが、聖人は能く之を捕捉して居るが故に、如何に世が移り物が易はるとも驚き動かざるなり、其の義を名づけて攖寧と爲せり、攖寧とは攖は騷動にて、寧は安寧なる義なれば、外部の行爲は動き騷ぎながら、善く物事を成し遂ぐると申す意なり、

【解義】〔南伯子葵〕「釋文」によれば、葵は綦の誤なり、南伯子綦は既に齊物論に見ゆ、〔女偊〕偊は音禹又音矩、一說に是れ婦人なりと、釋文に見えたり、〔卜梁倚〕卜梁は姓にして、倚は音「キ」其の名なり、〔聖人之才〕明敏の才にて聰明なること、〔聖人之道〕虛淡なる德を謂ふ、卽ち下文に陳ずる外物外生より以下の事皆是れなり、〔庶幾其果爲聖人乎〕「成疏」に依れば、庶は慕なり、幾は近なり、果は決なり、乃ち玄道を慕近して、聖人たるを決成すと解せり、「辨正」に依れば、庶幾其果の四字は倒裝法を用ひたるにて、其れ果して聖人たるに庶幾からん乎と、擬度の詞を用ひ、下句の不然の二字にて、又之を黜斥したるものと爲せり、今後說を用ふ、〔吾猶守而告之〕守とは大切に持すること、卽ち敢て遽に告げざることなり、〔而後能外天下〕外とは遺外すること元來心に煩累の多きは、天下盡く累を爲せばなり、今天下を

人に問うて曰ひけるやう、凡そ人は年の長ずるに隨ひ、顔色も變り行くが通常なるに、今貴下の年は長じたるに、其の顔色は若々（ワカ）として孺子の如きは、全體何によりて然るかと、女偊は答へて曰く、其れは吾に於て道を聞きて居るが故なり、南伯子葵折り返へし問うて曰く、さらば自分も道を聞きて學び度存ずるが、果して之を得べきか、女偊は其の大膽なる問ひに驚きし體にて曰く、惡々（アヽ）どうして／＼道を聞くべきことならんや、氣の毒ながら貴所は未だ道を聞く程度の人に非るなり、さて彼の卜梁倚と申す賢人があるが、利發にして聖人の聰明なる才能あれども、德は未熟にして聖人の道德なし、我はまた聖人の道德あれども、聖人の才能なし、因て吾は彼に聖人の道德を教へて、完成の聖人となさんと欲するが、其れ果して彼が我の目的通りに聖人たることを得べきことなるかと少しく不安心なる氣持を感ずるなり、右の如く仲々聖人の道と申すものは、容易に分かるものにあらず、若も左樣なくんば、聖人の道を以て聖人の才ある者に告ぐることにて、既に一方の資格に一方の資格を繼ぎ足すことなれば、亦容易なることなり、然るに吾は其れすら大切に守りて、次第に順序を逐うて之を告ぐるなり、況して貴所の如き才道共に未熟なる人には、仲々易（ヤ）す／＼と申し聞かすべき者にあらず、乃ち吾が彼に道を告げし次第順序を申さんに、殆ど彼が傍に附き切りて手引を爲したる位なり、先づ最初に道の奧義を告げて、三日目に至りて、彼は最も多く心の煩累となる天下と云ふ者を能く遺外して忘れたるなり、彼は已に能く天下を遺外したり、吾は又之を吾が心に守りて、容易に告げず、然るに彼は其れより七日にして、益々德が進みて、始めて能く一切の外物を遺外して忘れたるなり、彼は已に能く一切の外物を遺外したり、吾は又之を守ること九日なりしが、彼が德は益々進みて、外物は愚か、己が一身卽ち我が生れて居ることを遺忘したるなり、彼れ已に我が生を遺忘したり、それから後ちに、始めて能く朝徹とて宛かも夜が忽ち明けて、朝日の光が射（サ）し徹すが如く、忽ち大悟徹底して、智慧の光明は豁然として透達せり、此の朝徹の境遇に達して後に、始めて能く見獨とて絶待無對的なる幽獨玄妙の地位を見屆くることとなり、此の見獨の地位に達して後ちに、始めて能く造化

南伯子葵問乎女偊曰、子之年長矣、而色若孺子、何也、曰、吾聞道矣、南伯子葵曰、道可得學耶、曰、惡惡可、子非其人也、夫卜梁倚有聖人之才、而無聖人之道、我有聖人之道、而無聖人之才、吾欲以敎之、庶幾其果爲聖人乎、不然以聖人之道、告聖人之才、亦易矣、吾猶守而告之、三日而後能外天下、已外天下矣、吾又守之七日而後能外物、已外物矣、吾又守之、九日而後能外生、已外生矣、而後能朝徹、朝徹而後能見獨、見獨而後能無古今、無古今而後能入於不死不生、殺生者不死、生生者不生、其爲物無不將也、無不迎也、無不毀也、無不成也、其名爲攖寧、攖寧也者、攖而後成者也、

【大意】　南伯子葵と女偊の問答を借りて、眞知ある聖人は反りて知るを求めず、自然に任して悉く身世を忘るゝが故に、其の智益々虚明にして、萬事萬物に應じ、圓轉自由なることを言ふ、本文に有聖人之才而無聖人之德と云ひ、又有聖人之德而無聖人之才と云へり、聖人の才は聰敏の才にして外を治むるもの、聖人の德は虚靜にして内を養ふもの、此の二者を兼有して、始めて完全なる聖人たるなり、謂はゆる内聖外王の道卽ち是れなり、然れども此の處は多く聖人の德を主として言ふ、

【通釋】　南伯子葵と云へる人、或る時女偊と云へる

山の神の名なりと、〔以襲崐崙〕襲は入なり、崐崙は山の名、〔馮夷得之〕馮夷は水神の名なり、司馬彪の說に依れば、淸冷傳、馮夷華陰潼鄕隄首里人也、服八石（藥名）得水仙、是爲河伯、一云以八月庚子浴於河溺死と、〔肩吾得之〕肩吾は神の名、道を得て太山に入り、山神と爲ると云ふ、〔以處太山〕太一に泰に作る、山の名、〔以登雲天〕黃帝上天の話は「十八史略」にも見ゆ、〔顓頊得之〕顓頊は黃帝の孫、五帝の一人、〔以處玄宮〕玄は黑なり、五行說に依りて、五色を五方に配すれば、黑は北方の色たり、故に北方の神の居る處を玄宮と曰ふ、禮記の月令にも、其帝顓頊、其神玄冥とあり、亦以て顓頊を以て北帝と爲すは古代の說なりしことを知るべし、〔禺强得之〕成疏に依れば、人面鳥身の神にて、龍に乘りて行く者なり、〔立乎北極〕禺强は水神にて、水は五行說に依れば、北方に位するを以て、其の居る處を北極と號するなり、〔西王母〕「釋文」に「山海經」を引きて曰く、西王母狀如人、狗尾蓬頭、戴勝善嘯、居海水之涯と、又「漢武內傳」を引きて曰く、西王母與上元夫人降、帝（武帝）美容貌、神仙人也、と、〔坐乎少廣〕「成疏」に、

少廣は西極の山の名なりと、司馬彪は穴の名なりと爲す、〔彭祖得之〕彭祖は人の名、逍遙篇に見ゆ、〔下及五伯〕伯は覇と同じ、夏の伯は昆吾、殷の伯は大彭豕韋、周の伯は齊桓晉文、合せて五伯と爲す、又齊桓、宋襄、晉文、秦穆、楚莊の五人を五覇と爲す、〔傅說得之以相武丁奄有天下乘東維騎箕尾而比於列星〕傅說は殷の宰相、武丁は殷の天子なり、乘は駕なり、登なり、跨なり、東維は星の名なり、司馬彪曰く、箕斗（二星）之間、天漢津（俗の銀河）之東維也と、箕は二十八宿の一なり、尾は後方なり、崔云く、傅說死、其精神乘東維、託龍尾（箕尾）乃列星と、成疏に、傅說星精也、而傅說一星在箕尾上、然箕尾則是二十八宿之數、維持東方、故曰乘東維騎箕尾、而與角亢（二星の名各二十八宿の一）等星比並行列、故言比於列星也と、是れもと天に傅說と名づくる星あるを以て、莊子取りて殷相傅說の事に附會して說かれしなり、「天原發微」に曰く、天有傅說星、人有傅說相、天有王良星、人有王良善馭、如此之類、難以偏擧と「宣註」に以上諸神半出荒唐、莊子但取以寓意、不暇論也と、

と申して元氣の根元たる者を和合し、天に在る維斗、卽ち北斗星の道を得て、衆星の綱維と爲り、古代末刼差はず、日や月も道を古代末刼其の光明を息めず、堪坏と申して一種の鬼神は、道を得て崐崙山に入り、馮夷と申す水の神は、道を得て漫々たる大川に游び、肩吾と申す山の神は、道を得て太山に處り、長く其の神と爲り、黃帝と申す古代の帝王は、道を得て高き雲の有る天に上り、顓頊と申す天子は、道を得て北方の神と爲り、玄宮と申す宮殿に居り、禺强と申す神は、道を得て北極に立ち、西王母と申す神は、道を得て西方なる少廣と申す山に坐り込みて、死生聞かざれば終始を知ること無し、彭祖と申す人は、道を得て非常に長命を保ち、上は虞舜の世より、下は春秋の五覇時代に及び、凡そ八百年の長壽を爲し、殷の傅說と申す賢宰相は、道を得て武丁と申す天子を相け、天下を兼ね有ち、終りに其の魂魄は二十八宿中の東維と申す星の宿に乘り、箕の尾に騎りて天上に登り、多くの列れる星宿に比びて、神と爲りて下土を昭臨せり、此の如く、道は實に何にかの根柢樞紐と爲りて、至る處として充滿せざるなし、是れぞ謂はゆる物之所ㇾ不ㇾ得ㇾ遯而皆存」と申す者なるが至人聖人と云はるゝ人は、卽ち善く之を己が心に會得して居る者なり、

【解義】〔狶韋氏〕上古帝王の名なり、「成疏」には、文字以前遠古帝王號也と云へり、〔以挈天地〕挈は提挈なり、「成疏」に、得靈通之道、故能驅馭羣品、提挈二儀(乾坤)とあり、又契に作る、合なり、「成疏」に言能混同萬物、符合二儀者也とあり、前說に依れば靈通の道を得たる結果、天地を持ち運び整頓することを謂ひ、後說に依れば、天地を引き合せて、一團結と爲すとなり、〔伏戲氏〕一に伏羲氏作る、三皇の一人、〔以襲氣母〕氣母は元氣の根本を謂ふ、襲は合なり、陰陽を調べ、元氣を合はすことなり、〔維斗得之〕維斗は、北斗は衆星の綱維たるを以て、維斗と曰ふと「成疏」は說けり、〔終古不忒〕終古とは「トコシナヘ」と訓ず、常久にして以て長く續くを云ふ「楚辭」にも與此終古とあり、「周禮」の考工記に、輪已庳則於馬終古登陁とあり、皆共に常の義に用ふ、忒は差なり、「成疏」に、得至道、故維持天地、歷終始無差忒と云へり、〔堪坏得之〕坏、一に邳に作る、堪坏は司馬彪の說に依れば、人面獸形の神なり、「成疏」に崐崙

以て參考とすべし、〔在太極之先〕太極は成疏に依れば、五氣也とあり、卽ち木火土金水五行の氣を指す、林希逸は、自古未有天地之時、此道已存矣、是曰無極而太極也と解せり、是れ「周易」の繫辭傳に、易有太極、是生兩儀（陰陽）とあるを、宋の周茂叔が解して、無極而太極と云へるに據りて、說を爲せる者なれども、終に牽强附會たるを免れず、宣穎は解して、陰陽未判、是爲太極と爲せり、岡松甕谷は曰く、太猶言太本、其初生天地萬物、必先立之本、是爲太極、所謂兆也、是與易太極自別、且曰在太極之先、則所謂高亦非高低之謂、謂其至高可尊也と、亦一說とすべし、按ずるに、之先の先は上の誤なるべくして、下句に照さば自ら明瞭ならん、〔六極之下〕六極は六合也と「成疏」にあり、一說に六の字は太の字の誤ならんと、

狶韋氏得之、以挈天地、伏戲得之以襲氣母、維斗得之、終古不忒、日月得之、終古不息、堪坏得之、以襲崑崙、馮夷得之、以遊大川、肩吾得之、以處太山、黃帝得之、以登雲天、顓頊得之、以處玄宮、禺强得之、立乎北極、西王母得之、坐乎少廣、莫知其始、莫知其終、彭祖得之、上及有虞、下及五伯、傅說得之、以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾、而比於列星、

【大意】　上文を承けて、殊に道の鬼を神にし帝を神にせる義を申明し、以て謂はゆる物之所不得遯而皆存とは、卽ち道を指して云へることを、不言の中に暗示せり、

【通釋】　昔しの帝王なる狶韋氏は、此の道と云ふ者を得て、天地を挈げ整頓し、伏戲氏は道を得て、氣母

信は爽はざる也、確然と定りて間違ひ無きと、道の天地萬物を主宰して、其往來消長に千變萬化あれども、條理の整然として間違ひなきを謂ふ、又「老子」に、道之爲物、唯恍唯惚、惚兮恍、其中有象、恍兮惚、其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信とあり、乃ち道の情態は、有無恍惚の中に形容す可らざる神聖の物あり、其の迹方は精微にして、或る一貫せる條理ありとなり、莊子の意亦同じ、呂惠卿曰く、耳目得之而視聽、手足得之而運動、豈不有情乎、寒暑得之而往來、萬物得之而生育、豈不有信乎と、乃ち耳目の能く視聽し、手足の能く運動するは、皆もと道の眞君となりて體內に主宰たるもの あればなり、是れ以て、道は活動的情操の有ることを知るべし、又冬寒夏暑幾年を歷るも變ぜず、萬物の生々として成育を遂げて盡きざるは、道の活動や必らず一定の軌道ありて違はず、卽ち信實のあることを知るべしとなり、

〔無爲無形〕無爲とは手を着けざるなり、無形とは方體なきこと、「成疏」に、恬然寂寞無爲也、視之不見無形也とあり、詳道曰く、感而遂通有情也、有情故有信、寂然不動無爲也、無爲故無形、齊物論云可行已信、而不見其形、又曰有情而無形、道其可易耶（齊物論參照）と、

〔可傳而不可受〕受は授と古字通用す、卽ち無形的に道理を傳ふべきも、或る物體の如く、分量的に計りて受くべからざるなり、

〔可得而不可見〕得は會得すること、卽ち獨り心の內に於て會得すべきも、形もなく色も無ければ、目に見留むべからずとなり、「趙註」に曰く、有情有信とは、得て名言すべし、無爲無形とは、得て名言すべからざるなり可傳而不可受とは、有情有信と雖も、其實は受くべき者無し、可得而不可見とは、無爲無形にして、實は見る可き者無ければなりと、

〔自本自根〕本根とは原動力たることにて、卽ち道は自身に凡ての事物の根本と爲りて活動し、更に道の外に又道の根本たる者は無し、畢竟自動自營に歸すとなり、

〔神鬼神帝〕鬼は鬼神なり、下文の湛坏馮夷等は鬼なり、帝は帝王なり、下文の豨韋伏羲等は帝なり、鬼神帝王の神聖たるは、皆道の力なることを謂ふ、

〔生天生地〕「老子」に、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道とあり、又天得一以淸、地得一以寧とあり、皆

義なるが、全體道とは如何なる內容を有するかと云はんに、道は一方の活動的より云へば情思あり、決して死物にあらず、信實あり、決して曖昧ならず、又一方の本體的より云へば、虛靜にして目に留むべき程の爲業無し、物事に固着したる形迹なし、道を人に合點さする上に就いても、以心傳心的に人から人へ相傳へて合點せしむべきも、此より彼へと品物の如く手渡して引き續ぐべからず、道を人に學ぶ上に就いても、確と道は此の如きものなりと、其の模樣を心に會得すべきも、道は此の如き物體なりと、目を以て見るべからず、誠に神變靈妙不可思議なるものにして、其の働きと申せば、道自身に本幹となり、自身に根柢となり、自體自働にして外の物が生むにもあらず、世話するにもあらず、未だ天地あらざる以前疾くの上古よりして、申すまでも無く固く存在せり、道の偉大なる能力、卽ち人で申さば大手腕とも稱すべきことは、道の靈能は鬼神を鬼神と成し上げ、上帝を上帝と成し上げ、天を生み出だし、地を生み出だし、卽ち鬼も帝も天も地も、皆道がありてこそ始めて各其の本位を固め、靈能を發揮するなり、道の位置を尋ぬれば大極の先とて、絕對的至極に尊き位置の先きに在りながら、高く尊しと爲さず、六極の下とて、天地四方の最下なる場處に在りながら深しとはなさず、天地は萬物の父母なるが、道は其の天地に先だちて生れながら、久しと爲さず、上古の昔よりまだ長き期に至れども、道は依然たる道にして、幾何程多く年數を歷ればとて、老年と爲さず、卽ち其の範圍は凡て無形的有形的世界諸物に普遍して、其の位地は遠く之に超越して、世界諸物を引率し維持せるものなり、謂はゆる物所不遯而皆存と申せる者卽ち是れなり、

【解義】〔夫道有情有信〕情はもと人の情思なるを天地萬物の消長生死あるは、道の活動に外ならざること、宛も事の興廢成否のあるは、人の情思より出づるが如くなるより、假りて之を形容して、有情と云へるなり、「老子」に道を論じて、常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼とあり、徼は邊際なり、乃ち事物の常的無心上に就いて、道の妙旨を觀るべく、常的有心上に就いて、道の著はるゝ際目を觀るべしとありて、道なる者は本體を云へば虛無なれども、活動的より云へば有心にして情思ありとなり、莊子の此論亦同じ、

得人身、便生喜悅、藏之安富尊榮之中、狹其所居、厭其所生、若欲充其所喜之量、千變萬化未有極也、爲喜可勝計耶、豈知喜不可常、樂不可極、夜半有力者、來負之而走、可謂之固耶、卽此便是猶有遯處」と按ずるに、此解頗る辭を費すことを覺ゆ、今取らず、姑く一說として揭ぐ、〔將遊於物之所不得遯而皆存〕所の字不得以下の字を管す、是れ藤澤東畡の說、今之を用ゆ、「宣注」は聚人全體造化形有生死而此理已與天地同流、故曰皆存」と云へり、此に依れば、所の字は下の三字を管して、而皆存とは聖人が精神は天地と長く存すと解したるなり、〔萬物之所係云々〕係は屬なり、碧虛曰く、天老始終、處得其善、人猶效之、況運於無形而能形此形者、乃萬物所係、一化所待、善之善者、可不尊之乎、物有萬而化則一、一者此也、と林希逸は曰く萬化所係、一化所待、只是說道と、此の說に依れば、萬物を維持するものなるが故に道と謂ひ、一化とは冥化の一貫して渝らざるを言ふ、而して道ありて始めて能く萬物を維持し、道ありて始めて能く物の變化を全くするが故に、所係と云ひ、所待と云へるなり、或は一化を解して、化を一にすと爲すは非なり、「郭注」に、此玄同萬物而與化爲體、故其爲天下之所宗也、不亦宜乎とあるは、此れ本文を意解したるにて、文辭を釋したるにはあらず、

夫道有情有信、無爲無形、可傳而不可受、可得而不可見、自本自根、未有天地、自古以固存、神鬼神帝、生天生地、在太極之先而不爲高、在六極之下而不爲深、先天地生而不爲久、長於上古而不爲老、

【大意】上文に天の偉大なるは、道と合體なるが故を說き、此に至りて正に道の字を點出詳寫して、謂はゆる大宗師も、亦竟に道の尊稱に過ぎざるの意を言ふ、

【通釋】さて前に述べたる萬物一化の根柢たる道の

爲りて生れたるは、もと宇宙間に於て千變萬化して、或は人と爲りて生れ、又は禽獸となりて生れ、艸木となりて生れ、其の他山岳河海種々雜多なる物となりて最初よりして極度あらざる者なるが、その中にて偶然的に人の形體を禀けて生れ來りしに過ぎず、然るを左様に喜ぶときは、其の樂むべきものは豈に計り數ふるに勝へんや、卽ち千變萬化の物に遇ふ每に樂まざるを得ざるなり、かるが故に聖人は善く物の變化の顚末を推し窮めて、之と共に推移し、凡ての萬物が遯るゝことを得ずして、皆俱に永く存する場處に遊ばんとする、卽ち物の遁引ならぬ要處を捕捉して、物が移り易はれば、聖人も共に移り易はりて、萬化の途を辿り日新の流を逐うて、何等の事物にも衝突せず、何等の境遇にも執着せずして、圓融妙合して窮りなし、今近く例を取りて云はんに、人生僅に百年以內なれば、生命の短長は何れに爲るとも格別の差異なしとて少ければ少きやうに諦らめて自得し、老ゆれば老いたるやうに諦らめて自得し、始なれば始め、終はりなれば終りやうに自得して、申さば諦め早き者ですら、世人は達人なり知命者なりとて、之を師として崇め學び效へり、況して萬物の係りて維持せられ、又一貫せる變化が之ありてこそ、行はると有る謂はゆる道と云ふ者に於てをや、聖人が之を大宗師と仰ぎ尊びて、模範とすることは亦宜ならずや、

【解義】〔特犯人之形〕特は獨なり、犯は範と音相通ず、「淮南子」に範に作る、範は模なり、「カタ」と訓ず、卽ち人と云ふ形ちを範に入れ造らるとの意味にて、天地の氣を受けて人と生るゝこと、〔若人之形者萬化而未始有極也〕林西仲曰く、禀人之形者、亦偶然耳、如人之形、若胎(生)卵(生)濕(生)化(生)能飛(禽)走(獸)者、正復變化無窮、何所往而不可、何所往而不樂哉、此形雖變而眞者未嘗變、所以遊と、「郭注」には曰く、人形乃是萬化之一遇耳、未足獨喜也、無極之中、所遇者皆若人耳、豈特人形可喜、而餘物無樂邪と、卽ち天地間に在りて萬形中の一形なるのみ、故に人に生るればとて、獨り喜ぶに足らず、萬形變化の極りなき多くの物に於ては、皆各々自分程仕合せ宜しと思うて樂むこと、人の如し、されば獨り人形なる故に喜ぶべく、餘物なるが故に樂まずと云ふこと無しとなり、副墨は曰く、今人但謂形可永固、一

ることを謂ふ、〔猶有所遯〕遯は其の場を離れて外方へ拔け去ることにて、「成疏」には變化也とあり、〔若夫藏天下於天下〕若夫とは此より彼を指して云へる辭、卽ち上文に舟壑山澤の陰然轉移する事を擧げて、有形の者は終に變遷あるを免れざることを言へば、此にて一轉指示して其の然らざるものあるを云へるなり、凡そ天下の事を藏さずして公共にすることを、上文の藏舟藏山の藏を承けて藏天下と云はれたるなり、「宣註」に、若悟天下之理非我所得私、而因而付之天下とあり、乃ち廣く世界の人と此の世界の事を共にし、我意我見を張らずして、各々其の宜きに從ふことにて、齊物論に云へる因是の義なり、〔而不得所遯〕元來物の遯るゝは、固く藏めし反動より來るなり、初より藏めざる物は遯るゝことも有ることなし、故に天下を突き放して、天下の中に突き放して其の行き次第に任かすときは、矢張り同じ天下の中に在りて、此を踰えて外に行くべき氣遣はなしとなり、陳碧虛曰く、若藏天下於天下、則上下四方、古往今來、須臾不能離、又安得而遯哉と、〔是恒物之大情也〕恒物は常物なり、大情とは普通の情と云ふが如し、乃ち以上の如きは、物の道理の實際的なりとの意なり、

特犯人之形而猶喜之、若人之形者、萬化而未始有極也、其爲樂可勝計邪、故聖人將遊於物之所不得遯而皆存、善夭善老、善始善終、人猶效之、又況萬物之所係、而一化之所待乎、

【大意】上の藏天下於天下而不得遯の意を承けて、大宗師たる眞の道を知る聖人は、人形を承けて人と生るゝも、別に之が爲めに其の心を牽かさるゝこと無くして、物の不得遯の處に游び、自然と一致することを言ふ、宣穎曰く、以上凡數段譬喩、層々剝換、有樹花爭發、春水亂流之勢、文家勝境と、

【通釋】今夫れ通常の人は、獨り人の形體を稟けて生れたる位にても、猶ほ且つ之を喜ぶことなるが、全體から云へば、人の形體の如きもの、卽ち吾人が人と

らぬやうに爲し仕舞ふことなり、然るに智の昧き者は、之を知らずして、堅固なる處に藏め置くときは、大丈夫にして間違なしと思へるは謬れり、さて此の如く小なる舟は小なる海壑の中に藏め、大なる山は大なる水澤の中に藏め、藏むべき器、物品相應なる容器を見立てゝ、固く藏めてさへも、物は外に拔け出でゝ、決して一と所に藏まりて居らず、況してや容器と物品と不相應なるものにては、到底藏まらざるなり、然るに此の舟や山位のことは愚かなり、此の廣大なる天下を、同じく廣大なる天下てふ容器の中に藏むるときは、最早や何邊へ至るとも、矢張り同じき天下の中なれば、物が拔け出でようとするとも、行き先きの無きこととなれば、終に拔け出づることを得ず、是れ平常なる物の大體の眞情にして、洵に正直正眞の儘にて飾り氣なき話なり、

【解義】〔藏舟於壑〕壑はもと「タニ」と訓ずれども、此にては大壑の意味に用ゆ、「增韻」に大壑は海也とあり、又海壑などの熟語あり、卽ち「ウミ」と轉訓す、〔藏山於澤〕澤は大澤なり、此れ澤中に在る山を謂ふ、王先謙は島也と注せり、「林注」に、舟取其浮而能移、山取其止而不動とあり、卽ち動的の物は舟を擧げて言ひ、靜的の物は山を擧げて言ひ、以て動靜兩面より觀察して說きたりと爲せり、藤澤東畡は、藏舟は人なり、藏山は天なり、此れ人力天然共に大化の冥運默移の數を免るゝを得ざるを言ふと解せり、〔夜半有力者云云〕夜半は熟眠の時刻なるを以て、此には借りて人の不見不識の間と云ふ義に用ひたるなり、有力者とは造化を指して謂ふ、負は負擔すること、此れ大化の運行する窮り無く、天地萬物を擧げて日夜推移し、故を舍て新に卽き、共に少しくも止息せず、故に舟は水背に負はれて立てども、水の推移するに隨うて推移し、山は大氣に負はれて峙てども、大氣の運轉に隨うて共に運轉することを、人物の活動するに見立てゝ、此の如くに云へるなり、〔昧者不知〕昧は「クラキ」と訓ず、造化の冥々の中に默運するを知らずして藏せしめ、舟山が矢張り元の場處に在りと思ふが故に、昧者と云へるなり、不知とは自から固しと謂へる舟山の、造化の運轉に隨うて移り易り、終に消滅に歸することを知らざるなり、〔藏小大有宜〕藏の方は大物小物と無く、倶に其の宜きに叶へ

湖、人相忘於道術の語に徵すれば、道の字は重看して、道卽ち自然と解するに如かず、〔夫大塊載我〕大塊の解は已に齊物論に見ゆ、もと大地を謂ふ、此にては自然を指せるなり、載は乘載なり、我とは汎く世人を謂ふ、今の吾人と云ふが如し、載我とは吾人もと虛無なれば、生も無く老も無く、死も無し、唯形體てふ者が有るに由りて、隨うて生老死の變化あり、而して本來吾人は虛無なるを、自然が吾人てふものを構造せるによりて形體あり、因りて生老死の累ひあるなりと、下句此に倣うて解すべし、褚伯秀曰く、載我以形、猶云以形載我、百骸具而神乘之、蓋不得不載也、勞我以生者、起居飮食、痛痒寒温、皆所以役我、蓋不得不勞也、佚我以老者、血氣旣衰、形體日耄、志慮日消、蓋不得不佚也、息我以死者、氣竭神逝、四大各離、偃然寢於巨室、蓋不得不息也と、

夫藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者負之而走、昧者不知也、藏小大有宜、猶有所遯、若夫藏天下於天下、而不得所遯、是恒物之大情也、

【大意】此れ上文の不如兩忘の義を承けて、自然の事は敢て人智を弄びて騷ぎ立てずして、一切自然に打ち任かすことの得策なることを言ふ、唐人の詩に曰く、罷釣歸來不繫船、江村月落正堪眠、縱令一夜風吹去、只在蘆花淺水邊と、卽ち行く處に放任して置くときは、自然に止まりて、他處へは敢て往かざるものなりと、亦此文の意義を解する注脚となすべし、

【通釋】事物を忘れて自然に任かすことは、大悟達觀して、凡て萬物を一體と爲すの大公無私の心なくんばある可からず、彼の舟を海壑の中に藏め、山を水澤の中に藏むるものは、誠に要心宜しき處に藏めたれば、自分に於ては、之を堅固にして大安心と謂へるに、夜半人物靜まりし時、有力の者は何時か人知れざる內に、其の舟なり山なりを負うて逃れ去ることあり、卽ち自然てふものは、如何に固く仕舞ひ置けるものと雖も、何時かに之を移し易へて、行き方の分

されど此の道を得ずとすれば、一切の事を擧げて、悉く忘るゝに如かず、譬へば、今や泉の水が涸れ盡くれば、忽ち今まで水なりし處が陸となりて、水中に住みし魚は干潟に集り、互に向ひ口より水濕を出して濕し合ひ、又互に沫を吐きて濕ほし合うて、如何にも親密に援け合ふとも、到底一時の窮策に過ぎずして、死するより外はなし、故に魚としては、舊來の如く漫々たる江湖の中に在り、互に打忘れて、見ず知らずの他人行儀たる境遇の安心なるに如かざるべし、人間も同じ道理にて、其の堯の聖帝たるを譽め、桀の惡王たるを毀りて、紛々と是非の論を闘はさんよりは、寧ろ善惡正邪の兩樣共に打ち忘れて、自然の道に移り易はりて仕舞ひ、何事をも天命に任かすに如かず、全體を云へば、彼の大塊即ち天地は、此の吾人を載するに形體を以てし、即ち形體てふ車に吾人てふ荷物を積み込み、吾人に苦勞を掛けるに、此の世に出生するてふ大役を以てし、吾人を安佚せしむるに、老年てふ閑暇日を以てし、吾人を休息せしむるに、死亡てふ安息日を以てせり、されば吾人が生時を善く大切にすることは、やがて吾人が死時を善く大切にする理由となるなり、即ち吾人は形體を具へて人世に誕生すると共に、苦勞するを始め、老年に至りて始めて閑暇を得死して後に始めて休息が出來得るなり、實に人間程割りの惡きものはなし、されば生存の時に純ら自然に任かして置けば、死亡の時も亦諦めが早く付きて安らかなることなり、

【解義】〔相呴以濕〕呴は氣以溫之也と「韻會」にあり、「マタ、ム」と訓ず、即ち氣息を吹て惱を助けんと溫むること、〔相濡以沫〕濡は音「ジユ」、濡と同じ、霑濕なり、沫は水沫の沫なれども、此にては涎沫なり乃ち口中より出づる「アブク」なり、按ずるに泉涸云々の四句、又本書の天運にも見ゆ、〔與其譽堯〕其の字は汎く世人を指して云ふ、〔不如兩忘而化其道〕此の道の字は輕く看るべし、即ち是非の道を謂ふ、大意は堯を譽め桀を非ることは兩ながら其の道を忘れて譽めず非らざるに如かず、生を好み死を惡むことは、兩ながら其の煩累を忘れて、好まず惡まざるに如かずと云へるなり、此の與其譽堯の二語、又本書の外物篇に見ゆ、但「化其道」の三字を彼に「閉其所譽」に作る、以上は宣穎の説に依れるが、今下文に魚相忘於江

く、死生與夜旦等、皆由天命、不可更以人與此物之實、無足係戀也と、〔彼特以天爲父〕特は單なり、全く深き意味あるにあらず、此のみと、下に擧ぐる事を輕視して云ふ辭なり、以天爲父は「宣註」に曰く、倒裝句法、言人以父生我、而戴之爲天也と、此の說に依るときは、もと以父爲天と云ふべきを、故らに顚倒せる辭を用ひたるなり、「郭註」には、本句より而況其卓者乎を解して、卓者獨化之謂也、夫相因之功、莫若獨化之至、故人之所因者天也、天之所生者獨化也人皆以天爲父、故晝夜之變、寒暑之節、猶不敢惡、隨天安之、況乎卓爾獨化、至於玄冥之境、又安得而不任之哉、既任之、則死生變化、惟命之從也と云へり、此れ其の意は、人と天とは或る意味より云へば相因的にして、人は天に因りて生れ、天は人に因りて尊きも、晝夜寒暑の變化に對しては、遂に不可抗力と諦らめて服從するに、況して至道は絕對的の尊位にして、天地を生成し陰陽を開闔するものなれば、人たる者、何ぞ拒で順はざるを得んやとの意なり、今按ずるに、卓は超越の謂にして、此に特以天爲父とあるは、下文の人特以有君爲愈云云の義と對比し、人間の君臣父子の關係に比較して、其の天の道の更に之より重大なることを云へるなり、藤澤東畡は天と父の字は、當に位を易へて、人以父爲天に作るべしと云へり、是の說用ふべし、但參考の爲めに、郭宣の二說を揭ぐ、

泉涸魚相與處於陸、相呴以濕、相濡以沫、不如相忘於江湖、與其譽堯而非桀也、不如兩忘而化其道、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死、故善吾生者、乃所以善吾死也、

【大意】此れ凡俗の見に拘りて、是非の別を立つるよりは、渾然として塵慮を一掃し、死生の大關をも悉く忘れ、以て虛無の本眞に歸るに如かざることを言ふ、

【通釋】道の大宗師として卓且眞なること此の如し

あることなれども、明確に之を論究して、其の虛無大本に溯り、空寂の結果に歸着せしめ、天と人とをして倶に優劣勝敗なく、渾然として同一の物たらしむるが是れ眞人と謂ふべしとなり、

死生命也、其有夜旦之常天也、人之有所不得與、皆物之情也、彼特以天爲父、而身猶愛之、而況其卓乎、人特以有君爲愈乎己、而身猶死之、而況其眞乎、

【大意】 既に前節に於て、好惡の見を破り、天人分岐の非なることを云へり、此節又死生の最疑團を點破し、天の字を推出して、人力の一毫も得て參する所に非ることを提說せるなり、（據宣穎經解）

【通釋】 天と人と相勝たざらしむるが眞人の眞人たる所以なるが、尙ほ又、人の最も心を動し苦惱せる死生の事に就いて云はんに、人の死し生ることとは、もと定りたる命數なり、宛かも夜が來れば乍ち暗く、旦が來れば乍ち明かなるが如く、本と自然の規則にして、卽ち人は生あれば必ず死あるものなり、而して人は如何なる智力、如何なる富貴を以てすと雖も、此の循環して來れる死生の間に向うては、何等參與して手の着け樣なきことは、此れ皆物の實情眞理にして、元より諦むるより外なき次等なり、故に生を戀ふに足らざると共に、死を悲むに及ばざることなり、彼れ人は格別に深き意味あるにあらず、たゞ特に天を以て父と視做し、卽ち父が己を生ぜしを以て、之を天と崇め敬ふと云ふ位なる單純なる心を以てすら、己が身に於て父を愛することとなるが、而るを況して其の更に卓く越えたる大宗師と崇むべき道に於ては、彼の之を愛すること如何許ぞや、寔に言語に形容する限りにあらず、

【解義】 〔夜旦之常〕 夜旦は晝夜と大略相同じ、常は恆久なり、此にては晝は明かに、夜は暗きことは、一定して變せざるを謂ふ、〔人之有所不得與〕 人とは汎く人の智力を指して云ふ、與は預と同じ、參預すること、〔皆物之情也〕 物は萬物を指す、情は實情なり物之情とは物の持ち前の道理と云ふこと、王先謙曰

至人にして、天と共に同類となり、其の事は異にして一ならずと看る者は、卽ち凡人常人にして、人と共に同類となるものなり、此の如く天と徒となり、人と徒となりて相分るゝとも、之を自然の成行に打ち任かして、天と人と各々其れ〴〵に循ひて行ひ、天が人に勝つとか、人が天に勝つとか云ふ如き有樣に立ち至らしめず、卽ち此の天人共に虛無の道より出づることを悟りて、各々因是の行を爲すもの、是れぞ之を眞人と申すべけれ、

【解義】〔故其好之云云〕「林註」に曰く、此言刑禮知德皆眞也、故復明好與不好冥爲一致と、乃ち人の好不好あれども、其の本は皆同じく自然に出でゝ一なることを明かにして、前文に云へる刑禮知德は有形的に屬すれども、亦自然無爲の道と畢竟一致たることを示したりとなり、好は愛好なり、好之の之は汎く好む物を指して云ふ、一とは同一なることとなり、〔其弗好之云云〕弗好とは憎惡することとなり、「郭註」に、常無心而順彼、（汎く物を指す）故好與不好、所善所惡、與彼無二也とあり、乃ち至人は常に物我の觀念無くして、物の美惡を忘れ、愛憎の情起らざれば彼の好と不好との事は凡情にあれども、聖智虛融なる至人より觀れば、皆同一にして異なること無しとなり、〔其一也一云云〕「成疏」に其一聖智也、其不一凡情也、凡聖不二、故不一皆一之とあり、乃ち其の好と不好とを以て一と爲すものは、聖智の人なり、凡庸の人は物我の觀念に囚はれて徒に自他の跡に泥みて、美惡好惡決して一ならず、然れども聖智凡庸、もと均しく虛無より現出して虛無に歸る者にして、大道の根本に達觀すれば、皆同じく一なる者なるを以て、至人は之を同一視すとなり、〔與天爲徒〕徒は類なり、「成疏」に、同天人齊萬致與天爲類とあり、乃ち至人は天人を同一とし、萬物の歸致を均齊にして、皆平等一視すれば、萬有の大本たる自然と同類仲間と爲るなり、〔與人爲徒〕「成疏」に、彼彼而我我、與人而爲徒也とあり、乃ち凡人は彼我の見解に拘り自他區別の念强ければ、人と同類たるとなり、〔天與人不相勝〕「成疏」に、雖天無彼我人有是非、確然論之、咸歸空寂、若使天勝人劣、豈謂齊乎、此又混一天人、冥同勝負、體此趣者、可謂眞人とあり、乃ち天より觀れば彼我の別なきに、人より觀れば是非の爭

儒道の二家共に一なること、此文に就きても知るべし、彼の後世西晉竹林七賢人の徒、禮豈爲我設者哉と放言して、忌憚なき行を爲す者は、亦老莊の眞意を悟れるものにあらず、〔不得已於事也〕陸樹芝曰く、時至而事起、若不得已而應之、非有心於審時と、乃ち受動的に物事が眼前に湧き起り、詮方なく之に應じて、相當なる行動を取ることにて、豫期的に待ち構へて爲すにあらずとなり、〔言其與有足者云云〕其は德を行へる狀を指して云ふ、足の字の上に如の字を加へて看るべし、邱は岸なり、卽ち其の道理に叶ふに至ることは、有足者が道路に循うて進みて邱に至るが如く、自然的にして差錯なきを謂へる也、郭嵩燾曰く、孔安國云、九州之志、謂之九丘、莊子則陽篇亦云、丘里之言、是凡所居曰丘と、此の說に依れば、丘は必ずしも高地のみにあらず、凡そ人の居住すべき場所の通稱なり、

故其好之也一、其弗好之也一、其一也一、其不一也一、其一與天爲徒、其不一與人爲徒、天與人不相勝也、是之謂眞人、

【大意】 前節に刑禮知德に就いて云々せるを以て、此節は道の本來もと虛無なると同時に、刑禮知德の四者も共に皆眞理の實現に屬し、本來は道と同歸なることを說き、以て謂はゆる眞人有眞知とは、能く此の道理を知れるものなることを言へり、宣穎曰く、世俗之知、謂天人二者也、眞人之眞知、謂天人一者也、天與人不相勝、而欲以所知養所不知、是人足以勝天乎、此句將眞人眞知收盡起處天人之說と、

【通釋】 刑禮德智の四者は、道の大本より觀るときは、亦何れも虛無より出でて、各現象を呈出し、復た虛無に還元するものなり、今之を愛好憎惡の一例に就いて云はんに、人が或る一物を憎みて好まざるも、其の本は愛好する物と同じ一つの者にして、虛無なりしなり、然しながら、其の本は一なりと悟る者も自然の道理なり、亦同一ならずと看る者も自然の道理なり、但其の事は同じく一なりと悟る者は、卽ち聖人

言ふ、大略前節と同じ、

【通釋】 尙ほ至人の虛心にして私無きことを言はんに、彼は刑罰を以て政を爲す本體となし、禮義を以て仁德を行ふ羽翼となし、知識を以て時に應ずる働となし、道德を以て人の由り循ふべきものとなせり、さて、刑罰を本體となすとは、人を殺すとも、卽ち定まりたる法律が之を殺すことにして、己れ自からが手を下して殺すにあらざれば、綽乎と寬として之を殺すことなり、禮義を以て羽翼となすとは、單に無形的仁心に止らずして、着々として實地に發現し、世間に仁德が行はれ擴まる所以なり、知識を以て時に應ずるとは、物事に向うて、是非共に爲さゞるを得ざる次第に因りて爲すことにて、決して我意を振ひ出で張ることをせざるなり、道德を以て人の由り循ふべきものと爲すとは、別に構へて道德を行ふなど云ふ考へを持たずして、自然に行ふことが道德に叶ひて、宛かも足ある者と共に歩みながら、何時となく高き丘に至ると同じきことにて、卽ち決して故意的に出でずして、自然的に行はるるなれども、他人は眞に以て彼の至人は之を勤め行へる者と爲すことなり、

【解義】〔以刑爲體〕刑は刑罰なり、體は本體なり、「宣註」の乃立治之楨幹とあり、〔以禮爲翼〕翼は羽翼也、乃ち鳥の羽翼ありて飛翔を獲るが如く、禮に依りて道の行はるゝを謂ふ、〔以知爲時〕知は智と同じ、爲時とは時宜を察する也、〔以德爲循〕循は順なり、「郭註」に德者自彼所循、非我作とあり、乃ち凡そ事を爲すには、人々通有的道德の命ずる所に循うて行ひ、決して己一人の勝手に任かして爲さずとなり、本文の以刑爲體より本句に至るまで、其の事を略標し、下文逐層之を解釋せしものなれば、下文を觀れば其の義自から明かなるべし、〔綽乎其殺也〕以下卽ち逐層の解釋なり、綽乎は寬裕なる貌、殺は殺戮なり、殺と不殺と、一切法律に由りて決行し、而かも己は其の間に意見を挿まざるが故に、自然に綽として寬裕なるなり、「辨正」に殺止一切如法、不動則有餘閑、故寬裕と、又云く此句就不與以己言と、〔所以行於世也〕禮は道の中庸を行動的に實現したる者なれば、「周易」にも禮履也とあり、卽ち實際的に履行すべき道德律なり、故に「論語」にも、知和而和、不以禮節之、亦不行とありて、禮の道德を輔翼する具たるは、

樣は、喜ぶが如くに見ゆるが故に、似喜と云へるなり、〔崔乎其不得已乎〕崔は動く貌、至人は受動的に物に因りて應じ、決して自動的に唱へ出ださざるが故に、之を形容して云へるなり、〔滀乎進我色也〕滀は聚なり、水聚るときは光澤あり、故に其の顏色の光澤を增して、人の愛嬌を博するに足るを形容して云へるなり、〔與乎止我德也〕與は容與の意、卽ち寬やかか閒やかなる模樣なり、止とは靜かに落ち就くこと、乃ち種々なる動機に因りて、世間の物事に接觸するも、妄に騷き動かざれば、容與として靜かに見ゆること、〔厲乎其似世乎〕厲は危き貌、世は世人の世と同義にして、乃ち危き場合に立つことが、世間竝の人と異ならずと、是れ亦其の實至人と同じからざれども、其の禍福を天命に任かして、安危を擇はざるより彼の孔子が匡人に苦しめられ、文王が羑里に拘はれしが如く、其の危かりしことは、常人に似たることを云ふ、以上は「郭注」「成疏」等の說なり、郭慶藩は崔本を引きて、厲を廣の誤と爲し、俞樾の說に依りて、世を泰の假借と爲せり、此の說に依れば、泰を驕泰の義に解して、至人の氣の高き態度が、一面より觀れば廣大にして驕泰なるに似たりと云へるなり、〔謷乎其未可制也〕謷は高遠なる貌、成疏に謷然高遠、超於世表、不可禁制とあり、〔連乎其似好閉也〕連は連綿として長き貌、似閉とは「成疏」に「郭注」に依れば、遠く深くして其の門口を見ざる如く、卽ち奧床しきこと、「成疏」に依れば、靜默なること宛かも門を閉づるが如く、何事をも聞かず見ざるなり、宣本は閉を閑に作り、連綿優閑不迫とあり、此れ別說なれども錄して一說に備ふ、

以刑爲體、以禮爲翼、以知爲時、以德爲循、以刑爲體者、綽乎其殺也、以禮爲翼者、所以行於世也、以知爲時者、不得已於事也、以德爲循者、言其與有足者至於丘也、而人眞以爲勤行者也、

【大意】上文を承けて、虛無因應の窮り無きことを

卽ち廣やかに大まかなる中に、實際的偉き處があるなり、邴邴乎と和らぎ樂みて、其れ喜べるに似て居るが、眞に喜ぶばかりで居るにはあらず、崔乎と心が如何にも高大にして、其れ物事が來り迫るに因て、已むを得ず應じて仕事を爲すなり、滀乎と如何にも水々しくして、己が顏色を日に增して美麗に進むなり、與乎と容與として、己が德を外に濫用せずして、內に落ち付くるなり、廣乎と凡そ何事何物を問はず悉く包括し、如何にも大いなるに似たり、謷乎と高遠にして、世に超越して他より禁制すべからず、連乎と連り長くして、其れ門口を閉つることを好むが如く、何れよりも乘ずべき隙間を見出すこと能はず、卽ち終始沈默して言はざるにはあらざれども、敢て贅言冗語を吐きて、人に揚げ足を取らるゝ樣なること無きなり、悗乎と無心の有樣にて、其の言ふことを忘れて仕舞ひ、卽ち其の心に何等の不平も又何の考へも持たざるなり、

【解義】〔義而不朋〕以下極めて眞人の無心なる行爲を形容して云へるなり、義は宜なり、物に接するに各々之に相應したる道を以てすれども、決して一部に偏倚せざること、卽ち愛憎好惡を以て人に交らず、一に正義に依りて接するを謂ふ、〔與乎其觚而不堅也〕與乎は容與自得なり、觚は獨なり、堅は固なり、「郭注」には常游於獨而非固守とあり、卽ち其の心は容與自得し、高尙獨絕の聖域に逍徉して樂めども、身の行動は其の境遇に伴ひ推移變化して、頑固に一道を守らざることを謂ふ、李楨は與乎の與は、下句に與乎止我德也とありて重複すれば、疑らくは趣の字の借ならん、趣は「說文」に安行也とありと云ひ、兪樾は觚は養生主篇に技經肯綮之未嘗而況大軱乎とある軱と同字にして、卽ち骨の槃結を軱と謂へば、至堅の義に用ひたるなりと云へり、此の李、兪の說に依れば、本句を趣乎其軱而不堅也と讀みて、安らかにして行ふことは至堅なれども、頑固ならずと看たるなり、〔張乎其虛不華也〕張は廣大なる貌、虛は淸虛なること、華は浮華なり、卽ち廣大にして心は淸虛なれども、行動堅實にして、虛榮を爲さざることを謂ふ、〔邴々乎其似喜乎〕邴々は喜ぶ貌、上文に故樂通物非聖人也とあるが如く、至人の心はもと虛無にして喜びに固着することは無きも、其の暢然和通せる樣

れども受けず、自から石を負うて、盧水（川の名）に沈めりと、〔伯夷叔齊〕孤竹君の二子、兄を伯夷と云ひ弟を叔齊と云ふ、其の事蹟は人の知る所なれば略す、〔箕子〕殷の王族、紂の無道なるを諫むれども用ひられず、佯狂して奴となれり、〔胥餘〕或は曰く箕子の名なり、或は曰く比干の名なりと、比干は殷の紂王の忠臣、紂を諫めて殺さる、又曰く伍子胥なりと、子胥名は員、呉王夫差を諫めて殺され、夫差其の屍を江に沈めし事、史記及び十八史略に見ゆ、〔紀他申徒狄〕紀は姓、名は他、殷の湯王の時の人、湯の天下を務光に譲らんとするを聞き、其の逐に己に及ばんことを恐れ、弟子を將て窾水（川の名）に陥りて死す、申徒狄も亦同時の人なり、之を聞き、因て自から河に沈む、〔是役人之役云々〕「成疏」に此數子者、皆矯情僞行、亢志立名、分外波蕩、遂至於此、自餓自沈、促齡天命、而芳名令譽、傳諸史籍、斯乃被他驅使、何能役人、悅樂衆人之耳目、焉能自適其情性耶と、

古之眞人、其狀義而不朋、若不足而不承、與乎其觚而不堅也、張乎其虛而不華也、邴邴乎其似喜乎、崔乎其不得已乎、滀乎進我色也、與乎止我德也、厲乎其似世乎、謷乎其未可制也、連乎其似好閉也、悗乎忘其言也、

【大意】此れ眞人に就いての第四解なり、卽ち眞知あれば、能く其の智の知る所を以て、其の知らざる所を養ふことを言ふ、

【通釋】古への眞人は、其の行狀を言へば、物事に接するに唯だ義理の宜きに從ふのみにして、決して或る一人若くは一部の人に偏頗し朋黨をせず、又常に謙遜して、自から不滿足なるが如くなるも、決して卑屈なる態度を以て、人の心を承け順うて媚び諛ふことをせず、與乎と裕たやかにして、其の觚とて方正なるも、決して頑堅にして不融通なるにあらず、張乎と廣大にして、其れ虛空にして何等の野心なきも、決して外面のみが華やかに偉さうに見ゆるにはあらず、

共に、眞人が物を殺すは、殺意ありて爲すにあらずとて、秋の萬物を枯らすに喩へ、物を生ずるは仁愛を爲さんとにはあらざるを春に喩へて云へることを説かれたるなり、〔喜怒通四時〕「宣注」に喜怒皆無心、如四時之運とあり、卽ち喜ぶも怒るも、共に自然の動にして、故意的に爲さゞること、宛かも四季の運行に寒暖冷熱あると同じとなり、〔與物有宜云云〕事物に隨ひ各々其宜に合ひて、其の際限を窺ふ無きことを謂ふ〔不爲愛人〕爲とは人爲的に行へること、「宣註」に、由仁義行、非行仁義也と云へり、乃ち自然之道理に由りて行へる結果、萬世に及んで利澤と爲るものにて、最初より故意的に人を愛せんとして、利澤を行へるにあらずとなり、岡松甕谷は曰く、謂不自以爲愛人也と、此の説に依れば、爲は謂の字と義同じ、自己より以て人を愛すと謂はずとなり、「宣註」に以聖人治世之無心、明眞人之無心、用兵句、是自然之義、利澤句、是自然之仁と、〔故樂通物〕樂の字是れ病根たり、聖人と雖も、物と通ぜざるに非ず但無心なるのみ、無心なるときは、何ぞ樂むことあらん、凡人の如く或る一事一物を心に固く留めて、快樂となさず、卽ち恬淡無欲なること、〔有親非仁〕聖人は萬物一體にして、物を通ずるに意あるにあらず、至極の仁は平等一樣に恩愛を施すが故に、獨り或る者に限りて親厚を加ふることを爲さず、故に樂通物非聖人、至仁無恩と云へるなり、〔天時非賢〕天時は天運を謂ふ、聖人の事を爲す、固より天時を度外にするには非れども、只管天時のみに注意して、利害上より打算して事を爲すは、既に賢に非ずとなり、陸樹芝曰く、審時觀機、已屬任智、故非賢と、〔利害不通〕不通とは通じて一と爲さずして、必らず利に趨り害を避くることを爲すなり、〔亡身不眞〕亡身は己が身命を失ひ棄つること、不眞とは眞性より出でざること、乃ち事の爲めに我が眞の生命を棄つるも、全く一時的憤激に出でて、我が眞性よりするに非ざるときは、人に使役せらるゝも、人を使役するに足らず、卽ち畢竟人下たるものにして、人上たるものに非ずとなり、〔狐不偕〕狐は性、不偕は名なり、堯の時の賢人、堯其の天下を讓らんとすれども受けず、河に投じて死せり、〔務光〕黃帝の時の人、或は曰く、夏の桀王の時の隱君子にして、殷の湯王天下を以て讓

されながら心服するなり、其の代りに、聖人が人民を救ひて、利益恩澤が一代二代は愚か萬世の後までに施き及ぶとも、彼は別に偏りて人民を愛すると云ふ樣なることを爲さゞるが故に、人民も一面より觀て、冷淡不熱の感ありて、己を慈愛すとなさず、要するに聖人は自然に循うて動止するに過ぎざるが故に、多くの物に通じて行き亙ることを願ふは、眞の聖人にあらず、一方の人を偏りて親むこと有るは、眞の仁德にあらず、天の時卽ち時運の運り合ひを篤と視察して事を爲すと云ふことは、道理によりて動くにあらずして、畢竟利害成敗を打算して起つものなるが故に、有德なる眞人にあらず、利益と損害とを通じて一視せずして、徒に成敗得失に汲々たるものは、眞の道を知る君子にあらず、己が名譽を釣るを基礎として物事を行ひ、自己の本領を失却して徒に名譽の奴隷となるものは、眞の賢士にあらず、徒に己が身を沒却して、天より受け得たる眞性を失へるものは、畢竟自己が世人を使役するにあらずして、世人に自己が使役せらるゝことにて、實に耻づ可く憫む可きものなり、彼の古しへの狐不偕、務光、伯夷、叔齊、箕子、胥餘紀他、申徒狄と云へる人々は、如何にも名高き豪傑なれ共、畢竟前に述べし聖人仁賢君子等の所爲と相反し、是れ徒に人の使役となりて働き、人の快樂の具となりて弄ばれ、而かも己自から己が快樂を快樂として送らざる者にて、實に憐れむべく氣の毒なる者也、

【解義】〔其心志〕志は字書に志心所之とあり、郭嵩燾は曰く、商書若射之有志、孔疏云、如射之有志、志之所主、欲得中也、佛書、性相如如、常住不遷、卽此所謂其心志也と、此の說に依れば、志とは意志の志にして、心の向き方の强固なることを云へる義なり、「成疏」に曰く、若如以前不捐道等心、是心懷志力、而能致然也、故老經（老子）云、强仁者有志と、「宣注」は志は忘の字の誤なりと云へり、王先謙の集解は之に從へり、〔其顙頯〕顙は額なり、「ヒタヒ」と訓ず、頯は音「塊」大朴の貌とありて、心に憂なく氣が暢然たる故に、面に愁眉を呈し、顰蹙等を爲さずして、額も廣やかに平らかなること、瑞相なり、〔凄然似秋〕凄は「スサマジ」と訓ず、「詩經」に秋日凄凄とあるを毛傳には涼風也とあり、〔煖然似春〕「郭注」に、殺物非爲威、生物非爲仁とあり、卽ち上の凄然似秋と

にして、虛無の道を捐棄せず、妄に事を爲さゞる故に人の智力を恃みて、自然の活動を左右することを爲さずとなり、

若然者、其心志、其容寂、其顙頯、凄然似秋、煖然似春、喜怒通四時、與物有宜、而莫知其極、故聖人之用兵也、亡國而不失人心、利澤施乎萬世、不爲愛人、故樂通物、非聖人也、有親非仁也、天時非賢也、利害不通、非君子也、行名失己、非士也、亡身不眞、非役人也、若狐不偕、務光、伯夷、叔齊、箕子、胥餘、紀他、申徒狄、是役人之役、適人之適、而不自適其適者也、

【大意】上文を承けて眞人の物事に對して、一切無心なることを言ふ、

【通釋】此の如き者卽ち眞人は、其の心は志の通りにて露聊かも壓抑を爲さず、信に天眞爛漫たる者なり、其の容貌は寂然として、極めて落ち付きて靜かなり、其の顙は頯として、廣やかに舒び〳〵として瑞相を露はし、又其の氣象は凄然とすさまじくして、秋氣の哀れ寒きに似たり、亦時によりては煖然とあたゝかにして、春候の溫和なるに似たり、或は喜び或は怒ることがあるが、四時の氣候の暖熱冷寒の變化あると通じて同一理にて、自然に生じ自然に移り易はることにて、何等の私意私情を挾むなく、喜ぶべき物に逢へば喜び、怒るべきに逢へば怒るに過ぎず、萬物萬事と共に宜きに叶うて、其の極度を知らず、卽ち宇宙の移り易はれる物事に伴ひ連れて、千轉萬化して圓通自在なること際限なきなり、かるが故に聖人が兵を用ふるや、人の國家を亡ぼせども、何等の私欲を持たざるが故に、人民の心を失はず、人民は自國を亡ぼ

欣喜せず、其の死して元へ還るにも拒み禦がず、悠然と容易く往き、悠然と容易く來るのみ、其の自分と云ふもの丶始めを全く忘れて知らざるにあらず、亦其の自分と云ふものが、終りは何れに歸着するかを骨折りて求むることを爲さず、先方より生と云ふものが來るときは、其の儘に受け取りて喜び、而して生と云ふ物を返へして與れと求むれば、自分が物たることを打ち忘れて之を其儘にもとへ復して、何等の未練を殘すことなし、是れ斯の如き者を、吾が心を本位として、自然の道を棄てず、人の小き考へを雜へて、天の廣大なる働きを力を添へて助けずと申すことなり、是れ斯の如き者を眞人と申すものなり、

【解義】〔其出不訢云々〕訢は欣なり、距は拒なり、李云ふ欣出則營生、距入則惡死と、〔翛然而往云々〕翛は音叔、又音悠、又音蕭、翛然は往來不難の貌何等未練を殘さず、卽ちスラリッと往來する模樣なり、「成疏」に翛然獨化、任理遨遊、雖復死往生來、曾無意戀之者也と、〔不忘其始〕始とは生なり、卽ち眞人は人の斯世に生れ來れるは、何故なるかを知れるが爲めに、必ずしも人生を厭棄して、人事を廢することを爲さずとなり、〔不求其所終〕終は死なり、卽ち徒に厭世的に流れて、早く其の生命の終らんことを求めざるなり、〔受而喜之〕此れ卽ち上の不忘其所始の句を承けて云へるなり、喜とは承知して受けて不平なきこと、獻齋は受而喜之、不累於生と云へり、卽ち人生に生れ來るを累煩とせずして、天より生を與ふれば承知して受くること、〔忘而復之〕此れ上の不求其所終の句を承けて云へるなり、元と復而忘之と云ふべきを、倒裝法を用ひたるなり、復とは一たび離れたる物が、元の處へ立ち還ることなれば、此にては人の幽界より明界に出でたるが、元の幽界に復へることにて、死を謂ふ、卽ち死と云ふ事に何等の心を留め置かずとなり、「宣註」に忘其死而復歸於天とあり、〔不以心捐道〕捐は「成疏」に依れば、棄也とあり、「釋文」に依れば、「郭註」には揖に作り、「崔註」には楫に作る、兪樾は「郭注」に眞人知用心則背道、助天則傷生、故不爲也とあるを據として、偝の字の誤にて、偝は卽ち背の字なりと云へり、陳詳道は曰く、無思也不以心捐道、無爲也不以人助天と卽ち妄に物を思ひ考ふること無き故に、己が欲を縱

ありて、內に息する模樣なり、〔眞人之息以踵〕此れ上句を承けて、下句を起すの句なり、卽ち一半は其の息深々の故を說明し、一半は衆人之息以喉の對義を前提したるなり、古文此法頗る多し、踵は足根なり、「キビス」又は「クビス」又は「カ、ト」と訓ず、「副墨」に心有靜躁、則氣之出入、亦隨之而有淺深、眞人性定於內、故息々常歸於其根、踵卽根也と、蓋し眞人の息は脚後より發し、卽ち身體の最下部より起りて、口耳に至るなれば、淺からずとの意なり、「直解」に曰く、足底湧泉穴、〔踵のこと〕乃氣之所息、所謂從頭流至足、究竟復上升者と、〔衆人云々〕唯喉間に止り、至て淺きことを言ふ、此れ以下は、衆人と眞知なきことを擧げて、眞人の眞知あることを反起したるなり、〔嗌言若哇〕嗌は音「エキ」又音「アイ」、咽喉なり、哇は結なり、凡俗の人は、利欲に惑ひて其の心が躁きが故に、氣に調和を闕き、咽喉間の氣息結び凝りて通せざるを謂ふ、「辨正」に依れば、此れ道理の屈し、詞の窮るの意にして、下句を興さんが爲めに云へりと、〔其耆欲深云云〕耆は嗜と同じ、情欲深重なれば、機神の之に反して淺鈍なるなり、此れ天眞と人欲とは兩立せざることを言ひ、眞人の知は衆人の知と相反するを示し、卽ち反面觀よりして、眞人にして眞知あることを說明したるなり、

古之眞人、不知說生、不知惡死、其出不訢、其入不距、翛然而往、翛然而來而已矣、不忘其所始、不求其所終、受而喜之、忘而復之、是之謂不以心捐道、不以人助天、是之謂眞人、

【大意】此れ眞人に就いて第三の解釋なり、卽ち其の生死を看破して、一と爲すことを言ひ、眞人無心の妙處を寫し、以て眞人にして眞知あることを固めたるなり、

【通釋】又死生の問題ほど、人の解決を惱ますものはあらざるが、古しへの眞人は生の偶然的なることを知れば、生を悅ぶことを知らず、亦死の必然的なるを知れば、死を惡むことを知らず、其の生れ出づるに

以下の三句は總べて如何なる外物も、眞人の心には留めざるを謂ふ、成疏に曰く、眞人達生死之不二、體安危之爲一、故能入水入火、曾不介懷、登高履危、豈復驚懼と、一説に此の句は前の不謩士の句を結び云ふとなせり、

古之眞人、其寢不夢、其覺無憂、其食不甘、其息深深、眞人之息以踵、衆人之息以喉、屈服者、其嗌言若哇、其耆欲深者、其天機淺、

【大意】 此れ眞人に就いて解釋の第二なり、卽ち眞人は純然天眞のみにして、一毫も人智の雜用あらざることを謂ふ、

【通釋】 眞人は眞に天然の美性を完全にして居ることは、古への眞人は、内は心に思ひ考へることなく、外は物の刺激に動くこと無ければ、眠りても夢を見ることも無く、覺めても憂慮することも無し、又其の食物も別に嗜慾なければ、或る物を甘しとして貪ることも無く、精神が靜かに定まれるが故に、その呼吸は深々として、内に息を爲して落ち付きて居れり、本來眞人の息は、身體の下部なる踵に於て爲すが故に、體中に偏く通ひ、衆人の息は喉に於て爲すが故に、息も短くして切れ易し、理窟に負けて屈服する者は、喉邊に言葉が塞りて、引き掛りて居る物を吐き出すが如く、苦しげにして氣の毒なることなり、人の私慾深き者は、態度振舞が輕口はづみにして、天然の神機が至りて鈍く、卽ち心の底から見透されて、淺露なるものなり、自然の眞と否らざるものとの懸隔せること此の如し、彼の眞人の衆人に超越して居ること、此にても知るべし、

【解義】 「其寢不夢」心に思ひ込むことあり、又は精神が疲るゝときは、眠りて夢を見ることあり、今眞人は淡泊なるが故に然らざるなり、「副墨」に凡人之夢、皆識神所化、眞人無識也、故其寢無夢也と、「其食不甘」食慾に動かされて、美味に耽らざるを謂ふ、「辨正」に三者心有細微之欲、便不能言此見無細微之欲也と、「其息深深」深々は「釋文」に内息の貌と

ば、先方の失意の人なればとて、其の勢の寡小なるを侮り、敢て逆ふことを爲さず、亦自分が得意の地に居ればとて、自ら其の成功を雄らず、又至りて淡泊にして、種々なる術策を弄び、味方の士衆を招き集むるやうなることを爲さず、此の如き偉き人物は、其の爲すことの時機が過ぎ去り後れたりとて、爲めに悔いず、亦恰度好き時に出で逢ひ當ればとて、爲めに自から得意がりて豪張らず、又此の如き偉き人物は、本來危難生死等を意に介せざれば、高き處に登りて危きも爲めに慄れず、水中に沒し入れども濡はず、火中に飛び込めども熱からず、即ちたとひ如何なる場處に入り、如何なる物に接するとも、決して懼れ亂れず、是れぞ智と云ふ者が、能く道と云ふ場處に進み登りて至れる者、即ち自然の本道に叶へることとなり、智の極點は即ち此の如し、

【解義】〔不逆寡不雄成〕逆は忤なり、寡は少なり、雄は自から雄なりとして伐ること、成は成功なり、人の少寡を侮りて忤ふことを爲さず、即ち「孟子」に云へる自反而縮則雖褐寬博吾不惴焉の類なり、雄は自から雄豪なりとして驕り伐ること、又一説に、逆は逆かへ拒ぐの意にて、「玉篇」に逆度也謂先事預度之也とあり、此にては、寡少の來るを惡み、預じめ度りて拒ぐこと、雄は尊尙の意にて、好むことなり、成は全足なる意、即ち此の二句は、境遇の利害に因りて節操を變せざるを謂ふとなり、〔不謩士〕謩は謨と同じ、「ハカル」と訓ず、士は士衆なり、士の我を慕うて來歸するは、受け納るゝも、我より利益を以て、士衆を招き致すことを爲さずとなり、又一説に、士は事なり、事の成功不成功を謀りて爲さゞるを謂ふ、即ち道理の適否を論じて、事の成敗を言はざるなり、〔過而不悔〕過は過去なり、成疏に天時已過、曾無悔吝之心とあり、又一説に過は失なり、即ち過ちて寡少の地に陷るとも悔恨せずとて、前の不逆寡の句を結びて云ふと爲せり、〔當而不自得〕「成疏」に分布偶當、不以自得爲美也とあり、又一説には當は合なり運命に叶ひて自己の境遇が恰當するも、爲めに恰當を覺えずとて、前の不雄成の句を結びて云ふと爲せり、兪樾もまた曰く、衆人之情、於事有所過失則悔矣、行之而當、則自以爲得矣、眞人不然、故曰過而不悔、當而不自得也、〔登高不慄〕慄は懼なり、此れ

にては物事を知ると云ふことは、卽ち前に云へる以㆓其知之所㆒ㇾ知、以養㆓其知之所㆒ㇾ不ㇾ知と云へるが如く、既に一方に知り得たる力によりて、一方の知らざる知識を養成したる上、物事を施設し見て、始めて眞實なる道に當り叶へるや否やを見るべきなり、然るに此の一方に知り得ることが、特別に仲々のものにて、未だ容易に定まらざるなり、何んぞ自分の此れはと思ひ込みたる天道が、果して人事に非ずして、天道に相違なく、又此れはと思ひ込みたる人事が、天道に非ずして、人事に相違なしと云ふことを受け合ひて知るべきや、卽ち知るべからざることなり、左れば、第一番に此の天なるか人なるかの區別が、甚だ付き兼ぬるなり、

【解義】〔夫知有所待〕知は智と同じ、有㆓所ㇾ待㆒とは、以㆓其知之所㆒ㇾ知、以養㆓其知之所㆒ㇾ不ㇾ及と上文に在るが如く、既に知れる智を以て、未だ知らざる智を養成し始めて完全なる智となることを獲るを謂ふ、〔特未定也〕特とは特別の特にて、卽ち未だ定らざることは、他の事物にもあれども、此の所待に限りては、特別に未だ定らずとの意なり、〔庸詎知吾〕詎は一に渠に作る、義皆同じ、解は齊物論篇に見ゆ、

且有㆓眞人㆒、而後有㆓眞知㆒、何謂㆓眞人㆒、古之眞人、不ㇾ逆ㇾ寡、不ㇾ雄ㇾ成、不ㇾ謩ㇾ士、若ㇾ然者、過而弗ㇾ悔、當而不㆓自得㆒也、若ㇾ然者、登ㇾ高不ㇾ慄、入ㇾ水不ㇾ濡、入ㇾ火不ㇾ熱、知之能登㆓假於㆒道㆒也若ㇾ此、

【大意】眞人の眞智あることを援きて、智の意義を説明す、卽ち人の初めに就いて云へば、天は人の本眞にして、苟も本眞なるときは、其の形は人たるも、德は純乎たる天にして、其の現出する言行動止は、必らず能く天と一致し、智慧の及ぶ限り、差ひ誤らずとなり、

【通釋】又一層を進めて云はんに、智は人物の大小に應じて、相當の差あり、卽ち眞人が有りて後に眞知あり、何をか眞人と謂ふかと尋ねんに、眞人は無欲にして、世外に超越する者なり、人身の境遇を以て云へ

を謂ふ、林疑獨は曰く、天之所レ爲、久所レ不レ知、而必以ニ人之知一養レ之、一身之中、凡在ニ形骸之內一、吾所レ不レ知也、形骸之外、吾所レ知也、爲ニ之飲食一、爲ニ之動止一、皆所ニ以養一其不レ知也と、此れ衞生に注意して、行狀を愼むことは、肉體外部に關する故に、吾が智の能く知る所なれば、先づ之を務め、以て肉體內部に關して、吾が智の知るに及ばざる精神を修養すと解したるなり、「宣注」も亦、以ニ其知之所一レ知の語を解して、衞生之術と爲し、以養ニ其所一レ不レ知を年命之數と爲せり、王先謙は、不ニ强知一則智ニ得所一レ養と云へり、皆共に參攷と爲すべし、〔終其天年云云〕天年は天壽なり、天は夭死なり岡松甕谷曰く、上句の知ニ天之所一レ爲とは、天道に明かなることにて、知ニ人之所一レ爲とは、人事を審かにすることを謂ひ、天而生とは、凡そ物事は皆天道に循ひ行ひて、其の一生を終ることにて、是れ人の行ひの最も高き者なり、而して其知之所レ知とは、人事を謂ひ、其知之所レ不レ知とは、天道を謂ふ、卽ち人事を修めて、天道に違ふこと無きを要するときは、自ら禍を免れ、壽を保つを得れば、終ニ其天年一而不ニ中道夭一と云へるなりと、是又別見なれども、一說として存すべし、〔知之盛也〕此の知の字は、上文の知ニ人之所一レ爲の知を指し「シル」と訓ず、卽ち上文に言へるは人事盡くれば、天道亦隨うて全たしとの義にして、是れ極盛なることなり、而して能く此に至るを得るは、もと人の爲す所を知れるが故なれば、是れ知るてふことの盛なる者との意なり、

雖レ然有レ患、夫知有レ所レ待而後當、其所レ待者特未レ定也、庸詎知ニ吾所レ謂天之非一レ人乎、所レ謂人之非ニ天一乎、

【大意】上文中に云へる所知の事に就き、更に一層を進め、果して其の智の知り及ぶことが、未だ必しも全く眞とも限らざれば、是非の道理は容易に決定すべき者にあらざることを言ひ、下文の有ニ眞人一而有ニ眞知一の意義を喚起す、

【通釋】上述の如きは、如何にも知識の物事を知る點に於ては、至極盛事なるには相違なきも、去りながら、玆に一つの困難あり、如何となれば、全體彼の智

矣、知天之所爲者、天而生也、知人之所爲者、以其知之所知、以養其知之所不知、終其天年而不中道夭者、是知之盛也、

【大意】先づ智者の身上より說き起して、天を知り人を知ることの至極たるを云ふ、卽ち世間滔々として醉生夢死の衆人中より、天理は自然に存すると、人事は勉强に成るとを知るは、要するに其の知識の遠く凡人に勝るを知るべきを見す、

【通釋】人は智ありて萬物の靈たる者なるが、今人ありて能く天の爲す所、卽ち自然の働きを知り、又、人の爲す所、卽ち人の働きを知る者は、固より衆人に超越して、知識の至りたる者なるは、論なし、卽ち天の爲す所を知るとは、天然に生れ出づることにて、自然の儘に任かし順ふことなり、人の爲す所を知るとは、其の自己が智にして己に知る所を應用して、自己が知識の及び届かざる所を補ひ養ひ、其の天年の壽命を完全に終へて、中道半途にて夭折せざるものなるが、是れぞ誠に智の盛なる優秀の者と申す可きなり、

【解義】「知天之所爲」天者自然之謂と「郭注」に見えたり、天之所爲とは、卽ち道を謂ふ、老子に道法自然とあるは、已に發したる後ちに就いて、道の自然より出でしことを云ひ、此の知天所爲とあるは、方に發する處に就て、自然が道を爲ることを云へるなり、知とは人が知ることなり、「知人之所爲者至矣」人之所爲とは、人事の當に務むべき者を謂ふ、至矣とは、至極したる義と云ふこと、「辨正」に有居顚頂而統下之勢、故曰至と云へり、「天而生也」天生と云ふこと、卽ち自然に生ずるを謂ふ、此れ天之所爲の義を解したるなり、「以其知之所知以養其知之所不知」兩の其知の知は、共に智と同じ、其知とは人自身の智を謂ふ、以とは活用すること、「辨正」に以者用之察之由之、皆用之卽順道以應事接物也と、卽ち何事に當り何物に對するも、皆共に自然の道に順うて爲すこと、「以養其知之所不知」所不知とは、道は天の設爲する所なれば、謂はゆる自然に生ずるものにして、人智の力は其の由りて來る所を知らざる

して、斯の義は天下古今を盡くして一なるものなれば、特に尊んで大宗師と曰へるなり、蓋し道は自然より出で、本と虚靈なるものなれば、人は當に之を主とし師として、一切の私意を去り、自然の公理に順ひ、以て天地自然の大本に畔かざることを務むべきことを論述したるものにして、卽ち本篇に故聖人將遊於物之所不得遯而皆存、善夭善老、善始善終、人猶效之、又況萬物之所係、而一化之所待乎とあるが如きは、人の師法とすべきは道なることを明かにし、吾師乎吾師乎、䪡萬物而不爲義、澤及萬世而不爲仁と云へるは、是れ本篇の師と稱するは、道を指して云へることを更に適切に明かにしたるものなり、蓋し世人の自ら恃む所は天賦の智能なれども、既に天よりして人に移りたる智能は、亦自然に必しも盡く純なる能はず、故に善く之を養ひ利導せざるときは、竟に自然の深理を悟り、萬物消長盛衰の故に達するを得ずして、其の弊害や自私自小の行爲益々甚しく、終には爭奪相踵ぎ、禍亂救ふべからざるに至らんとす、是を以て莊子は道の源頭より說き入りて、其の流派の歸着する所を指示し、以て之をして由りて迷ふことなからしむ、是れ本篇所作の主旨と爲す、宋の張橫渠は西銘を作り、乾稱父、坤稱母、民吾同胞、物吾與也と云ひ、以て人は天地自然の理に由りて生ずるものなれば、天地は乃ち人の父母にして、人類同一は互に兄弟の關係にして、天地間に生ずる萬物は、皆吾人が同じ仲間の徒なることを說きしが、今之を莊子の此處に當て看るときは卽ち此の大宗の義たるを說きしものなり、「老子」に人法地、地法天、天法道、道法自然と云へるは、凡そ宇宙間の師法は寔に自然の道より大いなる師法なきことを示せるものなり、則ち此の二法を以て推測するときは、莊子が道を尊んで大宗師と異名を付したるは、亦固より其の一家言に非ることを知るべし、但其の辭意の精微、文章の變化頗る解釋に苦むもの多きことは、彼の齊物論と共に、莊子書中に在りて、二大難關と稱する所なり、今之が解釋を爲し、其の要旨を明晰ならしむること左の如し、

知天之所爲、知人之所爲者、至

之遺、
審乎無假而不與物遷、命物之化而守其宗者也、
自其異者視之、肝膽楚越也、自其同者視之、萬物皆一也、
不知耳目之所宜、而游心乎德之和、
人莫鑑於流水、而鑑於止水、惟止能止衆止、
受命於地、唯松柏獨也在、在冬夏青青、受命於天、唯堯舜獨也正、在萬物之首、
勇士一人、雄入於九軍、將求名而能自要者、而猶若是、而況官天地府萬物、直寓六骸象耳目一知之所知、而心未嘗死者乎、
鑑明則塵垢不止、止則不明也、久與賢人處、則無過、
知不可奈何、而安之若命、唯有德者能之、遊於羿之彀中、中央者、中地也、然而不中者命也、
以死生爲一條、以可不可爲一貫、
所愛其母者、非愛其形也、愛使其形者也、
戰而死者、其人之葬也不以翣資、刖者之屨、無爲愛之、皆無其本矣、
爲天子之諸御、不爪翦、不穿耳、取妻者、止於外、不得復使、

德有所長、而形有所忘、人不忘其所忘、而忘其所不忘、此謂誠忘、
知爲孽、約爲膠、德爲接、工爲商、聖人不謀、惡用知、不斲、惡用膠、無喪、惡用德、不貨、惡用商、
有人之形、無人之情、有人之形、故群於人、無人之情、故是非不得於身、

大宗師第六

大は尊崇の辭なり、師は敎師なり、宗はもと其の字宀に从ひ示に从ふ、六書に於て會意と爲す、卽ち家中に祖先を祀るの義よりして、宗廟の名あり、因て轉用して、祖宗と連用して先祖の稱となし、又「周禮」の大宰に五曰宗以族得民とありて、宗族の唱へ起り、「禮記大傳」には別子爲祖、繼別爲宗、繼禰(父)者爲小宗とありて、大宗(本家)小宗(分家)の別生せり、卽ち此にては、祖先の後を承けて家を繼ぐが如く、敎師の敎を受けて學を治むるが如くに、人として承受して學ぶべき者は卽ち道に

とは惠子が惡得無情と指せる性情を謂ふ、卽ち莊子の意は、自分の謂へる情は惠子の指せる情と意義を異にすとなり、此れ一番先づ惠子の誤解を正して云ふ、〔不以好惡內傷其身〕卽ち上文に云へる故是非不得於身とあると、大略同義なり、但彼は是非其言が外間よりして人の身を動かすを得ざるを云ひ、此は人自身が好惡を以て、內に向うて己が身を害傷せざるを云ふ、〔常因自然而不益生〕常因自然とは、卽ち人の好惡は、道なり天なりの自然に任かして、動靜云爲をなすことなり、不益生とは、天生の外に加益せざること、乃ち己が好惡の私便を圖るが爲めに、工夫を凝らすことを爲さゞるなり、〔不益生何以有其身〕惠子は凡て我が生命を資くる料たる飲食衣服の類、卽ち養生の事を以て、益生と誤解したり、故に若し此なくんば、道與天與の形貌ありとも、身命を保持する能はずと疑ひたるなり、〔莊子曰道與之貌云云〕此の道與の二句は、已に人には能く自然養生を辯ずる能力と、竝に其の機關の具備せることを云ひ、無以好惡云々の句は前に己が云へる不益生とは、只是れ天分の以外に於て、人工的增加を施さざるを謂ふものにして、生を養はずとの意に非ることを辯明したるなり、〔今子外乎子之神〕以下益生の身を亡ぼすべきを言ひ、以て身を保つは反りて不益生に在ることを云ふ、〔倚樹而吟〕此れ外乎子之神を承け、下句の據槁梧而瞑は、亦上の勞子之精を承けて共に益生苦身の狀態を云ふ、〔據槁梧〕槁梧とは乾き枯れたる梧桐なり、卽ち机案の類を謂ふ、齊物論篇に惠子之據梧とあり、宜しく參照すべし、〔天選子之形〕天が子の爲めに形を選びて人と爲したるを云ふ、選は選擇なり、形は卽ち上文に天與之形の形にして、其の意は惠子の人と生れ來りしは、折角天が特選を以て、多くの生物の中に於て、神聖なる資格を與へしにと、深く其の下迹の行爲に陷り、天寵に倍くことを惜みて云へるなり、〔以堅白鳴〕堅白の解は已に齊物論篇に見ゆ、鳴とは獨り此の一事のみ有りて、餘は悉く喪失せることを云ふ、

名言

立不敎、坐不議、虛而往、實而歸、固有不言之敎、無形而心成、

死生亦大矣、而不得與之變、雖天地覆墜、亦將不與

を授與して、人は此の以外に、好惡の私情を以て、內に於て自身を害ひ傷ぶること無かるべし、然るに、今足下は足下の心神を外に向けて使役し、足下の精力を勞耗して、入らざる餘計なる苦勞を爲すが故に、倦み疲るゝ結果、神經衰弱となりて行けば、樹木に倚りて沈吟し、坐すれば槁梧とて几案に據りて瞑思し、而かも未だ道の本原に於て何等の好發明も無し、是れ折角天は足下の形體を、他の動物風情と選り分けて造り給ひしに、足下は徒に言論の末技に趨り、堅白同異てふ詭辯を以て、世に鳴り響くことをのみ爲せるは、實に過てることならずや、縱ひ左樣なることを以て、一時人に勝を制したりとて、果して何の益があるや、

【解義】〔惠子〕名は施、既に逍遙遊篇に見ゆ、〔人故無情乎哉〕故は本來と云ふが如し、「孟子」にも天下之言性也則故而已、故者以利爲本とありて、故の字を本來の義に用ひたり、〔道與之貌〕貌は伊藤東涯が「操觚字訣」に據れば、貌は一身ノ總カツコウ也とあり、道は自然の動的作用を指して云ふ、「老子」に道を釋して、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道とあり、亦以て參考すべし、〔天與之形〕形は形體なり、「操觚字訣」に形は象形物の「ナリカタチ」のこと也とあり、天は自然を指して云ふ、此れ上句と文は二語にして、意は共に一義なり、但文章上、右の如く分ち云へるに過ぎず、「副墨」に曰く、莊子曰、人之形色象貌、皆自未始有始（虛無のこと齊物論に在り）中來、皆道與之、道與之即天與之也、と「辨正」にも、又曰く貌者形之動、道天之氣化、二句只是一義と、〔惡得不謂之人〕莊子の意は、人は正に唯だ人の情無くしてこそ、方に是れ天生の人たる德を完全にするを得れと云へるなり、「孟子」に形色天性也、惟聖人然後可以踐形と云へり、卽ち人は各〻天より受け得たる固有の本能性格あれども、凡人は十分に之を發揮する能はず、聖人は十分に之を實現し履行することを得るとなりと、莊子の此の意も、亦之と相似たり、〔惡得無情〕情はもと性情と熟する字にして、性の感動的作用を謂ふ、故に惠子は既に道與之貌、天與之形とある以上は、終に無情なるを得ず、卽ち情は形の本と有する所なりと云へるなり、〔是非吾所謂情也〕是

【大意】此れ上文の有人之形無人之情の義を承けて、聖人の無人之情の理由を説明す、卽ち無情とは、一毫の人爲的加減を爲さずして、只是れ吾が天然に順ふに在ることを謂へるに外ならざる義と知るべし宣穎曰く、此一節自忘形外、補一層意、蓋至於忘情、而德符愈可知矣と、

【通釋】惠子は莊子が人の無情を説くに對して疑問を提出して曰く、足下の説の如くなりせば、人には元來情卽ち欲望と申すものは無きものなるかと、莊子曰く、然り、情は無き也、惠子曰く、人にして果して情と申すものが無きときは、草木土石の類と同樣にて、之を人と唱ふるを得べきか、卽ち人の人たる所以は、情の有るを以てにあらずや、莊子曰く、否、情が無くとも、毫も人たるに故障なし人の容貌卽ち「カツコウ」は、道が之を與へて、進退動作に就いて、相當なる態度を見はし、又人の形體は、天が之を與へて、首足其他身體を成して、活動力なり、活動の機關なりを有して、既に人たる資格が具備せる以上は、悉くに之を人なりと謂はざるを得んや、勿論、人たるに相違なきことなり、惠子曰く、然しながら、既に之を人と謂へる以上は、亦惡くにか情なきことを得んや、卽ち活動力なり活動の機關がある以上は、固より感應性を有して、槁木死灰の冷然たるに異なれば、物に對して情慾の起らざるを得ざる次第ならずや、莊子曰く、否、是れ吾が無情と謂へる情にはあらず、成程、一方よりせば、此の情は情に相違なけれども、吾が謂はゆる無情とは、人たる者が道理を飛び離れて、只己が專ら好み、若くは甚だ惡める處よりして、內自から己が一身を傷ひ害することをせずして、常に自然の宜しきに因り順ひ、天生の本分外に、人的細工を加へ增すことを爲さず、彼の自然の道に順ひ行ふに於ては、全く無用なるものにて、乃ち聖人には此の如き情は無しと云へるなり、惠子又之を非難して曰く、成程、形貌は子の言の如く、道なり天なりが人に與ふるとも、今自然の儘に任かして置くときは、到底生ひ立つべきにあらず、矢張り人が智力を積みたる工夫を、本生以外に益し加へざれば、何を以て自己其身を有するを得んや、莊子曰はく、否、此れ畢竟足下の誤解たるを免れず、道が人に人たる容貌を與へ、天が人に人たる形體を與へて、卽ち道なり天なりが、自然に人たる資格

惠子謂莊子曰、人故無情乎、莊子曰、然、惠子曰、人而無情、何以謂之人、莊子曰、道與之貌、天與之形、惡得不謂之人、惠子曰、既謂之人、惡得無情、莊子曰、是非吾所謂情也、吾所謂無情者、言人之不以好惡內傷其身、常因自然而不益生也、惠子曰、不益生、何以有其身、莊子曰、道與之貌、天與之形、無以好惡內傷其身、今子外乎子之神、勞乎子之精、倚樹而吟、據槁梧而瞑、天選子之形、子以堅白鳴、

加へずして、自然の本性に打ち任かすこと、〔四者天鬻也〕四者は上の不謀云々の四句を指す、鬻は音「イク」、養なり、「ヤシナフ」と訓ず、天鬻とは人物の力にて養ふにあらず、先天的自然の養ひと云ふ義なり、〔天食也〕食は飼と同じ、「ヤシナフ」と訓ず、此れ上句の天鬻の二字を作者自から解釋したるなり、〔故是非不得於身〕不得とは志を得ざる義にて、我が思ふ樣にならざること、身は聖人の身なり、卽ち外間に於て、是非の議論が如何樣に起るとも、其の力にて聖人の身を思ふ樣に動かすことを得ざるを謂ふ、「孟子」に富貴不能淫、威武不能屈、貧賤不能移と云へると、大略同樣の意なり、〔眇乎小哉〕眇は小なる貌此れ天地間に在る形骸に就いて謂ふ、〔所以屬於人也〕所以の上に、聖人の二字を加へて看るべし、屬は係なり、「成疏」に跡閔隱俗、形係人羣、與物不殊、故稱眇小也、此結有人之形耳、〔謷乎大哉〕謷は高大なる貌、此れ世間を超越し、物外に逍遙せる道德に就いて謂ふ、〔獨成其大〕獨の上に、聖人の二字を加へて看るべし、「成疏」に謷然大敎、萬境都忘、智德高深、凝照宏遠、故歎美大人獨成自然之至、此結無人之情也、

ち全く人間界の名利權勢などは、聖人に於ては、何等の欲するの欲せざるのと云ふ如き觀念は、最初より毛頭心に浮ばざるなり、されば聖人と申す者は、普通的人類の形はあれども、普通的人情は無し、右の如く普通的人情あるが故に、矢張り普通的人類と社會を爲し、胥倶（アヒトモ）に居れり、普通的人情なきが故に、普通世俗の人が是とか非とかと言ひ爭ふ事は、一切聖人の身に起らず、卽ち右の如き觀念は、聖人の心には何等の効力を奏するを得ず、全體形と申す者は、本來眇乎として、如何にも眇（カスカ）にして小なる者なり、されば、聖人なりとて、其形は矢張り人に從ひて、其の小を甘んじて普通的なる所以なり、德と申すものは、贅乎として、如何にも鷹揚にして大なる者なり、されば、聖人に限りて、獨り其の大を極めて、絕對的に天と同じきを成就する所以なり、卽ち形は如何なる物と雖も際限あれども、德は進めば進む程、深く、大にして涯りなし、是を以て、聖人は際限ある方は普通一樣にして、無涯なる方は益々深く大にして、終には天と相竝ぶに至ることとなり、是れ聖人の大智大能たる所以なり、

【解義】〔聖人有所遊〕遊は卽ち逍遙遊にして、心身に何等の羈束なくして、自由自在に樂むこと、「郭注」は遊ビ於自得之場ニ、放ツテ之ヲ而無シ不ル至ラ者也とあり、〔而知爲孼〕知は智と同じ、孼は枝蘖なり、「ヒコバエ」と訓ず、草木の旁出せる者なり、卽ち智を以て物を計ること餘計なる手間と爲すこと、宛かも草木の枝蘖を視るが如きなり、又孼は妖孼なり、「ワザハヒ」と訓ず、乃ち智計を以て不祥なる物と爲すこと、〔約爲膠〕約は約束にて取締ること、此れ禮法を以て物事を處置するを謂ふ、膠は「ニカハ」と訓ず、物を合はせ固むるに用ふ、故に强ひて合はせ着け固むることに喩ふ、〔德爲接〕此の德は上下にある德と自から輕重の別あり、此の德は得る字の意味にて、修養して身に會得することを謂ふ、故に下文に無喪惡用德ともあり、「辨正」に曰く、爲ス接ト者以テ爲ス續添之疣ト也と、卽ち續ぎ添へたる疣（イボ）の如く、心に此れ無くもかなと思ふこと、「宣注」は有ル得ル之德、乃チ接續也、如キ中斷シテ而復續ク者と、〔工爲商〕工は心の技巧あること、商は商賈なり、「辨正」に以テ心之有ルヲ技巧、爲ス賈人之行ヲとあり、〔不斲惡用膠〕斲は削なり、不斲とは木を削らず質の儘にて用ふることにて、卽ち區々の人工的細工を

之形、故羣於人、無人之情、故是非不得於身、眇乎小哉、所以屬於人也、謷乎大哉、獨成其天、

【大意】上文の、徳は形の美醜に由りて、輕重あらざることを言へるを承けて、眞正の徳は、何等世間の束縛を受けず、全く物外に超越して、心の逍遥遊に任すに在ることを説けり、

【通釈】かるが故に、聖徳ある人物は、心を或る事物に限局せられず、優遊として世外に超越して、彼の智計の巧みを弄ぶことを以て、宛かも木の餘孽あるが如くに思ひ、即ち寧ろ入らざる餘計の手數と爲し、禮法を以て、相互に約束して交ることを、宛かも膠漆を用ひて、物を續ぎ合はしたるが如くに思ひ、即ち本來の自然に非るを、人爲的に强ひ合はすものと爲し、徳義を以て、餘計なる贅物を接續したるが如くに思ひ、即ち此の着き纏ひさへ無くば、大に身輕にして自由を得るに、誠に殘念なることゝ爲し、心に物事を工夫することを以て、商人が射利を營むと同じことにて、即ち外物の爲めに本心を苦しめ、誠に賤むべき者と爲せり、此れ如何なる故ぞとならば、智計は物を謀ればこそ入用なれ、然るに、聖人は渾て自然の運命に任かせて、聊かも物事を謀ることを爲さゞが故に、今更何れの所に於て、智慮の必要あらんや、物は離るればこそ、合はす必用あれ、然るに、天地の初めに於て、萬物の混沌たるを、聖人は自然其の儘に任かして、最初より切り削りて離すことを爲さゞるか故に、今更何れの所に於て、膠を着けて、續き合すことを要せんや道理も本性を喪へばこそ、修養して徳義を積む必要あれ、然るに、聖人は最初より天賦の徳を完全に保持して失はざるが故に、今更何の必要ありて、徳義の修養を要せんや、世の人は貨財を得て、利益を營めばこそ、商賣の必要あれ、聖人は最初より貨利に淡泊なれば、今更何の必要ありて、商賣の眞似を爲さんや、さて、上の不謀、不斷、無喪、不貨の四者は、天鬻とて自然に具はれる扶持米なり、此の天鬻と申すものは、天より宛て飼はれたる養ひと申す者なり、聖人は此の如くに扶持米宛て飼ひを天より貰ひ受くれば、又何の必要ありて、汚れたる人間の食物を用ひんや、乃

世の人其の忘れて構ひなき形貌を忘れずして、其の大切にして忘るべからざる道德を忘るゝあり、此の如きものこそ、誠實なる忘れと申すものなり、

【解義】〔而形有所忘〕而は則と通ず、「スナハチ」と訓ず、〔人不忘其所忘〕其所忘とは、上句の形有所忘とあるを直ちに承けて言ふ、卽ち形骸を指すなり、〔忘其所不忘〕其所不忘とは、道德を指す、「郭注」に生則愛之、死則棄之、（前節哀駘它の條、㹠子の段參看）故德者世之所不忘也、形者理之所不存也、故夫忘形者、非忘也、不忘形而忘德者、乃誠忘也とあり、乃ち德は忘れ切ること能はざるものにして、形は德あれば活動するも、德無ければ舊の如くならざることは、前節に述べし㹠子が死母に對する情態に就いて見るべし、故に修辭上に於て、德を稱して其所不忘と云ひ、以て上の形を其所忘と云へるに對言せしのみ、〔此謂誠忘〕誠は實なり、眞なり、忘るべきものを忘れずして、忘るべからざるものを忘るゝが故に、誠實の忘れ方と謂へるなり、按ずるに、此の節、呂惠卿は解して曰く、無脤大癭以德長而見美於二君、形有所忘也、人不知存其神、是所忘、役於視聽思慮、是所不忘、不忘其所忘、而忘其所不忘、此謂誠忘、非特形有忘而已と、是れ世人の多く其の神を存して、德に注意するを爲さゞるを以て、其所忘と爲し、耳目心志の嗜慾に使役せらるゝを以て、其所不忘と爲し、若し賢者ありて德を忘れずして、獨り形骸の醜惡を忘るゝのみならず、尙幷せて嗜慾を忘るゝことあらば、是れぞ眞實の忘と謂うて、尊崇すべしと解せるなり、林疑獨も亦曰く、形者世所不忘、德者世所忘也、人能不忘世所忘、而忘世所不忘、則才德全矣、是謂誠忘と、此れ別說なれども、姑く錄して參考とす、

故聖人有所遊、而知爲孽、約爲膠、德爲接、工爲商、聖人不謀、惡用知、不斲、惡用膠、無喪、惡用德、不貨、惡用商、四者天鬻也、天鬻也者天食也、既受食於天、又惡用人、有人之形、無人之情、有人

じ、「クハダツ」と訓ず、支離は既に上文に解す、脤は唇と同じ、此の人支體坼裂し、傴僂殘病ありて、唇の落ちて無きを以て、此の如く名づけたるなり、〔衞靈公〕衞は國の名、既に人間世篇に見ゆ、〔其脰肩々〕脰は頸なり、「クビ」と訓ず、肩肩は細小なる貌、又羸小なる貌、衞君の心に深く闉跂支離無脤の人を悅ぶ餘り、全人の脰を視るに、反りて其の羸小なるを覺ゆるなり、昔し眇女を悅べる人あり、天下の婦人を見しに、皆一目の多きに過ぐるを惡めりとの話あり、此と同一の理なり、〔甕㼜大癭〕甕は「ツルベ」又「カメ」と訓ず、㼜は「ホトギ」と訓ず、盆なり、癭は頸瘤なり、「コブ」と訓ず、此の人頸に癭あり、大さ甕㼜の如くなるより、因て此の名稱あり、〔齊桓公〕齊は國の名、桓公は謚にして、名を小白と云ふ、五覇の一人にして有名なりし人なり、

故德有所長、而形有所忘、人不忘其所忘、而忘其所不忘、此謂誠忘、

【大意】此の段は德と形との辨別を點明し、上文を總收す、上文共に是れ六個の殘疾奇醜の人にして、王駘は弟子と師との關係に於て、申徒嘉、叔山無趾は獨り師と弟子との關係のみならず、朋友間の關係に於て、哀駘它及び闉跂大癭は君臣の關係に於て、皆共に德を以てして、形を以てせざることを見はせり、蓋し人倫の中、父子兄弟は原と天性の關係なれば、形骸の如何によりて、親疎愛憎を生ずべくもあらず、故に之を說かず、此の外、師弟朋友君臣は皆義理を以て結合せる者なれば、形骸上より意見を起し易し、故に莊子特に此の六個の事を叙して、世人を警醒せり、其の夫婦も亦義合なるに、之を說かざるは、哀駘它の條に婦人の與爲人妻寧爲夫子妾とある數語、已に夫婦の關係も、德を以てし形を以てせざる意の見るべきを以て、之を略せりと宣穎は云へり、

【通釋】此の如く、皆共に道德盛なるときは、その形貌の醜惡なるを忘るゝのみならず、尚反りて、之を完美と爲して、他の滿足なる形體を有する人を、不具者と思ふに至るなり、是の故に、道德が長け賢りたること有るときは、形貌は醜惡を忘るゝことあり、然るに

に面し、陽に嚮ふを以て、君位に卽くことを南面と曰ふ、君天下とは天子と爲ることなり、哀公は當時の魯侯にして、天主にあらざるも、此の處は其の理想上の語を叙述したるなり、〔執民之紀〕紀は「スヂ」と訓ず、字書には大曰綱、小曰紀とあり、民之紀とは、民を治むる綱紀にして、治民の大法を謂ふ、〔憂其死〕其は人民を指す、卽ち政治の不行屆よりして、人民の或は飢ゑて死に至らんことを憂ふるなり、〔德友而已矣〕吾を裨益するに道德を以てする友と云ふ義なり、

闉跂支離無脤說衞靈公、靈公說之、而視全人、其脰肩肩、甕㼜大癭說齊桓公、桓公說之、而視全人、其脰肩肩、

【大意】前章と大體同じ、乃ち其の德內に充つれば、其の貌外に醜なるを厭ふべきにあらざることは、獨り前章に云へるが如き人に止まらず、又此に述ぶるが如き人有りとの意にて、此を擧げしのみ、宣穎は曰く、上文四個人（魯哀公、哀駘它、孔子、閔子）錯叙、此兩個人（闉跂支離、衞靈公）整叙と、又曰兩個（哀駘它闉跂支離不全之人）、兩君（魯哀公衞靈公）不獨忘彼之醜、而反覺全人之醜、是極有神理說、德充符可思也と、

【通釋】德充の符を形體上に驗すべきことは、獨り前章に申せし例のみならず、尙類似の一例あり、闉跂支離無脤と申して、身體は痀僂にして、步き振りは蝦蟇がピヨン〳〵と飛ぶが如くにして行き、而も其の口は兎缺なる、殆ど不具と云ふ不具は一通り揃ひたる人あり、此の人、或る日に衞國の靈公と申す君に謁見して、己が意見を說きしが、靈公深く之を悅び氣に入りたり、而して他の完全なる身體の人を視較ぶるに反りて其の脰が肩々として細長くして、如何にも不合式なるを感じたり、又甕㼜大癭とて、頸の瘤は宛かも甕の大さの如く至て太き人がありて、齊の桓公と申す君に說きしに、桓公之を深く悅びて、反りて完全なる人を比べ視るに、其の脰は肩々として細長くして、不合式なるを感じたり、

【解義】〔闉跂支離無脤〕闉は曲なり、跂は企と同

也、乃ち此の句は、徳とは如何なる物を指すかと云へば、太和の道を修めて成就したる上に於て、徳と名づくるなりと解したるなり、〔物不能離也〕有徳者より別に心を留めて物を親まざるも、物の方よりして慕はしくして見放すこと能はざるなり、宣穎曰く、水停而平之盛者在焉、取法者安舍之、徳不形而和之至者在焉、物雖欲離之烏能乎、

哀公異日以告閔子曰、始也吾以南面而君天下、執民之紀、以憂其死、自以爲至通矣、今吾聞至人之言、恐吾無其實、輕用吾身而亡吾國、吾與孔丘非君臣也、徳友而已矣、

【大意】凡庸の人主哀公の如き者と雖も、亦能く道徳の人を感化するを信ずることを示し、言外に道徳の人を感化する眞理は甚だ明白にして、疑を容るゝ餘地なきことを含みたるなり、

【通釋】哀公、仲尼の言を聽きて感服の餘り、他日仲尼の弟子なる閔子と申す人に此の顛末を以て告げて曰く、始めは吾れの理想は南面して君位に登りて天下に君となり、人民を治むる紀綱を執りて、善政を施し人民の死傷を憐みて遣はすことを以て、吾は自身に天下に此程の至極したる希望はなしと思ひたり、然るに、只今吾は仲尼が至人に關する談話を聞き、仲々吾が前きに希望したる自ら以て至極と爲せる事などは到底話にも成らざる義にて、詰り徳あれば能く人を感化する道理を悟ると同時に、吾が不徳を今更ながら愧ぢ、吾が其の實たる徳が無き癖に、輕々しく無分別に、吾が身を使ひ用ひて、妄動的の事を爲し、吾が魯國を亡さんことを恐れ、心配することなり、さて此の如く能く吾が氣附くと云ふものは、全く汝の師の孔丘が吾に忠告せし賜なり、吾は最早汝の師孔丘とは、君臣の關係にあらず、彼は能く拙者の徳を規し進むるが故に、彼の如きは、之を徳友と申して、吾が道徳上の交際仲間なりと、

【解義】〔以告閔子〕閔子名は損、字は子騫、魯の人、孔子の弟子、〔南面而君天下〕南面は君の位は南方

何謂德不形、曰、平者水停之盛也、其可以爲法也、內保之而外不蕩也、德者成和之修也、德不形者、物不能離也、

【大意】上文の才全而德不形の義を承けて、德不形の義を說明す、

【通釋】哀公又問うて曰く、才全の意は其の許の言によりて了解せり、されば何をか德不形と謂へるかと、仲尼對へて曰く、姑く比喩を以て申し上げんに、今夫れ平均と申すものは、何にが平均と申さんとも、水の停りて靜かなるが、先づ天下隨一の平均なる物なり、此の平均こそ、凡て平均を取る師法と爲すべきものなり、何んとなれば、停りて靜かなる水は、內面は能く澄み切りたる水の本領を保持して、萬物を鑑み照らし別ち、而かも外部は靜かにして動搖せざるが故に、洵に之を法則として、物の平均を測り定むるに適すればなり、此れと同じ道理にて、今や人の德と申すものは、中和の心を修め成就したる處が、卽ち德と申すものなり、されば物の平均を取るには、水の停まれるに如くものなく、人の道德を修むるは、和の成れるに如くものはなし、而して此の德が外に形るゝことは、宛かも水が停りて、能く內は之を保ち、外は蕩せざると同じく、德は內に於て天命を保ち、外に於て物に刺激誘致せられて、動かざる者なるが、然し物の方よりしては、是非に德を親み慕うて離るゝことは能はず、亦宛かも匠人が平均の度を取るには、必らず水を師法とするが如く、苟も之なかりせば、心細くして堪へざるなり、以上の如きを是れ德不形と申すなりと、

【解義】〔水停之盛也〕水停の水は停止すること、此れ卽ち人莫鑑於流水、鑑於止水と前篇に在るが如く、停止せる水は湛へ靜かにして風波の障害も無く、高低曲直の別あらず、至極平均なる故に、平均の法則となるなり、〔內保之而外不蕩〕保は維持なり、蕩は流蕩なり、「ウゴク」と訓ず、水の內面能く物を照して明かに、而かも外面は靜かにして、動搖せざるを謂ふ、〔成和之修也〕和は上文に謂はゆる中和なり、成は成就なり、「宣注」に修太和之道既成、乃名爲德

げし才全と申す者なり、

【解義】〔是事之變云云〕事は人事なり、命は天命なり、「宣註」に皆人事之遷無定、以命之運行不停者と、乃ち以上の如く、人事の變遷して一定せざるは、天命の運行して停まざるを以てなりと、先づ一斷したるなり、〔日夜相代乎前〕既に齊物論に見ゆ、〔而知不能規乎其始〕知は智と同じ、規は規畫の規にて「ハカル」と訓ず、其始とは其の自りて來れる原因を謂ふ、即ち眼前に於ける死生存亡窮達等種々の變化ありて瞬息も留らざるは、如何に智者がありとも、其の原因を推し詰めて尋ぬること能はずとなり、〔故不足以滑和〕滑は亂なり、和は中和にて、中虛圓融なる人の本心を謂ふ、〔不可入於靈府〕靈府とは神靈なる府と云ふことにて、精神の居据る處を謂ふ、乃ち自然の運行に打ち任かして、驚き騷がさるが故に、如何に境遇に變化ありとも、其の事が吾が心に附き纏ひて、中和を滑亂するに足らず、又內心に入り込みて、精神を騷擾すべからずとなり、〔使之和豫云云〕之は人心を謂ふ、豫は悅なり、通は流通なり、兌は悅なり、乃ち和悅の氣象をして斷へず身上に流通し、己が怡悅せる本性を失はざらしむるを謂ふ、〔使日夜無郤云云〕郤は隙と同じ、此れ上句を承けて、更に一層を進めて說きたるなり、乃ち通而不失於兌の事は、唯僅に一時的のみならず、且日夜の別なく一息一瞬の間も、常に能く流通せし外へ向うて、萬物に接する每に、咸く皆共に春風和融の中に遊ぶが如き、誠に樂しく打ち解けたる心持にならしむるなり、〔是接而生時於心者也〕上述の諸句を一斷して云へるなり、是とは上述の事項を指して云ふ、接は接觸なり、時は四時の時にて季候なり、司馬は接至道而和氣在心也と云ひ、李は接萬物而施生、順四時而俱作と云へども、宣穎は是四時不在天地、而吾心之春、無有間斷、乃接續而生時於心也と云へり、此れ接の字を接續の義に解して、以上の如くにして、使日夜无郤而與物爲春とは、即ち別に之を他に求むるにあらず、全く吾が本心に在る中和の性は、間斷なく接續して、此の陽春の季候を心の中に生ずるものなるを云ふ、此れ天地間の季候は、新陳遞に代謝するも、人の心に生じたる春は、常に接續して斷へずとの意なり、

其始者也、故不足以滑和、不可入於靈府、使之和豫通而不失於兌、使日夜無郤、而與物爲春、是接而生時於心者也、是之謂才全、

【大意】上文の才全而德不形の語を承けて、先づ才全の義を說明せり、

【通釋】哀公は孔子が才全而德不形と云はれし語を聞きしも、未だ其の意義を解せざれば、因りて又問ひて曰く、さて只今、才全德不形との語ありしが、全體如何なることを才と謂へるかと、仲尼對へて曰く、凡そ斯の世界に於て、或は死し或は生じ、或は存し或は亡し、或は窮困し或は昇進し、或は貧く或は富み、又は賢者と不肖者と毀と譽と、飢ると渴くと寒さと暑さと、以上の如く、互に反比例に氣候人事が移り易はると申すものは是れぞ物事の變りにて自然の配劑たる天命の行はるゝ者なり、此の變はり行はるゝことが、毎日毎夜、一刻一分も休まず活動して、吾人の眼前に相互に更代して、推しても急に去らず、留めても復留まらず、而かも如何なる知識を以てするも、其の始りを何の處に起せしかを規り知ること能はず、卽ち如何なる知識と雖も、到底人間の力を以て推測の及ばざる者なり、されば、物事が千變萬化するとも、優游として自然の成り行きに打ち任かして、吾が心に毫も執着なく、淡泊に之と移り易はれば、爲めに中和なる道を滑亂するまでのことはなし、又外界の不正なる誘惑刺激は、一切吾が靈府とて神聖なる府庫、卽ち精神の內に入り込むべからず、故に吾をして、物事に接して、常に和らぎ樂しみ、心情に豫悅を與へ、種々意外の變事に遇ひ、艱難苦勞を爲すとも、平生と異なること無く、共通して、欣悅愉快の情を失はざらしめ、又日夜を問はず、初中終、聊かの間隙なくして、多くの物に對し、共に春の如き溫かなる情を爲して、其の仁愛に賴らしむ、さて以上品々の事は、羣品萬物に接觸し、彼の不斷に運轉して、一刻も變化を息めざる新しき季候を吾が心中に生み起すものなり、さて箇樣の人物こそ、是れ正しく臣が前に申し上

〔無爲愛之〕愛は愛惜なり、屨は足に用ふる爲めに愛すれども、今既に刖者となり足を切られたる上は、屨を着くること無き故に、愛惜せずとなり、〔皆無其本矣〕皆とは戰死者と刖者とを包括して云ふ、其の本とは武と足とを指す、卽ち武ありて翣を用ひ、足ありて屨を用ふるに、今既に武なく足なければ、復た翣屨を用ひざるなり、以上德なければ、物を感ずる能はざることを言ひ、反跌して下文を起す、〔爲天子之諸御〕御は侍なり、「ハンベル」と訓ず、諸御とは衆多の侍者卽ち妃嬪の徒を謂ふ、〔不爪翦不穿耳〕不翦爪不穿耳とあるべき語を、上の一句は倒字法を用ひたるなり、卽ち爪を翦るときは、誤りて指を翦る恐れあり、耳塞を穿るときは、誤りて耳底を衝く恐あり、故に完美なる身體を注意して、危險なる事をせずとなり、郭嵩燾曰く、不爪翦不穿耳、謂不加脩飾而後本質見と、此の說に依るときは、苟も天子の諸御とならん程の美女は、別に爪を翦り耳

翣

を穿ることを爲さずとも、自然美の外に見はるゝなりとて、上文に反して、其の質あれば、必ずしも其の末の具はるを假らざることを謂ふと解せるなり、〔止於外不得復使〕止於外とは、他事を停止することを謂ふ、不得復使とは、從前の如く使役するを爲さずとなり、「郭注」に恐傷其色とあり、乃ち外事に驅役するときは、暑さに曝され、寒さに凍らされて、顏色の黑く皮膚の輝れて、新婚の障害と爲らんことを哀み、敢て外事に驅役を爲さずとなり、「宣注」に官不之役逸其形以邀新婚之懽と、〔形全猶足以爲爾〕爾は然なり、卽ち上文の爲諸御及び娶妻の事を指す、此れ形ちの全きすら、猶然く目的を達するを得と云うて、下文の德全云云を跌起するなり、

哀公曰、何謂才全、仲尼曰、死生存亡、窮達貧富、賢與不肖、毀譽饑渴寒暑、是事之變、命之行也、日夜相代乎前、而知不能規乎

を受けて、諸御となり、一は新婚の當初に、夫婦の歡悅を繫ぐに足れり、而るを況して、根本たる道德を完備せる人に於ては、其の愛情を引き寄する力の偉大なるや、推して知るべし、今や哀駘它は我が君の仰せの如く、未だ言語を發せざるに、衆民は之を信用し、乃ち此れと申して取り立てゝ云ふべき程の勳功が無きに、衆民は之を親愛し、終には本來全く他人たる我が君をして、御自分の領有せらるゝ國家を授け渡さしめ、亦我が君に於ては、其の國政を授け渡し乍ら、彼れ哀駘它が之を受け取らざるかを恐るゝに至るなり、以上の如き情態は、勿論決して唯物にあらず、屹度其の才能は全備せる天才にして、而かも道德は奧深く潛み居れる者に相違なかるべし、

【解義】〔適見㹠子食於其母〕㹠は豚と同じ、小豕なり「ヰノコ」を訓ず、食は音飮、義亦同じ、「郭注」に食乳也とあり、卽ち乳を飮むことなり、〔少焉眴若〕眴は音舜、驚く貌、又「崔注」に依れば、目の動くことにて、眴若は死母の目の動くを謂ふと爲せり、兪樾は眴若は恂然と同義にて、徐無鬼の篇に、衆狙見之恂然而走とあるが如く、此れ亦㹠子が皆な驚きて走るを言ふ、乃ち始めは其の母の死せしを知らず、近く就きて其の乳を飮まんとし、少らくして其の死せるを覺りしが故に、皆驚き走れるなりと云へり、〔不見己焉爾〕不見とは死母が見ざるなり、己とは㹠子より死母に對して云ふ〔不得類焉爾〕「郭注」に夫生者以二才德一〔精神〕爲レ類、死而才德去矣、故生者以レ失レ類而走也、とあり、乃ち不レ得レ類とは、死者は形骸あれども精神なければ、平時の如く活動せざるを謂ふ、〔愛使其形者也〕使二其形一者とは、形體を活動せしむる精神のことを謂ふ、「成疏」に郭注曰、使レ形者才德也、而才德者精神也、豚子愛レ母、愛二其精神一、人慕二哀駘它一、慕二其才德者一也、と〔葬也不以翣〕翣は其の形、方扇に似て、柩車の兩邊に夾み樹つ、もと周の武王之を作りて武勇を飾る具となせり、資は送なり、戰敗して死する者は、既に武勇の實質を缺きしことなれば、其の葬日に翣を車に樹てゝ送ることを爲さずとなり、又「禮記」の檀弓篇に、周人墻置レ翣とあり、卽ち棺飾と爲し棺槨を壙に入るゝ時、翣を四方に樹つるなり、翣に三あり、翣の形ち圖の如し、

るに由ることを言ふ、此れ乃ち謂はゆる徳充の符なり、宣穎曰く、本字(皆無其本矣)便是徳充、愛子(愛使其形)便是符、と、又曰く、人之一喩、又帶二兩喩一(翣屨)先作二反趺一接二連乎兩喩一(爲御娶妻)又作二正襯一、

【通釋】 孔子は對へて曰く、臣丘は嘗て楚國に君の御使者と爲りて赴きしことありき、其の際、恰度子豚が母豚の乳を飲む者あるを見たりしに、忽ち眴若と眼眶を頻りに開きたり閉ぢたりして、何れも皆母豚を見棄てゝ走りたり、此れは全く其の親豚が既に死して、目を閉ぢたるが故に、子豚より云へば、自分の親が自分の身を見ざるに由りてなり、亦それと共に死したる母豚の樣子が、自然に生ける時と類似せざるに由りてなれば、是れ子豚が自分の母を愛することは、其の形貌を愛するにはあらず、其の形貌を使ひ用ふるもの、卽ち形貌の主宰たる或る一物を愛するを見るべきなり、若し形貌のみを愛するならんには、母は死したりとて遺骸はあれば、何にも左樣に俄かに打ちて變りて駭き走ることを爲すに及ばざるなり、さて我君には以上の事にて、形貌の外に別に人の愛情を牽き寄する者あることを承知爲し給ふべし、又凡そ物は其の本たるものが無きときは、何事も駄目なることとなり、彼の翣と申して、喪中に棺を載する車の兩旁に長柄の扇の如き者を樹つるが禮式なれども、戰爭に負けて死したる者を葬るには、柩車に翣を用ひず、何んとなれば、此れ君國の爲めに忠功を盡すべき根本の身命を失ひしなれば、其の罰として、完全なる葬禮を用ひざるなり、又刑法に觸れて足を切られたる人の屨は、屨を見ればとて、何等の愛惜心なし、何んとなれば、最早其の第一根本となる足其物が無ければなり、卽ち此にて物は如何なる道具ありても、根本が有らざるときは、全く無用たることを知り給ふべし、然るに、人は徒に瑣末なる道具の上にのみ注意を留めて、根本を急にするは誤れるの甚しき者なり、今天子の諸御とて、天皇の御側仕かへする美人共は、若しや萬一の怪我して、完美なる身體を毀付けんかと恐るゝ餘り、妄に爪を剪らず、耳塞を穿らず、又新に妻を娶りし者は、官府の役夫となれるも、當分は暇を遣はし、府外卽ち私宅に宿せしめ、元の如く仕事に役使して、身體を傷はしめず、夫れ此くの如く、唯形體の完全なるものすら、猶ほ一は天子の寵愛

言丈夫婦人歸之者衆也と、「宣注」は和而不唱を不能首事と解し、知不出乎四域を、無位無祿と解し、雌雄を卽ち上の婦人丈夫云云を承けて、男女を論せず、皆來りて之を親む義と解して曰く、三句是倒疊上文舊解可笑と〔有意乎其爲人〕其の人物か吾が意に協うて、甚だ眷戀の念を起すを謂ふ、〔寡人傳國〕傳の字、舊本に傳に作る、今宣本に依りて訂す、傳は附と同じ、國政を委任することなり、〔悶然而後應〕悶然は李は云ふ不覺の貌、崔は云ふ、有頃の悶なり、應は應答なり、此れ乃ち元來利祿榮華を貪らんなどとの野心なければ、應對の素振が無頓着にして淡泊なることを言ふ、〔氾然而若辭〕氾は係繫せざることにて、辭は口辭なり、乃ち氾然として一通りの口述にて、別に辭を注意し脩めざること、〔寡人醜乎〕醜は慙なり、愧なり、醜乎は愧づる貌、「成疏」に旣見良人氾然虛淡中心愧醜、戀慕殷勤、終欲與之國、屈爲卿輔と云へり、〔寡人卹焉〕卹は恤と同じ、卹焉は憂恤して悲愁する貌、

仲尼曰、丘也嘗使於楚矣、適見㹠子食於其死母者、少焉眴若皆棄之而走、不見己焉爾、不得類焉爾、所愛其母者、非愛其形也、愛使其形者也、戰而死者、其人之葬也、不以翣資、刖者之屨、無爲愛之、皆無其本矣、爲天子之諸御、不爪翦、不穿耳、取妻者、止於外、不得復使、形全猶足以爲爾、而況全德之人乎、今哀駘它未言而信、無功而親、使人授己國、惟恐其不受也、是必才全而德不形者也、

【大意】衆人の哀駘它を親信するは、它に愛すべき本たる充實せる德ありて、何人も親信せざる能はざ

から到底己が如き凡愚にては、相手になり難きこと、今更耻か敷思へるなり、到頭彼に魯國の政事を一切打ち任かせしに、其の內間もなく、拙者を振り棄てて、他國へ行けり、拙者は腹の立つところでは無く、大に心配して、何にか物を失ひたるが如くに思ひ、最早此の後は、相手にして此の魯國の富貴を共に樂むもの無きが若く思ひ、深く失望落膽したり、今其の許に質問するは、全體此の哀駘它と申す者は、是れ如何なる人物にやと、

【解義】〔衞有惡人〕惡は容貌の醜惡なり、性行の善惡を云ふにあらず、〔曰哀駘它〕李說に依れば、哀駘は醜き貌、它は其の名なり、〔與爲人妻云云〕妻は齊なり、其の位夫と敵對と爲り齊きよりして妻と曰ふ、妾とは接なり、適に君子（夫）に接し事ふべしとの意より妾と曰ふ、〔無君人之位云云〕君人とは君主を謂ふ、濟は救助すること、君主は人を生殺し富貴にする權勢あれば、人々之に畏服するものなるが、今哀駘它は右の如き權勢なきなり、〔無聚祿以望人之腹〕聚祿は積聚せる祿なり、望は李禎の說に依れば、「說文」に望月滿也とあり、即ち滿月の事なるが、因りて人の食に飽き滿腹することを月に喩へて望と云へる也と、「成疏」に儲積倉廩、招迎士衆、歸湊本希、腹飽、而駘它既無聚祿、何以致人とあり、〔又以惡駭天下〕此れ其の美色を以て人を感動するに非るを言ふ、〔和而不倡〕此れ能動的に物を爲して、衆人を招き寄するに非るを言ふ、〔知不出乎四域〕四域は四方の境域なり、「王注」には知名不出四境之遠と、此れ人に名を知らるゝこと近地に止まりて、遠方に聞こえずとなり、「郭注」は不役思於分外とあり、此れ知を智慮と解し、域を分と解し、凡て何事をも自然の性に任かして、別に智慮を四方分外の物に勞し用ひずとなり、岡松甕谷は、知識の遠きに及ぶ能はざるを謂ふと解せり、今其の說を用ふ、〔旦而雌雄云云〕旦は平旦なり、合は交合なり、平旦は神氣爽快なれば、禽鳥と雖も、未だ必ずしも旦に於て交合するもの有らず、然るに今は平氣にて、其の前に交はるとて、極めて哀駘它の無邪氣なるよりして、之に狎れ親むことを謂ふと甕谷は解せり、此れ「列子」に雌雄在前、孳尾成羣と云へる義に基きし說なり、然れども、諸本多く旦而に作り發語の詞となせり、褚伯秀曰く、雌雄合乎前、

與樂是國也、是何人者也、

【大意】又一個の醜惡にして德ある人を引擧し來りて、德充の君子に對して、世人の尊敬親愛する所以を說明す、入手先づ哀公の疑問を叙す、

【通釋】魯の哀公と申す君あり、孔子に問うて曰く、衞國に容貌醜惡なる哀駘它と申せる男あり、誠に奇態なることには、男子が之と共に居るときは、自然に情に絆されて、別れ去ること能はず、婦人が之を見るときは、自から羞かしきを忍びながら、進んで其の事情を兩親に打ち明けて曰く、他人の正妻とならんよりは、寧ろ哀駘它先生の妾とならんと、此の如き者多くして、幾十人と數ふるに至れども、未だ止まずして續々引き繼ぎて有り、然し又、彼れ哀駘它は、何に事をも己れ本人が能動的に發議者とならずして、常に受動的に他人に贊成せるのみ、其の位置は如何にと云へば、別段多くの人の上に立ちて、君主たる位がありて、人の死する命を濟ひ助くる程の權力とては無し、富の程度は如何にと云へば、此れ亦澤山なる知行がありて、人の腹に十分滿足さする程の力とては無し、其の上に、容貌と申せば、醜惡も尋常一樣では無くて、滿天下の人を駭かさん許りの醜惡なり、平常不斷に於て、只人の發言に應答するのみにて、何一つとして、自分より言ひ出だし、又手出だしすること無し、知識は至つて狹くして、只我が魯國の四方の境の內に止まりて、以外の事は知らず、然るに男女共に思ひ戀ひて、皆其の顏前に聚り來りて、之を愛し親めり、寔に不思議極まれる人物なるが、是ぞ必らず何に物か通常の人々に異ること有るならん、因りて、拙者は哀駘它を召し寄せて、篤と之を觀察致せしに、果して醜惡なる容貌を以て、天下を駭さん許りの人なりき、然るに、此の哀駘它は、拙者と共に居ること僅かの時日にて、幾月と云ふ程の日數を立たざる內に、早や拙者は、彼の何となく凡庸と異れる人物なることを思ふ心が動きたり、又滿一箇年を立たざる內に、拙者は深く之を信用し、恰度魯國に政を取り扱ふ大臣が無かりしかば、拙者は此の哀駘它に國政を渡して、取扱ひせしめたり、然るに、彼は悶然とボンヤリして返答をなし、又氾然と浮の空に挨拶をなせり、要するに、一向深く取り合はざる態度なるを見て、拙者は自

へるに對して、老聃は儒者が學問を講ずるは本と餘りに自身に此の世界の事を擔任なし過ぎるに因り、遂に是非黑白の辯別が喧しく、爲に徒に苦勞束縛を增すのみにて、融通の餘地を見出すこと能はざるが、若し能く根本觀念に溯り、是非は本と空く死生は一例なるを悟るに至らば、其の苦勞束縛を解くことを得べしと云へるなり、「偶說」に死生一條、可不可一貫、一篇齊物論盡此、一部南華盡此と、〔天刑之安可解〕此れ仲尼の根器此の如きは天然の刑戮とも云ふべき者にして終に解除すべからずとなり、陸樹芝曰く天與之以講學之具、又與之以講學之心、使之任講學之責、是天以講學桎梏之、雖進之以老子之說、必不聽、安可解乎と、

魯哀公問於仲尼曰、衞有惡人焉、曰哀駘它、丈夫與之處者、思而不能去也、婦人見之、請於父母曰、與人爲妻、寧爲夫子妾者、十數而未止也、未嘗有聞其唱也、常和人而已矣、無君人之位、以濟乎人之死、無聚祿以望人之腹、又以惡駭天下、和而不唱、知不出乎四域、且而雌雄合乎前、是必有異乎人者也、寡人召而觀之、果以惡駭天下、與寡人處、不至以月數、而寡人有意乎其爲人也、不至乎期年、而寡人信之、國無宰而寡人傳國焉、悶然而後應、氾然而若辭、寡人醜乎、卒授之國、無幾何也、去寡人而行、寡人卹焉、若有亡也、若無

りしが、更に老聃に語りて曰ふやうに、彼の孔丘が至德の人に對しては其れ未だ及ばざるか、若し既に至德の人と云ふ地位に達し居るものならば、今更に學問などをなすに及ばざる筈なるに、彼れ孔丘は何すれぞ賓賓と恭謹勉勵して先生に就いて學問を致すものなるや、私は察する所、彼れ孔丘は將に諔詭幻怪之名とて、常道に反したる奇々怪々なる一種の行爲に關係したる名譽を以て、世に聞ゆることを求めむとせる大野心家ならむ、然しながら彼の野心家の愚さは寔に氣の毒なるものにて、本來至德の人から視ては左樣なる事を以て、己が身體に不自由の苦痛を感ぜしむる足かせ手かせの如く、寔に窮屈なる困り物となすことを氣附きて知らざるなりと、老聃は曰く左樣に彼の孔丘は道は未だ至らざる者と思はるゝならば、何ぞ孔丘が爲に彼の死生の相反せる關門を打破して、一と筋の同じ徑路と爲し、事物の可と不可との相異れる二つの道理を融合して、一と貫きにしたる物と爲せる至德悟道の高尚なる人をして、左樣に惑へる孔丘を說き諭して、彼が足かせ手かせと爲りて身に纏へる困苦を解き放たざるか、無趾は曰く最早今と爲りては何事も著け樣もなし、彼れ孔丘は天より刑罰を與へて然らしめたるなり、卽ち天罰と申すものにして今更救ひ樣なき者なりと、

【解義】〔彼何賓々云云〕彼は仲尼を指す、賓々は恭く勤むる貌、又頻々と聲相通ず、頻々は比々なり、〔蘄以諔詭云云〕彼は仲尼を指す、蘄は期と同じ、諔は俶儻の俶と同義にして、絕類なり、詭は異なり、「李注」に諔詭は奇異也とあり、木の足にあるを桎と曰ふ「アシカセ」と訓ず、手に在るを梏と曰ふ、「テカセ」と訓ず、〔使彼以死生爲一條〕條は小枝なり、因て轉用して列次の義と爲す、一條とは一列と云ふが如く、同樣と云ふ意にして、以死生爲一條とは死生を同樣に思うて死すればとて爲に悲み、生くればとて爲に喜ばざるものを謂ふ、〔以可不可爲一貫〕貫はもと錢を橫に穿ちて持つことにて、「サシ」又は「ゼニサシ」と訓ず、因りて條理の通りたることを貫と曰ふ、此にては道理の是非を一樣に視て、區別を立てざること、〔解其桎梏〕此れ無趾が孔子の門弟子等と頻に講學に從事するを、餘計なることゝ爲して、諔詭幻怪の說を以て名譽を求めむとて徒に自ら苦む者と云

に爲し給はざるとは、實に意外千萬なることなりきと曰ひ、是に於て無趾は暇を告げて孔子の處を退出したり、孔子は其の後に於て他の弟子共に謂うて曰く、諸の子達は宜く之を勉强すべし、彼の無趾と申す人は兀者にて最早完全なる人にあらざるも、猶ほ學問を修め修養を怠らずして前廉行爲の惡かりしことを取り戻さばと思ひて居らるに、而かも況して初めより完全なる道德ある人物に於て、猶更に務めて進歩を圖るべき者なりと、

【解義】〔叔山無趾〕叔山は氏にして、兀者にして足趾なきが故に因て、號となしたるなり、〔踵見仲尼〕踵は足後なり、「クビス」又は「キビス」、又は「カト」と訓ず、刖刑に處せられて足趾なし、故に踵にて行くなり、〔子不謹前〕前は前行なり、卽ち今日より以前に屬する行爲を云ふ、〔犯患如是〕犯患とは法を犯して刖刑を受くるを謂ふとなり、〔吾唯不知務〕己の當に務むべき事柄を知らざるを謂ふ、「成疏」には「郭注」の意に依りて無趾唯欲務借聲名、不知務全生道、所以觸犯憲章、遭斯殘兀とあれども、下文の吾是以務全之也の語に對照すれば、只汎く當務を知らずと解して可なり、〔猶有尊足者存〕尊足の間に於の字を加へて看るべし、此れ足を亡ふとも德の尊ぶべき者の存在することを謂へるなり、「宣注」に有尊於足者存、不在形骸と云へり、〔丘則陋矣夫〕夫は歎辭なり、論語に今亡矣夫と云ひ、本書の太宗師篇に命也夫と云へると語法相同じ、夫子と下の子に連ねて讀むは非なり、〔請講以所聞〕無趾を延き入れて與に學を講ずるを謂ふ、

無趾語老聃曰、孔丘之於至人、其未耶、彼何賓賓以學子爲、彼且蘄以諔詭幻怪之名聞、不知至人之以是爲己桎梏耶、老聃曰、胡不直使彼以死生爲一條、以可不可爲一貫者、解其桎梏、其可乎、無趾曰、天刑之、安可解、

【通釋】無趾は既に孔子の講學を聽き畢りて出でた

吾唯不知務、而輕用吾身、吾是以亡足、今吾來也、猶有尊足者存、吾是以務全之也、夫天無不覆、地無不載、吾以夫子為天地、安知夫子之猶若是也、孔子曰、丘則陋矣、夫子胡不入乎、請講以所聞、無趾出、孔子曰、弟子勉之、夫無趾兀者也、猶務學以復補前後之惡、而況全德之人乎、

【大意】孔子の講學を借りて、好みて仁義道德を講じ、徒弟の收召するも、亦自ら桎梏を取るものにて、至人の本意に適せざることを言ひ、以て德充の符は言說を待たずして、自から存する義を、說けるなり、

陸樹芝曰く、蓋承首段立不教坐不言之意、而申言一方、

【通釋】魯國に兀者の叔山無趾と云ふ人あり、或る時足を切られたる故に、踵にて步みながら孔子を訪問せしが、孔子は無趾に謂うて曰く、さても氣の毒なるかな、其の許は不謹愼なるが故に、前日既に刑戮に罹りて是の如く兀者となれり、今更に予を來問なせばとて、最早事の跡にて何ぞ追付くことかあらむ、實に致し方なきことなりと、無趾は之に答へて曰く、此れはもと自分が務め方を知らず、即ち不注意なるより、輕卒に吾が一身を使ひ用ひたるに因りて吾れと自分の足を刑せられて喪ひたり、然しながら今日吾が來りたるは足を喪ひたれども猶足よりも更に尊き者あれば、吾は其の更に尊き者を完全にして損失せざらむと務むるが故なり、夫れ天は廣大にして何れの處をも覆はざるはなし、地は何に物をも載せざるはなし、有らゆる萬物は皆天地の餘蔭にて立ち行きて存在せるなり、吾は只今まで夫子を以て天地と同樣と心得て萬事を倚賴し奉らむと思ひたりしに、その夫子までが矢張り私が刑餘の人なればとて、相手

を學びて、彀を射んと志す程の者は「ネラヒ」の眞中にありて必中の地なれば射損じはなかるべき筈なるに、時に中らざるものあるが如く、吾が明師伯昏先生に從へば擧動皆道に叶ふべき筈なるに、時に過失ありて法網に觸れ處せられ、刑を受くるは是れ此の如き免る可からざる天命に遭遇したる迄にして、致し方なしとて、上文の安二之若一命とある意と互に照應を爲すなりと解したり、亦一說とすべし、〔怫然而怒〕怫は鬱なり、强く惱み怒る意なり、〔廢然而反〕忿怒を廢棄する模樣なり、反とは未だ怒らざりし平常の心に立ち戻ること、「郭注」に廢二向者之怒一而復レ常と是なり、〔洗吾以善〕善道を以て吾が濁り穢れたる心を洗ひ清むること、〔吾與夫子遊十九年矣〕十九年の解は養生主篇に見ゆ、陸樹芝曰く不レ知不レ覺、先生已將二我之塵垢一洗去矣、故十九年來、先生不二我兀一、我亦不二自知一爲二兀也一、說得冰融凍釋、毫無二渣滓一と、〔游於形骸之內〕形骸は身の外面を謂ひ、內は身內に具はれる德を謂ふ、卽ち申徒嘉の心は子產が自分と親むは道德上に就いての交際なりとなり、〔形骸之外〕此れ上文の道德を形骸之內と云へるに對しての語なり、形骸を除きて別に形骸之外てふもの有るにあらず、「郭注」に形骸外矣、其德內矣、今子與二我德一遊耳、而索二我於外好一、豈不二過哉一とあり、岡松甕谷の說に依れば內外の二字は前後誤寫せるなり、卽ち執政なるが故に子產を貴とするにあらず、亦兀者なるが故に自ら己を賤むにあらず、專ら道義を以て相交はるは是れ遊二於形骸之外一なり、然るに子產は申徒嘉が兀者なればとて己と相避けむことを欲するは、是れ索二我於形骸之內一也と姑く參考の爲に錄す、〔子產蹴然〕蹴然は不安なる貌、〔改容更貌〕容は顏容なり、貌は形貌乃ち顏色を改め、威儀を繕ふこと、改レ容更レ貌とあるを觀れば、此より前きに子產が一種の貴族的傲慢の態度たりしことは推して知るべし、〔曰子無乃稱〕稱は稱說なり、「郭注」に已悟則厭二其多言一也とあり、乃ち一旦己が非を氣附くときは繰り返して云はるゝ程つらきものなれば、最早分りたる故に、其の話は止めて吳れとの意なり、

魯有二兀者叔山無趾一、踵見二仲尼一、
仲尼曰、子不レ謹、前既犯レ患若レ是

て身を無事に全くする者は善く善く天命卽ち天運の强き人なるが如し、然るに今世人は自己が幸にして足を無事に全くすればとて、拙者が不幸にして足を喪へる狀を見て笑ふ者は、世間に衆きことなり、此れ全く一時僥倖的なるを氣附かずして居る者にて、實に氣の毒なる次第なり、今我れは他人に嘲り笑はるゝに因りて、怫然（ムツト）として怒ることあれども、不思議なることは一び我が師たる伯昏先生の御許に適くときは、廢然とぐだ〳〵として何となく自然に怒氣が消え失せて、無くなることなり、此れ必らず、我が師伯昏先生が此の拙き我輩を洗ひ淸むるに、善德を以てし給へるが故なるかと、何共解釋が出來ざるなり、

【解義】〔自狀其過〕狀は述なり、又顯かに白はすこと、過は罪過なり、〔以不當亡者衆〕以は以謂と同義に用ひる、「左傳」の昭二十五年に公以告臧孫、臧孫以難、告郈孫、郈孫以可勸とあり、「戰國策」の齊策に臣之妻私臣、臣之妾畏臣、臣之客欲有求於臣、皆以美於徐公とあり、是れ皆、以を訓して謂と爲すなり、亡は刖せられて足を喪ふを謂ふ、王先謙曰く自顯其罪過、以爲不當亡者多矣と、〔以不當存者寡〕王先謙曰く不顯其罪過、而自反以爲不當存足者少也と、〔遊於羿之彀中〕羿は古への射を以て名高き人の名なり、彀は「ネラヒ」又は「ヤゴロ」と訓ず、箭をつかひ弓を張り、物に射中つべき程度を云ふ、〔中央者中地也〕中央は彀の眞中に當る處を謂ふ、中地とは必ず中る場處なるを謂ふ、〔然而不中者命也〕射手が至りて精巧なる羿にして立てる場處は中央必中の地とすれば、受箭に立つ人は極めて危險なれども亦矢が中らずして死を免る者あるは天命なることを謂ふ、乃ち羿彀は法網に喩へ、同じく法網の中に居れば誰か能く自ら己が過失なきことを確信せむや、但刑罰に觸れざるは亦天命の偶然にして、眞の僥倖なるのみとの意なり、此れ子產が兀者にあらずとて誇るに足らざることを言ふ、通義曰游羿之彀中、言在伯昏模範中、擧動不失天、則乃其當然之位、或有不盡善至於犯難者、亦其所遇之命不能逃焉耳、此猶孟子命也有命焉之意、與上文安之若命句相應と、此の說によれば「孟子」に羿之敎人射也必志彀とあるが如く、游於羿之彀中とは羿に從ひ門弟となりて、射術

以其全足、笑吾不全足者衆矣、我怫然而怒、而適先生之所、則廢然而反、不知先生之洗我以善邪、吾與夫子遊十九年矣、而未嘗知吾兀者也、今子與我遊於形骸之內、而子索我於形骸之外、不亦過乎、子產蹵然改容更貌曰、子無乃稱、

【大意】申徒嘉の言を借りて兀者となると、兀者とならざるとも、共に是れ天命にして、一方の誇るに足らざると同時に、一方の悲むに足らず、達德の者は此の如き形骸上の事を忘れて道を樂むことを言ひ、以て德充符の一例と爲せり、

【通釋】子產は猶屈せずして申徒嘉に謂うて曰く、何を申すとも其許は既に刑罰を蒙りて見らるゝ通りの態となれり、今更彼れ此れ理窟を竝べ立つるとも宛かも天下の大聖人たる堯帝と善事の比較を爲すが如し、到底及ぶ可からざるなり、吾子の德量の如何にあるかを數へ計るに、自力を以て、事前に於て己が身に反省するに足らざりし者ならむ、故に必ず何等かの過失により刖刑てふ大打擊を蒙りて、後に始めて今までの夢が醒め、惡しく恐れる心が廢れ消えて、元の自分が居りし所に返りしなるべし、申屠嘉は答へて曰く否とよ、人は大抵各々自惚と申す心があり、今試に人をして自ら己が過惡を白狀せしむるとも、果して自から進んで其の罪を承認するものなるか、即ち殆ど十人が十人己が過惡を自白せずして、皆自からは己を以て善良と爲し、己が所爲は當に此の如く完全に足を存する筈はなし、夙に刑を受くべかりしと爲る者は寡かるべし、要するに幸を得て足を全くするも不幸なる境遇に安んじて、天命に順うて行ふことは、他の者にては出來得ず、唯德ある者にしてこそ始めて之を能くするなり、譬へば昔し弓術の大達人にして、名は羿を申す者が弓に矢を着け、十分挽き滿ちたる中央を進行するならば、必らず矢に中てられて死を免れざる場處なるに、而かも矢が中らずし

き場處ならず、但吾子などは吾子が執政の榮譽なるを悦びて、此れを唯一の大切なるものと思ひて人に矜り高ぶるが故に、本來の不肖が益々不肖になりて肝心なる道德が、他人に後れて進まざるなり、我輩は之を聞きしことあり、曰く鏡が明かにして曇り無ければ、塵や垢は止らずして明晃々と光あり、若し塵垢が止まるときは曇り昏くて明かならず、其れと同理にて久く賢明の人と一處に居るときは心の曇り迷ひが自然に取り拂はれて過失なしと、今や其許が取りて資本となし、大いになる所の者卽ち吾が賴りて聞見を廣むる者は他人にあらず、我が伯昏無人と申し上ぐる大先生なり、此の如き大賢人と久しく共に居りながら、而かも猶ほ且不謹愼なる言語を口より出すこと是の如し、此れは亦子の過ちならざるか、如何にも氣の毒ながら至極愚鈍なる性質の人にて、先生と雖も手の著け樣なき者と見えたりと、

【解義】〔申徒嘉〕申徒は姓嘉は名にして鄭の賢人なり、或は曰く申徒は司徒の轉音、司徒は官の名なりと、〔鄭子產〕子產名は僑と云ふ公孫氏にして鄭の公族、子產は其の字、鄭の大夫たり、〔伯昏無人〕成疏に師者之嘉號也、伯長也、昏闇也、德居二物長一、韜光若闇、洞忘二物我一、故曰二伯昏無人一と、蓋し莊子の寓言的人物なり、〔子見執政而不違〕執政は子產自ら稱す、違は避なり遜讓するを謂ふ、〔子而說子之執政〕而は則の字と同義、古文往々互に通用す、〔今子之所取大〕取大とは賴りて見識を廣めんと求むるを謂ふ、覆蒙に曰く、今日親二就賢者一、因二我之識見卑鄙一、欲レ取二大于先生一、洗レ我以レ善と、

子產曰、子既若レ是矣、猶與下堯爭上善、計二子之德一、不レ足二以自反一邪、申徒嘉曰、自狀二其過一、以レ不レ當レ亡者衆、不レ狀二其過一、以レ不レ當レ存者寡、知不レ可二奈何一而安レ之若レ命、唯有レ德者能レ之、遊二於羿之彀中一、中央者中地也、然而不レ中者命也、人

子而說子之執政而後人者也、聞之曰、鑑明則塵垢不止、止則不明也、久與賢人處則無過、今子之所取大者先生也、而猶出言若是不亦過乎、

【大意】上章と同じ、但上章は常季の問難と、孔子の解答とを借りて、德充符の本旨を發明し、此の章は申徒嘉の兀者と子產の執政とを襯接して本旨を發明したり、遣筆の法は同じからざるも、主意の歸は未だ嘗て異ならざるなり、

【通釋】鄭國に申徒嘉と申す人あり、足を刖られたる兀者なりしが、鄭の公族にして大臣の職に居れる子產と申す人と同じく當時の賢者にして、隱士なる伯昏無人と申す先生を師匠として學びたり、或る時子產は如何に同門とは云へ、執政の尊き身分を以て兀者風情と共に同行するを耻ぢて、申徒嘉に謂うて曰く、向後は我輩が子に先ちて外へ出づる時は、氣の毒ながら、吾子は後に止り給へ、其代りに子が先ちて出づる時は我輩は後に止らむと、然るに其の明日申徒嘉は平氣にて矢張り子產と共に堂を同くし、而かも同席して竝び坐して毫も遠慮の氣色なし、子產は申徒嘉に謂うて曰く、曩に子と約束して我輩が先ちて出づるとき、吾子は後れて止まり、吾子が出づるときは我が輩が殘りて止らむと定めたり、然るに只今は我が輩は將に外に出でむと欲するが、吾子は約束の如く後に殘りて止らむか、其れとも未だ止まることを承知し給はざるか、且つ吾子は一國の執政たる人を見ながら、爲に敬意を表して避くることを爲さずして、之と對抗の禮を行はむとす、抑も吾子は矢張り我輩と同樣に國の執政なる重職に居るものなるか、左樣に無き者が、何に故に此の如く傲慢不敬なることぞやと、申徒嘉は答へて曰く、さても意外なる言葉を承る者なる哉、我が伯昏無人先生とも申し上ぐる大賢者の門下に於て、固より專ら獨り穢れたる勢利富貴を誇りとせる執政などと云へる階級の吾子の言はるゝが如き者があるか、我が先生の門は天爵的の道德をこそ尊ぶべけれ、區々たる人爵などを云ふ可

使用するとにて、乃ち天地は萬物の主にして、萬物は皆盡く天地の生ずる所なれども、己は獨り高く超越して天地を使役して、己が爲に官職を勤めしめ、亦萬物を利用して宛かも己が府庫のものを出納するが如く自由になすとなり、〔直寓六骸象耳目〕直は特なり、解已に上に見ゆ、寓は寄寓なり、六骸は身首及び左右の手足を謂ふ、乃ち己が身體と云ふ、物を以て精神の暫時寄寓する場所位に心得居るとなり、象は迹象なり、「アトカタ」と訓ず、乃ち己が耳目は天よりして人と生み付けたる迹方と思へるとなり、要するに凡て有形の物には左程重きを置かずして、自然の成行に任かすことを謂ふ、「通義」に曰く官府云者選用陰陽、包涵群品也、神寓於形、以耳目爲物象、惟聖靈而已、此數語與橫渠(宋の張栻橫渠先生と稱す)由象識心知象者心、言意相近と、〔一知之所知〕上の知は智と同じ、下の知は知覺するを謂ふ、一は純一にして無二なること、〔擇日而登假〕擇日は良日を擇ぶ也、登は昇る也、假は遐と通ず、遐遠の處に昇る義にて、天に昇ることを謂ふ、「禮記」の曲禮天王登假とあり、天子の崩御を云ふなれども、此處は借りて世を遺て、獨立する意味に用ひたり、王先謙曰く若言黃帝之遊於太淸(天上)と、郭慶藩は曰く登假卽登格也、假格古通用、詩奏格或作奏遐、是其證、爾雅格陟、登升也、旣言登、又曰格者、古人自有複語耳、楚辭離騷陟陞皇之赫戲兮、陟亦陞也と、

申徒嘉兀者也、而與鄭子產同師於伯昏無人、子產謂申徒嘉曰、我先出則子止、子先出則我止、其明日又與合堂同席而坐、子產謂申徒嘉曰、我先出則子止、子先出則我止、今我將出、子可以止乎、其未邪、且子見執政而不違、子齊執政乎、申徒嘉曰、先生之門、固有執政焉如此哉、

部に在るが故に、天より命を受くと爲せるなり、「郭注」に曰く下首は（植物）唯有二松柏一、上首（人類）唯有二聖人一（下の舜を指す）、故凡不レ正者皆來求レ正、若物皆靑全、則無レ貴レ於二松柏一、人各自正 則無レ羨レ於二大聖一而趨レ之と、此れ植物は皆松柏の如く、人類は皆聖人の如くならしめば、別段に松柏を貴とし、人類には聖人を貴しと爲すと云うて、本文の獨の字の義を釋したるなり、〔幸能正生〕 幸は天幸なり、凡そ事別に爲に心力を勞する無くして自然に好結果を奏するを天幸と謂ふ、正生は「易」の乾彖傳に各正二性命一とあると同意にて、此の生は性の字と同義に看做すべし、乃ち舜は私意を雜へずして純良なる本性を全く保つが故に、別に他の衆民の性を感化なさむと意を用ひるにあらずして、衆民自ら感化して正しくなりしを、舜の方面より觀たる言語として本句の如く云へるなり、〔夫保始之徵〕 保は保守なり、始は本性の始めにて、卽ち人の自然に稟受して具有せる德を謂ふ、副墨に正レ生卽正レ性也、正レ性卽守レ宗也、守レ宗卽保也とあり、徵は徵驗なり、徵として驗査すること、〔不懼之實〕 眞に畏懼することなきを謂ふ、此れ上句の保始之徵と共に、文章を奇にして倒字法を用ひたるなり、猶徵レ保レ始實無レ懼と云ふがごとし、乃ち其の能く本性の始を保守したるか否かを徵驗せむには、須く眞實に畏懼すること無きか否かに就いて試察すべしと云うて、下の勇士云云の義を喚起せるなり、〔雄入於九軍〕 雄は雄氣なり、九軍は凡そ師さ一萬二千五百人を一軍と爲し、天子は六軍あり、諸侯は三軍あるを周代の制となす、因て最多數の軍を概說して、九軍と云ふ、乃ち眞に畏懼せざる者は衆力を恃まず、只一人にて萬軍の敵中に入り縱橫に驅け廻りて、將を斬り旗を刈ることを得べしとなり、「淮南子」の繆稱訓篇に勇士一呼、三軍皆避、其出レ之也誠也とあり、此れ壯士の誠を立てし勇を奮へる驗として其の能く終始一貫して渝らざることを言へるが亦以て參考とすべし、〔而能自要〕 要は期なり、乃ち特に高尚なる深い考へを持つにあらず、單に己が勇名を博せむとて能く其の功の必成を期する者すら、尙ほ生死の大事を忘れて一身を以て九軍の中に入るに至るとなり、〔而官天地府萬物〕 官は職なり、府は府庫なり、官天地」とは能く天地を己が任命せる官吏の如くにして

【解義】〔彼爲己〕爲は修なり己の字の下に耳の字を加へて看るべし、乃ち王駘は但能く己の一身を修むる耳にして、初より人を敎へ世を救ふ抔の考を有せざるを謂ふ、〔以其知得其心〕知は智と同じ、兩の其の字倶に王駘を指す、乃ち王駘は自分の眞智の力によりて自分の心理に立ち還り求めて之を會得するを謂ふ、〔以其心得其常心〕常とは永久に云つて易はらざること、乃ち王駘は會得したる自分の心理を以て推して古今永久不變なる心理を悟り得ることを謂ふ、〔物何爲最之哉〕物は外物にして衆人を指す、司馬の說に依れば最は聚なり、乃ち衆人何すれぞ王駘に群り聚りて從ふかと怪みて問へるなり、郭嵩燾は曰く「說文」に最は犯而取也とあり、此の句は猶物莫能犯と言ふが如しと、乃ち外物の力にて犯かす能はざることを謂へるなりと、〔人莫鑑於流水云云〕鑑は照なり、止水は湛へて寂かなる水なり、水動搖する時は一切の影を寫すことを得ず、湛寂なる時は能く物を寫すが故に、人は其の影を水鏡に照らし寫すには、動の水に照らし寫さずして靜止の水に照らし寫すとなり、〔唯止能止衆止〕唯止の上に止水の二字を加へて看るべし、乃ち止水は獨り自然に凝湛なればこそ、能く衆人が凝湛の水を求むる希望を充たすことを得るなれ、若し凝湛ならずして流動するときは決して鑑を求むる衆情に滿足を與ふること能はずとの意なり、「辯正」に曰く以此句爲主、水定則形乃定而可鑑、故鑑者必於止水、喩德未定則人去德定則人歸と、〔受命於地〕植物の首根は下部に在るが故に、地より生命を受くと爲せるなり、〔唯松柏獨也在〕諸注多く在の字を以て下句に屬す、故に褚伯秀は受命於地より唯舜獨也の句に至るまでを以て、文句不齊、似有脫略、陳碧虛張君房校本、作受命於地、唯松柏獨也正、在冬夏青青、受命於天、唯堯舜獨也正、在萬物之首、補亡七字、文順義全、考之郭注、下首(植物)唯有松柏、上首(人類)唯有聖人、則元本經文應有在萬物之首、傳寫遺逸と爲せり、宣穎の「經解」胡方の「辯正」は竝に在の字を以て句絕と爲す、乃ち他の草木は暑寒に至れば、多く枯乾衰落するに管せず、彼の論語にも歲寒而後知松柏之後凋とあるが如く、獨り依然青々として存在せるとなり、王先謙の集解亦同じ、今之を用ひる、〔受命於天〕人類の首は上

つることなるが、松や柏に至りては獨り儼然として在り、冬寒夏暑に於ても青々として色を變せず、之と同理にて命を天に受けて斯の地上に在る人物を視よ、他の人々は多く世の邪濁に傾き陷り易きが、堯舜に至りては獨り卓然として正しきなり、乃ち是れ虞舜は仕合せにも能く己が嘗て受け得たる天性を正くして、尚は進んで衆人の受け得たる天性の邪曲ならむとするを正くしたるなり、今彼の王駘も舜其の人の如く獨り其の正を得たればこそ、他の群弟子等も從うて自ら感化せられて正しくなりたるなり、夫れ一體に物と云ふものは內に充實すれば、必ず外に露はれ出づるが、人と爲りし始の時に受け得たる天德を保維する、必ず亦各々之に相當したる徵驗あり、譬へば勇者には其の中心に物を懼れざる實心あればこそ外面に勇氣が充ち溢れて出づるが如し、勇士一人にて雄々しくも九軍の備への中に飛び込みて何等の怯を爲さず、彼は將に己が勇名を買ひ求めむとして能く自ら其の身に要求する者に過ぎざるだも、猶且己が生死の危きを忘るゝこと此の如し、而かも況して人は天地萬物によりて生息し得ると爲せども、我は寧ろ此の方よりして天地を我が用を給す役人に命じ、天地の生ずる萬物を取りて用ひることは我が府庫の中より所藏品を取り出だすが如くに思ひて、全く單に己が六骸卽ち身體を此の世に寓せ置き、耳や目を像の儘にして自然に身に有り附て居るが故に取り除けもせず、亦左りとて便利なる物として使用をせず、自然に打ち任かして己が知識の知ること卽ち智慟を一にして生ずればとて、亦死すればとて何も變りたる考を持たず、其の心は未だ嘗て死せざる者に於ては其の內に充てる德が外に見はるゝ符として如何なる靈驗が有るか實に測り知るべからず、彼は詰り斯の區々たる人間界に齷齪たらずして、或る良き日を擇びて高く登りて天上に至らむとす、かゝる高尙にして神聖なる彼なるが故に、彼に從遊せる人人よりして彼を慕ひて從ひ遊べるなり、彼の方から將に何ぞ人を己に從はしむる樣なることを以て事とすることを、彼の性質として肯諾せむや卽ち彼の兀者たるが如きは彼の大德より觀れば、全く瑣末なることにて初より論ずるに足らず、德の充符の至尊にして偉大なること此の如きなり、

常季曰、彼爲己以其知、得其心、以其心得其常心、物何爲最之哉、仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水、唯止能止衆止、受命於地、唯松柏獨也在、冬夏青青、受命於天、唯舜獨也正、幸能正生、以正衆生、夫保始之徵、不懼之實、勇士一人、雄入於九軍、將求名而能自要者而猶若是、而況官天地、府萬物、直寓六骸、象耳目、一知之所知、而心未嘗死者乎、彼且擇日而登假、人則從是也、彼且何肯以物爲事乎、

【大意】前節は王駘の自ら兀者たるを忘れて知らざるを言ひ、此の節は彼が從遊の群弟子も亦彼の兀者たるを忘れて知らざるを言ふ、此れ皆德の內に充ちたるものは外に符驗あることを說けるなり、

【通釋】常季更に質問して曰く、彼の王駘は自から己が身を修むるに、己が知を以てするまでにして、自分の心を會得するに、自分の心の働きを以てして、遂に其の永久不變的なる心、卽ち自然の道理を會得したる者にて、畢竟彼れ一身の自修的工夫を成就なし終せたるに過ぎず、然るに他の物卽ち他の心に於て何すれぞ彼を最も賢れたる者として尊ぶことなるか、と、孔子之に答へて曰く人の心は本來同一なれば、彼獨り異なるを得ざれども、尋常衆人の心は動的にて獨り彼の心は靜的なり、世人の水を以て面貌を鑑み照らすものなるが、流水を以て鑑み照らすこと無くして、停止せる水を以て鑑み照らすことは寂靜なるが故なり、唯だ停止して寂靜なるが故に、能く衆人の停止を求むる希望を滿たして之を止むるなり、又彼の生命を天地に受けて斯の地上に在る植物に就いて視よ、他の草木は多く氣候の變遷に伴ひて凋み落

凡そ萬物が皆同一なる點を視て、萬物が得や喪の有りて異なれる點を見認めざるなり、彼の王駘は右の如きなる人を以て、故に自分の足を喪ひて兀者と爲りたるを視做すことは、宛かも高く築き上げたる處の土が雨濕りなどにて大地に崩れ落つるが如く、即ち元の物が物に還りたる許りにて、何等の損得も無しと云ふ心持なり、別に兀者と爲ればとて驚きもせず、哀みもせず、然るを御身達が彼は兀者也と云うて、異樣の感を抱くが既に間違ひたるものなり、

【解義】〔肝膽楚越也〕楚は當時の荊楊二州及び徐豫の南境、即ち今の湖廣兩江及び河南の東南境を有し、鄭（今の湖北荊州府）に都し、越は呉の南にありて、今の浙江紹興府其の故都なれば相去ること遠きを以て、距離の大なるに喩へて云ふ、「呂註」に膽附於肝、本同一體、楚越相去蓋數千里、自其異者而觀雖同體而有數千里之隔とあり、〔萬物皆一也〕齊物論にある天地一指也、萬物一馬也の語、宜く參看すべし、〔夫若然者〕上節の審乎無假云云とあるものを指して云ふ、〔且不知耳目之所宜〕且は將と同じ、亦語助の辭、不知耳目之所宜とは、耳は聲を聽くに宜く、目は色を聽くに宜しければ、凡情は物我の見に囚はれ、聲色の慾に耽溺して自ら一方に宜く一方に宜からざるが如き傾きあれども、審乎無假守其宗の徒に至りては左樣なることなしとなり、〔遊心乎德〕遊は即ち逍遙遊の遊にして、何等の羈束を受けず、自由自在に樂むこと、德とは道德なり、即ち自然の道を云ふ、「成疏」に混同萬物、不知耳目之所宜、故能遊道德之鄕、放任乎至道之境者也とあり、〔喪其足猶遺土也〕岡松甕谷は曰く天之使王駘一脚、王駘以爲足於己與他人有兩脚者無異、是於物視其所一也、初不以爲喪足嬰意、是不見其所喪也、夫如此、故其喪足也、自視猶遺土塊於地、無所顧惜、故曰視喪其足猶遺土塊也と、此說に依れば王駘の考は己が一脚なるは他人の兩脚なると共に天命なれば、物として視るときは皆各同じく、天地間に存在するものにして、皆一なるなり、最初よりして足を喪へることを意にも掛けざるが故に、別に足を喪ひしとも思はざるほどにて、宛かも土塊を地上に遺失したるが如く、今更何等の惜氣も無しとなり、

きこと無きを審かにし、物の變ずるに任かして、倶に遷り而かも物に役せらるゝ無きことを謂へるなりと、姑く參考に備ふ、〔命物之化〕命は主宰者として命令するの意なり、即ち物理を主宰すること、

常季曰、何謂也、仲尼曰、自其異者視之、肝膽楚越也、自其同者視之、萬物皆一也、夫若然者、且不知耳目之所宜、而遊心乎德之和、物視其所一、而不見其所喪、視喪其足、猶遺土也、

【大意】上節の旨を承けて洗發す、即ち所謂守其宗者より觀るときは、萬物もと皆同體にして、彼此の分なければ隨うて一身上に就いても支體の存亡有無は問ふ所にあらざるが故に、王駘に於ては自から己が兀者たることを覺えざることを言へり、

【通釋】常季は孔子の答が深遠なる意味を含まれ居るを以て、更に重ねて質問して曰ふ樣に、先生の御言葉は、餘程深意の有るやうに伺ひまするが、如何なる義に御座るかと、孔子は又教を垂れて曰はるゝに、君は異なると一なるとは如何なる物を指して言へるかを知れるや、物の化せし迹方より視れば、各々異なりて同からず、物の本源に溯りて尋ぬれば、何れも皆同じくして異なるにあらず、即ち異なる上より言へば肝と膽とは均しく一身中に在れども、肝は何邊までも矢張り肝にして、膽は亦何邊までも矢張り膽なり、此を同じく一にすべからざることは、楚國が越國と相離れて居る數千里なると同斷なるぞ、即ち異なる方面より觀るときは肝膽の極めて密接なる關係を有するも、矢張り異なれるなり、亦同じき點より云へば、天地間に有ゆる萬物も皆本と一源なるぞ、故に彼の此の道理を悟りて、本源即ち其の宗を守る者に於ては、我が身體も萬物と一體なるを知れる故に、將に己が耳に聽き目に視る働きの事柄を打ち忘れて、其の心を自然の德の上に置き、即ち之が己の物とか人の物とかなどと區々たる差別を爲す樣なる事をなさずして、何事をも自然の道理に打ち任かせり、されば

落さるゝ様なことは無からむとす、無假とて假り設けたるもので無き、眞正の者、卽ち眞君眞宰と云ふもの所在を審かに突き止めて、天地萬物の根原を善く呑み込み合點して、他の如何なる物が來りて誘惑壓迫をなすとも、爲に遷り動かず、卽ち變改も出來ず、遺失も出來ず、尙ほ其れのみならず、屹然と吾よりして萬物の變化することを主宰し、而かも其の本宗と中すべき天地萬物の根本なる大要點を確と執り守るなり、

【解義】〔而王先生〕居然として王先生たることを謂ふ、「宣注」に儼爲二人師一と、又一說に王は旺なり、盛なり、先生は孔子を指して云ふ、乃ち孔子よりも盛なるとなり、前說を可とす、〔死生亦大矣〕或は曰く死生の死は附帶して言ふ、宛かも猶一旦緩急の緩の字の如しと、然れども此は深く拘らずして可なり、〔而不得與之變〕之は王駘を指す、死生の變たるや大なりと雖も、王駘をして之に從うて與に變ずるを爲すを得ざらしむとの義にて、卽ち死生を以て脅迫すと雖も、王駘の心は儼然として動かずとなり、「郭注」は曰く彼與レ變俱、故不レ變二於彼一、此れ王駘自然の根本義を悟れるが故に、何に事をも移り易るに任かして、自分も亦俱に之と移り易ふるを以て、死生其物が王駘と背與に變ずることを得ず、卽ち生死の二者共に一箇の王駘を如何とも爲すこと能はずと解したるなり、一說孰れも皆通ず、〔亦將不與之遺〕遺は失なり、天地顚覆して地上に載せられたる有ゆる萬物は、將に盡く下に墜ちんとする狀は、宛かも物が地上に遺失するが如くなるも、流石王駘に對しては其の影響を及ぼすことを得ず、王駘は他物の如くに天地顚覆の爲に俱に墜下せず、卽ち他物は墜下するとも王駘を卷き込むことを爲さずとなり、「通義」に曰く死生者人世莫大之事、駘也其心不レ隨レ之而變、不三但一身之死生、極二其變一而言、雖二天地覆墜一、其虛靈之昭然獨存不與二形器一同變幻上と、李云く天地猶不レ能レ變、況生死也と、〔審乎無假〕假は眞の反對にして、無假とは眞のことなり、「宣注」には能知二眞宰一とあり、「郭注」に明二性命之固當一とあり、郭慶藩曰く無假は無瑕の誤なり、「淮南子」の精神訓篇には正に審二乎無瑕一に作る、瑕と假と聲近きを以て互に誤り易きを致せしのみ、瑕は疵なり、「キズ」と訓ず、乃ち己が瑕疵とすべ

り、卽ち外に深き意味あるにあらず、ホンの衆人に出で後れて、未だ往かずとの意味なり、「奚假魯國」「郭注」によれば奚假は何但と同じ、「助字辨略」に假廣韻云且也、借也、愚案假是設辭、且復譬況、故云且也借也、莊子德充篇、奚假魯國、丘得引天下而與從之、郭注訓奚假爲何但、愚案但第也、第且也、假既爲且、故亦得爲但也と云へり、

常季曰、彼兀者也、而王先生、其與庸亦遠矣、若然者、其用心也獨若之何、仲尼曰、死生亦大矣、而不得與之變、雖天地覆墜、亦將不與之遺、審乎無假而不與物遷、命物之化而守其宗者也、

【大意】此れ以下、德の充つることを言ふ、德とは卽ち齊物論にある無成心にして、能く因是の道に由ることを身に會得合點するに外ならざれば、死生の變も爲に之を變ずるを得ず、天地の覆墜も爲に之を遺失するを得ず、要するに蓋し萬物の中各自ら眞理となせる道なり、我は只其の道に隨うて行止動靜を爲すに過ぎず、是れ卽ち一箇の無成心之が主宰たるに由るものなることを說けり、

【通釋】常季又重ねて問うて曰く、彼の王駘は高が兀者風情なり、而かも世人は王先生と曰うて崇め尊ぶと申すものは、彼は庸常平凡の人とは大分異なる人物と見えたり、扨左樣なる者は其の心を使ふ按排は獨り如何許なることとなるか、定めて心勞するならむと、孔子答へて曰く人の死生と申すことは、或る道理より觀るときは、生あれは必ず死あることにて、左程驚くに足らずとは申しながら、矢張一面から觀るときは、一切なること分り切りて居れり、而かも自分に修養を積みしときは、自然が自分を生かさむとすれば、自分は之に隨うて俱に生き、死せしめむとすれば、亦隨うて俱に死し、卽ち生かさうが夭死さうが自然の爲すがまゝに任かして、之に就き從へるが故に、死生と云ふものゝ方からして吾を見棄てゝ變改をなすことを得ず、尙其れのみならず、天地が顚覆して墜つるとも亦將に之に隨うて遺失して、共に取り

國中の人々之を慕ひて從遊する者は、彼の三千人の弟子ありと稱する孔子と同樣の多人數なりき、或る時常季と申す人は孔子に質問して曰く、彼の王駘と申す者は高が刑餘の罪人たる兀者位なるに、國人の彼が盛德を慕ひて從ひ遊ぶ者は、失禮ながら我が夫子卽ち尊師と魯國を中程の地より双方に分ちて有する位の多勢なり、然れども王駘は立ちて敎ふること無く、坐して議論することなく、卽ち別段に世話を致さざるに、弟子共は初め入門のときは何等の知識もなく、全く一無物にして往きしものが、王駘の手許を辭して出づるときは何等かの物を十分に會得するとがあり、滿々と實益を得て歸るなり、さて如何にも不思議なる次第に存ずるが、彼は固より申す迄もなく、不言の敎とて別段言葉に出して敎へざるも、自然に敎化を與へて、別に取り立てゝ云ふべき程の形ち物はなきも、心感上にて成就して遂ぐる偉大なる感化力を有するものか、是れ全體彼は如何なる人柄なるかと、孔子は答へて曰く、彼の先生卽ち王駘は仲々聖人なり、吾が輩の相手などと申す人ならむや、此の孔丘に於ては全く衆人に後れて未だ從學せざる計なり丘も是非共彼の人を以て吾が師匠と爲さむと思へるなり、況や吾に如かざる人達は猶更の事尊信すべきなり、且奚ぞたゞ一の魯國の人々のみならむ、吾は彼の王駘先生の如きものには天下の人を引き連れて從遊せしめ度く思へるなり、

【解義】〔魯有兀者〕兀は音「コツ」、又音「カイ」、介の篆書の形ち、兀に似たるより誤りしとも云ふ、足を刖るを兀と曰ふ、〔常季問於仲尼〕常は姓、季は名にして魯の賢人なり、或は孔子の弟子とも云へり、〔立不敎云云〕講説の敎なきを言ふ、「通義」に曰く、立不敎句、只是起下文固有不言之敎二句意、〔虛而往實而歸〕岡松甕谷曰く往從之者皆空虛、未有所見、一見而歸、卽充然有得矣と、乃ち空虛にして何等の知る所なき者が、一たび王駘に見る時は、十分に理義上の利益を得て、歸ることを、善く敎へて弟子各々に自得する所あるを謂ふ、〔無形而心成〕林希逸曰く無形無所見、心成感之而化也と、此れ弟子に於て別に物形ちに就いて見ることなきも、其の心自然に之に感化せらるゝことを謂ふと釋したるなり、〔丘也直後〕直は特と同樣にて、「タダ」と訓ず、既に前に解せ

兀者（王駘）、又一箇兀者（申屠嘉）、又一箇兀者（叔山無趾）、又一箇惡人（哀駘它）、又一箇闉跂誰無脤、又一箇甕盎大癭（以上共に本篇に見ゆ）、令讀者如登舞場、怪狀錯落不知何故、蓋深明德符全不是外邊的事、先要抹去形骸一邊、則德之所以爲德、不言自見、却撰出如許傀儡、劈面翻來、眞是以之爲戲也と、乃ち道德の內外一致を說かむとすれば、何人も大概は外部に於ては容儀を修め、禮法を正くするを務めとなすべきに、獨り本篇は故らに兀者王駘を始め、種々不具畸形の人を擧げ來りて、德充符の人と爲せるを觀て、先づ其の放膽的文章に一大驚を喫するなるべし、是れ德の充ち溢るゝと云ふことは、決して外的形骸上に就いて觀る可からざるのみにあらず、又尙は進んで形迹上に囚はるゝこと無くして、始めて眞の道德の尊貴なるを知るべきことを言はむが爲に、故らに斯く不具畸形の人々を引證的に列擧せられたるなり、

魯有兀者王駘、從之遊者、與仲尼相若、常季問於仲尼曰、王駘兀者也、從之遊者、與夫子中分魯、立不教、坐不議、虛而往、實而歸、固有不言之教、無形而心成者邪、是何人也、仲尼曰、夫子聖人也、丘也直後而未往耳、丘將以爲師、而況不若丘者乎、奚假魯國、丘將引天下而與從之、

【大意】兀者王駘の事を借り來りて、道德の內に充つるあれば必らず外に應效ありて、形體の醜美は初めより道德の高卑に毫も影響を爲さざるを言ひ、以て凡て物事の形迹に囚れて、道理を判斷すべからざることを明かにす、本文先づ常季の問を揭げ、仲尼の答を以て之を解決す、本章三段皆同じ、是れ其の發端とす、

【通釋】刑罰により足を斷たれたる者を兀者と申すことなるが、玆に魯の國に兀者の王駘と申す男あり、

の詞亦押韻を用ひる寇煎を協韻とし伐割を一韻とす、或は曰く末句の用の字を疊韻とし、接輿の歌詞なりと、

名言

治國去之、亂國就之、醫門多疾、

德蕩乎名、知出乎爭、名也者相軋也、知也者爭之器也、

無聽之以耳、而聽之以心、無聽之以心、而聽之以氣、

絕迹易、無行地難、爲人使易以僞、爲天使難以僞、

瞻彼闋者、虛室生白、吉祥止止、

夫狗耳目、內通而外於心知、鬼神將來舍、而況人乎、

子之愛親命也、不可解於心、臣之事君義也、無所逃於天地之間、

夫事其親者、不擇地而安之、孝之至也、夫事其君者不擇事而安之、忠之盛也、

凡交近則必相靡以信、遠則必忠之以言、

兩喜必多溢美之言、兩惡必多溢惡之言、

以巧鬬力者、始乎陽、常卒乎陰、大至則多奇巧、以禮飮酒者、始乎治、常卒乎亂、大至則多奇樂、其作始也簡、其將畢也必巨、

言者風波也、行者實喪也、夫風波易以動、實喪易以危、

形莫若就、心莫若和、就不欲入、和不欲出、

意有所至、而愛有所亡、

天下有道、聖人成焉、天下無道、聖人生焉、

山木自寇也、膏火自煎也、桂可食、故伐之、漆可用、故割之、皆知有用之用、而莫知無用之用也、

剋核太至、則必有不肖之心應之、

美成在久、惡成不及改、

德充符第五

德は道德なり、符は符節の符にして、「ワリフ」と訓ず、符節はもと雙方を合はすときは寸毫の違ひなく能く合ふものなるが故に、人の道德身內に充實すれば、其の模樣必ず外面に形はれて、內外一致の符あるよりして德の充つる符なりとの意味にて、三字を以て篇名となし、以て道德の涵養を務むべく尊ふべきことを論述せり、宣穎曰く劈頭出一箇

之に氣附かずして、豫め避くるを知らずとなり、〔如畫地而趨〕畫地とは地に線を畫くことなり、乃ち地上に線を畫き引き、人をして之を緣りて行かしむと同樣にて、徒に勞力を爲しながら、何等の效果を收むることなきを謂ふ、「郭注」には夫畫地而使人循之、其跡不可掩矣とあり、乃ち線を地上に畫きて人をして之に循うて行かしむるときは、其の跡は明かに殘りて掩ひ匿すべからざるが如く、己の行動が餘り露骨になり過ぎて人より怨を買ひ、危き禍を招き易きことを謂ふ、又地上に劃して界を作り、其の處を趨ることにて、定規に拘り過ぎて自ら苦むことの說もあり、〔迷陽迷陽〕迷陽は薇のこと、「ゼンマイ」と訓ず、芒刺ありて味苦し、山中の人采りて食とす、「郭注」には迷陽、杌亡陽也（亡は無なり陽は動なり）と解して、亡陽、任獨、不蕩於外、則吾行全矣とあり、乃ち人の性外に動くことなくして自ら本分を守るときは、吾が德行は全しとなり、〔無傷吾行〕迷陽を薇と解すれば、吾行の行は步行の行なり、下文の無傷吾足とあるを觀れば、行を行步の行と爲し、迷陽を薇と解する方可なり、「吾行郤曲」「宣注」に郤步委曲不肯直行とあり、〔無傷吾足〕接輿の詞、蓋し此の詞中の押韻は衰追を一韻とし、成生刑を一韻とし、羽載を一韻とす、載は子利反に讀み、音「シ」と爲りて、羽に叶ふ、「詩經」の小雅の受言載之の載が下句の喜地の二字に叶ふと同じ、五段は地避を韻とす、六段は殆己を韻とす、此れ亦殆の己と協韻たるは「孫子」の謀攻篇に知彼知己、百戰不殆とありて、己殆を一韻と爲じたるが如し、陽行を一韻とす、曲足を一韻とす、〔山木自寇也〕寇は伐なり、「成疏」に曰く、山中之木、楸梓之材、徒爲有用、橫遭寇伐と、〔膏火自煎〕「成疏」に曰く膏能明照、以充燈炬、爲其有用、故被煎燒、豈獨膏、在人亦然と、「辯正」には山以生木、自盜其氣膏以生火、自銷其質とあり、此の說に依れば山をもて自ら寇だするなり、膏は火もて自ら焚くなりと讀むべし、乃ち山は樹木の爲に其の水分地味を吸ひ取られて瘠せ、膏は火を生ずるを以て自ら生じたる火に、其の素質を焚き盡くすなり、皆自業自得の災なるを謂ふ、〔桂可食〕李時珍曰く桂卽肉桂也、厚而辛烈、去粗皮用其去内外皮者、名桂心と成疏に桂心辛香、故遭斫伐とあり、山木より以下

故に、人に其の樹皮を割きて傷けらる、此等の例を觀て其の所能を外に誇り示すときは、反りて身の禍と爲ることを悟るべし、凡て人は何れも有用之用とて能く働きあるものが役に立つことを知りて、而かも無用之用とて其の實是ぞと別に取り立てゝ云ふべき所能なきものが、反りて役に立つことを知らざるなり、洵に悲むべく、亦憐むべき次第なり、

【解義】〔楚狂接輿〕狂とは「孟子」の盡心篇に狂者進取とあるが如く、志の高尚にして行の簡略なるを狂といふ、「高士傳」に陸通字接輿、與妻倶隱蜀峨眉山、食菌櫨實、黄菁子、壽數百年とあり、朱子の説に依れば接輿は佯狂して世を避くとあり、或は曰く接は姓にして、名は輿と云ふ、「莊子」に季眞之莫爲、接子之或使とあり、又漢の世に接昕と云ふ人あり、以て姓としたるを證すべしと、〔鳳兮鳳兮〕鳳は鳳鳥にして支那の古代に在りては麟鳳龜龍と并べ稱して四靈と曰ひ、天下太平なるときは見はれ、太平ならざるときは隱れて見はれざる靈鳥と爲せり、狂輿因て孔子を比して云へるなり、「論語」の微子篇にも楚の狂接輿歌而過孔子之門曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下欲與之言、趨而避之、不得與之言とあり、「莊子」の本文と大概意同くして語少しく詳略異同あり、〔何如德之衰也〕何如は「成疏」に猶如何也とあり、「論語」の朱註に鳳有道則見、無道則隱、接輿以比孔子、而譏其不能隱、爲德衰也と云へり、〔聖人成焉〕成焉とは天下を救ひて功業を成就することなり、「成疏」に有道之君、休明之世、聖人弘道施教、成就天下、時逢暗主、命屬荒季、適可全生遠害、韜光晦迹とあり、〔福輕乎羽云云〕福は全生保壽の事を指して云ふ、全生保壽の道は能く己が本來の性分に循ひて、天然の道理に任かすときは、別に心を苦しめ力を勞せずとも自然に得ることなれば、其の爲し易きこと宛も鳥の毛を擧ぐるよりも輕しとなり、乃ち至輕の毛と雖も猶擧ぐるときは多少の手を以てして、多少の力を用ひれども福を得ることは自然なればなり、〔禍重乎地云云〕分外の利益を貪り求むるときは、必ず身を危くして生を喪ひ、或は夭折等の禍ありて動かすべからざることは、宛も厚き層ある土地の重きが如く、容易に移すべからず、然るに世人は

と甚だ神聖にして、太平の祥瑞と仰がれながら、此の亂れたる世に現れ來るときは何如ぞ、汝が道德の衰へたることにや、實に歎はしき次第なり、今より將來に向うて太平を望まむとすれば、仲々遠くして到底汝ち生命が待つことを得ず、去りとて既に往きにし世に就いて太平を求めむとすれば、過ぎ去りし跡は到底も追ひ著くべきにあらず、汝鳳凰よ、汝の出で時が甚だ宜からず、さても惜しきことなり、全體天下が道ありて太平ならむには、聖人は權威ある官位に居て、其の功業を成就し、天下が道なくして亂世ならむには、聖人は退きて野に居り、獨り己が生命を安全に保つことを爲すが、古來定まりたる法則なり、今の如き亂世に當り、命を安全に保つ程の幸福なることは、無きものなるが、其の幸福は別に外方の加勢を假らず、皆己が自力にて取り得らるゝことは、宛かも鳥の羽を載するより輕く、寔に仔細なく持ち擧ぐることが出來るものなるに、世の人は兎角嫌ひ厭うて之を載せて行ふものなし、之に反し分外なる利益を貪り怨を買ひ、罪過を重ぬる程禍の大なるはなし、卽ち其の耐へ難きは厚層なる土地の重りよりも重し、然るに世人は利欲に惑ひて此の重き禍を避くることを知る者なし、誠に已みなむ、已みなむ、至極駄目の事なるかな、此の亂世に當りて多くの人に臨むに道德を以てして、吾こそ聖人賢人なりと誇り顏を爲して、世上に立つときは、自然に衆人の嫉妬憎惡を受けて、如何なる危害を加へらるゝやも料り難し、誠に殆き事なり、誠に殆き事なり、而して窮屈なることは土地に境界を區畫して、其の內を趨るが如く、吾が身を置くべき場處至て狹きを感ず、又此の世路を涉るは宛も山路を行くが如くなるぞ、山路には多く人の足を傷ける迷陽と云ふ刺（トゲ）ある草があるぞ、迷陽よ、迷陽よ、願くは汝妄に吾が行く脚を刺して傷くることなかれ、又而して吾に於ても吾が出て行くときは、宜く障礙物の有る處に至らば、一たび後へ卻き避けて行き、無理に進みて傷害を取ること無かれ、又凡て物は自ら出張りて人目に著くことを爲すが故に、災を招くなり、例へば山中の木は屋の棟梁などに爲りて有用なるが、身の寇となりて、人に斬り取られ、膏の火は明かにして暗を照らすを以て、自ら煎られ、肉桂は食ふべきが故に、人に伐られ漆は塗り物に用ひるべき

こと、〔受三鍾與十束薪〕六斗四升を鍾と曰ふ、〔又況支離其德者乎〕上文の支離を活用して形容詞となし、以て其の身を無用の地に置きて、世俗の用に中らざらしむることを謂ふ、此の一句乃ち全節の正意と爲す、「成疏」に曰く支離其形者猶忘形也、支離其德者猶忘其德也、忘德者智周於萬物而反智於愚、明並三光（日月星）、而歸明於昧と、即ち己が萬物に行き渡れる智や明の萬事を照らす明の力を持ちながら、智を誇り明を恃まずして、善く因是の行を爲して、己を衒ひ耀らすことを爲さざるなり、

孔子適楚、楚狂接輿遊其門曰、鳳兮鳳兮、何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也、天下有道、聖人成焉、天下無道聖人生焉、方今之時、僅免刑焉、福輕乎羽、莫之知載、禍重乎地、莫之知避、已乎已乎、臨人以德、殆乎殆乎、畫地而趨、迷陽迷陽、無傷吾行、吾行郤曲、無傷吾足、山木自寇也、膏火自煎也、桂可食、故伐之、漆可用、故割之、人皆知有用之用、而莫知無用之用也、

【大意】接輿の歌を借り來りて無用乃ち是れ大用たることを謂ふ、末句の人皆知有用之用而莫知無用之用也の二語、尤も其の正意を見し、亦以て通篇を結ぶ、此の篇初頭に顏回孔子の問答を擧げ、虛無心齋の義を述べしに拘らず、篇末は接輿の孔子を譏れる言を擧げ、以て其の言外に於て孔子と雖も眞の道の意義に至りては、尙ほ透見すること能はざるを說けり、是れ莊子が寓意の存する處と知るべし、

【通釋】孔子嘗て楚國に適きしが、或る日、楚の狂接輿と申す人ありて、孔子が旅館の門に至りて申しけるに、あゝ鳳鳥よ、鳳鳥よ、さて鳳凰と申すものは、も

も、彼れ支離は不治の常病人なるを以て、仕事を吩ひ付けられずして免役となれり、而して政府が國內の重患大病人に恤み米等を施與するときは、彼は右の如き不具者なるを以て、其の員數に加はりて、三鍾の粟と十束の薪とを救助として貰ひ受くるなり、是れ不具癈疾は反りて一身の利益を爲せるなり、其れそ の形體を支離にして無用の身となりてさへも、以て己が身を養ひ生活を爲し、終身を送るに十分なれば、況して其の德を彼の身體を支離にしたるが如くに、世に無用の物となりたらむには、乃ち其の實大用の物と爲りて利益あることは如何許なるか、莫大にして計り切れざることとなり、

【解義】〔支離疏〕支は肢と同じ、手足四肢のこと、離は析なり、「ワカル」と訓じ、不完全なること、疏は百體の寬疏（フジマワリ）を謂ふ、此の人、身體の畸形不具なるを以て、此の名を付したるなり、或は曰く支離は身體の不完全なる貌、疏は其の人の名なりと、〔肩高於頂〕一に項に作る、司馬彪曰く言脊曲頸縮也、〔會撮指天〕司馬の說に依れば、會撮は髻なり、古への人髮を結び、髻は項の中央に在り、今支離脊曲り頭低きが故に、髻は上を指して天に向へるなり、「崔說」に依れば會撮は項椎とて大椎の間骨の會集ある處を云ふ、「成疏」は會撮は高豎の貌とあり、尙ほ衆說あれども略す、今姑く司馬說を用ひる、〔五管在上〕五管は五臟の管なり、一に腧（アナ）と言ふ、〔兩髀爲脇〕髀は「ウチモヽ」と訓ず、股の外を髖と曰ひ、股の內を髀と曰ふ、脇は「ワキ」と訓ず、人の身胸の左右に分れたる腋下なり、字或は脇に作る、〔挫鍼治繲〕挫は按なり、鍼は針（ハリ）なり、按鍼とは針を按て衣を縫ふこと、繲は音「介」、故衣なり、治繲とは故衣を洗ふこと、〔足以餬口〕餬は饘なり、「カユ」と訓ず、餬口とは口に餬を食ふとの義より食物供給を營むことを謂ふ、〔鼓筴播精〕鼓は動なり、筴は小箕なり、鼓筴は箕を振ひ動かすなり、播は放なり、棄なり、精は精粹の米を謂ふ、〔足以食十人〕食は音「シ」、飼と同じ、養なり、〔攘臂而遊〕攘臂の臂は肱なり、腕なり、攘臂は肱高擧げて左右の手を打振ふるを謂ふ、俗に大腕を振ると云ふと同じ、「孟子」にも馮婦攘臂下車の文あり、亦自ら勢を振ひ作すことを形容して云へり、〔不受功〕功は功程なり、仕事の割り付け方の

足以食十人、上徵武士、則支離攘臂於其間、上有大役、則支離以有常疾不受功、上與病者粟、則受三鍾與十束薪、夫支離其形者、猶足以養其身、終其天年、又況支離其德者乎、

【大意】此れ人形の不具なるを譬喩に假りて無用の反りて大用となることを言ふ、末句の又況支離其德者乎の一句始めて正意を露はして說けり、

【通釋】人類の上に就いて言はむに、支離疏と申して不完なる支體の人にして名は疏と曰へる者あり、誠に異樣なる形ち姿にて先づ彼か頤は首が除り多く前に垂れ下りて居る故に、其の臍を覆ひ隱くし、首が垂れ下りて腹間に在る故に、左右の雙肩は突き立ちて頭の頂上よりも高く、會撮とて卽ち髮を結び束ねて居る形ちは、首が前に垂れ下りて居る故に、髻の方が高く聳えて天の方へ指し向へり、通常なれば人の五臟の管は背部に在るものなるが、彼は首が垂れ身が曲り、馬の脊の如くなるが故に、五臟の管は反りて上に在り、又普通人の兩脇は降りて下にあるが常なるに、彼は背は曲りて鈎の如くなるを以て、下部に位すべき左右の兩髀は、反りて脇の處に當れり、然れども針を挍て衣服を縫ひ、治繲とて故衣を洗濯して己が餬口を爲すには差支なし、又鼓筴とて箕を以て穀類の籾粃を簸出し、播精とて穀類の粗惡なるものを播去りて、精粹なる部分を撰び出すを以て、職業と爲し、其の賃金にて家族十人を養ふに足れり、卽ち身體は不具的なれども生活には別に差支なきことなり、尙ほ又一步を進めて言へば、獨り生活に差支なきのみならず、斯くの如き不具的身體なればこそ、反りて大いなる利益あり、一旦國家に兵起り戰が始まるに際して、政府が武士を徵集して、戰爭に使役するときは、支離疏は不具癈物の身なるが故に、兵役を免せれて多くの壯丁共が出征の爲に、大騷ぎに騷ぐ時に當りて、彼は兩腕を其の間に打ち振りて、誰れ憚からず公々然として往來するとなり、政府に土木の大役ありて、盛に國民を驅り出して役夫とする時に當りて

の郊祀志に古者天子春有解祠とあり、亦本文の解と其の義を同くす、〔牛之白顙〕顙は「ヒタヒ」と訓ず、「方言」に東齊謂顙爲顙とあり、白顙とは白き色の顙にて祭禮には必ず純全なる色の犧牲を供ふるを以て大禮と爲せば純全ならざる毛色なるを以て用ひざるなり、〔豚之亢鼻〕亢は「タカシ」と訓ず、亢鼻とは鼻の直ならず、折け曲りて尖り高く、俗に所謂天狗の鼻の如くなるを言ふ、此れ形の畸形なるを以て犧牲となさざるなり、〔人有痔者〕痔は後の病なり、「不可適河」適は往なり、卽ち其の色純ならず、若くは其の形正しからず、若くは不淨の病あるを以て、此等の犧牲として以て河水の滸に適き、水神を祭るべからずとなり、人有痔者は以て犧牲と爲すべからずとあるときは、痔を病まざる人は犧牲として神を祭るべきかとの疑ひあらむも、此れは「春秋」僖公十九年の左傳にも宋公使邾子用鄫子於次唯之社とあるが如く、往古支那の野蠻の地には、人を殺し犧牲と爲して神を祭りしことあり、又魏の西門豹が鄴を治めし時、巫を河に沈めて、以て人を犧牲とし、神を祭る惡弊を絕ちしことあり、是れ有名なる事蹟なり、〔巫祝以知之矣〕巫は「ミコ」と訓ず、「說文」に祝也、女能事無形、以舞降神也とあり女子の神に事へて來降せしむる者なり、祝は「ハフリ」と訓ず、神を祭ることを職とする男子を謂ふ、「成疏」に祝者執板、讀祭文者也とあり、以は已に同じ、「スデニ」と訓ず、知之とは不可以適河の故を知れるなり、「郭注」には巫祝於此亦知不材者全也となり、〔所以爲大祥也〕大祥は上の不祥に反映して云へる辭、巫祝は白顙亢鼻痔病の三者皆共に祭神の用に供ふべからざるを知りて、不祥の物となせども、神人は此の三者が無用なるが故を以て、犧牲の厄を免れて生を全くし得るを見て、反りて大祥となせりとなり、卽ち無用の物を無用なりとて擯斥するは、普通世間の巫祝的小智にして無用の物が有用なることを解し得てこそ、眞に神人的大智なることを謂へるなり、

支離疏者、頤隱於齊、肩高於頂、會撮指天、五管在上、兩髀爲脇、挫鍼治繲、足以餬口、鼓筴播精、

【大意】木は材を以て斬られ、牛豚は疵病を以て殺を免るを擧げて、不材無用の方に身を保ち生を全くするを得しことを說けり、宣穎は曰く子綦口中帶叙一事反襯と、

【通釋】宋國に荊氏と云ふ土地あり、地質は楸や柏や桑の三木を植ゑ付くるに相應して宜ろし、然れども三木は高大に繁茂すれども、纔かに拱把以上とて一抱へ半抱へ以上になるときは、獮猴を蓄ひ養へる人が杙に用ゐるが爲に斬られ、三抱四抱に長ずるときは、高く明らかなる大家の欐の用として、建築材に供せられて之を斬られ、七抱八抱の太さになるときは、貴人富商が葬式の時に樿傍とて遺骸を藏むる棺槨の或る部分の木材を求むるものに斬らる、されば未だ其の木天壽の年を滿足に終へざる內に、中途にして斧や斤に斬られ、壽命を縮められて、夭死を爲せり、此れ全く餘り彼の木が材きの有る處よりして、此の患へに掛るなり、若しも此の木が無用の材なりせば、何れも顧みるもの無ければ、無事息災に長壽を爲すべかりしなり、

【解義】〔宋有荊氏〕宋は國の名にて、既に前に見ゆ、荊氏は地の名なり、〔宜楸柏桑〕宜とは地質に相應して、繁茂すること、楸は喬木の名「ヒサギ」と訓ず、榎の一種、李時珍曰、葉大而早脫、故謂之楸、榎葉小而早秀、故謂之榎と、柏は「カエデ」又は「ソバタデ」と訓ず、香木の名なり、李時珍曰く其樹聳立、其皮薄、其肌膩、其花細瑣、其實成球、狀如小鈴、霜後四裂、中有數子、大如麥粒、芬香可愛と、桑は樹の名、別に解に及ばず、〔拱把而上〕拱は兩手にて圍むこと、把は一手にて握ること、孟子の告子篇に拱把桐梓とあり、朱注に見えたり、〔狙猴之杙〕狙猴は獮猴にて「サル」と訓ず、杙は橜なり、「クヒ」と訓ず、又杆なり、「ムチ」と訓ず、猴を擊つの鞭の類、〔高名之麗〕高名なる家屋の棟なり、「莊子通義」に名は明に通ずと爲せり、麗は欐と同じ、屋棟なり「ムナギ」と訓ず、〔求樿傍者〕「成疏」に依れば棺の一邊を全材にて造り、合せ木を用ひざるものを樿傍と曰ふ、其の木材極めて大なれば、故に大樹を斬り取らざる可からず、「此材之患也」「成疏」に斯皆以其才能爲之患害也とあり、〔故解以之〕解は祭の名なり、神に向うて自己の罪を解除し福を禱る義よりして解と名けり、「漢書」

あり、此の說によるときは、千乘の車が熱き時は其の蔭に庇はれて息ふべしと解するなり、孰れにしても大木の大さを形容したる詞なり、〔拳曲而云云〕其の狀拳を曲げたるが如くに盤結すること、棟は「ムナキ」と訓ず、屋脊なり、梁は「ウツバリ」と訓ず、屋脊の木を棟と曰ひ、棟を負ふ者を梁と曰ふ、皆大材を用ゐる、〔軸解而不可云云〕軸はもと車軸のことにて、車の輪を持つものにして、「ヨコガミ」又は「コシキ」と訓ず、軸解とは木中の心虛なるを、車軸の心木の表面の如く堅確なるに似たれども、其の實は虛なるが故に用ひるべからざるに見立てゝ、軸解と曰はれたり、又木理の散ずるを軸解と謂ふとの說あり、〔咶其葉〕咶は音「シ」、「ネブル」と訓ず、舐の本字と同じ、〔口爛而傷〕爛は「タヾレル」と訓ず、熟なり、「方言」に自河以北、趙魏之間、火熟曰爛、此の處は木葉の烈しき毒に中られて、脣吻の膨脹するを謂ふ、〔使人狂酲〕酲は「サカヤマヒ」と訓ず、酒を病むこと、俗に醉狂と云ふ、木異樣なる臭氣に中てられて、心の醉ふこと、酲の如くなるを謂ふ、〔嗟乎神人〕乎は呼と同じ、〔以此不材〕此とは大木を指す、乃ち神人も矢張り此の大木の不材なるを手本として、己が材能を見はさず、故に世に無用となりて、其の天德獨り全きことを得るとなり、

宋有荊氏者、宜楸柏桑、其拱把而上者、求狙猴之杙者斬之、三圍四圍、求高名之麗者斬之、七圍八圍、貴人富商之家求樿傍者斬之、故未終其天年、而中道之夭於斧斤、此才之患也、故解之以牛之白顙者、與豚之亢鼻者、與人有痔病者、不可以適河、此皆巫祝以知之矣、所以爲不祥也、此乃神人之所以爲大祥也、

人狂醒三日而不已、子綦曰、此果不材之木也、以至於此其大也、嗟乎神人以此不材、

【大意】 大體は前節と同じく、無用の反りて大用たるを謂ふ、但彼は用の上に就いて有と無と言ひ、此は祥の上に就いて不と大とを言ひ、彼は其の初め未だ其の大用たるを知らず、此は初より既に不祥大祥を知るより説けり、此れ稍々異と爲すのみ、

【通釋】 南伯子綦と云へる人、或る時商邱と申す土地に遊びて、一の大木を見付けしが、甚だ凡木に異なれり、木の大さは結駟千乘とて 即ち四千匹の馬を結び連ねたる車一千臺の多きが、悉く其の蔭に隱れ蔽はるゝ程の大木なり、子綦は之を見て大に驚きて申さるゝには、全體此の木は何んと申す名の木なるかや、斯程に大木なる以上は必ず何等か萬木に勝りて異なりたることもあらむ、乃ち何かの良材料と爲るならむと、是に於て首を仰ぎて其の木の細き枝を緻密に視るに、皆拳曲とて宛かも握拳の如くに盤り結びて之を伐採するとも、棟梁の用に立つべくもあらず、又小首を俯して其の木の大いなる根幹を見るに、軸解とて木の心の處が空殼となりて、脆く腐ち易ければ、死者を葬むる棺槨にも用ひるべからず、試に其の葉を舌を以て咶め試みしに、其の毒に感染して口を爛らし、舌を傷ひ、又之を鼻にて嗅ぎしに異様なる臭氣の烈しさは、自分の心をして狂はして醉ひ醒めの氣持ちを感ぜしむること、三日を立つとも猶已まざらしめたり、

【解義】 〔南伯子綦〕 即ち齊物論の初めにありたる南郭子綦と同じ人なり、伯は長なり、此の人道德甚だ尊かりし故に南伯といへりと「成疏」等の説に見えたり、〔商之丘〕 之は語助の辭、商邱は地の名、司馬彪曰く今梁國睢陽縣是也と、〔結駟千乘〕 馬四匹を駟といふ、支那古の制車一乘に付駟馬が之を引くことに定まり居るが故に、四千匹の馬は千乘の車を引くことになるより、結駟千乘と云へるなり、結は連らね結ぶこと、〔隱將芘其所藾〕 藾は蔭なり「カゲ」と訓ず、芘は覆なり、乃ち大木の蔭は千乘の日蔭になりて蔽はむとすることとなり、又「崔注」には隱傷於熱也と

意趣なり、本句の意義は櫟木の意趣にして、無用の用に由て其の天全を全くすることを務むるならむには社の神に爲りしことが既に誤れるにあらずやとなり、此れ一說にして成疏等多く同じ、又趣は急なり、卽ち無用の物たることを取るに差し急ぐならむにはとの意なりと、宣注等亦多く之と同じ、今後說を用ひる、〔曰密若無言〕密は秘なり、又密は默の字と通ず、秘密にして他に泄らさざるなり、もと文章は曰若密無言とあるべきを、故らに倒字法を用ひて、若密を顚倒したるなり、〔彼亦直寄焉〕直は但なり、「タゞ」と訓ず、外の事は例外なれども、此ればかりはと云ふ意味の字なり、寄は寄託なりとは社を指すなり、〔以爲不知己者詬厲〕詬は辱なり、厲は病なり、「宣注」に使不知者謂其不能自存而罵詈之、幷無用爲大用之義、都渾然也とあり、〔且幾翦伐乎〕且は將と同じ、幾は豈と同じ、「荀子」の榮辱篇に最其爲相懸也哉、幾直夫芻豢之縣糟糠爾哉とあるを、「楊注」に幾讀爲豈とあり、「史記」の黥布傳に人相我、當刑而王、幾是乎とあるを、徐廣は幾一作豈と云へり、此れ皆以て證とすべし、〔彼所保與衆異〕彼は保たむとし、衆人は有用を保たむとす、卽ち彼が社に託するは無用の地に居らむと欲し、衆人が社たる光榮と羨むものは謂ゆる社鼠の類たらむことを希ふに出づ、是れ其の相異なれる所なり、〔而以義譽之〕義は常理を謂ふ、譽は批評すること、卽ち譽の字の中に毀の字をも含みて云へるなり、盧文弨曰く今本書譽作喩と、句意は彼はもと衆人の如くに社神に託して、自ら光榮と爲すにあらず、然るに今常理を以て之を稱量するは情事に於て遠かれりとなり、

南伯子綦遊乎商之丘、見大木焉有異、結駟千乘、隱將芘其所藾、子綦曰、此何木也哉、此必有異材夫、仰而視其細枝、則拳曲而不可以爲棟梁、俯而視其大根、則軸解而不可以爲棺槨、咶其葉則口爛而爲傷、嗅之則使

也、彼其所ㇾ保與ㇾ衆異、而以ㇾ義譽ㇾ之、不ニ亦遠一乎、

【大意】世の己を知らざる者をして、無用有用を竝せて知らざらしむるを以て、無用の大用たる秘訣と爲すことを說けり、本文の中、彼亦直寄焉、以爲ニ不ㇾ知ㇾ己者詬厲一也の二句、是れ其の扼要の語にして、抑も亦全節の主腦となす、

【通釋】既にして匠石は夢覺めければ、誠に奇怪なる夢なる哉と思ひ、其の夢の顚末を弟子に向うて告げしに、弟子は因りて問うて曰ひけるに、左程に彼の櫟社は速に無用たらむことを願ひながら、社と爲りて多くの人達に神として仰がるゝ光榮なる位置に立たるゝは、果して何の故ぞや、豈に矛盾の甚しからずやと、匠石之が言を止めて曰く、先づ〳〵少く密として置けよ、此の事に就いては汝彼れ此れ言ふことなかれ、彼れ櫟樹は唯全く先づ此の社の地位に身を預け置きたるに過ぎず、卽ち彼の目的は故らに此の衆人の目に觸れ易き場所に身を置きて、彼の精神を知らざる世の俗人共に、あれあの樣を見られよ、彼れ程の大木でありながら、何等の益に立たざる散木なりと詬り罵られむことを求めむとするなり、然れども彼櫟樹はたとひ社の神とならざるとも、彼程の智を以て自全を計るに於て、將に殆んど翦ち伐らるゝ樣なることあらむや、卽ち何人も彼の無用なるを見れば、翦ち伐るものはあらざるべし、且つ彼れ櫟樹自身が保ちて大切にする物は他の衆人が大切に保つものと相異れり、然るに今や汝ぢ達は世間俗的の義理に拘りて、彼が行道の智なることを譽めたり、毀りたりして、批評をなすと言ふこと、亦大に彼れと相遠かりて見當違ひのことならずや、卽ち彼れは到底世間竝の議論を以て其の事を褒貶論定すべきものにあらざるなり、

【解義】〔覺而診其夢〕覺は夢の覺むるなり、診は諸註に占なりとありて、「ウラナフ」と訓ず、然れども下文の匠石と弟子と櫟社の事を論せしを觀るに、占夢の事なければ、王念孫は診は占の義にあらずして當さに讀みて畛と爲べし、「爾雅」に診は告也とあり、診ニ其夢一とは、其の夢みしことを弟子に物語せしことなりと說けり、今王說を用ひる、〔趣取無用云云〕趣は

【解義】〔汝將惡乎比予哉〕惡は「イヅクニ」と訓ず、於何の義なり、卽ち何物を以て標準とし、予に比較して是の如く言へるぞと詰問的の辭なり、〔比於文木〕文木は文章ある美しき木にして、卽ち有用なる木のこと、〔柤梨橘柚果蓏〕柤は樝と同じ、「コボケ」と訓ず、木瓜に似たるものにして、較々小なる實を結ぶ、木瓜より酢く澁き味あり、橘は「タチバナ」と訓ず柚は「ユヅ」と訓ず、「本草綱目」に橘柚柑三者、相類而不同、橘實小、其瓣味微酢、其皮薄而紅、味辛而苦、柑大于橘、其瓣味甘、柚大小皆如橙、其瓣味酢、其皮最厚而黃、味甘而不甚辛と、果は果實の樹木に生ずるものを果と曰ひ、蔓草に生ずるものを蓏と曰ふ、甜瓜西瓜葡萄冬瓜南瓜越瓜胡瓜の類卽ち蓏なり、〔大枝折小枝泄〕兪樾の說によるに、泄は枻の字に代用したるものにして、「荀子」の非相篇に接人則用枻とあるを、「楊注」に枻は牽引也と解したり、小枝泄とは小枝は牽引せらるゝを謂ふ卽ち牽き附らるゝことなり、〔幾死乃今〕幾は近なり、伐られて死せむとするに近きことなり、〔乃今得之〕とは是れまで他の庸匠輩に有用の良材なりと睨まれて幾と斬伐せられむとしたるが、今始めて匠石の鑒定に因て兼て我が素願の如く無用の木たることを得たりとなり、〔若與予皆物也〕「成疏」に汝之與予皆造化之一物也とあり、〔奈何其相物也〕の奈何は假的の問詞なり、也は哉と同じ意に用ひたり、亦問へる辭なり、相物とは一物として對等的以下に視做し取り扱ふことなり、呂註に唯不物、乃能物物、而物與物奈何相物也とあり、卽ち唯天卽ち自然は萬物の上に超越して、能くそれぐ〳〵物を物として使用することを得るも、汝も予も均しく造化の一物なるに、僭越にも何ぞ能く吾を自由に使用することを爲さむとするかとなり、〔幾死之散人〕是れ櫟社より、匠石が專ら世用を目的とするは、禍を得るものなりと、櫟社より一には嘲り、一には戒めて此の如く言へるなり、

匠石覺而診其夢、弟子曰、趣取無用、則爲社何邪、曰、密、若無言、彼亦直寄焉、以爲不知己者詬厲也、不爲社者、且幾有翦乎、且

其相物也、而幾死之散人、又惡知散木、

【大意】櫟社の言を假り來りて、無用の用卽ち是れ大用なることを見はす、宣穎曰く就無用上轉出大用、又超又醒、譏斥匠石亦不堪と、

【通釋】匠石旣に歸りたる後ち、或る夜の夢に櫟社の神が來り現はれて曰く、曩きに汝は不屆にも散木なりと惡口を申して嘲けりしが、全體何物を標準として予に比べむとするか、卽ち汝は將に予を文木として、文模樣のある美しき木の世に有用として、貴ばるるものに比べんとするか、若し然らむには是れ大いなる誤なり、彼の柤梨橘柚果蓏の屬類を見よや、成程人の口に味はれて珍重せらるゝが、此等の木は其の實が熟すれば皮を剝がれ、剝がるれば種々の恥辱を受け、大いなる枝は斧斤にて切斷せられ、小さき枝は一方に椎寄せられて苦しめらるゝことは、此れ全く其の木が能ありて、人口に適する味を有する果實を產するを以て、是の如く其の生命を苦しますものにして、畢竟自業自得ならずや、されば其の天年の壽命を全く終へずして中道にして夭死することは、彼れ自ら世俗の人々に掊ち擊たるゝものなり、その有用の木たるが故に反りて禍を取るものなり、然し此等の木に限らず、凡て世間の多くの物は皆是等の木と同じからざるはなし、且つ汝は頻に無用々々と嘲り譏るも世に無用程貴むべきものはあらず、予は何れにも無用なる點あるを願ひ求むること久しきなり、然るに予は是れ迄に殆んど伐られて死せむとしたる險はどき事ありしが、乃ちやつとこさと今度汝が批評によりて愈々無用の木と爲ることを得たり、此れが反りて予に取りての大用を爲して大に益になることとなり、若し汝が望の如くに予を世に有用たるを得しめしならむには、將た此の如き長大の壽を保ち、無事なる事を有つを得むや、疾くに人に斬伐せられて死にたるなり、且つや汝と予とは何れも皆天地間に在る萬物中の一物なるが、奈何ぞ其れ相互に眇たる一物として譏り合ふことを爲さむ、汝は我を散木なりと譏れども斯く申す汝こそ死に幾き散人なるぞ、乃ち死に掛りの危き人物、今日あり、明日の分からざるものと申すべきものなり、

いへり、司馬彪は匝なりと解せり、「メグル」と訓ず、圍は徑り一尺を一圍と爲す、蓋し十尺なりと釋文に見えたり、百圍とは千尺なり、又兩手を合はせて之を圍むを一圍と爲し、約五尺なりとの說もあり、此に依るときは百圍は五百尺なり、〔臨山十仭〕七尺を仭と曰ひ、又八尺を仭と曰ふ、臨山とは山よりの距離を謂ふ、卽ち山を本位として云へるは過山といふべきを、今特に樹を本位として見たる處より、臨山と云へるなり、〔而後有枝〕尋常の樹木は根を距ること少しく高き處に枝の有るが多きものなれども、此の樹は非常に幹が聳え居る故に、隨うて地面より十仭の高さ、卽ち餘程の上に枝があるなり、卽ち高きことを形容して云へるなり、〔其可以爲舟云云〕旁は傍と同じ、卽ち此にては傍枝の舟に造るべき大材が十數ありとの意なり、又兪樾は旁は方の字と通用し、方は且なり、本句は枝の以て舟を造るべきもの、且に十數ならむとする意なりと解せり、〔匠伯不顧〕伯は匠石の字なりと云ふ、「文選」の何平叔が景福殿賦の注に王子淵の洞簫の賦注及び其の外の書には、多く以て伯は石の字なりと云へり、〔散木也〕「韻會」に不自檢束爲散とあり、散木は無用なる意なり、〔則液樠〕液は津液也、「ヤニ」と訓ず、樠は音「モ」松心のことなるが、松心は常に脂液あれば、因に脂の出づること松心の如しとの意義を以て、液樠と二字を熟して用ひたるは、此れ莊子が字句の法なりと李頤が說に見えたり、

匠石歸、櫟社見夢曰、女將惡乎比予哉、若將比予於文木邪、夫柤梨橘柚果蓏之屬、實熟則剝、則辱、大枝折、小枝泄、此以其能苦其生者也、故不終其天年、而中道夭、自掊擊於世俗者也、物莫不若是、且予求無所可用久矣、幾死乃今得之、爲予大用、使予也而有用、且得有此大也邪、且也若與予也、皆物也、奈何哉

之に答へて曰ひけるに、已みぬるかな、之を言ふこと無用なるぞ、彼の大木は汝共は如何樣に思へるか、彼木とて一向何役も立たぬ木なるぞ、彼を以て水に泛ぶる舟に造り拵ふるときは、水中に沈みて舟の役に立たず、人の遺骸を藏むる棺若くは槨に造り拵ふるときは、土中に埋めば直に朽ち腐れて用に立たず、彼を以て器物に造り拵ふる時は、直に毀れて仕舞ひ、彼を以て出入をする門戸に拵ふるときは、木心より液を吹き出だして、開閉に便ならず、彼を以て家屋の柱に拵ふるときは、蠹が入りて役に立たず、凡て何等の用をも爲さざる無駄なる木なり、何れにも用ひるべき所がなき爲に、何人も伐り取らざるが故に、能く先刻眼前に見らるゝが如く、高壽を保ちて世に希なる大木となれり、卽ち形こそ偉大なれ、何等の實益なきものなるぞ、されば予が之を顧みざりし所以なりと、

【解義】〔匠石之齊〕匠は木工なり、石は其の名なり、「風俗通」に氏於事者巫醫匠とあるが如く、古代支那に於て巫(ミコ)醫(イシャ)匠(ダイク)の如き、技術家に屬するものは其の技を以て氏として稱することあり、蓋し此の人木匠に妙を得たるに因りて、其の名に冠して匠石と呼べるものならむ、猶ほ秋といへる人が博奕を善くするに因りて、奕秋と呼びしが如きなり、然れども此の本文の事は本より莊子の寓言なれば、實に有りしか否かを詳かにせず、〔曲轅〕「成疏」に依れば、其の道屈曲して曲轅の狀の如くなるより、名と爲すに似たり、〔見櫟社樹〕社は土の神なり祀封土曰社と、「成疏」に見えたり、古へは樹を植ゑて社の神主と爲すこと、「論語」に哀公問社、宰我對曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗とあるを觀ても知るべし、櫟社は乃ち櫟の林を樹ゑて、主と爲せる社なり、櫟は「カシハ」と訓じ、又は「カタギ」と訓ず、古訓は「イチノキ」といへり、大木なり、〔其大蔽牛〕蔽は隱なり、隱蔽すること、牛の字の上に舊木に數千の二字あり、「成疏」に櫟社之樹特高常木、枝葉覆蔭、蔽數千牛、以縄束之、圍麤百尺、江南莊本、多言其大蔽牛、無數千字、此本應錯、且商丘之木、旣結駟千乘、曲轅之樹豈蔽一牛、以此格量、數千之本是也と、此の說に依るときは、其大蔽數千牛に作り、蔽とは枝葉の廣がりて其の蔭が數千匹の多き牛を蔽ふことに解したるなり、〔絜之百圍〕絜は成疏には、約束なりと

曰、自吾執斧斤、以隨夫子、未嘗見材如此其美也、先生不肯視、行不輟何邪、曰已矣、勿言之矣、散木也、以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、以爲門戶則液樠、以爲柱則蠹、是不材之木也、無所可用、故能若是之壽、

【大意】 以下三節皆樹木を借りて喩として能く無用の用にして、然る後大用となることを說けり、乃ち成心を去りて因是に就きたる妙用を示せり、成心を用ひずして但因是に依るときは、有用は寔に有用と爲り、之を物に施せば、物能く之を受け納れて、危害を我に加ふることなく、之に巳に施せば己能く靜かに虛くして、自ら災孽を作すこと無し、此に於て無用は竟に大用となることを明かにしたるものなり、

【通釋】 匠石と申す有名なる工匠の大家がありて、嘗て齊國に行きて途ち、曲轅と申す所に至りたりし時、櫟社樹とて社の神體として樹ゑたる櫟と云ふ木を見たり、其の樹の大さは樹後に立てる大牛の形ちを全く隱くして見えざる程の大木にて、徑は之を人の兩手を連接して量るに百抱あり、其の高さは上より山を臨み、山上より見上げたる距離にて、十仭の處に始めて枝があり、其の枝にて舟を製造すべきものが傍に廣がりたるもの幾十本とて有り、如何にも稀れなる大木なればとて、之をみるもの多きとは、市場の人の如く極めて多數なりき、然るに匠石は一顧をもなさず、遂に行きて止まず、匠石の弟子達は此の大木を十分飽くまで觀て畢り、急に後より走りて匠石に追ひ及びて曰ひけるに、さても先生抑も私が斧斤を執り弟子となりて、先生に隨ひ奉りしより以來、年數も久しくなりますなれども、未だ嘗て木材として此の如くに其の美材なるものを見ざるなり、然るに先生は之を視ることを爲さらずして、ズカ〳〵と行きて歩みを輟め給はざりしは何ぞやと、匠石は

如き不慮の騷ぎを惹き起すことあり、況や人に於てをや、豈愼みて其の仕向方に注意を爲さざる可けんや、

【解義】〔以筐盛矢〕筐は竹にて作れる器にて、「アジカ」と訓ず、東京地方に謂ゆる笊の類、京阪地方は之を「イカキ」といふ、矢は屎と通ず、糞なり、「クソ」と訓ず、〔以蜃盛溺〕蜃は大蛤なり、「オホハマグリ」と訓ず、此にては蜃を溺器に飾る器を謂ふ、溺は尿と同じ、小便なり、「イバリ」と訓ず、矢溺は至賤なるに、矢溺を盛るに貴重なる筐蜃の器を以てするは、馬を愛する情よりして然るなり、〔蚊虻僕緣〕蚊は蚊と同じ、虻は虻同じ、「アブ」と訓ず、虻有數種、竝噉血、揚浙以南江嶺間大有木虻、長大綠色始如蜩蟬（セミ）、噉牛馬或至顚仆、蜚虻狀如蜜蜂黃黑色、又一種小者名鹿虻、亦名牛虻、大如蠅、囓牛馬亦猛、本艸綱目の蟲部に見ゆ、僕は附なり、「詩經」の大雅に景命有僕とあるを、「毛傳」に僕は附なりと云ひ、「鄭箋」に天之大命又附著於女と解せり、本文の僕緣は卽ち蚊虻の馬血を吸はむが爲に馬體に附著することを謂へるなり、「宣注」に曰く舊解將僕緣二字連下句讀、言僕御拊馬、不知上已有愛馬之人、此又別說僕御拊之有是文理乎と、〔拊之不時〕拊は撫也、「ナヅル」と訓ず、拍也、「ウツ」と訓ず、「郭注」に雖救其患而掩馬之不意とあり、卽ちもとは馬を救はむとしての愛情より出でたれども、馬を不意に急に擊ちしが故に、下の如く馬を驚かすなり、〔缺銜毀首〕銜は口銜とて、馬の口に銜ませて之を制御するもの、「クツバミ」と訓ず、毀首碎胸は「成疏」に馬缺銜勒挽破轡頭、人遭蹄蹋毀首碎胷とあり、此に依れば此四字は人に屬して看るべき也、卽ち馬が銜轡を缺破して荒れ出したるが爲に、人は其の蹄に掛けられて首を毀け、胷を碎かると解したる也、「宣注」は毀碎胸首之飾、馬驚而然とあり、此に依れば馬自ら其の首胷を毀碎する也、

匠石之齊、至乎曲轅、見櫟社樹、其大蔽牛、絜之百圍、其高臨山十仞、而後有枝、其可以爲舟者旁十數、觀者如市、匠伯不顧、遂行不輟、弟子厭觀之、走及匠石

る意を明にす、〔爲其決之之怒也〕決は分裂すること、「成疏」に曰く、以死物投虎、亦先爲分決、不使用力と、〔時其饑飽〕時とは善く其の時を量りて、爲すことを云ふ、〔爲其殺之之怒也〕其は虎を指す、虎の怒なり、虎に生物を與ふるときは、彼の窮鼠猫を噬むと同例にて、生物は死力を盡くして、抵抗するが故に、虎に於ては速に食ふを獲ざるに因りて、怒りを發するなり、〔達其怒心〕達は通達なり、「成疏」に達喜怒之節とあり、乃ち上文の如く、生物全物を與ふるときは、虎が速食を欲する心よりして、怒激を挑發する恐れあるを以て與へず、是れ食物を與ふるも、能く虎が或は喜び或は怒る手心を呑み込みて、之を爲すものなり、本句の達其怒心とあるは、乃ち此の意味を申明したるなり、〔異類而媚養己者〕異類の二字は卽ち此の裏面に同類の人は固より勿論なりとの意味を含蓄して言へるなり、「郭注」に曰く順理則異類生愛、逆節則至親交兵と、

夫愛馬者以筐盛矢、以蜄盛溺、適有蚊虻僕緣、而拊之不時、則缺銜毀首碎胸、意有所至、而愛有所亡、可不愼邪、

【大意】又一喩を引きて、前節の虎は至暴なるも、能く其の性に順へば馴るゝに反して、馬はもと馴れ易き獸なれども、其の心を驚かすときは、狂暴となるを言ひ以て、物性に逆ふべからざることを明かにす、宣穎曰く秘訣止是一順字のみと、

【通釋】尙又彼の馬を愛する者を見よ、彼は馬を愛するの至れるや、其の不潔なるを厭はず、或は筐なる竹器を用ひて馬糞を盛り、或は蜄の大貝に小便を盛りなどして一向厭ひ申さざるが、適々蚤や蚊やの小蟲が馬の身體に、僕緣とて、群り聚りて血を吸ふを見て馬の爲に防がむとて之を拍つことが不意に出づるときは、馬は大に驚きて、繋ぎたる銜を引き缺し、其の勢にて馬自己の首を毀ひ、胸を撃ち碎くことあり、此れ全く他なし、馬は餘り出し抜けに撃たれたるに因り、怒りの心が忽ち至りて平生主人が己を愛し養へることを忘れたることありて然るなり、されば如何に柔馴なる動物と雖も、此の方に於て注意せざるときは、此の

才を頻に伐り自慢して、世の人々の忌み惡むことを犯して爲す者は、實に其の身は早くも、禍に掛らむとして至極危き事なるなり、尙ほ又汝は彼の虎を畜ひ養へる者の狀態を知らずや、虎を畜ひ養へる者は假りにも生きたる禽畜を以て虎に與ふることを爲さず、なぜかなれば、虎が生きたる禽畜を殺さむとして、激しく怒りの心を挑發せむことを恐れてなり、又啻生物を與へざるのみならず、死したる禽畜にても假りにも全き形のものを與へず、なぜならば虎が其の物を引き裂かむとて激しく怒る心を挑發せむことを恐れてなり、斯の如く虎に食物を與ふるには能く注意して、禽畜は死したる物を用ひ、又其の肉は割き切りて與へ、程善く其の腹が飽き足る程の時間を見計ひ、其の怒る心を巧みに操りて勢力を薄らげ殺ぎて、縱ひ怒るとも激烈ならざるやうに導くことが其の第一の術なり、さて虎と人とは元來異類なるに、而かも虎は、己を養ひ畜へる人に對して宛かも媚びて其の機嫌を取るが如く、其の人の自由になりて居ると云ふものは、養ひ畜へる人が能く虎の本性に順ひて導き、之に逆らはざればなり、されば彼の虎か人を噬みて殺すに至るものは、必ずしも虎の惡しき爲ならず、亦人が虎の本性に逆らひて、其の忌み惡むことを犯して爲し、其の激怒を挑發すればなり、

【解義】〔女不知夫螳蜋乎〕以下は大逆の不可なるを說き、以て不就不知の不可なる意を明かにす、螳蜋は一に蟷螂に作る、蟲の名俗に「カマキリ」と稱す、螳蜋兩臂、如斧、當轍不避、故得蟷螂之名、俗呼爲力蜋」と「本草綱目」の蟲部に見えたり、〔怒其臂〕怒は力强く臂を奮ふなり、〔以當車轍〕轍は「ワダチ」と訓ず、車輪の轢る迹なり、〔是其才之美者也〕其才は螳螂は自身に己が才の美なるを是とするが故に、其の任に勝へざるを知らず、即ち因是の反對なるを云ふなりと說ける者あり、〔積伐而美〕伐は矜なり、「ホコル」ことなり、而は爾と同じ、積とはもと卑きを高きに爲す意にして、左程に伐るに足らざる才能を强ひて、抗し上げて伐りと爲し、左程に美に非る物を舖張して、美となすこと、宛も螳螂の自ら其の才を是とするが如きものなるを謂ふ、〔以犯之幾矣〕幾は危なり、〔汝不知夫養虎者乎〕以下は小逆の不可なるを說き、以て前文に云へる就而入和而出の不可な

に然り、〔達之入於無疵〕達とは我が意を達し貫くこと疵は病なり、「キズ」と訓ず、過失のこと、乃ち一切姑く忍耐して彼が意に順ひ、而して我が意を貫徹する一段に至りては、渾然として圓滿に入りて、疵病過失の後ちに殘らざるやうに爲すべしとなり、「説莊」に曰く無二此一著一（本文之本句）、則前所レ云（亦且爲嬰兒より以下の行爲）者、小人佞臣而已と、

女不レ知夫螳蜋乎、怒二其臂一以當二車轍一、不レ知二其不一レ勝レ任也、是其才之美者也、戒レ之愼レ之、積二伐而美一者、以犯レ之幾矣、女不レ知夫養レ虎者一乎、不下敢以二生物一與上レ之、爲二其殺レ之之怒一也、不下敢以二全物一與上レ之、爲二其決レ之之怒一也、時二其饑飽一、達二其怒心一、虎之與レ人、異レ類而媚二養己一者順也、故其殺者逆也、

【大意】 才を恃む者の身を誤り易きを誡め、仍ほ申さねて前節の形莫レ若レ就、心莫レ若レ和の義を明かにす、前の一喩は反譬にして專ら己が才を恃むときは禍を致すことを言ひ、後の一喩は正譬にして共に物に順うて逆らはざるときは福を受くることを言ふ、

【通釋】 尙ほ又誡むべきものあり、汝顏闔よ彼の螳蜋の狀態を知らずや、螳蜋は性質負け嫌ひの蟲なるが、彼が路上に在りて大車の物を運搬して來るを見る時に當りては、之を防ぎ止めむとて、己が臂を威強く立てゝ車轍に當り、爲に車輪に壓死せらるゝことなるが、是れ彼が到底己が微力にては大車を防ぎ止むる任に勝へざることを知らざればなり、是れ全く彼は平生己が臂を奮つて小蟲共を捕ふる才能の美しきことを恃みて、遂に己が力量を顧みず、敢て一臂を以て大車に當らむとしたるなり、世の小才なるものが僅に區々の巧智力量を鼻に掛けて、不相當なる計畫を企つるは、皆之と同樣なるものなり、されば今汝は能く之を戒め之を愼むべし、若し汝が少許の美

て言ひ舞はしの様を立て、行くことありとあり、「心莫若和」和はもと五味の相濟ひ辛甘並に用ひて混合して形ち無きものなれば、假りて人の長短互に救ひ以て其の美を成就する義に用ひなるなり、即ち君子和而不同と「論語」にあるが如く、道理上の柔順一致なり、「之二者有患」之は此と同じ、既に逍遙遊篇に解せり、二者は就と和とを指す、「就不欲入」入とは度を過して深く入り込むこと、即ち初の目的は之に順ひ就く程度に止らむとなるに、遂に深く入り過ぎて、何事も盡く之と一致をとることなり、不欲とは願はざるなり、即ち忌み嫌ふこと、「宣注」に曰く雖附之、不欲陷於其惡と、「和不欲出」出とは其の中にあるものが表面に露はれ出づること、此にては腹の中には之を和して誘導せむと欲する心はあれども、餘り其の痕跡が見え透きて遂に外に露れ出づるを謂ふ、「宣注」に曰く雖調之、不宜顯己之善と、「且將爲顚爲滅云云」且は將と同じ、顚は覆なり、滅は絶なり、崩は壞なり、蹶は敗なりと、「成疏」に見ゆ、乃ち形就而入の時は獨り彼が過惡を匡正救濟すべからざるのみならず、己も亦遂に顚覆滅絶敗壞の禍を招きて、彼と倶に亡びむとすとなり、希逸曰く就而至於入、則和自家都放倒了、「且爲聲爲名云云」聲は聲聞なり、即ち良き評判のこと、名は名譽なり、妖は變物爲妖と「成疏」に見えたり、即ち妖怪なり、孽は災なり、成疏に自顯出己之智、不能韜光晦迹、故有濟彼之名、翻嘖惡其勝己、謂其妄生妖孽、故以事而害之と、「彼且爲嬰兒」嬰兒は感覺あれども、知識なし、故に此にては無知識的の行動を言ふ、「爲無町畦」町は畔なり、畦は町埒なり、即ち耕田の中に縱橫に設けたる農夫の通路を町と云ひ、田地の間に高低に疆を限れるを畦と云ふ、因て共に界限區劃の義に用ふ、無町畦とは町畦の限劃なきことにて、何事も放漫にして不規則なること、且爲無涯とは、涯は水畔なり、無涯とは水面の渺茫として際涯なきが如く、事を爲すに何等の締め括りを付けず、即ち思慮分別を用ひず、志の進むに任せて爲すことなり、亦與之爲涯、亦與之爲嬰兒と云ひ、亦與之爲無町畦と云ひ、亦與之爲無涯と云ひ、各々共に其の上句と兩層發明し、展轉精微に入る、仙佛の世を救ふが如く、深となく險となく所願必ず得と、古人は之を論評せり、洵

內心が和ぎ協ふべきも餘り其の素振を外へ出たすときは、將に我れこそ、當世に程善通人なれとの聲聞を釣ることを爲し、此の人は人の過失を正し、救ふ人なりとして呼ばるゝ名譽を博すことを爲し、終には人の嫉みを受けて面妖なる毀りを招くことを爲し、思ひ寄らざる災孽を取ることを爲さむとす、然るときは、己自らも其の身を誤り、同時に他人よりも種々の嫉み惡しみを受けて、甚だ不爲なることなり、されば今之に對する方法は兎に角に穩和にして道理に畔かざるやうに注意すべし、彼れ先方の人が將に頑是なき嬰兒たらんには、此方の我も亦隨うて同じく頑是なき嬰兒となるべし、彼れが將に無町畦とて埒次も無き不秩序的ならむには我も亦隨うて其の無町畦となるべし、彼れが將に無涯とて方量も無き進的一方のみならむには、我も亦隨うて其の無涯と爲るべし、此の如く何事何物に限らず凡て先方の出て樣次第に因りて此方には之に順ひ應じて、詰りは之を推し進めて完全にして疵過ち無き處に導き入るゝことを務むべし、卽ち餘り何事にも逆らひ何人にも盾を突くことは勿論惡しきが、去りとて亦餘りに柔かに和らぎ過ぎて、人の鼻息を仰ぎて媚びを呈し、又餘り自ら君子然と氣取りて世の虛聲空名を釣らむと志さず人も善からず、要するに溫和にして道理を能く守りてこそ、賢人君子の道に叶ふことなれとなり、

【解義】〔善哉女問乎〕女は汝と同じ、道理の難知なるは問はざれば知るべからず、顏闔の問は難知の道理を究めむとするより出でたるを以て、故に蘧伯玉之を善みして言へるなり、〔正女身哉〕女は汝と同じ、身とは人の心は身中に在るが故に汎く身と云へるなり、正女身とは卽ち齊物論に云へる成心てふものを撤し去ることなり、成心はもと身の邪險なるより出づ、身端正なるときは成心は無きなり、凡そ成心なき人にして始めて能く因是の眞訣を行ひ得べし、故に下文に於て因是の義を說かむとして、先づ正身の事より說き起したるなり、〔形莫若就〕就は從就なり、身の形ち態度に於ては彼に從就して禮義に違はざることなり、又一說に形は形體なれども、此にては言語に就いて言へば、卽ち言語の言ひ舞はし樣のことにて、乃ち本句の意は人とは言語を交換するとき先方の言ひ出だし樣によりて、此方にも其に就い

めざること、〔其知適足以知人之過〕上の知は智と同じ、人は他人を指す、此れ己は唯だ他人の過失を知る智慧あるのみなることを謂ふ、〔而不知其所以過〕其は他人を指す、所以過とは過失を生じたる原情を謂ふ、其知適足以知人之過云云の二句は「辨正」に曰く此正德之殺處、不可與爲有方在此と、

蘧伯玉曰、善哉問乎、戒之愼之、正女身哉、形莫若就、心莫若和、雖然之二者有患、就不欲入、和不欲出、形就而入、且爲顚爲滅、爲崩爲蹶、心和而出、且爲聲爲名、爲妖爲孽、彼且爲嬰兒、亦與之爲嬰兒、彼且爲無町畦、亦與之爲無町畦、彼且爲無崖、亦與之爲無崖、達之入於無疵、

【大意】成心を去りて、因是を主と爲すべきことを言ふ、卽ち其の人の行に逆はずして、我れ自から守り、從容優游の間に之を善正に導き進むるを以て、至道となすことを說けり、

【通釋】是に於て蘧伯玉は之に敎へて曰く善くこそ氣附かれたり、子の問ひ方は如何にも尤なる義なり、何卒之を戒め之を愼みて先づ第一に汝が身を正しくすべし、己が身にして曲るときは何ぞ能く人を正たすことを得んや、されば如何にして可なるかと曰はむに、外形卽ち表向きの行爲は物事に就き順うて逆はざるに若くことなし、內心の持ち方は衆人と和ぎ協うて悖らざるに若くことなし、然しながら此の就くと和らぐとの二者も此に困りたることあり、卽ち如何に就き順ふが善なればとて深く入り過ぎて、何事をも盡く迷ひ込むことあるべからず、和らぎ協ふか、善なればとて、餘り其の素振を外部表面に出したる行爲あるべからず、外形が就き順うて深入するときは、一槪に阿諛卑屈に流れ、將に理非を顚倒することを爲し德義を滅し喪ふことを爲し、行狀を打ち崩すことを爲し、身の蹶き仆るゝことを爲さむとす、又

て、之に順應するに正道を以てするを務むるに在ることを言へり、第一節先づ顏闔の問を敍し、其の論端を發す、宣穎曰く無レ方不可、有レ方又不可、道亦窮矣、下文解環之法甚微と、蓋し全章の本意は物に應ずるの要訣は謂ゆる因是に在りて、因是の務は其の精微を盡くすを求むるに在ることを言ふ、宣穎曰く妙用止是一順字、法華曰應下以二比丘身一得度上者、即現二比丘身一而爲レ說レ法、應下以二女人身一得度上者、即現二女人身一而爲レ說レ法、是此處義也、

【通釋】顏闔と申す人ありて將に衞の靈公の太子たる方に傅師の役たらむとす、或る時衞の賢人なる蘧伯玉と申す者に質問して曰く、今此の處に或る人があらむに、其の人の生れ付きは天殺とて自然に其の生れ付きの德が薄らかにして不肖なるものなり、されば今吾れが其の人を相手にして之と與に無方なる行をなすときは、次第に惡事が募りて、終には吾が國家を危くせむ、さりとて有方なる行即ち道に叶ひたる事を爲すときは、吾れより進んで頻に其の過ちを正すを以て彼が氣に逆ひ、爲に怒を受けて吾が一身を危くし誅戮をも受けずと限られず、畢竟彼が知識の程度は適々以て他人の過失を知るに足り、而も他人が過失は何を以て起りしかを知らず、即ち一概に人の過失を見咎むるは能くして、其の原情を解せざるなり、左樣なる人物に對して、吾れ之を奈何にして救ひ導きて然るべきか、願くは夫子の之を敎へ給はむことを、

【解義】〔顏闔〕顏は姓にして、闔は名なり、魯の賢人なり、本書の雜篇讓王篇にも見ゆ、〔將傅衞靈公太子〕傅は「ツキソヒ」と訓ず、附き副ひて守り立つる役なり、靈公は謚にして、名は元と云ふ、孔子と同時代の衞君なり、太子名は蒯貴といふ、〔蘧伯玉〕蘧は姓にして、名は瑗といふ、伯玉は其の字にして衞の賢大夫なり、〔有人於此〕人とは即ち太子を暗示して云へるなり、〔其德天殺〕殺は音「サッ」と讀むときは「コロス」こと、音「セッ」と讀むときは薄なり、天殺とは天然に殺伐なること、又天然に薄德なること、孰れも通ず、要するに性質の不良なるなり、〔與之爲無方〕之は太子を指す、方法道なり、爲無方とは其の私欲を縱にして法度を敗るを承認することなり、〔與之爲有方〕制するに法度を以てし、私欲を縱にせし

はれ來るに因りて、宛かも人が舟に乘るが如くに之に循ひ應じ、吾が心を游泳せしめ、必ずしも强ひて一事一物に頓着固執せず、決して我より進んで自動的に物事を爲さずして、受動的に逃引ならざる場合に身を置きて、其の中正を養へば、最早や何事も其の道を盡くして至極せり、尙ほ此の上に何ぞ齊國に使したる報告に心慮を使ひ、思を苦むることを態々取り立てゝ作すを要せんや、詰り貴下は正直に己が身命を差出たして、君の爲に盡くすに若くはなし、然しながら此の義が至りて其の難き事にて、此の義を除きては別に深く畏れ患ふる事は無きなり、故に今貴下は人道の患を氣に掛けずして先づ此の義を行ふことに務むべきなり、

【解義】〔乘物以遊心〕乘は乘舟乘車の乘にて、乘物とは物事の至るに從うて、卽ち之を取り扱ふとも、別に何等かの野心を挾みて然るにあらず、自然の成行に任かして爲すことなり、遊は逍遙遊の遊の義を働き字として用ひたるなり、遊心とは心を束縛せずして氣を打ち寬がすこと、「宣注」に隨物以遊寄吾心とあり、〔託於不得已以養中〕中とは適中の心、卽ち吾が心の一方一物に偏倚せざることなり、託は寄託なり、身を其の場に置くこと、不得已とは逃引ならぬ餘義なき場合を指す、上文に有所不得已行事之情とあり、此處又再び託於不得已とあり、倶に因應因是の主義の點明して涉世の妙訣を示されたるなり、深く玩索して妙味を知るべし、「宣注」に除陰陽之患（上節）、說到忘身、是一服涼散也、除人道之患（本節）、說到養中、是最上解脫義也、皆與前文（顏回云云章）虛字相發すと、

顏闔將傅衞靈公太子、而問於蘧伯玉曰、有人於此、其德天殺、與之爲無方則危吾國、與之爲有方則危吾身、其知適足以知人之過、而不知其所以過、若然者吾奈之何、

【大意】物に乘ずるの道は能く物情の精微を捉へ

巧言之人、纔至於爭競、則言語之出、皆不暇簡擇と云ひ、又厲狠戾也、「宣注」は至此則彼此皆生惡心、俱承大至意と云うて、此句より以下は正事にして獸事を離れ、人事に係けて說き、以て上文の大至則多奇巧、大至則多奇樂の意を承けて說くものと爲せり、今此の說を用ふ、岡松甕谷は厲如左傳已爲厲之厲、心中生異氣、如厲、故曰厲と云へり、〔剋核大至〕剋は急なり、核は覈と同じ、其の實を考へて責むること又察々の意とも云へり、「宣注」には巧言偏辭、雕削太過と解せり、此に由れば本句は言論の甚だ峻酷なることを謂へるなり、〔有不肖之心應之〕此れ我が刻覈太至なるよしに他人の乖戾なる心を激發せしむることを謂ふ、甕谷は彼此皆生心厲、欲剋制之、核切之甚、則或至於欲相戕相賊、而不自知其所以然と云へり、此れ本句の義を解して、我と人と相互に賊害せむと欲する心が隨うて應じ至ると爲したるなり、「辨正」の說亦此と同じ、〔无遷令〕君の令命を承けば其の實を傳へ、時の喜怒に隨うて、輒ち遷改を爲すべからずとなり、〔无勸成〕直ちに君の命令を陳べ先方の取捨に任かし、傍より勸奬して强ひて成就せしむる無れとなり、〔美成在久云々〕郭崇燾の說に依れば、美と云ふことは久しく美となるべき道を行うて後ちに自然に化して美を成すものにて、一日一朝の短時日の間に成すべきにあらず、惡てふ者は一たび成れば遂に改めんと欲するも及ぶ可からず、卽ち美と惡との分岐點は極めて幾微の辨にして、而かも難易の美大に同からず、故に人の常情より觀れば、美に就き惡を去るが當然なれども、實際は之に反し易きは正に是が爲なりと解せり、

且夫乘物以遊心、託不得已以養中、至矣、何作爲報也、莫若爲致命、此其難者、

【大意】此に至りて天下の事は吾が心を廣く宇宙間に游泳して、一處一物に執着拘泥せず、凡て虛心にて之を處するを妙義となすことを言ひ、諸梁の齊國に使ひするも、亦宜しく其の心を以て臨むべくして、必ずしも增言するを要せざることを說けり、

【通義】且夫れ世の物事に對しては其の吾が前に現

ときは、其の容嚴格にして甚だ治まれり、既醉の後は迷亂に終り、昏醉の至は快樂を極めざること無しと、〔始乎諒 常終乎鄙〕諒は信なり、鄙は詐なりを、「宣注」に見えたり、兪樾は諒鄙の二字を對文にあらざれば、諒は諸の誤にて、諸は都と同義に用ひることは、「爾雅」の釋地に宋有孟諸とあり、孟諸を「史記」の夏本紀に孟都に作れるを觀て知るべし、「淮南子」の詮言訓に故始於都者、常大於鄙とあり、是れ大は卒の字の誤にして、以て本文の諒は都の字の訛なるを證すべしと爲せり、〔其將畢也巨〕巨は大なり、乃ち事の作るや先づ微しく兆候を見し、其の後遂に大事となるなり、且以巧鬪力者より本句に至るまでは、凡そ萬事に於ては始めを愼まざるときは流弊必ず甚しくなることを言ひ以て、下文の出言の一端を引起せしなり、〔夫言者風波也〕風波とは風の來るが如く波の起るが如きを謂ふ、以て言論の憑虛的に相生じて窮極なきを喩へしなり、後世に於て言論の爭を謂うて、風波相起と爲すことは此の語より始まれり、〔行者實喪也〕實喪とは其の實の喪ひて無くなることなり、郭崇燾は、實は之を有して存すること、喪は之を縱ちて捨つること、實喪とは得失の意なりと云へり、〔實喪易以危〕郭崇燾は得失は定りなき故に、易以危と曰ふと解せり、乃ち行ふものは時に因りて、得あり、失あり、一定しがたきが故に、危くなり易しとなり、是れ又一說として備ふべし、〔故忿設無由〕設は實現して行ふことなり、由は經由なり、忿怒の實現を欲するも、其の經由なきを謂ふ、〔巧言偏辭〕巧言は巧に繕へる言語なり、偏辭は偏私にして、公正ならざる辭令なり、乃ち忿怒の說は巧言の過實と偏辭の失中とを以てより起ることを云ふ、〔獸死不擇音〕「左傳」の文公十七年にも鹿死而不擇音とあり、略此と同義なり、「杜注」に音所茠蔭之處と釋せるは、音を蔭と同聲、假借の字に看たるなれども誤れり、〔氣息茀然〕茀は音「ボッ」、勃と通ず、勃然は盛に怒ること、又音「フッ」、怫と通ず、鬱なり、「集解」に獸困而就死、鳴不擇音、而忿氣有餘と云へり、〔於是竝生心厲〕厲は惡厲なり、「成疏」に心生疵病、忽然暴怒、搏噬於人、此是起譬也とあり、王先謙も亦以獸之心厲、譬下人有不肖之心と解せり、而して林希逸は獸死不擇音、言獸死之時、其聲音又何所擇、此譬喩忿設

なる意念を心中に生じ、剋核とてやたら他人を責め詰めることが非常に深刻なる故に、他人も亦必ず不肖なる惡しき心を以て、之に對接すること有り、されども此の厲惡なる意念を生ずる人は、もと己が惡しきが故に、他人も我に對して惡しと云ふことを知らざるなり、さて自ら其の惡しきを知らざるときは、世間に果して何人がありて其惡しきを知るべきか、卽ち本家本元たる自己が之を知らずして、他人が之を知るべき筈なきなり、左するときは双方相互に厲惡不肖の心を以て、物事を取り遣りして何時しか止む時は無かるべし、かゝるが故に法言に又之を誡めて曰く、双方の間に立ちて言語を取り次ぐに方りては、己が都合を以て擅に他人の辭令を遷し易ふること無れ、餘りに取り急ぎて早く成立するを希望するよりして、本人の意思の無きことを傍よりして無理に押し付けて勸むること無れ、凡て何事に限らず恰當なる度合を過ぎ越すことは之を益と名けて卽ち入らざる餘計なる世話なり、詰りの處辭令を遷し易く事の成るを勸むることは、反りて其の事を危くして失敗に近かしむるものなり、物の美事に成就することは、長く久しき間に待つより外はなし、之に反して餘り成功を取り急ぐときは、惡樣に成りて中途にて是れはしたりと悔い悟るとも、最早や改む可からず、されば人たるものは豈に物事を爲す最初に於て、戒愼せざるべけんや、實に戒愼すべきものなり、

【解義】〔以巧鬪力〕巧は巧伎なり、鬪力とは後世の戲劇格鬪の類の如きものなり、〔始乎陽常終乎陰〕凡て物の發展性を陽となし、收縮性を陰と爲すことは、支那學問の通說なり、此處の陽は心氣の發散して喜悦することにして、陰は心氣の內欝して忿怒することを云ふ、林希逸曰く其始等閑格手、只是戲劇、其終至於實爭打と、〔大至則多奇巧〕大は泰と同じ、「ハナハダ」と訓ず、甚なり、奇は異なり、常と變りたること、奇巧とは平常と異りたる巧計なり、又鬪力は陽に屬し、勝たんことを求むるは陰に屬す、而して苟くも之に勝たんと謀るときは、奇譎の計百出す、是れ乃ち多奇巧と云へる所以なりと、王先謙は云へり、林希逸曰く蓋其戲太甚、則多有過當用巧處と、林西仲は曰く以戲過甚故各出其奇巧至於死傷と、「大至則多奇樂」王先謙の說に依るに禮を以て酒を飲む

【大意】　言語は自然に增言の弊に陷り易きものなるに、若し始めに於て溢言を戒めと爲さゞるときは、覺えず知らず、其の弊增長して遂に巧を弄ぶこと益々甚しく、必ず兩方激怒して其の害究むべからず、唯僅に疑を致すの患に止らざることを言ふ、乃ち此の節は前節より更に一層を深くして說きたるなり、此より以下は人道の患を除くことに就いて說けり、

【通釋】　唯だ前述の如く、疑を致すに止まらず、巧みを弄びて勝負を鬪はすものは最初は陽氣に始りて常に陰氣に終るものなり、卽ち始めは互に歡迎して殆ど無二の親みなるも、終は互に攻擊して仇敵の如きあり、一體餘りに戲惡が甚しく過ぐるときは珍奇なる巧事が出でて、爲に和氣を相傷ふに至ることあり、禮法を以て酒をのむ者は極めて治まり、返りて眞面目なるに治まり、常に亂醉失禮に終ることあり、是れ亦歡樂が甚だ過ぐるときは、多く珍奇なる樂み事が出でて、反りて爲に過失を仕出すことあり、凡そ世間萬事亦皆之と同樣なるものなり、最初は諒實なるに始まりて、常に鄙薄なるに終ることあり、事の作り始め、起りは誠に簡單なるも、其の事が將に畢はらむとするときは、必ず種々なる情實が伴うて意外に鉅大になるものなり、殊に言語と申すものは、譬へば風や波の如くなるものなり、行爲と申すものは、外部に發展すると共に、內實の精神は之が爲に勞し疲れて、自然に消耗して衰へ喪ぶものなり、而して既に風波と申す位なれば、宛かも風が吹き波が起るが如く言語は至て物に感じて動き易きものなり、實喪と申す位なれば、行爲と云ふものは物事を行へば行ふ程に、精神を次第に洩らし喪して、至りて危殆ならしめ易きものなり、全體人は虛無が本心なるが故に、忿怒の心が外に形となりて、實際的に著はるゝことは本と其の緣由なきが其の道理なるが、只彼の巧言偏辭とて巧僞の言、偏私の辭を以て相互に欺くよりして、欺かれしものゝ心は忿怒となりて著はるゝなり、譬へば彼の鳥獸は多く平生に好き音を發するものなれども、最早死際の身となりては、悲哀の極心が顚倒して平生の通り、妙音を擇びて發するに遑あらず、餘り怒が烈しきが故に、氣息は弗然として喉に逼り鬩がりて、早や今にも絕なん許りに見ゆるなり、人も矢張其の通りにて、悲哀や忿怒やの爲に彼我雙方共に厲惡

自然に實情を過ぐるもの多きことを謂ふ、下の兩怒云云も亦此に倣うて解すべし、〔凡溢之類也妄〕類は似なり、溢過の言は元來の常體にあらずして、一時的喜怒に任かしての言なるが故に、聽者に於ては使者が己が都合上妄構せしに非るかと疑ふとなり、〔其信之也莫〕莫は無なり、之を信ずる者有ること無きなり、「郭注」は莫然疑之也とあり、「成疏」は更に之を解して、莫致疑貌也、既似傳者妄作、遂生不信之心、莫然疑之也と云へり、〔莫則傳言者殃〕殃は「ワザハヒ」と訓ず彼此の兩方より咎めを歸するが故に、身は必ず禍殃を被りて、刑罰等に罹るなり、〔故法言曰〕法言は昔人の法戒とすべき格言なり、「宣注」に楊子法言之名取諸此とあり、〔傳其常情云云〕常は卽ち平常なり、常情とは平情安穩なる時の喜怒に偏せざる實情なり、一時的盛なる喜怒に任かしての過言を聞くと雖も、傳ふること無くして、必ず能く其の平常の實情を稱量して、其の誠實の點を傳へ致すときは完全に近しとなり、

且以巧鬪力者、始乎陽、常卒乎陰、大至則多奇巧、以禮飮酒者、始乎治、常卒乎亂、大至則多奇樂、凡事亦然、始乎諒、常卒乎鄙、其作始也簡、其將畢也必巨、夫言者風波也、行者實喪也、風波易以動、實喪易以危、故忿設無由、巧言偏辭、獸死不擇音、氣息茀然、於是並生心厲、剋核大至、則必有不肖之心應之、而不知其然也、苟爲不知其然也、孰知其所終、故法言曰、無遷令、无勸成、過度益也、遷令勸成殆事、美成在久、惡成不及改、可不愼與、

情、無傳其溢言、則幾乎全、

【大意】 他人の間に立ちて言語を傳ふるに際し、妄に増損ある可からず、若し之を犯すときは必らず疑を致し禍を招くことあるを云ふ、

【通釋】 然しながら此の孔丘自身が承はりしことを以て、聊か申し上げん、凡そ人は近處なるときは必ず相互に親く、順ふに信誼を以てし、別に態々使者を遣はすまでもなかるべし、交際が遠方になるときは、必ず之に忠實なる心を致すに言語を以てすべし、言語を以て忠實の心を致すときは、必ず時には使者に託して、之を傳ふることあるべし、然るに全體彼我兩方の人が、或は共に喜び或は怒れる言語を善く宜き樣に取り做して傳ふると云ふことは、天下の中にて困難なるものなり、なぜかと申さんに、夫れ兩方の共に喜ぶと申すことは必ず、溢美とて實際の事よりも美過ぎたる言語が多きものなり、凡そ實際より過ぎたる事柄は美きにせよ、亦惡きにせよ、其の似寄りたることは、何かと申せば妄にして不誠實に類するなり、妄にして不誠實なるに類するときは、言を聽く者に於ても、之を信ずることなきなり、之を信ずることが莫きときは、左樣なる言語を傳へたる者は殃を被りて、失敗するなり、かるが故に昔しの法戒とすべき格言には、凡そ人の中間に立ち、使者となりて、言語を取次ぐには、其の常言とて餘りに喜びもせず、亦怒りもせざる靜的の言語を傳へて、又溢言とて其の餘り大に美きに過ぎ、亦惡きに過ぎたる騷的言語を傳ふること無くんば、完全なる理想に近しと申されて、深く之を戒めてあり、

【解義】〔丘請復以所聞〕丘は孔子の名なり、復は白なり、「マウス」と訓ず、告ぐること王解に、更以前聞告之とあり、〔凡交近則必相靡以信〕交は鄰國に交ることを謂ふ、靡は順なり、近方の國なるときは互に親しく接するを得るが故に、信情を實地に驗して相順ひ服するとなり、〔必忠之以言〕遠隔の地なるときは、言語即ち辭令を以て我が忠實の心を表白することなり、〔言必或傳之〕言語は時と場合とによりて使者を以て之を傳ふることあるなり、〔兩喜必多溢美之言〕溢は過なり、彼此の兩人相互に喜べるに任かして、其の心に思へる儘に言ふときは、美き言も

ふ餘暇は有らざるなり、即ち夫子に於かれては其れ陰陽の患が有るか無きか左樣なることは天命に打ち任かし、思ひ切りて出立ありて然る可きなり、

【解義】〔天下有大戒二〕戒は法なり、〔其一命也〕命は天命にて、自然の掟なり、〔不可解於心〕不可解とは心に固結して離れざることなり、「成疏」に夫孝子事親、盡於愛敬、此之性命出自天然、中心率由、故不可解とあり、〔義也無適而非君也〕義とは心に斷決して、其の宜きをうること、即ち理性的判斷の結果なり、無適而非君とは何れの道、君が無くては叶はずとなり、「郭注」に千人聚不以一人爲主、不亂則散、故多賢不可以多君、無賢不可無君、此天人之道、必至之宜とあり、即ち多數人寄り集りて社會を爲すとき、一人を推して之を統治せざるときは、互に相爭ひ亂るゝか、又は分離して團結を爲す能はず、されば賢者が多きとて、君主が多き時は統一を闕きて亂れ、亦賢者が無ければとて君主を無くするときは分散して團結を爲さず、故に何れとも君主は無かるべからず、之れが即ち天人の道理にて、必ず此に至るが理性的判斷の結果なりとの意なり〔無所逃於天地之間〕逃は責を逃るゝことなり、天地之間とは廣き世界中といふ意なり、即ち世界廣しと雖も、治者と被治者との關係は何れの國に往くも、人としては逃るゝことを得ず、被治者が治者の命に從ふことは、人の分義なることを云へるなり、岡松甕谷は曰く、一委質策名、無論在何處、言君臣之義不可復逃、故曰無逃於天地之間と、是れ一たび君臣の契りを結びたる以上は、何邊へ行くとも、君臣の道を盡さざるべからずと解したるも、予は取らず、

丘請復以所聞、凡交近則必相靡以信、遠則必忠之以言、言必或傳之、夫傳兩喜兩怒之言、天下之難者也、夫兩喜必多溢美之言、兩怒必多溢惡之言、凡溢之類也妄、妄則其信之也莫、莫則傳言者殃、故法言曰、傳其常

何邊へ行くとも無るべからざることを言ひ、以て子高が使者の患を畏避するの不可なる事を諭す、文中父子は是れ客にして君臣は是れ主なり、此の節先づ子高が陰陽の患を畏避するの非なるを論ず、本文の哀樂不易施乎前と云ひ、何暇於悅生而惡死と云へるに觀て其の意を知るべし、

【通釋】 孔子は子高に答へて曰く、貴君は左樣に心配なし給へるが、自分は先づ陰陽の患てふ一條に就いて一つ御答へ申し上げん、此の廣き天下に人たるもの丶大いなる法戒が二件あり、其の一と申せば人が最初天より受けて生れ來たる命が卽ち是なり、又外に一と申せば人の人として長く世に當に盡くすべき義が卽ち是なり、子たるものが其の親を愛し大切にすることは、卽ち天の命なり、換言すれば自然の約束にて如何なる人をも其の心より解き放して忘れて仕舞ふこと能はざるなり、臣たる者が其の君に事へ、奉公を爲すことは卽ち人の義なり、苟も適く先として何處ともなく君に非ることなし、卽ち人たる以上は到底廣き天地の間に立ちて此の關係を逃れ切ること能はず、此の君父の關係は是れぞ世間の大いなる戒めと謂へるものなり、されば彼の子が其の親に事ふるものは場所、人柄の都合不都合を選擇せずして、其の居所に安んじ落ち著くことは親に孝行なる至極のものなり、彼の臣が君に事ふるものは、事柄の難き件と安き件とを選擇せずして、其爲すべき所に安んじて落著くことは君に忠義なる至極のものなり、又人たるものは自ら我が心と云ふ主人があり、之を敬ひ事かへて、宛かも孝子が如何に哀しき場合、亦樂しき場合に接するとも、其れが爲めに己が心を移し易ふることなく、卽ち其の哀みなり、樂みなりが斯く千轉萬變して來ると云ふものは、苟も人生としては如何とも爲すべき樣なきことを知り、之に安んじ落ち著きて宛かも親子の間に於て、子が親に事ふるに如何なる難事も自然の約束事と諦らめて爲すが如くなるは、道德の至極したるものなり、凡そ人の臣となり、子となるものは、固より已むを得ざることありて、餘義なく事の實體を推し行ひて、而かも己が一身のことを打ち忘れて、利害を計らざることが卽ち其の道なれば、何んぞ復た自己の存することを悅びて死亡することを惡むに暇あらむや、左樣なる私事は思

成」成と不成とを論せずとの意なり、〔人道之患〕王の刑罰を蒙ることを謂ふ、〔陰陽之患〕陰氣は慘悲しく、陽氣は舒び盛なるが故に、人の悲懼を陰と云ひ、喜悅を陽と云ふ、乃ち喜懼の情內心に交も鬪うて、或は烈火の如く熱くなり、或は冷水の如く寒くなることを陰陽の患と曰ふ、又一說に陰陽不和の患とて卽ち餘り心身を過勞せし爲めに、健康を害することを謂ふとあり、孰れも俱に通ず、〔執粗而不臧〕粗は粗食なり、執粗とは甘じて粗食を守ること、不臧とは精美なることを求めざるなり、〔爨無欲淸之人〕爨は音「サン」「カシグ」と訓ず、淸は涼なり、火を燃すこと寡きが故に、熱氣を避けて涼を納るゝ必要なきことを謂ふ、〔而夕飮冰〕爨人の事を云はずとも主人の自己が先づ淸を欲するなり、〔我其內熱與〕內熱は胸中煩悶して焦るが如きことを謂ふ、〔吾未至乎事之情〕情は實なり、事之情とは使者の事實を行ふ場合を謂ふ、〔子其有以語我來〕來は語助の辭なり、哉の字と大意相同じとは已に齊物論に解したり、

仲尼曰、天下有大戒二、其一命也、其一義也、子之愛親命也、不可解於心、臣之事君義也、無適而非君也、無所逃於天地之間、是之謂大戒、是以夫事其親者不擇地而安之、孝之至也、夫事其君者、不擇事而安之、忠之盛也、自事其心者、哀樂不易施乎前、知其不可奈何而安之若命、德之至也、爲人臣子者、固有所不得已、行事之情、而忘其身、何暇至於悅生而惡死、夫子其行可矣、

【大意】父子君臣の關係を根本的より說き來りて、臣子の本務たる忠孝の大道は苟も人たる以上は到底

世間は何事に限らず、或は小事をも或は大事をも渾て道理を踐まずして互に欣び和らぎて成し遂げるものはなし、卽ち萬事に就き吾が心得が第一肝要なるものなり、然らずして事が若し成し遂げざるときは、必ず人の道に就きての患艱卽ち刑罰誅責が身に掛ることあり、事が若し成し遂げらるゝときは必ず陰陽不和の患艱卽ち病氣不健康を來たすことあり、事の成るにもせよ、成らざるにもせよ、後來に於て身に患艱の無きことは惟君子の有德者のみ之を能く爲すことありと、さて從來此の下拙諸梁は其の食物に於ては粗食を執りて、之が爲に美味佳殽を求めず、食物を爨しく者は長く火を焚くことを爲さざるが故に、火の熱さに感じて淸しきことを欲し、求む人とてはあらざるが、吾が屋の情況なり、然るに今爨ぐ者は兎も角も、主人たる吾が僅に朝に吾が楚王より齊國に派遣の命を受けながら、既に夕方には乾くこと甚しきが爲に、冰を飮みたり、是れ我は其れ餘り心配憂慮の至り、胸內が焚けて熱したるが爲なるか、吾は尙ほ楚國に在りて未だ使命の實情に立ち入らざる中に、既に陰陽の不和なること、卽ち身體上の病氣を惹き起したり、是れ後に能く使命を果たすとしても陰陽の患があり、使者の用事が滿足に終へざるときは必ず人道の禍たる刑責の患あり、是れ吾が一身に人道天道兩方の患あるものなり、此れでは人の臣たる者は至極に辛抱出來難し、就いては夫子願くは何とか今一應殊に敎へ諭し給はんことを、

【解義】〔葉公子高〕葉は音「攝」、楚國の縣の名なり、春秋の時、楚は周の諸侯を以て僭して王と稱す、因て亦其の縣邑を治むる官吏を號して公と曰ふ、子高姓は沈、名は諸梁と云ふ、〔蓋將甚敬而不急〕未來を豫測して云ふが故に蓋將と曰ふ、此れ葉公に於て齊王從來の行動が不誠實なるに因りて、之を推言したるなり、甚敬とは體面上は尊敬すると、不急とは使事に應答することは緩慢なることなり、〔吾甚慄之〕慄は音「リツ」懼なり、〔子嘗語諸梁〕子は孔子を指す、諸梁は葉公の名なり、〔寡不道以懽成〕是れ事を成すには皆其の道あることを反言したるなり、懽は悅なり、「宣注」に未有不依於道而能暢滿無悔者也と、卽ち何事も道に叶はざる行ひを爲しながら、能く圓滿に解決する者あらずとなり、〔若成若不

子嘗語諸梁也曰、凡事若小若大、寡不道以懽成、事若不成、則必有人道之患、事若成、則必有陰陽之患、若成若不成而後無患者、唯有德者能之、吾食也執粗而不臧、爨無欲淸之人、今吾朝受命而夕飮冰、我其內熱與、吾未至乎事之情、而既有陰陽之患矣、事若不成、必有人道之患、是兩也、爲人臣者不足以任之、子其有以語我來、

【大意】 前段と共に成心を去りて因是に從ふべきことを謂ふ、但前段は外物に應ずる事に就いて云ひ、此段は自己を處する事に就いて云へり、首節先づ葉公の患を畏れ避を思ふを叙ぶ、宣穎曰く寫疑懼之情如畫、措辭特雋と、

【通釋】 楚の葉公子高と申せる人あり嘗て楚王の命を受けて將に齊國に使者として赴かんとし、因りて孔子に問うて曰く、今度我が楚王は拙者を齊國に使者に差遣することは其の事體甚だ重大なることとなるが、姑く吾が推量を以てすれば、彼れ齊國も仲々去る者なれば、外面は非常に敬意を表して吾を厚遇し、而かも肝要なる用件に至りては、成るべく應接を遲緩にして差し急ぎて爲さざらんとす、左すれば吾に於て彼の無禮を咎むることは能はずして長く引き付けらるゝ中には弱り果てんとす、是れ彼れ齊國が外交政略として執ることとならむと思はるるなり、さて今や眇たる匹夫すら一旦志を定めたる以上は、未だ容易に之を他方より動かして易ふること能はざるに、況して堂々たる大國の諸侯が一たび定められたる政略を動かさんことは決して容易ならず、されば之を如何にせば可なるかと思うて吾は非常に此の義に關して慄ひ恐れて心配なし居れり、因て憶ひ起せしことは、夫子は嘗て此の下拙諸梁に語り給ひしに、凡そ

ふ、「辨正」に依れば上文の徇耳目の二句は虛の義を敷衍して逃べ鬼神將來の二句は吉祥止止の義を敷衍し、本句は總べて吉祥止止の義を覆斷したる詞なり、「禹舜之所紐也」紐は樞紐なり、乃ち禹舜は之を以て人を治むる事の引き締となすを謂ふ、「伏羲几蘧之所行終」伏羲は上古三皇の一人なり、「成疏」に依れは几蘧は三皇以前未だ文字有らざる時代の君主なり、「所行終」とは之を行うて其の身を終はること卽ち一生涯の間行へるものなるを謂ふ、「而況散焉乎」散は放なり、崖說に依れば德不及聖主爲散とあり、卽ち庸劣なる者を謂ふ、「宣注」に詠歎虛字至此則化王公不足言矣と、

【備考】人間世に在りて處し難き者多きことなるが、人臣として君主に事ふること亦其の一件たり、故に此節は孔顏の問答を引きて其の一例を示したるなり、其の文章先づ顏淵が不好の處を將て一層より一層と深く入り委曲披剝し、然る後ちに、仲尼曰齋の句、一たび齋の字を點出し、然る後ちに是祭祀之齋非心齋也の句、一び心齋の字を點し、再び問答を叙し、虛心の必要なるを說き虛の字を點出し、虛者心齋也の句竟に虛の字を將て之を心齋の意義に還して其の注脚たることを示し、然る後ち三び問答を叙し、申ねて虛の字の意義を敷說し、又之を咏嘆し、二たび人主を救正する道を說き、遂に說きて杳冥不看の處に至る、人間世に於て此の如き本領を具ふるときはたとひ恆河の沙衆しと雖も、啻だ之を琉璃界中に納るるのみならず、卽ち如何なる多事難事たりとも、容易に解決を與へて、綽々として餘裕ある可きなり、「炮莊」に曰く莊叟はもと人間世を幻現することを欲せず、必らず其の情狀を曲盡し、坑塹(危害)を免れしむ、謂はゆる吉凶民と與に患を同うするものなりと、以上は徐廷槐の直解、宣穎の經解によりて、其の大意を取捨し、以て本文の段節を示すこと此の如し、

葉公子高將使於齊、問於仲尼曰、王使諸梁也甚重、齊之待使者、蓋將甚敬而不急、匹夫猶未可動也、而況諸侯乎、吾甚慄之、

言其人少、有以搖曳上二句、虛字妙用如此、豈苦空哉と、此れ莊子本文の意を上の兩の未聞とあるは倶に其の事は絶無と云ふにはあらず、只其の事を爲す人は多からずと云へる意味にして、上文の爲人使云々の二句の意義を人をして深く玩味せしめむが爲めに長く搖り曳て云へるなり、即ち空虛を以て主義と爲すと雖も、徒らに空々寂々として無事に苦むを善しとするにあらざることを明かにすと釋したるなり、〔瞻彼闋者〕闋は空竅なり、即ち孔を謂ふ、此れも下の虛室生白を云はむが爲めに、室の外間より室內を窺ふ狀に就いて云へるなり、「辨正」に曰有人入之則不虛矣、故觀虛室必從隙窺、虛室生白、白とは日光なり、日光の照らす所、即ち光線を謂ふ、此れ此の心虛なれば自ら明なるに喩ふ、〔吉祥止止〕吉祥は幸福なり、上の止は止留して他に行かざるなり、下の止は心の凝靜にして止まる處を謂ふ、即ち凝靜なる時は幸福は自然に他に往かずして已に來り集るを謂ふ、上文に謂はゆる道集虛の意なり、兪樾曰く止止は連文にして義に於て取るなし、「淮南子」の俶眞篇には虛室生白、吉祥止也に作る、疑らくは莊子此文の下の止の字はまた也字の誤ならむ、唐の盧重光また列子の天瑞篇を注して、虛室生白、吉祥止耳と云へり、亦以て止止の連文は誤たるを證すべしと、〔夫且不止〕且は語助の辭なり、「助字辨略」に詩國風の匪我思且と鄘風の揚且之皙也とあるを引きて曰く、且在句中者語助之辭、在句末者語已之辭と、岡松甕谷は曰く、且は將なりと、〔是之謂坐馳〕身は此處に在れども、心は彼方に馳せ散ず、故に坐馳と曰ふ、又一説に坐せども馳するが如くにして、止まらざるなりと、〔夫狗耳目內通〕「宣注」に耳目在外而狗之於內とあり、乃ち耳目の聽視を悉く內に藏めて妄に外に向うて縱にせしめざるなり、〔而外心知〕知は智と同じ、「宣注」に心知在內、而黜之於外と、乃ち心を虛空にして何等の思ひを留めざること、謂はゆる成心を去るなり、〔鬼神將來舍〕舍は來り止まることなり、「辨正」に造化之幾至爲微密、而動則能應、若光在其度內也と、〔而况人乎〕「成疏」に依れば人は人類にして人類の歸依することは固より其の宜き所なりとあり、今「辯正」の説を用ひて解したり、〔是萬物之化也〕萬物之が爲めに化する所なるを謂

し出ださずして心内に通じ入れ、而して心の働き智の働きを外に排斥して、復た内に居りて拒き止むるもの無からしむるときは、彼の微妙にして不可思議千萬なる鬼神すら吾より招き致さざるも、將に彼よりして進み來りて吾が心内に舍らむとすると、宛かも虛室に自ら光線が射すと一般なり、而るを況して同類にして測度すべき人の行動は固より吾が心の內に映射して其の實情實形の如何なるかを見逃すことは無きものなり、以上に述べたることは是ぞ萬物の暴惡を化して善良とする所の道なり、古しへの禹王舜帝の此を以て天下の人民を治むる元締總結と爲したる者なり、又更に上古の伏羲や若くは几遽と云へる帝王が之を行うて終身に至るまで止まざりし者なり、然るに況して此等帝王より散なるもの、即ち尋常並なる人々に於ては尚更に申すまでも無く、之を奉じて行ふべきものなり、

【解義】〔絶迹易無行地難〕此の二句は下の二句を起さむが爲めに、先づ譬を取りて云へるなり、迹は足迹なり、全く足跡を絶ちて地を行かずとは、全く世と無關係なることなり、「辨正」に曰く、比單無諫之迹と、無行地とは歩み行くとも足跡は地上に着かざること、世に關係しながら、圓滿にして角立たる痕迹なきなり、「辨正」に曰く比諫而無諫之迹と、〔爲人使易以僞〕人使は下の天使に對して云ふ人の使役なり、即ち凡そ人に使役せられて動く者はもと自動にあらずして他動なれば其の動くや僞を行ひ易きなり、「宣注」に人事易以假宅とあり、〔爲天使難以僞〕天使は天の使役なり、即ち凡そ天に使役せらるゝ者は自ら動かざる可からずして動く者にして、上文に一宅而寓於不得已とある者なればもと是非共に動かざるべからず、其の間決して僞を容るゝ能はざるなり、「宣注」に天行之妙難以假託、天行所謂無行地者也と、〔聞以有翼云云〕此の二句亦下の二句を起さむが爲めに先づ譬喩を設けて云へるなり、〔聞以有知云云〕上の知は智と同じ、下の知は字の如し、下句亦同じ、〔未聞以無知云云〕宣注に以無翼飛者神運也、以無知知者寂照也とあり、神運とは目に是れとして見るべき形なくして、自然に運び移ること、寂照とは是れとして認むべき光なくして何邊よりとなく自然に明かに照らすことなり、「宣注」に又曰く此皆

【通釋】且吾人が當世に處するや、皆已むことを得ずして、後ちに動きてこそ、眞の道に叶ふことなれ、例へば同じく足の働きに就いて云へども、全く足迹を地上に絶つことは、卽ち步むを止めて行かざるまでなれば、直ちに爲し易き業なるが、行き步むことは行き步むなれども、土地を離れて行きて足が直ちに土地に着かざるやうに爲すことは、苟も神人ならざる外は出來得難き業(ワザ)なり、卽ち全く世と沒交涉の地に立ちて、世間の事を一切棄てゝ顧みざることは、比較的爲し易きが、彼の天下に已むを得ざる義理を以て詰められて、退引(ノッピキ)ならず、事を爲すに至りては、自然の理勢に任かして爲すより外なければ、宛かも人の地を行きながら些(スコシ)の足迹を地面に着けざるが如く、實に容易ならざる難事たり、何むとなれば吾人專ら人と云ふ者に使はれて卽ち他動的に働くときは、人は如何樣に嚴密なりとて、矢張り其の智を暗まし法をくゞりて、巧み僞りをなし易きなり、天に使はれて卽ち自動的に働くときは、天理は細かに行き涉りて遺漏なければ、巧み僞はりを容れ難し、凡て物は通常のことは知り易く、非常のことは悟り難きものなり、乃ち是れまでに鳥類に於て羽翼が有るを以て、能く飛ぶ者の有りしを聞きたりしが、未だ羽翼が無きに飛ぶ者有ることを聞かず、人類に於ても是れまでに智慧が有るを以て事理を知る者有りたるを聞きしが、未だ智慧が無きに事理を知る者有りしを聞ず、是れ皆何れも通常的事物は得易きも、非常的事物は得難きことを證明すべきなり、尙又彼の室屋に於ける孔穴の開ける處を瞻(ミ)るに、何等の物なき空虛なる室の中には、必らず光線が外より射て、自然に白き明りを生ず、卽ち是れ心の虛きものは、隨うて明かなると同理なり、凡て人の吉祥幸福卽ち人生の妙境と申すものは、亦必らず其の止まるべき虛明てふ處に止まりて、外方へは馳せ移らざるにあり、然るに彼の世の人々に於て若しも其の止るべき處に止らざるときは、是れぞ身は此に坐しながら心は彼に馳せ行くことなれば、名づけて坐馳と申すものなり、心の宜く虛なるべきに虛ならざるときは、右の如く己れの一身すら心と相離れて、何の役にも立たざるなり、全體の人は耳の働きや目の働きやを以て、攝取せる外物、卽ち聽きたり視たり爲したる事柄は、皆一切外へ漏ら

に壔者累土、爲臺、以傳信、（中略）壔者保衞之所、故借其義、爲保衞、周易以此毒天下、而民從、老子亭之毒之、與此無門無毒 三毒字皆是此義、「廣雅」毒安也、亦即此訓とあり、禎案ずるに壔は毒の本字たり、正に門と同類なれば門と毒とを對文と爲せし所以なりと、郭慶藩亦此の説を取りて曰く、門可以沿爲行路、毒可以望爲標的、無門無毒使人無可窺尋指目之意と、〔一宅而―幾矣〕宅は常に居るの義なり、一宅とはもと宅一と云ふべきを故らに倒文にしたるなり、心を靜一の處に居くなり、寓於不得已とは不得已の地に立つこと、寓は「ヤドル」と訓ず、假りに暫らく居ることにて、常に居る處にあらず、靜一は常に居る處靜一の地にして、應じて動くことは已むを得ずして後ちに爲すが故に、前者を宅と云ひ、後者を寓と云へるなり、幾は近なり、自然の道に叶ふに近きなり、按ずるに上文に夫子曰盡矣とありて、顏回が虛者心齋也の意義を領得せしことを許可せしながら、又吾語若とありて、若能入遊其樊云々の義を述べたるは、卽ち只前説を反復して、虛の義を叮嚀說明したるに過ぎず、故に宣穎は此の本節を評して寫虛字如此と云へり、

絕迹易、無行地難、爲人使、易以僞、爲天使、難以僞、聞以有翼飛者矣、未聞以無翼飛者也、聞以有知知者矣、未聞以無知知者也、瞻彼闋者、虛室生白、吉祥止止、夫且不止、是之謂坐馳、夫狗耳目內通、而外於心知、鬼神將來舍、而況人乎、是萬物之化也、禹舜之所紐也、伏羲几蘧之所行終、而況散焉者乎、

【大意】　心の虛なるときは、妙道の極意を得たる者なるを言ひ、以て申さねて上節の盡矣と云ひ則幾矣と云へる意義を明かにせり、

動する氣は、もと空虛にして形ちもなく聲もなくして只外物の來るにより之に接觸して、千態萬狀に變化するものなり、例へば彼の齊物論に大塊の噫氣が樹木に觸れて、大風小風の種々なる形ちと爲り衆竅に入りて又種々雜多なる聲と爲ることを云へる如く、皆俱に他の物と相待ちて然るなり、又厲風濟則衆竅爲虛とありて、寂然として風の聲も無く形ちも無くなりたるは卽ち其の接觸たる物を離るゝと同時に、氣は元の空虛に還るものなり、人の思氣も亦此の如く、外物の來るに隨ひて起り物の去るに隨ひて止み、毫も何等の事物に頑固執着せざることを、氣虛而待物者也と云ひ、以て此の如くなるときは聽レ之以レ氣と云ふべきものなるを謂へるなり、〔虛者心齋〕此れ以上の答意を總結せるなり、乃ち謂はゆる心齋とは他にあらず、全く唯だ虛のみと云ふが如しとの意なり、〔而無感其名〕「趙注」に汝能入二其國中一而不レ爲二名所一レ動とあり、感は心の物に觸れて思ひを動かすことなり、其名とは顏回の名譽なり、此れ顏回が衞君の過失を諫むるに、徒に己が忠義直諫の名譽を求めむとするときは、反りて不可なることを謂へるなり、上文に桀の關龍逄を殺し紂の王子比干を殺せしを以て、故其君因二其脩一以擠レ之、是好レ名者也とあり、又名實者聖人之所レ不レ勝也、而況若乎とあり、此の處も其の意を繰り返して深く好名の行を戒めたるなり、

〔入則鳴不入則止〕入とは己が說の聽き納れらるゝを謂ふ、不レ入とは之が反對にして聽き納れられざるを謂ふ、鳴とは齊物論に必要上已むことを得ずして發する言語を論じて、其以爲レ異二於鷇音一、亦有レ辯乎、其無レ辯乎云へるが如く、卽ち鳥の鳴くと同じく、言論を發するも毫も野心を挾む無く、自然的公平なることを謂ふ、又鳴の字は上文の若能入游其樊とある辭より來る、〔無門无毒〕「宣注」には不レ開二一隙一、不レ發二一藥一とあり、此れ「趙注」に無レ門者我無二隙之可一レ乘、無レ毒者彼不三以レ我爲二害とあるに基つきたるものにして、卽ち我が注意は周到にして彼よりし乘すべき隙なく、亦我が言は至極淡泊にして、彼れ以て害毒あるものと爲さずとの意に解したるが、李禎の說に依れば、門と毒と對文なるべきに其の字は類を同くせず、毒は音「トゥ」蓋し壔の借字にして、「說文」に依れば壔保也、亦高也、讀若レ毒とあり、張行孚が「說文發疑」

なりしことをも併せて盡く忘れて、空虚になりたることなり 此の如きは最早や心が空虚になりしと申すべきか、敢て伺ひ奉るなり、是に於て孔子は終に之に許可を與へて曰く、汝ちの熟考の結果、發明の力が、其處までに至れば、最早盡くして餘蘊あるなし、いざ吾此に就きて玆に一つの秘訣を若ぢに物語らむ、さて汝ぢ能く此より往きて彼れ衛國と申す汝ぢが樊籠の中に入りて游び、而かも汝ぢが名譽と云ふ欲望に心を動かすこと無かれ、汝ぢ能く樊籠中に入り得て卽ち衛君に近づき事ふることを得ば、鳴きて汝が意見を陳述して衛君に達すべし、若し入ることを得ず、卽ち衛君に近づき事ふることを得ざるときは、然かすること無かれ、決して門を開きて敵を引き入るる無れ、卽ち我が不注意なるよりして彼をして我に乘せしむる勿れ、世人より毒藥を視るが如き惡感情を我が身に招き取ること無かれ、卽ち淡泊公平の言を以て人に接すべし、靜一なる處を平常の住居と心得て之に安息し已むことを得ずして動くことを、暫時の假寓と思うて、事の終はり次第直ちに元の靜一に復し、些しの我意なきときは、眞の至道に近かきなり、

【解義】〔未始得使〕使とは心齋せしむることにて、此れまた孔子より心齋の敎を受けざりし時を謂ふ、〔實自回也〕自回とは自から此の顏回てふもの有ることを謂ふ、卽ち自我觀念の强かりしことなり、〔得使之也〕得の上に及の字を加へて見るべし、此れ既に心齋の敎令を得し後を謂ふ、〔未始自回也〕遂に自から已を忘れしことを謂ふ、卽ち凡て世の物に於ける彼我對峙の觀念を一掃せしことなり、〔可謂虛乎〕上文に、虛者心齋也と孔子の語あれば、此の處顏回に於てもまた齋の字に代ふるに虛の字を以てしたるなり、乃ち上文に孔子が齋して後に衛の亂を救ふべき方法を語るべきを示したれば、顏回は既に齋せしことを述べて之を語ること請ひしなり、〔若能入游其樊〕若は汝なり、樊は樊籠なり、此れ鳥に譬へて云ふ、故に下文にも入則鳴の語あるなり、養生主篇にも澤雉不蘄畜乎樊中とあり本文の樊は此れと義は同じ、〔虛而待物者也〕此の句卽ち上文の聽之以氣とある義を莊子自から釋したるなり、虛とは空虛にして何等の物をも事をも無きことなり、卽ち自然に發

を云はむが爲めに、本句の如く云へるなり、〔而聽之以心〕心のみにては固より物を聽き取るべからざれども、上文に耳と云ふ形ちに便る不可なるを云ひ、而して此の處は其の代りに心に便るべしとの意を云へるが故に、文章の辭よりして態と心を働すことを形容するに聽の字を用ひたるなり、卽ち意味は心に便りて思ふべしとの義なり、〔聽之以氣〕聽の字を下たしたるは上句と同じ意味なり、氣は自然の氣なり、下句の莊子が自解に氣也者虛而待物者也とあるを見るべし、〔心止於符〕符はもと契符卽ち「ワリフ」のことにて、一轉して凡て物の能く合ふことを符と謂ふ、虛無心にて物を聽くときは物の聲は耳に聞くのみに止まりて、別に深く枝葉の念慮を起さず、卽ち心は耳の聽きし處に合ふが限り極まりとなることを謂へるなり、「宣注」は止於意之所合耳、蓋心所思之理、而驗焉謂之符と、此の說に依るときは、唯心の働き作用の力は僅かに其の思ひ到れる道理より外に出でざることを謂へるなり、

顏回曰、回之未始得使、實自回也、得始之也、未始有回也、可謂虛乎、夫子曰、盡矣、吾語若、若能入遊其樊、而無感其名、入則鳴、不入則止、無門無毒、一宅而寓於不得已、則幾矣、

【大意】顏回の聰明終に能く心齋の說を了解せしを以て、孔子之に印可を與へられたることを敍し、以て申ねて虛の意義を說けり、

【通釋】顏回乃ち曰く、仰せの如く、心の虛が卽ち心齋と申すことなれば、私に於ては未だ始めて夫子の尊敎を得ざるときは、實に此の顏回と申す自我的觀念が心の中に存在してありまして、物事の我が心に叶はざることあるときは、必らず諫め度しと思ふ心が勃々と起りたり、然るに今や夫子の尊敎を得て、心の空虛ならざる可からざるを知るに及びては、前日の自我的觀念の已に空虛になりしとは今更申すまでもなく、卽ち夫子が此の顏回に敎へ給ひて此の如く

心止於符、氣也者虛而待物者也、唯道集虛、虛者心齋也、

【大意】心齋は畢竟虛心に在ることを說けり、宣穎曰く將虛字點破心齋、五蘊俱空と、

【通釋】是に於て顏回は又更に問うて曰く恐縮ながら心齋とは如何なるものなるか伺ひ度しと、孔子答て曰く、汝ち心齋を知らむと欲するならむには、宜く汝が志慮を一にして、外に氣を散さざるやうに爲すべし、汝ち物事を聽き取るに、尋常の人の如く形而下の耳を便に聽くこと無く、而して形而上なる心を以て之を聽くべし、卽ち物の形式の上に囚れずして道理に因りて之を判斷せよ、然しながら尙ほ其れにても不十分なり、物事を聽き取るに、心に便ること無く、而して自然に發動する氣を以て聽き別くることを爲すべし、卽ち道理に據りて判斷するは全くは不可なけれども、矢張り道理てふ一種のものに囚はれて、圓通自在を缺くることあり、故に自然の發動に任かするに如かず、何むとなれば全體物を聽き取ると云ふものは耳の作用に止まり、心の記憶は耳てふものが聽き取りし符卽ち程度に止まりて、其の以上なり、以外なりに、推し觸れて發動することを起さざるものなれば、其の範圍に於て、際限ありて無窮的に働くことを得ず、氣てふものは本來空虛にして一定の形ちあるにあらず、隨うて物事を待ちて、卽ち物事の出て樣次第に、如何樣にも變轉融通の自在なるものなり、而して眞正の道は此の空虛に集る、卽ち空虛なるが故に能く一事一理に固滯せずして、時と場合によりて推し移りて、其の中庸を得るものなり、此の心を空虛と申すことに一と寄せにするが、卽ち是れ心齋と申すものなり、

【解義】〔若一志〕若は汝なり、顏回を指す、一とは純一にして雜駁ならざること、此の一語は上文の孔子の言に道不欲雜とあると結局同意義に歸するなり、宣穎は曰く、起頭道不欲雜、已照定此處心齋と、〔無聽之以耳〕耳目鼻口等の六根に於ては、聲音最も透徹す、故に此の處獨り一つの聽感を擧げ、以て他の諸感を例して云へるなり、物の聲音を聽き取るには、耳を使らざれば聽き取るべからざれども、此の處は物事に應ずるには徒に形式に囚はるゝ不可なること

べきか、孔子曰はく、否とよ、是れ汝ぢが齋は鬼神を祭祀する齋戒にして、吾が申し聞かせし心齋と申すものにはあらざるなり、

【解義】〔吾無以進矣〕進とは此れ以上の事法を發見することと能はざるを謂ふ、「通義」に曰く顏子至此無以進、由是知夫子化人、直造懸崖、撒手心路斷絶之地、始可進向上一歩と、〔仲尼曰齋〕齋は「モノイミ」と訓ず、「説文」に戒潔也とあり、心を謹み戒め、身を清潔にすることなり、もと齊の字に作る、禮祀に齋之爲言齊也齊不齊以致齊也とあり、〔吾將語若〕若は汝なり、〔有而爲之〕有とは其の方法の有ることを謂ふ、「宣注」には、汝道有此三術、遂易爲邪とあり、此に依れば孔子の意は顏回に於て果して上文に自ら述べたる天人古の三者と共に徒たる三術あるとも、其の之を實行するに至りては、容易ならずと謂はれたるなり、然れども前説を可とす、〔皞天不宜〕皞は舊本に皓に作る、「爾雅」に夏曰皓天とあり、其の氣の皓汗（虚白の意）を謂ふなり、此れ之を容易なりと爲すものは、仍ほ其の心に巧みたることあり、乃ち謂はゆる成心ありて虚白なる自然の道と合はざることを謂ふ、〔唯不飲酒不茹葷〕唯は止なり、即ち下に謂へることを除きては、何に事も無きことを謂ふ、茹は食なり、葷は音「ウン」、「説文」に臭菜也とあり、臭氣高き菜なり、「徐注」に通謂芸臺椿韭葱蒜阿魏之屬、方術家所禁、謂氣不潔也と、「爾雅翼」に西方（佛敎）以大蒜方蒜興渠慈葱茖葱爲五葷、道家以韭蒜芸臺胡荽薤爲五葷とあり、不食葷とは葷菜は人の多々避けて食はざる物なり、然るに回の貧窮なる此れすら尚ほ食ふを得ず、即ち至て赤貧なれば食物上に於ては自然に齋戒をなしたると同じとなり、〔是祭祀之齋〕「禮記」の祭義篇に致齋於内、散齋於外とあり、致齋は心の内に謹戒して外に志慮を濫用せざること、散齋は身を謹愼して酒を飲まず、葷を食はざる類を謂ふ、今本文の孔子の此の言は、專ら散齋に就いて云へるなり、

回曰、敢問心齋、仲尼曰、若一志、無聽之以耳、而聽之以心、無聽之以心、而聽之以氣、聽止於耳、

濟時、故何可以及化也と云へり、〔猶師心者也〕師心とは成心の有るを謂ふ、乃ち己自ら必らず諫めむとの心あればとて他人の諫むべからざるに關せず、強ひて之を諫むることは尙は是れ心を師として、自から用ゆるものなり、即ち未だ必らず諫めむとの成心あるの結果たるを免れずとなり、

顏回曰、吾無以進矣、敢問其方、仲尼曰、齋、吾將語若、有而爲之、其易邪、易之者、皞天不宜、顏回曰、回之家貧、唯不飮酒不茹葷者數月矣、若此則可以爲齋乎、曰、是祭祀之齋、非心齋也、

【大意】下文の心齋一段を說かむが爲めに、先づ顏回の說の窮まることを叙し、又齋の一字に就いて問答を反復す、宣穎曰く、齋字一點、心齋又一點、語到精處、故作閃跌と、

【通釋】顏回此に至りて復た言ふ所を知らず、遂に孔子に請うて曰く、私の思ひ付きたる精切り一杯なる處を申し上げましたに、未だ夫子の御許可を獲ざることでありますが、此の上は吾の力にては到底此れ以上進み申し上ぐること無し、就いては恐縮ながら其の如何にして可なるかの方法を問ひ奉らむと、孔子は之に答へて曰く、是れ仲々の大問題なり、容易に語り、亦容易に聽くべきものにあらず、されば汝に於て先づ齋戒して敬虔の禮を執れよ、吾は將に汝に之を語らむとす、さて汝ちが聽かむと欲する方法は有り、されども之を實行するに至りては豈に其れ容易ならむや、若し之を容易なりとし輕ろしめて爲さむには、虛空純白なる天に對して宜きに叶はず、即ち自然の道とは合はざるなり、かるが故に先づ齋戒して敬虔の意を致すべし、顏回は對へて曰く、齋と申すことは、淸淨にして腥穢の氣を去るとも承はりしが、抑も回の家は素より貧窮にして、唯酒を飮まず、葷を食はざることとのみ打ち續きて居ること、已に數箇月の久しきに及びたり、されば自然に身は淸淨にし、腥穢の氣なければ以て已に齋戒を致せりと爲す

しへより此の如き忠諫の方法ありて、今日我のみが獨り始めて之を唱へたるに非るを謂ふ、「辨正」に曰く若敎譎不出於己、無尊己卑人之嫌と、

仲尼曰、惡惡可、大多政、法而不諜、雖固亦無罪、雖然止是耳矣、夫胡可以及化、猶師心者也、

【大意】師心の者は己猶ほ自ら化する能はず、終に人を化すべからざるを云ふ、「發蒙」に曰く前言雖敎譎之實也、是古之有也、非吾有也、此便師心と、

【通釋】孔子は因て之を諭して曰く、あゝさてもさても左樣なることにて、惡くに可ならむや、本來單純一理なるものを態々左樣に天と徒たり、人と徒たり、又古と徒たりと云ふ如くに、六つ箇敷も組み立てゝ大いに之を正だすことを爲すは、法度が有りて傾むき邪なるにはあらず、凝り固まりてまた宏大ならざれども、同時に罪咎は無かるべし、然しながら其の効力は只己の方のみを善くするに止まれり、夫れ何ぞ之を以て他人を感化して、惡を悛め善に遷らしむ可けむや、乃ち猶矢張り己が成心を師匠手本として、其れより割出だしたる者なり、

【解義】〔大多政〕政は正と同じ「郭注」に當理無二、而張三條以政之とあり、乃ち至當なる道理は、もと極めて單純なるに、或は與天爲徒、或は與人爲徒、或は與古爲徒と云ふが如く、種々なる人爲所作を設けて、大いに先方の非理を正だすことを謂ふ、林希逸は下句の法の字を連ねて大多政法の四字を一句として曰く、政事爲也、法方法也、謂汝所言事目方法太多と解したり、今「郭注」を用ふ、〔法而不諜〕法は法度なり、兪樾は法而不諜の四字を一句とし、又「列子」の列禦寇篇に、形諜成光とありて「釋文」に諜は便辟也とあるを引きて證とし、此の句を有法度而不便辟也と解したり、今其說を用ふ、便辟は外面威儀を繕うて誠實ならざるの義なり、「林注」は諜安也と解し、終是不安諜と釋したり、今前說を用ふ、〔雖固亦无罪〕固は固陋なり、「郭注」に雖未宏大、亦且不見咎責とあり、「林注」は雖能如此三者、固亦無罪、然止於自免而已とあり、〔夫胡可以及化〕胡は何なり、「成疏」に顏回化衞止有是法、纔可獨善、未及

も、誠は其の不心得を責め叱ることが實際なり、此の遣り方は既に古人に爲せしことあるなり、今日吾始めて之を爲すにはあらず、卽ち既に先例の有ることなり、是の如くすれば、たとひ直ぐにして矯め巧みしことなくとも、既に只今まで其の例多ければ、之れが疵とならず、是れぞ古の人と仲間たりと申すなり、以上の如く第一天に叶ひ、第二に人に叶ひ、第三に古人に叶へば、何れよりも非難を容るゝ餘地なければ、たとひ暴人の國なりとも、行きて可なるかと思はるゝなり、如何にぞや、

【解義】〔内直而外曲〕内は心なり、直は質直なること、外は形なり、曲は婉曲にして圭角なきこと、〔成而上比〕成は事を成し遂ぐるなり、上比とは「論語」に下學而上達とある、上達と同文法にして、上に比ぶること、以上の二句共に其の義を顏淵自から下文に解釋なせり、〔内直者與天爲徒〕徒は徒類なり、仲間のこと、卽ち己の天より付與せられたる天性を枉げざれば天と仲間と爲りて相異なることなきなり、〔訢乎而人善之〕訢は求むなり、而は若と通じ、若は此に通ず、而人とは若人と同じ、此の人と云ふ義なり、「論語」の公冶長篇に君子哉若人とあり、「墨子」の節葬篇に法若言行若道とあり、皆倶に若を此の義に用ひたり、〔與人之爲徒〕之は語助にして意味なし、「詩經」の蓼莪篇に鮮民之生、不如死之久矣とあるも此と同例なりと岡松甕谷は云へり、〔人謂之童子〕童子は嬰兒なり、專ら天理に依り、純一にして私曲なきこと、嬰兒の若くなるを云ふ、〔與天爲徒〕徒は徒類なり、仲間のこと、胡大靈は下文の内直而外曲と成而上比の件目を述べたる二節は邪諂の事に似たれば、故に此の以上の一節を言ひ以て、之が洗雪を爲したるなり、作用は下の二節に在りて此の節に在らずと爲せり、〔外曲者〕外は外形なり、曲は委曲從順にして、世間に逆らはざること、卽ち婉曲なり、〔擎跽曲拳〕擎は手を擎げて笏を執ること、跽は跪と同じ、雙膝を地に着くること、曲拳は兩手を曲げて拜伏することなり、〔人亦無疵焉〕疵は毀なり、「ソシル」こと、人之を毀疵すること無ければ、卽ち其の徒たるなり、〔其言雖敎云云〕謫は責なり、己が陳述する言は先方を敎誨すと雖へども、其の意旨は實に之を諷責する心の存することを謂ふ、〔古之有也云云〕古

古爲レ徒、其言雖レ教、讁之實也、古之有也、非二吾有一也、若レ然者雖二道不一レ爲レ病、是之謂三與レ古爲二レ徒、若レ是則可乎、

【大意】顏回天に叶ひ人に叶ひ、又古人に叶ひたる行を以て衞國を化せむとする意を、孔子に告ぐ、宣穎曰く、顏子此一層已入レ細矣、然僅可レ免レ害、未レ及レ化レ人、猶師レ心者也、愈引入レ細と、

【通釋】顏淵は孔子の教誨を聞きながらも、衞國に行きて亂を救はむとの心深切なりしかば、更に質問して曰ふやうに、只今夫子の仰せ通りならば、此より私は內は直にして外は曲り成して、上へ向けて比するときは、如何やと思考致すなり、さて其の內は直と申しますことは、心の內直ぐにして、何等の矯り巧みたることとなく、卽ち生來の初の儘にして、天と仲間たり、天と仲間たる以上は、天下の君たる天子と、一布衣たる自己と、何れも皆もと天の斯の世に生み附けたるものにして、同じく天の子供爲りと承知をなせり、然るからは自己も天子も同一の位地に立てるものと信ずるが故に、何にも殊更に己を枉げ屈して、人に是非共氣に入らむと求むる必要なきなり、されば獨り自己が申し述ぶる言なりとて、彼の人達卽ち我が先方に立つ者に於て之を尤もなりと贊成することを求めむや、それと同時にまた彼の人達に於て之を尤もとせざることを求めむや、卽ち先方の人が己を善く云はむも、惡しく云はむも、別に我に於て構ふことはあらず、左樣なるものは、之を名づけて童子と申して、卽ち純一無私の性質なれば、是れぞ天と仲間たりと申すなり、外は曲るとは、世の人々と仲間となりて之に逆らひ戾らざるなり、擎跽曲拳とて、手を捧げ足を跪つかせ、腰を折り身を屈め首を俯けて敬意を表はすこととは、人臣君主に對する禮義なり、されば世の人皆之を爲すに吾獨り敢て爲さずして濟むべきや、世の人々の爲すことを、吾も其の通り爲せばとて、人人亦吾を疵り惡むことなかるべし、是れぞ世の人々と仲間たりと申すことなり、成して上へ向けて比するとは、物事を成して上つ世たる古への人と仲間を爲すことなり、卽ち其の言ふことは教誨にてあれど

みて犯者の罪狀に據りて法律を施すを案と云へるが如く、此にては務めて人の感情を確と突き留め、之に循ひ依りて、畔かざらむことを期するなり、〔以求容與其心〕容與は安適なり、其心とは自己の心なり、卽ち此四句は己が心に愉快安適を取らむと求むるを謂ふ、此れ上句に以陽爲充云々と云へるが如く、既に必らず諫めむとの私心ありて、之を遂げむが爲めに、因案人之所感のことを爲すを云へるなり、「辨正」に曰く一段弊病、正在此句、又曰有必諫之心而求遂卽是有成心而不因是と、成心、因是共に既に齊物論に詳かなり、〔日漸之德不成〕下の大德に對して云ふ、漸は漬なり、「ヒタス」と訓し、水の物をひたすが如く、次第〳〵に深く浸み入ること、日漸とは日々に漸漬すること、不成とは德の進まざることとなり、〔而況大德乎〕大德とは、「辨正」に曰く現在無成心而因是之德也、無成心而因是、則處環中（齊物論にあり）以應無窮故大なりと、卽ち己が心に固着したる蟠りの量見なくして、公平無私なれば、何に事何に物に接しても、差支なく應じ得るが故に、天の廣大にして、私照なきに形容して大德と云へるなり、〔將執而不化〕將の字の上に彼の字を加へて看るべし、此れ衞君の行爲を指して云ふ、〔外合而内不訾〕姚鼐曰く訾量也、聞君子之言、外若不違、而内不度量其義と、卽ち外面は君子の言論を聽くが如く粧うて、内心は之を疏外にして、其の論義に注意せざることとなり、

然則我内直而外曲、成而上比、内直者、與天爲徒、與天爲徒者、知天子之與己皆天之所子、而獨以己言蘄乎而人善之、蘄乎而人不善之邪、若然者、人謂之童子、是之謂與天爲徒、外曲者、與人之爲徒也、擎跽曲拳、人臣之禮也、人皆爲之、吾敢不爲邪、爲人之所爲者、人亦無疵焉、是之謂與人爲徒、成而上比者與

も、顏色風采が定らず落ち就きが無きときは、矢張り平常なる凡人と聊かも擇ぶことなし、然るに專ら他人の事物に感觸して起る心を推し考へて、卽ち强ひて我慢にも、他人の感情に牴觸せざらむことを務め、以て如何にもして我が自說を貫徹し、心の容與とて安むじ適することを求めむとす、是れ仲々其の力に不相當なる大業にて、左樣なるものを名づけて日日に漸く進む德すら成就せざるものと申すことであるに、況して大なる德にて卽ち理想的道德がどうして成就すべきや、彼れ暴人は仲々左樣なる手段にて感化し得べきものならず、將さに頑然と自說を固執して化せず、縱ひ外部表面は相合ふとも、內部精神上は能く汝が說を量り較べて善惡邪正を辨別することを爲さざらむとす、卽ち外は尊敬するに似たれども、內心には別段に見向きもせざるなり、左樣なることにして、其れ何ぞ可ならむや、卽ち到底汝にては、まだ衞君を救ひ正すことは、得ざるなり、

【解義】〔端而虛〕端は正なり、其形を端正にして禮を守り、虛心坦懷にして國に貢献を爲すこと、卽ち上文の道不欲雜とある雜を除きて、純に就かむことを務むるなり、〔勉而一〕勉は勉强して行ふこと、一心不亂にして、心の二三ならざること、乃ち上文の多則擾とある多を去りて、其の要に從はむと務むるなり、〔惡惡可〕上の惡は嘆息の聲、下の惡は於何と云ふと同じ、「イヅクニ」と訓ず、〔夫以陽爲充孔揚〕陽は外を謂ふ、充は滿なり、孔は甚なり、揚は意氣の昂揚すること、乃ち心はもと靜かにして、何等の物を思はざればこそ、自然の道に叶うて、天德を保ち全くするものなるに、今反つて端並に勉を以て心掛けと爲すときは、是れ既に心に一物ありて虛靜ならず、外面のみ如何にも鹿爪らしく見えて、意氣揚々たることを謂ふ、〔采色不定〕采色は模樣色柄にて、卽身の態度顏付きを謂ふ、卽ち外部は如何にも尤もらしく見ゆるも、內心が天德全からざる故に、何邊となく、態度顏つきが、落ち就かざることなり、〔常人之不違〕違は「中庸」に忠恕違道不遠とあるを、朱注に違去也、如「春秋傳」齊師違穀七里之違と云へるが如く、此にては「サル」と讀みて、相去るの義に解す可し、乃ち常人と相去らず、全く同程度なることを謂ふ、〔因案人之所感〕案は後世の獄吏が訟を聽き讞

屈、況汝乎と云へり、姑く參考に備ふ、〔若必有以也〕以は因なり、故なり、「毛詩」の國風に何其處也、必有以也とあり、史記の惠景侯者表に太史公讀列侯至便侯曰、有以也夫とあるが如き、亦皆本文と同例なり、〔嘗以語我來〕嘗は試なり來は語助なり、或は曰哉の轉音なり、「孟子」の離婁篇に盍歸乎來とあり又「史記」の孟嘗君傳に長鋏歸來乎とあり、亦同じ、

顏回曰、端而虛、勉而一、則可乎、曰、惡惡可、夫以陽爲充孔揚、采色不定、常人之所不違、因案人之所感、以求容與其心、名之曰日漸之德不成、而況大德乎、將執而不化、外合而內不訾、其庸詎可乎、

【大意】顏淵の言は、孔子の教に由りて、其の雜駁を去らむと欲し、孔子は因りて其の諫むる所以の術を去ると雖も、必諫の意あるときは、亦未可なることを言へり、

【通釋】顏回は對へて曰く、只今夫子の仰せられたるが如く、成程道は雜駁にては惡しことゆゑ、端肅にして謙遜虛心なるやうに務め、又道は多端にては善からざるゆゑ、勉强して純粹專一なるやうに爲したらむには、先づ己に存立する德は確乎と定まる故に可ならむか、卽ち兼ねての希望を果たして、彼れ暴人の亂を救ふべきかと存ずるなりと、孔子は之に謂うて曰く、あゝさて〳〵どうして、其れで可ならむや、不可なるなり、一體汝ぢが虛と云ひ一といふことは、曩に道不欲雜、雜則多と吾が申せし義に對して、其の弊を去らむとするより出でたることにて、結構にはあれども、此れは自然の德より出でざるときは、未だ可ならず、然るに只今汝ぢが申されし如きは、不自然的に屬せり、彼の端肅勉强は皆外部に見はれたる行爲にして、卽ち陰陽で申すときは、陰は裏面にして陽は外面なれば、勿論汝ぢが行爲は陽部に屬せり、陽部卽ち外部が充ち盛なるを以て、意氣甚だ揚ると

しと雖も、亦古史に立而不去とあれば、其の桀と相爭ふの烈しかりしことは、亦推知すべし、〔叢枝胥敖〕二國の名既に逍遙遊篇に見ゆ、〔禹攻有扈〕有は助辭、有扈は「釋文」に司馬去有扈國名在始平郡、案今京兆鄠縣也と、〔國爲虛厲〕虛は墟と同じ、居宅に人なきを虛と曰ふ、死して後ちなきを厲と曰ふ、又戾に作る、「墨子」の魯問篇に是以國爲虛戾とあり、又「戰國策」の趙策にも齊爲虛戾の語あり、皆同義なり、〔身爲刑戮〕「辨正」は此を以て堯禹の行に係けて、言不可德化待於誅滅也と云へり、乃ち堯禹の德と雖も、之を化する能はずして、誅滅を行うて、始めて平ぎしと解したるなり、〔其用兵不止云云〕諸解多く此の二句を以て、三國の業と爲し、三國は實を求め利を貪ること此の如くなりしが故に、堯禹之を攻滅せりと爲す、然れども予は下の句の是皆求名實者也と云ひ、名實者、聖人之所不能勝也と云へるに照らし、以て堯禹に係けて解したり、蓋し從來儒者多く堯舜禹湯等の聖人を非議する嫌あるを以て、此の如き曲解をなせるのみ、莊子はもと孔子の堯舜を祖述する者と異なる、故に未だ必しも此を執りて彼を解すべからざるなり、〔是皆求名實者也〕蘇輿曰く龍逢修德、而桀紂以爲好名、因而擠之、桀紂惡直臣之有其美、而自恥爲辟王、是亦好名也、叢枝胥敖有扈用兵不止以求實也、堯禹因而攻滅之、亦未始非求實也、故曰是皆求名實者也と、今案ずるに此の說は謬れり、本句は專ら堯禹が三國に對する行爲に就いて斷じ、以て上文の桀紂逢比の關係に就いて是皆因其修云云是好名者也と相對して云はれたるなり、〔名實者聖人云云〕名を好み實を好むの心は何人も有り勝ちのことにて、卽ち上文に述べたる臣としては龍逢比干の如き、君としては堯禹の如きは、何れも皆聖人なれども、猶ほ且つ其の欲念に勝ちて之を制止すること能はざりき、況して汝の如き者は彼れ王公の權威に脅迫せられ勢利に誘惑せらるときは、必らず勝つこと能はずして、上文の謂はゆる名之曰益多の結果に歸することとならむとなり、「宣注」は勝を音「升」と讀み、「タフル」と訓し、言堯禹且不堪三國好名之心と解し、王先謙は本文の而獨不聞之乎より以下を解して、夫子又擧所聞告之、言人主據高位之名、有威權之實、雖以聖人爲之臣、亦不能不爲

汝ぢ獨り之を聞きて承知致して居らざるか、何ぞ之を鑑みて自ら戒めざるや、全體名譽實利と申すものは、寔に人の心を誘惑して誤らしむるものにして、彼の聖人たるものすら、之の欲念に克つこと能はざるなり、即ち彼の比干龍逢の如きも好名の爲めに其の身を滅ぼし、堯舜の如きも亦名實兼收の爲めには、人の國を滅ぼすことを辭せざるなり、而も況して汝に於てをや、汝若し衞國に行きなば、必らず亦名實の爲めに身を誤り破滅を取らむものなり、然しながら汝も此くまでに決心なせしからには、此れは必らず相當の考へのあることならむ、試みに其の考へ即ち方法手段を我に語りて見よや、全體如何なることなるか、

【解義】〔桀殺關龍逢〕關は姓にして龍逢は名なり、或は曰く其の字なりと、夏の桀王の賢臣なり、誠を盡くし君に事へしが、桀の無道なるを諫め、怒りに逢うて殺さる、〔紂殺比干〕比干は殷の王族紂の暴虐を諫めて去らざりしかば、紂は怒て之を殺したり、〔是皆修其身〕皆とは龍逢比干を指して云ふ、〔以下傴拊人之民〕下は臣下たり、傴は音「ウ」拊は撫と同じ、傴拊は愛憐すること、又嘔呴と同義にして養ふことなりとも云ふ、人とは君を謂ふ、孟子に立於人之本朝而道不行恥也とあるが如く、古しへ多く汎く君主を稱して人と呼べり、〔以下拂其上〕拂は怫と通ず、戾なり、上たるもの殘虐を行はむと欲するに、龍逢比干は人民を傴拊す、是れ下として上に拂りたる行ひなり、〔因其修以擠之〕龍逢比干が好むで其の行を修飾し、名譽を好む心あるに因み、乘じて之を擠陷することなり、「通鑑前記」に龍逢の事を載せて曰く、關龍逢進諫曰、人君謙恭敬信節用愛人、故天下安而社稷宗廟固、今王侈靡嗜殺、民惟恐君之後亡矣、人心已去天命不祐、盍少悛乎、弗聽、龍逢立而不去、桀怒遂殺之と又比干の事を載せて曰く、比干極諫、陳先王艱難、天命不易、國家將亡之明徵、請王洗心易行、伏于象魏之門、紂怒曰、比干自以爲聖人、吾聞聖人之心有七竅、遂剖視之と、此に由りて觀れば、比干の死するや、紂は彼が聖人を以て自ら居るを惡みて之れを殺せり、本文に因其修以擠之、是好名者也と云へる所以なるか、龍逢の事は比干の如く甚しからざり

物に對するに、一たび其の最初に於て之に順へば流水の勢復た止むべからざるなり、「宣注」に以後將無不順從と云へり、〔若殆以不信厚言〕「宣注」に未信而深諫とあり、

且昔者桀殺關龍逢、紂殺王子比干、是皆脩其身、以下傴拊人之民、以下拂其上者也、故其君因其修以擠之、是好名者也、昔者堯攻叢枝胥敖、禹攻有扈、國爲虛厲、身爲刑戮、其用兵不止、而求實無已、是皆求名實也、而獨不聞之乎、名實者、聖人之所不能勝也、而況若乎、雖然若必有以也、嘗以語我來、

【大意】古人の事を引證して行くも必らず其の説の用ひられざることを云ふ、乃ち禍の重きときは龍逢比干の如く殺され、輕きも三國の化せざるが如く、到底其の説を以て化すべからざることを云へり、

【通釋】若し夏の桀王は忠臣なる關龍逢を殺し、殷の紂王は自分を諫めたる王子比干を殺したり、是れ龍逢比干の兩人共、皆己が人の臣下たる分際を以ちて、其の身を修めて善き行ひを爲し、他人卽ち桀紂が臣民たるものをいたはり撫で摩りを爲したる身を以て、其の上たる桀紂が爲さんと欲する旨に逆ひたるものなりき、さるが故に其の君主たる桀紂に於ても彼れ龍逢比干が自ら好んで其の身を修むることがらに因みて、反りて之れを排擠したり、是れ彼れ二人が忠諫の名を好みたる結果なり、又昔し唐堯は叢枝と云ふ國、胥敖と云ふ國を攻め、夏の禹王は有扈と云ふ國を攻めしが、此の三國何れも其の國土は無人の地となり、人民は不祀の鬼となり其の君主自身は刑戮となれり、彼れ堯禹の二君は兵を用ひて止まず、其の實利を求めて已むことなし、是れ何れも皆勝利なる名譽と土地の富實とを求むる者なり、さて此の事は

仁、則必無為惡之事矣と解したり、此の苟の字亦同じ、〔惡用而求有以異〕惡は焉と同義に用ふ、此の句兩說あり、一は用は卽ち上文にある其行獨の義にて、自用自專なることを謂ふ、求有以異とは故意に人と異なる所行を爲すことを求むるを謂ふ、又而の字を下文の而目而色等の而の字と同じく、汝と釋し、一體何れの點に於て顏回を用ひて故らに自國の賢者と相異れることを爲す必要あるぞと解せる說あり、今其の說を用ふ〔若唯無詔〕詔は告なり、汝ぢの意見を衞君に告げざれば可なるも、然らざるときは下の如くなるべしと、先づ一度語氣を留めて、更に下の警誡の詞を喚起せるなり、齊物論に是唯無作、作則萬竅怒呺とあると、文法略ぼ同じ、〔而且將熒之〕而は爾なり、「ナンヂ」と訓ず、熒は「成疏」に眩なりとあり、一に營に作る、古義相通ず、之とは王公を指して云ふ、以下四句の之の字皆同じ、「成疏」に又曰く衞侯雖荒淫暴虐、而甚俊辯聰明、加持人君之威、陵藉忠諫之士、故顏回心生惶怖、眼目眩惑者也と、此の說に依るときは、之の字は上の王公と共に專ら衞君を指して云ふものなれども、必ずしも拘はらずして可なり、〔而色將平之〕色は顏色なり、平は和平なり、縱ひ心に諫めむと思へども、推し切りて反對を表はさず、顏色柔順にして彼れに對して和平なることを謂ふ、〔口將營之〕營は經營の營にて、口に言を出さんとして、心の中に種々營み繕らうて云へること、「辯正」には斟酌して欲有所言之貌とあり、〔容將形之〕容は容態にて、卽ち態度なり、形は外形に表はすなり、「宣注」に形踏焉形其恭とあり、〔心且成之〕且つは將と同じ、成は成就なり、「宣注」に且釋己以就彼とあり、乃ち自己の意見を釋て、彼に贊成すること、今の謂はゆる盲從の類なり、莊子の文は同字連下の處には、往々最後に變字を用ふることあり、此の文及び上文の雜則多、多則擾、擾則憂、憂而不救とありて、四句目の則は而に變じたるが如き、卽ち其の例なり、〔名之曰益多〕もと其の過ちを救正せむとして反りて之を增益することを謂ふ、「本義」に曰く曰爲熒內惑也、色爲平氣折也、口爲營自救也、容爲形畢露己衷也、心且成堅其爲暴也、是徒爲增長其惡、名之曰益多と、

【順始無窮】順の下に於其の二字を加へて看るべし、卽ち謂はゆる此膝一屈不可復伸の意なり、凡そ事

ば、夙に之を用ひて政を爲すべかりしなり、悪(イヅ)くにか物數奇(モノズキ)にも他國の知らざる人を用ひて、態々(ワザ)に多く人の所爲に異なることを求むることを爲さむや、此に由りて觀れば、彼の衞君は本來賢を悅び不肖を悪む人ならざることを推して知るべし、故に他人はいざ知らざるも衞君に限りては到底駄目なる人なるぞ、汝ぢ衞國に赴き君に向うて諫言を告げざるならば、其れで可なれども、若し告ぐるとすれば、下條のことを心得置くべきなり、卽ち彼れ王公と申すものは、必らず君主の威嚴を挾みて人に臨み、將に他人の油斷隙間に乘じ付け込みて、其の捷利を鬪はすことを爲すものなり、卽ち何にかに付けて人の過失缺點を見出して、遣り込めむと待ち構ふるならむ、それが故に汝ぢは彼れ王公の威嚴に脅迫せられて、汝ぢが目は將に王公に對し眩惑せられて先づ內に惑はむとす、汝が顏色は將に之に對し懾れ畏(カシコ)み、爲めに嚴毅なる模樣も何時となく和らぎ平らかになりて次ぎに勇氣が挫けむとす、口は將に之に對し議論を吐かむとしながら遠慮斟酌をなしつゝ、言うて自ら過ちなきを期せむとす、容態は將に之に對し敬虔の形ちを露はし、爲めに悉く我が腹中を見透(ミス)かされんとす、心は將に之に對して從來の持論主張を棄てゝ、彼れの說を贊成して、彼れの自信を强めむとす、右の如くもと是の方より先方を矯正せむと志させしものが、反りて彼れ先方に屈服せられて、其の味方と爲らむには、是れぞ正しく火災を患へながら、火を以て火を救ひ、益々炎々の勢を助け、水患を苦みながら、水を以て水を救うて、益々滔々の力を强めむとすると同斷なり、之を名づけて益多とは申すなり、乃ち始め其の虐を救はむとして、今益々其の虐を多くする次第なるぞ、凡そ物事の一個が出逢ふときは、始めが大切にて、彼を讓步さするか、我が讓步するかに由りて、以後は順を逐うて定まるものなるに、今其の出て始めに於て、第一着を誤れるときは、以後は何に事を問はず、此に順ひて窮り果ても無きことなり、汝ぢ殆むと多分に未だ信用せざる身にてありながら、厚く諫言することを以て、必らず彼の亂暴人の衞君の前に殺されて死するならむ、さてもさても憐むべきことよ、

【解義】〔且苟爲悅賢〕苟は誠なり「論語」に「苟志於仁矣無悪也」とあるを、朱注に苟誠也、其志誠在於

縄を引て準とするが如き、墨を點して丈尺を度るが如く、何事も盡く仁義を標準として、取り糺し束縛を加ふることを謂ふ、〔術暴人之前〕術は「禮記」の祭義に結諸心、形諸色、而術省之とあるを「鄭注」に術は當作述と云へる如く、述の字と通ず、論述することなり、〔是以人惡有其美也〕惡は下の美と兩字相對す、有は育の字の誤にして、育は鬻の字と相通す鬻は賣なりと訓す、此の處は他人の惡を以て己の美を賣ること、卽ち人の過惡あるに乘じ、之を傷つけ以て己が美德あることを世に弘め吹聽することを謂ふなりと、是れ兪樾が「平議」の說なるが、我が東條一堂も同說を懷けり、但一堂は有の字を讀むで字の如くす、今之を用ふ、舊說多く惡を烏路反に讀みて、惡有其美也となせり、意義硬澁にして通じ難し、且つ下句の命之曰菑人云々に至りて、其の說窮するを覺ゆ未だ從ふ可からず、〔命之曰菑人〕菑は災なり、菑人は人に菑することと、或は解して菑ある人と爲すものあれども非なり、果して然るときは下文の人將反菑之の句に至りて、解を費さゞる可からず、

且苟爲悅賢而惡不肖、惡用而求有以異、若唯無詔、王公必將乘人而鬬其捷、而目將熒之、而色將平之、口將營之、容將形之、心且成之、是以火救火、以水救水、名之曰益多、順始無窮、若殆以不信厚言、必死於暴人之前矣、

【大意】以上は汎く衆人に就いて顏子の行く可からざることを論じ、以下は又衞君に就いて顏子の行く可からざることを論ず、宣穎曰く形容輕言之人究且不能自持、曲盡其態と、

【通釋】尙ほ其の上に申す可きことあり、彼の衞の君が誠に賢者を悅びて、不肖者を惡める者ならむには、彼れ自國の衞に於ても相當なる賢者あるとなれ

之言、術暴人之前者、是以人惡有其美也、命之曰菑人、菑人者、人必反菑之、若殆爲人菑夫、

【大意】　己が名に矜り、人と善を爭ふ心あるものは、固より不可なれども、苟もまた人に信ぜらるゝこと能はずして、人に向ひて諫言忠告を爲すときは、縱ひ矜り爭ふの心なしと雖とも、彼は亦將に汝ぢを己が德を誇り耀さむが爲めに、人の美を毀つくなりと謂うて、必らず害を加へむことを云ふ、

【通釋】　尚ほ其の上に汝ぢに申し聞かすべきことあり、汝ぢの性質は善くて賢きも、また世態人情を十分に解せずして、道德は厚く信誼は堅實なれども、また世間の人人の意氣に通じ悟らず、名聞即ち名譽上に於ては澹泊にして人と競爭する野心などは持たず、まだ世間の人心に達し届いて居らざるに、自から其の力量の程を揣らずして押つけらしく、嚴格なる仁義道德の規則やかましき言語を以て、亂暴なる衞君の前に陳述して彼の非行を矯正せむと欲することは、是れぞ正しく他人の惡事非行を訐き出して、己が賢人君子と云へる美德を有せむとするものに當ることなるぞ、即ち汝の心にはまさか左樣に思うて爲すにはあらざれども、結果は斯くの如くならざるを得ざるなり、之れを名づけて他人に災を爲る者と申すなり、他人に災を爲す者は、他人亦之を惡みて、必らず反りて之に災を仕向くることを爲すなり、即ち只今汝が衞國に行きて、其の禍亂を救はむとするは、正しく其の處に適中すれば、汝ちは仲々人を救ふなどは思ひも寄らず、殆むど人に災されむとする者なり、豈實に危險なることならずや、

【解義】　〔德厚信矼〕即ち德の蕩せさるものなり、矼は堅實なる貌、信矼とは質直にして堅く引き締りの有ること、〔未達人氣〕人氣は人の氣象性質なり、陸方壺曰く、達人氣即察言觀色之意と、〔名聞不爭〕不爭名聞の倒裝文なり、名聞とは名望令聞にて、善き評判のことなり、即ち謙遜にして虛榮を喜はざるが故に、妄に人と名譽の優劣を爭はざるを云ふ、又名望ありて能く人の爭ひを止むる有るを謂ふとの說あり、予は前說を取る、〔仁義繩墨之說〕繩墨は工匠の

一切世に行はる可からざることを云ふ、乃ち齊物論に謂はゆる成心あるときは、百事の害たることを論じたると同意なり、

【通釋】 且つ汝ぢは亦彼の徳が流れ蕩けて折角の天然美を毀壞することあり、智が或る物の爲めに外に誘ひ出されて、折角の純良なる處を害することあるを知れるか、多分は之を知らざることならむ、卽ち徳は名と云ふものの爲めに流れ蕩けて毀壞し、智は爭と云ふものの爲めに外に誘き出されて害はるゝなり、其の譯は徳と申す者は、誠に結構なるものに相違なきも、既に徳と申す實が有るときは、必らず之に伴へる名譽と申すものが有り、隨つて其の名譽を大切に維持せむが爲めに、己を猜む者は之れを排斥するやうに爲りて、相互に軋りて、陵壓を加ふるよりして、折角の徳は遂に毀壞するに至るなり、智と申すものは己れ賢きときは、人に讓り下ること能はざるよりして、互に相爭ふものなれば、卽ち爭ひの道具と申すものなり、卽ち人苟も智なきときは爭ひは起らざるなり、既に名と云ふものゝ爲めに人と軋り、又爭ひを免れずとすれば、此の二者卽ち徳と智とは器物に譬ふるに、決して吉祥なるものにあらずして、凶惡なる道具なり、されば徳と智とを恃むときは、自分が行ふ所の事は皆反對者たる敵に拒ぎ阻まるゝ事なれば之を十分に盡くすべきにあらず、

【解義】〔徳之所蕩〕蕩は「トロカス」又は「トロクル」と訓ず、流蕩などと連熟して流れ鎔る意味を有す、老子に上徳不徳、是以有徳、下徳不失徳、是以無徳、上徳無爲而無以爲、下徳爲之而有以爲とあり、此の徳之所蕩とあるは乃ち老子の謂はゆる下徳を指して謂へるなり、〔相軋也〕軋は音「アツ」、車を輾りて物を壓し碎くことよりして、互に陵ぎ犯すことを軋と云へり、〔非所以盡行也〕名を以て相軋り、智を以て相爭ふものは、縱し一時は僥倖にして事を爲し得ることあるとも、終には失敗に歸し成功を見ざることを謂ふ、盡行とは世に行ふことを十から十まで遺憾なく爲し遂ぐることなり、

且徳厚信矼、未達人氣、名聞不爭、未達人心、而彊以仁義繩墨

て彼の國を救ふなどとは思ひの寄らざることなり、人を救ふどころか汝ぢ一身は多分刑罰に處せらるが責めての事ならむ、さて改まりて話すことなるが、汝ぢ善く聽けよ、全體道と云ふものは心の純粹なるを尙びて、喧雜なることを忌み嫌ふなり、喧雜なるときは種々なる事が繁多となり、繁多なるときは、心が擾亂され、擾亂さるゝ時は憂患隨て起り、憂患起るときは、己れの一身の處置にすら困難なるが故に、他人を救ふことなどは、實に思ひも寄らざる義なり、故に古にしへの至德ある人は、先づ第一に道德を己れの身に存立し、而して後に之れを推し廣めて、他人の身に存立せしむ、即ち先づ己が身に於て存立す可き道德を具備して後ちに、始めて他人を救濟するものなり、然るに今や汝ぢは汝ぢ自己に存立する道德がまだ定まらざるものなるに、何の暇ありて、彼の暴虐なる衞君が其の暴虐を行ふ所に立ち入り干渉して、彼れ此れ意見箇間敷言說を弄ばむとするか、寔に心得違ひの次第なるぞ、

【解義】〔仲尼曰譆〕譆は痛なり、痛而呼之言也と「韻會」に見えたり、成疏には怪笑之聲なりとあり餘り不條理なる故に、興醒て呵々大笑する意に解したるなり、〔若殆往而刑耳〕若は汝なり、而は則の字と同義に用ふ、〔多則擾〕擾は亂なり、但し成疏は事多則中心擾亂と解し、己が心の亂るゝを謂ふと爲し、宣注は擾人と解し、他人に迷惑を掛くる義に說けり、兩者倶に通ず、〔憂而不救〕而は則と同じ、不救は人を救ふ能はざるなり、「辯正」は其擾不能去、則其憂終不能解と云へり、此れ自から其の憂を救解する能はずと解せり、〔先存諸己云云〕諸は於なり、存は立なり、存諸己とは道理が己が心に立つこと、存諸人とは事業が世間に立つことなり、〔何暇至於暴人〕至は逮及の意なり、暴人は衞君を指す、

且若亦知夫德之所蕩、而知之所爲出乎哉、德蕩乎名、知出乎爭、名也者相軋也、知也者爭之器也、二者凶器、非所以盡行也、

【大意】己が名を誇り、人と善を爭ふ心あるときは、

穡せず、過焚して焦せるが如しと爲せり、而して一堂は「荀子」の富國篇に葷菜百蔬以澤量とあるを、「楊注」に以澤猶谷量牛馬也と解せるを援き、又「呂覽」の期賢篇に無罪之民其死者量於澤と、あるを擧げ、量澤の字は連熟して分裂すべからずと爲せり、今其の説を用ふ、〔民其無如矣〕如は奈何の省文なり、論語に人而不仁、如禮何とあるも、「邢疏」に如奈也とあり、尙書の高宗肜日に乃曰其如台とあり、西伯戡黎に今王其如台とあり、蔡傳に如台奈我何也と釋したり、〔治國去之亂國就之〕去之とは事とする所なければなり、就之は相救はむと欲すればなり、「論語」の泰伯篇に孔子の語を載せて危邦不入、亂邦不居とあり、今其の語を反して云へるは、是れ莊子が一見識ある處にして、「論語」の言と倶に各々眞理ありと謂ふ可し、〔思其則〕則は法則なり、乃ち之を救ふの方法なり、〔庶幾其國有瘳乎〕庶幾は「成疏」に庶冀也、幾近也とあれども、「孟子」の公孫丑篇に王庶幾改之とある庶幾と同じく、冀幸の辭と解し、「コヒネガハクハ」と讀むべし、「韓非」の説難に説之者能無嬰人主之逆鱗則幾矣とあるを、索隱に謂庶幾於善諫説と釋したり、此の庶幾は「爾雅」に幾近也とあるを据として解せしものにして、自から本文及び孟子の庶幾とは異れり混ずべからず、瘳は愈なり、病の快復すること、上句の醫門多病の譬を承けて云へるが故に、國亂の治まることを有瘳と云はれたるなり、

仲尼曰嘻若往而殆刑耳、夫道不欲雜、雜則多、多則擾、擾則憂、憂而不救、古之至人、先存諸己、而後存諸人、所存於己者未定、何暇至於暴人之所行、

【大意】人を正さんと欲すれば、先づ己れを以て根本と爲すべきことを云ふ、以下許多の議論倶に此の一節に根柢す、

【通釋】孔子は顏回の出立を差し止められて曰く、あゝ驚き入りたることよ、汝ち衞國に往かば、仲々以

て量器と見做して、幾澤の死骸と數へ立つべく、宛かも澤中の草菅が相積み累なりたるが如く、寔に夥しき數なり、國民は之れを嘆けども、其れ之れを如何ともすることとなし、卽ち手の着け樣も無き始末なり、私回は嘗て斯く〳〵の御教訓を我が夫子卽ち孔子より承けたまはれり、其の御言葉に曰ふやう、旣に治まりたる國は打ち捨て置くとも無難にして、別に用事なきこととなれば、徒らに此に居て知行祿を貪ることを爲さず、潔く之れ去る可し、方さに亂れつゝある國は一番奮うて深く肩を入れ踏み込んで世話を致す可し例へば善き醫者の門には治療を乞へる患者の自然に集り來りて多きが如しと、今や回願くは此の私が曾て平生に於て夫子より聞き承はりたることに據りて其の亂を治むる法則を思慮するときは、多分彼れ衞國の暴亂てふ病氣は、治療して愈すことを得べしと信ずるなりと、

【解義】〔顏回見仲尼〕顏淵は孔子の弟子、顏は姓名は回と云ふ、淵は其の字なり、仲尼は孔子の字なり、〔曰奚之〕奚は何なり、〔將之衞〕衞は國の名、周の武王の弟康叔が封ぜられし所なり、今の河南省衞輝府は卽ち其の國の墟なり、〔曰奚爲焉〕奚爲は何爲なり、焉は疑問なり、乎と同意味に用ふ、〔其行獨〕「郭注」に不與民同欲也とあり、乃ち自專自用にして、人言を聽納せざるなり、〔而不見其過〕己れ自ら其の行を是なりとし過誤あることを氣附かざることなり、「成疏」に强足以距諫、辨足以飾故百姓惶懼而呑聲、有過而無敢諫者也、と云へり、〔輕用民死〕落ち着かずして輕卒に國民を用ひて之れを死地に陷ることを謂ふ、乃ち好みて民命を殘ふなり、〔死者至若蕉〕此の句諸說紛々たり、東條一堂の說に依れば、蕉を草菅と解し、死者以國の四字を一句とし、擧國の人民皆之に死するを謂ひ、量乎澤若蕉とは、死の多數なることは、急卒に數ふ可からず、澤を以て量の率と爲し死骸を量るに、一澤二澤と數へて而かも內容は宛も澤中に積り累なれる草菅の如く、極めて多數なることを謂ふと爲せり、林西仲は死者以國量の五字を一句と爲し、以國、猶牛馬谷量之義、平澤若蕉言死者如平澤之蕉蘊崇相積也、俗本平作乎、乃字之誤なりと云へり、此れ「義海」及「通義」に据れる說なるが、但二書共に蕉を焦の誤となし、平原野澤荒蕪し

何れに往くも可ならざるは無かるべし、本篇中にある前の二段は卽ち其の事を示したるものなり、己を處する道は、己れてふものを心中に置かざるにあり、果して然るときは能く無用の地に、其の身を藏むることを得べし、後の四段は卽ち其の事を示したるなり、然れども凡そ人を處して患に攖る者は、畢竟自から己れを處することの未だ至らずして、人と己との間に、彼我の見解、また融消せずして、互に是非長短を競ふに因れり、此れ本篇中に於て前きに人を處するを說き、後ちに己れを處するを說きたる所以なり、本義に曰く養生者不能離世而獨有其生、故莊子作人間世と、

顏回見仲尼請行、曰、奚之、曰、將之衞、曰、奚爲焉、曰、回聞衞君其年壯、其行獨、輕用其國、而不見其過、輕用民死、死者以國量、乎澤若蕉、民其無如矣、回嘗聞之夫子曰、治國去之、亂國就之、醫門多疾、願以所聞思其則、庶幾其國有瘳乎、

【大意】顏淵の衞國を救はむと欲する意思を叙述し一篇の議論を喚起す、

【通釋】孔子の弟子に顏回なる者あり、或る時其の師たる孔子に謁見して餘所行きの暇乞を爲せり、孔子之に問うて曰く、一體汝は何處へ行かむとするかと、顏回對へて曰く私は將に衞の國へ行かんとすと、孔子更に問うて曰く何んすれぞ衞の國に行かむとするか、顏回對へて曰く、回私は承け玉はりしが、彼れ衞の君侯の事なり、彼れは其の年齡は年壯にして其の所行は獨我的に流れて、氣儘放題なり、輕々しく無暗に其の國政を取り扱ひて、自身に其の過ち失錯あることを知らず、無暗に國民を用ひ使ひ廻はして死に至らしめ、而かも其の死者の多きことは一國を擧りて死せる有樣なり、死亡の多きことは到底幾人などと精細に計る可からず、先づ大ざつぱに澤を以

生者有以存之、火之在彼薪猶此薪也、而熖々不同、神之託後身猶今身也、而息各異、熖不同、所以有然有滅、息各異所以有死有生、然而天下之火未嘗盡、神未嘗滅者、有人以至之耳、至若鑑日擊石鑽木戞竹、皆可以得火、火性遍天地間、非人無以致之、神之運化亦然、去是薪火何麗、亡是形神何託、由是知傳火在乎得乎得形、所以成至人之妙用相天地之全功、南華(莊子)擧以結養生主一篇之義、深有旨哉

名言

爲善無近名、爲惡無近刑、緣督以爲經、

臣之所好者道也、進乎技矣、

官知止、而神欲行、

良庖歲更刀、割也、族庖月更刀、折也、

以無厚入有間、恢恢乎其於游刃、必有餘地矣、

澤雉十步一啄、百步一飲、不蘄畜乎樊中、神雖王不善也、

適來、夫子時也、適去、夫子順也、安時而處順、哀樂不能入也、古者謂是帝之縣解、

指窮於爲薪、火傳也、不知其盡也、

人間世第四

人間とは人類社會を謂ふ、世は時代なり、人と人と相聚りて社會を成す之れを人間と名づく、人と人と相積みて時代を成す、之を世と名づく、蓋し人若し對手なく一人單獨にして、此の世に居るときは別に爭ひもなく無事ならむも、羣居雜居するときは、種々なる競爭隨うて起り、機變の巧を弄ぶこと益々甚しきを加ふるを免れざるも、人は羣居して相輔くるにあらざれば、生活を遂ぐること能はざる也、故に交際は人間必須の道なれども、羣居雜處の弊として、前述の如くにして且つ其の初めは交々應接し、中ごろは交々搆爭し、終りは交も殘害す紛々籍々として少しく油斷蹉跌するときは、禍患立どころに至る、されば其の此の世故を閱する方法は果して如何にせば可なるか、此れ莊生が此の篇を述べて處世の訓を垂れし所以なり、要するに人間世の道は、二端あるに過ぎず、卽ち人を處すると己を處すると是れなり、人を處する道は、人てふものを眼底に置かざるにあり、果して然るときは

なること、帝之懸解とは上帝が人を束縛せる繩が解けて效力なしとなり、即ち上帝が能く人を束縛し得るものは、人に哀樂等の情あればこそ、此の情を物事に結び著けて人を制するを以て、人も致し方なく上帝の命令に服從するなれ、今や人に於て哀樂の感が一向心に動かざるときは、此れ上帝と雖も、亦終に奈何ともすべからず、即ち手の着け樣なきことにて要するに大不羈大自由を得たる人と云ふべきとなり、

〔指窮於爲薪火傳也〕指は「ユビザス」とす、手を以て指すこと、傳は傳へ延くこと、郭象の註意によれば、爲は前なりと注し、「成疏」に言人然火用手前之能盡、然火之理、前薪雖盡後薪以續、前後相繼故火不滅也と解せり、乃ち薪に火を著けて燃すとき、手指を用ひて薪を火の方へ前め、焚けば薪の早く火に燒かれて滅すれども、此れ全く薪の焚け盡きたるまでにて火の滅したるにはあらず、故に前きの薪は盡くるとも後の薪は又燃えて、火は薪から薪へ順々に傳へ延きて滅び盡きざるなり、俞樾は爲を前なりと訓ずるは、未知何義とて「郭注」を非とし、更に「廣雅釋詁」に取爲也とあれば、爲もまた猶取也となし、指窮於爲薪とは指は薪を取るに窮すの意義にして、即ち手指を以て薪を取りて、之を燃すときは給せざることあり、若し火の自ら傳ふるに任かすときは、忽ち燃えて其の薪の盡きしを知らざるなりと解せり、朱得之は指の字は疑ふらくは脂の字にして脂は不然木なりと云へり、此の說に依れば不燃質の木は薪と爲して火を點ずるには困難なるが、されども火は矢張り燃料材の如何に拘らず、天地間に傳はりて其の盡くる期限を知らずとなり、王先謙は曰く以指折木爲薪、薪有窮時也と、又曰く形雖往而神常存、養生之究竟、薪有窮火無盡と、此れ指窮於爲薪とは指にて木を折て薪と爲すことに就いては時によりて薪は窮り盡くること有れども、火は薪の有無に拘らずして有り、即ち天地間に火氣は存在して亡びざるが如く、人の肉體に宿れる生命は其の死と共に離るゝことも人の主人公たる精神は無窮無限に存在して、宛かも火の薪から薪へ傳はりて亡びざるが如しと解したり、褚伯秀は曰く一家之薪有盡、而天下之火無盡、善爲薪者有以有死有生、然而天下之火無盡、善爲薪者有以傳之、一人之身有盡、而身中之神無盡、善養

ものにあらず、彼の火と薪との關係を見よ、今火は此處にて最早窮り盡きたりとして薪の上に就き指して觀るとも、成るほど火は其の燃え著ける薪の窮まれるに隨うて燼滅すとも、火其の物の性は矢張り傳りて亡びざるなり、故に復た他物に著き燃えて其の盡くることを知らず、卽ち永劫無限に物から物へと傳はりて盡きざるなり、人も矢張其の通りにて成程甲の人の身は一定の命數が窮まれば亡くなるも、人たる精神は乙の人より丙丁戊己と云へるが如き人種に順々に傳りて、永劫無限に盡くることなし、苟くも人種の存せる限りは、其の心性は順々に傳へて亡滅せざるなり、されば普通に人の死すると云ふものは、全く心性を藏むる容器が敗壞したるに過ぎず、心性其の物は直ちに新器に乘り移りて、依然存在するなり、是の故に吾が養生主の說を唱ふるは、彼の死生に懸念して、徒に生を貪り死を畏るゝが如き社會とは、自ら其の選を異にすれば世の學者努め之が誤解を爲すこと勿れ、

【解義】〔適來夫子時也〕適は「タマ〳〵」と訓ず、恰度そこにと言へる意なり、來は生るゝこと、夫子は老聃を指す時は生來の時なるを謂ふ、乃ち恰度人となりて生れ合ひて來りたるが、老聃に生れたる時が是れなりとの意にて、「郭注」に時自生也とあるは當れり、〔適去夫子順也〕去は死すること、順は道理に順ひて、本來の虛無に立ち返ること、乃ち恰度人となりしが死し去りたるは、老聃が兼ねての定れる理則に順ひて、有形界より無形界に返りたるが是れなりとの意なり、「郭注」には理當死也とあり、〔安時而處順〕時は卽ち上の夫子時也の時にして、生時を謂ひ、順は卽ち夫子順也の順にして道に順ふことを謂ふ、〔哀樂不能入也〕入は身外よりして身の內に侵し入ること、乃ち彼の生るべき時に安んじて生れたるなれば、別段に生れればとて十分なりと爲し樂むべきにもあらず、亦死すべき道に順うて死したるなれば、別段に死すればとて滿足を感じて哀むべきにもあらず、されば生死共に自然に任して、能く造物者卽ち自然と一致して、何れの處に在りても怡然として自得を爲すが故に、哀も其の間に入り込みて吾が心を動かすこと無きなり、〔古謂是帝之縣解〕是は之と同じ、帝は上帝なり、縣は懸と同じ、係なり、束縛の意味

倍を背と解し、情を眞情と解して、倍情とは自然の眞情に背く意と釋したるなり、〔古者謂之遁天之刑〕古者とあるは今時は道衰へ、世亂れて然らざることを見はせるなり、遁天之刑とは其の天然を遁れて俗情に囚はること、宛かも刑罰を被むるが如きを以て此の如く云へるなり、乃ち天罰を蒙りて本性を失ひたるものとの意なり、

適來夫子時也、適去夫子順也、安時而處順、哀樂不能入也、古者謂是帝之縣解、指窮於爲薪、火傳也、不知其盡也、

【大意】此の節は人の生まれて斯の世に來り、死して斯世を去るは倶に、天の所爲なれば、人として別に之が爲に樂み、又哀むに及ばざるのみならず、尚百歩を進めて云へば、人は元來死するものにあらざることを謂ひ、以て謂ゆる養生は徒に死を畏れて爲すにあらず、天然の道に順うて此の生を遂るが爲なることを明にしたり、

【通釋】人の生るゝは、人として考へば、適ま思ひ寄らず斯の世に來るものにて、彼の老聃夫子が生れたるは、恰度彼れ自分が人として生れて來るべき時節に出で遇ひたるまでのことなり、死して此の世を去ることも人としては亦思ひ寄らざることとなるが、彼の老聃夫子が死したるは恰度彼れ自分が死して去るべき道理に順ひたるまでのことなり、されば此の生れて來る時に安んじ落ち著きて生れ、亦去る道理に順うて死する場所に處るときは、乃ち別に生れたりとて喜ぶにも及ばず、死したりとて痛むにも及ばず、左れば畢竟哀みとか樂みとか云ふものは、皆已が身と無關係なる外方に在りて、身内卽ち吾が心に入り込みて感動を與ふることは能はざるなり、此の如きものは古は之を天帝が繫ぎて縛れる繩が解け離れたるもの、卽ち天帝と雖も束縛する能はざるに至りて大自由を得たる偉人と申すものにて、此の位地に至りてこそ始めて其の人と申すべき者なり、全體世の人々は死と云ひ死と云うて頻りに死することを畏れ悲むものなるが、人の死は左程心を苦痛して憂ふるに足らず一方より大觀するときは、人は決して死する

に據れば、姓は李氏にして、名を耳と曰ひ楚の苦縣の人なり、聃は其の謚とあり、然れども周公の定めたる謚法には聃と云ふ謚の付け方は無きなり、許愼得は聃耳漫也、故名耳字聃、今作字伯陽非也と云へり、又老も其の姓なりと言へる說あり、朱穆之曰く此章大意、列莊語中散見、惟老子死足破方士之狂而養生之主莫善於聃、故存於此と、〔秦失弔〕秦は姓にして失は名なり、一に佚に作る、未だ何所の人なるを知らず、〔三號而出〕號は號泣なり、但朋友の喪に對しては、禮に於て未だ哀を盡さずと爲す、「郭注」に人弔亦弔、人號亦號とあり、此れ註者後文にある秦失が議論に依るときは、死者を弔し、又號することも既に無用なるに似たれば、此の所に於て其の和光同塵の行なることを註明したるなり、「成疏」に曰く既死且弔、哭泣三號而俯迹同凡事終而出也と、〔非夫子之友耶〕「郭注」には怪其不倚戶而觀化、乃至三號也といへり、此れ本書の太宗師篇に子來有病將死、其妻子環而泣之、子犂往問之曰叱避無怛化、倚其戶與之語とあるに據りて、秦失の弟子は其の師が朋友の死を弔して三號して出づるは、俗情に囚はれて達觀にあらざるを疑ひて問ひたるなり、後世の諸說と異なれども、一說として錄す、〔始吾以爲云云〕其の人とは至人を謂ふ、卽ち至極の賢聖人なり、而今非也とは今は主人に非ずと合點したりとなり、「成疏」には秦失初始入弔、謂哭者是方外門人、及見哀痛過知非老君弟子也とあり、此れは曲解なり、用ひるべからず、〔彼其所以會之〕彼は老聃を指す、之は老者少者を指す、會は聚なり、陸樹芝曰く其の心を要結して其の情を會聚するなりと、卽ち衆人の心を引き付くることなり、〔必有不蘄言而言〕蘄は求なり、言は稱譽なり、卽ち彼れ老聃が平生の交態餘り巧み過ぎて、善く衆人を感染せること深き結果、別段に老聃より譽れを求めざるも、衆人に於て覺えずして之を譽むるなり、下句の不蘄哭而哭の語、亦例を以て推解すべし、但し此の句は平生に關して言ひ、下句は死時に就いて言ふ、〔是遁天倍人〕遁は遁逃なり、倍は加なり、天然の性を遁逃して、流俗の情を倍加すとて、天理に畔きて人欲に殉ふことを謂ふ、通義に曰く、天之所受本來無情、物今以有情相感、則是忘其始之所受、而遁逃其無爲之天性、倍棄其無情之眞と、此れ

足哀、是何等見地と、

【通釋】　養生を講じ說く、主意は養生せざれば死することを畏れて說くにあらず、元來人の死生は天命に在りて、殆んど人の養生とは無關係とも申すべきなり、昔し老聃と云へる大賢人が死せしとき、其の親友なる秦失といへる人、其の家に至りて之を弔したり、儀式的に三度程號泣とて聲を放ちて泣く眞似して外に出で歸りたり、是に於て秦失の弟子は、全體朋友が死したるときは相當の弔禮あるに拘らず、餘り簡單に過ぐるを疑ひ、質問して曰く彼れ老聃と云ふ御方は我が夫子の御朋友にましまさずやと、秦失曰く然り如何にも我が朋友なり、弟子曰く然らば朋友を弔することと此の如く簡單にして可なるかと、秦失曰く然り、此の如くにして可なり、此の如き簡單なる弔禮も予に於ては猶ほ過度なりと思へるなり、全體彼れ老聃と云ふ者は今まで吾は買ひ被りて居たり、始めは吾に於て彼は流石に其に咄せる人ならむと欲ひしに、只今になりて見れば吾が全く見損うて居れり、如何となれば嚮に吾が彼の死を聞き其の家に入りて弔せしとき、其の模樣を伺うて來客門人の中にて、彼より年老けたる人は彼の死せしを哀み哭すること、宛かも自分の慈母に死別れて哭するが如くなりき、さて斯く多くの老若衆人の悲哀の同情を己が一身に寄せ聚めて結び著けし所以は必ず彼の元より眞の達人にはあらずして、一時的啗はせ者の哀しさには、人の死生は固より先天的に定まれる道理なるを悟ること能はずして、頻に生死の事を氣にかけ居りしを以て、乃ち己が死せしときは斯くの如く弔を言ひ哭れと誂的に求め言はざれども、人は之が意を推諒して斯くの如く弔ひを言ひ、亦斯の如く哭せるものならむと思はるるなり、是れ彼の老聃は實に天然の定めたる命令を遁れ避けて奉ぜずして、徒に世俗の淺墓なる人情を倍加して、元來人の受けたる天性を忘れたる者なり、古しへは斯樣なる不埒もののことを、天の命令を遁るゝ刑罰に罹りたるものと申して、たとひ人間の刑なる刀鋸捶楚の困苦を受けざるとも、心中には非常なる煩悶の苦の感を與ふる事と爲せり、彼れ老聃は即ち應に是の刑を受くべきものなり、

【解義】　老聃［老聃］は老子なり、「史記」の老子列傳

となれるも、矢張り天の所爲なることを推して知るとなり、「成疏」に欲明窮通否泰愚智全虧、定乎冥兆、非由巧拙、達斯理趣者方可全生と云へり、乃ち人生運命の幸不幸、性質の愚智、身體の具不具は先天的に定まれるものにして、其の人の思慮行動等の巧拙に關係して然るにあらず、善く斯の道理を會得するものにして、始めて生を養うて全くすべしと解したるなり、〔澤雉十歩〕澤雉は澤中の雉なり、〔不蘄畜乎樊中〕蘄は求なり、樊は籠なり、「カゴ」と訓ず、畜は養ふなり、「成疏」に澤中之雉任於野性、飮啄自在放曠逍遙、豈欲入樊籠而求服養、譬養生之人蕭然嘉遁、唯適情於林籟、豈企羨榮華と云へり、〔神雖王不善也〕神は精神なり、王は旺と同じ、興なり、盛なり、常に飮食に不自由なきが故に、己が精神は舒び張り元氣盛にあれども、籠中にては山林郊野の如く、意の儘にならざること、即ち他方の束縛を受けて不愉快なるなり、

老聃死、秦失弔之、三號而出、弟子曰、非夫子之友邪、曰、然、然則弔焉若此可乎、曰、然、始也吾以爲其人也、而今非也、向吾入而弔焉、有老者哭之如哭其子、少者哭之如哭其母、彼其所以會之、必有不蘄言而言不蘄哭而哭者、是遁天倍情、忘其所受、古者謂之遁天之刑、

【大意】本章は人の生死はもと天數の定まれるありて、吾人が生を樂めばとて生れ來るにもあらざれば、亦吾人が死を哀めばとて死は去るにもあらず、畢竟死は天の所爲にして、吾人が關係する所のものにあらざれば、其の生其の死は天命に任かして可なることを說きて、養生の道は死生の如何に頓着せず、只專ら自然に順ふことにあるを明かにしたり、而して此の節は先づ人の死に就いて悲哭するの非なることを云ふ、宣穎に曰く三節輕々點撥、說養生乃反說死不

に、決して左にあらず、譬へば澤中に居る雉は十歩の中に「ヤツトコサ」と一たび啄みて食し、五歩の中に纔か一たび水を飲む樣なる至極困苦なる生活なれども、雉自身は人の樊籠中に入られて畜はるゝことを願ひ求めず、何となれば成るほど此の如くなるときは飮食には事闕かずして精神は旺盛ならむも、心には善しと思はず、卽ち身の進退の自由を失ひて不愉快なればなり、今や吾が現在の境遇も亦其の通りにて、此の天より與へられて片足と爲りし身を强ひて種々の道理を附會し、之を掩ひ飾りて一時の富貴利達を求めて得たればとて、其の窮屈にして不自由なることは仲々なり、矢張り天の所作に順ひて刑人は刑人らしく爲して居る方が自由氣樂なるものなり、

【解義】〔公文軒見右師〕公文は姓にして軒は名なり、右師は宋の官職の名なり、其の人名詳かならず、〔惡乎介也〕惡は於何なり、介は獨なり、此れ罪ありて刖刑とて足を斷たるゝ刑罰に處せられ、一足を斷ち斬られて一足の存するを謂ふ、〔天與人與〕與は歟と同じ、疑問の辭、天命たるか人事たるかと疑ひて問ひたるなり、人の性質は天然に稟く、然るに今一足を闕けるは人事に就いて不都合なりしが故に、虧殘せられたるならむと思ひて問ひたるなり、〔曰天也非人也〕一語先づ問者の意外に出でたる奇答なり、而して其の故は下句に自ら述ぶ、〔天之生是使獨也〕是とは右師自ら其の足を指して言ふ、獨は「釋文」に司馬云一足曰獨とあり、「成疏」に夫智之明闇形之虧全並稟自天然、非關人事、假使犯於王憲、致此形殘、亦是天生頑愚、謀身不足、直知由人、以虧其形、不知由天以暗其智、是知有與獨無非命也と、此れ卽ち知識の明闇と形の虧全と竝に元より稟けて人事に關係せるに非ず、されば誤りて國法を犯し刑罰に逢ひて、此の片足的不具の身となるも、元は己が天性の頑愚にして智慮の至らざる結果に外ならず、矢張り天の然らしむる所なり、故に彼の與ありて兩足具はる者も天なると共に、獨にして一足のみなるも亦天なりとの意なり、〔人之貌有與也〕與は共なり、此れ凡そ人の貌に皆兩足ありて共に行くことは此れ造物者が人に與ふるによりて然るとの意なり、〔以是知其天也云云〕既に凡そ人に兩足を與ふるは天に出づるを知るときは、吾が足の一脚を失うて此の不具者

處物無不適宜、應已而復歸於無、是謂善刀而藏、安有月更之弊哉、眞人慮後世學養生者、溺於沈寂無爲、無以酬酢世故、廢人事而曰道可立（西晉竹林七賢一派の類）、其爲道也鮮矣、故寓道於技（解牛）以立言、而牛之解不解無庸辯と以上の二說を善く玩味して之を索むれば、自ら思ひ半ばに過ぐる者あらむ、

公文軒見右師而驚曰、是何人也、惡乎介也、天與、其人與、曰天也、非人也、天之生是使獨也、人之貌有與也、以是知其天也非人也、澤雉十步一啄、百步一飮、不蘄畜乎樊中、神雖王、不善也、

【大意】人は天命に安んずべくして妄に非分の野心を懷くべからざることを言ふ、乃ち上文に吾生也有涯、吾知也無涯、以有涯隨無涯殆已とある義を引證して述べたるなり、

【通釋】公文軒と云へる人、宋の右師の官たる某に見えしに、其の身體の異常なるを見て驚きて曰く、一體まあ是れ如何なるか何れの處に於て如何なる法律を犯して斯の如く足を斷たれて片足の不具者となりしか、さて全體此の如きは天の所爲なるか、抑も人の所爲なるか、眞逆かに天の所爲にはあらざるべし、必らず何か罪を犯して斯く嚴罰に處せられしならむと右師は之に答へて曰く全く天の所爲なるぞ、人の所爲にはあらざるぞ、全體天が是の自分の足と云ふ者を生みて斯くの如く單獨的の足たらしめしなり、其の故如何となれば、視よや世の衆人の貌は必ず與也とて一方に匹び相手がある也、即ち足は必ず兩足揃うて有るものなり、然るに此の如く一定せるに拘らず、吾に限りて片足となることは、仲々に人の力にて出來得るものにあらず、是れ亦天が所作に非れば不可能なり、吾は此の道理を推して吾が片足となりしは天の所爲にして人の所爲に非ることを確め知れり、さらば此の足を斷たれたる身を以て世人の滿足なる身體を見るときは、羨しきことなるかと云はむ

【大意】　文惠君の言を借りて、解牛の方と養生の道と其の理の一致なるを斷定す、得養生の一句畫龍の點睛の如し、纔かに此の一點を得て、八十八鱗皆活動するの觀あり、

【通釋】　是に於て文惠君は益々深く感じ入り、歎息して曰く、誠に善いかな、至極尤なる事なるかな、吾は今や庖丁が解牛の言を聞きて、人の養生の道を悟り得たり、實に自然の理に循うて、牛を解くときは、何等の障礙なくして、甘く目的を達し得るが如くに、人の生を養ふの道は緣督以爲經の主義によりて、進まば、必ず其の目的を達するを得べきなりと、

【解義】　〔得養生焉〕「郭注」に以刀可養、故知生亦可養とあり、

【備考】　此の一章、庖丁解牛の言を引きて養生の方を說きたることは、既に本文の文惠君が言にあるが如くなるが、明の朱得之が「通義」に論じて曰く、解牛之事、只承緣督一句明養生義、引證不用一字而意自貫通、文哉肩膝乃手足之幹、四句只形容動作機括、以起合舞中會句、解牛而擬之以樂、言和順而不費力也、以解牛之技擬養生、言應世當審幾順勢而不以強力制割也、言得養生焉、則保身全生養親盡年、皆在其中矣、官知止凝定於常時、神欲行敬謹於臨事也と、褚伯秀が義海には曰く、庖丁一段叙述養生要旨最爲親切、故寫其動作進止之度、以應夫行住坐臥之間未始須臾離也、蓋天下事、無大小有理存焉、解牛而得其理、則目無全牛、刃有游地、養生而得其理、則身有餘適、事無廢功、奏刀中音喩應物之當理、釋刀而對、喩忘生而得理也・有功乎應物、則所見無非牛、體道而冥物、則未嘗見全牛也、神遇不目視、則依乎自然、以虛爲用、而亦無所事乎知見矣、十九年而刃若新發於硎、言與物無忤者生無所傷、養神有道者久而不敝也、然每至於族、見其難爲、骨肉盤結曰族、以喩應酬世故事物繁劇之時當加戒謹以成厥功、定而後能慮、世人徒從事乎厚味侈服華居顯居顯位聲色悅樂、以爲養生、養愈至而生愈失、經所謂養形果不足以存生是已、庖丁所好者道、則所見無非道、故事物之間、恬無滯礙、雖逆順迭出萬變叢拌、卒有以善解之、不啻遊塵之過前、何也、蓋能養其生之主、則玄德內充、眞機外應、處已

血に塗れたる其刀を善く拭ひ去りて、之を大切に鞘の中に仕舞置くことを爲せり、

【解義】〔族庖月更刀折也〕族は雜なり、衆なり、折は「郭注」に中リテㇾ骨ニ而折ルト刀也とあれども、兪樾は上文に良庖歲更ㇾ刀割也とありて、刀を以て肉を割くことを云へば、此れ亦刀を以て骨を折る義と爲せり、今其の說を用ひる、〔今臣之刀十九年矣〕十は成數とて、凡そ物の一段落、卽ち一括を付くる數にして、九は陽數の極にして、古來用ひて大多數の義を意味す、謂はゆる九天九地九萬の如き、卽ち是れなり、十九とは大多數の年なる意なり、〔刀刃若新發於硎〕硎は砥石なり、「トイシ」と訓ず、「成疏」に年經ニ十九ニ、牛解クㇾ數千、遊ビㇾ空ニ涉リㇾ虛ニ、不ㇾ損セ鋒刃ヲ、故ニ其ノ刀銳利、猶若キ新タニ磨クガ者ニ也と、〔以無厚入有間〕上句の彼節者有ㇾ間、而刀刃者無シㇾ厚キとある語を、直ちに打ち疊みて云へるなり、「成疏」にノ彼牛骨節素有リㇾ間郤、而刀刃鋒銳薄クシテ而不ㇾ厚カラ、用テ無厚之刀ヲ入ルㇾ有間之牛ニとあり、〔恢々乎其於游刃云云〕恢々は大なる貌、遊は一處に停滯せずして隨處に活動する意なれば、游刃とは刀刃を自由に使ひこなすことなり、餘地は餘りある場所なり、〔每至於族〕「成疏」に據るに、筋骨の交も聚りて磐結せる處を族と名づく、〔怵然爲戒〕怵然は驚動の貌、驚きて心の動くこと、戒は警誡なり、〔行爲遲〕岡松甕谷は言フㇾ不ㇾ敢テ急ニ進メㇾ步也と解せり、此に依れば足を運ぶにも見合はすことにて、急に取り掛かること能はざる狀態を云ふ、〔動刀甚微〕極めて緩るやかに刀を用ゐること、卽ち大事を取ること、〔謋然已解〕謋は桀と同じ、謋然とは分解の貌、卽ち骨と肉とが合破離と離るる聲なり、解は肉が骨を離るゝこと、〔若土委地〕委は棄なり、林希逸曰く、言フ其ノ用ルㇾ刀甚ダ輕ク、而其ノ骨肉忽チ自ラ解散シ、如ク土之委スルガㇾ地ニ然リ、言フ其ノ多ク而易キ也と、〔提刀而立〕以下解牛の事を畢へ、從容得意の狀態を言ふ、〔爲之四顧〕高く四方を囘視すること、〔爲之躊躇滿志〕躊躇はもと、足を進めずして見合はすことなれども、此にては從容自得として立ち居る意味に用ひたるなり、〔善刀而藏之〕「郭注」に拭ウテㇾ刀ヲ而弢ムト之ヲ也と、「釋文」に善ハ猶ホㇾ拭也とあり、

文惠君曰ク、善イ哉吾聞キテ庖丁之言ヲ、得タリ養ヒ生ヲ焉、

之躊躇滿志、善刀而藏之、

【大意】 以下善く刀を用ひる者は刀の勞弊なくして成功あるを以て、善く生を養ふ者は心の勞弊なくして成功あるに喩ふ、以無厚入有間の一語乃ち主意の存する處、「炮莊」に曰く有間可入、投筆定絕域、而有餘、無間可入、臥龍定三分、而不足、亦善く評すと謂ふべし、

【通釋】 元來至虛の地に至れば何に事も障礙なく運び得るものなり、されば良き料理人になると、每歲に一たび位刀を取り更ふることにて、度々は取り更へず、此れは只筋骨の筋路の儘に割くが、左程に刄鋒を傷めざればなり、族庖とて平凡なる料理人になると、月の更はる每に刀を取り更ふることにて、卽ち一本の刀を一箇月しか保持せず、此れは矢鱈に使用して大骨に打ち當てゝ折ればなり、今小臣が持てる刀は旣に十九年の久しきになれり、解きて料理したる牛は數千匹の多きに達せり、而かも刀鋒は少しも毀損せず、宛かも新たに砥石にて磨き立ての如く、毫も曇り氣もなきことなり、此の次第は彼の牛の骨部と申すものは節と節との間に空虛がありて、此の方の持てる刀刄の鋒は銳くして厚きこと無し、至りて薄身なり、厚きことなき刀刄を以て間隙ある骨節に入ることなれば、恢々乎と廣々しくして刀刄を自由に使ひこなすに於ては必ず十分に餘れる場所がありて何等の障礙も被むることなし、さればこそ十九箇年の久しき間に一本の刀を保ちて、而かも刀刄は新たに砥石にて磨き立てるが如く、毫ち曇り氣もなきことなり、然しながら小臣とても牛體中にある族と申して、筋や骨がコンガラかりて聚れる處に至る每には、實に別に致し方も無きことにて、私は其の困難にして如何に著手すべきかと思ひ、怵然と懼れて心に警戒を加へ、目の視力も此の一點に注ぎ手の刀を運行することも、爲に徐々として成るべく刀を動かすことも極めて微にして宰割を爲せり、其の中に謋然とバタリと音をなして肉が骨と離れて已に解くること、宛かも土か高處から崩れて大地の上にドサリと落つるが如き有樣にて、何の困難もなく濟み畢はせり、されど小臣は刀を提げなから、其の場に立ち、之が爲に四方を顧み足を住めて見合せ滿足の念を爲し

〔依乎天理〕理は腠理なり、乃ち牛の身上に具はれる自然の腠理に依り、遵うて下句の如くに進行し、自由に截り斷ちて牛に傷くることを爲さずとなり、〔批大郤導大窾〕批は擊なり、郤は音「ゲキ」隙なり、「ヒマ」と訓ず、大郤は骨と肉との交り會る處に間隙あるを謂ふ、窾は空なり、又科と音義共に通ず、「アナ」と訓ず、大窾とは大いなる空虚の處を謂ふ、〔技經肯綮之未嘗〕肯は一に肎に作る、「釋文」に著肉骨也とあり、又骨無肉也とあり、綮は結なり肯綮とは骨肉相際りて微く障ある處を謂ふ、此の本文もと未嘗經肯綮とあるべきを、倒裝法を用ひて未嘗の二字を句下に置けるなり、乃ち妙技の極常に刀刃を空虚なる處に游ばせて、微しき障となる肯綮の處をも經て過くることを爲さずとなり、兪樾は曰く技經の技を枝の字の誤と爲し、枝經肯綮と連讀し、「素問三部九候論」に治其經絡とあるを、「王注」に「靈樞經」を引きて經脈爲裏、支而橫者爲絡と云へるに據り、支は枝と通ずるを以て、莊子本文の枝經は枝脈經脈を謂へるにて卽ち枝經とは經絡と言ふが如し、而して經絡相連の處も亦必ず游刃に礙あるを、庖丁は惟だ其の固然に因るが故に未だ嘗て礙せざるなりと、此の説に依れば未嘗の嘗は試なり、用なりと解して、經絡肯綮の微處すら、未だ刀刃を以て之を嘗試せず、固然の筋路に因りて宰割すとの意なり、〔而況大軱乎〕軱は音「孤」大骨なり、

良庖歲更刀割也、族庖月更刀折也、今臣之刀十九年矣、所解數千牛矣、而刀刃若新發於硎、彼節者有間、而刀刃者無厚、以無厚入有間、恢恢乎其於遊刃必有餘地矣、是以十九年而刀刃若新發於硎、雖然每至於族、吾見其難爲、怵然爲戒、視爲止、行爲遲、動刀甚微、謋然已解、如土委地、提刀而立、爲之四顧、爲

何れの處よりして切り始めて切り貫くべしと云へる徑路が善く分るが故に、未だ嘗て全體なる牛と云ふことを目に見留めざるなり、乃ち現今の時に方りて小臣は心神上にて牛と相遇うて一致し、而かも我が目の視力に訴へて牛を視ることを爲さず、耳目手足の官能は或る處に止まるを自覺して、其の靜的狀態を保ち、而かも心神は自から運り行きて動的作用をなし牛を解くに牛の肉上に於ける自然の腠理に依りて、大郤とて骨と肉との間の隙ある處を批ち開き大窾とて骨節の空間のある處に刀を導き入れて、刀の運び方は牛の骨節筋肉などが固定的に極まりて居るに因りて妄に刀を加へず、吾が技術は肯綮とて骨と肉と喰ひ付き合うて居る所卽ち微しく障礙ある部分には吾が刀を入れて試みしとは未だ嘗て有らざりき、而かも況して大軱とて更に大いなる荒骨の障滯ある者に入るゝことあらむや、

【解義】〔道也進乎技矣〕進は過なり、「郭注」に直寄道理於技所好者非技也とあり、乃ち自分解牛の技術は全く自然の道理を喜び好みて、之を技術上に託し寄せて、其の理趣を玩び味ふものにて、最早今の場合は技術を以て批評さるゝ程度を過ぎ踰えて居るとなり、〔所見無非牛者〕郭注に未能見其理間とあり、目にて見る限り盡く惟だ牛のみが目に留りて、何れよりも刀を入るゝ切り口を見出すこと能はざるなり、〔未嘗見全牛〕牛を見ると同時、直ちに刀を入るゝ切り口を見出して何邊よりするも、容易に斬り得るやうにして完全なる身體の牛を認めざるなり、〔臣以神遇〕神は精神にて乃ち自分と牛との關係を無形的に理解すること、〔不以目視〕目にて視る者は形而下の物質なり、乃ち牛と云ふ物質上に目を留めて視ざること、〔官知止而神欲行〕官は主司のことにて、此の處は目は視るを司り、耳は聽くことを司り、手は持ち、足は行くを司る類なり、官知止とは手足耳目等の官能は止まりて動かざることを自分にて感知すること、此れ上句の不以目視の意を承けて云ふ、向秀曰く知は「音」智、專所司察而後動、謂之官智、從手放意、無心而得、謂之神欲と、此の說によるときは有意的動作は止みて無意的作用は行はるとなり、神欲行とは精神は活動して運行せむと思ひ立つこと、此れ又上句の以神遇の意を承けて云ふ、

文惠君曰、譆善哉、技蓋至此乎、庖丁釋刀對曰、臣之所好者道也、進乎技矣、始臣解牛之時、所見無非牛者、三年之後、未嘗見全牛也、方今之時、臣以神遇、而不以目視、官知止、而神欲行、依乎天理、批大郤、導大窾、因其固然、技經肯綮之未嘗、而況大軱乎、

【大意】 眞に技術の巧熟するものは其の精神上より觀て自然の妙境を悟り、有無の理を障礙なく貫通徹悟することを說き、以て上文に云はゆる緣督爲經の義を申明したり、本文中に大郤大窾は乃ち督なり、天理により之を批し、之を導きて其の固然に因るは緣なり、而して臣之所好道也、進乎技矣の二句尤も味ふべし、大抵世人道は精にして技は粗なるを知れども、乃ち精なる道ももとは粗なる技より出でて、技術の極意は道を離れて有るべからざるを示したり、

【通釋】 文惠君は庖丁が此の狀態を見て深く感じ入りて曰く、譆實に何共申し樣なき神妙なることなるかな、技術の熟練と申すものはさても此の處までに練へ上げらるゝものにやと、庖丁之を聞きて其の手に持てる刀を一先づ離して前に置き、徐に之に對へて曰く我が君には頻に技術を感賞し給へるが、臣が數奇好みまするものは形而上たる道理なり、去れども道理は無形的なれば之を有形的なる技術に事寄せて味ひ樂むものにして、もとは牛を解するは技術なれども今は技術より過ぎ踰えしなり、始め小臣が當初斯く申す道と云ふことを呑み込み申さずして、彼の牛を解きし時は牛の全身に亘りて小臣が見ましたる所は皆盡く牛に見えざること無し、即ち刀を下して之を料理せむと思へども何邊か牛の骨骼なるか、又其の機節なるか、筋脈なるか一向知る可らず、料理の著手も如何にせば可なるか自ら知らざりき、然るに三箇年の月日を過ぎし後ちは最早一目して直ちに

ざるはなし、今其の手や肩や足や膝の態度を形容して云へば、昔し殷の湯王が音樂なる桑林と云へる舞樂の調子に合ひ、又其の砉然嚮然騞然の音節は、堯帝が咸池の音樂の中なる經首と云へる樂章の音節に中りて誠に面白きこと限なし、

【解義】〔庖丁爲文惠君〕庖丁は「成疏」には謂掌厨丁役之人、今(唐)之供膳是也とあり、即ち料理人のこと、又一說に庖人にて名は丁と云ふ、此の人庖厨の事に特達したれば世に庖丁と呼べり、猶ほ奕に奕秋あり、匠に匠石あるが如く、各々特達の技を以て、名に冠らして云へること、今此の說を用ゆ、文惠君は「釋文」及び「成疏」に即ち梁惠王也とあり、梁は魏の國の都の名にして、惠は魏王の諡なり、孟子に梁惠王あり此れと同じ、〔解牛〕解は宰割すること即ち調理して切ること、〔手之所觸〕觸は搏ち觸るゝなり、「宣注」には以手椎牛とあり、即ち手に椎を用ひて擊ち殺すこと、〔肩之所倚〕倚り著くこと、「宣注」に以身就牛とあり、肩を牛に倚せて近くこと、〔以足所履〕履は踏なり、足にて牛を踏むこと、〔膝之所踦〕踦は刺なりと李說にあれども、蘇輿は「說文」に踦一足也とあるを引きて、膝の擧がるときは足は單なるが故に、膝を擧ぐるを踦と曰ふと解せり、以上の四句は解牛の狀を言ふ、〔砉然嚮然〕砉は音「翕」、又音「クワク」、砉然は骨と肉と離れてバタと音すること、嚮は響と通ず、強く響くこと、〔奏刀騞然〕奏は進なり、刀を牛の形體に進め、深く切り入ること、騞は音「バク」又音「クワク」、騞然は砉然と略ぼ同じ、但之より少しく大なる聲なり、乃ち砉然嚮然と倶に刀を使用する聲なるに、却て奏刀の二字を以て、中間に安頓せしは、是れ句法の錯落なる處作者弄筆の巧を見るべし、〔莫不中音〕音は音節なり、謂ゆる宮商角徵羽の五音の調子を謂ふ、以上の四句は解牛の聲を言ふ、〔合於桑林之舞〕桑林はもと地の名にして、昔し殷の湯王が大旱の時、國民の爲に雨を祈りし處なり、因りて當時に用ひたる舞樂を桑林といふ、此の處は上文の手之所觸より以下の四句を承けて、狀態の此に似たることを謂ふ、〔乃中經首之會〕經首は咸池中の樂章にて、乃ち帝堯の音樂なり、會とは舞ふときの音節なり、此れ上文の砉然嚮然云云の四句を承け、調子の此に中ることを謂ふ、

と爲すことを云ふ、「宣注」に何故兼言爲惡、夫徇知有爲而爲神明之累、善與惡均也、知善惡之均者、於緣督之義其庶乎、緣督二字一篇妙旨、惟循中之所在、自己毫不與力、下文俱發此句、と〔可以保身〕身は形體なり、精神勞せざるときは形體も隨うて自ら堅固なれば、一身を無事に保つ可きなり、〔可以全生〕生は生命なり、精神擾れざるときは氣象も隨うて完備なれば、生命を全くすべきなり、〔可以養親〕此の句は上の可以保身の句を承けて形體を守るは即ち親に事ふる所以なるが故に、可以養親と云へるなり、〔可以盡年〕此の句はまた上の可以全生の句を承けて、生命を全くして天壽を短縮するに至らざるが故に、可以盡年と云へるなり、

庖丁爲文惠君解牛、手之所觸、肩之所倚、足之所履、膝之所踦、砉然嚮然、奏刀騞然、莫不中音、合於桑林之舞、乃中經首之會、

【大意】本節後節共に庖丁の解牛に關する言を借りて養生の道を説けり、要するに前章に云へる緣督爲經の意旨を明かにするに在り、乃ち萬理の中に就いて唯だ或る一理ありて貫通し、心の行ふ可き所たるは、全牛の中に就いて唯だ或る骨節の間刀の解すべき所たるが如し、緣督爲經とは即ち能く其の會通の點を觀取して、其の典禮を行ふことを謂へるなり、而して本節先づ解牛の狀を寫す、讀者宜しく其の文章の形容の妙なる形聲の倶に活動あるを觀るべし、

【通釋】昔し魏の國に庖丁とて庖厨の事に精通なるを以て世に名高き人あり、或る時其の主人なる文惠と云へる大名の爲に牛を料理せしことあり、其の時庖丁の有樣は手に刀を持ち、手に觸りしこと身を牛傍に近かづけて肩を斜に倚せ掛けたること、肉を切らむが爲に小拍子にて力足を入れて牛を蹈みたること、更に迫りて膝を少しく前に屈めて牛を壓へしこと、順序通りに運びて砉然とて肉と骨とがバリバリと相離るゝ聲を爲し、嚮然とて肉が骨と相離れて「ボトン」と落つる聲あり、庖丁が料理刀を進め運ぶことは騞然とて「クザット」深く刀を肉中に入るゝ聲あり其の調子の面白さと云へば、自然に音節に中り諸は

生命を全くして毀け戕ふこと無かるべし、長らく父母の膝下に侍して終身の孝養を盡くすを得べし、己が天壽の年を天命の指圖通に順うて終ふることを得べし、

【解義】〔知也無涯〕知は智と同じ、智識を謂ふ、涯は際涯なり、無涯とは例へば利祿を知れば富むるに隨ひ益々富まむことを求め、貴きに隨ひて益々貴からむことを求め、功名を知れば益々功名を求め、國の治まるに隨ひ益々治まらむことを求め、民の安からむことを求め、道德を知れば賢益賢ならむことを求め、聖は益々聖ならむことを求むるが如きもの皆是れなり、即ち次第に就け上りて此にて止むべしとの際涯なきことなり、〔殆已已而爲知者而已矣〕殆は危なり、已は語の終はる辭、又而已と義同じ、殆已の二字は上何を承け結びて、乃ち此の事は殆きことばかりにて外なしとの意なり、茅鹿門曰く下の已の字は粘上已字、已知其爲殆、而又用其心思不已、終于殆而已矣と、而已の二字は直ちに殆已とあるを省略的に疊みて云へる辭にて、齊物論に因是已、已而不知其然とあると語氣正に同じ、是れ莊子の獨闢の文法と知るべし、乃ち本文の義は涯ある生を以て、涯なき智を逐ふときは誠に心敝れ精渇きて斃るゝ外なければ、危き一方のみ、其の危きのみと云ふことを知りながら、仍ほ物を逐うて智を働かすことを爲すものは、矢張り危き一方のみ、乃ち結果は二者何れにもせよ、倶に失敗に歸すとなり、〔爲善無近名〕爲善とは正義の行を爲すこと、近名とは名譽を求めむと欲すること、乃ち正義の行を爲すとも己が名譽を求めむとて爲すものは、矢張り心の私欲なるを以て不可なりとの意、〔爲惡無近刑〕爲惡とは上の善に對して云へるなり、即ち左程大なる惡事にあらざるも、亦善事と爲すべからざる彼の酒食聲色を好むの類にて罪惡非道の甚しき者を指して云へるにはあらず、刑は刑罰なり、〔緣督以爲經〕緣は循なり、督は中なりもと人身の督脉とて身の中央に當りて上下を貫徹せる脉の事なり、故に衣の縫目の背の中央に當りて、上下に達する者亦之を督と名づけ、因て凡そ事物の因て兩間の中央に立ちて一方に偏倚せざるを督と謂へるなり、即ち凡そ事物は何れも皆當中の道理あらざるはなし、此に循ひ以て衆事衆物に順應するを常經

とある儒教眼を以て莊子を觀たるもの也、今其の大意を言へば、莊子の作先づ逍遙篇に於て人の本性を盡くすを知る、學問の旨を陳べて人の由りて進むべき路を明にし、次に齊物論に於て道理を推窮する談を陳べ、自然の變化に因應する方法を掲げ、次に養生主の本篇に於て天命に至り、叶ふべき要領を陳べて、己が身を修養する方法を示したることを謂へるなりと、姑く錄し讀者の參考となす、

吾生也有涯、而知也無涯、以有涯隨無涯、殆已、已而爲知者殆而已矣、爲善無近名、爲惡無近刑、緣督以爲經、可以保身、可以全生、可以養親、可以盡年、

【大意】 人生の病苦は餘り多智を恃むより生ずれば、病苦を除かむとするには、中道に緣りて行ふに在ることを說けり、本文中にある緣督以爲經の一句乃ち是れ扼要の語たり、

【通釋】 吾人の生命たるや涯りありて盡くるものにして、精々長くとも百年內外に過ぎず、而して吾人が智慮分別といふものは、世の物事が眼前に現はれ來るに隨ひ、種々に移り易りて涯り果ての無きとなり、さて其の涯り盡くることある生命にて有りながら、涯り果ての無き物事に隨ひ伴れて移り易るときは到底及ぶべくもあらずして、身體は次第々々に弱りて毎日々々に甚しく、遂に救ふべからざるに立ち至らむ、さても危きより外なし、其の危きことより外なきを知りながら、矢張己が思慮分別を疲らして、物事を知ることを務め爲す者はさても又々危きことなるのみ、されば吾人生命の貴重すべきを自覺せるものは、善きことを爲しても其の善を誇りて人々に衒ひ示して名譽に近か就かむとすることなく、亦惡事を爲しても刑罰に近か就かむとなすこと無く、即ち著しき善事を爲し、人目に留りて嫉妬排斥を招くこと無く、亦少々の過失は致し方なしとして、自ら恕するも大なる罪惡を犯して刑法上の罪人となる無く、緣督として凡て物事の中正なる道理に循ひ由りて、之を常經と定めて行ふときは、一身を安穩に保つべし、天然の

毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟、四者孰知天下之正色哉、

女亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鴞炙、

衆人役役、聖人愚芚、

夢飮酒者、旦而哭泣、夢哭泣者、旦而田獵、

且有此大覺而後知此其大夢也、而愚者以爲覺、竊竊然知之、君乎牧乎、

萬世之後、而一遇大聖知其解者、是旦暮遇之也、

昔者十日並出、萬物皆照、而況德之進於日者乎、

未成乎心、而有是非、是今日適越而昔至也、

是亦一無窮、非亦一無窮、

化聲之相待、若其不相待、

和之以天倪、因之以曼衍、所以窮年也、

昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喩適志與、不知周也、俄然覺、則蘧蘧然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、周與胡蝶、則必有分矣、此之謂物化也、

養生主第三

此の篇、逍遙齊物論の二者の次に在り、故に第三と曰ふ、養生主とは、生を養ふの主と解して、篇中に於て生を養ふとの主たる道を說くを以て篇名と爲したるなりとは「郭注」の說なるが、陸方壺の說に依れば、其の吾が生に主たる所以の者を養ふの義と解し、生主とは前篇の齊物論に謂はゆる眞君を指して云へる者にて、眞君は主人なるに、彼の同篇中に一受其成形不亡、以待盡、日夜與物相刄相靡於利害之場、行盡如馳而莫之止と云へるが如きは徒に自ら其の生を戕ふものにして、未だ善く養ふものと謂ふ可らず、故に此の篇は人に敎ふるに天理の自然に循ひて、時に安んじ順に處り如何なる利害にも心を驚かすなく、生死にも己を變ずるとなからしめ、然る後ちに之を善く主人を養ふと謂ふべき義なるとを以てしたりと爲せり、「義海」は曰く內篇始於逍遙遊、盡性之學、所以明道、次以齊物論、窮理之談、所以應化、又次以養生主、至命之要所以修身也と、此れ謂ゆる窮理盡性至命

つたときは、復た前きに魚たりしことを知らざるが如く、周が蝶たりしか、又は蝶が周たりしか、亦倶に相知らず、正に是れ物化の一證たりとなり、「本義」に曰く、方未夢時、周不待蝶、及既夢、而分周爲蝶、此時亦不自憶爲周、而周化、方未覺時、蝶不待周、及既覺而分蝶爲周、是時亦不自戀爲蝶而蝶化、不動聲色、彼我頓化、是一身之中天倪無不和無不化、而造化之化、亦何以異、是但物化之化、境近而夢覺短、造化之化、境遠而夢覺長、然不過一夢之間已也、何必眞有彼此之分、而辯其誰勝誰不勝哉と、

名言

形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎、

前者唱于、而隨者唱喁、

大智閑閑、小智間間、大言炎炎、小言詹詹、

小恐惴惴、大恐縵縵、

樂出虛、蒸成菌、

道隱於小成、言隱於榮華、

百骸九竅六藏、賅而存焉、吾誰與爲親、汝皆悅之乎、其有私焉、如是皆有爲臣妾乎、其臣妾不足以治乎、其遞相爲君臣乎、其有眞君存焉、

物無非彼、物無非是、自彼則不見、自知則知之、彼是無得其偶、謂之道樞、樞始得其環中、以應無窮、

以指喩指之非指、不若以非指喩指之非指也、以馬喩馬之非馬、不若以非馬喩馬之非馬也、

天地一指也、萬物一馬也、

何謂朝三、曰、狙公賦芧曰、朝三而暮四、衆狙皆怒、曰然則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未虧、而喜怒爲用、亦因是也、

是非之彰也、道之所以虧也、道之所以虧、愛之所以成、

天下莫大於秋毫之末、而大山爲小、莫壽乎殤子、而彭祖爲夭、

六合之外、聖人存而不論、六合之內、聖人論而不議、春秋經世、先王之志、聖人議而不辯、聖人懷之、衆人辯之、

大道不稱、大辯不言、大仁不仁、大廉不嗛、大勇不忮、道昭而不道、言辯而不及、仁常而不成、廉淸而不信、勇忮而不成、

注焉而不滿、酌焉而不竭、而不知其所由來、此之謂葆光、

來胡蝶と云へる蟲が夢に暫らく莊周たりしか、卽ち自己の一身は果して夢見たる方が本眞なるか、夢みざる方が本眞なるか、頓と一向知ること能はざるなり、されども詮じ詰むれば莊周はやはり莊周にして、胡蝶は亦矢張り胡蝶なり、即ち此の周と蝶とは必ず分ちのあることに相違なからむ、然しながら之れ又其の本は一なるものが場合と時とによりて、此の如く變化して形を易へたるなり、此の如く其のもとは一たるも分れて二となり、復た還元して一となるもの、之ぞ名づけて物化と申すなり、此に由りて宇宙間の事物を觀るときは、凡そ有らゆる事物一も皆此の原則に漏るゝものなければ、乃ち其の大體は一にして歸着も亦一なることを知るべし、既に已に一たらば何を苦みて僅々たる歲月の中に於て、區區たる世界に於て彼我を分ち、是非を爭ふ事を用ひむや、此れ吾が曩に齊物論の本旨を揭げて和之以天倪と云へる所以なり、

【解義】〔昔者莊周〕昔者は昔日と同じ、汎く今日より過去の日を指して云へるなり、孟子の公孫丑篇に昔者辭以病、今日朝とあるを朱注に昔者昨日也と云へり、此れ亦同じ、「通義」に曰く、周夢爲蝶曰昔者、則非今日之夢矣、可以見其平日無求無患之志と、〔夢爲胡蝶〕胡蝶は蛾の類、李時珍曰く蝶美於鬚、蛾美於眉、故又名胡蝶俗謂鬚爲胡と、又曰く、大曰蝶、小曰蛾と、〔栩栩然胡蝶也〕栩々は忻暢の貌なり、乃ち翅を翩々と快く樂み飛ぶことの形容詞なり、〔自喩適志與〕喩は愉と通ず、快なり、與は哉の字と同意に看るべし、〔蘧々然周也〕蘧々は有形貌と「釋文」に見えたり、又彊直の貌とも云へり、乃ち牀上に橫臥せることなり、「成疏」には驚動之貌、俄頃之間、夢罷而覺、驚怪思省方是莊周とあり、〔周與胡蝶必有分矣〕既に莊周が有り胡蝶が有るよりして觀れば、二者は決して分ちが無しと云ふ可からざるなり、卽ち二者は矢張二者にして一物にはあらずとなり、〔此之謂物化〕此れ仍ほ上節化聲の化に就いて詮釋を下して、以て萬物の根本は一にして二と爲り、二の又一に還元する眞理たる事を示したる也、物は凡そ萬物を謂ふ、物化とは萬物の變化することなり、萬物が變化するときは、例へば魚が鳥となりたる時は、復た其の前さに魚たりしことを知らず、魚が化して鳥と爲

し、故に因りて形と影とは相待つに似たれども、全く無意識的なるに喩へたる也とあり、今前說を用ふ、〔惡識所以然云々〕議論兩路より勘討するは莊子の慣手段とす、此れ行止坐起皆俱に己より出づるにあらず、故に果して然不然の何に由れるかを知らざることを言へるなり、「通義」に曰く、蛇蚹蜩翼、蛇藉以行、蜩藉以飛、喩人身所以運動者有若相待而終於無待、則獨化之理明矣、故翻覆辯論牽歸無待而止、人之一身、耳聽目視、手執足行、有待而然也、而所以用形者、若待造物而實無待也と、陸樹芝曰く蛇待蚹而行、蜩待翼而飛、而蚹與翼之運、仍蛇蜩自主之、影之所待者非若蚹與翼之可以自主也、又惡能知行止坐起之所以然不然哉、亦惟委心任運耳、設爲影之說、喩人身在天地間亦如一無形的影子、卽行止坐起俱非身所能自主、不能定其然不然、又何論物之是非乎と、

昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喩適志與、不知周也、俄然覺、則蘧々然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、周與胡蝶、則必有分矣、此之謂物化、

【大意】彼我の分は本と同一の物が、只だ場所と時間の異に因りて別樣の感を生ずることを作者一身の實閱を提示し、以て證明をなせり、

【通釋】物に彼此の分あるのみならず、我が一身に就いても、亦自ら夢覺の分あり、去る日此の莊周卽ち自己は化して胡蝶と爲りたることを夢みたり、其の時は栩々然として心や身が暢び〳〵として全く胡蝶たりしなり、自から愉快を感じて、我が志に適し叶ひたる哉と覺え、復た此の身が莊周と云へる人なることを氣附かざりしなり、然るに俄然として其の夢が覺めたるときは、又我が元へ立ち還りて、蘧々然とて矢張り己が形は大牀の上に橫はり臥してある、此の莊周なりき、此れ全體より云へば元來莊周と云へる人が夢に暫らく胡蝶たりしか、さて又左もなくて元

を離れては成り立たず、翼も蝶を離れては成り立たず、卽ち何れも相離れては獨行すべからざるものであるまいか、然しながら此れ等は共に何せに蛇としては必らず蚹が無くんば匍行くことが叶はず、蟬としては必ず翼なくんば飛ぶことが叶はざるかを知らず、又左程に貴き蚹や翼が何せに蛇や蜩を離れて各自獨立し得ずして、必らず蛇に附き蜩に附かざれば叶はざるかを知らず、今罔兩と影形との關係は全く其の通りにて何れか行止と坐臥との必らず倶に相伴へる解を知らむや、何れにか其の然らざる解を知らむや、卽ち全く不可解の事なり、此れ豈に以て前に述べたる化聲之相待、若其不相待とある義を發明すべき者ならずや、

【解義】〔罔兩關係〕是れ亦寓言なり、罔兩は人影の側に朦朧たる薄影のことなり、景は影の本字卽ち光線に映されて映ふ人影を謂ふ、曩子行以下四の子の字は、皆景を指して謂ふ、〔何其無特操與〕特は挺立の意、操は把持なり、特操とは卽ち確かに執り留むる志行なり、〔吾有待而然者邪〕吾とは景自から稱す、此の有待とは影の形を待つことを謂ふ、乃ち是非の論は物あるを待ちて起るに譬へたるなり、待の字を點出して無待の本意を揭明す、此れ上節の化聲相待、若其不相待とある理義を、形影の二物に因りて更に說きたるなり、逍遙遊篇に列子の御風而行を論じて、此雖免乎行、獨有所待者也とあり、凡そ有待てふものは莊子の道に於ては、未だ絕對的境涯に至るものと爲さず、無待して然る後ちに始めて能く眞の道に叶へるものと爲せり、〔吾所待至而然者邪〕吾所待とは影よりして形を指して云ふ、又有待とは形の神を待つことを云ふ、是れ萬物は又造化を待ちて始めて生ずるに譬へたるなり、〔吾待蛇蚹蜩翼邪〕蛇蚹とは蛇の腹下の齟齬と云へるものなり、蜩翼とは蜩は「セミ」と訓ず、蛇は足なきも、己が腹下に刻みたるが如く齟齬したる物あり、之に因りて行くことを爲し、蜩は羽翼にして飛ぶことを爲せり、故に己が身に固着の物に依りて行くことを譬へて云へるなり、一說に蛇蚹蜩翼とは蛻甲を指したるものにして、卽ち蛇蚹は蛇の脫去りたる皮にして、俗に云へる蛇の絹の事なり、蜩翼は蜩の脫殼なり、乃ち蛇の脫したる蚹、蜩の出てたる翼は唯だ形ちばかり存して精神な

きに、今や是非を忘れ、卓然拖拔して此の無窮極の中より出て、彼の物事の外より來り眼前に橫はるに當りては、姑く人の是とする所は吾も因りて是とし、人の非とする所は吾も因りて非として亦無窮極の中に寄するのみと、此れ卽ち和以天倪の明效を說きたるなり、陸樹芝は曰く振卽振古之振、猶一旦也、忘年則無死生夢覺之分、忘義則無是非然否之別、其得環中以應無窮者、豈有終竟哉、蓋實有亘古今而不盡者、故天地無竟、卽與天地同其悠久、而寓諸無竟也、此三句申明曼衍窮年之義と、此の說に依れば、無竟を長久にして窮り無き義に解して、乃ち天地間を指せりと爲したるなり、

罔兩問景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無特操與、景曰、吾有待而然者邪、吾所待又有待而然者邪、吾待蛇蚹蜩翼邪、惡識所以然、惡識所以不然、

【大意】罔兩形影の相待つに無心なることを擧げて上文の化聲を相待若其不相待の義を明かにしたり、

【通釋】影外の薄影を罔兩と名づくるが、或る時、罔兩は影に向ひ、問うて曰く、さて面妖なるかな、曩に子は步み行けるに今や子は靜かに止まれり、又曩に子は坐り安んせしに、今や子は動き起てり、何んぞ子の特操とて是れと確乎として人に拔き秀でたる行ひ無きか、何ぞ初中終物に依るのみにして腑甲斐なき者なるやと、影は之れに答へて曰く、此れは又迷惑なる尋ねなるかな、吾はもと獨立して吾が心の思ふが儘に活動なし得べきものにあらず、全く我が主なる形と云ふものを待つこと有りて、左樣に行止坐起を爲すのではあるまいか、されば我が主として待てる形其の物も又己が思ふ儘に自由なる活動を爲し得べきにあらず、又精神と云ふ者が活動を待ちて後ちに、之れにつれて活動するのであるまいか、吾が待てる形と云ふものは、宛かも蛇蚹蜩翼とて蛇の下腹にある蚹や蟬の翼の如くなるが、彼蛇の蚹ありて匍ひ行き蜩の翼ありて飛び行くを得ると同時に、蚹もまた蛇

止於不知而是非俱泯、復還其冲漠無朕之體、是和之以天倪也と云へり、乃ち能く造化混沌の初めに還元して、虚無淡泊の德を以て事物に對し、一切相爭ふ無きを謂ふ、此れ又一說として存すべし、〔因之以曼衍〕因は任なり、曼衍は變化することなり、又無極なりとも云ふ、〔所以窮年也〕窮年とは吾が年壽を盡くして後ちに己むことなり、和之以天倪より以下本句に至るまでは、上文の化聲相待云云の意を承けて云へるなり、卽ち凡そ萬物は旣に生じたる日より觀れば、彼の化聲の關係の如く、一方よりすれば彼此相待ちて又一方よりすれば相待たざるが如し、されば吾は彼此の間を調和するには、天然の氣相初めて分れ、萬物新に生する時に立ち還りて何等の巧なく野心もなく、其の變化に任して往くときは、優游迫らずして天年を終るに足れりとなり、陸樹芝は曰く、旣和以天倪、則得其環中、以應無窮、卽兩行之天鈞不竭不盈之天府也、豈不曼衍無盡乎、此正所謂參萬歲而一成純、萬物盡然、而以是相蘊、可以百年、卽可以萬歲者也、故曰所以窮年也と、又曰く此三句又見寓言篇、彼云、巵言日出和以天倪、因以曼衍、所以窮年、明、南華一書雖似言辯、要只如巵之注手、出之無心、有言究歸於無言也と、〔是若果是也至亦無辯〕此又數說あり、陸樹芝の說に依れば、是が必しも是ならざるに拘らず、若し果して是なりと信ずるときは、其の不是と逈かに異なる者、卽ち是の是たる理由に就ては、之を不議不論の中に付して別に深く辯ずることをなさずとなり、陳爾道は若の字を解して汝の義となし、是てふことに就て、汝に於て其れ果して之が是なりと謂へるか、天倪の初め是と不是と新たに分れて遠からざる場合は、是の中にまた不是あるやも知る可からざれば、當さに之を和するに天倪を以てすべしと云へり、而して下句の然若果然也云云の句も、亦同例として釋せり、此の陳徐の二氏共に同く然り、兩說孰れも通ず、〔忘年忘義〕忘年とは死生を一にして年齡の壽夭を忘れ、以て憂喜を爲さゞるなり、忘義とは是非を同じくして、事物の得失を以て安危を爲さざるなり、〔振於無竟云々〕振は暢なり、無竟は無窮なり、無窮は窮極なきなり、寓は寄なり、旣に壽夭是非を一視し年を忘れ義を忘るるときは、彼の是非の論起りしより以來爭辯日に益々繁密にして、窮極の期な

其黮闇」黮は音「タン」、黮闇は不明の貌、受は自己先に此なくして他より差し向けらるゝ義なり、其とは我と汝と相爭へる是非の論を指して云ふ、卽ち辨者たる我と汝とさへも自ら相知る能はざるときは、況して傍聽者たる他人は固より其の辯論の爲めに己が心の光明を迷ひ惑はさして暗昧不明となるとなり、

〔而待彼耶〕彼とは我と相對する者を指す辭にして、此にては第三者たる使正之者を謂ふ、岡松甕谷曰く言非獨我與若不能相知、使正之者亦不能知、則復何待於使彼正之、此亦言是非之終不可得辨也と、

〔化聲之至不相待〕待とは互に持ち合ひて仕受けをなすことなり、化とは形の變化することにて、上文にある死生夢覺の類を謂ふ、聲とは情の言語と爲りて發するものにて、上文にある彼我是非の類を謂ふ、人の覺むると夢むるとは形の變化に依りて分かれ、是非とか彼此とかの辯は言語てふ聲に依りて別るゝものなるが、此の二者は互に持ち合うて成り立つものなれども、又一方より觀るときは化する者は自然に化して其の何が故に化するかを知らず、聲する者は自然に聲して何が故に聲するかを知らず、卽ち此の二者は互に持ち合はずして各々獨立せる者の如し、是れ何に故ぞと云はんに、要するに物理の至極點は造化の自然と云ふに歸するより外なきなりと、以上の解は褚伯秀が「義海纂微」の說に依れり、郊崇壽は曰く言隨物而變、謂之化聲、若與也、是與不是、然與不然、在人者也、待人之爲是爲然、而是之然之、與其無待於人而自是自然、一皆無與於其心、如下文所云也と此說に依れば、化聲の二字を以て變化する聲と解し、若を與と同義とし、化聲之相待若其不相待也と讀みて、此の句は只人の以て是とし、然とするを待ちて、我も隨うて之を是とし、然とするものと其の人の之を是とし、然とすると否とに拘らず、我が獨斷にて之を是とし、然とする者と釋して一つに下句に述べたるが如く爲すと解すべし、此の兩說孰れも通ず、而して予は林說を可なりと思ふ、其の說尙ほ下節に詳かにす、此の他、諸說紛々あれども今皆省略す、

〔和之以天倪〕天は自然なり、倪は音「ゲイ」分なり、天倪とは天然の分れにて、卽ち混沌たる一氣の初め分かれたる處を謂ふ、又倪は端なり、陸樹芝は天倪端倪之未露者、猶天籟也、是非相持則乖而不和矣、若

なるとも、亦自然に相分るゝに任して、彼れ此れと辯じ爭ふことを爲さず、己が生死の如何を問はざれば、其の年壽を忘れ、事の是非の如何を言はざれば其義理を忘れ、卽ち能く一切の大利害得失を外にし、以て無窮に亘り、無窮に寄せ移りて終極する所なきなり、

【解義】〔既使我與若辯〕若は汝なり、我若の二字皆作者假設の詞なり、前文此例已に多く見ゆ、此の一節議論突出して前節と關係なきに似たるより、古來解釋者頗る疑を挿む者あり、或は前文にある瞿鵲子と長梧子の問答は、齧缺と王倪と問答中に引用したる一段にして、則ち此の一節も矢張り王倪が齧缺に答へし語なるを、後人誤りて別節と爲せりと說く者あり、我が邦宇津木氏の「解莊」の如きも卽ち此の說を執れり、又岡松甕谷は本節の然則我與若與人、俱不能相知也、而待彼邪に至るまでを長梧子の言とし、化聲之相待より以下は莊子又長梧子の謂はゆる待の字に就いて別に議論を生じたりとなせり、是れ明の徐廷槐が「南華經直解」と同論なるが、亦一說として存すべし、然れども予は仍ほ舊來の說に依り、本節を以て全く莊子の議論と爲さんと欲す、彼の突兀聳起の筆を以て單刀直入の論を爲し、讀者をして前に來路なく後に往蹤なきを疑はしむるもの、南華老仙往々斯の遊戲惑人の手段を弄することあり、獨り此の一節のみならず、林疑獨曰く莊子蓋欲忘言、故立此論、使我與若辯、至我果非也耶、設辭以遣之也、我勝若至若不吾勝、吾誰使正之、又遣其所遣也、使同乎若者正之、至同乎我與若矣惡能正之、此遣之又遣而至於無所復遣、斯其至矣と、〔其或是也云云〕或とは不定なり、我と汝と或は是とし或は非とし、彼此双方に於て、互に之を言ふときは、勝負未だ定らず、故に或は是とすれば固より全くは是にもあらず、或は非とすれば亦全くは非にもあらず、卽ち是非は定まらざるなり、〔其俱是也云云〕我と汝と俱に各々其の說を是とすれば、双方共に是の說のみにして非はなし、我汝と各々他の說を非とすれば、俱に非の說のみにして是はなし、是れ詰り彼我の偏見よりして、是の妄想を生ずる者にして、固より取るに足らず、〔我與若不能相知也〕我と汝と各々偏見を執りて咸な自らを是なりと謂ふ故に、彼我共に自家の非とする所は他家の是なることを相知らざるなり、〔人固受

ひ惑ふことなるべし、何んとなれば前文に述べたるが如く、因是而照之以天と云ひ、以明と云ふ者なければ、乃ち我と汝との辯論に就いて、他人を擇んで其の最後の裁決を爲さしむる必要を生ずるなり、さて何人をして裁決せしめば可ならんか、汝と同説のものならば、固より必ず汝の説を贊成せん、矢張り汝が前言を繰り返すに過ぎずして、決定せざるなり、我と同説のものならば、亦必ず我の説に味方せん、矢張り以前と同樣にて決定せざるなり、我と汝と異説のものならしめば、此れ又何れに就かずして愈々辯論多端に涉るのみにして、矢張決定を得ざるなり、我と汝と同説のものならしめば、我と汝との兩者に贊成し、此れも一理あり、彼も一理ありと云へるのみにして、矢張り決定を得ざるなり、然らば我と汝と第三者たる人とは、終に共に其の是非を知るを得ざるなり、されば此の上は尙ほ彼の誰を待ちて是非を定めんとするかと云はんに、元來此の是非を定むる爲めに、彼を待つと云ふことが、既に根本的誤謬たり、今且つ待つてふことに就いて、一言せん、全體待つてふことは互に扶け持ち合ふことなるが、化とて物形ちが自然的變化すること、彼の死生や夢覺の乍ち異なるが如きと、聲とて人の表情的に言語に出だせる聲の彼の是非や彼此の互て同からざるが如きとは、元と相互に待ちて成立すれども、さて何が故に化するか、何が故に聲を出だすかと詮するときは、誰れも知るに由なく、卽ち相互に待たずして各々獨立せるが如し、詰り自然の結果と諦らむるより外なきなり、されば今之を鑑みて此の間を調和する天倪とて、我が思ひを自然の初めて物を生ずるに、卽ち彼の化や聲の未だ分れ切らざる時に還元して、相待とか不待とか云ふ如き觀念を除却し、之に因り順ふに曼衍とて、自然の變化に任するを以てすべきなり、是れ其の自然の年壽を推し窮め、一定の長命を全くする所以なり、されば何をか和之以天倪と謂ふかとならば、曰く謂はゆる是を必しも是と定めず、謂はゆる然を必しも然と定めず、謂はゆる是が若し果して是なりと定まらば、是てふものが不是と異にして、是非の分別明らかなるとも、亦其の自然に相分かるに任かして彼れ此と辯じ爭ふことをなさず、謂はゆる然が若し果して然りと定まらば、然てふ者は不然と異にして、其の分別明か

俱不能相知也、而待彼也邪、化聲之相待、若其不相待、和之以天倪、因之以曼衍、所以窮年也、何謂和之以天倪、曰、是不是、然不然、是若果是也、則是之異乎不是也亦無辯、然若果然也、則然之異乎不然也亦無辯、忘年忘義、振於無竟、故寓諸無竟、

【大意】天下の是非はもと彼我の相對の見より出づれば、彼我の別あらん限り、甲是乙非は窮極なし、故に是非を無くして物論を齊くせんと欲せば、全く無我と爲りて天然に任かすに如くは無し、天然は其の現象千變萬化すれども、眞理は一貫して易はること無し、結末に、忘年忘義振諸無竟、故寓諸無竟とあるは乃ち無究竟の實際なり、是れ本文の主意にして纔輝が「發蒙」には曰此齊物論究竟、指歸實際處、如此一篇大文章驚天動地、若不指歸實際、則爲荒唐之說矣と、

【通釋】紛々たる人間界各々是非を鬪はして、其の果して孰か眞に是なる乎、未だ容易に知るべからず、試みにすでに我と汝とをして辯論せしめたりとせよ、必ず孰れかに勝負あらん、汝ぢ我に勝ち我れ汝ぢに勝たずとせんか、成程勝負は決したり、されども汝ぢの主張が果して是にして、我が主張が果して非なるか、此れ未だ知るべからず、我れ汝に勝ちて、汝ぢ我に勝たずとせんか、我が意見が果して是にして、汝が意見が果して非なるか、此れ未だ知るべからず、卽ち專ら辯論の勝負のみによりて、道理の是非を決定し得べきにあらず、其れ或は我と汝と兩ながら辯論上の道理に一是一非あるが、我と汝と兩ながら、徹頭徹尾是なるか、徹頭徹尾非なるか、何れにしても專ら辯論の勝負のみを以て、道理の是非を判定なし得べきにあらず、かくて我と汝と如何に辯論を爲すとも、互に道理の是非孰れに在るかを知ること能はざることならんか、他人は固より其の黮闇とて暗昧なる影響を受けて果して孰れに適從すべきを知らずして迷

胡大靈、陸樹芝の說によりて解す、胡大靈曰く、固卽成也、心未知其誤故然、故謂之夢、予亦夢謙言知之未能眞也、〔是其言也〕其言とは上文の聖人不從事於務よりを指す、〔其名爲弔詭〕弔は音「テキ」、至なり、詭は怪なり、卽ち通常人より觀れば極めて奇怪にして知り難しとの義なり、〔萬世之後—旦暮遇之也〕萬世とは至つて長き世の意味なり、一遇は前にも後にも一度出で遇ふこと、極めて少數の意味なり、其の解弔詭の言の解釋なり、旦暮とは朝夕と同じ、其の間至つて短くして度の頻繁なることを意味す、卽ち萬世の久しき間に纔に一度大聖人の弔詭の解を曉れるものに遇ふ時は、通常の朝夕に相遇ふと同じき度數に當るとて、此の如き大聖人は萬世に一つあるときは卽ち至りて密なりとなす可しとなり、換言すれば萬世に渡りて應さに多くあらざる可しとの意なり、乃ち此れ上句を受けて彼の知らざる者は獨り孔子と汝と予との三人のみならず、滿天下の人殆んど皆之れを知らざるものなるを謂ひ、以て三人の知らざるは勿論なることを明かにしたるなり、筆力奇矯、字寡くして意多し、讀者宜しく注意して看る可し、

既使我與若辯矣、若勝我、我不若勝、若果是也、我果非也邪、我勝若、若不我勝、我果是也、而果非也邪、其或是也、其或非也邪、其俱是也、其俱非也邪、我與若不能相知也、則人固受其黮闇、吾誰使正之、使同乎若者正之、既與若同矣、惡能正之、使同乎我者正之、既同乎我矣、惡能正之、使異乎我與若者正之、既異乎我與若矣、惡能正之、使同乎我與若者正之、既同乎我與若矣、惡能正之、然則我與若與人、

の稱呼の便に從ひ、因りて晉侯を王と稱せしなり、別に深意あるに非ず、「同筐牀」筐牀は方牀なり、又安牀なりと云へり、方牀は方形の床、安牀は安臥に適する牀なり、「食芻豢」芻豢の解は前に見ゆ、「其始之薪生」薪は音「キ」、求むるなり、「夢飲酒者旦而哭泣」旦は明旦なり、哭泣は哀む聲なり、大なる聲を哭すと云ひ、細き聲を泣と曰ふ、泣は俗に云ふ忍び泣なり、飲酒を夢見ながら哭泣を得たり、是れ飲酒は卽ち哭泣なり、而かも以て飲酒と爲せるは、夢中の誤なり、此の語は是に譬へ、下の語は非に譬へて云へるなり、「旦而田獵」田は獵と均く「カリ」と訓ず、「左傳」に四時の狩獵を分けて、春曰田、夏曰苗秋曰蒐冬曰狩とあれども、「白虎通」に田獵四時之田、總名爲田爲田除害也とあり、「夢之中又占其夢」占は「ウラナフ」と訓ず、卜筮によりて吉凶を判定することなり、占其夢とは「詩經」の小雅に訊之占夢、又乃寢乃起、乃占我夢とあり、「周禮」の春官に占夢以日月星辰、占六夢之吉凶、一曰正夢（安靜）、二曰噩（驚愕）夢、三曰思夢、四曰寤（寤時）夢、五曰喜（順境）夢、六曰懼（惡境）夢とあるが如く、支那の古代は夢の吉凶を占ひしことあり、今本句の意は夢見る人自から夢中の事たるを知らず、以て正に實境實事なりと思ひて、夢想を占ひて吉凶を計ることを謂へるなり、「且有大覺知此大夢也」大覺とは死を謂ひ、此とは有生を謂ふ、大夢とは生を云ふ、本義曰視麗姬之泣悔無端夢覺之吉凶相反、死生不相知、正若此覺而知夢、大覺而知爲大夢と、「竊竊然知之」竊竊は察々と同意義にして、小賢き容態なり、「君乎牧乎」君は君主にして至尊なり、牧は牛馬を飼養する卑賤なるものなり、乃ち人間界の階級を設け、貴賤大小上下等の制を立つるも、全く夢中に事をなすと同じく、果して眞の長久的不變のものにあらざるを悟らざるを嘲笑して云へるなり、「辨正」に曰く、譬有是非本是愚、而不知其悞、益求增不已と「固哉丘也―亦夢也」固哉は「孟子」の告子篇に固哉高叟之說詩也とあるを、朱子は注して固謂熱滯不通也と謂へるが如く、頑固にして融通の就かざることを謂ふ、丘は孔子の名なり、「與汝皆夢也」とは汝は瞿鵲子を謂ふ、俗解往々丘を以て瞿鵲の名となす甚だ謬れり、辨已に上に見ゆ、「郭注」下諸注多く固哉の二字を以て上句に屬して讀めり、今林西仲、

こそ、始めて此に生と云へる大いなる夢を自覺するなり、而して世の愚昧なる者は此の夢中にありながら自から以て吾こそは覺めたりとなし、竊々然と小賢しく其の道理を知れりと爲し、僅かなる人生間に於て種々なる階級制を設け、或は君主として仰ぎ崇がめ、或は牧圉とて牛飼ひ、馬飼ひの人として卑しめ侮り、各々銘々に勝手なる眞似を爲せり、然るに今汝ぢが聖人の不從事於務の話をなしたりとて、孟浪の事として取合はざるに至りては、誠に驚き入りたる固陋なる哉、彼の孔丘と申す男や、去りながら此の固陋人に此話をなす、汝ぢも亦驚き入りたる人物なるぞ、吾を以て觀れば彼の孔丘も汝も共に夢見つゝありて未だ覺めざるものなるが、斯く云へる吾も汝等に向つて此の分からざる言をなすことは、矢張夢見つゝあるものなり、さればこそ前きに吾は之れを妄言せん、汝は此れを妄聽せよと斷りたるなれ、扨て此の樣なることは實に衆人の考へと大いに飛び放れたる話なるよりして、其名を弔詭となせり、扨て此の道理は決して何人にも普遍的に易く解し得らるゝものならず、萬歲の後に至りて、大聖人ありて其の解を知れる者に出遇ふことあらんには、比較的解し得る人に多く出遇ひたる割合にして、宛かも旦暮之れに出遇ひたると同じ度數に値るものなり、極めて多くは出て遇はず、萬歲の間に一人あれば、一と先づ結構なる事なり、

【解義】〔麗之姬〕麗は驪と同じ、國の名、之は語助なり、姬は姓なり、卽ち晉の献公の愛妾なる驪姬を謂ふ、本書亦厲人を厲之人と書し、南沛を南之沛に作り、「呂覽」に楚丹姬を丹之姬に作るが如き皆一文法なると揚升庵が「新語」に見えたり、〔艾封人之子〕艾は地の名、封人は官の名なり、「論語」儀封人あり、「左傳」に潁谷封人あり、皆同じ、卽ち封疆を守る吏なり、子は古代は凡そ男女共に父よりして云へば子と云ふ、「左傳」によれば晉侯伐驪戎、驪戎男女以驪姬」とあり、又晉侯と共に同じく姬姓たること、又同書に見えたり、莊子の本文は同じからず、蓋し左莊二子各々傳聞の異のみ、〔其至王所〕王所とは晉侯の宮をさして云ふ、晉は周の諸侯にして、王にあらざれども、莊子の時は戰國の世にして、强國皆僣して王と稱す、孟子にある梁惠王齊宣王の如き卽ち是れなり、莊子亦當時

其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也、且有大覺而後知此大夢也、而愚者自以爲覺、竊々然知之君乎、牧乎、固哉丘也、與女皆夢也、予謂汝夢亦夢也、是其言也、其名爲弔詭、萬世之後而一遇大聖知其解者、是旦暮遇之也、

【大意】先づ麗姫の一事蹟を引き來りて、上文の生を悦び、死を惡むの非なることを證明し、然る後ち夢覺の一大喩を生出し、以て世人の一是一非は皆共に誤れば元より深く齒牙に掛くるに足らざるを言ふ、

【通釋】昔し晉の献公と云へる君の愛妾たりし驪姫と云へる女は、もと艾と云ふ地の封人の娘なりしが、晉の君がはじめて之れを得て、晉國に伴ひ歸りし時には、驪姫は故郷を離るゝ悲みに堪へず、泣いて涙は衣襟を沾したり、然るに既に晉の宮中に入り君の侍妾となり、君と共に筐牀とて立派なる寢牀に臥し、芻豢とて美味を食ふに及びては斯の如き快樂なる所ならんには、何ぜに早く來らざりしかと後悔したり、されば何に事をも實際其の處に往きて見ざれば、良きか惡しきか知る可からず、卽ち人の死も死後は案外に面白く樂きものなるやも計られず、されば死者も矢張死したる後は斯の如き樂しき場所になぜに早く來らざりしかと喞ちて、始めに只だ生のみを祈りし愚なることを後悔すること有るやも知る可からず、且つ又死生は夢の如きなり、夢と云ふものは實に樣樣なるものにて、夢に酒を飮みて樂しみしものも、翌朝は世事の爲めに哭泣し、又夢に哭きて悲みしものも、翌朝は獵をなす爲めに飛び出す事あり、又其の夢をみて居る間は、之れが夢たることを自覺せずして、此れは眞に氣に掛る事なりと思ひて、夢の中にてありながら、其の吉凶を占ふ事あり、此れ覺めてこそ、始めて其の夢なりしことを知るなれ、覺めざる中には決して夢なりとは思はざるなり、此の道理よりして推す時は、此に死と云へる大いなる覺め方ありて

んと云へり、愚按ずるに、奚の下に恐らく若の字を脱せるならん、上文以て例とすべし、旁は放の借字にして、依なり、日月に近づき依ることにて、晝夜となく、常に照らし明かなるを謂ふ、卽ち其の死生を一にするに喩ふるなり、〔挾宇宙〕挾むは懷にして藏むるなり、天地四方を宇と曰ひ、往來古今を宙と曰ふ、此れ萬物を一體として總べ攬ることにして、卽ち彼此を忘れて同一に思ふことに喩へたるなり、陳詳道曰く居日月下而旁日月、生宇宙中而挾宇宙、非役陰陽官天地者、不足以與此と、〔爲其脗合〕脗は勿と同じ、「字彙」に合口也とあり、「成疏」に無分別之貌とあり、此れ人の上下兩唇を適合したる形ちを以て自他一致して些の間隙なきに喩へたるなり、〔置其滑涽〕置は棄置なり、滑は亂なり、涽は闇なり、此れ本句と上句は一は其の爲す可き者を爲し、一は其の爲す可からざる者を爲ざるを謂ふ、陳詳道曰く脗合則爲之爲其所可爲也、滑涽則置之不爲所不可爲也と、〔以隷相尊〕隷は僕隷也「シモベ」と訓ず、自ら身を卑賤の地に寓せて相互に貴ぶことを謂ふ、卽ち上文にある爲是不用而寓諸庸と同義なり、〔衆人役役〕役役は馳せ動くことなり、〔聖人愚芚〕芚は音「トン」、渾沌として分察ならざる貌、又厚なり、愚芚とは無智なる貌、卽ち老子に衆人皆有以我獨頑鄙とあると同じ、〔參萬歲而一成純〕參は參雜なり、一は渾然として同じきことなり、純は泊然として精純なること、乃ち萬歲の久きに參はり、渾然として何等の野心なく、精純なる美德を成就するなり、〔以是相蘊〕蘊は積なり、是とは上句にある盡然の然を謂ふ、卽ち萬物同然を以て相互に蘊積し、是非の辨を爲さざるなり、「辨正」に曰く、總之者各有所然、而委己其中不見有己、所謂卽物以藏身也と、

麗之姬、艾封人之子也、晉國之始得之也、涕泣沾襟、及其至於王所、與王同筐牀、食芻豢而後悔其泣也、予惡乎知夫死者不悔其始之蘄生乎、夢飮酒者旦而哭泣、夢哭泣者旦而田獵、方

妄的に言はん、汝ぢも其の積りにて之を亂妄的に聽けよ、乃ち吾も言外に意を含めん、同時に汝も言外に味ふべし、扨て死生利害の爲めに心を變せざる聖人と申すものは、其の德の明かなることは、日や月に近く傍うて之と相竝び、道の廣大貫通することは、宇宙を腋下に挾みかゝへて卽ち世界のあらゆる一切を內外本末鉅細精粗となく悉く通じて一と爲せり、其狀情如何と尋ぬれば、人の口唇の上下を合して些かの隙間なきを、脗合と云へるが、其の聖人の宇宙を通して一と爲すことと、宛も其れと同じくして而かも滑湣とて是非の殺り亂れて未だ定まらざる事は、手を觸れずして其の儘に差し置き、自分は決して人に高ぶらずして賤隷の卑き身分に置きて相互に推し尊ぶことをなせり、衆人は役々として物事に疲れ勞するが、聖人は敢て智を衒ひ巧みを弄ばずして愚鈍なるが如し、されば能く久しく世を參へて一貫し、純粹無雜の眞道を成就せり、凡そ萬物は殘らず各々同じきことにて、卽ち萬物一體は道の眞理なるが、聖人に於ては自己も亦其の一體なる故を以て、萬物の中に自分の身を置き、相互に蘊み藏るゝなり、此に至るときは如何なる物も、如何なる境遇も、皆是れ歸着點を同じくすれば、死生利害の如きは固より心に感を深くして、爲めに動き亂るゝ筈なし、尙ほ更に一歩を進めて考ふれば、予は何れに於てか通常世の人が苟も生存を悅びて一日も其の壽を長くせんことを願へることは、眞理を知らずして迷ひ惑へる者にて傍逕に非ることを打ち消す理由を發見し得るか、否得ざるなり、

【解義】〔吾嘗爲汝妄言之〕嘗は試なり、妄は亂なり、之れを言ふべき予にあらずして言ふときは孟浪の言たるを免れず、故に妄言と曰ふ、〔汝以妄聽之〕之を聽くべき汝にあらずして、聽く時は太早計たり、故に妄聽と曰ふ、乃ちもと道は至て深遠高大なるものにして、吾や汝が如き未熟者の言ふべく聽くべき者にあらざれども、餘り汝が熱心なる故に、吾も不肖を顧みず一言せんに、汝も姑く忍んで之れを聽くべしとなり、〔奚旁日月〕奚は若と同じ問へる辭なり、王厚齋は以て上句に屬し、女以妄聽之奚と讀み、張文潛が商瑤銘に造物則ち奚とあるを援き、其の句法は此の莊子の文に本くとなせり、中山城山は奚は奚の字、或は矣に作る、因りて訛して奚の字となりしなら

無理なる注文と云はざる可からず、今汝ぢ如き未熟の分際にて輕しく左樣なる大問題の解決を求めんとするは、自から力を量らざる不順序のことなり、

【解義】〔是黃帝之所聽熒〕黃帝一に皇帝に作る、成疏は解して三皇五帝と爲せり、盧文弨は皇黃の二字通用すと云へり、熒は惑なり、又不光明貌と云ひ、或は少明にして大了ならざるなりと云へり、〔見卵而求時夜〕時夜とは司夜鷄なりと、「莊子音義」に見えたり、卽ち時の鳥なり、此れ雞卵の未だ孚化せずして雌雄すら判ずる能はざるに、而も時鳥たらんことを求むとなり、〔見彈而求鴞炙〕彈は「ハジキユミ」と訓ず、「吳越春秋」に彈生於古之孝子、孝子不忍見父母爲禽獸所食、故作彈以守之とあり、蓋し彈の起るや其の古きこと知る可し、鴞は鳥の名、一に鵩と名づく、又梟と名づく、又小鳩なりとも云ふ、陸機は鴞大如斑鳩、綠色惡聲之鳥也、入人家凶、賈誼所賦鵩鳥是也、其肉甚美、可爲羹臛、可爲炙、供御物、各隨其時、鴞冬夏施之、以其美故也と云へり、此に由れば鴞は鵩と同物たるを知る可し、炙は卽ち燒き鳥なり、本義に曰く以黃帝所聽熒、而女輙輕許爲妙道、亦太蚤計、汝便聽同黃帝乎、無乃見卵而求時夜、見彈而求鴞炙者也と、

予嘗爲女妄言之、女以妄聽之、奚旁日月、挾宇宙、爲其脗合、置其滑涽、以隷相尊、衆人役役、聖人愚芚、參萬歲、而一成純、萬物盡然、而以是相蘊、予惡乎知說生之非惑邪、予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸者邪、

【大意】聖人の渾て事物を忘れて、無我的たることを明かにす、其の生死一致を說く處、前段の齧缺が神人を言ふと一樣なれども、此の段は更に一層を進めて生の死に如かざることを說けり、

【通釋】黃帝の大聖人すら聽きて惑ふ所の大問題を吾が儕の力にて解決を得るは仲々思ひ寄らざる義なれども、折角の事なれば予試に汝が爲めに之れを亂

果有謂乎、其果無謂乎と云ふ、此等の語亦倶に以て參照す可し、〔而遊乎塵垢之外〕成疏に和光同塵處染不染、故雖在囂俗之中、而心自遊於塵垢之外者矣とあり、乃ち必ずしも身を世外に置かざるも高尚なる心自ら塵俗に超越して樂しむとなり、〔夫子以爲孟浪之言〕夫子は矢張上文と同じく、孔子を指すなり、孟浪は向注に音を漫爛と爲し、無所趨舍之謂となせり、李注は較略なり、成疏には率略なりとあり、郭慶藩は劉逵が「文選」の左思吳都賦の注に、孟語莫絡不委細之意あるを援きて、莫絡は一に摹絡に作る、墨子の小取篇に摹略萬物之然とあり、摹絡は總括の詞にして、莫絡摹絡孟浪皆一聲の轉なりと解せり、此に依れば孟浪の言とは概括的不精密なる言なり、〔妙道之言〕妙道とは妙に道に造詣せる言、卽ち善く道の深意を解せる話と云ふ義也、〔吾子以爲奚若〕吾子は互に親密なる間柄の者を呼べる詞なり、「儀禮」の冠衣篇に願吾子教之とあるを、鄭玄は吾子相親之辭也、吾我也、子男子之通稱と注したり、奚若は何如と同義なり、

長梧子曰、是黃帝之所聽熒也、而丘也何足以知之、且汝亦大早計、見卵而求時夜、見彈而求鴞炙、

【大意】開口一番先づ黃帝を揭げ來りて、孔子を喝破し、亦瞿鵲子を開喩せり、

【通釋】長梧子答へて曰く、右の如き大問題は仲々容易に解決し得べきにあらず、是れ昔しの大聖人たる黃帝すら其說を聽きて、解決に惑へる者なり、然るに況んや彼の孔丘抔で何ぞ此の道理を知る價値あらんや、此れ汝ぢが門違ひなる人に問へるが既に間違ひなり、且つ汝も矢張り大いに早まりたる遣り方なり、譬へば鳥の卵子を見て、夜の時刻を鳴き報せんことを求め、彈の丸を見ると同時に、鴞肉の炙り物を食はんと求むるが如し、成程卵が孚化して雞となれば、能く時刻を報ずるとて、又彈を以て擊てば鴞を捕へ得ればとて、直ちに卵に向うて時刻を報ずるを求め、彈に向うて鴞炙を求むるは一足飛びの仕方にて、

とて少言なりとて、皆倶に故らに意を用ひて然るにあらず、卽ち自然的に流れて出づるものなれば、一方より云へば言句なきと同斷なり、而して其の紛々たる塵垢の如くに汚れたる世の外に超越して、自由自在に遊ぶとのことなるが、是れ實にけしからぬ話なりとて、孔子は斯の話を以て孟浪の言とて、全く着實ならざる空言と爲せり、されど我(瞿鵲子)は是れ孔子の見識が卑きが爲め、左樣なる考を爲すものにして、斯の話中にある聖人の如きは、實に高妙なる道に叶ひたる行ひなりと信せり、今吾が敬愛せる君は如何に思ひ給へるやと、

【解義】〔瞿鵲子〕其の人の傳未だ詳ならず、兪樾は下文の長梧子が答に而丘也、何足以知之と云ひ又、丘與女皆夢也とあるに因りて丘は孔子の名なれば、瞿鵲子は必らず孔門七十子の徒ならんと云へり、〔長梧子〕李注に居長梧下、因以爲名と、又一說長梧は邑の名、其の封人(封疆を司る人)たるを以て長梧子と稱せりと云ふ、要するに上句の瞿鵲子と共に莊子の寓言たれば、深く論究せずして可なり、〔吾聞諸夫子〕諸は於なり、夫子は孔子を指して云ふ、或は瞿鵲子の師と云ひ、或は長梧子を指すなりとの說あれども、下文に徵すれば與に非なり、〔不從事於務〕務は事なり、世故を謂ふ、此れ全く世故に從事せざるには非ず、但深く心意を世故に勞して、爲めに自由を束縛せらるゝ樣なることを爲さゝれば、從事すと云へども、亦從事せざると同じきを謂ふなり、下の不就利云々の四句、皆同例を以て看る可し、而して無謂有謂、有謂無謂の二句は總結して此の意義を明かにしたるなり、〔不違害〕違は避なり、〔不喜求〕「郭注」に求之不喜、直取不怒とあり、乃ち世が己れを求めて用ふるからとて、別に喜ばず、亦直ちに人が己れの物を取りたるとて怒ることをなさずとなり、〔不緣道〕緣は依なり、一から十まで盡く循ふことを依と曰ひ、又緣と曰ふ、卽ち此れにては必しも何事をも倣し來りの遣り方のみを踏襲せざるを謂ふ、故に「郭注」は獨至者也とあり、〔无謂有謂〕有謂も亦無謂と同じ、無謂も亦有謂と同じとなり、上文の夫言非吹也、言者有言、其所言者特未定也、果有言邪、其未嘗有言邪、其以爲異於鷇音、亦有辨乎、其無辨乎と云ひ、又今我則已有謂矣、而未知吾之所謂之其

ず、即ち外物に接觸する場合と雖も、各々物を以て物に還元して己が心に留滯せしめざることを形容して云へるなり、「河漢冱而不能寒」河漢は二水の名なり、冱は凍なり、「風振海而不能驚」振は動なり、逍遙遊篇に神人の情態を形容して曰く、大浸稽天而不溺、大旱金石流土山焦而不熱と此の本文と略ぼ相同じ、郭崇霈は曰く能不以物爲是、而天地造化自存於吾心、則外境不足以累、莊子之自期許如此、故屢及之と、「遊乎四海之外」遊は即ち逍遙遊の遊にして、他より何等の束縛を受けずして、自由自在に活動すること、「死生无變於己」无は無と同じ、无變於己とは自己の心に於て何等の變り無きことなり、「而況利害之端乎」端は緒なり、「ハシ」と訓ず、利害は生命ありて後ちに起るものなれば人は死生ありて後ちに利害の事生ずるが故に、死生を以て本となし、利害を末となして端と云へるなり、「郭注」に曰く況利害於死生、愈不足以介意と、

瞿鵲子問乎長梧子曰、吾聞諸夫子、聖人不從事於務、不就利、不違害、不喜求、不緣道、无謂有謂、有謂无謂、而遊乎塵垢之外、夫子以爲孟浪之言、而我以爲妙道之行也、吾子以爲奚若、

【大意】瞿鵲子自から嘗て孔子に聞きし言を述べ、孔子は其の行を取らざれども、己は反りて妙道の行と思へるを以て問となし、長梧子の答を求めたり、

【通釋】瞿鵲子と云ふ人あり、其の友なる長梧子に問うて曰く、吾之を孔夫子に聞けり、夫子の言には全體無我無心なる聖人は、凡そ世間の務め向きに從事して意に留むるなく、利害の如きは打忘れて利の方に就き、害を避くる樣なることをなさず、又世の人が己れを求め用ふるからとて心に嬉しく思はず、其の行爲は一は深く道の精神を酌み取りて、表面の跡方に泥まざるが故に、世の常經と定まれる道に緣り循はず、別段意を言句に用ひて謂ふともなくして、自然に心底に浮べる道理が溢れ出でゝ言句となりて謂ふことあり、亦言句となりて謂ふことあるも、多言なり

【通釋】是に於て齧缺は更に問うて曰く、凡そ己に對して是なるものは身に利とし、非なるものは害とするに、今夫子は是非を知り給はずとすれば、卽ち天子は利害を知り給はざるなり、左れば至人とて至極德の有る人は申す迄もなく、物の利害を知らざるか、卽ち利害などは一向心に掛けざる者なるかと、王倪は又答へて曰く至人と申す者は誠に神妙にして何共申し樣も無き偉き者なり、之を例へば原野にある大いなる澤の艸木が如何に火に焚くとも神人を熱くすること能はず、河水漢水の川が如何に堅く凍るとも、神人を寒くすること能はず、疾く烈しく鳴り渡る雷が其の響き山を劈き破るとも、大に烈しき風が海を振ひ動して荒波打ち揚ぐるとも、神人を驚かすこと能はず、至人は此の此くにして大空に横はる雲を車として之に乘り、月日をば車を引ける馬として之に騎りて高く超越して、宇宙の外に自由に活動して樂しめり、されば元來人物の最も心を動かすものは、或る一つの兼ね合ひにて、死するか生ずるかと云ふ間際より甚しきは莫きことなるが、然るに今此の至人に於ては、夙に宇宙の根源に溯りて、萬物の一體にして盡く虛無たることを自覺し居れば、普通人の大切なる死生すら何に共思はずして、己が心を變じ亂だすこと無し、況して區々たる物の利とか害とかの如き、端末なる者に於てをや、固より念頭に浮び出づべきものにあらざるなりと、

【解義】〔子不知利害〕齧缺もと王倪の答に、處食色の三者、倶に各々物の嗜好によりて正とする所同じからざると共に、仁義是非の解釋も亦人々の意見によりて異なれば、强ひて其の一を執りて主張す可からずと云へるを見て、仁義是非の得失は卽ち物の利害となり、其の結果は自己の利害となるを以て、是非の二字を改めて利害の二字と爲したるなり、〔至人神矣〕神とは「不測謂之神」と「孟子」にある如く、人の智力にては到底推量の就かざることを謂ふ、「莊子辨正」に無成心、則圓而神とあり、卽ち至人は一の執着心なきが故に圓通妙融にして、事物に攪亂せられず、世外に超越して措置を失はざるなり、〔大澤焚而不能熱〕本句以下には至人は無心にして物外に超越すれば物之を累はすこと能はざるが故に、特に心が未だ外物に接觸して感動を興さざる以前のみなら

民の一部を後ちに倒挿す叙法の變化を見るべし、

自我觀之、仁義之端、是非之塗、樊然殽亂、吾惡能知其辨、

【大意】上文の義を承けて、仁義是非の一定すべからざることを言ふ、

【通釋】以上の如く、甲の是は乙の非にして、物に因りて各々其の好不好を異にせり、されば今我輩よりして之を觀察するときは、彼の世の仁義の端緒、是非の徑途即ち仁や義の分け目、是や非の別け目は、樊然と紛らはしく殽り亂れて、人々各得手勝手に己が便宜上より、互に仁と誇り義と誇り、又互に己を是とし、人を非とすることなれば、吾れ何れの處に於て其の辨別を見出だすことを得んや、乃ち一方の德とする所は一方の不德とする所にして、一方の利とする所は一方の不利とする所となり、此の如き衝突が彼我の間互に存すれば、自然の成り行きに任かすより外に吾の智を用ひて、彼れ此れと是非を辨ずることは、固より無用の業なりと、

【解義】〔仁義之端〕端は「ハシ」と訓ず、緒なり、乃ち道德上に就いて或は仁なり、或は義なりと定めたる分け口の處を謂ふ、〔是非之塗〕塗は途と同じ、乃ち裁斷上に就いて此は是なり、此は非なりと、取り捌きに掛る方法を謂ふ、〔樊然殽亂〕樊然は紛然と同義なり、殽亂は雜亂なり、

齧缺曰、子不知利害、則至人固不知利害乎、王倪曰、至人神矣、大澤焚而不能熱、河漢沍而不能寒、疾雷破山、風振海而不能驚、若然者、乘雲氣、騎日月、而遊乎四海之外、死生无變於己、而況利害之端乎、

【大意】至人は其の精神高く超越して至虚に遊べるが故に、生死の大事と雖も、毫も心を攪亂せしむるを得ざれば、區々たる利害の如きは固より其の心に於て何等の感動なきことを云ふ、

じ、〔孰知正處〕孰は誰なり、此れ各々必らず異處を求めて安となすときは、即ち己が安處となすときは、果して何處か處の正を得たる者なるかを知らざるを謂ふ、〔民食芻豢〕民は汎く人類を謂ふ、芻豢は「孟子」の告子篇に芻豢之悅我口とあるを、朱注に草食曰芻、牛羊是也、穀食曰豢、犬豕是也とあるが如く、芻は「クサ」と訓ず、豢は養なり、即ち草を食料として畜へる羊を芻と曰ひ、穀物を食料として畜へる犬豕を豢と名づくなり、此にては美食の義に用ひたるなり、又芻は野蔬にして豢は家畜なりとの說もあり、〔麋鹿食薦〕麋は大鹿なり、「シヽ」と訓ず、薦は美艸なり、「說文」に薦獸之所食艸也とあり、「管子」の八觀篇に薦艸多衍則六畜易繁とあり、〔蝍蛆甘帶〕蝍蛆は蜈蚣なり、「ムカデ」と訓ず、甘は甘味として食らふこと、帶は蛇なり、司馬の說に依れば帶は小蛇にして、蝍蛆好みて其の眼を食らふとあり、〔鴟鴉嗜鼠〕鴟は鳶なり、「トビ」と訓ず、鴉は「カラス」と訓ず、鴟鴉は共に腐鼠の肉を嗜むと成疏に見えたり、〔孰知正味〕此れ必らず各々異味を求めて嗜むことを爲すときは何れの嗜みが果して味の正を得たる者と爲すかを知らざるを謂へるなり、上の正處の一段は民の一部を鰌と猿猴と双配して言ひ、此の段は民の一部を單行的に擧ぐ叙法變化あり、〔猨猵狙以爲雌〕猨の下を逗とし、猨は一猵狙を以て雌と爲すと解すべし、猵狙は狗の如き頭にて猿に似たる一種の獸なり、一に獦牂と名づく、其の雄は喜んで猿と交合すと「釋文」に見えたり、「太平御覽」九百十には司馬彪の說を引きて、猵狙似猨而狗頭、食獼猴、好與雌狙〔猿の一種「テナガザル」〕接とあり、此の說に据るときは猵狙を以て雄と爲すと解すべし、姑く錄して異聞を博む、〔麋與鹿交〕交は雌雄交合すること、〔鰌與魚游〕鰌は既に上文に解せり、陸佃曰く鰌今泥鰌、與魚爲牝牡と、游は徐廷槐の直解に合遊而孕と解せり、〔毛嬙麗姬〕毛嬙は古の美人、或は曰く越王の美姬と麗は驪と同じ、晉の献公の愛妾なり、〔見之決驟〕驟は走なり、決驟は疾く走りて顧みざることなり、〔孰知天下之正色〕此れ各々其の類を求めて配偶と爲すときは、何れの配偶にして眞に色の正を得たる者と爲すか知るべからざるを謂へるなり、上文の正處正味の二段は民の一部を前に言ひ、此の段は

の上に處りなば、惴慄とておそれふるひて、恂懼とてびくびくとおそるべけれども、猿猴は素より木に上り馴れたれば左様なるおそれあらんや、さて此の人と鰌と猿猴との三つ者は各自に己れの居馴れたる場處を以て、吾が居處こそ是れ正當なる本場處なれと思へるならんが、冷靜なる判斷に据れば、果して誰か是れぞ正當なる場處たることを知らんや、乃ち互に吾こそ正當なりと合點すれども決定は爲し難きなり、食物に就いて云はんに、吾々人民は芻豢とて牛豕羊の如き肉食を美味なりとて食ふものなるが、麋や鹿は艸を食ひ、蝍蛆即ち「ムカデ」は蛇を甘しとし食らひ、鴟や鴉は鼠を嗜み好めり、さて以上の人民より鴟鴉に至る四つの者は各自に食らひ馴れたる物を以て吾が食物こそ誠に正しき本食物なれと思へるならんが、果して此の中の食味に就いて何人か是れぞ正しき味あることを知らんや、乃ち互に吾こそ正味なれと自から許すとも覺束なき義なり、色情に就いて云はんに猨は人から見れば甚だ醜き容色なれども、猵狙即ち「おほかはうそ」と呼べる動物は猨を己が雌として交がり、麋は鹿と交合し、鰌は魚と與に水中に逐ひ回りて喜び合へり、昔しの名高き美人なる毛嬙や驪姫は人類間には美人として稱賛する所なるが、去りとて魚が若し此の美人を見なば早やくも爲めに捕へられんかと恐れて、深く水中に潛り入り、鳥もし之を見なば亦驚きて高く飛び去り、麋鹿之を見なば思ひ切りて力の續かん限りを盡して遠く奔りて顧みざるべし、此の猨狙と鹿と魚と美人との四つの者は各自ら吾が愛するものこそ正しき美色なれと思ひ込みて居るならんも、果して誰か是れぞ間違ひなく天下の正しき美色なることを知らんや、是れ又容易に決定すべからざるなり、

【解義】〔民溼寢則腰疾偏死〕溼一に濕に作る同じ「爾雅」の釋地に下溼曰隰と卑下にして水氣ある地を謂ふ、偏死は偏枯と同意味にて、半身不隨なることなり、〔鰌然乎哉〕鰌は小魚の名なり、泥鰌なり、俗に「ドジョウ」と稱す、然の上に豈の字ある意味を以て看るべし、下文亦同じ、〔惴慄恂懼〕惴は音「ズヰ」憂ひ懼るゝこと、慄は竦れ縮むことなり、恂は音「シユン」、強く懼るゝなり、懼は事に觸れて周章驚く恐れなり、〔猨猴然乎哉〕猨は一に蝯に作る、猿と同

く注意して聽けよ、

【解義】〔嘗試言之〕嘗は試なり、嘗試とあるは同義の字を重複して語氣を敦厚ならしめたるなり、此を重言と謂ふ、漢文には往々此の例あり、〔庸詎吾云々〕劉淇が「助字辨略」庸寧辭、詎豈辭、庸詎重言也とあり、乃ち庸は寧の字の意味、「ナンゾ」と訓じ、詎は豈の字の意味にて「アニ」と訓じ、亦共に同義に近き文字を重複して用ひたるなり、「經典釋詞」は家大人曰庸詎皆何也とあり、乃ち二字を共に何の字と同義となせり、本書の太宗篇に庸詎知吾所謂天之非人乎、所謂人之非天乎とあり、「楚辭」の時哀命の篇にも庸詎知其吉凶とあり、蓋し戰國時代の語なり、

且吾嘗試問乎汝、民溼寢則腰疾偏死、鰌然乎哉、木處則惴慄恂懼、猨猴然乎哉、三者孰知正處、民食芻豢、麋鹿食薦、蝍蛆甘帶、鴟鴉嗜鼠、四者孰知正味、猨猵狙以爲雌、麋與鹿交、鰌與魚游、毛嬙麗姫、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟、四者孰知天下之正色哉、

【大意】居處と食味と顏色とに就いて各々其の心に愜へるものを以て安らかなりと爲せば、未だ一方のみに據りて、孰か是孰か非なるを定む可らざるを言ひ、以て天下の事物皆此に準じて知るべきことを示したり、本文中に三たび孰知の語を點し、正處正味正色の未だ眞に知るべからざるを言ひ、以て上文の三たび點出せる吾惡乎知之の語に映射し、姿致を生ず宣茂公は之を評して如寒潭秋月と云へり、

【通釋】夫れに就いては、吾又一と先づ試に汝に問はん、第一居處に就いて尋ねんに、如何なるや、今吾人の如き人類たる者が濕氣多き土地に寢ぬるときは腰の疾に罹り、又偏死とて半身不遂の疾とならん、去れども土鰌は常に水中に棲み居るものなれば濕氣多しとて人の如き疾病に罹ることあらんや、人もし木

到底人間の力にては如何なる物なるかを知ること無きか、王倪曰く吾何れの處に於て此が物の本體なりと云ふことを知るべき、乃ち物の本體は口にも述べがたく、手にて形容すべからざるなりと、

【解義】【齧缺問於王倪】 齧缺は人の姓名にして、帝堯と同時の人、許由の師なり、王倪は齧缺の師なり、共に本書外篇の則陽及天地の篇に見ゆ、〔物之所同是〕「成疏」に曰く物情顛倒、執見不同、悉皆自是非他と、乃ち萬物の情念は各自に見る所同一ならず隨うて皆思ひ思ひに自から信ずる所を是とし、他を非とするありとなり、陸樹芝曰く物所同是、言物之同以爲是者、卽公是公非之意と、此の說に依るときは本句は各物の中に於て共通的に一貫したる眞理あることを謂へるなり、〔吾惡乎知之〕 此より毎問みな吾惡乎知之の語を點出し、同一口調を反復したり、本義に曰く同是 者謂物所共是而無非、意以此爲是之正者也、齧缺問同是於王倪、而王倪三不對、謂知不知之辯不在言、而是非之正莫可定也と、乃ち奥深き眞理は到底言語形容を以て說明し得らるべきに非るを以て、輕く答へざりしとなり、〔然則無知邪〕 物無知耶は無知物耶とあると同義にして、物の眞理を知ることは不可能なるかと落膽して云へるなり、廣瀨淡窓は上文の物之所同是とある物と共に此處の物を人なりと解し、本句の意を夫子にして既に之を知り給はずとすれば、世間一切の人亦皆之を知ること無らんと釋せり、

雖然嘗試言之、庸詎知吾所謂知之非不知耶、庸詎知吾所謂不知之非知耶、

【大意】 上文を承けて一轉不知と云へるは眞に不知にあらざるを言ひ、以て下文を起す、

【通釋】 然しながら折角の質問なるに無下に沈默するも安んぜざれば、試に之を言はん、乃詰り知と云ひ、不知と云ふも見方次第にて、何ぞ知ると云ふことが反りて知らざることとなるやも知れず、亦知らずと云ふことが反て知れることとなるかも知らざるなり乃ち物の本體を知り道の極意を硏むることは、普通の知識以上に超越したるものなれば、汝に於ても善

南面は君位なり、釋然は怡悦の貌、釋は懌と同じ、「ヨロコブ」と訓ず、〔夫三子者〕三子は卽ち三國の君なり、〔猶存乎蓬艾之間〕蓬艾は山野に自生する一種の草なり、「ヨモギグサ」と訓ず、〔若不釋然〕若は汝なり、古代は君臣上下通じて自己を稱して朕と曰ひ、人を若と曰へり、本文の若は堯を指して云ふ、〔十日並出〕「淮南子」に堯時十日並出、使羿（射を善くする人の名）射落其九とあり、蓋し古代より傳はれる神話的事蹟なり、〔萬物皆照〕本義に曰く舜謂十日並出照萬物、而此日不嫌彼日之分光と、乃ち一時に十日竝び出づるとも、日と日との間に彼我の私見を立てゝ相爭ふことを爲さざれば、各々其の光りを以て照らすべき所を照らすが故に、萬物亦皆其の光を被り生育を遂ぐるを得たりと解したるなり、〔而況德之進乎日者乎〕「宣注」に曰く日猶懸象之迹耳、德則天地同流、何日則十日並出不礙、而德不能容三子偕存乎、說三子一喩說堯又一喩と、此の說に依るときは、懸象の一物たる天日すら、猶能く十日竝び出て互に礙せずして萬物を照らせしに、況して天と同體たる眞君の寓れる心より發したる道德は、何ぞ獨り彼の三子の偕に存することを容れざるやとて、堯の必らず三國を伐たんと欲するを忘るゝ能はざるは彼我の分畛猶存するより出づるを誡めたるなり、

齧缺問於王倪曰、子知物之所同是乎、曰、吾惡乎知之、子知子之所不知乎、曰、吾惡乎知之、然則物無知邪、曰、吾惡乎知之、

【大意】古人の所見を援きて、前段因是葆光の說の己が臆斷に非ることを證す、先づ問答より入る、

【通釋】昔し齧缺と云ふ人あり、其の師たる王倪と云ふ人に問うて曰く、凡て物には各々何れも共通的に自ら是にして非なしと爲す所あり、夫子は之を知り給へるや、王倪答へて曰く吾何れの處に於て之を知るべきや、固より知らざるなりと、齧缺更に問うて曰く、然らば夫子は夫子が知り給はざる所は卽ち是の點なりとのことを知り給へるや、王倪曰く吾れ何れの處に於て之を知るべきや、固より之を知るべき筈なきなりと、齧缺因りて問うて曰く、然らば物の本體

【大意】 以下皆上文の引證なり、而して本節は衆論の紛々相持するは宛かも三子の蓬艾間に存するが如し、然るに必らず之を論破して、排斥せんとするは彼の堯の不釋然に異ならず、故に德を進む者は十日並照の如くにして、相掩の心なくんば、廣莫の野に逍遙すべきことを云へり、

【通釋】 かるが故に昔し唐堯の天子たりし時、虞舜は其の輔佐たりしが、一日唐堯は虞舜に諮問して曰く、我は彼の宗膾胥敖の三國が來服せざるを以て、之を征伐せんと欲するが、南面して帝位に在りながら、此の三國の事が常は心に掛りて打ち釋けたる氣にならざるは其の故何ぞやと、舜は之に對へて曰く、彼の宗の君、膾の君、胥敖の君なる三人は何れも眇たる小國にして、譬へば猶ほ蓬艾の生ひ茂れる間の小地に存在せるが如く、固より僻遠の小國歯牙に掛くるにも足らず、然るに今陛下は其れを氣に掛けて、心の打ち釋けずして、必らず征伐し給はんとするは、全體何の爲めなるか、陛下何ぞ試みに彼の空間に懸象の一物たる日を見給はざるか、昔しは天に十日ありて一時に並び出てたれども、何等の相互に障礙を生ずること無く、萬物皆各々光線に照されて生育を遂げたり、而も況や道德は直ちに天其物と權威を同くして、日より更に進みて偉大なる者をや、然るに日は十日並び出づるも相互に障礙せずして、陛下は僅々たる彼の三人の儕に此の世に存在するを容るゝこと能はずして、蓬艾の間も必らず盡く我が德を被らしめんことを期して止まざるか、宜く右の如く、彼我の間に區々の辨を立て給ふことは無かるべきなりと、

【解義】〔故昔者〕既に故の字あれば昔者の二字無用に似たれども、古文此の例多く有り、希逸曰く昔者上著二一故字一便是因二上文一而引證也と、乃ち以下は上文の引證たるものなるが故に、故の字を置きて之を明かにしたるなり、故は承レ上之辭とあり、今按ずるに「史記」の鄒陽傳に故昔、樊於期逃レ秦之レ燕、藉二荊軻首一以奉二丹之事一とあり、故昔の二字を重用したる文例此と同じ、〔宗膾胥敖〕宗一に崇に作る國の名なり、膾も國の名、胥敖は二字にて一國の名なり、或は曰く胥は華胥國なりと、堯の宗胥敖を伐ちし事は、林希逸は曰く無二經見一亦寓言耳と、本書の人間世篇にも堯攻二叢枝胥敖一國爲二虛厲一の文あり、〔南面而不釋然〕

して成功を冀へる者にして、到底得べからずと解せり、「宣注」は曰く、五者本渾然圓通、今務於所見、而滯於迹、而盡向方矣、方不可行也と、今宣説を用ふ、〔故知止其所不知至矣〕上の知は智と同じ、止とは止まりて進まざることにして、此より以上を知ることを求めざるなり、其所不知とは吾が智力の知る能はざる所なり、至は極度に達したることなり、成疏に、境有大小、智有明闇、智所不逮者、不順强知、故知止其分、學之造極也とあり、「宣注」には但知不知爲不知耳と云へり、此れ本文に一轉語を下だして、不知の方面より本義を釋したるなり、陳治安は曰く知之所不知、在未始有無之先、有無之後、則不知其孰有孰無、又不知其有謂無謂、（前節の本文に見ゆ）、於此而止、何至於有封有常有畛、而是非紛競之不已、故知貴不知、辯欲不言と、此の説に依るときは本文の止の字は大學に在於止至善の止を、朱子が釋して、止者必至於是而不遷之意と云へるが如くに解して、止其所不知とは通常人の曾て知らざる天地未だ開けず、萬物未だ生せざる最初を謂へるにて、卽ち上文の大道不稱、大辯不言の義を守りて失はれざれば、其の智は至極して加ふること無しとの意なり、亦一説として存すべし、〔此之謂天府〕天とは自然也と、「成疏」は云へり、天府とは自然の府庫のことにして、蘇東坡の謂はゆる造物者之無盡藏と同義なり、〔注而不滿〕以下卽ち天府の義を申ねて明かにしたるなり、〔此之謂葆光〕葆は蔽なり、葆光とは韜々蔽うて其の光彌々朗かなる義なり、換言すれば外に耀かざる光なり、乃ち辯言に藉りて以て世に顯はし示す者は眞の道に非らざることを云へるなり、

故昔者堯問於舜曰、我欲伐宗膾胥敖、南面而不釋然、其故何也、舜曰、夫三子者、猶存乎蓬艾之間、若不釋然何哉、昔者十日並出、萬物皆照、而況德之進乎日者乎、

ず、故に物の去來に任し、强ひて謙讓を爲さざるなり、一說に嗛音歉、猴頷貯食也、蹇澁之意、不歉者、無圭角也とあり、〔大勇不忮〕忮は逆なり、又害なり、健なり、孰れも皆通ず、今予は第一說を用ふ、大道不稱より以下五句は卽ち上文に在る道未始有對の意にして、下文に謂はゆる五者园とあるは卽ち是なり、本義に曰く夫大道以不稱爲道、大辯以不言爲辯、猶之乎仁不仁、廉不廉、勇不忮と、是れ卽ち下の大仁不仁の三句は上の大道不稱の義を明にせんか爲めに、同一なる事理を例擧したりと解せしなり、「宣注」に曰く、止大道不昭、大辯不言二句是主と、〔道昭而不道〕以下は前文を反釋す、昭とは人に向うて道を稱へ明かにすることと是れ、此の道を稱する者は必らず此の道を離るゝ人なることを云へるなり、〔言辯而不及〕不及とは「宣注」に不勝辯とあり、按ずるに上下の文を以て例すれば、當に辯言而不及に作るべし、「郭注」には不能及其自分とあり、分は乃ち辯別の義にして、上文にも有分有辯と云ひ、故分也者有不分也、辯也者不辯也と云ひ、分辯の二字多く關聯して云へり、是れ亦以て西晉時代に在りては、其の本文の未だ誤らざりしことを知るべし、辯言而不及とは一たび言として出づるときは、上文に一與言爲二、二與一爲三、自此以往巧曆不能得、而況其凡乎、故自無適有以至於三、而況自有適有乎と云へるが如く、言論紛紛滋々多くして到底追及す可からざることを謂ふ、〔而不成〕郭注に物無常愛、而常愛必不周とあり、乃ち常とは一定不變の義なれば、物に固着し、方に偏倚して、妙通圓融の道に乏しくして普遍的ならず、故に博愛無私の仁は成就せざるなり、〔廉淸而不信〕淸とは濁の反對にして、皦然として明かなるなり、「成疏」に皎然異俗卓爾不羣、意在聲名、非實廉也とあり、〔勇忮而不成〕成とは勇氣の成し遂ぐるなり、「成疏」に捨慈而勇、忮逆物情、衆共疾之、必無成遂也と、〔五者园而幾向方矣〕五者とは道辯仁廉勇を謂ふ、园は圓なり、幾は近なり、庶幾なり、冀望の意なり、向は一本に嚮に作る、音義共に同じ、「郭注」に依れば、此の昭而不道より以下の五者は皆道を求めんと欲して、昭言常淸忮の人爲的工夫を加ふるものなれども、此れ猶ほ圓形を學びて方形に近づき似んことを求むるが如く、卽ち方角違ひのことを爲

り、然るに僅に智を弄びて是非の見解を抱き、封畛あるときは方形に近づき向ひて、圓轉滑脱の妙を失ひ、復た道の本眞を見るべからざるなり、かるが故に智は己が知らざる所の程度に止りて、其れ以上なほ知るべからざる所は强ひて知らんことを爲さず、其は至極なるなり、是れ眞に知らざるには非ず、卽ち何人か此の言はざるものこそ眞の大辯なれ、道と稱すべき形迹なきものこそ眞の大道なれと云ふことを知らんや、若し能く此の道理を知ることあらば、此れこそ誠に天然の府庫と謂ふべき者なり、天然の府庫なるときは如何程之に物を注ぎ込むとも、滿ち溢れず、亦如何程之を酌み取るとも、之が爲に竭き果てずして、而かも其の何れの處よりして、左樣に神聖不可思議なるかを知らず、此れこそ誠に天然の光り輝きを内に保ち蓄ふる者と謂ふべきなり、

【解義】〔大道不稱〕稱とはもと衣單複曰稱と「韻會」に見えたり、因て物の兩邊に相對するを稱と曰ふ、例へば我と云へば彼と云ひ、高と云へば低と云ひ、其の他大小是非の如き類、卽ち皆是なり、本來の大道は空虛廓朗なれば、混然として形容すべからざる故に、對立の名目なし、老子に有物混成、先天地而生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、强爲之名曰大（第二十五章）とあり、乃ち大道と云ふ名目からして全く的確に恰當したる義にはあらず、もと天地未有、萬物未生の先に在りて、形にもあらず、象にもあらずして、一の神聖不可思議なる物あるを說明上の方便として强ひて付けたる形容絶對的名稱にして、之に對稱する名の有るべき筈なしとなり、〔大辯不言〕不言の内に至理を含蓄し、人をして自から悟らしめ、是非の言論を以て、人を屈することを務めざるを謂ふ、〔大仁不仁〕「成疏」に亭毒羣品汎愛無心、譬彼靑春非爲仁也とあり、乃ち大いなる仁愛は陽春の萬物を生育するが如く極めて普遍的なれば、部分的に仁愛の一方に偏せざれば、是れが卽ち仁愛として認むべき迹方無きことを謂ふ、〔大廉不嗛〕嗛は「釋文」には徐の音「謙」とありて謙の字と徐氏は同義に見倣したり、大廉とは道の奧意を知りて、廉潔なる人を謂ふ道の根源上より觀るときは、萬物皆空にして一時的幻影たるに過ぎずして、彼此人我の差別あるべから

り、陸方壺は衆人則辨之、以相夸示、雖然這等夸示求以自見、終是不見と云へり、乃ち衆人の辯を務むるは、本と自己の吹聽をなして、世に見はさんと求むることとなるも、終に其の目的は達し得ずと解したり、予は「郭註」を可とす、

夫大道不稱、大辯不言、大仁不仁、大廉不嗛、大勇不忮、道昭而不道、言辯而不及、仁常而不成、廉清而不信、勇忮而不成、五者园而幾向方矣、故知止其所不知至矣、孰知不言之辯不道之道、若有能知此、之謂天府、注焉而不滿、酌焉而不竭、而不知其所由來、此之謂葆光、

【大意】 古語を歴引し、反覆論釋して、前節の意義を證す、

【通釋】 全體至りて大いなる道は、初めより普遍にして、界限なきが故に、反りて此れが道なりと名目を立てゝ稱述すべからず、大いなる辯別は、到底口舌を用ひて是非すべからざるが故に、反りて稱へ述べざること、眞の大道なるなれ、言説せざることこそ眞の大辯なるなれ、又大いなる仁德は反りて仁の形ち迹かたなく、至りて大いなる廉潔は淸節を以て自から滿足せず、大いなる勇氣は人を害殘ひせずと、古語に云はれたり、實に其の通りにて、今之を反面より觀察するときは、道は此れが乃ち道なりと指し名づくべき迹方あれば、既に早や或る局部に止まりて、大いなる道ならず、言は之を辯に見はして是非を別つときは、到底追ふとも及ぶべきにあらず、乃ち擾々たる紛爭を支へ切ること能はず、仁は常に變らずして固定したるときは、普遍的に流通せずして、眞の仁ならず、廉は自ら己が淸潔を滿足なりと誇る心ありては、信實ならず、勇は人に逆らひて强情なるときは、障礙多くして成就せず、さて此の道辯仁廉勇の五つの者はもと渾然として完く圓かにして、何等の圭角なき者な

行事之跡、聖人(孔子)非レ不二議而正一レ之、然先王所レ是從而是レ之、其所レ非從而非レ之、未三必置二分辨於其間一、故曰二議而不一レ辨、志識同、先王之志、謂二先王所一レ識と、陳碧虛趙虛齋陸方壺林西仲等多く此と同じ、林希逸は曰く見二於史冊一者、皆先王經世之志、聖人豈容レ不レ議、然亦何嘗爭二競是非一と、甕谷の說に依れば、先王之志を先王の識せるものと解し、希逸の說に依れば、先王の心志と解す、後說用ふべし、〔故分也者至有不辨也〕上文の六合之外より議而不レ辨に至るまでは下節の大道不レ稱云々の一論を起さんが爲めに、先づ普通的聖人は尙多少の論議を爲すを免れざるも、更に最上的至人に至りては、本より不レ稱不レ言なることを云ひ、因て上節八德の中に於て、分辯の二字を抽出し其の義を解釋して、餘の六德も同例を以て、推知すべきことを示したるなり、文章矯健奇筆變幻、容易に端倪すべからず、舊解往々失竅あり、宜く從ふこと勿るべし、〔故分也者—有不辨也〕林希逸曰く惟其不レ言則爲二至言一、識レ至二分辨處一、便是胸中自見得不レ透徹レ也、故曰分也者有レ不レ分也、辨也者有レ不レ辨也と、此れ彼の分辨を務むる者は、本と其の胸中見識透徹せずして、乃ち分たず辨へざること有るよりなりと、其の病源を推して云へる義に解したるなり、呂惠卿曰く、觀二六經之言一則歷人之所三以論不レ論議二不レ議辯一不レ辯者、可レ知矣、蓋理極則分有レ不レ分、辯有レ不レ辯と、林疑獨は曰く道有二分者一、物物自分、有二不レ分者一、我未二嘗分一也、辨也者、事事自辯、有二不レ辨者一、我未二嘗辯一也、物自分、故分而不レ分、事自辯、故辯而不レ辯と此れ倶に自然に分れ、自然に辨ずる者は、分るゝも分かれざると同じく、辯ずるも辯せざると同じければ、聖人の論議あるは論議せざると同樣にて、何等の妨害とならずと解釋したるなり、此の兩樣の解孰れも通ずれど、下文に照らすときは希逸の說を可とす、〔聖人懷之〕懷は「フトコロ」と訓ず、懷レ之とは懷中に藏めたるが如く、全く道理を心中にのみ留め存して、外に言ひ見はすことを爲さざるなり、〔以相示也〕示は誇り示すなり、〔故曰辯也者有不見也〕「郭注」に依れば不レ見二彼之自辯一、故辯二己所一レ知、以示レ之とあり、乃ち元來辯と云ふ者は辯者自身がもと眞の道理を見知らざること有るが故に、喋々と辯ずること有るなり、若し見知りて居る者ならしめば決して辯すること有らずと解したるな

人は輕々しく言ふことあれば、爲めに人の疑惑を釀し、互に爭ひを生ぜしむるが故に、之を懷中に巻き收めて人に示さず、平常の衆人は之を辨へ別てりとて、誇り顔に相示すが故に、議論益々盛になりて爭ひが止まざるなり、故に曰く辨と云ふことは己れ昏くして見えざること有るが爲めに起るなり、若し最初より明かに道理に達し居れば、亦復喋々の辨を煩すこと無るべかりしなり、

【解義】〔六合之外云々〕合は對なり、上下四方各々相對するが故に六合と曰ふ、六合之外とは卽ち天地の外なり、天地の外は道理の存せざること無きも、人の耳目の力にて聞見し得べきにあらず、存而不論とは在來の儘に從うて深く立ち入らざることなり、岡松甕谷曰く夫日月星辰、聖人藉以供推測之用、定民時而已、未必深求於日月星辰、故曰存而不論と、乃ち作暦の參考に日月星の躔度を利用する位に止めて其れより以上なる幽玄深妙の理は、唯だ神聖にして人智の測り及ぶ所に非らずと爲して、必ずしも根本的に溯りて、研究せざるを謂ふ、〔六合之内云々〕六合之内とは宇宙間に存在する總ての物を謂ふ、甕谷曰く如覆載生成之偏、寒暑災祥之不得其正、雖聖人豈得議正之、此其所以論而不議也と、乃ち天地が萬物を覆ひ載せ生み成す上に就いて偏頗あり、季節天候の不順なるが如きは、聖人と雖も彼此と詮議して正しくすることを得ずとの意なり、〔春秋經世先王之志〕春秋はもと國史の總稱なり、史官に於て、國家に關する出來事を春夏秋冬一年の順序を逐ひて編錄するが故に、國史を名づけて春秋と曰ふ、孔子に至りて魯の春秋を筆削し、大典を垂れしよりして、後世專ら魯史の稱となれり、本文の春秋は「成疏」の解に依れば、春秋者時代也、經者典誥也、先王者三皇（伏羲神農黃帝）五帝（少昊顓頊帝嚳帝堯帝舜）也、誌記也、夫祖述軒軒轅頊（顓頊）、憲章堯舜、記錄時代、以爲典謨と云へり、乃ち時代を書き載せし史籍は古先聖王が永く世上に經典として傳へたる記錄との意なり、王先謙は曰く、春秋經世、謂有年時以經緯世事、非孔子所作春秋也と、此れ歷史は一年四季に分配して、當世の事を記錄するが故に、春秋經世と云ふと解したり、然れども今此には直ちに孔子の作れる春秋と解して可なり、岡松甕谷は曰く、春秋所載前世

を求めずして、自然に道に協へるも、下等の人は强ひて己れが有する德を失はざらんとして、種種なる小細工を旋すが爲めに、反りて德を失ふとなり、故に老子に又曰く失道而後德と、此の意味よりして云へば莊子が此の八德も矢張り穿鑿的に得たるものにして自然の天德を謂ふに非らずと承知すべし、

六合之外、聖人存而不論、六合之內、聖人論而不議、春秋經世、先王之志、聖人議而不辯、故分也者有不分也、辯也者有不辯也、曰何也聖人懷之、衆人辯之、以相示也、故曰辯也者、有不見也、

【大意】大虛と同心なる聖人は六合內外の事知らざるにあらざるも、之を懷藏して辯ぜざることを云ひ、以て世の好辯の徒は其の實未だ大道に明かならざることを顯かにせり、

【通釋】天地四方を六合と名づくるが、此の六合の外卽ち天地世界の外には勿論深遠なる道理は有るなれども、聖人は其の儘に存し留めて深く立ち入りして論じ尋ぬることを爲さず、六合の內卽ち此の天地世界の內は許多の道理あるなれども、聖人は唯だ之を統括的に論ずるのみにして、彼此と其の長短を比較し、是非を辨別して討議を爲さず、春秋の書は國に有りし事實を記載し、世間の組織を示し、其の經綸の道を言ひ、古先聖王が天下を治むるの志を寓したる經典なれども、聖人は唯だ比較討議のみに止めて、是非を別ちたるも、更に細層に入りて、其の義を繰り返して、如何なるが故に、此の如く褒め又は貶すと云ふが如き、入り込みたる辯說を爲さず、されば一體分析と云へることは、本と混雜して分つ可からざるが故に分析の必要あるなり、辯別と云ふことは本と紛亂して辯別す可からざるが故に、辯別の必要あるなり、若し最初より極り切りて居らしめば、右等の必要を感ぜざるなり、是に於て更に自ら問うて曰く、其れは一體如何なる義ぞやと、因りて答へて曰く、其れは聖

的に用ひ、隨うて是も非も共に亦常に一定したること無きが爲めに、始めて畛域を生ずと、是れ王先謙の說なり、釋意に曰く言未始有常、了無一定是非之相、爲是而有畛、只因執一是字、故分別之畛と、陸樹芝は曰く道未隱於小成、原無彼此之封域、言未隱於榮華、乃因人各自是、而後分其畛界也と、此の二說俱に爲是の是を解して、是非の是と爲せり、乃ち是非はもと言語の常あらざるに因りて一定したるものに非るに、只人の頑然として自己の意を固執して是と爲すよりして、各々畛域を相分つに至るとなり、然れども爲是は矢張り上文に、故爲是擧莛與楹云々とある爲是の如く、爲を去聲に讀みて「タメ」と訓じ是を此と同義に解する方を優なりと爲す、郭象は本句を解して、道無封、故萬物得恣其分域と云へり、王先謙は此の說を述べたるなり、〔有左有右〕郭注は曰く各異便也と乃ち時と場合に因りて、或は左を取り、或は右を取ることあるを言へるなり、「副墨」は左與右相對而相反者也と、乃ち相對的に立ちながら其の利害とする點は相反する義と云へり、〔有論有議〕舊本には有倫有義に作れり、倫は理なり、義は宜なり、郭注は曰く物物有理、事事有宜と乃ち紛糾せる羣物中には本と一貫したる道理ありて存し、參差たる萬故は各々其の宜に隨うて便利を計ることありとなり、愈樾は「釋文」に引ける崔本に有論有議に作れるを據として、此れ當に之に從ふべしとして曰く、下文云、六合之外、聖人存而不論、六合之內聖人論而不議、又曰分也者有不分也、辯也者有不辯也、彼所謂分辯即此有分有辯、然則彼所謂論議、即此有論有議矣と、今之に從うて改む、論とは道理を統說すること、議とは長短を細審することとなり、〔有分有辯〕分は分析なり、辨は辨別なり、大體略ぼ同じ、但大體を分析したる後ち、小別けを爲すなり、「成疏」に飛走（禽獸）雖衆、各有羣（社會）分、物性萬殊自隨類（種類）別矣とあり、〔有競有爭〕競は並びに物を逐うて勝負を決するなり、爭は相對して是非を辨ずるなり、〔此之謂八德〕德は得なり、即ち以上相對的八件は各々人の自ら之を己が身に得たる事物に就いて此の名目あることを謂へるなり、「老子」に上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德と云へり、乃ち眞の德ある者は徒に私智を役して道を得る

争、此之謂八德、

【大意】　道は本と是非なく、是非の起るは、只己れ固く是を執りて、彼我の界を生ずるより始まることを言ふ、「說莊」に曰く再翻上自無適有之意、而詳言之と、

【通釋】　夫れ今改めて申さんに、眞正の道と云ふ者は、何に事何に物にも無形的と有形的とに論なく普遍にして存在せざる所なく、未だ嘗て一定的封域ありて彼此の區別を爲さず、言語と云ふ者は本と內心に思へることを、口外に發するものにして、心既に善惡執着の念なきときは、一句一言として可ならざるはなく、未だ嘗て是れぞと常に定まる言とてはあらず、然るに俄かに確かに是れぞと、一つの或る定れる主義を立つるが爲めに、玆に畛とて宛かも田間に道ありて界をなすが如く、乃ち隨うて彼れ此れの區別を生ずるなり、今請ふ試みに其畛と云へる例證を言はん、方位に就いては、左あれば之に反對する右と云ふ者あり、言語に就いて云へば、道理を概括的に說き述ぶる論と云ふ者あれば、其內譯に立ち入りて長短是非を比較的に詳言する議と云ふ者あり、類別的に牛は牛連れ、馬は馬連れと云へるが如くに、種類を以て分かることあれば、雄は雄と、雌は雌との如く辨別することあり、多くの者並び逐うて競ふことあれば、單づゝ相對して負けじと爭ふことあり、先づ大略此の如くなるが、此の以上の八事を八德と名づけて先づ通常人の持ち前と申す者なり、

【解義】　〔夫道未始嘗有封〕始は嘗の字と同意に解すべし、既に前に見ゆ、封は封疆なり、「サカヒ」と訓ず、即ち彼此の別を立つることなり、成疏に夫道無不在、所在皆無、蕩然無際、有何封域とあり、〔言未始嘗有常〕常は常定なり、「成疏」に道理虛通、既無限域、故言敎隨物、亦無常定也とあり、乃ち本來眞正の道理は虛無的にして普遍的なり、故に元より部分的に局限せられざるが故に、道理を談ずる言語も、自然顯象的事物に隨ひ移り易はりて、常に一定せずとなり、〔爲是而有畛也〕是は此と同じ、畛は田間の道なり、「アゼ」と訓ず、此にては疆界の義に用ひたり、爲是とは上の自無適有とあることを指す、乃ち道は未だ始めより封あらず、言は未だ始めより常あらざるも、唯だ彼如く自無適有に由り始めて畛域あるに至ると、是れ呂惠卿の說なり、又言語は彼是共通

る言を弄びて虛無の原則に違へる也との意なり、〔且得有言乎〕集解に謂之一、即是言とあり、乃ち既に已に之を一と謂へる以上は、即ち是れ本來の虛無よりして、一つの言語と云ふ物を構成して、無より有を生じたるものなり、〔一與言云云〕上文の爲一とする物が、既に一つの物にして、之を爲一と說き明かにする言が、又一つの物たるなり、而して其言を繰り返して唱ふるときは、又復た一つの物が生じて遂に三つの物となるなり、焦竑曰く由無言生有言、故一與言爲二、二與一爲三、置一於此、我說箇一、便是一與言爲二、又將此二與一相對、却便成三、此言有言之後遞々相生之意と、〔巧曆不能得〕巧曆は算曆に善く巧みなる人を謂ふ、〔故自無―適有乎〕自は從なり、無は無言を謂ふ、適は往なり、有は有言を謂ふ、虛無の原則より云へば、もと天地萬物の情態を語りて、有と謂ふべからざると共に、無とも謂ふ可からず、何んとなれば、無と有とは對待的の詞にして有なければ無を說く必要もなければなり、然れども今言語を假りて說かざれば、虛無の至理を明かにして世人を喩すに由なし、故に已むを得ずして纔かに口を開きて、無言的より有言的に往き轉ずるときは、忽ち一より二となり、二より三となるに至る、而も況や已むを得ずして發する言にあらずして、初めより有言を主として發し、益々雄辯說を振ふが如き者は固より底止する所なきなり、「副墨」に曰く看來當初只是一箇一字引起、遂至無窮、自無適有、倘且如此、況自有適有乎、有即有謂（上に見ゆ）之有、自意見（我意）上來、無即無謂（上に見ゆ）之無、自太虛（眞理）中來者と、〔無適焉因是已〕無適の上に是以の二字を加へて看るべし、因是已とは乃ち上文に是以聖人不由、而照之于天、亦因是也とあり、此處之を回顧指點して云へるなり、「副墨」に曰く何謂無適、即因是之說是已、蓋因是則自不生意見、不立人我、不起分別、然後謂之未嘗有言（上文に見ゆ）謂之鷇音（同上）、謂之天均天籟（同上）、此處又將因是再結一結、看他回顧題目と、

夫道未始有封、言未始有常、爲是而有畛也、請言其略、有左有右、有論有議、有分有辯、有競有

り、褚伯秀曰く凡天下之論大莫過乎太山、壽莫過乎彭祖、此以形論不能無限、若以虚空性體觀之、大山直細物、彭祖直嬰孩耳、秋毫雖細、而有形之初同具此理、何嘗無至大者存、殤子雖幻、而有生之初、同稟此性、何嘗無上壽者寓と、尙下句の解を看よ、〔天地與我ー與我爲一〕我とはたゞ汎く人類を謂ふ、竝生とは相竝びて斯の宇宙間に生れて壽夭の別ち無きことなり、萬物とは鳥獸艸木凡そ有らゆる物を謂ふ、爲とは同じく一類となりて大小の分ち無きことなり、褚伯秀曰く天地特形之大、萬物特形之衆、原其所自來、蓋未嘗不一也、故翻覆互言、以破世人執着之見、以開物理造極之理と、此の説に依るときは、本句は即ち上の大小壽夭の四句を承けて、尙同一なる意の例を特に形の大なる者と衆なる者に就いて擧げ大小壽夭の別は全く有形の後に生じたる者なることを示したるなり、焦竑曰く蓋大小壽夭、皆夫人意見所立之名、一受其名、便有封畛、不可通而爲一、若論同自太虚中出來、則天地與我竝生、萬物與我一體混合爲一、曾何大小夭壽之可言哉と、此の説に依るときは、彼の形ちに就いて大小を言ひ、命に就いて壽夭を論ずるが如きは、畢竟有形の迹に囚はれたる見にして、無形の太虚の前に就いて云へば、天地萬物共に我れ(人類)と同く、一理にして象徴の區別すべきなければ、固より大小夭壽の差別有るべき筈なきことを云へるなり、兩説亦倶に參すべし、〔既已爲一矣〕既已共に「スデニ」と訓じ、事のすでに終ることなれども、已は「字彙」に止也、畢也とあり、未に對する詞なり、既は已事の辭とありて、其の事を經過せし後より云へるなり、月の十五日を望と云へるに對して、翌十六日を既望と云へるが如きにて、其の義を悟るべし、此の處は爲一の二字は即ち上文の萬物與我爲一とあるを、語を省略して云へることを示さんが爲めに、既已の二字を上に置き、矣の字を下に置きたるなり、乃ち本句の大意は最早や上文に説きたるが如く、萬物與我爲一と決定して疑ひ無しとすればと云へる義なり、〔且得無言乎〕且は將と同じ、擬度の辭なり、「集解」に何所容其言とあり、乃ち既に已に天地萬物は我と一にして何れも本源は虚無とすればこそ與我爲一にして、何等の差別なきものなるに、今更事新しく之を一なりと謂ふときは、是れ既に餘計な

論を以て、他人に向うて之を說くときは更に又一つの言を增して、本來の眞の一たる妙理と共に三となるなり、三よりして以上此の有樣に推し行くときは、其の數次第次第に增加して際限なく、如何なる算歷に巧みなる人と雖も其の數を紀し得ること能はず、而かも況や平々凡々たる常人に於てをや、到底數へ切れざることとなり、されば元來無と云ふことよりして有と云ふことを引き起し、夫れより之を形容して一と云ふことを呼び起してすら右の如く、一が二となり又三となれり、乃ち已むことを得ずして言へるも、一たび發すれば多くなるが、言語の有勝ちなるに況して最初よりして言語卽ち議論を本として之を言はんか、爲めに議論をなすに於ては枝葉相生じ、辯論の益々多煩にして際限なきに至ることは實に分り切りたることとなり、

【解義】〔秋毫之末〕毫は鋭りたる毛なり、秋時、獸、毫毛を生ず、其末至て細鋭なるを以て、故に極微なる物の代表的として用ひたり、〔大山爲小〕大は太と同じ、一に泰に作る、泰山は今の山東省に在る高山にして、古代支那五嶽の一なり、本書の秋水篇に因其

所大而大之、則萬物莫不大、因其所小而小之、則萬物莫不小、知天地之爲稊米也、知毫末之爲丘也と云へり、乃ち凡そ物は見る者の見方によりて如何なる大物も小物となり、亦如何なる小物も大物となることを云へるなり、此の處亦之と同じ、〔莫壽於殤子〕殤子は未だ成人に至らずして死する者を殤子と謂ふ、「禮記」の喪服傳篇には十六(歲)至十九(歲)爲長殤、十二至十五爲中殤、八歲至十一歲爲下殤、七歲以下爲無服之殤、生未三月不爲殤とあり、此に由れば殤子とは短命者のことなれども、亦生後三月上の生命を保ちし者なり、〔彭祖爲夭〕彭祖は旣に逍遙遊篇に解したり、夭は早く死することなり、天下莫大於秋毫より以下物の大小、命の壽夭を故らに顚倒して至小を至大と爲し、至大を至小と爲し、至夭を至壽と爲し、至壽を至夭と爲せるは、奇矯の辭に似たれども、亦却て至理の論を爲し、天地萬物の未だ形ちとして見はれざる初めに就いて觀るときは、全く虛無にして、何等分ちて言ふべき物あるなきことを言ひ、以て徒らに目前に橫はれる形迹の末に囚はれて、物論の異同を鬪はすことの謬れるを云へるな

議論を爲すことなるが、見よ此の世界中にて秋毫の末とて秋頃の動物の毛の新たに生じて、末の細き者程其の大なるものは有るなし、而して彼の世に名高き高大なる泰山程小なる者の有ることなし、何んとなれば大道の根本上より觀るときは、萬物は虛無より出で、復虛無に歸るものにて、秋毫も矢張り其の原則に漏れずして一致することなれば、秋毫其物は宇宙間に充滿して、世界中此より大なるもの有ることなし、而して彼の泰山は有形上に就いて云へば、大虛中に存在せる眇たる一拳石のみ、是れ極めて小なる者と爲す、又此の世界中にて殤子とて年若くして死する子供は、至りて壽命の短きに似て、彼の八百歲の齡を以て聞えたる彭祖は至りて長壽者なるが、其の實、道の根本上より觀るときは、殤子は短命なれども虛無の始めに早く歸りたる者にして、虛無は無限の年數に亘りて變ずることなければ、是れ世界中の長壽は殤子より長壽なること有るなし、而して虛無の無限に較ぶれば、彭祖は僅かに言ふにも足らざる區々たる年壽を保つに過ぎざることにて、至て夭死と爲すなり、是の如く觀察するときは、此の世界中に何の大小かあらん、何の壽夭かあらん、則ち天地のもと我々と同根たり、萬物の一體たること知るべくして、又何ぞ是非を挾みて議論を弄ぶことかあらん、元來天地は廣大にして悠久なれども眇たる吾人と與に此の宇宙間に並び生ずるものにして、既に生あるときは勿論矢張り其の始めもあり、終りもある者なり、而して萬物は形狀態色に種々の區別あれども、吾人亦萬物中の一物たれば、其の源本に溯り末を考ふれば、矢張り悉く一に歸するなり、夫れ是の如く既に已に言ふ迄もなく、萬物は我と一たり、然るに此の萬物は一たりと言ふこと必要とする譯ありとするか、卽ち言はずとも分り切りたることなれば、之を言ふが既に餘計の議論ならずや、去りとて今や此の萬物は我と一なることを謂はざるときは、世に其の道理を理解すること難し、既に已に萬物は我と一たりと說き示すときは既に其の一と云へる稱謂が、直ちに亦一つの言となれば、將に言ふこと無しと爲すを得んや、無形上より觀るときは、本來萬物と我と一たると云へる一と其の一たることを稱せる我が言語とにて既已に二つとなれり、而して此の既已に二となりし議

の本たることを言へるなり、老子に道を説いて曰く道可道、非常道、名可名、非常名、無名天地之始、有名萬物之母、故常無欲(情意)以觀其妙、常有欲以觀其徼(歸着)、此兩者同出異名、同謂謂之玄、玄之又玄、衆妙之門と、今按ずるに莊子の意亦此と同じ、老子の文義其の説長きに渉れば解釋を省く、宜く其の本書の注解に就いて參考すべし、〔今我則已有謂矣〕有謂とは前文の如く顯かに爲是不用而寓諸庸、謂之明と言ひ放したることを云へるなり、〔而未知吾所謂云々〕元來道の虛無なるを論ずるに當りて、既に前文に人の言あるも道理に合ひたる言を出だすときは、言はざると同じきことを論じて、夫言非吹也、言者有言、其所言者特未定也、果有言邪其未嘗有言邪其以爲異於鷇音、亦有辨乎其無辨乎と云へり、乃ち鳥の子の囀づる音が無意味なるが如く、人の言語も何等執着なく、野心なきときは、亦一種の天籟たるを言へることとなるが、今此の本文は此の老子の言と同じく、莊子自身が虛無の眞理を明示せんが爲めに、斯の如く言ひ出だすことは、世の物論の競爭を靜めんとしての事なれば、其の言の有るは猶彼の言無きと同じかるべきことを斷りたるなり、

天下莫大於秋毫之末、而大山爲小、莫壽於殤子、而彭祖爲夭、天地與我並生、而萬物與我爲一、既已爲一矣、且得有言乎、既已謂之一矣、且得無言乎、一與言爲二、二與一爲三、自此以往、巧暦不能得、而況其凡乎、故自無適有、以至于三、而況自有適有乎、無適焉、因是已、

【大意】　此れ大道の大本は天地と同根、萬物と一體なることを悟り、彼我の分別を起さざるときは、是も無く非も無し、是れ乃ち眞の是なることを云へり、

【通釋】　一體世の人は形體の見解に囚はるゝが故に形ちの大小又は命の壽夭などを分ちて、彼れ此れと

物何によらず、皆終始あるを云ひ、有未始有始也者とは乃其の實は事物に始もなく終もなく、隨うて人に於ても生も死も亦同一なれば、今たとひ生れたりとて喜ぶべきにあらず、死したりとて悲むべきにあらずと、覺悟を要すべきことを云ひ、有未始有夫未始有始也者とは猶進んで云へば、彼の勉強して死生の覺悟を要するは、未だ作意的工夫を費すを免れざる者なれば、自然に打ち任かして置くの更に優なるに如かずと解釋したるなり、陳碧虛は曰く有始謂道生一、未始有始混同太無、未始有夫未始有始、視聽不及、虛之虛者也、此三者敍道未始有氣と、今予が本文の講は此の意を用ひて解したり、〔有有者〕此の句より有未始有夫未始有無也に至るまでを郭象は注して曰く、有有則美惡是非具也、此れ現有の事物を直ちに其儘、實有と見做すときは、物の美惡、事の是非、各皆具在して甲論乙駁は隨て免れざることを謂ふ、又曰く有無而未知無無也、則是非好惡猶未離懷と、此れ物は皆虛無たることを知れども猶虛無てふ念慮あり、未だ虛無てふ念慮を打ち忘るゝことを知らず、乃ち矢張り胸に是非好惡の念の離れざることを云へるなり、又曰く知無無矣、而猶未能無知と、此れ本文の有未始有無也者の句を釋して、全く念慮が虛無になりて、是非好惡の念を絶つを知れども、猶作意的工夫を用ひて之を爲すを免れざることを云へるなり、又有未始有夫未始有無也者の句を釋して曰く、此都忘其知也と、乃ち此に至りては物の虛無たると實有たるとの如きは總て之を打ち忘れて、眞の自然の原理に叶へりと釋したるなり、陳碧虛は曰く有有謂物形獨化塊然自有、有無謂物形未兆怕然虛寂、未始有無、謂形兆之先、沈默空同、至無者也、未始有夫未始有無、謂冥寂虛廓搏之不得、無之無也、此四者敍道未始有形と、今予が本講は此意を用ひ釋したり、〔俄而有無—矣孰有孰無也〕林西仲曰く若忽從無無之中說個有無、便從空落影、已不是無了、則未知此有無果孰爲有乎、孰爲無乎、有無本無處安着也と、此れ道もと氣もなく形ちも無くして、何等形容すべき辭なき者なるに、俄然として物の有無を論ずるは果して其の有たるものなるか、無たるものなるか、容易に判斷することを苦しむとの義にて、其の實道は虛無なるが故に、萬物

なり、乃ち神聖なる道の奥意は仲々容易に知るべきにあらず、又今我は本と道は虚無なることを唱へながら、今此の齊物論を作るときは、是れ既に齊物論と云ふ一つの議論が世に殘りて我が主義とせる虚無の道より云へば、又天地間に餘計なる者を増して、我は全く主義上の自殺を爲すものに似たるが、是れ實に已むを得ざるより出でたる者なり、然しながら吾れ自身と雖も、世人が吾れの言を觀て吾れの唱ふる所の齊物論が、其の果して世に餘計なる一議論を増すことが有るか、抑も然らずして其の果して餘計なる議論を増すこと無しとするかは未だ之を知らざるなり、卽ち吾の此の論を唱ふるは、もと唱ふるを欲せざれども、苟も之を唱へざれば、世人の是非を爭へる議論が益々盛にして、天下の衆人を疑惑せしむるを以て已むことを得ずして之を唱ふるものなれば、議者は必らず吾が心を諒するならん、

【解義】〔雖然嘗言之〕雖然は上を承けて一轉する辭なり、言之の言は前節に今且有言於此とある言の字を顧みて下したる字なり、言ふこゝろは、今や言を出だすときは上文に則與彼無以異矣と云へるが如く、世の物論を齊しくせんとして、反りて一の物論を増加するの觀あれども、今は已むを得ざれば、試に之を言はんとなり、卽ち孟子が其の門人なる萬章の外人皆稱夫子好辯と云へるに答へて、吾豈好辯哉、吾不得已也とありしと、作者の苦心亦同一なりしことを想見すべし、〔有始也者〕始は終に對して言へる辭にして、凡そ事物其の終り無ければ始めなし、故に有始と云へば兼ねて其の終り有ることを示したるにて、乃ち事物は終始あることを云へるなり、有始とは凡そ萬物皆最初よりして現在の如く發達したるには非ずして、必らず其の始めて出でしときは極めて微細なることを謂へるなり、〔有未始有始也者〕未始とは未嘗と云ふが如し、〔有未始有夫未始有始也者〕夫は彼なり、按ずるに上句の有始也者より本句に至るまで諸說頗る衆し、「郭注」は曰く有始也者言必有終、有未始有始也者、無終始而一、死生有未始有夫未始有始也者、言一之者未若不一而自齊と、此れ「郭注」の意はもと始とは終に對して云へる辭なれば、既に有始と云へば其有終と云ふことは自ら含みたる語なるを以て、莊子の意は天地の事

に我が意見の言と爲りて出でたる上は、矢張り世の物論たることを免れざるは既に前に云へるが如し、去りとて言と爲りて出でざらんには、物の道理は別つべからざれば、請ふ試みに之を言葉に陳べて、其の可否を問はん、全體天地萬物必らず本から今日の如きにあらず、其の始めと云ふ者ありしなり、尙ほ一層溯るときは彼の天地萬物の始めと云へる者からして未だ始めよりして有らずと云ふ者ありしなり、更に一層溯るときは斯く云へる彼の未だ始めよりして有らずと云ふ者からして、又未だ始めよりして有らずと云ふ者ありしなり、乃ち段々に推し詰めて行くときは、天地萬物の始めは今日の天地萬物の如き情態にはあらずして、渺然たる一物なるが其の又始めは太氣渾圓として、渺たる一物すら有らず、其の又復始めは大氣の渾圓すら見えず、聞えずして、虛の又虛なる者なり、扨て以上は世の多くの者に於ては、彼の天地萬物は皆氣を以て生ずるものなりと云へども、大道の根原より觀れば、其の謂はゆる氣すら全く虛無なることを云へる者なるが、又更に一面形象の上に就いて云はんに、天地萬物現に目前に見はれて有りと云ふ者あり、亦目前に現はれ有る天地萬物は全く一時的幻影にして、定まりたる實蹟は無しと云ふ者あり、一層溯りて其の謂はゆる無しと云ふからして、未だ始めからして有らずと云ふ者あり、更に一層溯るときは、其の未だ始めからして有らずと云ふ者からして又未だ始めからして有らずと云ふ者あり乃ち段々と推し詰め行くときは、乃ち天地萬物の始めて生ずるや、單獨にして僅かに其の形ち有るに過ぎざりしが、尙ほ其の以前は何等かの動機は萠しつゝあれども、未だ是れぞと確としたる物は見はれず、虛しく寂かにして聲もなく形ちもなかりしが、又復其の以前は動機の萠しをもなく全く沈默にして、渾然たる空しき者なり、而して更に又復以前は奥暗く靜まり返りて廣く際限なければ、如何に之を探かすとも手掛りなく、卽ち無の又無なる者なり、此の如く道と云ふ者は形ちも氣も無くして、何共言語文章を以て形容し得ざる者なり、然るに今俄かに或は物がああるとか、又は無しとか云へることを決定したりと爲せよ、其の時は果して有りとか無しとか云へる物が、果して何處に有るか、又何處に無きかを未だ知らざる

者流、惠子一輩を指して云ふ、乃ち本文の大意は類と不類と又相與に類を爲すときは虛無にして、是非俱に無きことを說きながら、反りて之を說きしが爲めに、是非の爭益々多くして終に彼の詭辯者の論と異なることと無しとなり、是將に下節の雖然請嘗言之の一段を轉起せんが爲めに、姑く此の言を爲せるのみ、「郭注」は曰く、謂之類則我以無爲是、彼以無爲非、斯不類矣、此雖是非不同、亦未免於有是非、則與彼類矣、故類與不類相與爲類、與彼無異也、將大不類、莫若無心、既遣其非、又遣其遣、遣之又遣、是非去矣と、此れ我は虛無を是認し、彼は虛無を否認し互に是非する所相類せざれども、其の是非てふ者あるに至りては、彼我俱に均くし、相類して我終に彼と異なるなし、故に苟も我れ超越して彼と類せず、卽ち我れ彼に對して、相對的たらずして絕對的たらんと欲せんには必らず無心となりて、是もなく非も無きの地位に至らざるべからずと解したるなり、

雖然請嘗言之、有始也者、有未始有始也者、有未始有始也者有未始有夫未始有始也者、有有也者、有無也者、有未始有無也者、有未始有夫未始有無也者、俄而有無矣、而未知有無之果孰有孰無也、今我則已有謂矣、而未知吾之所謂之其果有謂乎、其果無謂乎、

【大意】　莊子己が虛無因是の論を發するは、乃ち大道の本原を明かにせんが爲めに已むを得ざるに出づることとなれば、言論ありと雖も、終に言論なきと同一に歸することを言へり、憨山曰く前釋言非有吹也、蓋有機心者之言也、今已說至忘言玄同之處、則雖有言乃從眞宰而發、無言之言也、若會無言之言、則忘言而歸一致矣、故下文重釋忘言歸一、大小玄同了無是非、如是乃眞是也と、

【通釋】　今無を論ずると有を論ずるとに關せず、既

文を喚起せしなり、憨山曰く、此結上聖人、欲人自悟而忘己是也、下文乃莊子持論、本無是非之大同、發明大道之原也、

【通釋】 元來虛無の根本義より云へば、言語動作皆一時の幻影たるに過ぎず、されば聖人の道庸に寓すと云へるが如きも、既に餘計なる言ならずや、然るに今此に右の如く說き來り、說き去ることは、是れもと虛無の道を示さんとして、反りて虛無の道に畔くに似たり、卽ち吾が言ふことが果して是の聖人不用寓庸の道と類するか、抑も是と類せざるか、類すと云へば、類することあり、類せずと云へば、類せざることあり、要するに類的方面より見れば是と類し、不類的方面より觀るときは是と類せず、卽ち類は類に固まり、不類は不類に固まり、各〻分立して一類を爲せりされば吾人が常に彼てふ名稱を以て疏外視する世の種々なる物論と竟に異なることなく、卽ち元と事物の是非無きことを言はんとして、反りて其の言を出たしたるが爲めに、又之に對して是非の一議論生ずる結果となるなり、

【解義】 〔今且有言於此〕且は將なり「說莊」に云く作一轉、蓋既已有言、便有是非、其與凡有言者相去幾何と、「通義」に云く、前云言非吹也、到此換頭、又唱起今且有言於此、是前後血脉と、〔不知其與是類乎〕不知とは作者假想して云へる辭なり、其は上句の有言の言を指すなり、是は此なり、卽ち上文に聖人の道として述べたる爲是不用寓諸庸の義を指す、卽ち是非の見を立て滑疑の耀を爲さざることを云ふ類とは徒輩相似之類と「成疏」に見えたり、卽ち同じ仲間と云ふ義なり、本文の意は吾(莊周)が此に是の議論を爲して齊物論のことを說くは、知らず果して是の聖人の道と類して、虛無因是の宗旨に叶へるか否かと云へるなり、〔與是不類乎〕上句と本句と二路に分ちて兩敲して說くは是れ莊子の慣手段已に多く前文に見えたり、〔相與爲類云々〕聖人と類すると見るときは卽ち類せり、聖人と類せずと見るときは卽ち聖人に類せざるが如く、見方によりて各々同類は同類と爲り、不類は不類と爲ることを謂ふ、〔則與彼無以異矣〕彼とは既に前文に解せしが如く、自己に親近なる者を是と云へるに對して、一方を疏外したる辭なり、卽ち此にては上文に擧げし世の詭辯

人、下又獨擧文之子、而意又總昭文及師曠惠子、故爲參差不齊、以弄筆也と、〔雖我亦成也〕我とは上に擧ぐる三子に對し衆人を汎く指して云へるなり、乃ち世に若し三子の如き不完全的仕事を以て成れりと爲すときは、如何なる人と雖も、亦之を成就したりと云ふとも不可なし、何となれば其の程度には相違あれども不完全的を以て成就したりと爲す點に於ては一なればなり、本義に曰く凡有所事、事不論當否、卽謂之成、雖我亦成也、此莊子自肯低頭、消人盛氣と、〔物與我無成也〕物とは萬物にて卽ち三子を其の中に該括して云へるなり、大意は三子の如き專門的妙事すら、尙且つ不完全的にして成就せざるものと做すときは、天下に於て何に事をも一として成就する者なかるべし、何んとなれば是又程度の相違はあれど、悉皆完全にして缺點なき物は世に非ればなり、〔滑疑之耀〕此れ兩說あり、一は曰く滑疑とは滑亂疑似の義にして、耀とは炫耀する意なり、乃ち前文に擧ぐる昭文師曠惠子の爲の如き成に似て成にあらざる者是れなりと、一は曰く滑亂疑惑の中に在りながら光明の出づることにして、老子の謂はゆる和光同塵と同意なりと、〔聖人之所圖〕是亦兩說あり、一は曰く圖とは除き去ることを圖ることにて、乃ち滑亂疑似にして衆人を炫惑することは聖人は惡みて除き去らんと圖ることとなりと、一は曰く圖は志欲なり、滑亂疑惑の中に在りながら、光明の出づること、卽ち衆人中に居て圭角なく、圓滿に正しき道を守ることは、聖人の志し欲する所なり、以上の兩說郭象、呂惠卿、林疑獨、陳詳道、陳碧虛は大略前說に同じく、趙虛齋、林希逸、林西仲は後說に同じ、兩說各々理あれども、予は前說を用ふ、〔此之謂以明〕上文の三子の如く、非所明而明之とあるに反して、自然の道理に順ひ、彼我是非の分界を立てざるこそ眞の以明と云ふべしとなり、

今且有言於此、不知其與是類乎、其與是不類乎、類與不類、相與爲類、則與彼無以異矣、

【大意】上文を承けて聖人の道と已が齊物論を唱へて是非を均くする意と、同不同の如何を言ひ、以て下

文の昭氏之不鼓琴也の意を承けたる語と知るべしと云へり、〔幾乎皆其盛者也〕幾は近也、幾乎皆其盛者とは三子鼓琴枝策據梧のことが、何れも打ち揃ふたる其の道の最優者と申すべきに近きことを謂ふ、〔故載之末年〕載とは記載なり、末年とは後年なり、之を記載して後世に傳ふるを謂ふ、〔唯其好之以異於彼其好之也欲以明之彼〕此より故以堅白之昧終に至るまでは、專ら上文の惠子の據梧を承けて、其の辯論を弄する上に就いて云へるなり、唯其好之とは辯論を好むことなり、彼とは衆人を指して言ふ、乃ち惠子は自己が好める辯論を他の衆人は好まざるを以て之を他の衆人に曉とし明さんと欲することを謂へるなり、或は唯其好之、以異乎彼と讀みて八字を以て一句とするは非なり、〔非所明而明之〕非所明とは衆人の必しも明かにする所に非るを云ふ、而明之とは己强ひて衆人と共に之を明かせんと欲するを云ふ、〔故以堅白之昧終〕昧は暗昧にして不明なるなり、堅白は堅白同異之辯を謂ふ、當時一種の詭辯に屬す、成疏に公孫龍著守白論、堅持其說而守之、如墨子墨守之義、故曰堅白、龍之辯、蓋將合異以爲同、故曰同異、とあり、是に由れば堅白とは白色に就ての議論を堅く守る義と解せしなり、又莊子の外篇秋水篇にも公孫龍が合同異離堅白の語を載せたり、而して惠子が堅白の說に關しては、莊子の天下篇に惠施曉辨者、天下之辨者相與樂之、狗非犬黃馬驪牛三、白狗黑とあり、共に各篇に就いて其の解義を參考し、以て之を知るべし、要するに謂はゆる墨守の義とは自から同じからず、〔其子又以文之綸終〕其子とは昭文の子なり、綸は緒なり、緒は業なり、緒業は遺業のことにして終とは父の始めし業を終へ成さんとしたるなり、終父之緒とは「中庸」に纘太王王季文王之緒と云ふが如く、乃ち昭文の子が父の遺業たる彈琴の技を謂ふ、一說に綸は琴瑟の絃を指すとあり、〔終身無成〕無成とは父の緒業を成せしも、竟に一の技藝たるに過ぎざれば道を去ること仍ほ遠きを謂ふと、王先謙は云へり、然れども昭文の子が琴を以て有名なりしことを聞かざれば、矢張り上句の終の字を將來を豫期する辭と爲して此處は終身成ること無かりしと解するを優れりと爲す、岡松甕谷曰く、堅白惠子之事、獨擧堅白、意實總諸子百家而言、又不擧其

聖人は彼の之を用ひずして庸常の上に寓せて好んで衆人と異なることを爲さゞるなり、さて此の如き者が吾れ曩に上文に於て莫若以明と云へる者なり、

【解義】〔有成與虧〕此れ前段の末に果且有成與虧乎哉とある語を承けて云へるなり、〔故昭氏之鼓琴也〕故は古なりと云ひ又固と同じと云へる說あれども非なり、「墨子」の「天志篇」に當若子之不事父、弟之不事兄、臣之不事君也、故天下之君子與（擧と同じ）謂之不祥とあり、「國策」の東周策に君必施於今之窮士必且爲大人者、故能得欲矣とあるが如き、卽ち其の證とすべし、又左傳の昭二十年に夫火烈、民望而畏之、故鮮死焉、水懦弱、民狎而翫之、則多死焉とあるが如きは、故と則と互文に用ひたり、以て兩字の相通じて用ふることを見るべし、昭氏は「成疏」に據れば、昭は姓にして名は文と曰ひ、古の善く琴を鼓せし人なり、或は曰く宋の人と、鼓は鳴なり、又「字書」に凡有所擊搏曰鼓とあり、此の句一說には事物の顚末に就いて云へば、成と不成とは判然同からず、昭氏の琴を鼓するに、曲を終へたると曲を終へざりしと、明白に分つべきが如くなるを謂ふとあり、〔昭氏之不鼓琴〕一說に曰く其の事と其の人との關繫より云へば、成虧共に損益あることなくして、成も無成と同じく、虧も無虧と同じ、宛かも昭氏の琴を鼓せざるは依然として昭氏なるが如しと云へる意なりと、〔師曠之枝策〕師曠は晉の平公の時の太師（樂官長）にして、曠とは其の名なり、此の人は音樂を以て著名なる人なりしこと、諸書に見ゆ、枝は柱なり、支と同じ「サヽフ」と訓ず、策は音調を節する策なり、枝策とは策に倚りて音樂を聽くことなり、乃ち太師は樂工の長なれば器を操りて樂を爲さず、唯だ策に倚りて音調を審かにするなりと、〔惠子之據梧〕惠子は卽ち惠施なり、既に前節に見ゆ、據は倚なり、梧は梧桐の材を以て造れる机なり、據梧とは梧机に倚りて高談することとなり、又一說に餘り詭辯を弄するが故に疲れて梧机に倚りて瞑目することを謂ふとあり、「集解」に德充篇にある莊子が惠子に謂へる、今子外乎子之神、勞乎子之精、倚樹而吟、據槁梧而瞑とあるを引きて、善く辯ずる者は辯ざる時あり、策を枝ふる者は擊たざる時あり、昭文之鼓琴と云へるも、上文の昭氏五鼓琴也とあるを承けて云へるも、亦兼ねて上

以て名を成せしが、其の子孫は昭文の如く善く琴を彈ずる能はざりしを以て、終に其の名譽を失墜したり、是れ一方に事を成せしと共に、一方に事を虧きたるなり、又昭文が初めより琴を彈かざりしときは固より昭氏の名譽を成す無きと共に名譽を虧くことも無かりしなり、是れ一方に事を成さゞりしと共に、一方に虧かざりしなり、尙又此の例を推し及ぼして云へば、昭文が琴を彈くこと、晉の名高き音樂家たる師曠と云ふ者が策（ムチ）を枝げ止めて、音樂の曲を聽き分（ワ）くると、惠子が机に倚りかゝりて高談すること、以上三人の智慧は何れも其の藝術は皆其の最も優秀なる者に近きなり、故に其の名譽は永年の後ちに歷史に載せ錄せられて遺（ノコ）りたり、然れども彼の惠子の如きは唯だ自身の深く好める議論が彼れ衆人一輩の好めることに異なれるを以て、乃ち如何にかして自身が好める議論を以て、彼れ衆人一輩に明らかに曉とし、以て自分と好みを同くせしめんと欲して、專ら努力したり、去れども惠子の議論の如きは、元來彼の衆人一輩が明かに曉る所にあらざることとなるを、我れ强ひて之を明らかにせんとする者なれば、徒に堅白同異の詭辯を弄するを以て終はり、其の外に何等の成功も無かりしなり、而して昭文の子又其の父昭文が家業を嗣ぎて頻りに彈琴に熱心なるも、此れ亦身を終はるまで卽ち一生涯昭文の如く名人たるを得ざりしなり、是の惠子や昭文父子の如き者にして、而かも尙ほ成功せりと謂ふべきか、凡そ世間の人々卽ち我輩が如きも皆成功したる者なり、卽ち世には何人と雖も多少の努力と自惚心とありて、爲めに熱心したることあれば、皆成功者と謂ふべきなり、亦是の三子の如くにして而かも成れりと謂ふ可からざるか、凡そ世間の人々卽ち我が輩と雖も皆成功せざる者なり、卽ち如何に努力熱心なるも完全なる結果は人として收め得べきにあらざれば、何人も皆不成功者たるを免れざるべきなり、然れば成ると成らざると卽ち成と虧と云へるが如き、其の實何れとも解決し難くして、而して其の實は唯だ人が物事の過ぎ去りし迹方に就いて云へることにして、道の本體は依然として何等影響の有る無きなり、是の故に滑疑の耀とて、滑亂にして疑はしき光り、卽ち曖昧然たる彼の三子の所爲の如きは、聖人の務めて除き去ることを圖る所なり、

即ち成れりと云はゞ成りたるに相違なきも、毀れたりと云ふときは、亦毀れたるに相違なく、差引き成も無く、毀もなく、而して虚無の大本即ち眞の道は依然として爲めに何等の變易損益する無きことを云ひ、以て其の彼れ此れと無用の骨折りしことが、彼の勞神明爲一の徒にして、朝三暮四の類たるに過ぎざるなりとの意味を暗示したるなり、

有成與毀、故昭氏之鼓琴也、無成與虧、故昭氏之不鼓琴也、昭氏之鼓琴也、師曠之枝策也、惠子之據梧也、三子之知、幾乎皆其盛者也、故載之末年、唯其好之也、以異於彼、其好之也、欲以明之彼、非所明而明之、故以堅白之昧終、而其子又以文之綸終、終身無成、若是而可謂成乎、雖我亦成也、若是而不可謂成乎、物與我無成也、是故滑疑之耀、聖人之所圖也、爲是不用而寓諸庸、此之謂以明、

【大意】　先づ昭文師曠惠子の三子の事を引證として事物の成毀は果して孰れとも斷定すべからざることを言ひ、又聖人が此等の道理を鑑みて、是非に偏せず謂はゆる亦因是已の主義を執ることを言ひ、結末に於て此之謂明の一句を下だし、以て前文の言非吹也より以來の意を一束したり、

【通釋】　前段に果且有成與虧乎哉とあるが、有成與虧とは一體如何なることかと云はんに、例へば昔し彈琴に有名なりし昭氏が琴を彈ずるが如き是れなり、無成與虧とは亦如何なることかと云はんに、昭氏が琴を彈ぜざるが如き是れなり、其の譯如何となれば、昭氏の家は昭文と云ふ者が琴を善く彈ずるを

き筈なり、

【解義】〔古之人〕特に古之人とあるは、古へは然りしも、後世の人は然らざることを意味して云へるなり、〔其知有所至矣〕知は智なり、至は至極なり、〔未始有物〕未とは未曾と云ふが如し、卽ち未だ是迄一回も有らずとの意なり、「郭注」に此忘天地遺萬物外不察乎宇宙内不覺其一身故能曠然無累與物俱往而無所不應とあり、乃ち天地萬物宇宙の事を打ち忘れ、自我てふ偏固なる考も無く、其の心の廣々として物に氣苦勞を爲さず、自然界の推し移るに伴て、善く變化し何に事にも差し支なく順ひ叶へることなり、〔有物矣而未始有封也〕封は疆界也、卽ち彼此の區別あることを謂ふ、此れ上句の如く一切萬有を空にして虛無の靈域に達する能はずして、定めて何に物かは此の天地萬物宇宙の根柢となり、樞軸となる者が有りと信ずれども、然れども未だ曾て一回も本は皆な同物にして、彼れの此れのと云ふが如き相分れて對することと有りとは考へ及ばざるなり、「郭注」に曰く雖未忘都忘猶能忘其彼我と卽ち是れなり、〔有封焉而未始有是非也〕「郭注」に曰く、雖未能忘彼此猶能忘彼我之是非也と、又上句及び本句の封の字一本に對に作る、對は對待なり、卽ち彼此の相互に對待するを謂ふ、但意義の結局は封に作るも亦同じ、胡大靈曰く、以上總知無我爲人心之正也、是以古之無我、反跌下文後之有我と、〔是非之彰也云々〕彰は彰著なり、虧は毀と相通ず、上文に成毀と曰ひ、此句以下に成虧と曰ふ、同義たり、乃ち是非の論はもと物に對して彼此の別を懷き、此を喜び彼を憎む觀念より起りて、全く私心の露出したるものなり、此の如くなるときは最早や自然たる虛冲なる眞の道は、打ち毀たれ、愛憎の念益々發達して、道亦隨うて益々破壞するに至ることを謂へり、〔果且有成與毀乎哉〕果は決定したる辭なり、且は將と同じ、此れ結局道は虧けたりと雖も、一方に愛の成れることあるを言ふ、〔果且無成與虧乎哉〕此れ結局愛は成れりと雖も、一方に道の虧けたること有るを言ふ、上文に成毀のことを論じて、其分也成也、其成也毀也、凡物無成與毀、通爲一とあり、今本文此の意を繰り返して、彼の徒に事の迹方にのみ泥み、是非の議論を弄ぶとも、竟に一方が成ると共に、一方が毀れ、

焉而未始有是非也、是非之彰也、道之所以虧也、道之所以虧、愛之所以成、果且有成與毀乎哉、果且無成與毀乎哉、

【大意】古の絶世的人物の智は、大道の本來は虚無にして、玄同たることを知れる地位に到達せるが故に、本より事物に對して是非の觀念なかりしも、後世は漸く之を失ひたることを説けり、

【通釋】近來は其の跡絶えたるも、古の偉き人は其の心智は極地に至りたること有り、其れは何れの地點に至りけるかと云はんに、即ち偉き人の考へには、此の天地萬物凡そ有らゆる物を擧りて皆空にして、始めより何に物も有らず、一切虚無なりと爲す者有り、此の考へまで至るときは最早や至極したることなり、十分したることにて、此の上には加へ增すべからず、乃ち絶頂無對の地に達したる思想なり、降りて其の次きなる者は絶對的に何に物も無しと云ふことに考へは至らざれども、去りとて未だ始より嘗て封界即ち彼と此との區別を立つること有らず、即ち悉皆物事を忘ると云ふまでには至らざるも、亦强めて自他の別を執る如き頑固にはあらざるなり、又降りて其の次ぎは封界即ち彼と此との區別を立つること有れども、去りとて未だ始めより嘗て此を是とし彼を非とする意見を有たず、即ち彼此の區別と云ふ考へは持ち居れども、之に就いて一方を是とし、一方を非とする僻見は持たざるなり、然るに後世の人の如く彼の物事に對して一を是とし、一を非とすることが明々白々と外に彰はれて知れ渡るやうになりては自然の道即ち天然的大本は最早や虧け損して完全なる者にあらず、此の自然の道が虧け損じて從來渾圓として無我なりし心が一方に偏し動きて、愛惡の念玆に成就し、我が親しき者は厚く愛し、我が疎なる者は薄くし惡むこととなりて論爭益々喧く騒ぎて止まず、然しながら一體道と云ふ者は成就すると虧け損することと有る者にや、果して將た成就すると虧損することが無き者にや、全體道と云ふ者は自然とすれば自然は虚無なるが故に、成就することも無きと同時に、虧損することも無く、依然として變り無かるべ

「シバクリ」又は「トチノミ」と訓ず、「列子」の黄帝篇に宋有狙公者、愛狙、養之成羣、能解狙之意、亦得公之心、損其家口、充狙之欲、俄而匱焉、將限其食、恐衆狙之不馴於己也、先誑之曰、與若芧、朝三而暮四、足乎、衆狙皆起而怒、俄而曰、朝四而暮三、可乎、衆狙皆伏而喜、物之以能鄙相籠、皆猶此也、聖人以智籠羣愚、亦猶狙公之以智籠衆狙也、名實不虧、使其喜怒哉、とあり、莊子の本文蓋し此より引きたるなり、朝三暮四は司馬彪の説に依れば、朝は三升にして暮は四升なり、然れども分予として見れば箇數を以て計ると見るも可なり、〔名實未虧〕名は三と四との數なり、實は通じて七たる數なり、虧は缺損なり、乃ち但順序を移し易へたるのみにして、三四の名も七の實數も變りなきことを謂ふ、〔而喜怒爲用〕或は喜び、或は怒り、自から其の心の用ひ方が異なることを謂ふ、林希逸曰く此喩是非之名雖異、而其實則同と、〔亦因是也〕朝三暮四とは衆狙之を欲せず、朝四暮三は衆狙之を欲す、亦其の欲する所に因りて之を用ふ、故に亦因是也と云へり、此亦因是也の一語も亦上文の聖人不由而照之于天、亦因是也とあるに顧應せり、〔和之以是非〕和は調和なり、之とは上文の物を指して云ふ、乃ち物の是なる者は因りて是とし、非なる者は因て非とし、要するに平均にして偏頗なきに至ることを主旨と爲すなり、〔休乎天鈞〕鈞は均の借字、一の本に均に作る、天鈞とは自然均等の位地を謂ふ、卽ち凡そ物に是非あるは亦皆天よりして然らしむる者なれば、之を天均と云へるなり、本書の寓言篇に始卒若環、莫得其偏、是謂天均、天均者天倪也とあり、休は休息すること、〔是之謂兩行〕兩行は是と非と共に兩ながら並び行はるゝことにて、乃ち是も有り、非も有ると同時に、亦一方より觀れば是も無く非も無きことなり、王先謙曰く聖人知通是非、共休息於自然均平之地、物與我各得其所、是兩行也と、

古之人其知有所至矣、惡乎至、有以爲未始有物者、至矣盡矣、不可以加矣、其次以爲有物矣而未始有封也、其次以爲有封

くの猴は其の數少しとて皆怒りたり、因りて狙公は語を改めて曰く、然らば我は汝に與ふるに朝は四箇づゝ與へ、暮に三箇づゝ與へん十分ならんかと、之を聞きて多くの猴は皆其の數多きとて甚だ喜びたり、是れ朝は三箇にして暮は四箇たると、暮は四箇にして、朝は三箇たると、其の七箇と云へる數に於ては、並びに皆一にして、名も實も雙方ながら、並に未だ虧け損せずして、纔に多數を前きにし、小數を後にすれば、多くの猴は皆喜びたり、亦少きを前きにし、多きを後にすれば、怒りて自ら我が心地を騷がし用ふることを爲せり、此の狙公が斯く巧みに猿を操つることも、畢竟亦彼れ猴が自ら以て是とする所に因ればこそ、右の如く甘く籠絡し得るなり、然るに今世人は是の道理を悟らず、營々役々と精神を過勞して、徒に我意我見を以て、凡ての事物を一律に歸せんとするが、其の實は大本の道に於ては元より大に同くして、何にも彼等が無益の骨折を爲すに及ばざることを知らず、全く彼の多くの猴と智慧の異なること無きは豈に氣の毒千萬ならずや、是を以て道に達せる聖人は之を善く調和するに是非と云ふ者を以てし、卽ち善く是非を和らげ同くし、而して天鈞と申して、天然的均等の上に於て休み止むることと爲す、是れぞ正しく兩行と申して、卽ち是と云ふ者も行ふべく、非と云ふ者も行ふべき仕方なりけり、卽ち聖人は元來大道の根本より觀れば、萬事萬物皆共に虛無にして、固より此もなく彼もなく、亦隨うて是もなく非もなければ、因りて彼此是非の各方面何れより進むも退くも、皆もと同一たることを知るが故に、彼の多くの猴が朝三暮四の巧言に操や釣られて、喜怒を爲すが如き愚擧を爲さゞるなり、

【解義】〔勞神明而爲一〕神明は精神のことなり、爲一の爲は作爲なり、勞と云ひ、爲と云ふ、是れ乃ち區々の人智人巧を弄ぶ處にして、病根實に此に在り、〔謂之朝三〕朝三は下文に据るときは、宜く朝三暮四と云ふべき語を略して、單に朝三と云はれたり、此れ上文の方生方死之說也と云ふべきを略して方生之說也と云へると同一筆法たり、〔狙公賦芧〕狙は「サル」と訓す、獮猴なり、狙公は狙を飼ひ養へる人を謂ふ「サルマハシ」の類なり、賦は賦予なり、分ち與ふること、芧は或は曰く山栗なり、橡子なり、又榛子なり、

知其然」已而云々は本と宜く因レ是已而云々と再たび因レ是已の三字を下だして云ふべき處なるを略して云はれたるなり、本書の「養生篇」に以レ有レ涯而隨レ無レ涯殆已、已而爲レ知者殆已矣とある語法と同じ、蓋し此の語法は莊子の獨創にして、他の諸子書中に在りては多く見ざる辭なり、「不レ知二其然一」とは一つに亦因レ是已にして、其の何が故に是に因ることとなるかを知らず、卽ち我が區々たる私智を用ひて自然の妙用を疑ふことを爲さざるなり、〔謂之道〕此れ上文の可レ乎可、不レ可二乎不可一、道行レ之而成とあるに顧應して云へるなり、

勞二神明一爲レ一、而不レ知二其同一也、謂二之朝三一、何謂二朝三一、狙公賦レ茅曰、朝三而暮四、衆狙皆怒、曰、然則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未レ虧、而喜怒爲レ用、亦因レ是也、是以聖人和レ之以二是非一、而休二乎天鈞一、是之謂二兩行一、

【大意】此れ上文に示したる達者に反して、愚人は強ひて一にするを求むるが故に、反りて卒に能く一を得ざることを言ふ、

【通釋】大小美醜を始め、物の有樣は千狀萬態の別あれども、大道より觀れば、何等の區別あるなく、皆通じて一たること、上文の如くなれども、此處まで通達し得るは亦一躍して直ちに至るべきにあらず、然るに世の愚者は之を悟らずして、其の一にする道を求むることを惟一の務めと爲し、己が精神を疲らし勞して、凡ての物を一樣に爲さんことを求む、而かも其の實、大道は本來大に同くして、何にも左樣に己が精神思慮を勞して、諸物を一にするに及ばざることを知らざるなり、此の如き者を形容して朝三と申すことなり、朝三とは耳新しき語なるが、全體何をか朝三と申すことなるやと問はんに、答へて曰はん、昔し狙公と云へる翁あり、此の狙公が或る時に茅とて橡子を多くの猴に付與して曰ひけるに、扨て此の橡子を汝に與ふるに、朝は三箇宛與たへ、暮には四箇づゝ與へんと欲するが、其れにて十分ならんかと、然る處多

ふも、皆各々其の一方のみ觀たる論にして、根本に溯りて通觀すれば、一たり、是非の念も亦此と同じ、皆な偏見の弊なることを云へり、「唯達者知通一」通の上に復の字を加へて看るべし、此れ上文を承けて云へるなり、「爲是不用」是不用の三句は連讀すべし、或は爲是の二字を解して、爲是義故となすは非なり是は夫の字と同義として用ひたり、孟子の「公孫丑篇」に予豈若是小丈夫哉とあり、「滕文公篇」に爲其殺是童子而殺之とある、是の字も亦皆夫の字に用ひたり、古文に今夫の字を多く今是に作る者あり、要するに是を夫と同義に用ひたるは其例多し、不用とは自から己が私意を用ひざるなり、「而寓諸庸」寓は「ヤドル」と訓ず、暫く留まりて久からざるを寓と云ふ、庸は常なり、焦竑曰く庸即人之所常用、故曰庸也者用也、凡物不用則滯、滯則通、故曰用也者通也道至於通則得矣と、「庸者用也」既に爲是不用而寓諸庸と云うて一切己が意見を挾まず、自然の事に任ずる也と云ひながら、庸者用也と自から解說したるは、一見すれば矛盾に似たれども、面白きことなり、乃ち此れ謂はゆる無用の用なることを云へるなり、「用也者通也」通は塞の反對にして淹滯なくして流通すること、無用にして用あるとは能く何に事にも融通付きて差し礙はること無きを謂ふ、「通也者得也」得は自得なり、十分に暢び暢ひとして滿足することなく、上文の庸也者用也より本句に至るまで遞傳して其の意を解し、以て我意我見を主張せず、一切自然に聽くときは反りて我が自由の樂を享くることを得るを云へり、宜く前篇逍遙遊篇の莊子の惠子と問答の段を讀みて參考とすべし、「適得而幾已」適然の適にして、適得とは心に樂み自得することなり、幾は近なり、道に近きことを謂へるなり、又一說に適は至ると訓じ、自得の地に至るときは則ち幾しと云へり、孰れにても通ず、「因是已」焦竑曰く所以然者因是而已、爲是不用而寓諸庸即因是也と、上文に是以、聖人不由而照之於天、亦因是也とあり本文の語は乃ち之を顧みて云へるなり、上文の語末に也の字を用ひたるは、是れ指示して方さに定むるの辭、本文の語末に已の字を用ひたるは、是れ已定の義を局限したる辭にして、乃ち此れ限りにて此の外に何もなしと取り極めて云はれたるなり、「已而不

するなり、人も此の自得と云ふ位地に適き屆きて後ち始めて自然の道に近きなり、更に繰り返して申さば寓庸とは、謂はゆる是に因るのみ、此の外別に目的も手段もなきなり、是に因るのみにして其の何が故に然るかを知らず、卽ち何に事も上段に云へる眞君の成せる規模に從ひ、一向己が私智私見を加へず、唯だ自然に任かすことなり、之を名づけて人の當さに踐むべき道と謂ふ、

【解義】〔故爲是擧〕故は上を承けて下を起す辭、是は此と通用す、玄英曰く爲是義略擧數事と、乃ち此の四字は上文の義を證せんが爲めに、數事の例を擧げんと云へる義にして、下文の莛與楹厲與西施の句を管到せる辭なり、〔莛與楹〕司馬彪の說に依れば、莛は屋梁にして楹は屋柱なりとあれども、兪樾は「漢書」の東方朔傳に以莛撞鐘とあるを援きて曰く、莛は「說文」に莖とあれば、莛と楹は大小を以て言ふなりと、今其の說を用ふ、楹は大柱なり、〔厲與西施〕厲音は「賴」、癩病なり、西施は越王勾踐が吳王夫差に獻ぜし美女にして、夫差之に惑溺して遂に吳國を喪へり、〔恢恑憰怪〕成疏には恢は寬大之名、恑者奇變之稱、憰者矯詐之心、怪者妖異之物、夫縱橫美惡、物見所以萬殊、恢憰奇異世情用之爲顚倒とあり、是れ此の四字亦各特立の意義を有して、上の莛楹厲西施の語と相對する者と爲せり、岡松甕谷の說に依れば、恢は詼と同じ、恑は詭と同じ、憰は譎と同じ、恢恑譎怪とは之を怪みて驚駭することを謂へるなり、大小美惡の物が天地の間に立つは、自然の情にして、大道より觀るときは固より小を捨てゝ大のみを取り、惡を斥けて美のみを進む可からず、但人に於ては大小美惡の相距る甚だ遠きことを視るときは之を怪みて驚かざるなし、而して道は通じて一とす、故に道通爲一と曰へりと、此れ亦一說と爲すべし、〔其分也成也〕此れ以下は物の變化に就いて云ふ、郭注に夫物或此以爲散、而彼以爲成とあり、例へば木を伐りて器を爲くるが如し、器より云へば成るなり、木より云へば分るなり、〔其成也毀也〕「郭注」に我之所謂成、而彼或謂之毀とあり、仍ほ前例を以て云へば、器に在りては成たれども、木に在りては毀たり、〔復通爲一〕「郭注」に夫成毀者、生於自見而不見彼也、無成與毀、猶無是與毀也と、乃ち成と云ひ、毀と云

不用而寓諸庸、庸也者用也、用也者通也、通也者得也、適得而幾矣、因是已、已而不知其然、謂之道、

【大意】上文を承け、物の種々色々に分かるゝも、達人は大觀して同一となすことを言ふ、

【通釋】かるが故に是が爲めに證例として擧げんに先づ物の大小に就いて云へば、藁の莖を莛と申し、大なる柱を楹と申すことなるが、莛と楹とは形に於て甚しく大小の違あり、癩病人を厲と申し、呉王の愛妾に西施と申す美婦人ありたるが、此の二者は甚しく醜惡と美麗の相違あり、恢と申すは度量の寬大なることにして、恑と申すは心根の曲りたる偏屈物にして、憰と申すは心を矯め、詐り多き人にして、怪は奇怪なる物なるが、此の四者は亦夫れ夫れに相違ありて、同じからざる者なり、然るに此れは形ちの上に拘りて觀るが故に、左樣に相違あれども、苟も大道の根源に溯りて之を觀るときは、何れも自然界の產物にして、固より彼此の區別あることなし、卽ち皆相共通して同一たり、又物の變化上に就いて觀るときは、或る一物が此に散し分かるゝことあれば、亦彼に集り成ることあり、此に成立することあれば、亦彼に毀壞することあり、卽ち例へば山の木を伐りて家屋を作るに伐るは毀にして作るは成なるが如し、されば分成成毀の各反對的觀察も、此れ亦一方のみを觀て一方を知らざるよりして起るなり、凡そ物と云ふ者には初めより成もなく、毀もなくして、其の大本は復た通じて一たるなり、唯だ道理に通達したる君子は能く右の如く大本は通じて同一たることを知れり、されば是不用とて此の我が輩の平生持論の如く區々たる人の心智を用ひざることを爲し、卽ち彼の忌むべき我意我見なる、謂はゆる成見を打ち棄てゝ、我が心智を庸と申す上に寓らして置くことなり、さて庸とは庸常と申して、一向平生の衆人に變はらざることなり、さるときは不用とは申せ、其の實は反りて用となるなり、用とは通なり、卽ち何れにも差し礙はりなく行はるゝことなり、通とは得なり、卽ち差し礙はりなく行はるゝ時は、何等の不愉快もなく、暢然として自得

とは此の如くに定まりたることなり、凡て萬物の名目は本來天然に固有せるにあらず、皆盡く人の命名に因りて始めて其の夫れ夫れの名目が定まりたるなり、王先謙曰く凡物稱之而名立、非先固有此名也と、〔惡乎然然於然云々〕惡乎は於何と云ふが如し已に前文に見ゆ、乃ち物は一體何れの點に據りて此の如く名つくるかと云はんに、既に前人が此の如く名づけ有りしに因りて、吾人も亦此の如く名づくるなり、亦何れの點に據りて此の如く名づけざるかと云はんに、既に前人が此の如く名づけざりしが故に、吾人も亦此の如く名づけざるなり、卽ち何れも共に別に深き考ありて然るにあらず、全く因襲的名稱に從へるのみと云へるなり、王先謙曰く何以謂之然、有然者卽從而皆然之、何以謂之不然、有不然者卽從而皆不然之、隨人爲是非也と、〔物固有所然云々〕凡そ物の出でし初めに於て云ふときは、例へば山を山と曰ひ、川を川と曰へるが如き、誠に山と名づけ川と名づくる譯がありしことは勿論なり、又其れが尤なる筋道ありしことも勿論なりとの意なり、〔物无不然云々〕物の起りたる後ちに就いて論ずるときは、既に山と名づけ、川と名づけたるが如きも、亦其の中には名實比較して不當の名も少からず、故に若し之が名稱を變易したればとて、誰か之を然りとせざらん、亦誰か之を可とせざらん、既に初めに於て然りとし、可としたれば、後ちに於ても亦然りとし、可とすべき次第なりとの意なり、按ずるに上文の惡乎然、然於然より以下本句に至る迄、本書の寓言篇（雜篇）に、有自也而可、有自也而不可、有自也而然、有自也而不然、惡乎然、然於然、惡乎不然、不然於不然、惡乎可、可於可、惡乎不可、不可於不可、物固有所然、物固有所可、無物不然、無物不可とあり、彼此の文較〻詳略の異同あれども以て互に參照すべし、

故爲是擧莛與楹、厲與西施、恢恑憰怪、道通爲一、其分也成也、其成也毀也、凡物無成與毀、復通爲一、唯達者知通爲一、爲是

らざる者を川と是認せざるかと云はんに、別に深き意味あるにあらず、昔し人々が山とし川として是認せざることを是認せざるのみ、然れども物の最初に就いて見れば、固より山を山と曰ひ、川を川と曰うて然ることあり、卽ち物の無名なる間は如何樣とも名の付け次第にて、同時に物固より可とする所あり、卽ち可否を取り定めざる前に於ては、如何とも理窟の付け次第にて、其れが終に可とも定まり、不可とも定まりたるなり、乃ち物の名目も事の可不可も先天的に定まり居るにあらず、皆後天的に人の作爲に出でたりとすれば、亦人の作爲を以て、之を變更して、例へば是迄の山を川と名け、川を山と名け、又是迄の可とせることを不可と爲し、不可なることを可と爲すとも、物として左樣ならざることはなし、又物として之を可とせざること無し、卽ち能く人の作爲に成れるものは亦能く人の作爲を以て、改易するを得るなり、故に要するに天地萬物は其の本源に就いて云へば、皆蕩く虛通にして彼此の別も無く、是非の辯も無きが眞理なり、

【解義】「可乎可不可乎不可」郭注に可ニ於己一者謂レ之可一、不レ可ニ於己一者卽謂ニ之不可一と乃ち凡そ物事に就いて可と云ひ、不可と云ふも、固より先天的定理の有るにあらず全く己に都合好き者を可とし、都合好からざる者を不可と爲せるに過ぎざることを云へるなり、「道行之而成」道とは、「宣注」に道路也と釋し、行レ之而成とは孟子所レ云用レ之而成レ路也、爲ニ下句一取レ譬、與ニ理道一無レ涉と釋したり、乃ち其の意は凡そ道路と云ふ者は初めよりして開けてあるにあらず、もと或る人々が之が通行するが便利なりとして、不斷に一定したる群衆往來の道路を成せりと云ひ、以て下句の物謂ニ之而然一とある意義を明らかにせんが爲めに、先づ譬喩的に擧げたりと爲せり、然れども此の道は可と不可との道、卽ち換言すれば道に可と不可とあるは、人が各々左樣に取り定めて成就したる義と解して可なり、宣氏以て譬喩と爲すは非なり、呂惠卿曰く物之可不可其孰自哉、道行ニ之而成、非レ無レ爲而成一也、物謂ニ之而然、非ニ本有而然一也、其所レ然所レ可乃不レ然不レ可之所ニ自起一、而求ニ其爲レ之者一不レ可レ得、則知ニ其(然可)本無レ有、此物之所ニ以齊一也と、此の說之を獲たり、「物謂之而然」謂とは命名することなり、然

者亦衆し、今參考として其の中の最も古き者を掲ぐること右の如し、

可乎可、不可乎不可、道行之而成、物謂之而然、惡乎然、然於然、惡乎不然、不然於不然、物固有所然、物固有所可、无物不然、无物不可、

【大意】萬事萬物の一たる所以を説きて、形迹上に就きて是非を云ふべからざることを示せり、

【通釋】天地萬物の中に在りて、天地萬物を觀察するときは、廣き天地や多き萬物が心に印象を與へて、此れが虛無とは如何にしても思へざるが、其れは前段の指を以て、非指に喩へ、馬を非馬に喩ふると同斷にして、乃ち其の形ちに囚はれて然りしなり、今一旦天地萬物を離れて、之を觀よ、凡そ人が物事に對して可とか不可と云へる意見に付ては、全體其の可と云ひ、不可と云ふことは、誰れの鑑定によりて左樣に定まりしか、天然的に左樣定まり居れるや、否左樣にはあらず、乃ち或は可となし、不可と爲せる道は、もと世の人々が己が勝手なる仕法に據りて、常に或る物を可とし或る物を不可と爲せるが習慣となりて、成就したるものにて、宛かも道路てふ者は別に最初より定まりてあるに非ず、全く二三の人々が往き來したる迹を多くの人が辿り行きて、遂に一定せる道路を成したると同じ、又多くの物に就いて例へば、大に高く峙てる土地を山と曰ひ、長く流るゝ水を川と曰へるが、種々の物に對し各々種々の名があることは、何にも初めよりして山なり、水なり、其の他に於て左樣なる名がありしにあらず、世の人々が自分勝手に之を名づけて、其の名となるなり、其の名は又何れの點に於て、即ち如何なる理由によりて、左樣なる名が付きしか、例へば何が故に大に高く峙てる土地を山と曰ひ、長く流るゝ水を川と曰へるかと云はんに、昔しより人が山と曰へるよりして山と曰ひ、川と曰へるよりして川と曰へるに過ぎず、又何れの點に於て、即ち如何なる理由によりて然らざることを然らずとなす、即ち山に非らざる者を山と是認せず、川に非

目的が白馬を求むるにあるときは寧ろ一の白色を取り、他の多くの馬を含つるなり、即ち此を是とし、彼を非とするなり、是れ我に一定の見あるにあらず、物と時とに因りて是非の變ずることあるは、宛かも聖人の亦因是也の義に似たるも、彼れは無我にして、此れは有我なれば其實大に異なり、而して此の如き徒は常に聖人因是の義に附會して云へる者多し、故に莊子は矢張り議論の標準を馬を取りながら、其の馬は馬に非らずと云はんよりは、初めより馬に非る主義を以て、其の馬は馬に非らずと云ふに如かず、即ち己が取る所形色に拘りながら、形色は問はずと云ふが如きは謬れり、而して彼の眞の彼此を忘れ、眞の是非を忘るるときは、天地の殊異と雖も、一指と同じく萬物の繁多と雖も、一馬と同じ、皆倶に一體同類たるに至ると解釋したるなり、此れ亦一説として看るべし、以上の諸解は皆公孫龍の指物白馬の論を參して解釋したる者なり　尚此の外に玄英は指手指也、馬戲籌（博戲の籌）也、喩比也、言人是非各執、彼我異情、故用己指比他指、即用他指爲非指、復將他指比汝指、汝指於他指、爲非指矣、指義既爾、馬亦如此、所以諸法之中獨奉指者、欲明近取諸身、切要無過於指、遠託諸物、勝負莫先於馬、故舉二事以況是非と云へり、此れ本文の以指喩指之非指云々とあるを解して、今人ありて自から我が指を以て、我が指に非る他人の指に比するときは、必らず我を是とし彼を非とするよりして、他人も亦己が指を以て汝の指に比して、己が指を是として汝の指を非となさん、然る時は畢竟水かけ論に歸して、是非の議論益々出でゝ紛々終局なけん、左樣なる愚論を爲さんよりは、寧ろ如かず初めより我の指に非る他人の指を以て、他人の指に比して我は傍よりして其の指の非なることを喩さんにはと、是れ乃ち物を論ずるに、己の私意私見を其の間に挾まずして、一に他の是とする所に因るの道なり、又以馬喩馬之非馬云々の句も同上の意味を以て解し、馬の字を釋して博戲の賽となし、勝負を決するも、我自ら己の賽を是とせずして、他人の賽に依りて之が是非を説明すれば、公平無私にして爭ひ無きことを云ひ、以て聖人の亦是に因りて自から是非を爲さゞる意を反復せしなりと解釋したるなり、林希逸以下諸家の說之と大同小異なる

の大本に溯りて見ざれば、其の同一たることを解する能はず、而して吾人と天地萬物の關繋も之と同じく、形迹上より觀るときは卽ち天地も吾人と共に宇宙間に存在せる有形體たるに過ぎず、萬物も吾人と共に宇宙間に存在せる員數中の物たり、故に彼此の利害を異にせるより起る所の是非の論は到底際限なく、又眞の是非の言にあらざることを云へるなり、陳碧虛は曰く指者指斥是非也、凡人之情、皆以此爲是、指彼爲非、彼不知非、又指此爲未是、別執此指爲是而謂彼指爲非若天下無有相指者、則物自爲物、不爲人强物、指自爲指不矜此妄指、物不爲人强物則忘物、指不矜此妄指則非指矣、且不指物之指、元無彼此是非爲指物之指、强生彼此、是爲非指也、馬固有形色、捨色命名、蓋言馬耳、言馬則天下之馬一馬也白黑不與焉、今求色命馬、故曰白馬、求白馬則黃黑之馬去矣、是因求色而失其形、求色失形、則白馬非馬也、若乃時之尙白、則以白爲是、以馬爲非斯則以非爲是、以是爲非也、夫懷是非之心而不能齊者、指物有彼此忘彼此則雖天地之殊、猶一指也分種類之多而不能一者、形色有去取脫去取則雖萬物之繁、猶一馬也と、此れ其の大意を概釋すれば凡そ人互に己が意見を執りて我を是として人を非とし、人も亦我に對して同じく然るよりして眞理は沒却せられて見はれず、物論益々起りて齊きを得ず、今若し己が意見を撤去して自然に任ずるときは、各々其の本性眞價は見はれて是非の論は定まるなり、此の如き者は縱ひ已むを得ずして是非を爲すとも、前文に云はゆる鷇音と同じく、亦自然的に屬して故意的に落ちず、卽ち指斥を爲すとも指斥に非らずと爲す、去れども今天下の意見を執る者誰か我は指斥を爲すを好むと謂ふ者あらん、皆指斥を好むにはあらず、實に已むを得ざるなりとなせり、故に莊子は指斥を爲して其の指斥が指斥に非ざると云はんよりは、初めより指斥に非らざるを爲して、已むを得ずして指斥を爲すは指斥にあらずと云ふに如かずと曰ひ、又馬は種々なる形ち色の不同あるが、今單純に馬と呼べば、有らゆる馬を總稱すべきも、或は白馬とか、黃馬とか限りて呼ぶときは其の他の色の馬は入ることを得ず、又入れんと欲するも得べからず、此れ一の色に拘るが爲めに多くの馬を失へるなり、去れども

決定せざるなり、寧ろ斷然馬以外の處卽ち無形無色の本源よりして觀たる虛無觀を以て之を解決したらんには、白馬も黑馬も乃至黃馬も、又駿も駑も亦皆同じく一たることが明明白白となりて、固より彼此紛々の爭も生ずべくもあらず、要するに彼れは徒に形迹範疇に囚はれて其の以外に超越して大本を達觀する能はざるよりして、此の如き愚論が起るなり、而して右の如く後天的の形迹に拘りては、終に論定を爲すこと能はざることは、廣き天地も矢張り一つの指のことを論ずると同じ道理なり、數多き萬物も矢張り一つの馬のことを論ずると同じ道理なり、卽ち此の天地萬物を論ずるに、有形上に就いて云ふときは固より、千差萬別の異同ありて、事物の作るや甲是乙非の論紛々として出で際限盡くることなし、故に天地萬物を論ずるには天地萬物の範疇外に身を置き自然の大根本に溯りて見るべし、天地も有るなく、萬物も有る無く、虛々無々にして固より彼此の別もなければ、是非の爭もなきことなり、

【解義】〔以指喩指之非指云々〕此れ及び下の以馬喩馬之非馬云々の語は莊子の當時に墨翟の一派なる公孫龍（拙著墨子國字解序說の第五章參看）が、堅白同異の辯を爲して、指物論白馬論（共に本篇の末に參考として掲ぐ）を唱へ、指及び馬を比喩に取りて頻りに詭辯を弄せしを以て、之を引きて齊物論の旨趣は彼の如き淺薄なる研究にあらざることを示し、同時に彼等の如き謬論を正さんが爲に、齊物論の述作ある所以を示されたるなり、呂惠卿曰く以指喩指之非指、雖有名實（有名指無名指等の類）小大之辯、不出於同體、曷足爲非指乎、以馬喩馬之非馬、雖有毛色（白馬黃馬の類）駑良之辯、不離於同類、曷足爲非馬乎、唯能不由是非、而照之乎天、則出於同體、離乎同類、然後足以定天下之眞是非、故天地雖大、無異一指、以其與我並生而同體也、萬物雖衆、無異一馬、以其與我爲一而同類也、則物之可不可其孰自哉と、此れ指の中に種々の名目大小の形各々同からざる有りと雖も、均く同體たれば孰れの指をも是れぞ非指とは云ふべからず、馬の中に毛色の別駑良の差各々一ならざる有りと雖も均く同體たれば、孰れの馬をも是れぞ非馬とは云ふべからず、故に指も馬も共に各々其の同體同類の形迹を出て離れて自然

だ多けれども、要するに此の二説の範圍に出でず、但互に詳略の差あるに過ぎざれば之を略す、

今按するに成形と云ひ、成心と云ふ、倶に一つの定體あり、定見あるものにして、實有的見解に屬することなれば、莊子の虛無因應の主義より觀るときは物に拘り泥み、事に滯り着きて妙融圓通の功を虧くことは深く排斥して取らざる所なり、乃ち本篇の齊物論の如きも、全く此の見地よりして起りしものなれば、成形成心を以て善意に解釋するは恐らくは莊子の本意に非るべし、故に予の解義は之を取らず、

以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也、以馬喻馬之非馬、不若以非馬喻馬之非馬也、天地一指也、萬物一馬也、

【大意】形迹上に拘らずして眞理を洞看すべきことを言ふ、釋意に曰く此一節、發揮聖人照破、則泯絕是非、天地萬物而爲一、

【通釋】物理は大本に就いて看取すべし、形迹に囚はれて彼此を分ち、是非を論ずるとも、何ぞ其の眞相を會得することあらんや、彼の詭辯家の唱ふる指物白馬の論の如き卽ち是れなり、彼は今盛に指は指に非らずと云へる詭辯を弄び居るが、然し矢張り指と云ふ者を以て標的として其の作用等に就き、指はもと一物或は一事に局限せられて名づくべきに非らずと云ふが如き、煩瑣なる論を鬪はさんよりは寧ろ直ちに本源に溯り、卽ち先天的無形の時に於ては、指も非指も亦皆同く一にして、固より彼は指なり、此れは非指なりと是非を分ちて立論して云ふべきにあらずと解決を與ふるに如かず、然らざる時は既に非指を唱へながら、矢張り指てふ者を離れずして云へるが故に、徒に形迹上に就いて議論のみ盛にして、解決は就かざるなり、又彼の非馬の論も同く然るなり、彼の謂はゆる馬と云ふ者に種々なる色合ありて一色ならず、性質にも駿馬あり、駑馬ありて亦齊からず、故に單に馬と云ふ可からざれば、世に謂はゆる馬は眞の馬と云ふ可からずと云へるが如き、詭辯は矢張り馬てふ題目に囚はれて、其の範圍を出でざることを引き合はしに爲して論ずるが故に、議論多岐に渉りて

なきに終はるのみと解し、卽ち成心てふ者を善意に解釋したるなり、陳詳道は曰く蓋芒者人也、不芒者天也、善養心者不以人滅天、存其不芒者而已、人之生也天與之成形、道與之成心、隨其成心而師之、則冥與道契、奚必知代而心自取者有之、代者陰陽之變、知代而心自取道、則智者也、人皆有成心可師、奚必智者爲然、未成心而有是非、是以無爲有、榮華其言、雖有神禹且不能知、況非神禹乎と此文呂說と同義なるが、天與之成形、道與之成心と云ふに至りては、更に成形成心の二者共に天賦の自然に屬するのみならず、又苟も人として須臾も離るべからざる意義を明確に指示せし者なり、而して今日存在せる莊子傳註の最古たる郭注は曰く夫心之足以制一身之用者謂之成心、人自師其成心、則人各有師矣、人各自有師、故付之而自當と、乃ち成心とは或る限畫せる局部に滯着し、圓融流通せざる、一家の偏見のことにして、苟も此の如き心を宗師とし、物事を裁斷するときは獨り智者のみならず、愚者と雖も、亦其れに相當なる成心あれば、之を宗師として物事を裁斷するを得べし、去れど此の如きは甚だ危險畏るべくして、又紛爭の絕え間無きことなり、是れ世上物論の紛紜にして齊からざる所なるが、苟も此の弊を救はんと欲すれば、宜く未だ其の心に一つの成心となりて固滯せざる以前に立ち反るべく、決して固執せる是非のあるべき筈なきなり、譬へば吳越の遠路に行くには必らず積旬の路程を歷て後ちに達すべきに、今朝發途して昨日既に至ると云ふとも固より有るべき道理にあらざれば、世上誰か之を信ぜん、卽ち是非の生ずるは人に固滯偏見なる成心あればこそ生ずるなれ苟も成心なきに何に由りて是非の生ずること有らんや、然るに元來道理に是非の有るべき筈なきに迷執して有りとし、彷徨として岐路に惑へるは、是れ吾と自身に勞苦煩勞を爲す者にして、大禹の如き神聖と雖も、之を解悟する方法無きなりと、深く成心より是非の生ずる害を誡めたる義と解したるなり、范無隱は曰く未成心則眞性渾融、太虛同心、成心、則已離乎性、有美有惡矣、人處世間應酬之際、有不免乎成心、卽當求之於未成心之前、則善惡不萌、是非無朕、何所不齊哉と亦郭注と同意なり、是れ成心自師を以て惡意に解釋したるなり、右の外諸家の解說甚

り、胡大靈は曰く眞君不レ能レ外二人心之用一、以有レ所レ使、則人心之用有レ時、亦眞君所レ成之形、而人受レ之者、然眞君之成レ形、不レ過三偶一在二此、人得受レ之、亦偶一耳、而用レ我者則執而不レ化、一往用レ之、不レ論二可否一、至レ於レ死而後已也と是れ天理の人心に宿りて、一身の主宰となるも既に人に宿りたる上は、心の作用を外にして主宰の權能を達する能はざれば人心の描ける思想は卽ち天理の發動と認むべきことあるも、天理の發動は大公廓然として物來りて順應し、物去りて寂靜に歸すれども、人心は此の發動を感受すると共に、多く其の思想を固執して亡はず、終身悟らざるより遂に我意我見となりて物事に衝突して、互に是非紛爭の中に一生を徒過するは悲むべきなりと解釋せしなり此の說に依るときは、一受二其成形一不レ亡、以待レ盡とは惡意に解して此の如きことは爲すべからずと云れはたるなり、是れ均く成形の解釋なれども、其の意反すること氷炭啻ならずと謂ふ可きか、

莊子又曰く夫隨二其成心一而師レ之、誰獨且無レ師乎、奚必知レ代而心自取者有レ之、愚者與有焉、未レ成二乎心一而有二是非一、是今日適レ越而昔至也、是以レ無レ有爲レ有、無レ有爲レ有、雖レ有二神禹一且不レ能レ知、吾獨且奈何哉と呂惠卿は此の節を以て前節の人之生也固若レ是芒乎、其我獨芒而人亦有二不レ芒者一乎の句に連接して一節となして曰く我與レ物敵、形與レ心化、而不二自知一、芒昧之甚者、至人之心其靜　如レ鑑、非レ有レ待而然、得二其成心一而已、我不レ得二其成心一、所二以獨芒一、彼至人者固不レ芒也、人誠能隨二其成心一而師レ之、誰獨無レ師乎、奚必知レ代二其故習一而心自取者有レ之、愚與有レ不レ芒而可レ師者、不レ知レ求レ之耳、成心吾所レ受二於天一、而無レ虧者、故足二以明一　眞是非、苟爲二物所一レ虧、則所レ謂是非未レ定也、是非本無　而以爲レ有雖二禹之神一、猶不レ能レ爲二之方一、吾將奈何哉、と此れ成心とはもと人の天より禀受せる本心にして、至德の人は、此の成心有ればこそ、明かに物理を辨へ別ち、昏迷せざるなり、衆人は此の成心てふ者無きにあらざれども、物欲に虧き損せられて完全の功を奏するを得ず、故に眞の是非を明かにすること能はずして、昏迷を免れず、且つ何等是非の定見も無きに、徒らに是非を喋々するは是れ乃ち無を以て有と爲せる者にして、神禹の如き偉き人物ありと雖も、到底人力にては如何とも方法を立つる能はず、畢竟勞して功

ふなり、「故曰莫若以明」此れ上文を顧みて一收繳をなせり、乃ち以上の如く、是と非と共に無窮なる者とすれば、唯だ自然の光明たる大虛の道、以て之に應ずべし、是れ乃ち戶樞が環中を得て無窮に應ずると同理なりとの意なり、

【備考】成形成心の解、古來注者其說頗る異同あり、隨て本篇の意旨亦紛淆して明かならず、讀者往々疑惑を生ずることあり、今參考の爲めに左に其二三說を揭げ、附するに管見を以てして、識者の教を俟たん、

莊子は曰く百骸九竅六藏賅而存焉、吾誰與爲親、汝皆說之乎、其有私焉、如是皆有爲臣妾乎、其臣妾不足以相治乎、其遞相爲君臣乎、其有眞君有焉、如求得其情與不得、無益損乎其眞と、此れ形體の活動を爲すは造化の主宰、卽ち自然の理之が樞紐たる有りて、然ることとなるを言へるなるが、此の解や既に前に詳かにしたれば、今之を省かん、又曰く一受其成形、不亡以待盡、與物相刃相靡、其行盡如馳、而莫之能止、不亦悲乎と、謂はゆる成形とは何物なるか、是れ其の說亦衆し、郭注は曰く言物各有分、故知者守知、以待終、而愚者拘愚、以至死、豈有能中易其性者乎と又曰く群品云云、逆順相交、各信其偏見、而恣其所行、莫能自反、此比衆人之所悲者、亦可悲乎と是れ人たる者形性を稟受して生れたる以上は、智者愚者共に各々一定の涯量ありて愚を改めて智と爲し、醜を易へて美と爲す可きに非れば、中途より亡失せずして其の分內を守り、天年の盡くるを待つべきなり、然るに各々其の形性一び成りたる後ちは、偏見を信じて、彼此と是非を爭うて、自然の形性を傷ひ毀りて止むこと能はざるは亦悲からずやと、嘆息せしなりと解釋したるなり、林希逸が「口義」は曰く、人受形造化、相守不亡、待此形歸盡而已、而不能委順、乃爲外物所沮、盡其一生、如駒過隙、薾然疲役可不哀邪と、是れ人の形軀を天より受けて生れたる以上は、謹て之を相守り亡失せずして其の命數の盡くるを待つべきに、乃ち天命に委ね順ふと能はざるよりして、外物に乘せられ利欲に迷うて一生を徒過するは悲むべきなりとの意に解したるなり、以上は共に成形を寧ろ善意に解釋して、當さに之を守るべきに拘らず、徒に之を亡するを以て非なりと爲せるな

に纔かにと云へる口氣にして、即ち裏面には是より以前即ち樞てふ物に成らざる時は、得其環中と云ふことの不可能なる義を意味して云へるなり、環はもと「タマキ」と訓じ、圓郭にして圓孔ある玉の稱なれども、一轉して凡て圓郭にして中空なる物の稱となり、「ワ」と訓ず、此の句は莊子自ら上文に道樞とある樞の字の意義に就いて解釋したるなり、乃ち樞とは戸樞にして、戸樞は元來圓郭にして中空なる環の眞中に在りてこそ始めて能く婉轉して滯りなく、正中にして偏倚せざるが故に、門戸開閉の頻繁にして窮りなきに隨ひ應じて、何等の障礙なく其の用を達し得るなり、此れ乃ち戸樞其物の狀態なるが、今道樞も全く其の如く、絶對的無偶の地に立ちてこそ、始めて無窮の用に應じて道の妙用を達することを得るなりとの意なり、郭注は夫是非反覆、相尋無窮、故謂之環、環中空矣、今以是非爲環、而得其中者、無是無非也、無是無非、故能應是非、是非無窮、故應亦無窮と、郭慶藩は家世父の説なりとて集釋に載せて曰く、是非兩化而道存焉、故曰道樞、握道之樞以游乎環中、中空也、是非反復、相尋無窮、若循環然、游乎空中、不爲是非所役、而後可應無窮と此れ環中を以て是非の反覆して窮りなきことに比し、中を以て無是無非の虛空に比したるなり、而して「集釋」は、又唐の釋湛然が「止觀輔行傳宏決」に莊子の古注を引きて、以圓環內空體無際、故曰環中と云へるを載せて參考となせり、諸伯秀曰く樞者中空、轉而不滯、戸樞之用要、在環中以應無窮、若乃道之樞、則以理轉物、雖天地之大萬物之多、無有能對道樞之妙者矣と、胡大靈は曰く此句解樞字、言樞乃如此者と、又曰く言明者之所以能齊之者、以己有如此明、則無定是於心、以與衆論之彼是爲倫、是其心之於道、理如門樞之處於圓轉無滯正中無倚之地、以隨其無窮者と今其の説を用ひて解をなせり、〔是亦一無窮云々〕此れ上句の樞始得其環中、以應無窮の比喩を承け、道樞の本義に引き戻して正意を說明したるなり、乃ち門戸の開閉窮り無きと同じく、世の紛々たる是非も矢張り窮り無きことなり、乃ち其の見て是と爲す者窮りなく、郭注に天下莫不自是、而莫不相非、故一是一非、兩行無窮とあるが如く、甲が是とすれば乙が非とし、乙が是とすれば甲が非とし、際限無きを謂

秘訣寔に此に在るなり、全體の樞と云ふ者は如何にして善く開閉に應じて用を達するかと云はんに、纔かに始めて其の環中とて形ちは圓くして終始循ひ摩づるも、其の端なく中心は空虛にして何等の物に差し礙はりなき環の中に在るを得て、一開一闔の窮まり無きに順ひ應ずるなり、今之を道と云ふ者に引き戻して云へば、既に上述に論じ來りたるが如く、是と云ふことも彼此双方共に各々之を有して一つの窮りなき者なり、非と云ふことも亦彼此各々之を有して亦一つの窮りなき者なり、此の無窮に應ずるは乃ち彼の戸樞の環中にあるが如く、圓轉虛靈なる心を以てせざる可からず、故に曰く是非を齊くせんには、自然の光明なる眞理即ち虛心無我を以てするに若くは無しと、

【解義】〔是亦彼也〕此れ亦上文と同じく互文を用ゐたるなり、是は是非なり、彼は此に對して言ふ、乃ち我もと彼を非として此を是とすれども、彼より見るときは我の是とする此を、亦疏外して、彼と爲し、非斥することありとの意なり、下句の彼亦是也の義も亦此の例を以て推解すべし、胡大靈曰く此之所謂是、亦彼之所謂彼、而不見也（本篇の上文に見ゆ）、此之所謂彼、亦彼所謂自知而以爲是也（同上）、〔彼亦一是非此亦一是非〕玄英曰く此既自是、彼也自是、此既非彼、彼亦非此、故各有一是、各有一非也と、乃ち是非は彼此双方互に皆之を有することを言ふ、〔果且有彼是乎哉云々〕分看するときは彼此あり、是非あり、合看するときは彼此なく、是非なきなり、乃ち本とは同一虛無に歸するなり、陸樹芝は曰く、聖人之因是、彼猶乎此、此猶乎彼、於彼於此均無是非之分、豈復有彼此之界哉と、此の説は本文の彼是の是を此の字に解したるなれども、亦以て參考とすべし、〔彼是莫得其偶〕偶は對なり、此なければ彼なし、非なければ是なし、彼此是非は皆各相對的より生ずるなり、今既に虛無たるときは其の相對的を得ること莫ければ、是れ彼此是非何れも共に無きなり、〔謂之道樞〕樞は「トボソ」と訓じ、又「クルヽ」と云ふひらき戸を維持して開閉する要機なり、因りて大切なる事物を譬へて、樞機樞要等の語あり、道樞とは道の樞要なり、〔樞始得其環中〕始の字宜しく玩味すべし、漫過する勿れ、始は方なり、纔なり、此に至りて方

謂明と、

是亦彼也、彼亦是也、彼亦一是非、此亦一是非、果且有彼是乎哉、果且無彼是乎哉、彼是莫得其偶、謂之道樞、樞始得其環中、以應無窮、是亦一無窮、非亦一無窮也、故曰莫若以明、

【大意】以明者即ち聖人の能く衆論を齊くする故を云ふ、

【通釋】彼此相對し是非相反して各々區別判然たるに似たれども、其の實は以て是なりと爲して誇れる自我、即ち此の方も亦彼の他方より見るときは以て非として排斥する彼と云ふ者なり、以て非として排斥する彼の方も、即ち彼れ自身は亦以て是として誇る此と云ふ者なり、我れより見たる彼と云ふ者も、此の方よりしては一の是非あり、即ち此の方は自ら以て是なりとし、彼の方を以て非となすなり、亦此我より見たる此れと云ふ者も、彼の方よりしては一の是非あり、即ち彼の方自らは以て是なりとし、此の方よりは彼を以て非となすなり、此の如く彼此双方共に各々物の是非は有りとすれば、果して將に彼と云ひ此と云ひ、又是と云ひ非と云ふが如きは、定まりたる物事が有る者にや、果して將に彼と云ひ此と云へるが如く、區域が判然として、又是と云ひ非と云へるが如く、得失の固より定れる者無かるべきか、即ち眞個の彼此是非と云ふ者は双方共に有りと云へば有り將た無しと云へば無きことなり、詰り物事自然の道理、即ち天明に任かして自我の意見を參ゆること無くんば、我と云ふ者が無きと同時に彼と云ふ者も無し、隨うて此れは是なり、彼れは非なりと云ふことも自ら無し、即ち彼是共に其偶とて相敵たる者を得ること莫し、相敵たる者なく、中央の地位に立ちて、虛心無我にして萬事萬物に受け答へをなして、即ち前段の照之於天亦因是也との地位に達するときは、宛かも戸の樞ありて活動するが如く、一つの要點を握りて能く萬事に對するが故に、之を名づけて道樞と謂ふ、即ち道の樞要と申す者にして、莊子が齊物論の

一方に滅びたるかと思へば、一方に生ると云ふが如く、初中終浮き動いて、一定せざることを云へるなり、〔方可方不可〕方可の下に則の字を加へて看るべし、一方に可と云へば、一方に不可と云ひ、一方に不可と云へば、一方に可と云ふ者あるなり、可不可は則ち是非のことなり、下句亦之に倣うて解すべし、藤澤東畡曰く方生方死、方死方生、當時有此語、故莊子引之、以爲彼此是非之證、故上文曰方生之說也、而下文陳其語、方可以下莊子續之也と、〔因是因非〕是因の間に則の字を加へて看るべし、因是とは是なるに因ることなり、乃ち一方に於て是に因れば、一方に於て非に因る者あるなり、〔因非因是〕此れ亦非因の間に則の字を加へて看るべし、乃ち一方に於て非に因れば一方に於て是に因る者あるなり、此れ乃ち既に彼此の別あるときは隨うて是非の生ずること窮りなきことを言へるなり、〔是以聖人不由〕由は從なり、用なり、乃ち上文の如き紛々たる是非の途に由らざるなり、〔而照之於天〕天は自然なり、胡大靈曰く言有我則蔽、是以無我則明也、不由不爲衆論之有是有非也、不用我則是任天也、任天則虛心以待、

而物理自呈、如鏡之照物、此明之由也と、〔亦因是也〕聖人は每事每物各々自然に存在せる眞理に因りて之を是とし、又別に己一個の意見を參して是非を爲さず、但聖人は無是無非を以て、一の大是と爲して之に因ることは、宛かも衆人の因是に似たる形迹あるを以て、亦因是也と云へり、亦因是の三字善く理會すべし、「論語」に孔子の門人子貢が、同門なる子禽の孔子が諸侯の國に至るときは、必らず其の政を與り聞かるゝを以て、夫子之至是邦也、必聞其政、求之與抑與之與と問ひしに答へて、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求之、其諸異乎人之求之與と云はれて、乃ち孔子も他より許して求之と曰へば成程求之に似たるなれども、其の求め方が衆人と異なりとの意義を以て、其實は求之にあらざることを辨解したると同一の言ひ方なり、是れ其の文筆の巧なる處、亦修辭の一法なり、陸方云ふ、照之以天、則如天籟之竅然(風に逆らふ聲)、而未始有言、雖有所言、亦因夫是而已、如是則是非可否一時俱泯、而無橫生之意見矣、此一夫字最爲肯綮、後文天均天倪皆從此生と、胡大靈曰く因物理而應之、明之意也、以上申明所

して疏外するに至る故に、物無非彼と云へるなり、胡大靈曰く此物亦他之物也と、〔物無非是〕是とは是非の是なり、或は解して彼此の此と通ずと爲す者あれども非なり、郭注に物皆自是、故無非是（此の二句は本文の意を遡りて說けり）、物皆相彼、故無非彼（此の二句は正に本文前句の註脚）、無非彼則天下無是矣、無非是則天下無彼矣、無彼無是、所以玄同也（以上は本文二句の結果を說けり）と、此れ物各自に己を是とするが故に、是に非ること無く、乃ち其の爲すこと皆道理に叶ひたる者と爲り、亦物皆各自に互に他を彼として排斥するが故に、乃ち其の爲すこと皆道理に叶はざる者と爲り、乃ち非と云ふ者は、彼と云ふ者が出來たるよりして生じ、是と云ふ者は此と云ふ者が出來たるよりして生ずるなり、若し彼もなく此もなきときは隨うて是も非もなくして、玄同とて自然に虛無の本源に合一するとの意義なり、藤澤東畡は曰く無非彼無非是、皆以彼爲非、而以此爲是、不用非字此字、互文法、下文彼亦一是非此亦一是非始詳具之と此の說參すべし、〔自彼則不見〕自は從なり、由なり、不見とは彼の是なることを見ざるなり、此れ我意强き人は多く偏見に流るゝが故に、彼の方に就いて客觀的に觀るときは、是なる道理が存在すれども、見知らずして一概に以て悉く非なりと爲すことを謂ふ、〔自知則知之〕自知の知は是の字の誤ならんと藤澤東畡は云へり、此れ乃ち前句に反して己自からが是とすることは十分に之を知りて貫き徹すことを務むるなり、胡大靈曰く但人於在彼之是則不知其是以爲非、在己之是即知之、可知而以爲是也と、〔故曰彼出於是是亦因彼〕先づ我が心に是非の見と云ふ者が有りて、後に彼此の別が生ずるが故に、彼出於是と云ひ、亦本と彼此の別が有るに隨ひて、復た是非の見が興るが故に、是亦因彼と云へるなり、又知は智と同じ、乃ち彼我の見に由るときは見ず、天明の智を以てするときは知るを得るなりと解したる說もあり、〔彼是方生之說〕彼是の下に者の字を加へて看るべし、方生方死とはもと惠子が說なるを、今莊子之を援きて云へるなり、此の解義は下句を見よ、〔方生方死方死方生〕方は當なり、又將なり、生方の間則の字を加へて看るべし、乃ち彼是の說たるや、一方に生れたるかと思へば、一方に滅び、

非ること莫し、乃ち俗に盜賊にも道理ありと云へるが如く、世の物事は見立によりて各々其れ相應に眞理の存在する者なり、但凡人の悲さは彼の方面に就いての客觀的に觀たる是と云ふ者、卽ち我より外方に存する尤なる道理は、我が身に於て見留めずして、自的に就いて主觀的に觀たる是と云ふ者卽ち我れ自身に存する尤なる道理は能く之を知り得るなり、かるが故に偶には彼の方面の物事卽ち他人の云爲動靜に就いても、此れは是なり、卽ち道理より出でゝ如何にも尤なる次第なりと曰ふことは有れども、其の實は其の是なりと認むることも、亦矢張り、先づ一番に我が身に是的の道理あると自信すると同時に、彼の是的の道理を認識せるに因りてなり、卽ち先づ第一に己れに自我てふ觀念を存し、之を標準として是非を割り出だし、自我の是的に彼の是的が叶ひたればなり、然しながら、扨て此の彼是てふ者、卽ち彼此の區別是非の論爭は彼の惠子が謂はゆる方生の說と申す者なり、卽ち人物の方に生ずれば、隨うて方さに死し、生と死と相離れざると相似たる道理なり、然しながら此の方生の說と申す者は、方に生ずれば方さに死し、方さに死すれば方に生じ、生あれば死あり、死あれば生ありと、循環的に相因ることとなるが、更に其の道理を敷衍して、普通物事の都合上に就いて云へば、甲が方さに可なれば、乙が方さに不可、丙が方さに不可なれば、丁が方さに可なるが如く、亦皆循環的に相因る者なり、尚又物事の筋道に就いて云へば、始め一方が是と見るに因りて是となすことあり、是れ亦皆循環的に相因る者なり、此の如く次第々々に順逆りになるときは、到底物事は可不可是非の間を離るゝ能はずして、議論百出して際限もなきことなり、是を以て世に超越したる大德の聖人は、此の是非紛々の衆論に由り迯らずして、一に之の歸着點を自然の靈光なる天に照らし鑑みて定むるなり、卽ち一切の我意我見を卻け、虛心坦懷を以て一に自然の眞理に依りて活動を爲すなり、

【解義】〔物無非彼〕物は汎く萬物を指す、彼とは此に對する辭にして、疏外にする意を含みて云へるなり、天地萬物もと一體虛無なれども、人自ら我意を立て挾みて彼此の別を立つるときは、他よりも亦我を目して彼となすが故に、遂に双方共に互に均く彼と

と本文の句の下に道愈隱の句ある意味にて解すべし以上は衆論の道を害するを以て齊くせざる可からざることを言へり、〔則莫若以明〕明は自然の光明即ち太虛の道を指して云ふ、乃ち人能く其の胸宇を宏豁にし、彼是の偏見に拘ること無きときは、物の眞情昭々として目前に呈露し來ることあり、之を自然の光明と謂ふ、卽ち上文に在る眞君の所能にして、道の體段なり、此の光明を己が心に有するときは諸家の偏見を執りて、互に是非を爭ふ者は宛かも明鏡を以て物を照らすが如く、皆其の妄見たるを知るを得べきなり、尙は下文の莊子が自から解說したる言を觀るべし、

物無非彼、物無非是、自彼則不見、自知則知之、故曰彼出於是、是亦因彼、彼是、方生之說也、雖然方生方死、方死方生、方可方不可、方不可方可、因是因非、因非因是、是以聖人不由而照之於天、亦因是也、

【大意】上段の莫若以明の義を申ねて明かにしたり、

【通釋】是非の論を齊くするには、莫若以明と前段に申したるが、其の仔細如何にと尋ねんに、本來は天地萬物皆同源一體たれば、今更彼の此のと區別を立てゝ、是非を爭論すべき筈なきに、然らずして紛々とし儒墨の爭ひの如きことが起ると云ふことは、全く人の觀察點の相違より生ずるなり、全體元と彼と云ふ者は或る一つの此と云ふ物があるに對して、起りたる名稱なるが、扨て之もまた見方次第に由るなり、彼の方面より客觀的に觀るときは、凡そ有らゆる天地萬物、皆彼てふ者に非ること莫し、乃ち自ら彼に對して此と唱ふる我身其物と雖も、他方面より見るときは、亦彼てふ名詞の下に屬するなり、又此が是とか彼れが非とか云へる議論に於ても、矢張り其の通りにして、是と云ふことを主としたる方面より觀るときは、凡そ有らゆる天地萬物亦皆是てふ者に

成〕小成とは大全に對して言ふ、卽ち一局部に明かにして全體に達せざる偏見的の人を指す、玄英曰く小道而有所成得者、謂之小道と、又老子に大道廢有仁義と云へり、〔言隱於榮華〕榮華は浮辯の辭、華美の言と成疏に見えたり、又同疏に只だ華辯に滯る至言を隱蔽する所以なり、「老子」に信言不美、美言不信と云へりと、胡大靈は曰く有眞僞者爲小成、有是非者爲榮華、此道所以隱也と、是れ小成榮華は全く世人が誤解よりして生じ、大道は之が爲めに隱晦することを爲せりと解したるなり、〔故有儒墨之是非〕故とは上を承けて云ふ、乃ち道隱れて晦くなるときは、衆人迷ひ惑ふが故に論議愈多くなるなり、儒は孔子の敎を奉ずる儒者なり、墨は墨翟が兼愛の敎を奉ずる墨者なり、本書の天下篇を按ずるに、莊子の當時に於て學術を以て互に雄を爭へる者甚だ衆し、獨り儒墨の二家のみにあらず、然るに今茲に特に此の二家の爭を擧げたる者は成疏に据るに、當時鄭人に兄弟ありて、兄は儒を學び、弟は墨を學び、互に其の是非を爭ひ、爲めに其の一人は憤死したる事實ありたれば、特に此を擧げたるなりと云へり、今參考の爲めに之を左に掲げん、曰く、昔有鄭人名緩、學於求氏(地名)之地、三年藝成、而化爲儒、儒者祖述堯舜、憲章文武、行仁義之道、辨尊卑之位、故謂之儒、緩弟翟、緩化其弟、遂成於墨、墨者禹道也、尙賢崇禮、儉以兼愛、摩頂放踵(總身を犧牲にすること孟子に見ゆ)、以救蒼生、此謂之墨也、緩翟二人親則兄弟、各執一敎、更相是非、緩恨其弟、感激而死、然彼我是非、其來久矣(流派の爭は獨り緩翟に始まるにあらず)、爭競之甚、起自二賢(緩翟)、故(莊子)指此二賢爲亂羣之師、是知道喪言隱、方督是非と、按ずるに此の事もと莊子本書の列禦寇篇に見ゆ、但文章之と稍々詳略の差あり、又緩化其弟を使其弟墨に作れり、王先謙が「集釋」にも亦成疏の言を援きて本文を解したり、蓋し戰國時代に在りて、學術の二大宗たるは儒墨なれば、故に特に此の二家を以て是非紛爭者の代表となせしならん、然れども成疏の說も亦未だ廢すべからざる者あり、一說として存すべし、〔以是其所非云々〕其の字は彼の字と看做して解すべし、卽ち甲よりして乙の一方を指して云へる辭なり、林希逸曰く人之所非我以爲是、彼之所是我以爲非、安得而一定

と同じ點に歸着することを明らかにしたるなり、焦竑は曰く夫初生之鷇、任天之使(自然)、㗫然而鳴、非有心也、人之言有心言之則與鷇異、無心而任天之使則固與鷇等、與鷇等則與吹等、與吹等然後謂之天籟と〔道惡乎隱而有眞僞〕成疏に据るに惡乎とは於何と云ふ義なり、乃ち此の處は至道は本來虛通にして、眞もなく僞もなき筈なるに、一體何處に隱匿して斯の如く眞僞の惑ひ生ずるかと云へるなり、上文の夫言非吹也より以下の數句は主として言語のみに就いて論じ、忽ち此の句より以下は道と言とを相間へ對擧して云へるは、凡そ人の物事に對する是非の見は言語に由りて發表するものにして、言語なければ是非の論も起る筈なきなり、故に先づ言語の性質に溯りて、人の初生の時は其の言語もと鷇音と同じく、共に自然の使命に出でて極めて純潔無邪氣なれば、言語其物に初より甲是乙非の定まりて有るべき筈なきを明かにし、然る後ち一體甲是乙非の論は何に據りて云ふかと尋ぬれば、乃ち互に己れが信ずる道を標準として割り出だすものなれば、先づ道てふ者を説明し、既に至極せる道に於ては全く虛無靈通にして、眞もなく僞もなき故に、隨うて眞に道に叶ひたる言語に於ては、是非の爭ひ有る可からざることを說きたるなり、呂惠卿は道無不在則言莫非道、道惡乎隱而有眞僞、物無非道則言亦道也、言惡乎隱而有是非と、〔言惡乎隱而有是非〕上句は道の性質を詮議する上に就いて云へるが故に、眞僞と云ひ本句は言の徑路を討尋する上に就いて云へるが故に是非と云へるなり、一說に隱の字を蔽なりと釋し、道は何を以て蔽はれて、眞あり、僞あるに至り、言は何を以て蔽はれて、是あり、非あるに至るかと解せり、〔道惡乎往而不存〕存は在なり、郭象は皆存と注して、乃ち道はもと至大普徧なれば、何處に往くとも存在せざること無し、因りて僞にも眞にも皆共に道は存在すると同時に、道は僞もなく眞もなきなり、俗に云ふ盜賊も道ありと、此の類即ち是れなり、陳壽昌曰く觸處皆是、本不須言と、〔言惡乎存而不可〕郭注は皆可とあり、至理の言は物事に隨ひて、臨機活殺の妙用あり、乃ち剛柔寛猛共に何れに往くとしても皆可ならざることもなければ、亦隱晦する筈なきなり、陳壽昌曰く一言一道、亦不須辨と、〔道隱於小

如くなきなり、

【解釋】〔夫言非吹也〕非吹也とは上文に天籟地籟と論じて、夫吹萬不同、而使其自已とある吹の字を顧み、之に反應して人の言語は先づ胸中に或る目的とする物ありて、外に發する者なれば、自然に吹き起る籟の如き比にあらざるを云へるなり、陸樹芝曰く風之吹、止因乎竅之自然、而初無成心、言則必先有心之所欲言、乃從而論是非也、接筆神妙、既能折出言之爲害、又照管到地籟一段文字と、一説に非吹也とは、也は邪と同じ、夫言非吹也と問へる辭にして、下句の言者有言の下に而の字を加へて看るべしと云へり、〔言者有言〕言者は言語を吐く人にして、有言とは生れて初めて言語を吐くことあるを謂ふなりと、〔其所言者特未定也〕其とは上句の言者有言とある言者を指す、特とは獨り取り別けてと云ふ意なり、蓋し人の生るゝや即ち言ふことあり、是れ彼の衆竅の本來何の聲無き者とは同からず、然れども其の言ふことはもと一定の量見ありて言ふにはあらず、即ち是れぞと確かなる事物の考へ有るに非ることは、彼の赤子が頻りに啼きたり、語りたりするも、其の言ふ事は殆ど無意味的なるに觀て知るべし、乃ち此處の特未定とは右樣の事柄を指して云へることなり、〔果有言邪其未嘗有言邪〕言ふことが、首尾も條理もなく、又是れぞと確かなる主意もあるにあらざるときは、縱ひ言ひ語るとも、未成言にして、言語として視るべからず、即ち無言と同じくして、彼の衆竅の本來無聲なると擇ぶことなきなり、故に之を具體的言語と見做すべき者にや、見做すべからざる者にやと、兩敲法を用ひて云へるなり、〔其以爲異於鷇音云々〕鷇は音㲉、初めて卵より出でたるものにして、即ち雛なり、「ヒナ」と訓ず、俗に「ヒヨコ」と云ふ、但雛と鷇との區別は、成疏に凡鳥初生、待母哺者曰鷇、能自食者曰雛、燕雀之屬爲鷇、雞雉之屬爲雛と本文の意は鷇の啼く聲は別に深き考へありて彼れ此れと是非をなして啼くにはあらず、然るに今特未定の言、即ち無邪氣なる赤子の啼き聲や、言ふ聲は之と異なりたる者と定めんに、此の二者は矢張り辨別ある者にや、其れ何んと辨別なき者にや、乃ち此の二者は何の辨別もなく同じきものなりとの義なり、乃ち上文に所言特未定とある言は、畢竟未嘗有の義、即ち無言

すか、亦其の間自然に之と辨別ありとなすか、其れ何と之と辨別なしとなすか、要するに言語其物の價値として甚だ覺束なき次第と見る外なきなり、されば是れ胸に一物ある言語、卽ち前段に述べたる以無有爲有とは亦幾分の差違あることにして、非吹也とは云へ、亦全く非吹也と否定も出來兼る義なり、全體道理と云ふ者は隱れて晦くなる筈はなきに、何れの處に於て左樣に晦く隱れて、是れが眞の道理なるか、彼れは僞の道理なるかと疑ふやうに不明瞭になるか、亦言語と云ふ者は本來道理を晦まし隱す筈なきに、何れの處に於て左樣に道理を晦まし隱して是の事が道理なり、彼の事は非道理なりと云ふやうに、相爭ふことがあるか、豈に疑ふべき次等ならずや、全體道理と云ふ者は世界各國昔しも今も共に一と筋の者にて何れの處にか往く先きとして存在せざらん、乃ち眞理は何世何國と雖も皆同じきなり、時代や場所に因りて異なるにあらず、言語と云ふ者は此亦苟も人ならんには皆共に有るが當然にして、何れの處にか存在し、而かも不可なることあらん、乃ち言語は何世何國と雖も、皆吾れ人と共に存すべきなり、されば道は是れ時代を通じて世界的公共的なる者なり、言語も亦之と同然なるに、何が故に晦く隱るゝかと云へば、道理は小成とて廣く、道理の全體的に涉らずして狹く、部分的に偏するよりして、晦く隱れて各々我が知る處を眞とし、未だ知らざる所を僞として、眞僞の爭論あり、言語は榮華とて外面の榮かえ華やかなる方に傾き、內心の堅實を疎かにするよりして、晦く隱れて各々好名の結果、相互に一方を是とし、一方を非とし、是非の爭起るなり、かるが故に彼の世間の有名なりし儒者と墨者の兄弟が、是非の爭の如きことあり、以て甲乙共に各々其の一方の非とする所を是認して、其の一方が是とする所を非認し、議論は益々紛々として、爲めに是非は益々淆亂して、道理は益々隱れて明かならず、實に困難なる世界となれり、苟も是の時に當りて之が弊害を救はんが爲めに、衆論の紛々たるを打ち返して、彼れ等の非とする所を是とし、彼等の是とする所を非とし、議論界の大革命を遂げ行はんと欲するときは、區々たる小成の道や榮華の言に囚れずして、大いに世外に超越し、本來の虛無主義に立ち返りて自然の光明を以て之を照らし鑒むるに

無有を以て有となすことは大禹の神智と雖も解悟することと能はず、然るに此の有るべからざることを以て自から誇り、自から欺ける世の庸妄者流は吾獨り之を如何ともすること無しと深く嘆息反復して、世人を喚醒したるなりと解せり、陸樹芝曰く此數句又極言無成心而先有是非、必無此理、雖以神禹之聖、不能逆億而知也、又誰能知其有是非哉、如此則無大知小知、而眞宰寂然、如天籟之無聲矣、又安得有大言小言之紛紛哉、下乃遙接大言小言、而指其是非之無據、見得、徒牿其心、不若復還其本體之明と、

夫言非吹也、言者有言、其所言者特未定也、果有言邪、其未嘗有言邪、其以爲異於鷇音、亦有辨乎、其無辨乎、道惡乎隱而有眞僞、言惡乎隱而有是非、道惡乎往而不存、言惡乎存而不可、道隱於小成、言隱於榮華、故有儒墨之是非、以是其所非而非其所是、欲是其所非而非其所是、則莫若以明、

【大意】 言論必しも惡きに非らざるも、自ら偏見を是とするよりして弊害の生ずることを言ふ、

【通釋】 一體言語と風とは倶に是れ聲なれども、言語と云ふ者は心の思ひ出でを口上に現はす者にして、即ち胸に先づ有る一物が口外に出づることにて、彼の風が自然的無意識的に吹きて木竅に入り、因りて聲を發す類にあらざるなり、言語と申す者は心の思ひ出でを口に現はす者にして、既に言語てふ一物があるなり、然れども言語を發する者が初めに當りては、其の言ふ所の者は、特に未だ是れぞと構成的には極まり定らざれば、實は言語はあれども殆ど無きに同じ、されば果して言語が有るものとするか、其れ何にと未だ言語は有らざる者とするか、其れ左樣なる言語は以て鷇音とて、雛鳥の啼き聲と異なりと爲

形似を以て誤るのみ、知化とは造化の理を知るを言ふ、「易」に窮神知化とあり、知化は正に此と同じと云へり、廣瀨淡窓は知を智と讀み代而心自取の五字を衍文と爲し、本文を「奚必知者有之」の誤りなりと爲せり、亦一說として存すべし、〔愚者與有焉〕與の字「釋文」に音豫とあり、成疏には如是之人、處々皆有、愚癡之輩先豫其中とあり、上句及び本句の二句は、上文の誰獨無師乎の義を申さねて明らかにしたるなり、〔是今日適越而昔至也〕適は往なり、越は國の名、今の浙江省紹興府會稽縣、治は卽ち古の越國なるが、當時支那版圖の中心點は北方にあれば、適越とは南方遠國に往くの義に用ひたるなり、昔は向注に昨日之謂也とあり、卽ち昨日のこと、郭注にも今日適越、昨日何由至哉、未成乎心、是非何由生哉とあり、陸樹芝は今日適越、而昔至、是惠子語（本書の天下篇に見ゆ）、莊子引之、以見其必無是事也と云へり、乃ち上句及び本句の二句は成心無ければ、必らず是非の見無きを言ひ、以て反りて是非の見は成心の有るより起ることを斷じたるなり、〔是以無有爲有〕是とは成心を師とする人を指して言ふ、眞君と一體たる心は凡そ事物の前に來るに應じて動きを爲し、事物の濟みたると共に寂然として靜かに本來の太虛に歸し空となる者なり、然るに今や成心あるときは是れ事物の未だ至らざるに先だちて既に一つの定見が預め有ることゝなれば、乃ちもと何等の物も無きを强ひて物有りとなすとの意なり、〔雖有神禹〕神禹は神聖なる禹王と云ふこと、禹は夏の王にして、初め舜を佐け、洪水を平らげ、大功あり、因りて大智者の代表となれり、焦竑は曰く禹作禹貢、亦只說得他足迹所到九州土物外國方物、禹便不能知了此理也と、〔吾獨且奈何哉〕吾とは上の以無爲有の人を指すなり、獨且奈何哉とは上文に吾誰與爲親と云へる吾の字と同じく、唯假設して云へる辭にして、此處は神禹だも知る能はざることを、吾が輩共が獨り之を奈何とせんとするか、仲々手の著け樣なきなりと深く其の事の無理なることなれば、宜く斷念すべきことを警戒したるなり、是以無有爲有より本句に至る四句は成心を師とする者の是非は、必らず道理に當らざることを言へるなり、又郭注成疏以下の說に依れば、吾とは莊子自からを謂へるにて、玄英王先謙等は

ことは固より有り得べからざる道理なり、即ち世に成心が無くして、是非の爭を爲すことは、決して無きことなり、然るに若し不道理にも左樣なる事がありと云ふ者あらば、是れ全く誣罔なる言分にして、宛かも何に物も有ること無きを以て確かに有りと爲す者と同じ、元來何にも有ること無き物を、確かに斯々の物あるを知ると云ふことは、天下の人は愚か、縱ひ如何に鬼神同樣なる大智大能を有する夏の禹王の如き偉き聖人ありと雖も、之を確かに此の如き物ありと知りて言ひ中つること能はず、乃ち人間の智力にては到底及はざる事柄なり、況や吾等常人の力を以て、獨り將さに之を奈何せんとするか、到底手の著けやうも無きことなり、されば成心を師として是非を爲すとも其れが能く中る筈なきなり、

【解義】〔夫隨其成心而師之〕夫とは發端の詞なり、前段は主として成形に就いて云ひ、此段は專ら成心に就いて云ふ、故に辭端を更め提醒して云へるなり、隨は從なり、其とは汎く成心を師とする人を指して言ふ、成心とは成就したる心と云ふことにして或る一定の意見を持てる心なり、范無隱曰く未成心、眞性渾融、太虛同量、成心則已離乎性、有美有惡矣と、乃ち人の心は本文の自然に任ずるときは渾然妙融にして太虛無私なる者なれども、成心となりて本性と離るるときは、美なる心ともなり、惡なる心ともなること有るなり、〔誰獨且無師乎〕且は將なり、「マサニ」又は「ハタ」と訓ず、擬度の辭なり、下句の二の且の字亦皆同じ、師とは從うて敎を受くる人なれば、因りて之を模範的に尊崇することに轉用して云へるなり、〔奚必知代而心自取者有之〕奚は何なり、知代とは乃ち本篇の前文に日夜相代乎前、而莫知其萌と云へるより來れる語にして、乃ち普通人の相代乎前、而莫知其萌なるに反して、能く相代乎其前の道理を知れる智者を云へるなり、心自取とは、自取は前文咸其自取、怒者誰邪とある自取と同じく、自己其物の力にて之を得ることとなり、乃ち此處は既に成心を以て師となせる以上は人々皆各成心は有ることなれば、奚ぞ必ずしも相代の理を知りて、心能く自から師を得る智者に限りて之あるのみならん、即ち愚者と雖も、之あらざること莫しと云へる義なり、岡松甕谷は、知代は當さに知化に作るべし、蓋し文字の

一生の終はるを待つべしと解し、而して此の處にて人之生也、固如是、芒乎云々と云ひ、以て上文を總束したるなりと說く者あり、姑く錄して參考となす、

夫隨其成心而師之、誰獨且無師乎、奚必知代、而心自取者有之、愚者與有焉、未成乎其心、而有是非、是今日適越而昔至也、是以無有爲有、無有爲有、雖有神禹、且不能知、吾獨且奈何哉、

【大意】偏見固執の弊を說かんとして、先づ成心の恃むべからざるを言ふ、

【通釋】前段に述べたる如く、行爲が或る一の固形的に凝り固まりたるを成形と名つくると共に、心の一定的に凝り固まりたるを成心と名づくることとなるが、さて人たる者、此の自己の成心てふ者に隨從して之を萬事の師匠と崇め尊びて、凡ての出來事に對し、之を標準として是非の批評を下だすときは、凡そ世界の多き人々に於て、何人か師匠標準とすべき成心なからん、何ぞ必ずしも此の前文に於て、彼の日夜相代乎前而莫知其萌と評したる通常的人の知識に相反して、其の能く相代乎前の道理を知り、而かも其れは他動的注入によりて得たる知識にあらずして、自動的啓發即ち己が心の能力を以て、自から其れ迄の知識を取り得たる者、即ち換言すれば非常なる智者であるが、其の智者のみに限りて、此の成心が有るのみならず、彼の平凡の人なり劣りたる愚者にして、殆ど無知識とも申すべき人物にても、矢張り其の中に與かり加はりて其の人物に相應なる成心はあるものなり(俗諺の一寸の蟲には五分の魂ありと云へると似たり)、既に右の如く智愚に限らず、各自に皆相應なる成心がありとすれば、之を師とし、物事に對して是非を爭ふよりして、紛紜たる議論は世に起るなり、若し各自に於て、未だ其の心に於て右の如く固定的に成りたること無きに拘らず、彼れ此れと是非の爭ひ有りと云ふとは是れ決して有るべき筈なし、之を譬へば今日越の國に出發して適きながら、既に昔日同處に至れりと云へると同斷にして、左樣なる

からずやと云へる義なり、胡大靈は曰く三句總承不亡以待盡、而嘆之、但承中帶申明耳、猶云爲人如是、不亦可悲乎と、〔終身役役〕役々は疲るゝ貌、林注薾に終身役々、言自苦也、不見其成功、無所成也と〔薾然疲役至可不哀邪〕薾は乃結切、音は「テッ」疲れ困む貌、疲役は役に疲るゝなり、王先謙曰く所有皆幻妄、故無成功、疲於所役、而不知如何歸宿と、蓋し上句の終身役役而不見其功とあるは、是れ勞して功なきなり、本句は是れ勞して功なきのみならず、又隨うて大に當惑困却を感ずることを謂へり、〔可不哀邪〕終身役役より不知其所歸に至るまでの三句は、上文の不亦悲乎を承けて、其の悲しむべきことを明かにしたるなり、乃ち上文の悲の字は、其の哀むべきことを悲しむなり、悲は人の悲しむことにして、哀は自から哀むことなり、〔其形化其心與之然〕化は變化することなり、其形化とは眞君の支配せる自然的形は、至極渾圓にして、其の事濟みたる後は、融然として消滅し、些の餘滓なきを、人一び受けて、固定的成形に變化したることを謂ふ、其心與之然とは、心も亦隨うて固定的に物に執着して、圓通妙融せず、頑然一點張りに凝り固まることを謂ふ、本書の外篇に哀莫大於心死とあり、本句は卽ち心死のことにして、此に至りては復當惑困却位の騷ぎにあらず、故に可不大哀乎と云へり、胡大靈曰く與眞君爲體(一體)之心、千古所同、是不化者二句、言其心是與形俱化者、而言其心非與眞君爲體之心也と、又曰く與眞君爲體之心、人之所以爲人者、喪其心則生猶死矣、上句言雖生猶死、此二句釋明之也と、又曰く二句申斷不見成功不知所歸、而申斷可哀也と、〔固如是芒〕芒は成疏に闇昧なりとあり、劉須溪は芒は忙と同じ、孟子に芒芒然歸とある芒と字義同じと解せり、岡松甕谷は、芒は芒々然見る所なき貌にして、民生の衆其の見る所なきこと皆此の如きか、抑も我れ獨り見る所なくして、他人或は我れの見る所なきが如くならざること有るかと反覆して、世人の區々として物を逐うて自から已む能はざることを嘆せしなりと說けり、今芒の字の解は劉說を用ふ、或は上文の一受成形不亡、以待盡とある亡の字も亦忙の字と同じとなし、一び成り定まりたる形ちを受ける以上は、忙しく騷がず靜にして、

我れのみ獨り自から煩忙を招きて、而かも他人は皆左程に煩忙ならざるか、乃ち吾人の持ち前天分として、果して如何に決定すべき問題なるか、

【解義】〔一受其成形〕一の字の上に人の字を加へて看るべし、其とは眞宰卽ち天を指して言ふ、成形とは成就したる形ち、卽ち固形的に著はれたる行動を謂ふ、乃ち行動は時と處とにより、又其の事物により圓通活用せる流動的行動を尙ぶが、莊子の主義なり、然るに固形的となりては、化石同樣にて圓通活用すべからず、待盡とは命數の盡き果つるを待つことにて、人の一生涯を貫くことなり、胡大靈曰く言眞君、不能外人心之用、以有所使、則人心之用有時、亦眞君所成之形而人受之者、然眞君之成形不過偶一在此、人得受之亦偶一耳、而用我者則執而不化、一往用之不論可否、至於死而後已也と、郭注は曰く言物各有分、故知者守知、以待終、而愚者抱愚、以至死、豈有能中易其性也と、此れ本文を、人物の智あり、愚あるは、本と各天分にして、終身變ぜざる義と解したるなり、一說として錄す、〔與物相刃相靡〕物とは外物なり、刃は逆なり、忤なり、靡は順なり、又刃は傷なり、靡は糜と通ず、本書の胠篋篇に子胥靡とあり、其の意義同じ、乃ち物と相刃傷し、相糜爛することなりとの說もあり、要するに人に折角貴重なる眞君を持てる身體なるに拘らず、下だらざる抵抗を外物に試みて、自から己を毀害することを謂ふなり、胡太靈曰く眞君所成、因物而無必、則於物無傷、用我者有必而迕物、則盡賊物也、此所以爲不亡之迹と、郭注は羣品云云（紛紜の義）、逆順相交、各信偏見、恣其所行、莫能自反とありて、本文を智愚の人、各其の境遇意見の殊なるよりして、相背馳し、終に相悟らざる義に解したり、〔其行盡如馳至不亦悲乎〕行盡とは、力の有らん限りを出だし、人の一生涯を行き盡くすことなり、如馳は馬の馳するが如く迅速なること、林注に行盡其一生、如駒過隙、不能以一息自寧、故曰行盡如馳而莫之能止と、莫之能止は莫能止之の倒語なり、胡大靈は此れ謂はゆる不亡以待盡の義となせり、不亦悲乎とは、不亦は或る本位の者に對して固より彼れは然かると共に、此れも然らずやと、對比して云へる辭なり、乃ち此にては本人自からは嘸ぞ哀しからんが、之を傍目で見る人も亦悲し

その活動が激烈なるとも、宛かも彼の風竅の樣々なる聲を發すれども、厲風濟りし後は、本來の虛無に還るが如く、其の過ぎ去りし後は何等の事もなく痕跡なく平然として靜かに立ち戻る者なり、故に其の事や一時形ちに見はることありとも、間もなく消え去れば、前にも「不見其形」とか、「有情而無形」と云へるなり、然るに世人の多くは一旦活動を有せる形ちが行動云爲上に見はるゝときは、執强く之を守りて失はざらんことを期して止まず、遂にその形ちは成形と名づけて、固定的性質となり、頑强に百事百物と抵抗衝突して、人の一生涯種々の障礙を引き起して止まざるなり、されば之を茲に形容して一び其の成形を受くれば、亡はずして以て盡くるを待つと云へるなり、而して其の物事と互に忤ひ、互に賊ひ、以て其の一生涯を行き盡くすことの速かなるは、宛かも奔馬の馳せ過ぐるが如く、實に迅速にして、而かも之を能く止むることとなし、卽ち一刻の休息をも得ざるなり、是れ乃ち己れ自分と日々に益々苦境に深か入り爲す者にして、本人は勿論ならんが、傍目から見ても、實に氣の毒のことならずや、右の如きは終身の間、役役

としてつかれ／＼て働きながら、其の爲すことは皆徒勞に歸し、何等の功果を收むるを得ず、畢竟爲ざると同じ落ちとなるのみならず、尙其の上に薾然（クダ／＼）として疲れ果てゝ、而も休まんと欲せども、自から其の落ち行く先きを知らず、徒に其の方嚮に暮るなり、是れ豈に自から其の愚なるを哀しまざるべけんや、洵に是の如きは僅かに一縷の氣息を繫ぎ留めて生存せるまでのことにして世人が之を死せずと謂ふとも、其の實何の益かあらん、卽ち最早生命は死したるも同じきなり、如何んとなれば其の形ちが眞君眞宰の自然的作用によりて見はれたると殊にして人の我意我見を以て、强ひて之を成形に變化せしめたるよりして、其の形ちが變化したるに隨ひ、其の心卽ち分身的造化が眞君眞宰となりて宿れる心は、亦形ちの變化と與に變化し、我意我見の專橫を極むる心と爲れば、最早や形ちこそ存在すれ、心は既に死したるなり、否な眞君眞宰は疾に見棄てゝ、太虛に飛び去りて、心の主府は拔け殼となれるなり、是れ豈に更に自から大に哀むべきとならずや、然れども凡そ人は是の如く先天的に全體煩忙なるべきか、其れ或は、

なり、此の段の文法は、先づ上文より汝皆說レ之乎其有レ私焉と問ひ詰めて皆悅も有レ私も共に無きことを言ひ、如レ是皆、有レ爲ニ臣妾ニ乎、其臣妾不レ足ニ以相治ニ乎、其遞相爲ニ君臣ニ乎と云うて、既に人に皆說と有私と共に無しとすれば、身體が皆臣妾となるべき筈もなし、亦身體が自治的に互に輔け、又遞に治者たり、被治者たるかと云はんに、元來身體其物は無知識なれば、左樣なる理由亦有るべき筈なしと、追ひ詰め、追ひ詰めて論究し、然る後に果して然りとせば、一人主宰者の人身中に在りて、之が總支配をなせることは知るべきなりと步を逐ひ、段を層ねて、進み、遂に其の有眞君焉云々の本意を逼り出したるなり、

一受ニ其成形一、不レ亡以待レ盡、與レ物相刄相靡、其行盡如レ馳、而莫ニ之能止一、不ニ亦悲一乎、終身役役而不レ見ニ其成功一、薾然疲レ役、而不レ知ニ其所レ歸、可レ不レ哀邪、人謂ニ之不死一、奚益、其形化、其心與レ之然、可レ不レ謂ニ大哀一乎、人之生也、固如レ是芒乎、其我獨芒、而人亦有レ不レ芒者乎、

【大意】　虛無自然の天則に乖きて我意我見を張る人は、心身共に疲れ果てゝ、遂に生命をも毀損することを言へり、上文に眞宰を論じて可レ行已信而不レ見ニ其形一有レ情而無レ形と云ひ、以て人の眞宰に對しては、情的觀察をなすべきも、形的觀察は難事なること、又眞君を論じて、如求ニ得其情一與レ不レ得無レ益ニ損乎其眞一と云ひ、以て人身の主宰たる心性は形而上にして、自然の理法なることを言へるが、此處は更に自然的心性より發したる行動云爲は、隨ひ生じ、隨ひ滅して、渾然として來去迹なきに反して、人の我意我見を張り貫く者は、其の言行固定停滞し、露骨圭角あるが爲めに、物事に牴觸衝突し、遂に自から疲れ、自から仆るゝ外なきことを說き以て下文成心の一段を喚起せり、

【通釋】　人たる者夛身的造化たる眞君眞宰と唱ふべき自然的心性の作用によりて活動する時は、如何に

對しては一視にて別に之のみを獨り愛すると云ふにあらず、然れば人の身體に於けるは皆說之と云ふにもあらざれば、亦有私焉と云ふにもあらざるなり、又人が身體に於て既に然りしとせば、身體が人に對しても何にも彼れが特に己を悅びたるが故に、我は特に力を盡くして働くとか、亦己を愛せざるが故に働かずとの觀念の有るべき筈なし、此れ乃ち人と身體との聯絡關係は右の如き意味あるにあらざることを云ひ、以て下文の疑議を起し之を解決する前提となしたるなり、「如是皆有爲臣妾乎」如是とは上句の皆說と有私との二義を承けて言ふ、臣妾とは臣妾僕婢と云ふが如し、古へは女子の賤役を執る者を概して妾と云ふ、「左傳」に男爲人臣、女爲人妾とあるが如き卽ち是れなり、必ずしも妻妾の妾のみにあらず、皆有爲臣妾乎とは、此の語は上文の汝皆說之乎とあるより來る、乃ち身體何れも僕婢の主人に事へて、忠勤を抽んずるが如くに、其の人の爲めに特に厚意を以て働く者なるか否か、既に人に於て博愛的に皆悅ばざるに、身體が獨り何に由りて皆我に特別の厚意を表して僕婢の如くに働く者ならんやとの意なり、「其臣妾不足以相治乎」乃ち耳目鼻口等の機關各々己れが專務の職司ありて、位置權力も亦略ぼ同等にして、尙進んで更も相使役し、之を統治する權能はあらざるかと云へるなり、「其遞爲君臣乎」君とは使役する方にして、臣とは使役せらるゝ方を謂ふ、例へば身の臂を使ひ、臂の指を使ふが如き、身は臂の君にして、指は又臂の臣たるなり、上文の其臣妾不足以相治乎の句は本句と一串して讀むべし、而して此の語は上文の其有私焉とあるより來る、乃ち上述の如是皆有爲臣妾乎とあるが如く、身體は人に對して特別の好意を有せざるものとすれば、身體同士にて互に相統屬して其の働きをなす者ならんか、蓋し既に人に於て曾て身體の或る部を特に私愛して特權を與へたることなければ、全身體何れも皆同等同權なるが故に、相服し從はざるとの意なり、「其有眞君存焉」眞君は眞正の君なり、乃ち前文に謂はゆる眞宰を謂ふ、焉も亦疑詞なり、乃ち上文の其遞相爲君臣乎と云へるが如く、互に君となり、臣となりて、相治むることは到底行はるべきにあらず、故に之を統治せんが爲めに、眞君ありて存する乎と云へる

眞宰の能力に就いて云ふ、卽ち眞宰の人に對する關係は前文に述べたる莫ㇾ知ニ其所ㇾ爲ㇾ使と述べたるが如く、能く人をして之を行は使むることあるは、已に十分に信じて疑はざれども、眞宰其物の形狀は如何なるかを見ずとなり、〔有情而無形〕情とは實情なり、形而上に就いて云ふ形は形迹なり、乃ち形而上に就いて目前相代るの實情を推知すべきも形迹上に就いて何に者が之を運用して相代らしむるかを確むることは能はざるを云ふ、「副墨」に有ㇾ情故能使ㇾ人、無ㇾ形故不ㇾ得ニ其眹一とあり、〔百骸九竅六藏〕骸は骨なり、百骸は多くの骨節を謂ふ、竅は穴なり、耳目口鼻及び下の二漏を九竅となす、藏は臟と同じ、心、肝、脾、肺、腎、命門を六藏となす、〔賅而存焉〕賅は備なり、人の體骨は外に在り、藏は內にあり、竅は內外を通ず、此の三者を備へ、以て一身を成せり、故に存すと云へり、胡大靈は云く以下再推ㇾ見ㇾ有ニ眞宰一、前以ニ衆竅之聲一（前文の夫大塊噫氣の一段參照）推、此以ニ形體之用一推、皆以ニ無ㇾ自爲ㇾ處、見ニ天之所ㇾ爲也と、〔吾誰與爲親〕吾とは人自ら謂ふなり、此及び下句皆問答に擬して云へるなり、此の句は下の汝皆說ㇾ之乎、其有ㇾ私焉の

二句を總昌す、乃ち皆說と云ひ、有ㇾ私と云へるは皆本句の誰與爲ㇾ親の反對なる與爲ㇾ親の義なり、〔汝皆說之乎其有私焉〕汝とは亦人を指して云へるなり、私とは私愛なり、其は擬議の詞又は殆ど同意にて多分斯くあらんと想像して云へる語なり、焉は乎の字と同義に用ふることあり、「詩經」の杕杜篇に嗟行之人、胡不ㇾ比焉とあり「春秋左傳」の隱元年に君何患焉とあるが如き、皆共に上に胡の字何の字の如き打ち消しの辭あるときは、皆乎の字と同じく疑詞となれるなり、此處も其といふ打ち消しあれば、亦同じと知るべし、乃ち均く我が形體中の物なれば、もと皆共に親み大切にすべき筈なるが、其れとも亦特に私かに偏愛する所とあるかとの意なり、此の二句は人の身體を愛するは固より博愛的にして決して何れの局部を愛せず、亦何れの局部を愛すと云ふが如き偏頗心あるべき筈なし、然れども例へば多くの身體機關に於て自然に目の付き易き處、例へば殊に手とか、足の端とかは清潔大切にするが如きは、人に於て一寸獨り之を私愛するが如く見ゆれども、是れ全く自然目に付き易きよりして然るなり、元來人は己が身體に

らざるか、汝ち、人たる者が既に身體の或る部分に限りて、私かに愛することなしとすれば、身體同士に於ては何れも共に同等の者にして、何れが超越せる特權を有する者とてあらざれば、多くの身體中或る者が獨り之が君となりて他の者を服從せしめて之を治め、支配することを得ざるなり、斯の如きときは凡その身體は何に由りて感覺し活動するかと云へば必らず眞正の君主とも云ふべき者が別に人身中に在りて之が主宰となりて總支配をなすならん、然れども前に述べたるが如く眞宰は情ありて形を見ず、故に情に於て之を求め得べきも、情は形而上に屬し、彼の形而下の者の如くに容易に正しく、是れぞと眞君其の物を突き留めて合點なし易からず、但し之を突き留めて合點し得ると得ざるとは、人の觀察力如何に在りて、卽ち其の人の能力が有るときは之を觀察し得べく、觀察し得る能力が乏しき時は觀察し得ざるなり、其の身體中に在る眞君其物の神聖たる點に於ては、之が爲めに益すとか、又損するとかは、一向これなきなり、乃ち人が能く之を突き留めて合點すると否とに關せず、眞君は依然として眞君なり、故に左樣なる無用の詮議は止めて眞君は自然存在する者と斷定すれば、其れにて宜しきなり、

【解義】〔若有眞宰焉〕眞は眞正にして間違なきことなり、卽ち「荀子」の正名篇に心慮、而能爲之動、謂之僞、慮積焉、能習焉、而後成、謂之僞とあるが如く、凡て人作的に心を使ひて爲すもの卽ち是れなり、眞とは其の反對なれば眞宰とは人作的にあらずして天然に極り居れる正眞なる主宰と云ふ意なり、若有の二字味ふべし、卽ち之が實際有りと斷言は爲さずして、有る樣に見え覺ゆるとの意なり、乃ち其の意義は眞宰と云へるものが信に有るにあらず、只造化自然の妙用を形容して、一つの人格的に爲して云へるのみ、〔而特不得其眹〕特とは特異の義なり、乃ち他事に比して一層區別ある義なり、其とは眞宰を指す、眹は迹なり、段玉裁が「說文」の注に、眹從舟之縫理也、引伸之、皆曰眹とあり、もと舟板の合はし目を眹と名づくるよりして、凡そ物の微かなる迹方を眹と名づけたり、眹兆眹迹などの語皆此よりして出てしなり、此にては眞宰の迹方に限りては、確と突き留むべからざるを云ふ、〔可行已信而不見其形〕可行とは

不レ得ル、無四益シ三損二乎其ノ眞一、

【大意】此に至りて情態の種々起伏生滅も亦自然より出づる者なることを言ふ、眞宰と云ひ、眞君と云ふ皆是れ造化自然の神聖妙用を人格的に形容して云へるなり、

【通釋】其の人をして種々なる情態の變化を起さしむるは誰ぞと考ふるときは、恰も一つの眞正なる主宰者ありて、總支配をなせるが如くに思へるが、然らばとて眞宰其物は如何なる人格的なるかと探究するときは、他事は兎に角、特に此のみに限りては、是れぞと突（ツ）き留めたる朕迹（アトカタ）は、手にも目にも掛らず、即ち天と云へる自然に出でゝ然るなり、されども彼の前に云へる十二般情態の如きが、日夜前に相代りて種々の現象を示しつゝあれば、彼れ眞宰が之を行ひ爲すべきことは、已に信ずべくして疑ふべからず、而して彼れが人格的形狀の如何なる者かは見るを得べからず、形狀は見るべからざるも、其の實情は之にて推し度りて合點し得べし、即ち形容詞を以てすれば、眞宰は情を有して形を有せざる者と云ふべきなり、尙ほ之を有形的人格に就いて比例し云はんに、人の形軀には百骸九竅六臟の如き種々なる機關が備はりて有り、此の中に就いて其の持ち主（ヌシ）たる吾（人）は、誰と與に相手となりて相親密をなさんか、百骸と親まんか、九竅と親まんか、將た六臟と親まんか、左樣なる偏親なくして汝ぢ（人）は汝ぢが身體に對して、誰れ彼れを問はず、博愛的に皆之を同樣に悦びて、氣に入るか、將た其の內の或る者を特別的に私かに愛するか、均く是れ汝ぢが身體なれば、汝ぢに於て之が全身體を皆悦ぶとか、又は或る一部分の身體を特に私かに愛するとかと云へるが如きことは無かるべし、即ち汝ぢに於て皆悦ぶところが無きと同時に、或る部分を私かに愛することもなかるべし、如し是れ然りしとせば、身體全部が皆汝ぢが臣妾となりて、汝ぢに忠勤を抽んでゝ奉公をなすが、汝ぢは既に彼を皆悦ぶにあらざれば、彼も亦皆が汝ぢに臣妾たらざるべし、又彼某の身體同士にて、自治的相互に臣妾たる者が出來て、共に治め合ふことに足らざるか、抑も彼の身體は遞に廻り持ちにて、或は其の一は君となりて他を治め、一は臣となりて他に治めらるゝ樣にはな

乎と云へども、翻りて善く熟考して見れば、そは旦暮に其所萠の者を得て居ればこそ、吾人は生ぜることなり、此れ他にあらず、造化自然の作用なりと暗々裏に下文の眞宰の事を嗅ぎ匂はしたるなり、此の説亦面白し、一參考とすべし、「非彼無我非我無所取」此れ双方相持ちにて互に立てることを言へるなり、而して彼とは上文の十二般情態の事を指し、我とは吾人人類を指して云へるなり、彼の情態たるや如何にも紛雜定りなきが如くなれども、若し此れなくして無事ならんには吾人の現世に生存することも亦其の用なきなり、然れども彼の十二般情態も吾人人類と云ふ者があればこそ、當世に其の現象を示すなれ、若し人類が無からんには、何に由て之を示すことを得るや、乃ち詰り彼我相持ちて各々成立し得るなりと云へる意なり、「副墨」には又把此字換作彼字言、我人不是彼(造化)、則我不以自成、故曰非彼無我、然非我去取他(造化)、則彼亦不能以自見、譬之、風離於竅、終不成響(上文地籟の一段參照)、故曰非我無所取、取是領取之意と云へり、乃ち後世に謂はゆる人非天地則不生、天地非人則不靈の意なり、一説に非我無所取は非我無彼の誤ならんと云へり、「是亦近矣云々」近とは近似なり、此れ彼我の關係を攻究して、此の相持ちの義までに推し至るときは、一と先づ其の理會を得るに似たり、されど果して何に物がありて、此の如き密接の關係を繋がしむることを爲すかに至りては、矢張り不可解に屬するなりとの意なり、「副墨」は如此而論、造化不離己身、似亦近矣、其如不得其朕何、故曰不知其所爲使、若有眞宰、而特不得其朕、此作一句看と云へり、

若有眞宰、而特不得其朕、可行已信、而不見其形、有情而無形、百骸九竅六藏賅而存焉、吾誰與爲親、汝皆説之乎、其有私焉、如是皆有爲臣妾乎、其臣妾不足以相治乎、其遞相爲君臣乎、其有眞君存焉、如求得其情與

クシ」と訓ず、美好なる貌即ち姚冶「ナマメカシキ」の態を作し、人に媚を呈すること、佚は迷と同じ、放逸なり、即ち姚の反對にして、氣儘勝手を爲し、人の機嫌などを取らざることなり、啓は心を開き、物事を打ち出だして隱さゞること、態は態度を粧ひ、脩飾をなす、即ち啓の反對にして、容態振りて高ぶることなり〔樂出虛蒸成菌〕樂は音樂なり、音樂の聲は鐘鼓琴瑟等の鳴り物を以て成れども、鐘鼓琴瑟の音の出づる處は空虛にして、別に此處若くは此物が即ち聲の出づる處なりと一定したる場處あるにあらず、故に音樂は空虛より出づと云へるなり、初蕈松蕈の如き諸菌は濕氣熱氣の欝り蒸せ上がる處より生ずれども、其の種は、もと何によりて成れるを知らず、乃ち氣は之が爲めには如何なる者と其の物體を示すことなし是れ皆一時、幻的影響に外ならず、上文に擧げし喜怒哀樂等の諸情感、亦猶此の如しとなり、故に下文に日夜相代云云を以て之を解說せしなり、此の二句文章上より云へば、上句に樂出虛とあれば、下句は宜く菌成蒸と云ふべきに、今蒸成菌と云へるは後世の修辭法より云へば蹉對とて、故さら步調不揃なる辭を用ひたるなり、〔日夜相代乎前〕日夜は每日每夜なり、前とは目前なり、〔而莫知其所萌〕萌は萌し生ずるなり、即ち此處の大意は喜怒哀樂等の十二般の情態互に起伏消長することと上述の如くにして、如何にも其の人は自由に活動し得るに似たれども、實は然らず、譬へば樂の虛より出でて乍ち作り、乍ち止むが如く、又蒸の菌を成して、倏ち生じ、倏ち死するが如く、每日每夜我が目前に相代りて、現はれ、而かも其の原子の由りて萌し生ずる所を知ること莫しと云へる也、乃ち上文に地籟を論じて、吹萬不同、怒者其誰邪と云へると意義相同じき也、〔已乎已乎知之矣〕已乎已乎と重言したるは深く其の萌の知る莫きを嘆息して、更に奮起し、一活路を求むる辭なり、故に下に承くるに我知之矣の言を以てせり、誤りで絕望落歎の語と解する勿れ、〔旦暮得此其所由以生乎〕此とは上文の喜怒哀樂等十二般情態を指し、其とは十二般情態を有する人を指して云ふ、「副墨」は此字即怒者其誰之誰、是他（莊子）爲眞宰立箇暗號、如禪家所謂這箇と云へり、乃ち此の字は造化を指したる者にして、莫知其所萌を一旦は深く歎息して已乎已

空虚なる樂器より出でゝ、種々の聲調をなして、器其の物には之が何等の痕跡もなく、濕熱の氣の蒸發して菌(キノコ)となりて忽ち生じ、忽ち死するが、されど氣其の物には之が爲めに、何等の形ちを示すことなきが如し、寔に起伏生滅して毎日毎夜間斷なく我が眼前に相互に更代して興るものなるが、而かも何人も其の右の如く喜怒哀樂等の情感の由りて萠す所の本源は何れに在るかを知るもの莫く、唯だ自然自然と云へる外何の研究をも未だ成り居らざるなり、さらば之を不可解の事として巳まんか巳まんか、先づ不可解として巳むより外はなき樣なれども、既に人として社會に生れ出でたる以上は、只空く塊然(ツクネン)として何事をも爲さずして巳むことは亦不可能なり、乃ち旦暮(アケクレ)に喜怒哀樂等の紛雜なる事が引き繼ぎて生じ至ればこそ、人も是れに由りて各々仕事が出來して、此の世に生活する者なるが、若し彼の紛雜なる事があらざれば、此の我れ我れ人と云へる者は生ずる必要も無し、故に彼の紛雜なる事に非れば、我れ我れ人は無きなり、又同時に我れ我れ人と云ふ者あればこそ彼の喜怒哀樂の如き紛雜なる事も出來るなり、故に我れ我れ人の生ずるに非れば、彼の事を取りて演ずること無きなり、右の如く人と事との關係は極めて密接にして須臾も相離る可からざることを論究するときは、人の心的本源の如何なるかを知るに近し、而して心的作用をして此の如く種々なる作用をなさしむる者は果して誰の力にて然らしむるかと問ふときは、何人も正しく其の物は是れなりと確かに知る者は莫きなり、嗚呼吾人の心的作用程不可解なるは無かるべし、

【解義】〔喜怒哀樂〕怒は喜の反對、樂は哀の反對、此より以下啓態に至るまで十二字亦同例なり、卽ち皆反對の意義なる文字を二字づゝ連擧して、情感の移動のことあるを云へるなり、〔慮嘆變慹〕成疏には慮とは未來の事を慮ひ度ること、嘆とは既往の事を悲み嗟くことゝ解すれども、岡松甕谷は慮とは得を計り失を慮(オモンハカ)りて營救して措かざること、嘆は圖り慮かる所の有る能はずして徒に之を浩嘆に付することゝ解せり、今之を用ふ、變は變動なり、輕躁にして常心なきこと、慹は執と同じ、執心の固滯して移らざることを謂ふ、〔姚佚啓態〕姚(エウ)は「ミメヨシ」又は「ウツ

辭なり、古文此樣の句法往々あり、卽ち「孟子」の梁惠王篇に爲肥甘不足於口與、輕煖不足於體與、抑爲采色不足視於目與、聲音不足聽於耳與、便嬖不足使令於前與とあるが如き、第一句は爲の字ありて、二句はなし、第三句は抑爲の二字ありて四句五句は共になし、此れ亦本文と類似の筆法なり、乃ち莊子此文の義は、其厭如緘也との言は、其の一は其老恤のことに喩ふべく、又其の一は以て近死之心、莫使復陽也のことに喩ふべしとの意なり、林西仲曰く旣以心鬭、則在內之閑藏若受緘縢束縛、竟成一老洫之無水、全不流動、如速死之人、無復生機矣と、是れ其老洫也と近死之心云々との二句を一串し一辭として解く、竟に上句に其殺如秋冬云云の句、亦此と同一例たるを悟らざりしなり、

喜怒哀樂慮嘆變慹姚佚啓態、樂出虛、蒸成菌、日夜相代於前、而莫知其所萠、已乎已乎、旦暮得此、其所由以生乎、非彼無我、非我無所取、是亦近矣、而莫知其所爲使、

【大意】人心の作用に就きて造化の存在と否とを參驗すべきことを說く、「辨正」に据れば喜怒哀樂慮嘆等の類は自然に人に存す、但人爲的に出づるときは、我意我見に陷り易く、天然的に出づるときは自然の現象にして、必しも惡の一邊のみに解すべからず、

【通釋】一體人の心は實に不可思議とも云ふべき者にて、或は喜ぶことあるかと思へば、忽ち怒ることあり、哀むことあるかと思へば、忽ち樂むことあり、物事を慮かりて心配することあれば、忽ち考への及ばざるを憤慨して、嘆息することあり、輕躁にして變り移りて落ち付かざることあれば、執心深く一定して移らざることあり、なまめしき成り振を爲して、人の機嫌を取るかと思へば、忽ち放逸にして不愛憎なることあり、心を打ち明けて思ふ儘を語ることあるかと思へば、忽ち身の態を粧ひて鹿爪らしく爲すことあり、右の如く初中終易り動いて居るが、是れ宛かも種々の鳴り物を用ひて、囃し立つる音樂は、もと中の

非之謂也とあるは、謂其司是非也と同じ、是れ亦倒字法を用ひたるなり、玄英は司は主なりと釋し、唯主是非、更無他謂也と說けり、又「莊子雪」には由是而是之非之、若有職司、而不敢廢と解し、岡松甕谷は必欲是我而使彼非、有執於二者間、如臨官司事故曰司是非之謂也と解せり、〔其留如詛盟」詛は祝なり、盟は誓なり、共に「チカフ」と訓ず、「周禮」の註には大事曰盟、小事曰詛とあるを、疏には盟者盟將來、詛者詛往過と云へり、乃ち盟は將來の事を約束し、詛は過去の事を繰り返して守り違はざるなり、然れども此處にては汎く其の人と約束するの義に用ひたり、深く拘る勿れ、〔其殺如秋冬」殺は肅殺なり秋冬は霜雪を受けて、艸木變衰して零落す、是れ天地肅殺の氣勝てばなり、〔其溺之所爲之云云」溺は耽溺なり、其の利慾に耽溺して爲す所の事は、復たび本との正道に取り戻しが叶はざることも、亦其殺如秋冬也と謂べきなり、詰り自から己が生命を戕ふものなり、是れ上句の以言其日消也とあるは消極的人物の行爲に就いて云ひ、本句は積極的行爲の人に就いて云へるなり、尙下文其厭如緘也云云の解を參照す

べし、一說に溺は溲なり、小便のこと、一說に爲之とあるの之の字は衍文にして、下の不可使復之也とあるの之の字は出の字の誤なりと云へり、〔其厭也如緘云々」厭は壓と同じ、緘は封緘なり、其の自から壓搾せられて、困苦を感ずること、宛かも封緘を破るが如く、窮屈極まることを謂ふ、玄英は惑情堅固、有類緘繩と解せり、洫は恤の字の假借にて、老洫とは老年に至るまで憂恤を免れざるを云へるなり、一說に洫は字の如く深き溝なり、「ミゾ」と訓ず、韻會に廣八尺深八尺、謂之洫也とあり、溝に比すれば更に深し、老洫とは舊るき溝洫にて、老ひて愈利欲の心の深きことを形容して云へるなりと、〔近死之心莫使復陽也」甕谷曰く陽は暖なり、古は寒を陰と曰ひ、暖を陽と曰ふ、「詩經」の大雅に視山陰陽とあるが如き卽ち是れなり、と復陽とは復び溫暖なること、乃ち老年をして若返りして活氣あらしむることを謂ふ、近死の上に宜く以言の二字のある意味にて解すべし、卽ち上文に以言其老洫也とある以言の二字をば分岐し、(甲)としては其老洫也の語を管し、(乙)としては本句の近死之心云云を管し、双方に分れて働きて立てる

也如緘、以言其老洫也、近死之心、莫使復陽也、

【大意】 上文を承けて單に人事に就いて小觀すれば一體の中既に此の各樣の異狀あり、得失を計慮し、焦火凝氷し、爲めに形化心消して、徒に死に近くのみなるを云ふ、

【通釋】 其の心の思を口外に發することは、弩の機(ユハズ)矢の括(ヤハズ)の發てるが如しとは、卽ち其の人が巧みに對手者の心の內に思へることを伺ひ探り、是れぞと睨を定めて、之が氣に叶ふ樣に、言葉を仕向けることを謂へるなり、又其の堅く留りて移さゞること詛(イノリ)盟を守るが如くとは、卽ち一旦己れが貫きし主張は、何れ迄も頑强に守りて後へ引けを取らざる樣に務むる執拗者の事なり、其の物を殺し枯らすことは、宛かも秋冬の寒さが艸木を吹き枯らすが如しとは、卽ち其の人物二樣あり、其の一つは自分に頻りに取り越し苦勞をなして、心配の餘り日々に我が生命を戕ひ縮むる智短漢のことなり、又其の一つは利慾の淵に溺れて、次第々々に深か海にはまりこみて、復たと取り返しが付かざる者のことなり、又其の壓搾するや宛かも封緘せられたるが如しとは、是れ亦其の人物に二樣あり、其の一つは卽ち老洫と申して、老年に至るまで憂洫の苦痛を逃るゝを得ざることを言へるなり、又其の一つは更に苦を累さね、勞を重さね大に弱り果てゝ、肉體は未だ死せざるとも其の精神は最早死期に近づきたるも同じことにて、殆んど生き甲斐もなし、乃ち之をして復た溫かなる生氣あらしめんと欲すと雖も、困難なることなり、乃ち其の實は死したると同樣なる者なり、

【解義】 〔其發若機栝云々〕機栝は「書經」の太甲篇に若虞機張、省栝于度則釋とあるを、注に機弩牙也栝矢栝也とあり、卽ち機は「ユハズ」と訓ず、栝は「ヤハズ」と訓ず、司は伺と同じ、是非は事理に就いて云ふ、此の句以下其厭也如緘に至るまで語法頗る奇なり、通常に書するとき、先づ之を通常語法の正意を先きにして、譬喩を後にする者に比すれば、其の位置顚倒したり、乃ち三句共に上の語は是れ譬喩にして、下の語は是れ正意なり、此の樣の修辭之を倒裝法と云ふ、是れ作者巧を弄せし處と承知すべし、又其司是

人の厂上に在るに象どるとあるを據とし、人が厂上に在りて危懼すれば、其の言を發するや必らず微なるよりして、詹詹と連ねて之を小言の形容詞に用ひたるなりと云へり、今按ずるに詹は澹と通ず、蓋し上の大言炎々に對し、小言の甚だ澹泊に過ぎて味ひなきを云へるなり、〔其寐也魂交〕寐は寢なり、「イヌル」と訓ず、魂交とは物事の夢をみることを謂ふ、「列子」の周穆王篇に神遇爲夢、形接爲事とあるを、張湛が注に神之所接謂之夢、形之所接謂之覺とあり、莊子が此文にある魂は卽ち神魂のことなり、此れ以て相互に參考とすべし、成疏に凡鄙之人、心靈馳躁、耽滯前境、無得暫停、故其夢寐也、魂神妄緣而交接と云へり、〔其覺也形開〕覺は夢の覺むるなり、形開とは身體機關の活動することを謂ふ、〔與接爲構〕構は合なり、互に交接して驩愛を構結することなり、又構は難を構ふなり乃ち人と相接して互に難題を仕組みて爭ひを爲すことを謂ふと解したる說もあり、今後說を用ふ、〔日以心鬪〕林注に不旦以來便有應接、内役其心、如戰鬪然とあり〔縵者窖者〕縵は簡文帝の解に寬心也とあり、蓋し慢と通ず、執心の寬慢なることと、窖は「釋文」に穴地藏穀曰窖とあり、乃ち穴倉のこと、簡文は窖深心也と解せり、心の奧深くして陰險なること、〔小恐惴々〕惴々は小心恐懼の貌、俗に云へる「ビク／＼」と同じ、〔大恐縵々〕縵々と怠る貌、卽ち餘り恐れ過ぎて、心が倒惑し、反りて凡ての事が緩みて、埒の明かざることなり、「考」には縵々蓋懷危懼甚遠、無界限之貌、周(莊子)意蓋以爲聖賢而下其執心、皆在慢窖密三者中而其處世、不能無憂懼、小人惴々然而懼、君子則憂深思遠、其恐縵々然耳と云へり、今按ずるに、上文の大知小知大言小言の如きは皆倶に大を以て賢者の知と言とを言ひ、小を以て小人の知と言とを言へば、此處の大恐小恐の大小を、賢者の恐小人の恐として看るも、亦一理なきにあらず、姑く其の說を錄して後考を俟つこととせり、

其發若機括、其司是非之謂也、其留如詛盟、其守勝之謂也、其殺如秋冬、以言其日消也、其溺之所爲之、不可使復之也、其厭

も天に聽かせてあれば、自然に閑閑としてしづかに裕かなるなり、小智とは瑣細なる智慧を有する人なるが、閒閒として、凡そ何に事によらず、彼此と見較べて、分別をなす者なり、又人の言葉は是れ心の思ひを外に表白するものなるが、廣大なる眞理を含める言は、卽ち大智の人より出づる者にして、自然に心の奥が言葉に見はれて、宛かも炎炎として火の燃え立つが如く、盛んにして光りあり、小言とは瑣細なる見解を立てたる言なるが、卽ち小智の人より出づる者にして、自然に詹々として後や前きを振り顧みて、氣遣はしき樣子あり、偖て大智大言の人は姑く之を置き、先づ小智小言の人に就いて云はんに、彼れ小智小言の人は晝夜となく、初中終に精神を使役すること劇しければ、其の寢るときは心魂共に交り、胸中に於て夢となり、其の晝となりて眠り覺むるときは、形體開きて活動し、毎朝起きてより以來、多くの物事に應接して、難題を構へ、日々心を疲らし、互に掛け引き爭ひを爲して、宛かも戰場に出でゝ相鬪ふがごとし、而して其の應接掛引をなすに方りて、誠に一から十迄前後を注意する者あり、甚だ心の縵ぎて諸事擲げ遣にする者あり、心構への深くして、宛かも窖窌の奥暗きが如く、外部より容易に測り難き者あり、誠に思慮周密にして落ち度なく、注意する者あり、此れ皆小智小言の人が、己れの精神を過勞して、物事に對する常態なるが、不斷に何に事に拘らず、憂懼を抱きて、恐れの小なる時は、卽ち小事に於ては惴惴として、「ビクビク」と氣遣ふのみにて、恐れの大なるとき卽ち大事に臨みては、餘りの恐れ方にて、反りて氣が縵み〳〵て、凡て何に事をも手に着かず、失心同樣なる情態たり、

【解義】〔大知閑閑〕知は智と同じ、既に前篇に見ゆ閑々は恬靜なる貌、卽ち落ち付きて靜かなること、大智の人は凡て事を自然に任せて私意を挾まず、故に其の態度が落ち付きて靜かなるなり、〔小知閒々〕閒は「廣雅」の釋語に覸也とあり、「ウカガフ」と訓ず、人の油斷隙間を伺ひて、狐鼠〳〵と事を爲すことなり、〔大言炎々〕炎々は熾盛にして光輝ある模樣なり、〔小言詹々〕詹々は小辨の貌なり、岡松甕谷は小言の貌となせり、詹の字形はもと产と言との二字より成り立てるを以て、淸の段玉裁の説には、产の字は

に大塊噫氣を以てし、特に證するに地籟を以てし、再び請ふに及んで、乃ち吹萬不同、而使其自已と曰ひ、此に至て始めて天籟の眞機を泄らしたれども、惜むらくは子游、形可槁、心不可灰の眞我たるを知れども、此れ乃ち籟の天なることを悟らざるなり、凡そ人に在りては心は天君たり、籟とは卽ち吾が心の作用、凡そ言動に形はる者、皆是れ籟なり、必ずしも聲のみを籟と爲ざるなり、君主は端拱して無爲なるべし、而かも一日も位を失ふ可からず、心は寂靜にして思ふ無る可し、而かも一時も泯滅すべからず、心は無聲と雖も而かも聲聲者（聲の原理）の其の（心）中に存するあり、此れ宛かも鐘鼓の懸に在りて聲たざるも、聲の原理は自然に具備せるが如し、然るに昧者は徒に彼の形相の起滅に泥みたる其聲聞の間斷あるを知るのみ、且人籟地籟は他物の力によりて動あり、寂あり（人籟は人の口により動き口を離るれば寂かなり地籟は風起れば動き風止めば寂かなり）、天籟は自然にして他力の動寂せしむる外に超越し、眞宰あり、眞君あり、實に聲聞の主となりて自から動き、自から寂かなる也、學者儻し能く之を己が心に反求して其の歸趣を得るときは、內は之を身に揆り、外は之を物に觀て、始終各々本源に契ひ、小大皆均く一致に歸す、安くに物論の齊からざる者あらんやと、是れ頗る諸家の見解と殊なる者ありて、未だ必しも莊周其人の本意に中るや否やを知らざるも亦一說として存して可也、

大知閑閑、小知間間、大言炎炎、小言詹詹、其寐也魂交、其覺也形開、與ㇾ接爲ㇾ構、日以ㇾ心鬪、縵者、窖者、密者、小恐惴惴、大恐縵縵、

【大意】　上文は籟聲の空虛より出で、、空虛に還ることを言ひ、以て自然の道の神聖妙用なることを暗示し、此の段は人情の變態に就いて摹寫し、上段の風木形聲と同じく、一時空虛的幻影なることを言ひ、以て自然の大觀よりすれば、是非の見俱に泯滅に歸すべきを說けり、但し前段は譬喩にして、此の段は正言したるなり、陳壽昌は曰く、以下莊子の言と、

【通釋】　人の智慧に於て、大智と小智との人あり、大智とは廣大なる智慧を有する人なるが、凡そ何に事

塊の噫氣に譬へて地籟の目あり、大塊とは造物の異名にして、卽ち自然の理法を謂へるなり、乃ち風なる者は此の大塊の噫氣なるが、萬竅の怒號するや、衆木の竅を異にするや、衆竅の聲を殊にするや、皆各々其の受くる所に稱はざること莫し、彼の調々刁刁を見よや、風止まんと欲して而かも猶尙動搖し、又其の中に大動小動の殊なるあり、去れども早晩均く止りて、終に同く靜かなるに歸するは、是れ衆聲の終に齊きに歸するを知る可きのみならず、亦衆形の終に齊きに歸するを見るべきなり、以上の言に由りて既に人籟地籟を明かにしたれば、子游は遂に天籟を問へり、子綦は答へらく吹萬不同、而使其自己は此れ天籟なり、天籟とは自然の聲にして、豈復た別に一物あらんや、卽ち人籟（比竹）地籟（衆竅）の吾が人生に接して聲を成すや、自然に生じて、自然に滅するが如き者、是れ天籟と謂ふ可きなり、然れば聲の短長高下あるや、物各々咸な自ら取るものなれば、復た奚ぞ其の間に不平を容れんや、而して彼の其の初めに萬竅怒號して衆聲の各殊なることあるは、是れ誰か之をして然らしむるや、豈に天に非ずや、豈に自然に作り、自然に輟む者にあらずやと、以上は郭象が本章を解する大旨なるが、呂惠卿は曰く、比竹の物たるや、人皆之を聞きて、其の中空虛にして有ること無きを知れり、今我（人）の我たる所以の者亦然り、又謂はゆる萬竅の怒號は何ぞや、我ありて其の心形を役する時（形未如槁木、心未如死灰の時）に異らんや、又衆竅爲虛は何ぞ我を喪うて、枯木死灰の若くなる時に異ならんや、而獨不聞乎と云ひ、而獨不見乎と云ふは（共に本文參照）地籟の作止は、汝ぢの嘗て聞見する所にして、心の起滅は汝ぢの未だ嘗て聞見せざる所なり、其の嘗て聞見する所を以て、其の未だ嘗て聞見せざる所を推し究むるときは、天籟なる者は自から知るべしと、褚伯秀は曰く、形固可使若槁木とは形にして、是の如くならしむ可しと、之を正言したるなり、心固可使若死灰乎とは、心をして是の如くならしむ可からずと、之を反問したるなり、今者吾喪我とは是れ子綦が明かに自ら其の吾あるを知れることを告白したる者なれば、心は應に死灰の如くなるべからず、是れ眞我の依然として存するありて、滅動不滅照の義なり、子游の其方を請ひ問ふや、答ふる

な己れ（物）自ら知る樣にせしむるなりと解す、（玄英）、是れ二說なり、又上句の吹萬不同とあるは、天氣吹照して萬物を生養し、形氣同からずと解し、此の自已の已は止なり、各々をして其の性を得て、而て止らしむるなりと解す（郭慶藩司馬彪の說を引く）、是れ三說なり、〔咸其自取〕竅の形ちの異なるに因り、之に相應したる聲あるは、是れ聲は本と竅其物が自ら之を取りたることを言へるなり、郭注に物皆自得之耳、誰主怒之、使然哉とあり、乃ち竅形に因りて風聲は同からざるも、各々自から滿足することを取るときは未だ始めより同一體となりて、齊からずんばあらず、乃ち羣生の紛紛して萬象の參差たるを明かにせんと欲すれば、顧みて之が道理を己が分內に就きて、自から求め取りたらんには、未だ嘗て滿足せずんばあらずとの意なり、〔怒者其誰邪〕怒は上文にある萬物怒呺の怒なり、風の烈く吹き起ることを謂ふ、其誰耶とは其れ誰ありて然らしむるやと反問したるなり、子綦の言は此に止まる、蓋し子綦の此の答の大意は竅の鳴りて聲を起すことは風の怒呺之をして然らしむ、風の怒呺は又誰れか之をして然らしむるか、是れ冥々中の主宰、卽ち天に非る莫きことを知るべしと云へるなり、乃ち此れ別に天籟に就いて言はざるも、其の義は自から言外に躍如たり、此れ不答の答なり、陳壽昌は曰く此蓋以風聲形物論也、聲由風生、倏起倏滅、論由心造、何是何非、必無風而後衆聲息、必無心而後衆論息、此漆園（莊子）欲齊物論而先言喪我也と、

【備考】子游子綦の天籟地籟人籟の問答は、莊子の假りて物論を齊くする主旨を示したる者なるが、但其の文章の奇健にして、論旨の深奧なるより、古來講者、其の說亦隨うて衆し、今參考の爲に、其の二三を摘述せん、先づ郭注の大旨を述べんに、曰く、籟はもと簫管なり、簫管は參差として宮商律を異にす、故に籟に短長高下萬殊の聲あり、而かも其の受くる程度、は、各々管其物の大さに相當なる分量なれば、其の自から滿足するの點に至りては、皆共に一にして、固より優劣を其の間に置く可きにあらず、之を彼の風竅の各々音を異にすれども、亦皆其の形ちと聲と相應したる者にして、咸な以て自から滿足せるに比較するときは、其の理や相同じ、是を以て籟を假りて、大

して、竅若くは竹其の物が何れも咸な自から己れの力にて之を取れるが如く思へるなり、是れが卽ち天籟の天籟たる所以にして、蓋し自然の神聖にして不思議なることは實に此に存せり、試に之を善く探求して見よ、斯の如く色々の形ちの物が彼自身に能く種々なる聲を發するかと思へば、彼の厲風濟則衆竅爲虛と云へるが如く、卽ち其の竅中に於て聲の去りたる後を見れば、左しも一時猛威を逞くせし、變化を巧にせし物の跡方は、何等の形も影も聲と諸共に、彼の末だ聲を發せざる昔に復りて、全く虛無となりて一つも目に見、耳に聞くべき者なきなり、然れば彼の前きに怒號して聲を發せし者は、其れ全體何に物なるか、必らず何に物かありて然らしめしならん、卽ち他にあらず、是れ自然なり、自然は天然なり、乃ち彼の聲は本と天然より發せし者なるが故に、姑く籟を以て之を形容して天籟と名づけたるなり、さて汝ぢ此の天籟の道理を善く會得すれば、凡そ天下の萬事萬物もと同く虛無にして、其の種々色々の現象は、皆な一時的の假相たるに過ぎざることを悟了すべし、乃ち吾が形を枯木にして、心を死灰にして生死を同一にすることは、復た何ぞ怪むに足らんや、卽ち斯の天籟を會得して居ればなりと、

【解義】〔夫吹萬不同〕吹とは逍遙遊篇に云へる生物以テ息相吹ク也とある吹の字と同義にして、此處は本篇の前文に大塊之噫氣、其名爲風とある噫氣、卽ち風を換字して吹と云へるなり、萬は多數を形容せる辭、乃ち吹ける風は色々の竅穴に隨ひ、種々の聲ありて、各々不同あることを云へるなり、是れ地籟則衆竅是已とある子游の言に因りて衆竅を主として言を立てたるなれども、人籟則比竹是已とある比竹の義も、大體同樣なれば包含して言へる者と承知すべし、

〔而使其自己也〕上句の吹の字、此句の使の字、皆天の作用に屬す、乃ち吹きし者も天なり、使むる者も亦天なり、此句兩說あり、乃ち自は從なり、「ヨリ」と訓ず、乃ち彼の同からざる吹卽ち風をして皆各各衆竅の自己の力を以て斯の如く聲を發する者と思はしむるなりと解す、「郭注」に是れ一說なり、又自己とは、己れ自から之を知ることにて、卽ち竅は萬殊ありて同からざるも、風はもと一體にして、唯物の大小に由り、各々其れに相應じて種々の聲をなせることを咸

子游曰、地籟則衆竅是已、人籟則比竹是已、敢問天籟、

【大意】 地籟人籟の事は、子游の口を藉りて撤除し、直ちに天籟の緒を啓く、

【通釋】 子游は子綦が上述の言を聞きて曰く、成程地籟は了解致したり、即ち御敎へに依れば樹木の種々なる穴ある處へ風吹き度りて、其の穴に聲發り鳴り響くことが即ち是れ地籟なり、又先生の人籟と仰せらるゝは地籟を以て推察致すに、簫管の類にて、竹の管を數比べて人が其の口へ唇を加へて息を吹き入れて聲を發する者が、即ち是れ人籟たるを疑はず、さて三籟の中以上の二籟は合點を致せしも、獨り天籟と申すことは、何を指して斯く仰せられしか不審晴れず、敢て如何なる物を天籟と云ふべきかを伺ひ奉るなりと、

【解義】 〔比竹是已〕 比は比次なり、順序立てゝ竝ぶることなり、比竹とは竹を比次して製したる物、即ち笙簧の類を云ふ、人籟は比竹のみにあらず、此の外、鐘鼓琴瑟の如き者あれども、特に其中の一を擧げて言はれしのみ、〔敢問天籟〕 地籟は衆竅に就いて見るを得べし、人籟は比竹に就いて見るを得べし、是皆肉眼にても形體に据りて推して知るべし、唯、天籟に至りては其の理深玄にして卒に頓かに悟り難し、故に今庸昧を冒して、爲めに疑義を解決せんことを請ふとの意なり、

子綦曰、夫吹萬不同、而使其自已也、咸其自取、怒者其誰邪、

【大意】 此れ天籟を說く、但曩きに既に地籟を具示したれば、此れ其の大體を述べ、以て互に參比して自得せしむるなり、

【通釋】 子綦乃ち之に答へて曰く、子既に地籟人籟の何物たることを承知すれば、天籟は其の道理を推して見るときは、知り難きにあらず、試に見られよ、一體彼の衆竅なり、若くは比竹なりが吹いて聲を作すことは本と實に一つの風なり、若くは音なりに相違なけれども、竅は衆形あり、比竹も各調ありて萬殊にして同からず、されど各々自から其の形ちに應じ、調に順ひて、特得のことあり、因りて各々自から滿足

りて忽ち鳴りの止まるを喩へて云へるなり、謞は「字彙」に箭去聲とあり、鳴鏑の鳴り響く聲にして、風聲の疾く吹き去ることを喩へて云へるなり、〔叱者吸者〕叱は咄叱なり、しかると、風聲の粗く吹き出づる聲を喩ふるなり、吸は氣を吸ひ込むことにて、風の細く吹き込む聲を喩ふるなり、〔叫者譹者〕叫はさけび呼ぶこと、風の高く揚がる聲を喩ふるなり譹は音は（豪）號哭の聲なり、風の下がりて濁りたる聲を喩ふ、〔宎者咬者〕宎は音は杳、深なり「フカキ」と訓ず、「字彙」に宎は窔と同じ、室の東南隅なり、深室の中に發するが如き聲を謂ふ、咬は鳥の聲にて「サヘヅル」と訓じ、又は哀しむ聲にて「ナゲク」と訓じ、又咬は齩と同じくして骨を嚙むことにて、「カム」と訓ず、林西仲は吠而聲續と注し、長く續きて吹き來る風を云ふ者となせり、今姑く林說を用ふ、玄英曰く略擧樹穴、卽有八種、風吹木竅、還作八聲と、〔前者唱于隨者唱喁〕「副墨」に于輕唱也、喁重和也とあり、前に吹き渡るときは于と輕く唱へ、後には次第に喁と重く風強くなりて、彼此和合するなりと、毛利貞齋は云へり、〔冷風則小和厲風則大和〕冷風は輕き風なり、飄風は急疾なる風なり「爾雅」には回風爲飄とあり、和は唱和の和にして、相答ふることなり、唱和の二字を承接せずして分割し、上文には唱于唱喁と書して共に唱の字を重用し、此處にては小和大和と書して、又共に和の字を重用したるは是れ亦以て文章修辭の奇を弄せる處を見るべきなり、〔厲風濟則衆竅爲虛〕厲風は大なり、烈なり、濟は止なり、風の渡り了はること、風止むときは萬籟寂然たり、故に衆竅虛となりて何の聲も無きなり、〔而不見之調々云々〕此の句は形ちを主として說くが故に、聞と云はずして見と云へるなり、調々は大に搖く貌、刀々は舊本は刁々に作れども、今「釋文」及び盧文弨の說に從うて改む、小く搖く貌なり、劉須溪曰く說了許多竅穴、更著調々刀々、則林梢之披靡、皆無遺矣又曰く物論從何處而起、便是相競、無對頭了、莊子欲形容物論之無情、却從天地間、得其尤無根者、曰風知風之所從起與其所從受、則不齊者齊矣（中略）、世間無日無是非、小是小底風、大是大底風、然終必寂然、而所謂齊也識其所從生、則不待止而齊矣と、

而獨不聞云々とは是れ人々の平素に聞きて十分承知し居ることなれば、汝ぢに限りて獨り聞かざることは無き筈なれど、吾れは汝ぢに早く了解せしめんが爲めに、便宜上其の分かり切りたる物に就いて云はんとの意味なり、下文の獨不見之調々乎之刀刀乎とあるも亦同意味なりと承知すべし、但此所は專ら風の聲に就いて云へるが故に、聞の字を用ひ、下文は山林大木の形に就いて云へるが故に、見の字を用ひたるなり、〔山林之畏佳〕畏は鳥罪切音は「ワイ」、一に嵔に作る、佳は祖罪切、音は「サイ」一に崔に作る、嵔崔は高く聳ゆる貌、郭注に大風之所扇動也とありて、成疏に畏佳扇動之貌翏翏淸吹擊蕩山林、遂使樹木枝條、畏佳扇動とあり、扇動は卽ち煽動と同じければ、是れ山林の樹木大風に吹かれて、枝葉の煽動せらるゝことゝ解したるなり、林西仲は山林高低曲隈之處、所以受風者と云へり、〔大木百圍之竅穴〕五寸を圍と曰ひ、又一抱を圍と曰ふ、竅穴は共に（アナ）と訓ず、樹木の孔なり、〔似鼻似口似耳〕樹孔の形ち、而して本文は人の形ちを以て喩へたるなり、乃ち似鼻とは樹木に二竅ある者なり、似口とは一口ある者なり、似耳とは竅の斜に入れる者なり、〔似枅似圈似臼〕共に器物を以て喩へたるなり、枅音は「ケイ」又音は「ケン」、「トガタ」と訓じ、俗に「マスガタ」と云ふ、家屋の柱の上なる四角形の木にして度架たる棟の柢口を承くる者を云ふ、圈は杯圈なり、「サカヅキ」と訓ず、又「マゲモノ」と曰ふ、玄英は畜獸の闌となせり、「ヲリ」と訓ず、臼は「ウス」と訓ず、卽ち米穀を舂つく器なり、俗に「擣キ臼」と云ふ、似枅とは樹竅の四角形なる者なり、似圈とは竅の圓形なる者なり、似臼とは孔の淺き者なり、〔似洼者似汚者〕地形を以て喩ふるなり、洼は音「ワ」、「マガル」又「フカシ」と訓ず、故に曲洼又は深洼などの熟字あり、又竅と同じ「クボミ」又は「クボシ」と訓ず、陸方壺は水聚牛跡曰窪と云へり、乃ち牛蹄の跡に小水の聚る處なり、汚は音「ヲ」にして「ホル」又は「クボム」と訓ず、窪なる地に水のある處なり、似洼とは樹木の竅の曲れる者なり、似汚とは竅の廣き者なり、似鼻似口より似洼似汚に至るまで、皆竅形の齊からざることを言へり、〔激者謞者〕此れ以下風聲の齊からざることを言ふ、激は水の物に觸れ當りて激する聲にして、風聲の物に當

畫、莊子地籟一段、能畫出風、掩捲而坐、猶覺翏々之在耳と、

【通釋】　抑も汝ぢ獨り此の遠方より翏々として長く續きて吹き來る風の聲を聞かざりしが、吾れ一應之を說き示さん、此の長く續き吹ける風が來るときは、山林の畏隹とて、高く聳えたる處に百抱へもある大木にある穴は誠に千態萬狀とも申すべき樣々の形ちを爲せるが、或は二つ穴がありて人の鼻の穴に似たる者、或は一つ穴がありて口に似たる者、或は穴が斜めに深くして耳の穴に似たる者、或は穴が四角にしてもと柱の上の橫木を枅と云へるが、宛かも其の形に似たるもの、或は圓き形ちを爲して、圈物に似たるもの、或は淺く扁くして臼に似たる者、或は形ち曲りてもと牛の通りし跡に、水溜りを爲すを洼と云へるが、宛かも其の形ちに似たる者、以上の如く色々の形ちを成せる穴ども有り、さて其の穴どもに風を受くるときは、亦種々の聲や響きを爲せるが、或は宛かも流水が岩角に觸れ礙られて激するが如き者あり、或は宛かも鏑矢が風を切るが如く、シユウ〳〵と聲をなす者あり、或は宛かも人を叱り付くるが如き聲を爲す者あり、或は人が息を引き入れて吸ひ込むが如き聲をなし、或は大聲を揚げて叫喚するが如き聲をなし、或は微かに遠音の如き聲をなし、或は犬が吠ゆるが如く、長く續ける聲をなし、又風が前方に吹き去るときは、吁(ウー)といふ聲を發し、其の後より吹き來る風は喁(ゴウ〳〵)といふ聲を發し、相互に唱へ和することあり、凡そ冷風とて輕くして小なる風は穴に入りても小さく響き、飄風とて疾きつむじ風は、之に相應して穴に入りても大きく響くなり、而して厲風とて暴風の吹き濟りたるときは、前に種々なる聲響を發せし多くの穴の中は何等の聲も留めず、至く虛空となりて、一つも聞ゆること無し、此の時に當りて、汝ぢ(子游)は獨り此の樹木の梢や枝が風に搖られて調々とてさわ〳〵と大動ぎにゆれる形ちや、刀刀とてそよ〳〵と小動にゆれる形ちを見しことありたるや、固より必らず見て承知致して居れるならん、乃ち此れが予が前に云へる地籟の一部分なりと、

【解義】「而獨不聞之翏々乎」而は汝なり、「ナンヂ」と訓ず、之は此と通用す、寥は良救反音(リウ)翏々は長風の聲なり、飂に作り、或は飂飂に作る、音皆同じ、

き聲にて叫ぶなり、
【解義】〔夫大塊噫氣〕大塊は地なり、塊は凷の字の一體にして、「說文」の上部に凷墣也とあり、墣は（ツチグレ）にしてもと土地は「中庸」に今夫地一撮土之多、及其廣厚、載華岳而不重、振河海而不洩、萬物載焉とあるが如く、極めて微小なる土より積みて廣大なるに至りて地を成せり、故に地を以て大塊と爲すなりと、是れ兪樾の說なるが、郭象は大塊者無物也と注し、玄英は造物名と云ひ、司馬彪は大朴之貌と云ひ、共に虛無自然の義に釋し、天を指して云へることに解したれども、兪樾は以て皆其の義を失せりと爲し、且此の處は本と地籟を說きしものなれば、大塊者非地而何と云へり、今其の說を用ふ、唐の李太白が春夜宴桃李園序に大塊假我以文章の語あり、此の大塊の二字は莊子の本文より出でたるが、是れ亦謬りて大塊を以て天と解したるなり、噫は「オクビ」と訓ず、俗滿して出づる氣なり、乃ち此の處地氣の土中より吹き出だして風となるとの義を人身の噫氣を出だすに形容して云へるなり、〔是唯無作〕是は此と通ず、此の風を指すなり、作は起なり、「オコル」と訓ず、無作の下に則已の二字を加へて看るべし、乃ち下文に大に作りたる時の狀を盛に言はんが爲めに、先づ此の風が作らざるときは其れ迄のことと一應束りをなして云はれたるなり、〔萬竅怒呺〕竅は穴なり、萬竅とは種々に形ちを殊にせる穴なり、呺は號なり、「ヨバフ」と訓ず、怒は前篇の怒飛の怒と同じ、怒號とは烈しく響きを發することを謂へるなり、

而獨不聞之翏翏乎、山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼者、似汚者、激者、謞者、叱者、吸者、叫者、譹者、宎者、咬者、前者唱于、而隨者唱喁、冷風則小和、飄風則大和、厲風濟則衆竅爲虛、而獨不見之調調之刁刁乎、

【大意】地籟の情態を說けり、古人云ふ、萬象唯風難

參差（不揃のこと）として、其の聲は肅々として淸り、大なるは三十管あり、長さ三尺四寸、小なるは十六管あり、是れ籟とはもと簫の別名たるが、其の本義なるを、莊子は其の管の中空虛にして、而かも聲あるを以て、借りて天地萬化の根本は虛無よりして種々の現象を呈出するに比して籟と云ひ、尙ほ之を元來の簫籟其物と區別せんが爲めに、簫籟を人籟と名け、他を地籟又は天籟と名けたるなり、「孟子」に仁義の高き德ある者を王侯大夫の尊きに比し、其の爵位を假りて比し天爵と曰ひ、因りて本來の爵位たる王侯大夫を人爵と名けたると同一語法なり、（而未聞天籟夫）夫は哉の字と同意義に古文は用ひたり、

子游曰、敢問二其方一、

【大意】子游の問に藉りて、三籟の論を喚起す、

【通釋】子游問うて曰ふやう、人籟地籟天籟と申すことは始めて承はりし次第に御座りますが、さて如何にせば其の義を了解致さるゝことなるか、誠に御勞煩は恐縮に存じますが、敢て憚りなく其の方法を伺ひ度きことに存じます、何卒敎へを垂れ給はんことをと、

【解義】（敢問其方）敢は冒昧の辭即ち自から向ふ見ずに致すとの意味にて、卑者が尊長者に對して自己を謙抑して、先方を尊敬して云へる辭なり、「儀禮」の士虞禮に敢用二絜牲剛鬣一とあり、注に敢冒昧之辭と釋し、孔疏に凡言レ敢者、皆是以レ卑觸レ尊、不二自明一之意と解せり、其方とは其術と云ふが如し、

子綦曰、夫大塊噫氣、其名爲レ風、是唯無レ作、作則萬竅怒呺、

【大意】子綦三籟の中に就いて、先づ其の一なる地籟の一を形容して、子游に說き示したり、

【通釋】子綦曰く夫れ大塊と申して、一體土地は塊りて形ちを成せる大物なるが、此の大塊より噫氣とて、其の中に欝積りたる氣ありて、宛かも人の噫の如くに吹き出だす者あり、其の氣の名を風と謂ふ、是れ此の風は唯だ作らざれば其れ迄にて、何等の異りたることもなし、若し苟も一朝にても此の風が吹き作るときは、有りと有らゆる萬の樹木の穴は吹き來れる風を受けて、鳴ることは殆んど怒れるが如くに凄じ

によりて然るかを解せるか、汝ぢは人籟と云うて人間界の鳴り物を聞きたるならんが、而かも未だ地籟と云うて地上の鳴り物を聞かざりしならん、否汝ぢ地籟を聞きたるならんが、而かも未だ天籟と云うて、天上の鳴物を聞かざりしならんと吾は思へるなり、

【解義】〔偃不亦善乎云々〕偃は子游の名なり、師匠より弟子を呼ぶときは、其の名を呼び捨てにすること、古人の禮なり、在三の義とて父生之、君養之、師敎之、三者所在致死と「左傳」に欒共子が言を載せたり、乃ち君父師の三者に對しては、身命を棄てゝ恩誼を報ゆる者と爲せり、而して父前に子は名いふ、君前に臣は名いふ、師前に弟子は名いふべきものとし、其の自から稱すると君父師之を稱するとに拘らず、共に各々其の前に於ては其の名を呼び捨てにし、以て先方に敬意を表するを禮と定めたり、故に「論語」にも孔子が顔回に對して回也終日不違如愚と云ひ、曾參に對して、參乎吾道一以貫之と云はれたるが如き皆同じと知るべし、不亦善乎とは亦は他の或る本位者に對して此方も矢張り同じとて相對的に言へる辭なり、善とは道理尤もなりと同情せる辭、而は汝なり、或は爾に作る、乃ち既に道理が分かりて居るなれば問はざるが尤なれども然しながら汝ぢが道理が分らずとて問へるも亦同じく、尤なることゝせずして濟さるゝか左様はならずと云へるなり、此の文章もと宜く而問也不亦善乎と云ふべきを、倒句法とて、脩辭の一法よりして故らに此の如く倒置したるなり、〔今者吾喪我〕今者と殊更に抽き出したるは、今日は然るも、昔日は左樣ならざりしとを自白したるなり、吾我の二字共に「ワレ」と訓ず、概して言ふときは同義なれども、分ちて云ふときは、吾は己が一身を指して、我は物我と云へるが如く、比較的廣義に用ふるなり、卽ち此の所は今日は此の己れの感覺にては吾れと云ふ物が他の物たるか我が自ら有たるかを忘れたりとの意なり、「郭注」に吾喪我我自忘矣、我(旣)自忘矣、(則)天下有何物足識哉、故都忘外內然後超然自得とあり、善く此の意を解したり、〔汝聞人籟〕籟は「フエ」と訓ず、「字彙」に說文を引きて、三孔(穴)龠也と、郭璞は籥一名籟、又凡孔竅機括皆曰籟、莊子人籟則比竹是已、地籟則衆竅是已、天籟則人心自動者是已と云へり、今按ずるに籥は竹管を竝べ立て、長短

也と云へり、乃ち何の故ぞやと質問したる辭なり、王引之は居は乎と同義なれば、居の字の下に復乎の字あるべからず、疑ふらくは下文に因りて誤りしならん、「釋文」には何居の二字ありて乎の字なしと云へり、〔形固可使如槁木〕形は形軀なり、槁木は枯れたる木なり、如槁木とは卽ち形軀の寂れ果て生氣なきに喩へたるなり、〔心固可使如死灰〕死灰とは既に消え果てたる灰なり、如死灰とは卽ち心の冷却して情感なきに喩へたるなり、上句及び本句は本と古へ至人を稱贊せし言なるを今子游此に引きたれば、故に兩句共に固の字を置きて其の自分の言にあらざることを明らかにしたるなり、按ずるに郭注の如く上文の似喪其耦を配匹を喪ふに似たるに解するときは、此の兩句の形容尤も妙味あるが如し、〔今之隱几者云々〕今は今日なり、昔は昔日なり、前日のこと、此れ今日の机に憑る先生は前日の机に憑られし先生と相違せりと云うて、深く驚き怪みて問ひたるなり、郭注に子游常見隱几者、而未見若子綦也とあり、後人皆な之を襲用して、子綦が机に憑れる態度は他人の机に憑りたる態度に異なりと解せしは非なり、乃ち下文に今者我喪吾とあるを觀て、子綦の態度前日は今日の如くならざりしこと亦推して知るべし、

子綦曰、偃不亦善乎而問之也、今者吾喪我、汝知之乎、汝聞人籟而未聞地籟、汝聞地籟而未聞天籟夫、

【大意】天地人三籟の名目を掲げ、後文を提起す、

【通釋】子綦之に答へて曰ふやう、さて汝ぢ偃よ、亦尤なる次第なり、今汝ぢが質問せしことは如何にも汝ぢは吾のことを怪く思ふならん、偖て汝ぢは吾が身心が模樣を似喪其耦と形容せしが、實は其れより更に今一歩進んで居ることなり、吾は既に疾くに第一の我と云者其物を喪うて頓と何れが果して我れなるか忘れたり、何ぞ況んや其の耦卽ち配匹に於てをや、是れ忘るゝ忘れない抔は初より問題にならざるなり、然しながら汝ぢは能くこの道理が分るか乃ち汝ぢは先刻吾が仰天而噓の狀態を見しが、一體何

【解義】〔南郭子綦〕南郭は城の南方に當る村郭なり、昔し楚の昭王の弟にて字は子綦と云へる者あり、楚の南郭に居るを以て、南郭と號したりと成疏に見えたり、古人多く其の居處を用ゐて姓氏となし、東郭北郭の類あれば、蓋し或は然らん、又成疏に子綦は道德を抱き、虛心淡懷なる人なるが故に、莊子其の清高なるを羨み、之が言に寄託して論首に置きたるなりと云へり、〔隱几而坐〕隱は憑なり、「ヨリ」と訓ず、几は机と同じ、「ツクヱ」と訓ず、「文苑彙苑」に几は長さ五尺高さ一尺二寸、廣さ二寸、兩端は黑く塗り、中央は赤く塗れり、古しへは坐するときは必らず几を設く、依憑する所なり、然も尊者に非んば之を設けずと見えたり、〔仰天而嘘〕嘘は息なり、急に氣を出たすを吹と曰ひ、緩かに出たすを嘘と曰ふ、〔嗒焉似喪其耦〕嗒は荅に作る、音は荅、嗒焉とは解體の貌と「釋文」にあり、口を開き體の構へは解けて身に緊りなき模樣なり、又相忘るゝ貌とも云ふ、卽ち呆やりとしたる模樣なり、喪は失なり、耦は匹なり、「ナラブ相手」のこと、似喪其耦とは郭注は外無與爲歡、而荅焉解體、若失其配匹とあり、此の說に依るときは、身體の緊りなくして宛かも最愛の妻女に離れたる當座、其の心が拔け殼の如くなりたる模樣を云ふ、成疏には耦匹也、爲身與神爲匹、物與我爲耦也（中略）荅焉墮體、身心俱遺、物我無忘、故曰若喪其耦とあり、是れ身と心とは相匹で離れざるものなるに、今は嗒焉として自分の身が何れに在るか分らざる樣に見ゆと釋したるなり、兪樾は喪其耦とは、卽ち下文に謂はゆる吾喪我とあることなり、郭注に若失其配匹と解せしは、未だ喪我の義に合はず、「釋文」に司馬曰耦身也、身與神爲耦とあり、此說之を得たれども、然れども身與神爲耦と云へるは非なり、耦當に讀みて寓と爲すべし、寓は寄なり、神は身に寓す、故に身を謂て耦と爲すと云へり、今按ずるに左傳に嘉耦曰妃とあり、妃は卽ち配匹の謂にして、配耦者のことなり、且下文に吾喪我とあるは是れ更に似喪其耦より一步を進めたる語なれば、郭注の說終に改むべからず、〔顏成子游〕顏は姓、名は偃成は諡にして、子游は其の字なること、李說として、「釋文」に見えたり、〔立侍乎前〕長者に侍するに立つことは禮なり、〔曰何居乎〕居は一に音姬、司馬彪は猶故

然の根本主義に立ち還ることを得べし、果して然るときは復た何等の疑惑なく、何等の危懼もなくして思想界の動搖亦何に由りて起らんや、而して其の之を爲して物論を齊くするには、先づ已が聰明を黜け智慮を去るに如くはなし、此の二者去りて始めて成心除くを得べし、是れ本篇論述の主意にして、莊子が道術の宗旨亦寔に此に外ならざるなり、但瑰詭奧衍の筆を以て玄妙不測の旨を寫す、文章脉絡極めて尋ね難しと稱す、今聊か次第を明かにし旨義を括出し、讀者沈潛玩索の一助に資せんことを期したり、然れども尚ほ未だ全く安んせざる處あり、將に後考を俟ちて是正せんとす、

南郭子綦隱几而坐、仰天而噓、嗒焉似喪其耦、顏成子游立侍乎前曰、何居乎、形固可使如槁木、心固可使如死灰乎、今之隱几者、非昔之隱几者也、

【大意】　心の淸虛にして我意我見なき者は、自然其の德が外に見はれて、全く容貌は枯れ木の如く、精神は消果たる灰の如く、拔け殼同樣に見ゆることを謂ひ、以て先づ齊物論の前提となせり、

【通釋】　南郭子綦と云へる學者あり、或る日、机に隱りもたれて坐し、天を仰ぎ見てじかに息を吹きて嗒然として何等の考へも無き模樣にて、宛かも其耦とて自身の片輪のともなる相手の人を忘れたるが如き情態なりき、顏成子游と云へる門人が起立して子綦の前に侍り居りしが、子綦に質問して曰ふやう、我が先生は何となされたるか、如何にも不思議なる事なり、さても人の形ちと申す者は我々の疑ふ迄もなく、固より槁れたる木の如く、些の體を動かすことなく又人の心と申す者は消え果てたる灰の如く、何も考へずして居らるゝ者なるか、今先生の尊容を拜見するに、今日机に隱りかゝり給へる御樣子は、昔日机に隱りかゝり給ひし御樣子とは大に相違して居らるゝなり、全く槁れたる木消え果てたる灰と同じき樣に拜し奉る義なるが、是れには何にか仔細の有ることならんと存ずるが故に、敢て質問を致す次第なりと、

大浸稽レ天而不レ溺、大旱金石流、土山焦、而不熱、是其塵垢粃糠、將ニ猶陶ニ鑄堯舜一者、孰肯以レ物爲レ事、

齊物論第二

齊は整なり、等なり、「ト、ナフ」と訓ず、卽ち物の亂雜して不揃なるを、各々其れ相應に區分して取り揃へることなり、彼の何に事何に物に拘らず、我が一定の意見を以て一律平等に押し付けて同じくするを謂ふにはあらず、讀者若し此の解釋を誤るときは、本文に於て大なる謬りを來たすことあり、注意すべし、物論とは世間の多くの物事に關する議論なり、莊子の時に當りて儒者は仁義を說き、墨者は兼愛を論じ、其他惠施一輩の徒盛に所見を鬪はし、謂はゆる堅白同異の辯相踵きて興り、是非淆亂して思想界の動搖は戰國攻戰の風習と相因り、相助け、天下の人々各皆疑惑を懷き、危懼の念日に一日より甚だしきに至れり、莊子謂らく天地自然の根本は大虛なり、何等の是もなく、亦何等の非もなく、但人の軀殼上より看て自他の見を生じ、隨て自ら是とし他を非とする念興り、遂に他を排し自から利する陋習を成すに至るなり、夫れ此の是非の念己が心頭に固著して解けざる者之を名けて成心と曰ふ、成心一たび生ずるときは、己が心は最早や虛の本體にあらずして如何に自然の靈照神光ありと雖も、終に陰翳昧冥に陷り論議益々出でゝ眞理益々晦く、世は益々救ふ可からざる亂離混淆に陷りて底止する所なからんとす、故に今之を濟ひて爭亂を熄めんと欲するときは、先づ此の成心を去りて物論に就き公平無私の觀察するに如くはなし、苟に然るときは天地自然の根本は大虛にして、何等の是もなく、何等の非もなければ、亦之と同時に凡そ事物の上に於て一面の是あれば亦一面の非あり、卽ち各皆一眞理あると共に一の非眞理あるなり、苟に能く之を知るときは世俗の謂はゆる是なる者未だ必ずしも是ならず、非なる者亦未だ必しも非ならず、是に於て吾が心は徒に區區の是非に拘りて、事物の末に囚れて煩悶自から苦む愚なるを悟りて、太虛靈明の境に逍遙して始めて自

れば動物を捕ふる一種の落(オトシ)なり、〔死於罔罟〕罔は網と同じ、罟は目の細き網なり、共に「アミ」と訓ず、〔今夫斄牛〕斄音は「離(リ)」、斄牛は旄牛(黒色ノ牛)の類にして西南夷より出づ、其の形ち甚だ大にして、遠く望めば天際の雲の如しと、玄英は云へり、中山城山は、斄牛を形容するに垂天之雲を以てす、則ち莊子の謂はゆる垂天之雲なる者、其の大さ亦知る可きのみと云へり、〔无何有之鄕廣莫之野〕無何有之鄕とは何に物も一つとして有ること無き鄕里と云ふ意味にて、乃ち寬曠にして無人の處を謂ひ、廣莫の莫は釋文に大也とあり、廣莫之野とは廣大無邊の原野と云ふ意味にて、乃ち寂絕にして無爲の地を謂へるなり、〔彷徨乎无爲〕彷徨は成疏に縱任之名とあり、心の思ふ儘にすることなり、「釋文」は猶翺翔也とあり、〔逍遙乎寢臥〕逍遙は成疏に自得之稱とありて、又彷徨と逍遙とは亦是れ異言一致にして、唯だ其文を互にせしのみと云へり、〔不夭斧斤〕夭は「ワカジニ」と訓じ、天壽を全くせずして早く死すること、斧は「ヲノ」と訓ず、木を伐る道具、斤は「マサカリ」と訓ず、斧の小なる者なり、此の所は樹木が工匠の爲め伐らることを、人の夭死に喩へて云ふ、乃ち不夭斧斤とは、工匠の手に斬伐せられずして、長く其の壽命を保つを得ることを謂へるなり、

名言

水之積也不厚、則負大舟也無力、風之積也不厚、則其負大翼也無力、

適莽蒼者、三餐而反、腹猶果然、適百里者、宿舂糧、適千里者、三月聚糧、

小知不及大知、小年不及大年、

朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、

擧世而譽之不加勸、擧世而非之而不加沮、定乎內外之分、辯乎榮辱之竟、

乘天地之正、而御六氣之辯、以遊無窮、

至人無己、神人無功、聖人無名、

日月出矣、而爝火不息、其於光也不亦難乎、時雨降矣、而猶浸灌、其於澤也不亦勞乎、

鷦鷯巢於深林、不過一枝、偃鼠飲河、不過滿腹、

庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣、

瞽者無以與乎文章之觀、聾者無以與乎鍾鼓之聲、豈唯形骸有聾瞽哉、夫知亦有之、

如きは、甚だ愚鈍にして一匹の鼠を捕ふる能はず、乃ち物には各々其れ相應なる働きと不働きがあり、今足下に於て左樣なる大樹ありて、其の用ひ所の無きを御困りならば、何ぞ之を無何有の鄕、廣莫の野とて何に一物として有ること無き鄕村や、廣々として際限なき野原に樹付けて、彷徨乎とて、ぶらぶらとさまよひ遊びて、其の樹の側に何事をも爲すこと無く、逍遙乎として何等の物にも囚はれずして、自由自在に其の樹の下に寢ね臥して休息なさゞるや、左するときは、其の木は元來匠人の斧や斤にかゝりて其の天壽を早めて夭死をなさず、又他物の來りて之を害する者なきことなれば、縱ひ何所にも使ひ用ふること無きとも何れの所に於て困苦することあらんや、斯くてこそ本來の性能を自然的に發揮して自由自在の快樂を得て逍遙遊の本意に中るなり、斯許の見易き道理を悟らずして、徒に左樣に大樹の用ひ場所が無きとて、獨り苦勞をなすは亦餘り拙き業ならずや、卽ち物には各々大小の殊なる有り、大なるは人の本分なれば、其の本分に因りて善く之に順應して妙用すれば、天下何れの處に往くとして逍遙遊を得ざらんや、

【解義】〔子獨不見狸狌乎〕狸狌は野貓なりと英疏には云へり、野貓とは貍(タヌキ)の異名なること、「本艸綱目」卷五十一獸類の部に見えたり、「字彙」には狌は貓也とあり、又貍と貓とは相似たるに依りて、貓を家貍と云ふこと〔本艸〕に見えたり、下文に捕鼠の二字あるときは、解して貓となす方優るに似たり、「本艸」に据るに、貍に數種あり、虎貍と名づくる者は善く蟲鼠果實を食へども、其の餘の貍は鼠を捕へずとあり、〔以候敖者〕候は伺なり、敖は敖翔なり、あそびかけること、敖者とは卽ち雞鼠の屬を謂ふ、〔東西跳梁〕跳梁は躍る貌、卽ちとびはねること、英疏に猶走擲也とあり、〔不辟高下〕辟は避と同じ、〔中於機辟〕機辟は一種の「ワナ」なり、郭慶藩は辟は繴の借字にして、「爾雅」に繴謂之罿、罿罬也、罬謂之罦、罦覆車也、郭璞曰今之翻車也、有兩轅、中施罥、以捕鳥とあるを引き、本文の機辟の辟は卽ち繴の借字ならんと云ひ、又「墨子」の非儒篇に盜賊將作、機辟將發也とあり、「鹽鐵論」の刑法篇に辟陷設而當其蹊とあるを引きて、皆當に繴に作るべしと云へり、是の說に依

は途と同じ「ミチ」と訓ず、〔大而無用〕大とは迂濶なることなり、「禮記」文王世子篇に況于其身以善其君乎とあるを、鄭注に于讀爲迂、猶廣也大也とあり、是れ大と迂は同義なることを證すべし、「老子」に天下皆謂道大似不肖とある大の字も亦此の文の大の字と同義なりと、郭慶藩は云へり、

莊子曰、子獨不見狸狌乎、卑身而伏、以候敖者、東西跳梁、不辟高下、中於機辟、死於網罟、今夫斄牛、其大若垂天之雲、此能爲大矣、而不能執鼠、今子有大樹、患其無用、何不樹之於無何有之鄕、廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下、不夭斤斧、物無害者、無所可用、安所困苦哉、

【通釋】莊子之に答へて曰く、何に其の事に就て譬へを以て御話し致すれば澤山あれども、足下は取り分けて彼の狸狌と云ふ動物を見給はざりしや、彼れは自分の食物を求めんとして、先づ己が身を卑く縮めて形ちを伏陰くし、他の動物が快く遊びさまよう者を候ひ覘つて之を捕へんとし、或は爲めに東に或は西に跳梁りて地面の高きも下きも一向避くることをなさず、如何にも敏捷伶俐に見ゆるが、遂には餘り向ふ見ずに跳梁するが爲めに、機辟に罹り網の中に陷りて死することあり、又足下は彼の斄牛と云ふ獸を見給はざるか、今彼の斄牛は其の形ちの廣大なることは、上天の一方に垂れ下れる雲の如く殆んど際限なしとも云ふべきなり、此の如くにしてこそ寔に能く廣大なりとはせん、然し廣大なることは成程至極廣大なれども、其の能力は一匹の鼠をも執ること能はずして、甚だ愚鈍なる者なり、右の如く餘り小才を恃みて跳梁廻るときは、狸狌の如く機辟にかゝり、網の中に陷つて死することあり、又廣大なる斄牛の

用ひて人の本性に立ち還る者なるが、是れ乃ち道の本性たることを言へり、

【通釋】惠子又莊子に話して曰ふやう、吾が輩の處に大いなる樹木あり、一體何の木たるやは審かならざれども、其の樹木の樣子振りを見て、世の多くの人は之を樗なりと謂へり、成程左樣聞きて見れば、或は樗の木なるかも知れず、乃ち其の大本即ち幹は擁腫とて瘻が有りて凹凸を爲して居れば、之を木材と爲さんも、本より繩（スミナワ）墨（スミツボ）に中らずして不都合なれば、家屋の棟や梁の用に立たず、又其の四方に出でたる小さき枝は、卷き揚り曲りて、端直ならざれば、亦是れ規（ブンマハシ）矩（マガリガネ）に中らずして不都合なれば、何にも役に立ち所なし、實に天然の廢物なれば之を切り倒して、路傍に置きて棄て賣りになさんと思へども、大工は初手より振り向きて一見をもなさず、能く能く困り物なるが、只今先生の御話は、洵に迂り遠く大いにして、而も實際的に用ひ樣なし、衆人の同じく共に共に棄て去る所なり、誠に彼の樗木と同じく、折角大物なれども、終に無用を免れず、惜むべき至りならずやと、

【解義】〔吾有大樹〕惠子又一喩を設けて莊子を諷刺したるなり、〔人謂之樗〕樗は毛利貞齋の說に依るに「イヌダラ」と訓ず、椿に似て臭き木なり、腐り朽たるが如き性にして不レ用無材の木なりと、玄英は樗嗅レ之甚臭、惡木者也、世間名字、例皆虛假、相與嗅レ之、未レ知二的當一故言二人謂一レ之樗一也と云へり、乃ち人謂二之樗一とは世人の名付けたるも全く的當と云ふにあらず、唯其の臭氣が樗に似たる位に據りて云へるなれば、實際は樗か將た他木か知れず、多分其れならんと云へる意味なりと云はれたるなり、〔擁腫而不中繩墨〕成疏に擁腫槃瘻也とあり槃は盤と通じ、盤瘻とは「コブ」と訓ず、又擁臃と通ず、臃腫は肉の起れる貌とも云へり、「解莊」には盤結而有二瘣瘰一也と云へり、共に木の病みて瘤をなすことを謂ふ、繩は工匠の直線を作くるに用ふる「スミナワ」を謂ふ、墨は工匠の黑き線を引くに用ふる道具、「スミツボ」と訓す、〔卷曲而不中規矩〕卷は一に拳に作る、音は「權」、卷曲は卷れ上がり曲ること、規は工匠の圓形を作るに用ふる道具、「ブンマハシ」と訓す、矩は工匠の方形を作くるに用ふる道具、「マガリガネ」と訓す、〔立之塗〕塗

すること也、卽ち事を爲すに、能は十人竝にすること、善は十人にすぐれたる程のこと也、乃ち前文は他に不龜手の藥を製する人なきにあらざるも、就中尤もすぐれて宜く製するよりして善不龜手と云ひ、此の所は前者後者と甲乙何れも劣らずして、製造するよりして能不龜手と云はれたるなり、〔何不慮以爲大樽云々〕何の字下の十九字を管到す、慮は成疏に繩縛之也とあり、繩を用ひて縛り付くること也、大樽は俗に云ふ大いなる酒樽を盛るにはあらず、司馬云樽如酒器、縛之於身、浮於江湖、可以自渡、慮猶結綴也、案所謂腰舟と、乃ちに腰舟と云ふて、船なきときに、大いなる瓢を、繩を用ひて、己が腰部の邊に結び付けて、其の浮く力に賴りて、自から江湖を渡らざるやと云へるなり、蓋し物は各々其物相應の處に利用すれば、如何なる物と雖も役に立たざるは無きとを云ふ、又慮は思慮なりと解し、何ぞ以て大樽となし、而して江湖に浮ぶことを慮らずして云々と釋する說もあり、〔猶有蓬之心也夫〕成疏には蓬草名、拳曲不直也、惠子既有蓬心、未能直達玄理と云へり、乃ち拳曲して直からざる蓬艸の如き心あれば、未だ直ちに幽玄の道理を達し悟ること能はずとなり、蓬は艾の一種「ヨモギ」又は「ウタヨモギ」と訓ず、此所に蓬之心とあるは蓬は短くして暢びざる艸なれば、曲士（一部分に局して全體に通ぜざる士）の謂なりと、向秀は云へり、乃ち惠子は猶未だ一曲の士にして兩體に通達せる哲人にあらずと云へるなり、又一說に、蓬は茅なり、「孟子」（盡心篇）に孟子謂高子曰、山徑之蹊間介然用之而成路、爲間不用則茅塞之、今茅塞子之心矣とあるが如く、他の外物の爲めに心の光明を蔽はれて智慮の暗きことを謂ふなりと云へり、

惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩、立之塗、匠者不顧、今子之言、大而無用、衆所同去也、

【大意】前段と大體相同じ、但前段は大道の用あるを言ひ、此段は其の用ひたる所の場處を見はし、道は

ば、宛かも山間などの路が茅の爲めに往來を塞がれて、通行し難きが如く、或る外物の爲めに心の光りを鎖されて、善き思案が十分出來ざることとなるか、さては御氣の毒の至りなりと、

【解義】〔善爲不龜手之藥〕不龜手とは龜は皸の假借字にして皸は「アカギレ」と訓す、手足の皮の拆裂することとなり、「漢書」の趙充國傳に將軍士寒、手足皸瘃とあり、注に文穎曰、皸拆裂也、瘃寒創也とあり、不龜手とは手を皸せずとの義にて、卽ち手に「アカギレ」のせざることとなり、又龜の字は字の如く讀みて音を「キ」となし、「釋文」には司馬云文拆如龜文也、又云如龜攣縮(チヾカヾムルコト)也とありて、手皸の形狀に就いて名づけたるが如く解すれども、未だ妥當ならず、〔世世以洴澼絖〕洴は浮なり、以水擊絮、爲漂と韋昭が說なること「釋文」に見えたり、澼は漂なり「ウツ」と訓ず、盧文弨は洴澼は絮を擊つ聲なりと云へり、絖は細き絮なり、「マワタ」と訓ず、洴澼絖とは絖を水中に浮べ漂すことなり、〔客請買其方百金〕客とは他國より來遊したる人なり、百金とは一寸方形にして重さ一斤の金を一金と爲す、百金は卽ち百斤の金なり、〔以說吳王〕吳は國の名にして、其の地江海に臨める國なれば、漁業を始め、水中の事業多きに隨て、國人の皸瘃の患を感ずること深し、故に客は之に向うて不龜手の藥を利用せんとして、吳王に說きたるなり、〔越有難〕越は國の名、既に上文に解せり、吳越の二國、境を接して數々相戰ひしことあり、此れ未だ何の役なるかを詳かにせず、蓋し亦莊子の寓言ならん、〔冬與越人水戰〕水戰は水中に於ける戰爭なり、成疏に吳越比鄰、地帶江海、兵戈相接、必用艫舡(軍艦)とあり、乃ち吳越兩國共に江海に瀕める國なれば、戰爭には必らず水軍を用ふるなり、〔大敗越人〕將軍たる人不龜手の藥を用ゐて、軍中の人々が皸瘃を豫じめ防ぎたれば、活動自由なるを得て、大に一方の豫防なき越人を敗りたり、〔能不龜手一也〕同じ巧に藥を製する、人を前文には善不龜手之藥とありて、此所には能不龜手とあり、善と能と共に「ヨクス」と解すれども、能は「タユル」と訓じ、又「アタフ」と訓す、卽ち物を見事に爲し遂ぐることと也、善は字書に吉也、大也、良也、佳也、とありて、惡の反對なり、能の字に較ぶれば、甚だ重し、物を至極宜しく

【通釋】　莊子は惠子に答へて曰ふやう、それは一體先生が惡きなり、先生はもとより大いなる物を取り扱ふことに拙劣なるなり、凡て物は大いなるなれ、小なるなれ、共に人の使ひ方に由りて、非常に益に立つことあり、昔し先生の御國なる宋の人に、極めて上手に不龜手の藥とて手に垢ぎれや皹の切れざる妙藥を製造する者あり、寒冬の節、水仕事をなしても苦にならざるを以て、祖先代々冬の寒き時に於て洴澼絖とて、眞綿を水にさらして洗ふことを營業となせり、然れども元來是式の事にては、甚だ薄利なれば、大したる事もなし、然るに或る客が其の妙藥を聞きて、其の製法を百金を出して買ひ受けんと交渉したり、因りて彼の不龜手の藥を爲る人は、其の親族を集めて相談しけるには、偖て我が代々洴澼絖を家業となせるが、僅かに五六金の利益となるに過ぎず、然るに今や一朝俄に其の技術を百金に賣るときは、是れ實に莫大なる利益なり、請ふ其中込みたる客人に讓り渡さんと、乃ち評議一決して之を賣り渡したり、是に於て之を讓り受けたる人は其の製方の傳授を得て、其れを以て呉王に藥の効能を說き立てたり、恰も此の時越の國が呉と戰爭に及ばれしことありしが、呉王は不龜手藥の製方を得たる人をして、大將となりて寒冬に越人と水上に戰はしめたるに、呉の兵は妙藥の効にてひゞあか切れが爲ざるに賴りて、自由の活動が出來得て、大に越國の兵を破りたれば、呉王は其の功勞を賞して之に知行所を與へて諸侯に取り立てたることあり、偖て不龜手の藥を能く製することは、甲乙共に同一なれども甲は之を甘く利用して諸侯に取り立てられて、乙は纔に洴澼絖位の賤き業をすることを免れざりしは、是れ其の技術の使ひ用ひ所が巧なると、拙きとの相異なればなり、以上の事は昔しの話なるが、今や先生の事も亦此れと同じ道理なり、今先生には御話の如く、五石の大なる瓠あれば、亦之を相當したる場所に適用すれば可なり、何ぞ之を用ゐて大いなる水中に浮ぶ樽を作りて、大川や湖水に浮び乘り廻はして遊ぶことを思慮せずして、而も徒に其の瓠が虛大的に平らたく淺くして、多くの物を受け容るゝなきことを左樣に心配なし給へるにや、予に於ては甚だ合點の出來得ざる次第なり、恐らくは先生は餘程偉らき方ではあれども、猶まだまだ譬へ

〔剖之以爲瓢〕剖は割なり、瓢は成疏に勺也とあり、勺は杓に同じ、食物を盛る器、「ヒサゴ」なり、又は「サカヅキ」と訓ず、〔瓠落無所容〕瓠落は郭落と云ふが如し、大なること、又平淺也とあり、形ち平らたくして底淺しきこと、「考」に据るときは瓠は胡の假借なり、落は古へ路と讀めり、路は盧の假借にて、古へは瓢類の宛轉して底止する所なきを胡盧と爲す、瓠落は卽ち胡盧なり、無所容とは無所用と云ふが如く、用に立たざることなり、〔非不呺然大也〕呺は崔本に謞に作る、呺は音「キヤウ」、呺然は虛大なり、瓠の腹虛く、膨脹して大なるを云ふ、兪樾は「說文」に号痛聲也とありて、謞謞の二字共に号の俗體にして、莊子の本文と意義通せず、「文選」の謝靈運が初發都詩の李注に、莊子此文を引て枵然に作り、「爾雅」の釋天に元枵虛也とありて、枵の字に大なると云ふ義あれば、當さに從うて枵然に改むべしと云へり、〔吾爲其無用而掊之〕掊は擊破なり、此れ惠子、瓠の無用なるを假りて、莊子が徒に大言を爲して、時世を救ふ能はざるは、終に無用たるを免れざることを諷刺せしなり、

莊子曰、夫子固拙於用大矣、宋人有善爲不龜手之藥者、世世以洴澼絖爲事、客聞之、請買其方百金、聚族而謀曰、我世世爲洴澼絖、不過數金、今一朝而鬻技百金、請與之、客得之以說吳王、越有難、吳王使之將、冬與越人水戰、大敗越人、裂地而封之、能不龜手一也、或以封或不免於洴澼絖、則所用異也、今子有五石之瓠、何不慮以爲大樽、而浮江湖、而憂其瓠落無所容、則夫子猶有蓬之心也夫、

【大意】 小智の人は大道の用を知らざることを言ふ、

【通釋】 魏の宰相に惠子と云ふ者あり、莊子に話していふやうには、我が君なる魏の王は、我等に大なるひさごの種を貽り賜はりたり、我等は其の種を蒔きうゑて成長せしが、それに成りたる匏の實は甚だ大にして五石の容量あり、仍りて此れに水や漿を一杯に入れたる處、其の堅く厚くして重きが故に我自身にて持ち擧ぐること能はず、是に於て其の匏實を分割して、水を飲む器物なる瓠と爲したるに、瓠となしては其の形ち平らたく淺くして水を容るゝことならず、皆外に溢れ落つるなり、成程形ちは呺然卽ち虛大的に大ならざるにはあらず、隨分に大形なれども、自分は只其の徒に大いなるばかりにて、無用なるが爲めに之を擊ち破りたりと、

【解義】〔惠子謂莊子〕惠子名は施、もと宋の人、魏の惠王に仕へて相となれり、當時莊子と學說を鬪はして辯論を爲せし人なり、謂は字彙に與レ之言也とあり、卽ち人を相手にして話を爲すこと、〔貽我大瓠之種〕貽は音怡にして、字書に遺なり、物を遺し與ふること、大瓠の瓠は音は護、「ヒサゴ」と訓ず、陸佃は長而瘦上曰レ瓠、短頸大腹曰レ匏と云へり、「和漢三才圖繪」には匏を訓じて、由不加保と云へり、又「カンピヤウ」と云へり、〔我樹之成〕樹は藝植の謂なれば此所にては種蒔を爲すこと、成は成長なり、〔而其實五石〕其實は匏の子なり司馬彪云實中容二五石一と、乃ち其の成長せし子實の中は大さ五石の容量あること、〔以盛水漿〕漿は「コンヅ」と訓ず、毛利貞齋は「本草綱目」に依りて粟米を炊で熱を冷水の中に投げ入れ、浸すこと五六日過て、酢味に變じて白花色を生じたる時、之を食用に供するものにして、俗に酢と云ふ者と爲せり、〔其堅不能自擧也〕堅とはもと堅實のことにして匏の堅實なる者は必らず重し、故に亦堅を重の義に用ひたるなり、又其堅とは匏の堅き程度を謂へるにて、卽ち匏實中に五石の水漿を入れたれば、充滿はなせども、全く柔かなる許りにて、到底己一人にて自から持ち擧ぐること難きを云へるなり、是れ郭注、成疏等の說なり、又堅は重なり、乃ち瓠の重さ仲々にて到底一人の力で持ち擧ぐること能はざるを謂ふなりと、是れ林西仲の說なり、兩說孰れも通ず、

太原より出づ、陽は水北を云ふ、汾水之陽とは卽ち堯都平陽の附近の地なり、「窅然喪其天下」窅然とは窅は音「イヨウ」、悵然と同義なり、又茫然自失の貌とも云へり、喪は失なり、取り離して茫然たること、蓋し此處の旨意は、郭注は夫堯之無用天下爲、亦猶越人之無所用章甫耳、然遺天下者、固天下之所宗、天下雖宗堯、而堯未嘗有天下也、故窅然喪之、而嘗遊心於絕冥之境、雖寄坐萬物之上、而未始不逍遙也と釋したり、乃ち普通の人情より見れば、宛かも宋人の章甫を視ると同じく、天下は至極の貴重品なれども、堯の如き初めより毫も世の富貴利達を思はざる大聖人より視れば、亦宛かも越人が章甫を視るが如く、此の天下を何等珍重の品とも感ぜず、故に藐射姑山に往きて四子を見るときは更に其の心益々窅然として自から己れが有てる天下を打ち忘れて、帝王たると帝王たらざるとに頓着なく、遠く世外に超越せりとの意なり、而して諸解多く之に從へり、其の說餘り高遠に失して、强ひて堯を回護するに似て、莊子の本意にあらざるべし、蓋し此所は堯を以て宋人に比し、四子を以て越人に比して、堯の天下を太平に致せし功業も堯一輩の人に在りては互に榮譽となせども、初より宇宙の外に超越して天下の如き小物を念頭に置かざりし四子に於ては、何等の役に立つとも思はざれば、自然に彼の功業は權威なし、故に榮譽に誇れる堯も茫然として自失せることを謂へる也と解釋する方可なり、此段は「副墨」に据れば、上の堯讓天下於許由と及び肩吾謂連叔曰の兩段の文意を結べるものとなして曰く、許由自謂鷦鷯偃鼠無所用天下爲、是猶越人斷髮文身不用章甫也、藐姑射之山神人若此と爲せり、胡大靈は此段引堯事以實接輿連叔之言、另是莊子之詞と云へり、此の二說亦各々一說として存すべし、

惠子謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種、我樹之成、而實五石、以盛水漿、其堅不能自擧也、剖之以爲瓢、則瓠落無所容、非不呺然大也、吾爲其無用而掊之、

待たず、纔かに汾水と云へる川の北手、卽ち堯の帝都附近に於て早や既に其の心持ちが窅然として深く遠くなりて、現に自分が天子と爲りて有せる此の天下を宛かも無我夢中に物を取落したるが如くに打ち忘れたり、是れ卽ち四子の前に行くときは天子の如き瑣細なる物は、初めより其の念頭に置かれざれば、之を太平に致したればとて、誇りとも何ともならざるを以て、流石に偉勳赫々を誇れる堯帝も自然手持無沙汰を感じたればなり、

【解義】〔宋人資章甫〕宋は國の名、資とは疏に貨也とあり、「シロモノ」と訓ず、賣りて價値を取る物品なり、章甫は殷の時代の禮冠の名なり、宋はもと殷王の子孫なれば章甫の冠は貴重なる物品となせり、〔而適諸越〕適とは目指して行くことなり、諸は於なり、越は國の名、一說に諸越とは、越國は其の中多くの部落に分れ居れば、故に之を概稱して諸越と云ふ、後世又之を百越とも稱せりと云へり、〔人斷髮文身〕斷髮とは頭髮を斷ちて短くすること、文身とは身を「モトログ」と讀みて、卽ち身に入れ墨を施すこと、玄英が疏に越國逼近江湖、斷髮文身、以避蛟龍之難也とあり、〔無所用之〕章甫の冠はもと總々したる頭髮ありて、之を承け載する者なるに、斷髮文身の越人に於ては、之を買ふと雖も、其の用ひ所なきを謂ふ、疏に章甫本充首飾、必須雲鬟承冠、越人斷髮文身、資貨使成無用と云へり、〔往見四子藐姑射之山〕四子は「釋文」を始め、舊解には多く外篇の天地篇に、堯之師曰許由、許由之師曰齧缺、齧缺之師曰王倪、王倪之師曰被衣とあるに據りて被衣、王倪、齧缺、許由の四人を謂ふとなせり、未だ是否を審にせず、姑く疑しきを闕きて可なり、藐姑射は藐遠なる姑射山と云へる義なり、藐の字の上に於の字を加へて看るべし、姑射山は既に上文に見えたり、或は此所の姑射山は下文に汾水之陽とあるに據りて、堯の都たる平陽の在りし冀州の域境内の山となせり、前解に引ける「隋書地理志」に之を臨汾に屬せしが如きは卽ち是なるが、李禎は或後世據此篇（逍遙遊）汾水之陽一語、以名其（臨汾）地之山、亦未可知となせり、藐は遠なり、蓋し海中に在りて、遠く懸け離れたる山なればこそ、之を藐姑射と呼ばれたるよりして推すときは、此の說、是なるに似たり、〔汾水之陽〕汾水は川の名なり、山西の

〔是其塵垢粃糠云々〕塵は「チリ」、垢は「アカ」と訓ず
成疏に散爲塵、膩爲垢とあり、粃は「シヒナセ」と糠
を「ヌカ」と訓ず、成疏に穀不熟爲粃穀皮爲糠とあ
り、鑄は金鐵を鎔ふこと、陶は「スエモノヅクリ」と訓
ず、土を用ゐて物を範どること、本句は神人の一擧手
一投足の勞を煩はす迄もなく、僅かに彼れの身體の
末にある塵垢又は彼れの食物に供する穀物の粃糠位
にても、卽ち其の之を鍛鑄し、之を埏埴して一箇の堯
や舜位の人物を造り出すことを得る次第なり、乃ち
世俗の理想的聖帝と崇拜せる堯舜位の人物は、神人
に在りては初より物の數に入らざることなりと、極
めて無造作に大膽的に世間俗輩の偉勳豐功と思へる
事を罵倒一掃して云へる辭なり、

宋人資章甫而適諸越、越人斷
髮文身、無所用之、堯治天下、平
海内之政、往見四子藐姑射之
山、汾水之陽、窅然喪其天下焉、

【大意】此段己れに無用の物は如何なる貴寶も價値
なき者なることを云ひ、以て至人に於ては元來無欲
なれば、自他の別を置きて世間の利を貪ることなき
を述べ、上文の至人無己と云へる義を證したり、

【通釋】凡そ世間の物如何に貴重なる者と雖も、己
に入用ならざる時は差して珍重せざるなり、昔し宋
國の人其の先代の殷の天子が禮冠とせられし章甫と
云へる冠り物を仕込みて、越と云へる國に適きて之
らを賣んとせしが、越國の人は海濱に住みて、常に海
中に入りて魚類を捕ふるを以て職業となせしかば、
頭髮長きときは濡れて業務を執る妨げとなるよりし
て髮を短く斷ち、又海中に深く入るときは種々なる
大魚及び怪物の來襲を恐れ、之を防がんが爲めに己
が身體に入れ墨を爲して、衣冠を粧ひ、禮儀を飾るこ
となどは有らざるよりして、折角貴重なる章甫も用
ゐる所なければ、何人も之を買ひ求むる者なくして、宋
人の目論見は終に失敗に歸したりき、又昔し聖人の
堯帝は既に天下の人民を治め、海内の政事を平かに
し、天下太平となりし後、往きて四人の賢者が藐と懸
け離れたる姑射と云へる山中に居れるを見んとして
出て掛けたるが、未だ之に達せざる内姑射山までを

とあるを、注に旁薄猶言蕩薄也と釋せり、蕩薄は即ち廣被の意にして、此處の旁礴萬物とは、上句の之德也の三字を承けて、其の德の將に廣く一世に被らんとするを云へるなり、〔以爲一〕一とは彼我親疏の區別なり、皆以て一體となすなり、郭注に夫聖人之心、極兩儀（陰陽）之至會、窮萬物之妙數、故能體化合變、無往不可、旁礴萬物、無物不然と、乃ち智慧深き聖人の心は能く天地萬物の奧意を推し極むるが故に、自然の變化に順應して、如何なる物事にも滯りなく融通和合して行けば、萬物を混同して物皆從ひ就きて、矛盾衝突することなきを云ふ、毛利貞齋の「俚言鈔」に林希逸の口義により、下句の世の字に連續して以爲一世と讀みたるは非なり、〔世蘄乎亂〕蘄は音「キ」、求なり、亂は治なり、「虞書」に亂而敬と云ひ、「論語」に予有亂臣十人と云へるが如き、皆亂を訓じて治と爲せり、「副墨」に神人無心於治世、而一世自來求治於神人と云へり、郭注は世以亂故求我と云ひ、成疏は更に之を釋して、世道荒淫、蒼生離亂、故求大聖君臨安撫と云へり、今郭成の說を用ふ、〔孰弊々焉以天下爲事〕孰は何と同じ、弊々を一に蔽々に作る、經營の貌、又役々と同意味なりとも云へり、以天下爲事とは態々天下を治むるやうな事を以て己が仕事となさゞるなり、即ち小賢しく天下を治むる位の此れ式の事に骨折りて手柄顏をなして吹聽せざれば、隨うて世間に其の功績を見認めざることを謂ふ、李楨曰く、擧世望治、德握其符、神人無功、豈肯有勞天下之迹、老子云我無爲、而民自化、此之謂也と、〔之人也物莫之傷〕之人也の三字提筆して起す、蓋し前文の之人也云々とあるは、內的道德に就いて云ひ、此處以下は、外的對萬物の上に就いて云へり、物莫之傷とは物莫傷之を倒字法を用ひたるなり、乃ち萬物が神人を毀傷することと有るなきを云ふ、〔大浸稽天而不溺〕大浸は大波なり、稽は至なり、「本書」の齊物論に至人神矣大澤焚而不能熱、河漢沍而不能寒、疾雷破山風扼海、而不能驚、若然者乘雲氣、騎日月、而遊乎四海之外、死生無變於己、而況利害之端乎とあり、本文と幷せ考ふべし、是れ皆至神なる偉人は、一世の外に超越し、區々たる世上の得失榮辱の爲めに、心を動かし身を誤らずして、其の行動靜息共に純ら天理と合體せる情狀を形容せし辭なり、

宙間に存在せる有情無情の萬物を渾じ合はせて、一體となし、其の間に彼我の差別あるなり、盡く萬物をして各〻其の所に安んぜしむるが故に、世間普通の考にては、何卒此の亂れたる世をば、斯の如き神人の手に頼りて治められたしと求むるとも、神人より見るときは左樣なる瑣末の事は好ましからず、何んぞ弊弊焉と世話敷して此の天下など云へる小世界を治むるを以て、己が仕事とするを承知なさんや、彼れは決して承知せざるなり、又外的方面より云へば、此の神人は純潔淡泊にして、一毫の私利心なければ、如何なる物も之を邪欲に導き入れて、毀つけ傷ふること無く、卽ち江海の大浪高く打ち揚りて天に至ると思へる位なるも、神人は其れが爲に溺らさるゝことなく、非常なる大旱魃にて百草萬木は愚か至堅至剛なる金石鎔け流れ、土や山が焦れ燒くるとも、神人は其れが爲めに熱せらるゝことなし、況して其の外、何物か之を毀傷し燒滅することを得んや、此の如き神聖なる威德を有すればこそ、今世間の儒者共が模範的明君聖主と云へば、必らず唐堯虞舜と口癖に唱ふるなれども、神人から見れば是れ其の身體を勞し、精神を費すなどの事をせずとも、乃ち塵埃及び爪端の垢の殘りや粃糠にても、彼れ堯舜位の人物を陶器師が器を作り、鍛冶師が金屬を鑄るが如くに作り拵しらへんとす、乃ち堯舜位の人を作るは造作もないことであるが、亦左程に堯舜が貴き物でもなし、詰り堯舜抔は態々注意骨折りて爲す精製的作物にあらず、されば神人ともあらう者が、何ぞ外物を治むるとか、又は治めざるとかと云ふ如き業を以て己が仕事となすを承知なさんや、斯の如き次第なれば神人は功を立つるとか立てざるとかと云ふ樣なることは、最初よりして念頭に置かず、左れば功績も自然に見認むべきなし、是れ神人無功と云へる所以なり、

【解義】〔之人也之德也〕二の之の字共に是の字と通ず、已に上文の之二蟲也の處に於て釋せり、「辨正」には猶云此人之德と云へり、是れ上の之の字は是の字と解し、下の之の字は接續詞に解して「ノ」と讀むなり、一說として揭ぐ、〔將旁礴萬物以爲一〕旁礴は猶混同也と「釋文」及び「成疏」に云へり、又礴は薄若くは魄と通ず、「漢書」の司馬相如傳に旁魄四塞とあるを、注に旁魄廣被也と釋し、楊雄傳に旁薄羣生

【解義】〔瞽者無與云々〕瞽は「メシイ」又は「メクラ」と訓ず、「釋文」に盲者無目如鼓皮也とあり、文章は美麗なる色彩を謂ふ、「考工記」に畫績之事、靑與白謂之文、赤與白謂之章とあり、〔聾者無與云云〕聾は「ミ、シイ」と訓ず、俗に「ツンボウ」と謂ふ、字彙に百無聞也とあり、「釋名」に聾籠也、如在蒙籠之內、聽不察（アキラカ）と云へり、〔夫知亦有之〕夫とは下を呼び起して云へる辭俗に「サテ全體」と云ふが如きなり、知は智と同じ、亦は形骸に對して云ふ、乃ち形骸上の聾盲ばかりにあらず、全體知識上の聾盲も形骸上と同じく之ありと云へるなり、〔是其言也〕其言とは卽ち上文にある瞽者無以與乎文章之觀の以下四句を指す、〔猶時女也〕此の句に兩說あり、時女の二字を連讀して、時女とは猶處女と云ふが如し、卽ち年頃の處女は嬌羞を含みて、靜柔和なれば本人より他人に交際を求めざるも、他人より進んで求めらるゝ者なり、今其れと同じきことにて接與の言は寔に面白く趣味あることなれば、君子に求められて決して捨て置く者にあらず、但知識的盲聾なる汝ちが輩にこそ、此の道理が解せざるなりと、是れ其の一說にして、司馬・向・郭・成等の諸家多く是の說を取れり、又、猶時を連讀し、時は是なり、女は汝の古字にして、是汝とは肩叔を指す、乃ち瞽者云々の言は猶ほ是の汝ちが如き者を指して云へるなりと、深く肩叔を抑へ戒むる辭と釋せり、是れ其の一說にして、林希逸、陸方壺、林西仲等の諸家多く之を取れり、又趙虛齋は時を是と訓じ、女を汝と解し、尙書に時女功とある時女と同じと爲せり、今姑く後說を用ふ、

之人也、之德也、將磅礴萬物以爲一、世蘄乎亂、孰弊弊焉以天下爲事、之人也、物莫之傷、大浸稽天而不溺、大旱金石流、土山焦而不熱、是其塵垢粃糠、將猶陶鑄堯舜者也、孰肯以物爲事、

【通釋】さて又汝ちが聞ける神人と云ふ者は、決して唯だの人にあらず、先づ內的方面より云へば是の人柄なり、是の道德は、寔に高大神聖なる者にて、宇

なる空氣を身體に攝取すること也、〔乘雲氣御飛龍云々〕胡方が「辨正」に順二受天地自然之化一與レ之變動、而行二乎無窮一也と云へり、乃ち其の遣り方が自然の移り易はるに順ひ、變化活動して、各々其の時や場所に適應して、何等の障りなく行はるゝことを謂ふと爲せり、〔其神凝使物云々〕其神とは神人の精神を謂ふ、凝は凝り靜かなること、疵は毀なり「キヅ」と訓ず、癘は音「レイ」又は「ライ」と讀む、惡病なり、成疏には疵癘は疾病なりとあり、此所は神人の精神凝り固まりて靜かなるときは、其の威力自然に著はれ、人に災病、物に夭死などなく、又氣候順當にして五穀豐熟ならしむ、極めて神人の德の高大神聖なることを稱贊して云へるなり、「獨見」に其神凝使物云云を釋して、是養レ神之極者、非二唯自全一而已、又足二以贊一天地之化育、輔二萬物之自然、此言推二己以及一物之效、所以合レ神不レ測、契二道無一方也歟と云へり、

連叔曰然、瞽者無二以與一乎文章之觀、聾者無二以與一乎鐘鼓之聲、豈唯形骸有二聾盲一哉、夫知亦有レ之、是其言也猶時女也、

【通釋】 連叔は之に答へて曰うやう、如何にも其の通りなり、成る程目の見えざる瞽者は如何程美麗なる物も目に見ること叶はざれば、色彩の立派なる文章の美觀を批評するに與かる資格なく、耳の聞えざる聾者は如何程美妙なる音聲も耳に聞くこと叶はざれば、音調の面白き鐘鼓の聲を批評するに與かる資格なしと聞きしことあり、されど豈に唯だ人の肉體上に聾あり、盲ありて、聲や色に辨じ別つことが能はざるのみならんや、彼の人々の智慧の上に就いても、能く物の道理を見別け聞き別くることなきは、宛かも瞽や聾が耳目の働きなきが如き者あり、即ち只肉體的の目なく耳の聞えざる不具者ある許でなく、精神的の同一不具者があり、さて以上の言は猶是れ汝ちの徒のごとき者を指して精神上の瞽的聾的の不具者と云へるなり、實に汝ちの非常識なるには驚き入りたる次第なり、

に突然なる話は分からぬことなり、一體彼れ接輿の言は如何なることを申せしか、今少しく具體的に語られよと、そこで肩叔は改めて接輿の言を告げて曰ふやう、其れは斯く斯くの話なり、藐と掛け離れて遠き姑射山と云へる山あり、或る一つの不思議極まる神樣見たやうなる人が之に居れり、其の肌膚は色澤の美なることは宛かも氷や雪の如く潔白にして、すき透り、其の態の淖約と柔和なること、宛かも未通女の深窓に生長して、世の風に中らざる如し、而して平生の食物は五穀を食はずして、清らかなる風を吸ひ、夜に入りては新しき露を飲みて身の養となし、時に興來れば雲氣に乘り、翼ある龍に跨り、使ひて、四方海外人間の行かざる處に遊ぶことを爲す、此の不思議なる人の精神凝り靜まりて、其の神通力とや申すべきか、自然に萬物をして病み付きて早死することなくして、一方には年成りの穀物を豐熟ならしむと、接輿の話は以上の如くなるが、吾は其の餘り人を莫迦にしたる言ひ草なれば、左樣なること有るまじきことゝ思ひて信せざるなり、

【解義】〔藐姑射〕藐は邈と同じ、遠きことなり、姑射山は「山海經」に据れば、寰海の外に在りとし、「釋文」には北海中に在りとして其の處確指せず、隋書の地理志に据れば臨汾に姑射山ありとなす、臨汾は今の山西省太原府附近に在り、李楨は此所の姑射山は北海中に在りて、下文の堯見四子の節にある姑射山は汾水の陽に在りとなせり、未だ其の果して然るや否を審にせず、要するに莊子の寓言なれば姑く疑を闕いて可なり、〔肌膚若氷雪〕肌膚は共に「ハダヘ」と訓ず、氷雪は其の潔白なるに喩へたるなり、郭慶藩は氷は凝の古字にして、「詩經」に膚如凝脂とあるが如く、其の色の滑白なることを謂ふ也と云へども、前說を優なりとす、〔淖約若處子〕淖は音は綽と同じく、綽約は柔媚にして愛すべき貌處子は卽ち處女にして、未だ嫁せずして室に在る女子、卽ち俗に云へる未通女なり、「管見」には守柔自全、害不及也とあり、乃ち深窓の處女の情柔順にして、他の迫害を蒙らざるが如き狀なることを云ふ、陸方壺は卽ち德性柔好也と云へり、〔不食五穀云々〕五穀は黍稷麻麥菽なり、褚伯秀は不食五穀、吸風飲露、絕除世味、納天地之清冷と云へり、乃ち一切世間の味を却け、天地清新

宗師篇に肩吾得之處太山とあり又「應帝王篇」にも肩吾見接輿の一節あり、司馬彪は以て神名となせり、連叔も亦古の賢人なり、其の傳記未だ詳かならず、接輿は楚の賢人なり、成疏には接輿者姓陸、名通、字接輿、楚之賢人、隱者也、與孔子同時、而佯狂不仕、常以躬耕爲務、楚王知其賢、聘以黃金百鎰、（二十兩を一鎰と爲す）車駟二乘、並不受、於是夫（接輿）負、妻（接輿の妻）戴、以遊山海、莫知所終とあり、「漢書」の韓嬰の傳にも接輿の事を載す、亦此と大同小異の事なり、論語に楚狂接輿が鳳兮歌を載せたり、亦本書の人間世篇にも見ゆ、（往而不反）往き進むのみにして後へ返ることとなし、乃ち徒に話を廣くることを務めて、引き締りの無きこととなり、（猶河漢而无極也）河漢は銀河なり、「アマノガハ」と訓ず、又黃河漢水の二大川なりとも云ふ、无は無と同じ、司馬彪は極崖なりと釋せり、成疏に吾竊聞之驚疑怖恐猶、如上天河漢迢遞淸高、尋其源流、略無窮極也と云へり、（大有逕庭）大に逕ひあることと也、玄英が疏には逕庭猶過差、亦是直往不顧之貌とあり、「釋文」に李說を擧げて謂激過也とあり、共に激く過ぎたることにて、謂はゆる突飛的の義に解せり、又逕は小徑、庭は堂の中庭にして、其の相離れ隔たりたることを假りて議論の相違あるに喩へしなり、又逕は莖（クサノクキ）と通じ、庭は梃（ツヱ）と通じ、草莖は小にして梃は大なれば以て大小との相同しからざる義に喩へしなりとの說もあり、要するに其の間に距離差異のあることを言へるなり、以上は普通の解なるが「正義」には言辭詭異、若別有逕庭、非尋常出入之所經也と解したり、今其の說を用ふ、

連叔曰、其言謂何哉、曰藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外、其神凝、使物不疵癘而年穀熟、吾以是狂而不信也、

【通釋】連叔は肩吾に答へて曰ふやう、扨ても左樣

用天下爲〕此れ亦倒句法を用ひたり、通常に書する予無所爲用天下と云ふと同じ、乃ち予は今天下を讓り受くるとも、天下を用ひて何の役に立て所なし、全く無用なりとの意味なり、〔庖人雖不治庖〕庖人は俗に云へる庖丁人にて、臺處に居りて料理割烹を司る人なり、庖は「クリヤ」と訓ず食物調理の場所卽ち臺處なり、〔尸祝不越樽俎〕尸祝は「カタシロ」と訓ず、支那の古禮には宗廟の祖先を祭る時に人を見立てゝ、神の名代に設へて、祭壇に升せて立たしむる者あり、之を尸と名づく、祝は「ハフリ」と訓ず、神職なり、祭をなす主人の爲めに神前に對つて祝文を讀む人なり、樽は「タル」と訓ず、祭りの時に酒を入る器なり、俎は「マナイタ」と訓ず、肉を置く器なり、上句庖人は堯に喩へ、本句の尸祝は許由自ら喩へたるなり、

肩吾問於連叔曰、吾聞言於接輿、大而無當、往而不反、吾驚怖其言、猶河漢而無極也、大有逕庭、不近人情焉、

【大意】肩吾と連叔との問答の事を擧げて、前文至人無己の義を證す、是亦寓言にして事實にあらず、「辨正」に据れば此の段は接輿連叔二人の言を假り、以て逍遙遊の體段を暢寫せるなり、大體を云へば上文に謂はゆる無の道の如きは、今更吾が輩（莊子）の言を待たず、接輿連叔嘗て已に之を言へりとの意を示したるなり、

【通釋】昔し肩吾と云ふ者がありて、友人の連叔と云ふ者に問うて曰く、吾れは嘗て彼の君等も知らるる接輿と云ふ者より咄しを聞きしことあり、然しながら餘りに大言にして成る程と心に合點すること無し、又出放題なることを口辯に任せて滔々と前きへ前きへと許り進んで、後は引き合はして是れぞと突き留むることとなし、因て吾は彼れの咄しが宛かも天上に見はれたる天河が悠々と長く、源流を尋ねても、窮り端なきが如くにて、至極取り留めなきことを感じたり、全く彼れが咄は他人の咄せる事と大に逕庭とて、卽ち別途の別場があり、詰り普通的人情に遠く離れて居れり、

【解義】〔肩吾連叔〕肩吾は古の賢人なり、本書の大

後より云へる辭にして、成疏は盡也と解せり、已は近き現在の時に屬して、今が早や其の時と云へる意なり、乃ち此所にては天下は遠くの昔しに今が早や治まりたと云ふ時代は過ぎたりし譯なりと謂へる意味なり、又此の處の助辭に也の字を用ひて、矣の字を用ひざるは、矣は事理の分り切りたることを、今更云ふ迄もないと云へる意味に用ひ、也は己が初めて判斷して、此の如くあるべしと云へることに用ふることなればなり、〔而我猶代子〕猶とは可己而未已の辭と字書にあり「シッコクモ矢張リ」と云へる意味なり、〔吾將爲名乎〕將は擬度の辭とて「是レカラ左樣ナサン」と下に云へることを豫想して云へるなり、乃ち若し子が勸めに從ひて、天下を讓り受けたるときは、天下を治むるてふ名譽を爲すことならんと、前途を氣遣ひて云へる語なり、〔名者實之賓也〕賓とは賓客なり、主人に對して外來の人を稱する辭なれば、今此に假りて、名と云ふ者は實と云ふ者が有りて、茲に始めて生ずることに喩ふるなり、〔吾將爲賓乎〕宛かも外來の賓客が主人の案内を被るが如くに、全く他人に賴りて事を爲す者たらんとする乎の意味なり、一說に本文の名の字は實の字の誤りにて、上文の吾將爲名乎の語に對して、吾將に名を得るが爲めに、子に代りて天下を治めんか名は實の賓に過ぎざれば要するに貴ぶに足らず、さればとて、吾將に天下の富を擅にする實を得んが爲めに代りて天下を治めんか、吾が得る所は、鷦鷯の一枝、偃鼠の滿腹に過ぎずと云へる義なりと釋せり、我か邦岡松甕谷、淸國の兪樾は共に此の說を執れり亦參考と爲すべし、〔鷦鷯巢於深林〕鷦鷯は小鳥の名、美曾佐坐井と訓ず、英疏に鷦鷯巧婦鳥也、一名工雀、一名女匠、亦名桃蟲、好深處而巧爲巢也とあり、〔偃鼠飮河〕偃鼠は於具羅毛知と訓ず、地中の行鼠也とあり、又英疏には偃鼠形大小如牛、赤黑色、獐脚、脚有三甲、耳似象耳、尾端白、好入河飮水とあり、〔歸休乎君〕是れ倒句法を用ひたるなり、君其歸休乎と云へると同じ、歸休は歸りて休息することなり、君とは堯を指す、前に子と呼びたるを變じて、今は君と云へるは此の處は堯に向うて、其の帝位に御せる身分なることを氣附くるが爲に、特に敬稱を用ひたるなり、猶ほ後世の語にて云へば「歸らせ給へよ我が陛下には」と云へるが如し、〔予無所

無用なる話なり、宜く考へ給ふべし、今子は多年天子となり、此の天下を治めて、天下は既に太平になりて遠き昔しに治まりたり、然るに我が之を顧みずして子に代りて天下を治むるときは、吾れは將に天下を治むるてふ名譽を貪り求むることを爲さんとするか、一體名てふものは、其の實物ありて之に伴ひ生ずる者にて、譬へば實はもと常に內に居る主人にして、名は一時外より來れる賓客の如き者なり、乃ち內に主人あればこそ外より賓客が來るなり、今子既に天下を治めたる事實あるに拘らず、吾れが之に代りて天下を治めたる名義を取るときは、是れ吾れは將さに子に對して外より來りたる賓と爲らんとするか、左樣なる義は甚だ迷惑なれば、御免蒙りたし、且や物に各々分量あり、鷦鷯は小鳥なれば深く茂れる林中に居ても一枝に巢くふ外、他に求めなし、偃鼠は微獸なれば廣く深き河に飮みながら、己れが滿腹の外、別に貪ることなし、我れも其の通りにて此の狹き民屋に居て、飢ゑ寒えを凌ぎ得れば、此の外何等の欲望もなし、さて早く歸りて休息し給へかし、子よ、予は此の天下を貰ひ受くるとも、之を使ひ用ふる所なし、又人は各々職掌あり、臺所を治むる料理人が、如何に不行屆きにて臺所を治めざるとも、神の祭りを司れる尸祝たる者が、我が職を棄て其の樽俎を過ぎ越えて、料理人に代りて割烹をすることを爲さず、乃ち各々己が持ち前への職掌を大切にするが肝要なり、今子は全く料理人の如く自分は尸祝の如き地位に立てたる者なれは、縱し子が天下を治めざるとも、吾れ子の責任までを代りて持つべき筈はなきなり、夫れ堯と云ひ、許由と云ひ、天下を治めたる力あり、又天下を治むべき力ありと雖も、相互に避けて隱れんと欲す、聖人の名を求めざるや此の如し、是れ其の無名なる所以なり、

【解義】〔子治天下〕子は男子の通稱、後世相呼ぶに君と云へるが如し、堯を指す、堯は許由を呼ぶに尊稱を用ひて夫子と曰ひ、許由は堯を呼ぶに單に子と稱す、此れ亦許由の布衣を以てして、而も自から居ること高尙なると、堯の帝王の尊を恃まず、自から謙遜なると、皆倶に聖人の世の富貴尊榮に重きを置かざることを示したるなり、〔天下既已治也〕既已は共に「スデニ」と訓ずれども、既は事の遠くに過ぎ去りし

何等の効益なきなり、吾れは自から視るに如何にも缺然として見すぼら歉感ずるなり、請ふ吾が有てる天下を夫子に御讓り申さんと、

【解義】〔堯讓天下於許由〕堯は帝堯卽ち有名なる聖人、謂はゆる堯舜の堯なり、許由は許は姓にして由は名なり、潁川陽城の人にして、堯の時箕山に隱れたる高士なり、堯の天下を許由に讓らんとしたることは、司馬彪が「史記」の伯夷傳を始め、皆な無根の事となせり、然れども莊子の文はもと寓言なれば、事の實否は問はざるなり、〔爝火不息〕爝は炬火なり、「タイマツ」と訓ず、一に燋に作る、燋火は小火なり、〔時雨降矣〕時雨は「シグレ」と訓ず、成疏に神農（上古の帝王）の時十五日一雨、謂之時雨とあり、朱子は孟子の盡心篇に有如時雨化之者とあるを注して、時雨及時之雨也と云へり、乃ち時に取りて至極都合宜しき雨なり、〔而猶浸灌〕浸は「ヒタス」と訓ず、漬なり、漸なり、灌は「ソヽグ」と訓ず、聚なり、漑なり、浸灌とは浸潤漸漬の謂にして、卽ち水の漸次に浸入るやう漑ぎ込むこと、林疑獨曰く日月時雨出於自然、故不見其有爲、而功大、爝火浸灌出於人力、故見其有爲、而效淺と、〔夫子立而天下治〕夫子は男子の美稱、後世の先生と云ふが如し、許由を指す、而は則と同義に用ふ、天下治とは天下が自然に治まることなり、〔而我猶尸之〕尸は主なり、之とは天下を指す、乃ち帝位にありて天下の主となれるを謂ふ、〔請致天下〕致は與なり、乃ち許由に天下を與へんと云へるなり、

許由曰、子治天下、天下既已治也、而我猶代子、吾將爲名乎、名者實之賓也、吾將爲賓乎、鷦鷯巢於深林、不過一枝、偃鼠飮河、不過滿腹、歸休乎君、予無所用天下爲、庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣、

【大意】上を承けて許由の對を記す、

【通釋】許由は之に對へて曰へるやう、其れは實に

名、故就體語至、就用語神、就名語聖、其實一也（中略）二人之上其有此三欲顯功用名各殊、故有三人之別と陸樹芝曰く方爲至人神人聖人、方爲逍遙、固非斥鷃所知、亦非大鵬所能學步也と胡大靈曰く神即至之實、聖即至之品、變名稱之也、無己則無爲無定、無爲故無功、無定故無名と又曰此方說逍遙遊之道と、

堯讓天下於許由、曰、日月出矣、而爝火不息、其於光也、不亦難乎、時雨降矣、而猶浸灌、其於澤也、不亦勞乎、夫子立而天下治、而我猶尸之、吾自視缺然、請致天下、

【大意】堯と許由と、聖賢互に天下を讓りたることを擧げて、聖人無名の義を證す、亦是れ寓言にして事實にはあらず、「辨正」に据れば、此の段は天下已に治れるに、其上に治むることを加ふるに及ばずとの意を言うて、己に現に成れる道に向つて、更に己が智力等を加へて、事を爲すに及ばず、凡て自然に任かして別に精神を役し、力量を費して、其の上に人爲的小細工を爲すべからざる義を示し、上文の至人無待と云へることを申ねて明かにしたるなり、

【通釋】昔し堯と云へる聖帝ありて、或る時己が有てる天下を時の隱君子なる許由と云へる人に讓り渡さんと思ひ、許由に向うて曰へるやう、人工は到底天然の力に克ち難し、日や月が既に出でゝ世界隈なく照らし居れり、而も僅かなる爝火が如何に威張りて息まざればとて、其の光り加減に於て、亦難事ならずや、時雨の滂沱として快く下りけるに、而も猶田圃に水を浸し灌ぐときは、其の澤ひ加減に於て亦難事ならずや、即ち二者共に到底比較の問題にならざるなり、之れと同じき道理にて、今先生の樣なる大德ある人が立ちて天子と爲る時は、天下其の德に感化されて自然に治まらん、然るに我れの如き不肖なる者が猶は頑然として天下を尸り治むることは、宛かも是れ爝火を以て日月の光に抗し、浸灌を以て時雨の澤に敵すると同じく、徒らに骨折り損のみにて世には

と郭慶藩が集釋に見えたり、御は「說文」に使馬也とあり、車を引ける馬を使ふことなれば、上句の乘天地之正とあるに對して云ふ、亦列子の御風の語に因みたる文章語なり、乃ち此處にては陰陽風雨晦明の六氣各々其の時を得ればこれを和と云ひ、時を得ざれば之を乖と云ふ、乖は則ち變なり、變ずる時は善く之が調和を圖りて其の宜しきを得て和に復せしむ、宛かも馭者が馬を使うて歩驟を誤らざらしむるに似たるより、右の如く云へるなり、「以遊无窮」无は無と同じ、眞理は高遠にして極りなく、悠久にして疆りなきを以て、故に無窮と曰へり、遊とは何等の羈絆を受けず、獨立獨歩して行ひ、快樂を盡くして綽然餘裕あることを謂ふ、乘天地之正、而御六氣之辯、以遊无窮者はもと冲虛凌霄のことを狀して云へるにて、卽ち上文にある御風而行の意と同じ、但彼の列子は暫時的假り物なると、此れは恒久的眞物なるとの差異あるのみ、「彼且惡乎待哉」且は將と同じ、惡乎とは何れの所と云ふが如し、乃ち彼の偉大なる人は將に何れの所に於て何に物を待ちて然りしか、固より何等の外物を待つなく、眞に自然より出づる者なり、林西仲曰く此是極大身分、極高境界、極遠程途、極久閱歷、用不得一毫幇襯、原無所待而成、此逍遙遊本旨と、「故曰至人無己」凡そ文中に故曰とあるは古人の成語を引きて云へるとき、又は本文中にある前語を回顧して云へるとき、又己が嘗て唱へ居る語を引きたるときに用ふるが常例なり、今此の處は前語を回顧して云へるなり、本句の至人及び下句の神人聖人は皆共に前文にある乘天地之正御六氣之辯の人を云へるにて、別に此の三人あるにあらず、乃ち至人とは其の道德が絕對的極度に詣れる處より視て之を至人と謂ひ、又其の世間に對して自他の變化に順ひ、其の靈妙測る可からざるよりして之を神人と謂ひ、又其の凡そ物事を行ふや、自然の勢に順ひて爲し、特に己が意見を發表して苦辛經營の形迹などを留めざるよりして、是れと云ふ功績の認むべき物なければ無功と云ひ、深智ありて百物を形容し、衆人に敎へ諭すより視て、之を聖人と謂ひ、其の自然の理法を自然的に示し敎へ、特に己が名聞を博せざるよりして、是れぞと世上に評判の高まることなき處より視て、之を無名と云はれたるなり、成疏に至言其體、神言其用、聖言其

て成數と爲し、一段仕切りをなし、尙ほ餘りあるときは、又一より起して二三四と數ふるを定則となす、十五日なるときは十と又五とある意味にて、十の下に又の字を置きて之を云へるなり、此所に於て十又五日而反とあるは、凡そ一年十二箇月を立春より大寒に至る二十四氣に分つ、乃ち一氣の轉ずるは十五日と爲せば、十五日は天氣一轉の時なり、天氣一轉すれば風も亦爲めに一轉するが故に、風を待ちて飛行するを得たる列子は反らざるを得ざるなり、反とは地上に反り下たることなり、「彼於致福者未數數然也」致は得なり、福とは自然の幸福卽ち天佑なり、致福とは乃ち自然の幸福を得るの意義にして、彼の列子が風に御して行くが如きは、通常人力の固より企て及ぶべきにあらず、而も列子に限り獨り善く之を自由に乘り廻すことを得るを以て、斯の如き天佑を我が手に收むること實に偉大なる力なりと稱贊して本語の如く云はれたるなり、「猶有所待者也」待とはもと物が自分に無くして、外方より持ち來りて其の用を遂げ果たすことなり、列子は步まずして行くことをなすとも、世界に活動することを得るも、風と云ふ一つの外物を待ちて、始めて其の用を遂げ果たすなり、若し風が無りせば、彼れは矢張り步まざれば行くこと能はず、されば、前に云へる知效一官の人々及び宋榮子等と其の優劣は同じからざるも、共に咸な外方の物に關せずして、眞の自然的たることは能はざるなり、陸樹芝曰く雖免於步行之難、猶必待風而御之、則亦如大鵬之乘風而圖南耳、尙非逍遙之極致也と、「若夫乘天地之正」若夫とは轉換詞にて、本文中更に別事別意別物件を指して之を入れんとするときに用ふる助語なり、天地の正とは郭注に天地者萬物之總名也とあり、成疏は又萬物者自然之別稱と云へり、正は邪に對する辭にて、卽ち自然の眞理に順ふことを云へるなり、順と云はずして乘と云へるは上文の乘風の語に因みたる文章上の語なり、「御六氣之辯」六氣は諸說紛々なれども、陰・陽・風・雨・晦・明也と杜預が「左傳」の注に見えたり、此れ最も古くして且汎く世に行はる說なり、今之を用ふ、辯は辨と同じ、變なり、上句の正の字と相對して變化せる處に就いて云へるなり、辨を變と解するは「廣雅」に辨變也、「易」坤文言猶辯之不早辯也、荀本作變、辯變古通用

を務むるが如き、官吏俗士の所爲を見て之を笑へるなり、又猶然とは、然は助語にして、猶以爲笑の意なりと解し、乃ち宋榮子の如き較賢れる人にして、格別絶大なる人物ならずとも、猶且彼の人々が汲々として小局に安んずることを嘲り笑ふなりと郭慶藩は釋せり、今其の說を用ふ、「且擧世而譽之」且は聊略の辭にして「マアソレハ」と云へる意味なり、擧世は、擧は皆なり、一世を皆揃へてと云へる義なり、「定乎內外之分」內とは己の身を謂ひ、外とは世の人を謂ふ、乃ち自己の身中に保つ本心は內にして主人なり、世間の毀譽はもと我が身に預ることとならずして、外邊より來れる一時的觸れ掛りの客人の如き者なれば、如何に其れが己を譽むるとも毀るとも、我が本領に何等の影響損得なしと落ち就きて動搖せざるを謂ふ、分は分別なり、「辨乎榮辱之竟」竟は境と同じ、自己の本領を知り、內を守れば榮譽となり、自己の本領を枉げて、外物の誘惑に動き、富貴功名の利欲に囚はれて、之が奴隸たるを甘んずるは恥辱と爲り、此の境界を能く辨へ知りて榮ありて辱なき樣に爲すを務むることを謂へるなり、「斯已矣」是と通ず、卽ち上文に列擧せる擧世而譽之云々の四句を指す、斯已矣とは、此の人が彼の如きこと有りし所以は、是の毀非に動かず、內外榮辱の事を能く辨別すればなり、乃ち斯の外に理由はなしと斷言したるなり、「未數數然也」數數は此にては「サクサク」と讀む、頻々と云ふが如し、乃ち以上の如き人物は之を世間に求むるに澤山はなきことを謂ふ、又一說に數數は汲々と云へるが如し、乃ち彼等は性質淡泊にして道を信ずること篤く、何に事も自然に任かせて世俗の名聞利益に汲々たらざるを謂ふなり、「雖然猶有未樹也」樹は樹立なり、乃ち彼等は偉き人物には相違なきも、猶未だ卓然として遠く世上に超越し、獨立特行の位地には達せざるを謂ふ、「夫列子御風」列子は鄭國の人にして、名を御寇と曰ふ、莊子より較先輩にして、老子の學を修め、其の著書に列子あり、「釋文」に李楨の說を援きて得風仙、乘風而行、與鄭穆公同時と云へり、御は乘なり、「冷然善也」冷然は涼き貌、郭注には輕妙之貌とあり、乃ち飄然自得の狀を形容して云へるなり、「旬有五日而後反」旬とは十日を謂ふ、有は又と同じ、凡そ物を數ふるは一より始め十を以

大切なると、天下の物事は外にして輕少なるとの分別を定め、斷然迷ふことなく道德を自得し、己が人格を高むるの光榮たると、之に反して德義を無視して、利欲の奴隷となるの恥辱たるとの境域を辨知し、劃然として自から守ることありて、更に他物の胸中に侵入して攪亂する能はざる者あればこそ此の如きことを能くするなり、彼れの如き高尙なる賢士は之を世上に求むるに、已に鮮くして未だ頻々として多くはあらざるなり、然りと雖も彼も亦猶ほ此の濁りたる人間界に身を置きて、未だ卓然として一世の外に樹立すること能はず、乃ち矢張り何處となく自然に未だ謂はゆる人間臭きことの有るを免れざるなり、即ち是れ猶ほ未だ眞に至れる者と爲す可からず、

【解義】〔故夫知效一官〕故は是れ前に仍る辭、夫は是れ後を生ずる辭と成疏に云へり、知は智と同じ、效は功效なり、知效一官とは其の智を一官に竭くして功效の見るべき者あるを謂へるなり、〔行比一鄕〕其の行ひ外部に見はれて名譽高く、鄕里の人々を和らげ合せて互に親密ならしむることを謂ふ、鄕とは、もと一萬二千五百家の部落を鄕となす、然れども此れ必ずしも拘らずして可なり、〔而徵一國〕而は能と古字音近く、義相通ず、「淮南子」原道訓に而以少正多とあるを、高注に而能也と釋し、「呂覽」の去私不屈の諸篇の注に皆而能也と解せり、又「墨子」の尙同篇に故古者聖王唯而審以尙同とあり、「楚辭」の九章に世孰云而知之とあるが如き、亦皆、而の字を能の字の義として用ひたり、徵は信なり、成なり、此處の文は官鄕と君國と相對し、知行と德能と相對して用ひたるなり、而かもと讀轉語となすは非なりと郭慶藩は云へり、今其の說を用ふ、乃ち才能の一國の上下に信ぜられて事業の成就せることを謂ふ、〔其自視也亦若此矣〕玄英は稟分不同、優劣斯異、其於各足未始不齊、視己所能、亦猶鳥之自得於一方と云へり、乃ち彼等は面々に己が境遇を以て滿足するは、宛かも彼の鳥が其の一方面に於て自得するが如しとなり、〔而宋榮子猶然笑之〕宋は國の名なり、榮子は榮は姓にして子は敬稱なり、猶然は笑ふ貌、ニコニコと笑ふことなり、榮子は賢人なれども、未だ全く世情を忘るゝこと能はず、故に彼の僅かに汲々として一官に己が智力を竭くし、一鄕に名譽を博する

旬有五日而後反、彼於致福者未數數然也、此雖免乎行、猶有所待者也、若夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊無窮者、彼且惡乎待哉、故曰至人無己、神人無功、聖人無名、

【大意】　上文大知小知の辨あるの義を承けて人物大小の別あるを云ふ、先づ三層に分ちて說き、第一層は知效一官云々を擧げて、世の是非に拘りて、小なる人物を說く、第二層は宋榮子猶然笑之云々を擧げて、世人の是非に拘らざるも、尙は是非の見ある人物を說く、第三層は列子御風云々を擧げて、是非の見は無けれども、尙、是非の見無しと云へることが心に存して、未だ盡くは純然たる眞の逍遙遊を得ざる人物あることを說く、而して最後に乘天地之正云々を擧げて、眞に是もなく非もなく、虛無因應の道を自得せる絕大人物のあることを說けり、

【通釋】　かるが故に、今茲に人ありて、或は其の智識衆人に勝れて、一つの官吏となりて、其の働き効能を見はすに足る者、又、其の行爲良直にして一つの鄉里を和らげ比むに足る者、又、其の道德の賢りたることは、一つの國君の氣に入りて、尊敬を享くるに足る者、此等の人々は何れも非凡なる者なるが、彼れ自らが己の身の程を視るときは、何れも其の得々として現境に安んじて、更に進取の氣象なきは、亦宛かも此の斥鷃の類にして、其の因循卑屈なること殆んど度すべからざるなり、而して此れ等に對する是非の批評は、必ずしも天下の賢君子を待たず、彼の宋國の識者なる宋榮子と云へる輩よりして之を視ても、猶且つ其の事の餘り淺墓なる義なれば、之を嘲り笑ふなり、然れば彼れ宋榮子は如何なる徒なるかと云はんに、彼れは兎に角世に超越したる高士にして、如何に世間が擧りて之を譽めたりとて、爲に別段に其の勸勉を增すと云ふにもあらず、亦如何に世間が擧りて之を誹ればとて、爲に別段に其の沮喪を增すと云ふにもあらず、是れ如何なればこそ此の如くなるかと云はんに、能く自己の人格を認め、己が身は內にして

狀若嵩華（嵩山華山）と解せり、〔翼若垂天之雲〕垂天の解は已に前に出だせり、今列子を按ずるに湯問篇の語は此の句に止まり、而して此の句の下に其體稱焉、世豈知有此物（鯤鵬）哉、大禹行而見之、伯益（古の賢人）知而名之、夷（同上）聞而志之の語あり、〔摶扶搖羊角〕摶扶搖は已に前文に解したり、羊角とは、羊の角は皆曲旋し居れば、假りて旋風の曲戾せる狀を形容して云へるなり、〔絕雲氣〕絕は遏絕なり、絕ち止むること、成疏に凌厲蒼旻（青天）、遏絕雲霄（オホソラ）鼓怒、放暢、圖度南海とあり、〔且適南冥也〕且は將と義同じ、〔斥鴳笑之〕斥鴳は「カヤクキ」と訓ず、小鳥なり、鶉の屬、倶に黑色なれども斑なき者を鴳となすと「本草綱目」「和漢三才圖繪」等に見えたり、「釋文」には崔本を引きて尺鴳に作る、郭慶藩は曰く斥と尺と古字通ず、鴳雀なり、「文選」に曹植が七啓の注に鴳雀飛不過一尺、言其劣雀也とあり、是れ尺を寸尺の尺と釋せしなり、又夏侯湛に尺鴳不能陵桑楡の語あり、是れ斥を正しく尺に作る、「一切經音義」に尺鴳を釋して鴳長惟尺とあり、又一說に斥は小澤なり、「文選」の宋玉が對楚王問に、尺澤之鯢あり、注に尺澤言小也と、〔不過數仭〕八尺を仭と爲す、〔翺翔蓬蒿之間〕翺翔は「カケル」と訓ず、鳥の飛び廻はること也、蓬蒿は共に「ヨモギ」と訓ず、蒿に多種類あれども、此所にては只野外の小草の義に用ひたるなり、〔此小大之辨也〕辨は辨別なり、此とは上文の鯤鵬と斥鴳との事を指す、乃ち謂はゆる大知小知の分ちは類此の如くなることを云へるなり、林西仲は一語結上生下、多少筆力と評したり、

故夫知效一官、行比一鄕、德合一君、而徵一國者、其自視也亦若此矣、而宋榮子猶然笑之、且舉世而譽之、而不加勸、舉世而非之、而不加沮、定乎內外之分、辯乎榮辱之竟、斯已矣、彼其於世未數數然也、雖然猶有未樹也、夫列子御風而行、泠然善也、

するなり、然るに此の處に斥鷃とて至て小形なる鳥がありて、此の鵬の狀態を見て嘲り笑うて曰く、彼れ鵬鳥は將さに何れの處に赴き適かんとするや、實に苦勞千萬なる次第なり、我等斥鷃も鳥の一類なれば、亦羽翼の天然に具はれる者なきにあらず、然れども我等は飛び騰り、踊り躍りて上ること精々高さ數仭、卽ち二三丈の高さに過ぎずして、終には形體の疲勞に堪へかねて下り、蓬や蒿の生え繁りたる間を翺翔て濟むことなり、然し此れも亦我が身體に相應じたる飛び方の至極したる者なり、然るに今彼れ鵬鳥は遠方を苦勞にも何れの處に赴き適かんとするかと、斥鷃は鵬の事を以上の如く云うて笑ひたるが、此れが乃ち物の小なると大なるとの辨別、卽ち相違したる所なり、小物は到底大物の事を知る能はざる一證ならずや、

【解義】〔湯之問棘是已〕湯は殷の天子湯王なり、棘は人の名なり、成疏に據れば棘は湯の時の賢人にして、湯の博士たり、「列子」に湯問篇あり、窮髮之北云々の事を載せて、棘を夏革に作れり、張湛が注に夏棘字子棘、爲湯大夫とあり、郭慶藩は棘と革との二字古音相同じくして通用すと云へり、陸方壺曰く既說齊諧、又引湯之問棘一段、以爲符契、事意同而語有變化、是他文字妙處と此れ莊子が既に齊諧を引證とせしに、又湯之問棘の一段を引きて、其の事の符合せるを著し、以て更に自說の一證を加へたるものなれども、其の文辭に變化ありて全くは前文と同じからざるは、乃ち文章の妙處なりと評せることなるが、宣穎は前引齊諧處、捉議雜出、此更不多半語、只輕鎖云、此小大之辨也、便將前幅隱隱總收、有一葦防瀾之妙、且筆鋒已渡起下文、と云へり、〔窮髮之北〕窮髮は極めて僻遠にして不毛なる北方の地を謂ふ、司馬氏は北極之下無毛之地也と云へり、髮は毛の意味に解すべし、毛は草なり、「地理書」に山以草爲毛とあり、「列子」には終髮之北に作れり、終も窮も何れも推し詰めたる義にて、遠方を意味せり、〔未知其脩〕脩は長なり、上句に既に鯤の廣さを數千里と云ひて、此に又其の長さを知らずと云へるは固より數千里より長きことは論なし、乃ち其の極めて大なることを云へるなり、〔背若泰山〕泰山は五岳の一にして、今の山東省にある有名なる高山なり、成疏は鵬背宏巨、

冥海者、天池也、有魚焉、其廣數千里、未有知其脩者、其名爲鯤、有鳥焉爲鵬、背若泰山、翼若垂天之雲、摶扶搖羊角而上者九萬里、絶雲氣、負青天、然後圖南、且適南冥也、斥鴳笑之曰、彼且奚適也、我騰躍而上、不過數仞而下、翺翔蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼且奚適也、此小大之辨也、

【大意】再び古書を援きて益々己が言の誕妄にあらざることを證す、

【通釋】前述の吾が言へる鵬と小鳥との事に就いては既に齊諧にも言はれてありて、決して誕妄にはあらざれども、尙ほ又一證を擧げて曰はん、乃ち湯之問棘とて、昔し殷の湯王が棘と云へる人に問はれたることを記せる文中にあることが卽ち是れ其の一證なり、卽ちそれは下の如くに云はれてあり、窮髮とて不毛の地があるが、其の北に冥海と云へる處あり、卽ち天然の貯水池なる大海なり、その海中に大なる魚あり、其の身體の廣さは數千里に亘り、其の長さに至りては未だ到底幾里あるかを測り知りし者あらず、仲々言語を以て計へ盡すべき限りにあらず、此の魚の名を鯤といへり、又此の大海に一つの鳥あり、其の名を鵬といへり、鵬の背は彼の有名な泰山の高大なると同樣にて、其の翼を垂れ展ぶるときは、宛かも天の一方に垂れ下がれる雲の如く廣大なり、此の鳥や扶搖とて下より吹き上れる暴風に於て勢力を打ち固め、宛かも曲り旋りたる羊の角の如く大空を轉旋して、上ること九萬里の高きに至り、此の處まで達すると雲や氣を橫ぎり渡りて、宛かも身に靑天を背負うたるが如く、極めて天に接近し、然る後始めて南方に徙らんと圖る、而して何れの處に行くかと云へば、卽ち前に述べたると同じく南方の海中に適き赴かんと

說を取りて曰く「廣雅」には正しく朝蟧に作る、其の蟲たるが故に、字は虫に從ひたるのみと、「不知晦朔」とは「釋文」には晦冥也、朔旦也とありて、一日の朝暮を指して云へることに解したれども、若し其の說に從へば、朝生の者は暮に及ばざれども、固より已に朝を知れり、暮生の者朝に及ばざれども、固より已に暮を知れる筈なれば、「不知晦朔」と云ふ可からず、故に一日を隔てたる晦と朔とに就いて云ふに如かず、是れ清の盧文弨が說なり、〔蟪蛄不知春秋〕蟪蛄は寒蟬（ヒグラシと訓ず）なり、一に蝭蟧と名づく、春生ずれば夏死し、夏生ずれば秋死すと、是れ司馬が說なり蟪蛄は蛁蟧なり、或は山蟬と云ふ、秋鳴く者は春に及ばず、春鳴く者は秋に及ばずと、是れ崔譔の說なり、又寒蟴（キリギリス）なりと云へる說もあり、〔楚之南有冥靈者〕楚は國之名、冥靈は植物の名　成疏に、海の靈龜なり、本文は大椿と共に一動一植の物を對擧せし者にして、木の名にあらずとせり、然れども上文の朝秀蟪蛄を動物とし、此の冥靈大椿を以て植物となすの優れるに如かず、〔以五百歲爲春〕春秋の二季各五百歲とするときは、冬夏の二季各々五百歲、此の外に在るべき筈なれば通計二千年を以て一年となすに似たれども、盧文弨は「說文」に依りて、春秋に冬夏を包括して、各々五百歲あるものとし、乃ち一年を千歲あるものと爲せり、下句の以八千歲爲春八千歲爲秋とあるも、亦此の例を以て乃ち一年を一萬六千歲ある者と爲せり、今其の說を用ふ、〔上古有大椿〕上古は太古なり、椿は木の名なり、一に櫄と名づく、櫄は木槿なること「釋文」に引ける司馬が說に見えたり、〔而彭祖〕彭祖は姓は籛名は鏗、帝顓頊の玄孫にして、養生を善くし、調鼎の術に精しく、雉羹を帝堯に進めしを以て、堯之を彭城に封ず、又其の道以て祖とすべきに因り、之を彭祖と曰へり、夏殷の世を歷て周代に至り、八百歲の長壽なりしこと、玄英が疏に見えたり、又「神仙傳」に其の傳あり、〔衆人匹之〕匹は比匹なり、ならべくらぶること、人匹の間に思の字を加へて看るべし乃ち之に比匹せんと願ひ思へるなり、歸震川曰く、蜩鷽至悲乎言小不知大と、

湯之問棘也、是已、窮髮之北、有

なり、

【解義】〔小知不及大知〕知は智と同じ、小知不及大知、小年不及大年の二句、是れ總提として後文の意義を該括して前に置きしなり、二句の意は之を遞迭して云ひ、小智の大智に及ばざるは、是れ小年の大年に及ばざると同一の理なりと解する者あり、又此の二句は上文の之二蟲又何知の句を承けて、下文の朝菌蟪蛄等の事を喚起する者にして、卽ち小知は大知に及ばざることは、既に前段の蜩鳩の二小蟲が大鵬の摶風九萬の快擧を解せざるに徵して分かりたることなるが、今又小年の大年に如かざることも之と同一の理なり、長壽者の快樂は到底短命者の測り知る所にあらず、然るに彼の彭祖の如き、僅かに八百歳の生命を有ちたりとて、衆人の之を羨望して相匹はんことを願ふ抔は其の莫迦さ加減は實に哀れ悲むべきなりと云うて、世人の私利私慾に汲々として自から生命を短縮するの愚を警醒したるなりと解釋する者もあり、又陳壽昌の如きは「不積由於不知、不知遂不得道而壽」と說けり、是れ常に大鵬の如くこの風を積まざるは、全く積むことを知らざるに由る、知らざるよりして遂に道を得て長壽に至る能はざるなれば道に入らんと欲する者は、先づ物を知ることを務むべきを云はれたることなりと解したるなり、諸說紛々、各々一理あれども、今姑く第一說に依りて解す、

〔朝菌不知晦朔〕朝菌は植物の名なり、「釋文」に司馬云大芝也、天陰生糞上、見日則死、一名日及、故不知日之終始也、崔云糞上芝、朝生暮死、晦者不及朔、朔者不及晦とあり、「文選」の郭景純遊仙詩の李注には潘岳が朝菌賦序に、朝菌者時人以爲蕣華、莊生以爲朝菌、其物向晨而結、絶日殞とあるを援きて牽牛子のことなりと云へる說あれども、盧文弨は菌芝類、故字从艸、以木槿當之殊誤と云へり、玉引之は「文選」の辯命論及び太平御覽蟲豸部に、「淮南子」の道應訓に、莊子の此文を引きて、朝菌を朝秀に作れるを依據とし、又高注に朝秀朝生、暮死之蟲也、生水上、狀似蠶蛾、一名孳母とあれば、莊子の此文も改めて朝秀に作り、下句の蟪蛄と共に皆蟲名となせり、又曰く本文に不知晦朔とあり、蟲は微く知ある物なるが故に、知不知を以て之を言へり、若し草木ならば無知の物、何ぞ不知を言ふを須ひんやと、郭慶藩が「集解」亦玉

百歲爲レ秋、上古有二大椿者一、以二八千歲一爲レ春、以二八千歲一爲レ秋、而彭祖乃今以レ久特聞、衆人匹レ之、不二亦悲一乎、

【大意】前段の之二蟲又何知之とある知の字よりして小知大知の語を生じ、小知大知より又小年大年の語を生じ、二句意旨相承け、其の年小なるが故に、其の知なることを謂ふ、

【通釋】豈に唯、蜩鳩の二小蟲、大鵬のことを知らざるのみならんや、全體此の大知小知と云ふことは夙に先天的に定まれることにて企て及ぶ可からず宛かも小き年齡の者は大いなる年齡の者に企て及ばざるが如し、是れ本然の理なり、何を以て其の理なることを知るかと云はんに、朝菌は朝生じて暮に枯れ死する者なれば、月の晦に生ずれば朔には及ばず、朔に生ずれば晦には及ばず、即ち僅かの時日を一生涯となせるなり、蟪蛄は春生るれば夏死し、夏生るれば秋死する者なれば、各々春と秋との双方に跨り及ぶこと能はず、是れ亦僅かに三箇月位を以て、一生涯となせるなり、此れ其の生命小年に止まればこそ、其の知れる事柄の範圍程度も此の如く狹小なるなり、又楚國の南方に冥靈と名づくる一物あり、甚だ長壽なることにて、凡そ一箇年四季の季節を春に夏を含ましめ、秋に冬を包ましめて、春秋の二季に概別し、五百歲を以て春と爲し、五百歲を以て秋とし、都合一千年となし居たり、更に上古に於ては、大椿と名づくる物あり、此は又八千歲を以て春と爲し、八千歲を以て秋とし、夏冬の二季を其の中に包含し、都合一萬六千歲が其の一年に値る割合なり、一年の長きこと此の如くなれば、其の終身の生命の長きや推して知るべし、此の長き生命ある以上は必らず靈異なる事あらん、是れ大年は自から大智なること亦推して知るべし、然るに何事ぞや我が人類社會に於ては彼の古より長壽の最と稱せらるゝ彭祖と云へる人は、乃今やつとこさ僅かに八百歲の壽ありしとて、久く特別なる長命と云ふを以て、世に持て囃されて著はれ聞こえ、世の衆人此の彭祖にあやかり匹はんことを願望するとは、亦矢張り悲むべきの一にあらざるか、實に悲むべきと

里拾壹町拾步に當る、乃ち今日本里程の十二三里の地に旅行することなり、宿舂糧とは路程稍々遠きが故に、一夜前に舂にて糧食を擣きて準備を爲す也、陳壽昌曰く隔宿舂擣糧米と、〔適千里者〕「度量衡考」に據れば、千里は我が邦の壹百參拾參里參町肆拾步に當る、〔三月聚糧〕三月とは「論語」に三月不違仁、又、三月忘肉味とあるが如く、只久しき月日と云へる意なり、必らずしも九十日を限りて云ふにはあらず、千里の途に適くときは路既に遠きが故に、旅行の準備も亦久しく掛ることなり、郭象曰く、所適彌遠、則聚糧彌多、故其翼彌大、則積氣彌厚也と、陸方壺曰く聚糧意、是自風積字面上換來、〔之二蟲又何知〕之は是と同じ、「コノ」と訓ず、二蟲は蜩と鷽鳩を指す鳩を蟲と稱するは、「大戴禮」に東方鱗蟲三百六十、應龍爲其長、南方羽蟲三百六十、鳳皇爲其長、西方毛蟲三百六十、麒麟爲其長、北方甲蟲三百六十、靈龜爲其長、中央倮蟲三百六十、聖人爲其長とあるが如く、凡て人類動物を問はず、古代には蟲を以て稱したり、二蟲を「郭注」は鵬蜩を謂ふとなし、對大於小、所以均異趣也、夫趣之所以異、豈知異而異哉、皆不知所以然而自然耳、自然耳、不爲也、此逍遙之大意と釋し、彼の大鵬の摶風九萬里なるも、小鳥の決起し楡枋に止るも、遠近の不同はあれども、均く天性の適する所に從ひ、咸な道里の遠近を知らず、各々自から滿足愉快を取りて、別に甲乙優劣の差を覺へざるは、是れ逍遙の極致なる旨たることを說けども、此所は上文の蜩鳩の大鵬を笑へるを承けて言へることなれば、二蟲は蜩鳩の二者を指して云へる方固より是なり、又何知とは、彼の二蟲が楡枋の下に決起するは、宛かも莽蒼に適く者の如くにして、復、百里千里の遠方に行くに如何程準備を要するかを知らざる類なれば、大鵬の風を積むこと厚くして、其の飛び到ることの遠きことは到底知らざるを云ふ、

小知不及大知、小年不及大年、奚以知其然也、朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、此小年也、楚之南、有冥靈者、以五百歲爲春、五

く生じ、飛ばんとする小鳩なり、〔我決起而飛〕我とは蜩と鷽鳩と自から謂ふ、決起は急に思ひ切りて起つこと、〔搶楡枋〕搶は七良切、音は「サウ」、集なり、「アツマル」と訓ず、又突なり、「ツク」と訓ず、勢に乘じて一と突きに至ること、今後説を用ふ、楡は植物の名なり「ニレヤナギ」と訓ず、枋は小木の名なり、「マユミ」と訓ず、〔時則不至而控於地〕時は「時ニヨリテ」の意味に解すべし、兪樾は「經傳釋詞」に則猶或也とありて、「史記」の陳丞相世家に則恐後悔とあるを證となせるを引き、此所の則も或なりと解せり、此に依るときは時則とは時或と同義なり、毛利貞齋の「莊子俚諺抄」に時の字を上句に屬せしは誤れり、〔而控於地而已矣〕上の而の字は乃と同じ、「スナハチ」と訓ず、「經傳釋詞」に乃與而對言之則異、散言之則同とあり、乃ち而の字と乃の字とは、双方を相對して用ひたるとき、其義自から異なれども、一字づゝ單用のときは、乃と而と兩字混じて用ふることもあるなり、「尚書」の堯典に試可乃已とあるを、「史記」の五帝紀に試不可用而已に作り「史記」の淮陰侯傳に相君之背貴乃不可言とあるを、「漢書」の蒯通傳に、乃を而に作るが如き證とすべし、控は舊解に「スルボフ」と訓ず、形ちを平地に投ずること、司馬氏は、控は投なり、引なり、崔譔は叩なりと云へり、〔奚以之九萬里而南爲〕奚は何なり、之は是と通用す、下文に之二蟲とある之と同じ、「コノ」と訓ず、之九萬里は是九萬里と同じ、舊解に之を「ユイテ」と訓じて、「九萬里に「行ク」の義に釋したるは誤れり、而南兩字の間に兪樾は當さに圖の字あるべしと爲し、「文選」の注に此の文を引きて、奚以之九萬里而圖南爲に作れるを擧きて、證となせり、今之に從ふ、〔適莽蒼者〕以下數句、人事に就いて云ふ、莽は「クサムラ」と訓す、蒼は青黑の色、莽蒼とは艸の叢茂にして青黑き色を帶びたる處、卽ち近郊野外の地なり、〔三飡而反〕三飡とは三度の食事なり、乃ち一日の食物にて出づる時一食し、適きたる時一食し、歸らんとする時一食するを謂ふ、〔腹猶果然〕果然は腹充實したる心地なることなり、近郊の往來は路程遠きにあらざれば、返りたるとき腹猶充實して飢を感ぜざること、〔適百里者宿舂糧〕物徂徠の「度量衡考」に據れば、周代の一里は、我が邦の肆町肆拾柒歩有奇なれば、百里は拾參

百里者、宿舂糧、適千里者、三月聚糧、之二蟲又何知、

【大意】　小物は小局に安んじて、大事を語るに足らざることを言ふ、副墨に曰く、此の段、人に胸襟識見を把りて一歩を擴充すべく、知る所歴る所の者を以て、自から足れりとするを得ざることを教ふるなり、

【通釋】　さて大鵬は九萬里の翼を展べて飛ぶにも、仲々の事なるが、天地間の物は實に樣々なる者にて、小蟲の蜩や羽翼漸く生じ飛び掛けの小鳩は、大鵬のことを莞爾して曰く、さてもさても、御苦勞なることじや、我等は決然と奮ひ飛んで、楡や枋の木に一と勢に搶き至らんと欲し、時に或は困み疲るゝときは、前林に到るを待たず、身を地上に投じ、休息して復た行くことゝなるが、其れにて快樂を十分に仕遂ぐることなるに、奚ぞ是の遐るばると九萬里の高き處に上り、それから(ヤツトコツサ)と遠き南溟に徙ることをなさんやと、されども是れ蜩や鶯鳩は大鵬と知識の程度相懸隔せるより此の議論を爲すものにして、之を更に譬ふれば、今草むらの繁り茂にして、見渡す限り、蒼々としたる郊野に赴く者は、三度の食事をなして返るに、往來の路、左程遠きにあらざるを以て、食慾の加減は、猶腹が果然と膨れたる心地して空腹の感なきなり、又少しく遠方なる百里の路程なる地に赴くときは隨うて準備を要し、兼て日より夜を隔てゝ糧食を舂づき食料の用意丁寧に營むなり、更に大に遠き千里もある土地に赴くときは、春夏秋冬の四季なる一季間に値る三箇月位の月日を掛けて、豫め食糧を聚め、乃ち大仕掛なる用意を要する者なり、此の如く其の行くこと愈、遠ければ隨うて大なる準備を必要となすなり、されは大鵬の高く飛び遠く去るに、積風の崇厚なるを要するは理の當然にして、固より怪むに足らず、全體是の蜩や鶯鳩の如き二小蟲は、僅かに區々の小局を以て、世界となす者なれば、又此の以外に何をか知らんや、乃ち何等の知識もなき者なり、されば彼れが如何に大鵬の迂遠なるを笑へばとて、本と齒牙に掛くるに足らざることなり、

【解義】〔蜩與鶯鳩〕蜩は蟬の一種「ツク〱ボウシ」の類、形ち黒くして、七月頃に鳴く、鶯鳩は羽翼漸

位に見て、而後乃今と重さね〱力を積み集めたる上にて、始めて風に乘りて押し出だせばこそ、彼の蒼々たる大空を負ひ、卽ち殆ど青天を摩り切るかと疑はるゝ位に高く飛び、而して誰も之を天閼とて折き止むる者なきなり、斯く成りたる上に於て、又復而後乃今と重さね重さねに思ひを凝らし力を入れ、始めて兼ねて志願の通りに、南海に徙ることを謀るなり、

【解義】〔故九萬里則風斯在下矣〕此の斯は「尚書」の金縢篇に、「周公居東三年、則罪人斯得」とある斯の字と同じく、乃の字の意味に用ひたり、乃ち鵬が已に九萬里も高く上るときは、風はそこで其の下に在りしことは、更に言はずとも明らかなりとの意なり、〔而後乃今培風〕乃今は「イマシイ」と訓ず、大體而後と同義なり、乃はもと然後と云へると同意味にて、乃と而と字義相近し、乃ち「公羊傳」（定公十五年）に而者何難也、乃者何難也、曷爲或言而或言乃、乃難乎而也とあるが如く、兩字共に凡て事の容易に出來ずして、種々の曲折ありて後ちに、始めて成りしときに用ふる辭なり、而して而後乃今とあるは、故らに同義なる二語を重複して用ひ以て其文氣を濃厚ならしめたるなり、古文往々此の例あり、又「左傳」の如きは吾乃今而後知有卜筮（襄七年）と用ひ「史記」も吾乃今然後知君非天下之賢公子也（魯仲連傳）と用ひたり、王允之曰く乃今而後は卽ち而後なりと、培風とは、培は重なり聚なり、培風を積風と解する者あれども、既に上文に九萬里則風斯在下矣とありて、風の集り積りたることを示したれば、今更に之を而後乃今と置きて重複して言へる必要なきなり、王念孫は培は馮と字近し、馮は乘なり、風、鵬下に在るが故に、負を言ひ、鵬、風上に在るあるが故に馮を言ふ、必らず九萬里にして後ち風の上に在り、風の上に在りて後ちに能く風に馮れり、故に而後乃今培風と曰へるなりと解せりと、是の說、可なるが如し、

蜩與鷽鳩笑之曰、我決起而飛、搶楡枋、時則不至、而控於地而已矣、奚以之九萬里而南爲、適莽蒼者、三飡而反、腹猶果然、適

來をなす也、然るに其の水溜りに、其の杯を置く時は杯は停滯粘着して復た動かざるべし、是れ何ぞや、卽ち水量の淺きに比較して、其舟たる物(杯)が形ち大いにして、量重ければなり、偖て先づ是れにて物は皆、大小相當の資ありて、然る後ちに其効力を著はすことを得るが、自然の道理たることを悟るべし、

【解義】〔且夫水之積也不厚〕且とは假借の義にして、聊略の詞、卽ち餘事は姑くさて置き、先づ斯々の次第と云ふ意味なり、夫は開發是語之端緒とありて、物の言ひ出だしに用ひて、語氣を助くる詞、卽ち(アノ)と或る物を指示せる意味なり、本文に水之積とありて、水量を測るに深と云はずして、積と云へるは、水の正面觀に就いて云はずして、測面觀に就いて云へるなり、〔坳堂之上〕坳は汚陷なり、堂中の庭、汚陷して窪みたるなり、〔則芥爲之舟〕芥は草なり(アクタ)と訓ず、爲之舟とは、草葉を用ひて舟となして浮ぶるときは滯なく、彼此と行き通ひを爲すことを謂ふ、〔置杯則膠焉〕膠は粘着すること、杯水の力に、杯を負はするときは、其の力、水量の力と同等なれば持ち上ぐることなくして粘着し、芥の如くに舟となりて浮び動かざるなり、〔水淺而舟大也〕莊子自から杯の粘着せる道理を注明したるなり、

風之積也不厚、則其負大翼也無力、故九萬里則風斯在下矣、而後乃今培風、背負靑天而莫之夭閼者、而後乃今將圖南、

【大意】前節の譬喩を承けて、鵬と風との關係も亦物の大いなるに因りて、其の活動大なれば、隨うて力の大を要することを說きたり、

【通釋】夫れ水の積量が十分に深厚ならざれば、大舟を上に負うて江海に載せ浮ぶ可からざるが如く、風の集りかたが、十分に崇まり高からざれば、鵬の大翼を上に負うて大空を渡り過ぐるに於て、之を能く仕遂ぐる力なきなり、かるが故に鵬の一擧九萬里の高きに上るときは、同時に之を脊負ふに堪ふる風は、直ちに鵬の飛び揚がる下に集り充滿せる者と知るべし、若し然らざれば、何ぞ能く一擧九萬里の高きに上ることを得んや、大鵬は此の如く高く上りて、風を下

故障妨害あらんや、

【解義】〔野馬也塵埃也〕野馬は陽燄又は遊絲とも云ふ、「カゲロフ」と訓ず、玄英が疏に據れば、青春の時、遙かに藪澤の中を望めば、陽氣發動して蒸し升る處、宛かも郊野の間に奔馬の馳するが如き狀態に似たり、故に野馬と曰ふ、塵埃は共に「チリ」と訓ず、塵は泥土のちり、埃は微塵なり、俗に「ホコリ」と稱す、皆、極めて人の手にも採るべからざる程極めて微細なる物なり、兩の也の字は、此の所にては共に一一物を數へ擧ぐる詞にして、乃ち野馬が一つ、塵埃が一つと云へる意味なり、〔生物之以息相吹也〕生物とは、造物と同じ、乃ち天を斥す、以息相吹とは、息は六月息の息と同じく、氣息なり、「イキ」と訓ず、乃ち此れ皆、造化の一呼一吸より生ずる者なることを謂ふなり、陸方壺は野馬田間游氣也、塵埃日光中游塵也、皆氣至而後動者、比之大鵬去以六月其理則同、故曰生物之以息相吹、吹息二字頗奇、特言生物無大無小無巨無細、唯此氣機吹噓鼓舞、乘以出入、有莫知其然而然者と云へり、

且夫水之積不厚則負大舟也無力、覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟、置杯則膠焉、水淺而舟大也、

【大意】下節に於て、大鵬と風との關係を說かんが爲めに、先づ譬喩を水と舟との關係に假りて、其の理を明らかにしたるなり、副墨に曰く、此の意は、充積の厚くして、然る後ちに大運用あり、若し人、平日學問上に於て、曾て寔に其の力を用ゐて眞に自己に箇の高明廣大なる者あらざれば、便ち人寰を渺とし宇宙を空くせんと欲するも門を出て礙あり、如何ぞ去り得んと云ふに在りと、

【通釋】假りに或る一面より例を取りて云へば、江海の中に能く舟を浮べるは水の力なれども、水量の深く厚からずして、淺く薄きときは、水が大舟を脊負うて江海の中に浮ぶるに於て、終に支へ持つ力なし、假りに今一杯の水を坳堂とて、堂上の窪みたる處に覆かへすときは、忽ち水溜りを成して、其れに塵埃が宛かも江海中にある舟の如く、其中に浮びて滯なく往

北徙、南不離陰陽之方、九萬六月、不離陰陽之數、背若太山、翼若垂雲、不免乎有體、化、則資水、摶則資風、不免乎有待、怒而飛、不能無情、飛而息、不能窮、以鯤鵬之大、其囿於陰陽也如此、況蜩鳩與斥鷃乎と、蓋し是等の説に依りて本篇を解するときは頗る興味ある研究に屬すれども、徒に附會穿鑿に傾きて、反りて莊子の本意を沒却する弊あるを免れず故に今は取らず、

野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也、天之蒼々其正色邪、其遠而無所至極邪、其視下也亦若是則已矣、

【大意】　上文を承けて、天地間、自然の氣息を待ちて活動する者は、唯大鵬に止らず、乃ち微細なる野馬塵埃の如きも亦然る者なることを述べ、天の混沌として極りなきを以て、悉く萬有を包括して漏らさざることを言ひ、以て大鵬の如何に高飛遠去をなすも、亦其の範圍外に出でずして何等の障害なき意を示したるなり、

【通釋】　然れども天地間に大氣の轉移に賴りて飛躍活動をなす者、豈に唯、鵬のみならんや、大物は姑く置き、極めて微細なる物に就て觀察を試みんに、彼の野馬とて日光線の地上塵埃等に映射して、蒸し上ぼる狀ちの宛かも郊野の間に放てる馬の馳せ回るが如くなる者や、若くは塵埃などは、亦是れ皆、造物者の氣息を以て相吹ける者なり、乃ち大小形の相違こそあれ、其の理は大鵬の飛ぶに六月息を以てする者と何ぞ異ならんや、天は實に混沌にして測られず、至大にして形容を爲すべからず、彼の天を下界より仰ぎ見るに、無量無邊の高き只蒼々たるを見るのみ、豈に是れ天其物の正しき色卽ち本色と決定すべきか、將た又天は餘りに高遠なるに由り、吾人の視力其の處に至り及び極り盡す所なきが故なるか、此れ斯の下界より仰ぎ見たる天の光景なるが、亦天上より下界を見下すときは、是の如く只蒼々たるのみにして、何等の確かに見認むべき者なかるべし、彼の天の混沌として至大なること此の如し、されば其の間に於て大小の萬物有らゆる飛躍活動を演ずるとも、亦何の

道王雱の徒より以下明清の學者に至るまで亦頗る多し、然れども其の説或は過高に渉り穿鑿に陷り、未だ遽に首肯すべからざる者あり、今姑く趙虚齊の註を左に擧げ、以て參考に資す、曰く、莊子鯤鵬、以明天地陰陽之氣、魚化而鳥、北徙而南、由陰而陽、由靜而動也、經(莊子)以南冥爲天池、天包地外、則北冥亦天池也、三爲陽之始、一函三也、九爲陽之極、三三九也、一陽生於子六陽極於巳故以六月息と乃ち其の大意を譯すれば、莊子は鯤の化して鵬となりしことを以て天地陰(收縮的)陽(發展的)二氣の消息變化のことを明かにしたるなり、何んとなれば魚(鯤)の化して鳥(鵬)となるや、鵬の北より徙りて、南するや、魚は水中に潛處すれば靜物たり、鳥は天上に高飛すれば動物たり、而して方位に在りては北は幽闇にして陰と爲し、南は開明にして陽と爲せば、是れ陰の動きて陽と爲りし象なり、而して齊諧の言を引きて、鵬之徙於南冥也水擊三千里とあるは易數よりして推すときは、三の數たるや、もと、天地人の三才の義を包含したるものなれば、文字に於ても一一一を累ねて、三の字を成せり、陽は發展的性質にして一は數の本なれども相手なければ、未だ活動を見はすに至らず、二を得て三と爲り、玆に始めて積累の基となし、次第に數を增進することゝなれば、是れ陽(發展的)の始めと爲すなり、故に鵬の始めて動くことを狀するに、三千里の語を以てしたるなり、千里とは、多數の里程を意味したるまでにして、別に深義あるにあらず、又三萬里と云はざりしは、下文の九萬里に對して讓步したる辭なりと知るべし、而して鵬の高飛の程度を形狀するに、九萬里を以てしたるは、是れ又易理より云へば、奇數は陽にして偶數は陰たることは、其の原則たるのみならず、九の數たるや、奇數の最上限度なれば、陽氣發展の極度たり、且、三三を九とすれば、發展に發展を累ねたる意味を包含して云へることなり、又鵬の飛び去るに以六月息と云はれしは、十二支に於ては、子より始め亥に終はり、而して巳は前六支の末に在り、是れ一陽は子に生じ、六陰は巳に極まるものとす、是を以て鵬の動き飛ぶこと、六箇月にして始めて息へる者は、亦陰陽の消長に順ひて動靜をなせるなり、以上は誠に短簡の解釋に過ぎざれども、趙氏の説に依れば大略此の如し、陳詳道は曰く、潛

は怪異のこと、志は識なり「シルス」と訓ず、此の一句は、莊子自ら註明して、實は其の事本と寓言的にして、事實を確證せるには非ることを告白したるなり、〔水擊三千里〕水擊は乃ち鳥の「ハタ、キ」すること、擊水と云はずして、水擊と記せるは、鵬の水を擊ちし處に就いて云はずして、水の鵬翼に擊たれし處に就いて云へる辭なり、三千里は唯其の多里數に及びしことを概言したるなり、唐詩に白髮の長きを形容して、「白髮三千丈」とあると同じ、〔摶扶搖而上者九萬里〕摶は擊なり、鬪なり、又圜なり、圜飛して上行することなりとの說もあり（司馬）、又摶は專なり、聚なり、摶扶搖而上とは專ら風力を聚めて高擧するなりとの說もあり（郭慶藩）、亦一說に備ふべし、扶搖は「釋文」に據れば風の名なり、司馬は上行風を謂ふとなし、「爾雅」には扶搖を飈と爲し、郭璞は暴風の下より上るなりと云へり、孰れも同じ風にて、乃ち「ツヂカゼ」のことなり、九萬里とあるは又上文の三千里と同じく、其の極めて遠きことを形容したるなり、〔去以六月息者〕息は休息なり、大鵬の一び去るや、半歲にして天池に至りて休息することを云へるとの說あり、又息は氣息にして、六月息とは、六月の季候に吹き催ふする海風を云ふなりとの說あり、明の焦竑陸方壺等は此の說を取れり、方壺は曰く、去以六月息者也、與下以息相吹之息同、謂氣息也、人以一呼一吸爲一息、造化則以四時爲一息、去以六月息者、卽海運則將徙南冥之意、去謂徙而南也、周之六月夏正之四月也、於後天爲巽（易八卦の一）正氣動風起之時、故大鵬乘此徙去と、今此の說を用ひて解せり、然れども前說に從ふも亦通ず、蓋し上文の上者九萬里とは、謂はゆる空間に就き縱看して云ひ、去以六月息者とは時間に就き橫看して云はれたるなり、乃ち上るには其の高きことと里數を計るべし九は數の極にして、萬は數の盈てる者なれば、九萬里とは高きの至りを謂ふ、其の去るは其甚だ遠きが故に、里數を以て計るべからず、但時刻を以て計るべし、上述の如き大翼の怒飛を以てし、而も半年の後ち始めて休息せしものとなせば、其の飛び去りしことの遠きや、亦想像するに堪へたり、

【參考】尙、本文の鯤鵬の義に關して、古來易理に依據し、陰陽變化の象を推して說く者、宋の呂惠卿陳詳

郭慶藩は「玉篇」に運行也とあり、又天の運行息まざることを天運如車轂と渾天儀に云へるを引きて、此處の海運云々は、鵬の海中を運行して息まず、將に天池に移りて休息せんとすることなりと釋せり、今仍ほ前說に從ふ、〔南冥者天池也〕南冥は南海なり、天池は人作を假らずして天然に成れる池なり、南冥が天池なれば、上文にある北冥も亦固より天池なり、唯此の處は文章上、互文法を用ひて、作者自から是の如く注脚の辭を下せしなり、胡文英が獨見には、放下北冥、先解南冥、是箇裁伸縮之處と評したり、玄英が疏に鳥是凌虛之物、南即啓明（陽氣）之方、魚乃滯溺之虫、（動物）北方幽冥（陰氣）之地、欲表向明（陽）背闇（陰）捨滯求進、故擧南北鳥魚、而大海洪川、原夫造化、非人所作、故曰天池也とあり、尙、莊子本文の義を易理に據りて解せし說は下文の欄を看るべし、

齊諧者志怪者也、諧之言曰、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上者九萬里、去以六月息者也、

【大意】上說、甚怪誕に失して信ずべからざるに似たれば、又齊諧の言を引據として、其の說の決して已が新たに作りたる臆談にあらざることを證明す、

【通釋】齊諧と名づくる古書あり、多く怪異の事を語れる者なり、齊諧の書中に、下の如く言へるとあり彼の鵬が南溟に徙るときは、水面は其の擴げたる兩翼に擊たれて其の波動三千里の遠きに及びたる後ち扶搖とは旋風のことなるが、此の旋風と鬪ひ之に旋らされ又旋りつゝ大空に上ること九萬里の高きに達す、而して彼れの斯の如く高く飛び去るには夏季六月の候風を利用するなり、

【解義】〔齊諧者〕齊諧とは書の名なり、齊と云へる國に傳はれる俳諧（滑稽）の事を記したる書なれば、齊諧と名づけたり、又姓は齊にして名は諧と云へる人なりとの說もあり、兪樾は後文に諧之言曰云々とあれば、書名にあらず、人名なりと云へり、今按ずるに既に本文に齊諧志怪者也と、作者自ら明注しあれば、之を書名と解するも亦不可なし、〔志怪者也〕怪

無の如きは、深く論ぜずして可なり、又「周易」の義に据りて、八卦の內、坎を北方の位とし、離を南方の位とす、而して離の象は鳥たれば、因りて魚の化したる鳥を以て、南に徙るものとせる說あり、要するに大物は大處に生ずることを云へるなり、〔其名爲鯤〕爲の字は謂の字と通じ用ふ、「莊子」の天地篇に、四海之內共利之、之爲悅、共給之、之謂安とあり、「春秋」莊二十二年の「左傳」に、是謂觀國之光とあるを、「史記」の陳世家には、是爲觀國之光に作れるが如き、以て爲謂二字の互用たるを知るべし、尙、王引之が「經傳釋詞」に詳かなり、鯤は、もと小魚の名なり、「爾雅」の釋疏には、鯤魚子凡魚之子名鯤とあり、「國語」の魯語に魚禁鯤鮞とあるを、韋昭は鯤魚子也と注せり、今、莊子は絕大の魚に命ずるに、極めて小なる魚子の名を以てす、此れ乃ち故さらに物の大小を顚倒し、滑稽を弄したる處にして、抑も又其の主義たる齊物觀（次篇齊物論を見よ）を示せし者なり、「史記」に莊子の文を評して、汪洋自恣以適己とあるは、亦此等の處に就いて窺ふべし、莊子此の語を吐きしより、後世李頤の如きは、鯤大魚也と云ひ、崔譔又は簡文帝の如きは莊子の本文に其名爲鯤とあるを据とし、鯤は當さに鯨に爲るべしと云ふに至れり、皆之を失せり、〔化而爲鳥其名爲鵬〕鯤の化して鳥となりし事實の眞否は、郭象が鵬鯤之實吾所未詳也、達觀之士宜要其會歸而遺其所寄と云はれたるが如く、莊子の寓言なれば姑く略して可なり、鵬は卽ち古の鳳の字なりと、「釋文」に見えたり、又「說文」に朋及鵬皆古鳳字也、朋鳥象形、鳳飛羣鳥從、以萬數、故以爲朋黨字とあり、〔怒而飛〕此所の怒は、憤怒の怒にはあらず、本書の齊物論に萬竅怒號とあり、外物篇に草木怒生とあるが如く、凡て其の氣、中に鬱積して、外に勃發するときは、其の勇しき狀態、宛かも怒れるが如く見ゆるよりして、之を怒と云へるなり、卽ち此處にては、鵬が久く蓄へたる勇氣を鼓奮して、一時に發泄して飛ぶことを謂へるなり、〔垂天之雲〕司馬彪は、雲の天旁に垂るゝが若しと解し、崔譔は垂は猶は邊のごとく、其の大さ天の一面の雲の如くなるなりと釋せり、要するに其の展べたる翼の大いなることを形容したるなり、〔海運則將徙於南冥〕運は轉なり、海運とは海の動くを云ふとは、古來の衆說なるが

齊物論一篇は其の精神たり、而して其の餘篇は之を敷衍したるに過ぎざるなり、

北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼如垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於南冥、南冥者天池也、

【大意】 鯤鵬の二物に寓せて、大物は自から大物の活動あることを謂ふ、副墨に曰く、心の神明變化測るなし、天地に際し宇宙を窮むるも、其の大に喩ふる者なし、故に此の篇、首として鯤鵬を以て言を寓すと、

【通釋】 北方の海中に、或る魚あり、其名を鯤と唱へたり、此の魚は如何なる有様なる者かと尋ぬるに、其の首尾の長さは幾何あるか容易に知り難し、先づ比較的分かり易き其の體の大さに就て云ふも、幾千里なるやを知らざるなり、此の魚、如何なる作用を爲すかと云へば、一朝化して鳥となり、其の名を鵬と唱へたり、此の鵬も亦偉大なることにて、其身の長短、容易に測りがたし、其の背計りにても、幾千里なるやを知らざるなり、兼ねて蓄へ居れる勇氣を奮ひ、思ひ切りて飛ぶときは、其の展べたる翼の大さは、宛も天上の一方に垂れ下たる雲なるかと疑はるなり、さて此鳥は、斯く偉大なる體軀なれば、隨て其の活動をなすこと、亦容易に爲し得べきに非ず、海中の氣、天候移り易はるによりて變動し、水湧き風起る時を待ち、之に乘りだして將に南冥に徙り轉せんとす、南冥とは南の海のことにて、乃ち人工的開鑿を假らずして、天然に成就せる大いなる池なり、

【解義】 〔北冥有魚〕 北冥とは、北海なり、冥は溟と同じ、海は冥々漠々として涯なきを以て、溟と曰ふ、陳壽昌は冥は海なり、海と云はずして冥と曰ふは、窈（フカク）冥（クラシ）の中に、精（自然の神聖）あるを示すなりと云へり、玄英が疏に據れば、東方朔の「十州記」に、溟海無風、而洪波百丈、巨海之內、有此大魚」とあり、然れども莊子の意はもと寓言にして、必しも是の事實ありと云ふにはあらず、此の大魚の有

遊、故曰逍遙と、是れ道を銷と解し、遙を遙遠の義と釋し、人世の煩累を銷却し、遠く自然の眞理を悟了し、心に優游自適の樂みを爲すことを云へるなり、第二は支道林の說なり、曰く物物而不物於物、故逍然不我得、玄感不疾而速、故遙然靡所不爲、以斯而遊、故曰逍遙遊と、是れ己れ高く世間に超越し、能く外物を使役して外物に使役せられず、故に靈妙なる感應は、自然に神速にして、何事にも著はれざる無く、心に優遊自適の樂みを爲すことを以て、逍遙の要旨と爲す、逍遙の二字を共に解して超遠の意となしたるなり、第三は王穆夜の說なり、曰く逍遙者、蓋是放狂自得之名也、至德內充、无時不適、忘懷應物、何往不通、以斯而遊天下、故曰逍遙遊と、是れ逍遙とは、何等の覊束を受けず、自由を樂むの意にして、道德身に充實すれば、如何なる時と雖へども適意ならざるなく、虛心坦懷にして事物に因應すれば、如何なる處といへども融通せざるなし、以て天下に自在の遊びを遂ぐるを以て、逍遙遊と爲せるなり、以上は玄英が注疏の莊子序文中に見えたる諸說なるが、清の郭慶藩は逍遙は「禮記」の檀弓篇に消搖於門とあり、「漢書」の司馬相如傳に消搖乎として襄羊とあるが如く、もと消搖に作りたる者にして、王穆夜の解して調暢逸豫の意となし、理無幽隱、消然而當、形無鉅細、搖然而通、故曰消搖とあるを引きて、其の說尤も優れりと云へり、「康熙字典」の逍の字の注にも、又逍遙は消搖と同じとなし、黃幾復が莊子の註に逍者消也、如陽動冰消、雖耗也不竭其本、遙者搖也、如舟行水搖、雖動也不傷其內と云へるを引きて、之を證したり、是れ皆、自然の道に順ひ人の本性を保全するときは、如何なる外界の侵壓脅迫に逢ふと雖も、決して消竭搖動せずして、何等の物に囚はるゝなく、自由自在なることを云へるなり、陸方壺は本篇を論じて曰く、夫人之心體、本自廣大、但以意見自小、橫生障礙、此篇極意形容出箇致廣大的道理、令人展開胸次、空諸所有、一切不爲世故所累、然後可進於道、昔人有云振衣千仞岡、濯足萬里流、大丈夫不可無此氣節、海濶從魚躍、天空任鳥飛、大丈夫不可無此度量、蓋亦如此と、要するに本書にありては、逍遙遊一篇は莊子の自序にして、

南華の解說は上述の如く數百家の多きに達すれば、此れ敢て其の良書と云ふにはあらず、唯だ予が坐右に在る書を錄せしのみ、尙ほ外に讃岐の中山鷹(城山)藤澤甫(東畡)等諸氏の標記あり、此れ皆寫本にて傳はり、未だ成書に非れば、姑く此に其の掲錄を省くことゝ爲せり、

內篇

内篇とは、外篇に對して云へるなり、莊子の書、分ちて内外雜の三篇と爲す、唐の僧玄英が「莊子序」に曰く、内則談於理本、外則語其事迹、事雖彰著、非理不適、理既幽微、非事莫顯、欲先明妙理、故前標内篇、と、是れ内篇は哲理の本義を說きて、外篇は其の事迹を擧げて之を證明なしたる者と解すれば、大差なかるべし、而して内篇は、莊子の親撰なれども、外篇雜篇は、其門人及び餘流の者の手に出でたりとの說あり、其の詳なることは序說に辯せり、

逍遙遊第一

逍遙遊は篇名なり、此篇、本書の首に位す、故に第一と云へるなり、玄英が說に據れば、内篇理深故每於文外別立篇目、逍遙齊物之類是也、自外篇以去(以後)則取篇首二字爲其題目、騈拇馬蹄之類是也とあり、乃ち内篇は道理の深遠なることを語り、自然に意味俄に解し難きを以て、特に簡單なる篇名目を附し、全篇の大意を包括標擧し、以て世人をして之を曉り易からしめたるなり、逍遙遊とは、泰らかに適むの意なり、遊とは自由自在に活動して、一處に停滯せず一事に拘束せられざるの義なり、卽ち逍遙遊とは一言以て之を蔽へば、自由に樂み遊ぶの意味なれば、莊子が根本主義となせる虛無因應(序說に見ゆ)の道に於ては、善く其の指歸を形狀したる語と謂ふべし、尙、逍遙遊の字義に就いては、古來諸說紛々として、殆ど適從する所を知らざる者に近けれども、今姑く兩三說を摘擧して參考となさん、其の第一は、顧桐柏の說なり、曰く逍者銷也、遙者遠也、銷盡有爲累、遠見無爲理、以斯而

以て著はれ、一は少卷を以て聞ゆ、但「心解」は內篇に止まりて未だ外篇に及ばざりしは憾むべし、蓋し莊子注解の書は和漢を通じて數百家の多きに至り、其の中或は散亡して書名のみ傳はれる者亦尠からず、又或は希覯の書と爲して珍襲し肯て外人の見を許さざる者あり、寫本鈔錄等に賴りて僅に世に存する者あり、是又一一枚擧するときは、殆ど更僕も啻ならず今予が拙解を艸するに方りて時に出入して比照せし坐右の書目を左に摘記し、以て讀者他日參考研究の一助と爲さん、

郭注莊子　晉郭象
莊子釋文　唐陸德明
南華眞經注解注疏（一名莊子注疏）　唐成玄英
莊子句解（一名莊子口義）　宋林希逸
南華眞經義海纂微　宋褚伯秀
莊子翼　明焦竑
莊子闕語竝附錄　明焦竑
南華眞經評注　明歸有光
莊子通義　明朱得之
南華眞經副墨　明陸西星
莊子發蒙　明釋性通
莊子因　淸林雲銘
南華簡鈔　淸徐廷槐
莊子獨見　淸胡文英
莊子釋意　淸高秋月、曹同春
莊子辨正　淸胡大靈
莊子雪　淸陸樹芝
南華眞經正義　淸陳壽昌
南華眞經識餘　淸陳壽昌
南華眞經解　淸宣穎
莊子集釋　淸郭慶藩
莊子集解　淸王先謙
莊子覈玄　國朝釋秀峰
莊子心解　國朝葛因是
解莊　國朝宇津木益
補義莊子因　國朝秦鼎
標注補義莊子因　國朝東條保
莊子考　國朝岡松辰

大いに行はれ、近世我が邦莊子を講する者大概此に依れり、然れども眞に莊子の玄遠なる旨致を解する者は猶ほ「郭注」を推さゞるを得ず、又淸の康煕年間に宣穎の撰せる「南華經解」二卷あり、多く文章家の見地より觀たる者なるが、莊子の奧旨も亦賴りて發明せらる者少からず、莊子の妙致を玩索する者に於ては重野成齋の如きは又便利なる書たることを推奬したり、「郭注」「成疏」「釋文」の三者を連載し附するに晉唐宋明以來の先輩及び近時兪樾郭嵩燾に至るまでの諸說を摘鈔し、己が意見を加へたる書には郭慶藩の撰なる莊子集釋八卷あり、光緒二十年卽ち我が明治二十七年の發刊にして現今莊子の解を觀るには、比較的好良の書たり、又王先謙が撰せる莊子集解二冊あり、郭象以下郭嵩燾等の說を簡單に摘取し、而して其の主として依る所は宣穎の說なるが大體を看取するに於ては亦便宜の書たり、尙ほ明の朱得之が撰せる「莊子通義」十卷あり、得之は明の嘉靖年間の人なるが卷首に「讀莊評」と題して莊子を論ぜる中に曰く、君師之道、尋跡而不率性、則賊己、有跡可尋則賊人、莊子之學、由靜而入、極虛而安、蓋祖巢(父許)由而宗老(子)列(子)嘉堯舜、掖孔(子)顏(淵)悲龍逢比干夷齊(伯夷叔齊)而陔管(仲)晏(嬰)者、凡其不滿先王者、皆以天機未忘所務有跡時也、故三十三篇、皆以掃跡爲義と、又曰く莊子只是有垂訓之心、故其爲言、時有播弄處、欲人愛其文之馳騁而誦之、因以漸見其所指耳、其自謂以天下爲沈濁不可與莊語、故以巵言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣(寓言篇に見ゆ)と、又得之は自說の後に褚伯秀の「義海纂微」を載せて曰く、修詞立其誠學問之全功也、褚氏以前諸解、多主立誠、今通義略兼修詞者、蓋欲習詞章者知反於性道、理心性者知謹於詞氣、庶乎先哲啓後之心而後世愛而傳之之全功也と、此れ亦其の書の內容如何を窺測すべきなり、而して我が邦に於ては杜多秀峰の著はせる莊子叢玄あり、秀峰は寬政文化頃の人にして讃岐高松淨願寺の住僧なるが佛典に通曉し、又老莊の書を耽讀し頗る力を其の書に致したり、亦「郭注」を以て尤も莊子の妙旨を獲たる者と爲し、之が疏釋に勉めたり、郭注を研究するに於ては便益の書たり、又宇津木益の「解莊」二十四卷あり、葛因是の「莊子心解」二卷あり、一は多卷數を

の弊竇往々にしてあり、然れども解釋は比較的平易にして曉り易きは彼の紀明の好誕と雖へども亦得て其の長處を掩ふべからざるを觀れば、初めて莊子を讀む者に於ては竟に一の良楷梯の書たるを失はず、我が邦慶長元和以來莊子を說く者多く之に由れり、又南華眞經義海纂微一百六卷（原數）あり宋の褚伯秀の撰にして、廣く郭象以下莊子の註者十三家の說を輯め、附するに己が意を以てし、其の間に「陸德明音義」を引けども、註者の重んずる所は訓詁に在らずして理義にあれば訓詁上には一を擧げて二を遺すの憾あるを免れざるも又成元英、文如海、張潛夫の說を引けり、宋以前の莊子註釋は大抵略ぼ此の書に具れり、又文如海の撰なる「莊子疏」十卷あり、文如海は唐の玄宗の時の道士なるが郭象の注は自然に放任して學習を絶ち、莊子の本旨を失ふを慨し、因りて再び之が解を爲ると云ふ、後世元の吳澄は之に序して曰く莊子內聖外王之學、洞徹天人、遭世沈濁、而放言滑稽以玩世、其爲人固不易知、而其爲書未易知也、魏晉以來註釋、奚翅數十、雖淺深高下不同、大抵以己見說莊子、非以莊子說莊子也、（中略）、文氏方外之人乃能獨矯郭氏玄虛之失、而欲明莊子經世之用、噫可謂拔乎儔類者哉（下略）と、亦一種の莊子觀を有する者と謂ふべし、我が德川氏の中葉時代に至りて清の林雲銘（西仲）が撰なる莊子因六卷長崎の商船を經て傳はれり、是より先き明の焦竑は老莊の學を嗜み、「老子翼」「莊子翼」の二書を撰し、共に古來注解の諸說に採り、其の精語を裒めて一編を成せしが、其の莊子に就いては、欽定四庫全書簡明目錄には所採莊子註自郭象以下凡二十二家旁引他說者自支遁以下凡十六家又章句音義、自郭象以下凡十一家、而大旨以郭象呂惠卿（宋人）褚伯秀羅勉道陸西星五家爲主所附闕誤一卷乃陳景元之舊文、附錄一卷則莊子列傳之類也とありて頗る完備の書なるが如くに推奬を力めたれども、仍ほ其の理致を論ずるに傾きて、訓詁解釋に至りては闕遺多きを憾むるなり、焦竑の前後に陸西星の「莊子副墨」あり、書中の字解旨趣を說くこと較に倶に備れり、予を以て見れば林希逸の顯明なる解と焦弱侯の理致の觀と幷び兼ねたる者と謂ふ可き歟、林西仲の解釋は多く此に率由して加ふるに己が見を以てしたるが如し、此の書は幕末明治の初に

邪淫姦宄之路密、分別同異是非之變衆、則國家昏而政事衰、作方遂伎、彫琢文彩、奇變異怪、以褒有德、以別尊卑、巧故滋起、俊出愈奇、令速賞深、罰峻刑嚴、斲肌膚、斷四肢、疏遠不隱、親近不和、罪至夷滅、賞至封侯、天地振慄、盜賊愈多、

夫饑而倍食、渴而大飲、熱而投水、寒而入火、所苦雖除、其身必死、胷中有瘕不可鑿、喉中有疾不可剝也、蟲瘟著面不可射也、蟣蝨著身不可斫也、

夫日月之出入也同明、人之死生也同形、春秋之分也同利、玄聖之與野人也同容、通者之與閉塞也同事、道士之與赤子也同功、凡此數者其中異而外同、非有聖人也、莫之能明、夫陰而不陽、萬物不生、陽而不陰、萬物不成、天地之道、始必有終、終必有始

夫嬰兒未知而忠信於仇讎、及其壯大有識欺紿兄嫂、三軍得意、則下亡虜、窮谿之獸、不避兕虎、其事非易、事理然也、

以上の諸語は今の莊子の書には載せざる者なるが、焦竑は以て郭象の莊子を去取する時の逸篇と爲せり然れども今其の文章より推すときは、蓋し秦漢間好事者の莊子に假托して作れる者なるべし、其の語氣筆力到底南華眞人の敵に非ることは、少く具眼者より觀れば、直ちに看破するを得べし、但造語の往々奇警なるは、縱ひ莊子の手筆に非るも、名言の聽くべきあれば、今此に錄すること此の如し、又崔譔の本に依れば、逍遙遊、齊物論、太宗師、在宥の諸篇に、時に今本と文句の異同あり、此れ亦郭象の删修する所なりと云ふ、又唐の道士成元英が「莊子注疏」十二卷あり、元英字は子實と云ひ陝州の人にして、東海に隱居し、太宗の貞觀五年召して京師に至り、西華法師の號を加ふ、高宗の永徽中に事に坐して郁州に流されしが、其の著なる「莊子注疏」は、多少後世の道士眼を以て看たる傾きあれども、要するに亦能く「郭注」の旨趣を闡明したる者なり、但時に未だ盡く首肯し難き者ある耳、宋の林希逸は、獻齋と號し、「莊子口義」十卷を著はせしが、四庫全書目錄には所得於莊子者頗淺、乃排斥舊註殊不自量、然詞旨明顯易入、尙有裨於初學と云へり、從來滿淸の學者は好んで宋人を詆排する一種の陋習あれば、未だ盡く左袒する能はざれども獻齋の說は宋儒道學眼を以て莊子を曲解する

其餘芳、味其溢流、彷彿其音影、猶足曠然有忘形自得之懷、況探其遠情而玩其永年者乎、遂綿邈清遐、去離塵埃而返冥極者也、

郭象の「莊注」と共に世に行はれし者を、唐の陸德明の莊子釋文と爲す、其の自序に依れば莊生宏才命世、辭趣華深、正言若反、故莫能暢其弘致、後人增足、漸失其眞、故郭子元云一曲之才妄竄奇說、若閼奕意修之首危言游鳧子胥之篇、凡諸巧雜、十分有三、漢書藝文志莊子五十二篇、卽司馬彪孟氏所注是也、言多詭誕、或似山海經、或類占夢書、故注者以意去取、其內篇衆家竝同、自餘或有外而無雜、唯子元所注、特會莊生之旨、故爲世所貴、徐仙民李弘範作音皆依郭本爲主と云へり、此に由て觀れば、莊子の書は後世妄士に竄亂せられて謂はゆる閼奕以下の各篇あり、又「漢書」の藝文志に莊子五十二篇とあるは、詭誕の言多く或は彼の夏禹王の作なりと稱せる山海經（古代の地理類）に似たるあり、諸本或は占夢の書に類するありて、注釋者の意に任かして去取し一樣ならず、但內篇は何れも完備すれども外篇雜篇に至りては、或は其の一ありて、其の一あらざるものあり、唯だ郭象の撰定して注解せる者は特に莊子の旨を會したれば、世に貴重せられ、後の音注者も皆之に依ること、爲れりとなり、されば明の焦竑が「筆乘」にも嚴君平が「老子指歸」に引擧せる莊子の語を左の如く擧げて、其の逸文なることを云へり、

任車未虧、僮子行之、及其傾覆也、顚高墮谷、千人不能安、卵之未剖也、一指摩之、及其爲飛鴻也、奮翼凌雲、罾繳不能達也胎之能乳也、一繩制之、及其爲壯也、羅網不能禁也、虎也執羣獸食牛馬、劍戟不能難也、故漣漪之流、久久而成江海、小蛇不死、而化爲神龍、積微之善、以至吉祥、小惡不止、乃至滅亡、

我之所以爲我者、豈我也哉、我猶爲身者非身、身之所以爲身者以我存也、而我之所以爲我者、以有神也、神之所以留我者、道使然也、

道之所生、天之所興、始始於不始、生生於不生、存存於不存、亡亡於不亡、

夫起福生利、成功遂事、備物致用、使人大富、天下奢僭、財貨不足、民人愈醜、福滿山澤、金玉成積、國愈不安、民益少利、飾智相愚、以詐相要、防隄

るのみにて、世に出だせしが、其の後ち秀の注せる別本出でたるを以て、向郭二家の莊子注本ありと云ふ此の事は本と南北朝時代宋の劉義慶が著はせる「世說」に出でたる話を、晉書は據りて史料と爲せし者なるが、明の焦竑が「筆乘」にも之を論じて世說去晉未遠、當得其實と云へり、但其の來歷此の如く明白なるに拘らず、今共に之を「郭注」と稱して向注と謂はざるは亦怪むべきが如し、古人は之を論じて、郭象盜之向秀、向秀盜之莊生、莊生盜之老聃、老聃盜之易、易盜之天地、陰符經云、天地人之盜、而又何責於子元、（郭象）、今之仍名郭注者以此、（續狂夫之言に出づ圖書集成經籍典第四百三十八卷に引く）と云へるは、乃ち由來天地の眞理は、天下公共の用にして、古今智者の所見、大抵一致するものなれば、必しも單に一人の發明に歸すべからざる旨を漏したる言なるが、蓋し亦一達悟の語ならずとせず、然れども郭注の文たるや、古人も非郭象註莊子、而莊子註郭象也と云へるが如く、註義の深奧にして、遽かに解し難きこと、殆んど莊子本文の上に在り、今參考の爲めに、其の自序を左に掲げん、

夫莊子者可謂知本矣、故未始藏其狂言、言雖無會而獨應者也、夫應而非會則雖當無用、言非物事、則雖高不行、與夫寂然不動、不得已而後起者、固有間矣、斯可謂知無心者也、夫心無爲則隨感而應、應隨其時、言唯謹爾、故與化爲體、流萬代而冥物、豈曾設對獨遭而遊談乎方外哉、此其所以不經而爲百家之冠也、然莊生雖未體之、言則至矣、通天地之統、序萬物之性、達死生之變、而明內聖外王之道、上知造物無物、下知有物之自造也、其言宏綽、其旨玄妙、至至之道、融微旨雅、泰然遣放、放而不敖、故曰不知義之所適、猖狂妄行而蹈其大方、（山木篇に見ゆ）含哺而熙乎澹泊、鼓腹而游乎混芒、（馬蹄篇に見ゆ）至人極乎無親、孝慈終於兼忘、禮樂復乎已能、忠信發乎天光、用其光則其朴自成、是以神器獨化於玄冥之境、而源流深長也、故其長波之所蕩、高風之所扇、暢乎物宜、適乎民願、弘其鄙、解其懸、灑落之功未加、而矜夸所以散、故觀其書、超然自以爲己當經崑崙、涉太虛、而遊惚怳之庭矣、雖復貪婪之人、進躁之士、暫而攬

第四章　莊子の注解書

郭注尤も世に著はる……郭象と尙秀……嵇康は郭象の注を作れるを非とす……王衍は郭象に推服す……郭注は尙注を剽竊す……郭象の自序……陸德明の釋文……莊子に後人の妄竄少からず……現行の莊子は郭象の删削を經たり……老子指歸に所載の莊子逸文……逸文は莊子の手筆にあらず……郭注以前の莊子と郭注本との異同……成玄英の莊子注疏は郭注の旨趣を闡發せり……林希逸の莊子口義……清儒好みて宋明人の著書を譏る……口義亦讀莊の一頁階梯書……口義我が邦に行はる……褚伯秀の南華眞經義海纂微……宋以前の莊子詁釋は大抵義海纂微に具はれり……林文如海の莊子疏は郭注の失を矯めて作る……林雲銘の莊子因、陸雨星の莊子副墨、朱得之の莊子通義、林西仲の莊子因、宣穎の南華經解、郭慶藩の莊子集釋、焦竑の莊子翼、王先謙の莊子集解等、明淸學者の著は互に出入長短あり……本邦莊子の注釋は釋秀峰の莊子𥡴玄、葛因是の莊子心解、宇津木益の莊解、秦鼎の補義莊子因、東條保の標注補義莊子因等亦許多の書あり……寫本鈔錄亦少からず、

莊子の書、注解の種類甚だ衆けれども、其の最も古く且つ世に推稱せらるゝ者は、西晉の郭象が著はせる郭注莊子と爲す、然れども象の解は多く向秀の手に成れりと云ふ、今聊か晉書に依りて其の顚末を述べんに、向秀郭象の二家は共に當時の老莊學者なるが、向秀は字は子期と云ひ、少くして山濤に知らる、是より先きに、莊子の內外數十篇の書、注釋する者數十家あれども、能く其の旨統を究むるもの無かりしに、向秀は乃ち舊注外に於て之が隱解をし、奇趣を發明し、玄風を振起したれば、之を讀む者超然として心悟し、一時に自足せざるは無し、初め向秀將に莊子を注せんと欲し、嵇康に諮りしに、康は此書詎復須注、正是妨人作樂耳と云うて之を止めしが、其の成るに及んで曰く、殊復勝否と、是れ其の事、魏晉の際に在りしが、其の後西晉の惠帝の時に當り、郭象字は子元と云ふ者、老莊を好み淸言を能くす、大尉王衍は每に曰く、聽象語、如懸河瀉水、注而不竭と、州郡の辟召に應せず、常に閒居し文論を以て自ら娛めり、永嘉の末病んで卒す、初め向秀の莊子を注するや、惟だ秋水至樂の二篇は末だ業を畢へずして卒し、秀の子尙は幼稺にして其の說湮沒して著はれず、時に別本ありて遷流せしも、人之を知る者少し、郭象は「向注」の末だ世に甚だ知られざるを利とし、遂に其の說を竊みて己が注と爲し、乃ち自ら秋水至樂の二篇を注し、馬蹄一篇の解を易へ、其の餘の衆篇は、或は文句を點定す

二子の説各々所見あり、其是非得失の如何に至りては、予亦竊かに意見なきに非れども、今姑く置きて之を讀者の取捨に任せんと欲するなり、蓋し之を要するに老莊虚無の説、大に世に尊重せられて、上下翕然玄風に煽動せられしは、支那歴代を通じて、蓋し東西兩晉より盛なるは無し、此の後ち南北時代に至りて、梁の武帝の時、太子莊老を講ぜしかば、詹事（太子の官屬）何敬容は長嘆して曰く、西晉尚浮虚、使中原淪於胡羯、今江東復爾、江南其爲戎乎と、元帝も玄談を好み龍光殿に老子を講ぜしが、未だ幾ならずして江南敗れ身は降虜と爲りしより、老莊の書は學者好事の間に誦讀せらるゝも、復た往時の如くならず、唐の玄宗の天寶元年に至りて自ら其の姓は李氏にして老子（老子姓は李氏名は耳史記本傳に見ゆ）の後裔なりとの故を以て、老子を追尊して太上玄元皇帝と曰ひ、列子を號して冲虚眞人と曰ひ、莊子を號して南華眞人と曰ひ、文子を通元眞人と曰ひ、其の所著の經書を改めて、莊子を南華眞經と曰ひ、列子を冲虚眞經と曰ひ、文子を通元眞經と曰ひ、以て尊崇の意を致し、又天下に詔して莊老列文四子の學に明らかなる者を擧げしめたれども、僅かに道敎一派の勢力を添へしに止まりて、莊子の學説と國民思想との間に於ては、別に差して著大なる影響はあらず、是れ蓋し一方には南朝以來禪敎新たに興りて、支那士大夫の思想は一革新を與へたるに由ると雖へ共、亦未だ必ずしも彼の兩晉亡國の覆轍を踐むを以て深戒と爲せしに因らずんば非ず、而して後人の莊子を稱して南華老仙と云ふも亦實に玄宗の追號に基づきし者なるが、南華とは如何なる故なるかに至りては諸説亦紛々たり或は曰く地の名と、然れども之を老子の玄元と云ひ、列子の冲虚と云ひ、文子の通元と云へるに視るに、皆各々其の意義を以てしたるに獨り莊子のみ地名を以て追號と爲すは頗る怪むべきに似たり、藤澤東畡は説を爲して曰く、蓋老子之文玄奥、莊子衍之、燦爛如陽氣發百花、南謂陽乎と、是の説や稍鑿なるが如くなるも、史記の本傳に老莊を論じて老子所貴道虚無因應、變化於無爲、故著書辭稱微妙難識、莊子散道德放論、要亦歸之自然と云へるに徵するときは、亦其の謂はれ無しと爲さず、姑く錄して後考を待たん、

不足以用天下人、昔漢陰丈人修渾沌之術、（莊子天地篇に見ゆ）孔子以爲識其一不識其二、莊生之道無乃類乎と、庾翼もまた殷浩に書を貽りて曰く王夷甫先朝風流士也、然吾薄其立名非眞、而始終莫取、若以道非虞夏、自當超然獨往、而不能謀始、大合聲譽、極致名位、正當抑揚名敎以靜亂源、而乃高談老莊、空終日、雖云談道、實長華競と、是れ彼の王衍が果して先王以來の政敎を非認し、自然に任ずべしと爲す者ならば、宜く己先づ世間に超越し名位利祿を抛擲して、其の所信を實行すべきに、而かも己は世の名譽を博し高官に位し、又名敎を發揚して亂源を淸め靜むべきに、反て老莊虛無の空談に耽り、何等濟世の事を爲さざるは、眞の道德の士にあらずして、徒に無用の空論を弄びて、名利競爭の門を開くに過ぎずと攻擊し、以て當時殷浩等の國家樞要の地に居ながら、淸談にのみ耽りて國事を省みざるを諷誡せし者なりしが、是れ又終に用ゐられずして、浩は後ち山桑の一敗に因て亦起つ能はず、其の反對者たる桓溫の乘ずる所と爲りて、晋國の事益々救ふ可らざるに至る、されば范甯（東晉）は又論を著はし、何晏王弼の罪を論じて桀紂より浮ぶと爲して曰く、桀紂暴虐、正足以滅身覆國爲後世鑒戒耳、豈能廻百姓之視聽哉、王（弼）何（晏）叨海內之望譽、資膏粱之傲誕、畫魑魅以爲巧、扇無檢以爲俗、吾故以爲一世之禍（桀紂）輕、歷代之罪（王何）重、自喪之釁（桀紂）小、迷衆之愆大也と、然れども此の如き弊害を、國家萬民に與へしは、是れ果して信に莊子其人の罪なる乎否乎に至りては、蓋し亦一考究の餘地無くんばあらず、隋の王通は曰く、詩書盛而秦世滅、非仲尼之罪也、虛玄長而晋室亂、非老莊之罪也、齋戒修而梁國亡、非釋迦之罪也、易不云乎、苟非其人、道不虛行（文中子周公篇）と、是れ儒道佛の三敎共に立敎者の眞意を誤解し、徒に游談空論の末に走りしより、遂に國家亡滅の禍を招きし者にて、畢竟立敎者の罪にあらずして行敎者の過失なりしことを云へるなり、宋の朱子は莊子が說を以て義理を論ぜず專ら利害を計較する者と爲して曰く、蓋其本心、實無以異世俗鄕愿之見、而其揣摩精巧、較計深切、則又非世俗鄕愿之所及、是賊德之尤者、所以淸談盛而晋俗衰、蓋其勢有所必至、而王通猶以爲非老莊之罪、則吾不能識其何說也と、

之說也、循自然性天地者、寥廓之談也、莊周見其若此、故述道德之妙、叙無爲之本、寓言以廣之、假物以延之、聊以娛無爲之心、而逍遙於一世、豈將以希咸陽之門、而與稷下爭辯哉、

是れ此の後ち阮瞻が王戎の聖人貴名敎、老莊明自然、其旨異同を問ひしに對して、將無同の三語を以てしたると同じく、老莊の敎も孔子と其の歸を一にするを言へるが上に、更に一步を進めて、老莊自然の敎の彼の聖人の名數に拘束せらるが如き不自由ならざることを發輝し、以て玄風の鼓吹に力めたる者なるが、其の他王衍嵇康の徒老莊を好み、就中王衍の如きは、位人臣を極めて、輔弼の重職に居りながら、終日惟だ老莊を談するを以て事と爲し、復た天下の休戚得失を顧みざるのみならず、反りて政事を談ずるを以て俗人とし、嘲笑鄙斥するに至れり、而して謂はゆる竹林七賢の徒咸な禮節を破毀し、放縱を以て自然に順ふと爲し、其の風一世を靡蕩し、遂に後世の史家をして其の禍を述べて曰く、學者以老莊爲宗、而黜六經、談者以虛蕩爲辯、而賤名檢、行身者以放濁爲通、而狹節信、進士者以苟得爲貴、而鄙居正、當官者以空虛爲高、而笑勤恪、（晉書懷帝本紀論）と特書せしめ、其の極、司馬門外の銅馬は久しく荊棘に埋り、萬乘の至尊は穹廬の拜を甘んじ、靑衣行酒の悲慘を招致するに至れり、此より其後五胡雲擾の世と爲り、中原の君子前後して渡江し、茲に東晉の偏安の朝廷は立ちしが、淸談の流行は依然として衰へざるのみならず、益々上下に蔓延し、國勢陵夷人心渙散の狀は彼の劉義慶が一部の世說の書を觀れば、思ひ巳に半に過ぐる者あらん、而して裴頠は西晉に於て「崇有論」を著はし、以て何晏王弼が天地萬物皆無を以て本と爲すの意見を論駁し、王坦之は晉に於て廢莊論を作りて、莊周の學術、天下人心を誤る非を鳴らせども滔々たる濁流は亦終に救ふ可からず、今坦之の廢莊論の略旨を擧んに曰く、其言詭譎、其義恢誕、君子內應、從我遊方之外、衆人因藉之、以爲弊薄之資、然則天下之善人少、不善人多、莊子之利天下也少、害天下也多、故曰魯酒薄而邯鄲圍、莊生作而風俗頹、禮與浮雲俱征、僞與利蕩並肆、人以克己爲恥、士以無措爲通、時無履德之譽、俗有蹈義之愆、驟語賞罰、不可以造次、屢稱無爲、不可與適變、雖可用於天下、

師にして成帝時代の人なるが、其の著なる「老子指歸」に多く莊子の言を稱引したるを觀れば莊子の漢代に在りて讀書家に讀まれたる事は、獨り司馬遷が「史記」に於て其の言洸洋自恣適己云云の稱贊にのみ由りて之を知るべきにあらず、而して彼が老子と共に老莊と竝稱せられて、宛かも後世孟子の孔子に於けるが如くに、二者關聯して相離れざる情狀を世人一般に抱かしむるに至りしことは、蓋し魏晉の際を尤も著明なりと爲す、而して是より先き東漢の班嗣は漢書の著者を以て有名なりし班固の父たる班彪の從兄なりしが、儒學を修むれども亦老莊の學を貴びしに、桓譚（當時の名儒）が莊子を借らんとせしに答へたる書辭に就いて推すときは、漢氏の中世、建武永平の時代に在りては、學者が莊子に對する觀念の如何にありしかを察知す可き歟、其の書に曰く、若夫嚴夫子（卽ち莊子なり、東漢人は明帝の諱を避けて莊子を嚴と爲す）者絕聖棄智修生保眞、淸虛澹泊歸之自然、獨師友造化、而不爲世俗所役者也、漁鉤於一壑、則萬物不奸其志、棲遲於一丘、則天下不易其樂、不絓聖人之罔、不齅驕君之餌、蕩然肆志、談者不得而名焉、故可貴也、今吾子已貴仁誼羈絆、繫名聲之韁鎖、伏周孔之軌躅、馳顏閔之極摯、既繫攣於世敎矣、何用大道爲自眩曜、昔有學步邯鄲者、曾未得其髣髴、又復失其故步、遂匍匐而歸耳、恐似此類、故不進と云へるを觀れば、亦以て當時學者が如何に莊子の學を觀たるかを窺ふを得べし、然るに魏晉の際に至りて、何晏王弼共に虛無の玄理を鼓吹し、淸談の天下に行はるに及んで、彼の竹林七賢の一人なる阮籍は達莊論を著はし、益々其の主張を呼號したり、其の大略に曰く、

人生天地之中、體自然之形、身者陰陽之積氣也、性者五行之正性也、情者遊魂之變欲也、神者天地之所以馭者也、以生言之則物無不壽、推之以死則物無不夭、自小視之則萬物莫不小、由大觀之則萬物莫不大、殤子爲壽、彭祖爲夭、（齊物論に見ゆ）秋毫爲大、泰山爲小（同上）故以死生爲一貫、是非爲一條也、別而言之、則鬚眉異名、合而說之、則體之一毛也、彼六經之言分處之敎也、莊周之云、致意之辭也、大而臨之、則至極無外、小而理之、則物有其制、夫守什伍之數、審左右之名、一曲

第三章　莊子歿後の莊學

莊子は孟荀墨の如く高足弟子を有せず……莊子は兩漢の際に始めて著はる……嚴君平と班嗣……魏晉の間淸談流行す……阮籍の達莊論……阮瞻の將無同……王衍輔弼に居て唯た老莊を談す……老莊の學國家を誤る……晉書懷帝紀論……老莊淸談の禍は載せて世說にあり……裴頠の崇有論……王坦之の廢莊論……庾翼と殷浩……王弼何晏の罪は桀紂より浮ふ……莊子の功罪……王通は晉室の亂れしは老莊の罪にあらずと爲す……朱子は莊子を以て鄕愿賊德の尤と爲す……後世晉氏の禍に懲りて老莊を讀むを誡む……唐代老莊を追尊し其の學に明らかなる者を擧ぐ……莊子を南華眞人と稱する意義

莊子將死、弟子欲厚葬之と、本書列禦寇篇にあるに依れば、彼は其の弟子に敎授し相當なる勢力ありしことは、亦由りて推想すべきも、孟子の公孫丑萬章の徒あり、荀子の李斯韓非の徒あるが如くに著名なる人の其の門に在りしや否は、未だ據るべきの書傳あらざれば、得て詳かにす可からず、是を以て又彼の墨翟の學問が其の弟子禽滑釐耕柱子の輩に由りて益

々傳道布敎の宜きを得て、優に孔子の儒敎に對して秦漢の間に一大學派と爲りしが如くなる跡も、亦得て尋ぬ可からず、秦火既に熸し、炎漢勃興の初めに當りて、齊人蓋公なる者あり、黃老無爲の敎を以て齊の相曹參に授け、參の蕭何に代りて漢の丞相と爲るに及んで、政事一に簡淨を尙び、當時の百姓をして蕭何爲相、較若畫一、曹參代之、守而勿失、載其淸淨を歌はしめたるは、漢史既に其の事を載せて詳かなり、其の後ち竇太后(晏帝の皇后)黃老の學を好み、武帝(文帝)の孫が趙綰王臧等の說を用ゐて儒術を尊尙するを悅びず、儒敎の經典たる詩書を指して城旦書(刑法の書)と爲して、痛く當時の改革に反對せしを觀れば當時上下の人情、深く周末紛々たる文敝の餘毒に懲り、簡淨休息の政治を希望して其の學問亦隨うて黃帝老子を竝べ稱し、黃老の名目は頻に史上に著はれしに、獨り莊子は何が故にか寥寥として聞えず、人の之を說く者甚だ少かりし、但嚴君平は西漢の楊雄の

二十三	二十四	二十五
三	四	五
三十六	三十七	三十八
十五	十六	十七
七	八	九
二十七	二十八	二十九
四	五	六
七	八	九
二十	二十一	二十二
三十二	三十三	三十四

の事を載せり、但其の年時を詳かにせず、然れども臆を以て推すに亦應に孟子と大差なかるべし、姑く後考を俟つ、

周	赧王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二
魯	平公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	文侯元年	二
宋	十五	十六	十七	十八	十九	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五
秦	十一	十二	十三	十四	武王元年	二	三	四	昭王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
楚	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	頃襄王元年	二	三	四	五	六
魏	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六
韓	十九	二十	二十一	襄王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	釐王元年	二	三
趙	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	惠文王元年	二	三	四	五	六
燕	七	八	九	昭王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九
齊	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一

同三年宋君偃自立して王と稱す按ずるに列禦寇篇宋人有二曹商者一、爲二宋王一使レ秦反レ於レ宋、見二莊子一の文あり、蓋し莊子魏より宋に歸りたるは此の年の前後なるべし、

赧王元年孟子、齊を去る（孟子年表）、

同二年孟子鄒に歸老し公孫丑萬章の徒と詩書を序し仲尼の意を述ぶ、

周の赧王十七年は即ち趙の惠文王元年なるが、說劍篇に趙文王說レ劍莊子往見の事を載せり、文王は即ち惠文王なること古人既に其の說あり、蓋し莊子の趙に往きしは是歲の後なり、

周の赧王二十年、孟子七篇成る（孟子年表）、

同二十六年孟子鄒に卒す、安王十七年生れてより是に至りて年を獲ること九十六歲（孟子年表）

列禦寇篇に莊子將レ死、欲レ葬レ之

三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	愼靚王元年	二	三	四	五	六
五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
二十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	康王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
二十四	惠文王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	元年（初メテ元年ト更ム）	二	三	四	五	六	七	八	九	十
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	懷王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
三十三	三十四	三十五	三十六	襄王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	哀王元年	二	三	四
二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	宣惠王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	武靈王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	易王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	王噲元年	二	三	四	五	六
五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	湣王元年	二	三	四	五	六	七	八	九

も見えたれば、是の時莊子楚聘を辭したれども、其前後に楚に往きしことも亦以て推知すべし、周の顯王三十一年、孟子宋に之きて告子と性を論ず、明年滕文公世子を以て楚に之き、宋に過ぎり、孟子見ゆ（孟子年表）、莊子秋水篇に商太宰蕩問仁於莊子の文あり、商は即ち宋の別名なれば、莊子の宋都に居りしことは明かなるも孟子と同時なるか、或は前後なるかを詳かにせず、

同三十三年魏の惠王辭を卑くし幣を厚くして賢者を招く、孟子魏に至る、約年五十歲（孟子年表）按ずるに秋水篇に惠子相梁（魏の別名）、莊子往見之の文あり、又同篇に公孫龍問於魏牟曰、龍少學先王之道、而明仁義之行、合同異、離堅白（中畧）今聞莊子之言、汒焉異之とあり、魏牟は即ち惠王の名の瑩の轉音なれば、莊子の此の前後を以て魏に至りしこと亦明らかなり、

山木篇又莊子衣大布過魏王の文あり、莊子の魏に往きしは獨り惠子を訪問するに止まらずして、其の道を國君に說きしことも亦以て見るべし、

「古今樂錄」に莊周を以て齊人と爲し、山澤の間に隱れしを、齊湣王使を遣し、金百鎰を齎らし、相位を以て莊周を聘迎せしめしに辭して至らざりし事を載せり、未だ何の書に據るを知らず、姑く異聞を錄す、

周の愼靚王二年孟子齊の宣王に見え客卿と爲る（孟子年表）、

周	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
魯	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	康公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	景公元年	二	三	四
宋	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一
秦	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
楚	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	威王元年
魏	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二
韓	十一	十二	昭公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
趙	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	肅侯元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
燕	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
齊	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	宣王元年	二	三	四

周の顯王十三年、孟子鄒に教授す、公孫丑萬章の徒業を受く（孟子年表）、

周の顯王十四年齊の威王、魏の惠王と郊に會田す（六國表）、則陽篇に魏瑩（梁惠王）與田侯牟（齊威王）約、田牟背之とあるは蓋し此の會の前後ならん、

周の顯王三十年は即ち楚の威王元年にして同四十一年は威王の子懷王元年なれば史記の本傳に楚威王使人聘莊子の文あり又秋水篇に莊子釣於濮水、楚王使大夫往先焉曰、願以境累焉とあり、又莊子の犧牛の喩を以て之を辭せしことを載せり、蓋し是の歳より後十ヶ年間にありしことならん、濮水は今の山東省の曹州府濮州の附近なりとすれば、當時莊子は故鄕に居りしなるべし、而して至樂篇に莊子之楚見空髑髏の文あり、又莊子與惠子遊於濠梁之上とありて、注に豪通濠在淮南鍾淮郡と云へり、淮南は今の安徽省鳳陽府壽州及び太平府の附近なること近くは李氏地理韻編に

十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	烈王元年	二	三	四	五	六	七	顯王元年	二	三	四	五	六	七	八
二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	共公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六
九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	辟公元年	二	三	剔成元年	二	三	四	五	六	七	十八	九
獻公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	孝公元年
十八	十九	二十	二十一	肅王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	宣王元年	二	三	四	五	六	七	八	九
三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	惠王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十
三	四	五	六	七	八	九	十	哀侯元年	二	三	四	五	六	懿公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十
三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	成侯元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	桓公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	文公元年
二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	威王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八

上に徙す、莊子胠篋篇に田成子有二乎盜賊之名一、而身處二堯舜之安一(中畧)十二世有二齊國一、とあり田成子は即ち田和の曾祖田恆なり、太公と號す、

周の安王十七年孟子生る、孔子の卒せしより是に至るまで九十五年(孟子年表)、

周の安王二十三年齊の康公卒す是より先き田和卒し、子の桓公立ち、遂に齊國を有つ、桓公の子因齊始めて彊を以て天下に著はる(六國表)、

同二十六年孟子業を子思の門人に受く(孟子年表)、

是の歲魏韓趙の三家晉を滅し、其の地を分つ、晉絕えて後なし、

周	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	安王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
魯	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
宋	六十	六十一	六十二	悼公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	休公元年	二	三	四	五	六	七	八
秦	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	惠公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	出公元年	二
楚	二	三	四	五	六	悼王元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
魏	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	武侯元年	二
韓	三	四	五	六	七	八	九	烈侯元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	文侯元年	二
趙	三	四	五	六	七	八	九	武公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	敬侯元年	二
燕	二十八	二十九	三十	三十一	釐公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
齊	五十	五十一	康公元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十

り(史記魏世家)、
同十八年、魏の文侯、經を子夏に受く(六國年表)、是より先き子夏田子方段干木等皆魏に於て尊禮せらる(魏世家)、
同二十一年子思魯を去り、明年衛に卒し、魯に歸葬す、
同二十三年魏韓趙の三氏王命を以て諸侯と爲る、

周の安王十六年齊の大夫田和王命を以て諸侯と爲り、康公を海

莊子年表

周の威烈王元年は我が孝昭天皇五十一年即ち皇紀二百三十六年にして西紀前四百二十五年に當る

周	魯	宋	秦	楚	魏	韓	趙	燕	齊
威烈王元年	元公四年	昭公四十一年	懷公四年	簡王八年	桓子卒	康子卒	襄子卒	滑公九年	宣公三十一年
二	五	四十二	靈公二年	九	文侯斯元年	武子元年	桓子元年	十	三十二
三	六	四十三	三	十	二	二	獻侯元年	十一	三十三
四	七	四十四	四	十一	三	三	二	十二	三十四
五	八	四十五	五	十二	四	四	三	十三	三十五
六	九	四十六	六	十三	五	五	四	十四	三十六
七	十	四十七	七	十四	六	六	五	十五	三十七
八	十一	四十八	八	十五	七	七	六	十六	三十八
九	十二	四十九	九	十六	八	八	七	十七	三十九
十	十三	五十	十	十七	九	九	八	十八	四十
十一	十四	五十一	十一	十八	十	十	九	十九	四十一
十二	十五	五十二	簡公元年	十九	十一	十一	十	二十	四十二
十三	十六	五十三	二	二十	十二	十二	十一	二十一	四十三
十四	十七	五十四	三	二十一	十三	十三	十二	二十二	四十四
十五	十八	五十五	四	二十二	十四	十四	十三	二十三	四十五
十六	十九	五十六	五	二十三	十五	十五	十四	二十四	四十六
十七	二十	五十七	六	二十四	十六	十六	十五	二十五	四十七
十八	二十一	五十八	七	二十五	十七	景侯元年	烈侯元年	二十六	四十八
十九	穆公元年	五十九	八	聲王元年	十八	二	二	二十七	四十九

周の威烈王元年魏文侯、子夏（孔子の弟子、莊子の師の師）に師事す（孟子年表）、二年文侯晉の烈公を弑す、

周の威烈王十七年魯の穆公、子思（孔子の孫）を尊禮す（孟子年表）

同年田子方（子夏の弟子莊子の師）魏に在り、文侯の太子擊に國君而驕ㇾ人則失ㇾ國の訓誡を爲せ

す可からざる理窟を主張し、放慢にして無責任なる妄論を鼓吹し、世間の迂愚漢を騙弄し、輕薄兒を墮落せしめて、以て自ら賢とし快とする者の比論に非ることは、吾も亦之を斷言するに躊躇せざるなり、而して王安石の謂へるが如く、莊子にして孟子を見せしめば、終に如何なる論戰を當時の雄辯界に交へ、又如何なる偉觀を萬古の文章界に貽せしかは、今日に在りて之を想像するも、亦た嘗て爲めに肉躍り血湧くの概を生せずんばあらず、豈に惜むべきの至りならずや、「史記」の書、其の列傳は伯夷管晏を始めとして諸人の行事を傳して、而かも歿年々壽の如き多く略して記せず、此れ獨り莊子一人の事のみならず、孟子の如きも、其の歿年々壽に於ては、後世區々の說ありて一定せず、「闕里誌」は孟子を安王十七年の生と爲し、淸閻若璩が「孟子生卒考」には孟子の卒を當在赧王之世」と爲し、狄子奇が「孟子編年」には周烈王四年四月二日孟子生、赧王二十六年、年八十四、正月十五日卒と爲し、彭德輝が「孟子年表」には、安王十七年の說に仍りて、赧王二十六年年九十六歲を以て卒と爲せり、今莊子の時代を、彼の書中の田子方篇に莊子見魯哀公の一段に徵すれば、莊子は正しく孔子と同時代にして、孟子より殆ど一百年前の先輩なれども、說劍篇に趙文惠王喜劍、莊子往見の一段に據れば、齊宣王梁惠王と爲し、又莊子の歿後五六十年の時人たれば、其の荒誕なること固より信ずるに足らず、然れども史記の時代は、莊子の世を距ること較々近ければ、之に据りて齊宣梁惠の同時代と爲せば、又楚の威王と同時なることを得べし、而して孟子が安王十七年に生れて赧王二十六年に九十六歲を以て歿せしと爲すときは、莊子も亦孟子と同時の人と爲して、梁惠王の時より趙の惠文王の世に及ぶことを得べし、其の歿年年壽の如きは、姑く後考を待ちて、玆に之を孟子に比照して、其の歴略を述べて莊子年表を作ること左の如し、此れ固より一時の卒作にして、未だ敢て自ら足れりと爲さざれども、篤學の士、此に由りて參照硏究し、其の遺漏誤謬を補正することあらば、豈に獨り述者の幸のみならんや、

對して犧牛孤豚の說を引きて、子亟去無汚我、我寧游戲汚瀆之中自快、無爲有國者所羈、終身不仕、以快吾身と云へる語を載せ、以て本傳の終結と爲し其の歿年の何時代にありしか、又其の死處の何地に於てせしかを云はず、但莊子の此の語は、其の書の雜篇列禦寇篇に於ても記載しあれば、固より疑を容れざる可きに似たり、王安石は之を論じて曰く、莊周曰上必無爲而用天下、下必有爲而爲天下用、又自以爲處昏主亂相之間、故窮而無所見其材、孰謂周之言皆不可措乎君臣父子之間、而遭世遇主、終不可使有爲也、及其引太廟犧以辭楚之聘使、彼蓋危言以懼衰世之常人耳、夫以周之才、豈迷出處之方而專畏犧者哉、蓋孔子所謂隱居放言(論語の微子篇に見ゆ)者、周殆其人也と、卽ち安石の意は、莊周平生の持論より觀るも、彼は君主は無爲を以てして神聖なる地に立てこそ、能く天下を治むべく、又臣下は有爲を以て責任に當りてこそ、君民の委託を全くするを得べしとの意見なれば、決して己自ら進んで無用閑散の地に居る者にあらざれども、如何せん當時の天下は大亂世なるに、昏主愚相のみにて、到底濟度し得べき人にあらざるより、彼は斷然之を見限りて、此の如き犧牛孤豚云々の放言を爲して、衰亂の世人に警醒を與へたるに過ぎずと論せしなるが、是れ果して莊子其人の眞意を窺ひ得たる言なる歟否は、今姑く讀者の判斷に任ずることと爲さん、安石は又莊子を孟子に比較して曰く、莊子孟子時人也、老(老子)之莊(莊子)猶孔(孔子)之孟(孟子)孟子歷說齊梁、所如不合何其窮哉、以莊子之才、騁其談辯足以屈儀秦(張儀蘇秦)詘衍奭(鄒衍鄒奭共に齊國の辯士、傳は「史記」孟子の傳中に在り)立取卿相不難、而乃以漆國吏隱、觀其却聘之言(前に見ゆる犧牛云々の說)抑何達也、蓋師柱下(老子)之意、而加游戲焉、孔子曰、老子其猶龍乎、若莊子者其猶魚乎、魚之樂(莊子の秋水篇參看)周之樂也其猶蝶乎、周之化蝶、蝶之化周也、(同書の齊物論參看)故孟子而不見莊子也、孟子而見莊子、吾知其必有歎也、嗚呼老子吾不得而見之矣、得見莊子者斯可矣と、此の論又遽に果して能く孟莊二子を首肯せしむるに足る歟否を判すべからずと雖も、莊子も亦終に彼の初めより身を度外に置きて、經世の何物たるを解せず、妄に高尙にして企及

而儆跬譽無用之言非乎、而楊墨（楊朱墨翟）是已と云ひ、胠篋篇に使人喜怒失位、居處無常、思慮不自得、中道不成章、於是乎天下始と云ひ、喬詰卓鷙、而後有盜跖曾史之行と云ひ、下有桀跖、上有曾史、而儒墨畢起、於是乎喜怒相疑、愚知相欺、善否相非、誕信相譏、而天下衰矣と云ひ、今世殊死者相枕也、桁楊相推也、刑戮者相望也、而儒墨乃始離跂攘臂乎桎梏桁楊之間、噫甚矣哉、其無愧而不知恥也、吾未知聖知之不爲桁楊接槢也、仁義之不爲桎梏鑿枘也、焉知曾史之不爲桀跖嚆矢也と云ひ、絕聖棄知而天下治と云へるが如き、要するに人の徒に知術に馳せ、天良を戕ふの弊害を指摘して、夏桀盜跖の非行が民物を賊へる害と結果を同くすと極言せる者なり、然れども此等の論が何が故に彼の內篇に見えずして、獨り外篇雜篇に於て始めて見れしかは、亦一考思を要せざる可からざるに似たり、尤も內篇中にも孔子を詆毀せるが如き、文章絕對に無きにはあらざれども、彼の叔山無趾が孔子を以て天刑之安可解（德充符篇）と云へるは、秦失の老聃を遁天之刑（養生主篇）と評せると同じく、或る寓意的を以て云へるに過ぎず、之を外雜諸篇に於て云へる者とは、固より同じからず、

「史記」又曰く、其言洸洋自恣、以適己、故自王公大人不能器之と、孔子嘗て君子を論じて曰く、君子不器と（論語爲政篇）、蓋し器とは或る長所の採用すべきこと有るを謂へるにて、今や君子は何にも適合して役に立つるが故に、別に之が長所と指定すべき廉なしとなり、此の意味よりすれば、莊子の器使に適せざるは、寧ろ其の大人物なりしを觀るべくして、決して彼の疵病と爲すには足らざれども、荀卿は莊子蔽於天而不知人と云うて、彼の議論が餘りに虛遠の哲理に傾き過ぎて、人事問題を閑却せしを非難し、楊雄は莊周放蕩而不法と云うて、其の放慢的に流れ常法常規を以て律すべからざるを攻擊し、何晏は鬻莊軀、放冗虛、而不周乎時變と云うて、彼が堂堂たる丈夫有爲の身を持ちながら、徒に世間實際的に迂遠なる虛無の理窟を放縱に吹き立て、而かも時勢の變化等には一向無頓著なりしを嘲笑せしことを晉の王坦之が廢莊論に掲げしを觀れば「史記」の云ふ所は亦必らずしも一家の私言にあらず、「史記」に又楚の威王が厚聘を以て莊子を迎へし時、彼が使者に

可曉者とあるが如く、既に史記の此の明文ある以上は、亦未だ遽かに取りて僞作攙入とも爲す可からず、我が邦大鹽中齋は曰く、盗跖篇雖固寓言、其對孔子敢論之、言言是皆古今常人不言之深情、而跖特爲代之言者耳、而世之不甘受教於聖賢者全在此矣、自昔傳蒙莊善道人情、誠非虛言也と、此れ人情上よりして社會の反面を寫し、以て諷誡と爲せる者と觀たるが、獨り盗跖一篇のみならず、他の諸篇も亦如是觀を做し去るときは、儒者に在りても、別に莊子を訾議する要なかるべし、但予は竊かに疑ふ、今試みに文章上より論すれば、胠篋盗跖の筆力は如何にも、鄭瑗の疑ひたるが如く、到底内篇の逍遙遊篇齊物論太宗師の比敵にあらず、蓋し司馬遷の史記に云へるは別に當時其の篇ありしを、後世散佚したれば、今の二篇の如きは、好事者の僞作攙入せしに非る歟、此の說古人にも有れども、未だ確据を獲ず、姑く餘して後考を俟たん、司馬遷又曰く、然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒墨、雖當世宿學不能自解免也と、是れ莊子が文章の才善く切實巧妙に事情を描寫し、他學派なる儒者竝に墨翟の學を攻擊觝排し、當時の宿學老儒と雖へとも、彼が論駁に逢ふときは之に對して、自ら辯解に苦むことを云へる者なるが、莊子の文に雄なることは、後章に載する所の諸家の評論の如く、眞に千古有數の大作家にして、事物描寫情態論述の妙の如きは、讀者の一たび卷を手にせば忽ち悟る所なり、但其の儒墨を攻擊觝排する一段に至ては、墨は姑く置き、既に作者其人既に孔子を尊信せる者なるに、何が故に儒者を此の如く爲せるかと云はんに、孔子歿して弟子諸處に散居し、皆各、其の所得を以て敎へしより荀子の非十二子篇には子張子夏子游の流派ありと爲し、韓非子の顯學篇には、儒者に孔墨之後、儒分爲八、墨離爲三、取舍相反不同のことを說けり、而して墨子の非儒篇に擧ぐる所を觀れば、當時儒者の陋習醜態は、洵に慨嘆に堪へざる者あれば、少しく識見ある者より觀れば、固より非難攻擊を免れず、復た何ぞ莊子に於て之を爲すを怪まんや、且莊子が儒墨を剽剝せしことは、試みに彼が書中に就いて求むれば、駢拇篇に枝於心者擢德塞性、以收名聲使天下簧鼓以奉不及之法非乎、而曾史（曾參史魚）是已、駢於辯者、纍瓦結繩竄句遊心於堅白同異之間、

道者也、於是棄絶乎禮義之緒、奪攘乎利害之際、趨利而不以爲辱、殞身而不以爲怨、漸漬陷溺、以至乎不可救已、莊子病之、思其說以矯天下之弊、而歸之於正也、其心過慮以爲仁義禮樂、皆不足以正之、故同是非、齊彼我、一利害、(本書齊物論參看)則以足乎心爲得、此其所以矯天下之弊者也、既以其說矯弊矣、又懼來世之遂實吾說而不見天地之純、古人之大體也、於是又揭其心於卒篇、以自解、故其篇曰、詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道知、易以道陰陽、春秋以道名分、(本書の天下篇參看)由此而觀之、莊子豈不知聖人者哉と、(莊周論)蘇東坡は史遷が作漁父盜跖胠篋以詆訾孔子之徒以明老子之術とあるを以て、此知莊子之粗者と爲して曰く、予以爲莊子蓋助孔子者、要不可以爲法耳、楚公子微服出亡、而門者難之、其僕操箠而罵曰、隸也不力、門者出之、(左傳に見ゆ)事固有倒行而逆施者、以僕爲不愛公子則不可、以爲事公子之法亦不可、故莊子之言皆實予而文不予、陽擠而陰助之、其正言蓋無幾、至於詆訾孔子、未嘗不微見其意、其論天下道術、自墨翟禽滑釐彭蒙愼到田駢關尹老聃之徒、以至於其身、皆以爲一家、而孔子不與、其尊之也至矣と、而して其の漁父盜跖の諸篇を論ずるや、眞に孔子を詆りしかを疑ひしも、之を其の列禦寇篇に合觀するに及んで、是れ一章にして、其の間に在る盜跖說劍漁父の三篇は、莊子の言未だ終はらざるに、昧者の其間に剿說せる者と爲せり、(「莊子祠堂記」參看)「井觀瑣言」も又曰く、古史謂莊子讓王盜跖說劍諸篇、皆後人攙入者、今考其文字體製信然、如盜跖之文非惟不類先秦文、亦不類西漢人字、然自太史公(司馬遷)以前卽有是、則有不可曉者、嘗觀其前如馬蹄胠篋諸篇、文意亦凡近、視逍遙遊太宗師諸篇、殊不相侔、竊意但其內七篇、是莊氏本書、其外雜等二十六篇、或是其徒所述、因以附之、然無可質據、未敢以爲然也、大抵莊列書非一手所爲、而列子尤雜と、以上の諸說に依れば、莊子は必ずしも全然老子を祖述する者に非るのみならず、寧ろ孔子に左袒して其の說を鼓吹するに勉めたる者なるも、之を正則的に正面より說かずして、變則的に反觀して說きしなり、但盜跖漁父の諸篇に、孔子を詆毀せるに至りては、以て後人の僞作攙入と爲せども、彼の「瑣言」に然自太史公以前卽有之、則不

不可與莊語、以巵言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣、（本書寓言篇參看）獨與天地精神往來而不敖倪於萬物、不譴是非、以與世俗處、其書雖瓌瑋而連犿無傷也、其辭雖參差而諔詭可觀、と是れ其の書の謬悠荒唐の言たることは、莊子と雖も亦自ら之を知れり、而して敢て大膽的に之を爲して顧みざりし所以は、當時滔々たる天下率皆沈濁し、到底之を相手として正言莊語を以て喩すべからざるを知ればなり、故に面白くして味ある巵言を以て其の意旨を述べて其の中に世人の尊重する古人の言を以て其の眞義を確め、又或る意味を物事に寄托して云へる寓言を以て、其の歸趣を廣め、世の事物に偏曲せず、是非を鬪はさずして、自然に世人をして道の眞味に觸れしめんとしたるは、是れ彼が著述の本意にして、豈又謂はゆる良工用心の苦しきを想見するに餘ある者にあらずや、莊子の著述は右の如き主意より作りし者なれば、其の文章は司馬遷が善屬書離辭、指事類情と評せしが如く、抑も作者自身が瓌瑋諔詭を以て許せるが如く、眞に天地不朽の絕妙文章なることは千古の定論たり、司馬遷は又曰く、作漁父盜跖胠篋、以詆訿孔子之徒、以明老子之術、畏累虛亢桑子之屬、皆空語無事實、と、是れ莊子は全く老子の學を祖述し、孔子の道を攻擊し、其の著書の主意は、孔教を排斥して老學を發輝せることを云へるが、「史記」は又其の荀卿傳に於て、卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬不遂大道而營巫祝信禨祥鄙儒小拘如莊周等又滑稽亂俗、於是推儒墨道德之行事興壞序列著數萬言而卒と云へり、是れ大儒荀卿の如き者より觀れば、莊子は亦未だ全然たる道家者流にあらずして、幾分か儒敎を酌めるも、唯だ其の大本大體に達せずして、徒に小局に汲々として、又滑稽亂俗の說を吐きて正言莊語の士にあらざるを嫉めるを云へるに似たり、然らざれば司馬遷は同書の自敍傳に於て當時の學問を區別し、道儒名法墨雜の六家と爲しながら、自ら其の例を破りて儒學の正反對たる道家者流を呼ぶに、たとひ鄙汚の冠辭を冒するにもせよ、豈敢て儒名を以てせんや、且つ後世宋の王安石蘇東坡等を始め、莊子を以て眞に孔子を毀るにあらずと爲す者亦尠からず、安石は曰く、先生之澤、至莊子之時竭矣、天下之俗譎詐大作、質朴並散、雖世之學士大夫未有知貴己賤物之

入可也とありて、大體を能く守れば、小事は多少の出入ありとも深く咎むべきにあらざる意味を漏らしたるを觀れば、其の學說一再傳して莊子と爲りしは、又深く怪むに足らざる者あり、田子方の事は、魏の文侯に仕へて、太子擊の車より下りて拜せしに抗禮して拜を爲ざるを咎めし時に、士の貧賤者にして始めて人に驕るべきことと言はれし一條（此事史記及十八史略等に見ゆ）を觀ても、又其の傲世不羈の概ありしことを推知すべし、且つ世に莊子の自叙傳とも稱する天下篇に據りて云へば、芴漠無形、變化無常、死與生與、天地並與、神明往與、芒乎何之、忽乎何適、萬物畢羅、莫足以歸、古之道術有在於是者、莊周聞其風而悅之とあり、乃ち道術の深遠幽渺にして形體の捉ふ可き無く、時に隨ひて變化し常態なく、死生を外にし高く物外に超越し、天地と相竝び、神明と往來し、芒乎忽乎として、必らずしも一處に停滯し一事に拘泥する無く、宇宙間一切の有らゆる萬物を畢く包羅し、必らずしも何に歸著すと云ふが如き窮屈なること無く、唯だ其の義理の當然に順ふ者、是れ莊子が根本たる宗旨とす、而して此の義たるや、姑く之を

「論語」の死生有命富貴在天（顏淵篇）と云ひ、用之則行、舍之則藏（述而篇）と云へるが如きに視れば、孔門の主義主張も亦大體此に外ならず、而して老聃の說は如何と尋ねんに、以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、澹然獨與神明居、古之道術有在於是者、關尹老聃聞其風而悅之、建之以常無有、主之以太一、以濡弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實（下略）とあり、是れ老子の虛無主義を以て精神と爲し、道は重きを內心に置きて、外形を輕視し、痛く多慾倨傲を抑へ、澹泊謙退を主とし、虛心坦懷にして、事物と對抗せざることを以て本旨と爲せるを說きし者なるが而して如上の莊子が所說は、自然此に傾けるを以て、遂に大要老子と一致するに至りしなり、去れども莊子は矢張り莊子にして、孔子と全くは同じからざると共に、又老子と全くは同じからざることは、亦自ら其の書中に於て議論の掩ふ可からざる者あり、此れ讀者の宜しく同時に承知すべき者たり、司馬遷又曰く、故其著書十餘萬言、大抵率寓言也と、天下篇亦莊周の事を述べて曰く、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、不以觭見之也、以天下爲沈濁

しも、孟子に向ては、亦未だ嘗て何等の言及を爲したる跡あるを見ず、朱子は莊子當時也無人宗之、他只在僻處自說、然亦止是楊朱之學、但楊氏說得大了、故孟子力排之(語類)と云へり、然れども又孟子平生足跡只是齊魯滕宋大梁之間、不曾過大梁之南、莊子自是楚人、想見聲聞不相接と云へり、是れ後世の莊子を以て、荊楚學派と爲せる濫觴なるが、然れども莊子は史記に蒙人とありて、蒙は卽ち宋國の邑にして、今日より觀るも、宋都の商邱と共に、河南省歸德府に屬して、商邱縣と爲り、莊子が漆園の遺跡尙ほ認むべきは、顧氏の說の如くんば、直ちに莊子を以て楚人と爲すを得ざると同時に、又不曾過大梁之南の一語を以て、孟莊二子の相接せざりし理由と爲すを得ず、且や孟子は獨り莊子のみならず、老子に對しても、又未だ嘗て口舌に騰して批評を試みしこと有るを聞かず、世或は孟子は楊墨を距ぎて仁義を尊び、莊子も楊墨を距ぎて施龍を闢く、直ちに孟子と同じく、眞に仁義を菲薄とするにあらず、但孟子の莊語を以て喩すに似ざるのみと云へども、若し當時二子にして相見たりしならば、孰かに幾分の記述せし者あらん、豈に是の時、楊墨は盛に天下に行はるれども、老莊の學は未だ甚しく世に著はれざるに由るか、「荀子」の解蔽篇に至りては、「莊子蔽於天而不知人」とあり、豈に老莊一派の學說が、儒敎一流の齒牙に上りて、是非を問はれしは、蓋し孟子の沒後より始まりたるに非る歟、司馬遷は又曰く、其學無所不闚、然其要本歸於老子之言と、蓋し莊子の學は、もと純然たる老子の祖述者にはあらず、「史記」並に「漢書」の儒林傳に、孔子の沒後七十子散じて諸侯の國に居りしが、子夏は魏の文侯の師と爲り、田子方、段千木、吳起、禽滑氂の屬(後ち墨翟に學ぶ)皆業を子夏の倫に受けしことを載せたるを、唐の韓退之は更に推して子方の後ち流れて莊周と爲る、故に周の後ち喜むで子方の人と爲りを稱すと云へり、(送王塤序)今又莊子の書に就いて之を推すに、其の外篇に田子方の篇ありて、專ら子方の言を著錄し、又莊子の親しく魏文侯に見えしことを載せしを觀れば、退之の言未だ必しも據なしと爲さず、子夏は孔子の弟子のト商の字にして、謂はゆる孔門十哲の中にありて、文學を以て著はれたる人なるが、「論語」に其の言を載せて大德不踰閑、小德出

試みに之に據りて、聊か予が所見を述べ、以て大方家に質す所あらん、司馬遷は莊子を傳して曰く、

莊子者蒙人也、名周、周嘗爲蒙漆園吏、與梁惠王齊宣王同時、其學無所不闚、然其要本歸於老子之言、故其著書十餘萬言、大抵率寓言也、作漁父盜跖胠篋、(共に篇名)以詆毀孔子之徒、以明老子之術、畏累虛庚桑子之屬、皆空語無事實、然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒墨、雖當世宿學、不能自解免也、其言洸洋自恣以適己、故自王公大人、不能器之、楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之、許以爲相、莊周笑謂楚使者曰、千金重利、卿相尊信也、子獨不見郊祭之犧牛乎、養食之數歲、衣以文繡、以入太廟、當是之時、雖爲孤豚、豈可得乎、子亟去、無汚我、我寧游戲汚瀆之中自快、無爲有國者所羈、終身不仕、以快吾志焉、

「史記」の傳文は右の如く頗る簡短にして、其の歿年齡及び終焉の地も得て詳かならざれば、姑く之を置き、今且つ傳文に就いて云はんに、莊子の鄕里は蒙人と云ひ、又爲蒙漆園吏とあり、「史記索隱」には劉向別錄を引て、宋之蒙人也と云へり、淸の顧祖禹が「讀史方輿紀要」に依れば、淸の河南省歸德府は、古へ周の武王が殷の後を宋に封ぜし地にして、府の東北四十淸里の商邱縣の蒙城は卽ち古への蒙の地にして其の中に漆園あり又は漆邱と名づくる處あり、卽ち莊周の園吏たりし地なり、又「史記集解」には「漢書」の地理志を引きて、蒙縣屬梁國とあり「正義」には漆園故城在曹州冤句縣北十七里、此(史記本傳を指す)云莊周爲漆園吏卽此、按其城古屬蒙縣とあれども、「漢書」地理志に依れば、漢代の梁國は、睢陽故宋國、微子所封と云へば、卽ち河南省歸德府の梁國たることは明らかなり、又「正義」の謂はゆる曹州冤句縣は、淸の山東省曹州府荷澤縣の西南に位すれども、蒙縣と相近くして、古へは蒙縣に屬せしなり、而して「史記」に與梁惠王齊宣王同時とあれば、固より孟子と同時代たることは、孟子の書に、梁惠王齊宣王の屢〻孟子に政を問ひ敎を受けんことを請へる明文あるを以て推知すべし、然れども今孟子の書を觀るに、力を極め辯を奮うて、楊墨を排斥せるに管せず、莊子に至りては、未だ一語隻句の之に言及せし者あらず、而して莊子も惠施公孫龍の輩に對して、論議詆排せ

の老子を推尊して道敎の始祖と爲し以て彼の印度傳來の佛敎と對抗し、僧道寺觀各地に散布し、祈禱懺悔煉丹養生の諸法相踵て行はるゝに至りしが若きは固より後人の老子に假託して作れる者にして老子の與り知る所に非ざると共に、莊子の直切に甚深なる關係を有する者にあらざれば今は之を略して論せず、

第二章　莊子の傳

西漢時代には黃老を竝稱す……老莊と竝稱せるは東漢以後に始まる……史記の莊子傳……莊子は蒙人竝に蒙の地理……莊子と孟子……莊子は唯是れ楊朱の學……莊子を以て楚人とせしは朱子に始まる……莊子も亦楊墨を距ぐ……莊子は孟子と會見せず……孟子楊墨を闢きて老莊を排擊せず……儒家の老莊一派を攻擊するは荀子より始まる……莊子は純然たる老氏學者にあらず……莊子と孔門との關係……莊子の旨義亦孔子と一致する所あり……莊子の旨義大要は老敎に傾けり……司馬遷の莊子論……莊子自ら著書の性質を語る……巵言重言寓言……莊子の大膽的に放言せし所以……莊子自ら其文を評して瓌瑋諔詭と爲す……莊子の文は眞に天地不朽の絕妙文章……著述の本意……鄙儒小拘の莊周……王安石蘇東坡の莊子觀……莊子の書僞作攙入あり……莊子儒墨を剽剝す……戰國儒者の醜陋……莊子の書儒墨を攻擊せるは多く外雜兩篇にあり……莊子は大人物……何王二氏の莊子觀……莊子の出處進退……莊子眞に譏を畏るにあらず……莊子は好みて放慢的無責任論を爲すにあらず……史記に莊子の歿年壽を載せざる所以……莊子の時代は史記信に近し……莊子年表

莊子の學、老子を祖述せるを以て、後世、老子と竝稱して老莊と爲し、宛かも儒家に在りて孟子を孔子に竝稱して孔孟と云へるが如きは、世の既に知れる所なるが、然れども此れ東漢以後に起りしことにて、西漢初代に在りては、老子は黃帝と竝稱せられて黃老と云はれ、莊子に至りては、說く者未だ後世の盛なるが如きに至らざりき、されば司馬遷の「史記」に於て老子を傳せし中に、莊子及び申不害韓非を合はせ題して老莊申韓列傳と云へり、蓋し遷の意は、既に前文に掲げたるが如く老子所貴虛無因應、變化於無爲、故著書辭稱、微妙難識、莊子敎道德放論、要亦歸之自然、申子卑々施之於名實、韓子引繩墨切事情明是非、其極慘礉少恩、皆於道德之意、而老子深遠矣とありて、老子の敎義は虛無因應を主とし、莊子及び申韓二子は皆之より出で、流派多少相殊なりと雖も、其の淵源は均しく老子を祖述せる者と爲せり、請ふ今

に見る所ありし歟、但し憾むる所は、謂はゆる伊尹太公鬻熊の書は、後世亡佚して存せず、今の世に傳へて太公の著とせる六韜三略及び鬻子の類は、後人の僞作にして未だ據るに足らず、而して「管子」の書も、趙宋の世既に十篇を亡ひて完全ならざれば、因りて其の道德虛無觀の如何を詳究することを得ず、是れ尤も惜む可しと爲すなり、蓋し之を要するに、老子の道敎は、老聃の唱道を待たずして、最も先づ支那の北土に開けて、孔子の儒敎は乃ち周公に繼ぎて興りし者たることは、復た疑を容れざるなり、而して彼の刑名法術の學は、申不害韓非に由りて主張せられ、爲我兼愛の說は楊朱墨翟に因りて唱道せらるゝも、其の本と皆老子より出でたることは、現に「韓非子」の書中に解老喩老の二篇ありて老敎の旨義を論釋し、又司馬遷が「史記」の本傳に申子施之名實、韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礉少恩、皆原於道德之意、而老子深遠矣と論ぜるに據るも、亦得て知るべし、墨翟と老子との關係は、近世淸の葉煥彬（光緖年間の人）は墨學亦出於道家、周之太史史角、因魯惠公（孔子以前二百五六十年）問郊廟之禮、天子命之往、而其學傳焉、呂覽當染篇、紀其事、史角與老聃同時、又同與禮淵源授受、可得而言と云へり、此の言や未だ全くは首肯し難く、且つ老聃を孔子と同時とすれば、史角と年代迥かに殊にして、今當染篇を按ずるに、其（史角）後在於魯、墨子學焉とあれば、葉說の謬りしことは明らかなれども、墨翟の學の史角より傳はりしことは、「呂覽」始め古人の書多く之を言へり、乃ち墨子の敎への淸淨簡樸を旨と爲す所は、亦幾分か老敎の流を汲める者なりしが如し、而して莊周の傳尤も老子の統を得たる者なることは、猶孔子の學統に孟子あるがごとし、韓退之曰く、自孔子沒、羣弟子莫不有書、獨孟軻氏之傳得其宗、故求觀聖人之道、必自孟子始と、今や老子の說を究めんと欲する者は、請ふ亦先づ莊子の書より始めて可なり、然りと雖も韓非の荀卿を師とし、儒學を受け、墨翟の初め孔子の術を治めしが如く、莊子も亦嘗て孔門の徒に私淑せしことは、後章に敍するが如し、されば其の學や未だ必しも孟子が純然たる孔氏の正宗を承繼せしが如くに、老聃の敎のみを拘泥株守せし者にあらず、此れ又其の書を讀む者、玩索の間に自ら思ひ半に過ぐる者あらん、若し夫

終之齊有田氏之禍、而魯人困於盟主之令、蓋商(殷)之政近於齊、而周公之所以治周者其所以治魯也と云へり、されば齊國には、其の始祖 太公望より 以來、既に彼の淸淨簡樸を主とせる道家の思想を存せる者なる歟、管仲は太公の裔孫桓公を輔けて 天下の 覇と爲せし人なるが、孔子に先つこと數十百年にして、老子より先つこと又大略相同じ、管子の 書に 依れば其の道德を論ずるや曰く、虛無無形、謂之道、化育萬物、謂之德、君臣父子人間之事、謂之義、登降揖讓、貴賤有等、親疏之體、謂之禮、簡物小未一道、殺僇禁誅、謂之法、大道可安而不可說と、(心術 上 第三十六)又曰く毋代馬走、使盡其力、毋代鳥飛、使弊其羽翼、毋先物動、以觀其則、動則失位、靜乃自得、虛其欲、神將入舍、掃除 不潔、神乃留處(同上)と、又曰く恬愉無爲、去智與故、(故は事なり)其應也非所設也、其動也非所取也、過在自用、罪在變化、是故有道之君、其處也若無知、其應物也若偶之、靜因之 道也と、而して其の下文に自から之を解して 曰く、君子恬愉無爲、去智與故、言虛素也、其應非所設也、其動 非所取也、此言因也、因也者舍己而以物爲法者也、感而後應、非所設也、緣理而動、非所取也、過在自用、罪在變化、自用則不虛、不虛則仵於物矣、變化則爲(僞と同じ)生、爲生則亂矣、故道貴因、因者因其能者、言所用也、君子之處也、若無知、言至虛也、其應物也若偶之、言時適也、若影之象形響之應聲也、故物至則應、過則舍矣者、言復所 於虛也(同上)と、又曰く思索精者、明益衰、德行修者、王道狹、臥名利者、寫生危、知周於六合之內者、吾知生之有爲阻也、持而滿之、乃其殆也、名滿於天下、不若其已也、名進而身退天之道也、滿盛之國、不可以仕、滿盛之家、不可以嫁子、驕倨傲暴之人、不可與交と、(白 心 第三十八)、嗚呼是れ何ぞ其の旨の老子と相似たるの甚しきや、此に由りて之を觀るに、老子の敎の孔子に先ちて支那に存し、虛無の說は既に其の以前にありて、老子に防まるに非ること、豈亦已に明らかならずや、漢の班固が「漢書」の藝文志に道家の 書目を 列擧して、首として伊尹(殷の相)五十一篇 太公(呂望)二百三十七篇鬻子(名は熊周の文王の師、楚に封せらる)二十二篇管子(管仲)八十六篇を掲げ、然る後ちに老子、文子、關尹子、莊子、列子の諸書に及べるは、想ふに亦此

生じ、遂に鬼神其物の存在に就いて有無を疑ふに至る、是に於て虚無の觀、因應の説相因りて興る、謂らく天地萬物皆自然より出で、自然に入る、而して其の本たるや至虚にして、何等の捉ふ可く觸る可き物あること無し、故に人の斯世に在るや、亦唯だ自然の推移に因りて順應するに若くはなし、而して吾人の形軀は、亦本より自然中の一現象たるに過ぎざれば、妄に區々たる小智を弄ばずして、思索を省き嗜欲を遠ざけ、澹泊靜息するときは、自ら長生久視の道を得べし、必しも別に幽渺恍惚にして而かも有無の知る可からざる鬼神を畏敬信頼し、又之に向うて吉凶禍福貧賤榮辱等の事に關する祈禱祭祀を爲すを求めざるなりと、是の説や本と黄帝始めて萬物の名を正くし、世を文明に導き、民をして辨別あらしめしに胚胎し、顓頊の地天通を絶つるを經て、堯舜時代に至り、漸く具體的に政治方面に出現し、彼の書に謂はゆる四岳に巡狩し山川を望秩せしが如きも、以て上下神祇を祭祀して、其の民功を扶護するを、謝恩的に敬虔の意を表するに止まり、復た往昔の百事總へて神慮を聽きて爲すが如くならず、而して其の蕩々たる大德は、克く萬邦を風化し、億兆をして識らず知らず帝の則に遵はしめり、彼の老子一流の道家は、其の立敎の旨、實に淵源を此に發せる者なり、されば其の後ち夏后氏の忠を尙び、殷人の質を尙ぶや、細密に討尋すれば多少の異同あれども、大體率ね皆清淨簡樸を旨と爲せしが、周に至りて、周公の才の美を以てして、前きの二代を鑑みて、郁々乎たる文明の政を行ひ、禮樂制度粲然として備具し、六德の敎以て行はれ、鄕擧里選其の賢才を薦め、六藝の學以て興り、庠序學校其の多士を造る、謂はゆる二帝三王の治、是に於て隆なりしが、其の衰ふるに及んで、文弊の餘、虛僞繁縟の害毒は深く人心に浸淫して、牢乎として拔く可らず、孔子乃ち周公の遺意を繼ぎ、堯舜を祖述し文武を憲章し、文質彬々の政を以て天下を易へんと欲す、是に於てか儒者の敎始めて興る、「史記」に稱す、太公（太公望）至レ國修レ政、因二其俗一簡二其禮一通二商工之業一便二魚鹽之利一而民多歸レ之（齊世家）と、宋の蘇子由は「史記」に太公封レ於レ齊、尊レ賢而尙レ功、周公曰、後世必有二簒弑之臣一、周公治レ魯、親レ親而尊レ尊、太公曰、後寢衰矣とあるを論じて、夫尊レ賢尙レ功、則近レ於レ强、親レ親尊レ尊則近レ於レ弱、

謂はゆる中國衣冠禮樂の邦たることを失はざればこそ單襄公も此の歎息を發せしなり、況んや國民思想の變遷は、亦猝に短時期の間にて語るべきにあらず、又況んや老子は周の守藏吏と爲りて孔子も就いて禮を問はれし事は、「史記」及び「禮記」の諸書に散見せるを觀るときは、老子の敎旨が單に南方思想の代表にあらざることは、豈に又既に已に明白ならずや、且や予を以て之を觀るに、支那に於て最も古く起りたるは巫敎にして、今日より之を論ずれば、神怪詭譎の說固より一噱に値するに過ぎざれども、其の當時に在りては、鴻蒙榛狉の世にして、魑魅罔龍水陸に跳梁し牛鬼蛇神到る處に盤桓し、殆んど物として靈異の觀を爲さゞるは莫し、其の間聖知聰明の人は善く之を利用し祭祀を修め典秩を定め政敎の端玆に興りしも其の衰弊や隨うて祝詛祈禱盛んに行はれ百事凡て神慮を聽きて行ひたることは、支那太古史に就いて觀れば、其の跡班々然として掩ふ可からざるは、彼の一部の國語に就いて亦推知すべし（楚語下、昭王問於觀射父の章を參看）、「史記」に顓頊の時、民神雜糅して方物す可からず、顓頊火正黎に命じて天を司り、南正重に命じ地を司り、以て地天の通ずるを斷ちし事を載せり、國語は之を夫人作享、家爲巫史、無有要質、民匱於祀、而不知其福と云へり、是れ其の當時に於て巫覡の如何に跳梁跋扈を極めしかを知るを得べしと同時に、爲政家が之に向うて如何に心力を盡せしかを想ふを得べし、「尚書」の太甲に敢有恒舞于宮酣歌于室、時謂巫風、敢有殉于貨色恒于遊畋、時謂淫風、敢有侮聖言逆忠直遠耆德比頑童、時謂亂風とあり、太甲は古文尚書に在りて僞作の說あれども、謂はゆる僞作も亦必ずしも一概に擯斥すべからず、兎に角又以て常歌常舞は巫覡の神に接事する慣例たることを見るべし、而して此の風一たび氾濫靡漫するときは、彼の貨色遊畋に耽溺して賢聖登用人を誤る弊害と共に、亡國の禍亂を速くに至ることを切言せられたるを觀れば、巫風の毒たるや亦淺からずと謂ふべし、夫れ人の鬼神を崇敬し倚賴して、巫覡者の乘じて私威私福を張るは何に故ぞと問はば、乃ち其の吉凶禍福妖壽貧富貴賤榮辱の分は、一つに繫りて鬼神の掌握中に存せりと信ずればなり然るに人智の漸く開くるに隨ひ、迷信の疑惑亦漸く

づく、卽ち今の河南省陳州府治の所在地にして、苦縣は「漢書」の地理志に依れば西漢時代には淮陽國に屬し、淮陽は今の河南陳州府淮寧縣に在り、淸の顧祖禹が、「讀史方輿紀要」に依れば、苦縣城は河南省歸德府鹿邑縣の東七十淸里に在り、卽ち楚の苦縣にして漢は因て縣を置き淮陽國に屬し、東漢は陳國に屬すとあり、唐代に至り改めて眞源縣と曰ひ、亳州に屬すと云へり、「史記正義」は國年表、淮陽國景帝三年廢、至天漢（武帝の年號）修史之時、楚節王純都彭城相近、疑苦此時屬楚國、故太史公（「史記」の作者司馬遷）書之と云ひ、以て史記の本文に楚苦縣とあるは、乃ち著者現時の地理に就て云へるにて、昔し老子の時の苦縣は、楚の地に非らざりしことを辯明したり、又「正義」は括地志云、苦縣在亳州谷陽（後魏の時苦縣を改めて谷陽縣と云ひ以て唐初に至る亳州に屬す）縣界、有老子宅及廟、廟中有九井尙存、在今亳州眞源縣（卽ち苦縣已に上に見ゆ）と、又晉太唐記を引て、苦縣城東有瀨鄕（厲鄕と同じ）祠、老子所生地也とありて、老子の遺蹟を歷擧し、以て其の地の復た疑ふべからざることを云へり、今「春秋」竝に「史記」の十二諸侯表に据りて之を考ふるに、楚の陳を亡滅せしことは、一二に止らず、周の定王八年（魯の宣公十年）楚の莊王は陳の靈公の亂に乘じて之を滅し、申叔時の諫に因りて之を復す、後楚の靈王亦陳の亂に乘じ之を滅せしが、靈王の弟棄疾王を弑して自立するに及んで、陳を復せしを、又後楚の惠王竟に陳を滅したり、時正に孔子の卒去の年に當れり、戰國時代に至りて、楚の頃襄王秦國に逼られ、其の都を郢より陳に遷したり、故に春秋の後戰國の前は陳の地全く楚に入るも、春秋時代及び其の以前に在りては陳の地を直ちに楚と爲し、其の地に生れし老子を楚人と爲すべからず、若し果して然るときは、孔孟の生れたる魯國も、後年戰國時代に至りて楚の考烈王に滅され、其の地楚に入りたるを以て、亦直ちに魯の地を楚と爲し、孔孟二子を楚人と爲すべき乎、天下豈に是の如き理あらんや、「國語」に周の單襄公陳國に使ひし、其の君の南冠（楚冠）せるを觀て、陳我大姬（上に見ゆ）之後也、棄衰冕而南冠以出不亦簡彝乎、是又犯先王之令也と歎息せるを載せたるを觀れば、春秋時代に在りて、陳は多少風俗の楚習に傾かんとせし模樣はあれども、尙ほ

莊子國字解上

藻洲　牧野謙次郎講述

序說

第一章　老莊の學

支那南北思想の代表者…老子は南方思想の代表者にあらず…支那に首として起りし巫敎なり…虛無說は巫敎の反動より興る…虛無自然の學說は老子に始まりしにあらず…老子以前の虛無自然說…太公望と管仲…儒敎主義は周公より始まる…孔子は周公の遺意を繼ぐ者…周代文明の弊害…老子の虛無自然を主張せし所以…莊列申韓の諸子多く老子より出づ…墨子も亦老子より出づ…莊子は老敎の孟子…老子を讀む者は先づ莊子より始めよ

蓋し嘗て往古支那敎學の由て起る所を稽ふるに、道敎先きに開け、儒敎之に次ぐ、而して後ち百家諸學相踵ぎて作り、互に消長變化を爲して、得失相伴ひ、是非相鬪ひ、今日に至るも猶ほ底止する所なきなり、世の論者或は曰く、支那の北人思想は孔孟之を代表し、南方思想は老莊之を代表すと、乃ち各々其の鄕國に因みて、其の名を爲り、孔孟の鄒魯の人たるよりして之を鄒魯學派と云ひ、老莊は荊楚の人なるより之を荊楚學派と云ひ、以て支那南北の思想は、初めより相同からざる者と爲せり、是れ洵に一謬論にして、予先つ一言以て之を辯せざるべからず、夫れ孔孟の鄒魯學派たるは姑く置き、老莊の荊楚學派たるは、吾竊かに其の何に據依して云ふかを知らざるなり、「史記」の老子傳を按ずるに、老子者楚苦縣厲鄕曲仁里人也とあり、老子を以て楚人と爲せる說は、主として之を以て根據と爲せるが如し、されども既に「史記集解」にも唐の司馬貞の說を擧げて、「苦縣本屬陳、春秋時楚滅陳、而苦又屬楚、故云楚苦縣」と云へるが如く、其の實は苦縣は、本來楚國の地に非ずして、陳國の封內に在り、陳國は乃ち周の武王が其の長女大姬を以て虞舜の苗裔なる胡公滿に妻はし、因て之を封じて舜の祀を奉ぜしめたる國にして、其の都は宛丘と名

外篇

駢拇第八……四二七
馬蹄第九……四四六
胠篋第十……四五七
在宥第十一……四七六
天地第十二……五一四
天道第十三……五五八

（上卷了）

禍は載せて世說に在り…裴頠の崇有論…王坦之の廢莊論…庾翼と殷浩…王弼何晏の罪は桀紂より浮ふ…莊子の功罪…王通は晉室の亂れしは老莊の罪にあらずと爲す…朱子は莊子を以て鄕愿賊德の尤と爲す…後世晉氏の禍に懲りて老莊を讀むを誡む…唐代老莊を追尊し其の學に明かなるものを擧ぐ…莊子を南華眞人と稱する意義

第四章　莊子の注解書……………………………………………………二八

郭注尤も世に著はる…郭象と向秀…嵆康は郭象の注を作れるを非とす…王衍は郭象に推服す…郭注は向注を剽竊す…郭象の自序…陸德明の釋文…莊子に後人の妄竄少からず…現行の莊子は郭象の删削を經たり…老子指歸に所載の莊子逸文…逸文は莊子の手筆にあらず…郭注以前の莊子と郭注本との異同…成玄英の莊子注疏は郭注の旨趣を闡發せり…林希逸の莊子口義…淸儒好みて宋明人の著書を譏る…口義亦讀莊の一頁階梯書…口義我が國に行はる…褚伯秀の南華眞經義海纂微…宋以前の莊子詁釋は大抵義海纂微に具はれり…文如海の莊子疏は郭注の失を矯めて作る…林雲銘の莊子因、陸雨星の莊子副墨、朱得之の莊子通義…林西仲の莊子因、宣穎の南華經解、郭慶藩の莊子集釋、焦竑の莊子翼、王先謙の莊子集解等、明淸學者の著は互に出入長短あり…本邦莊子の注釋は釋秀峯の莊子毅攴、葛因是の莊子心解、宇津木益の解莊、秦鼎の補義莊子因、東條保の標注補義莊子因等許多の書あり…寫本鈔錄亦少からず

內　篇

逍遙遊第一……………………………………………………三五
齊物論第二……………………………………………………八三
養生主第三……………………………………………………一九九
人間生第四……………………………………………………二一八
德充符第五……………………………………………………二八五
大宗師第六……………………………………………………三三五
應帝王第七……………………………………………………三九九

莊子國字解上　目次

序説

第一章　老莊の學……一

支那南北思想の代表者…老子は南方思想の代表にあらず…支那に主として起りしは巫教なり…虛無說は巫教の反動より起る…虛無自然の學說は老子に始まりしにあらず…老子以前の虛無自然說…太公望と管仲…儒教主義は周公より始まる…孔子は周公の遺意を繼ぐ者…周代文明の弊害…老子の虛無自然を主張せし所以…莊列申韓の諸子多く老子より出づ…墨子も亦老子より出づ…莊子は老教の孟子…老子を讀む者は先つ莊子より始めよ

第二章　莊子の傳……七

西漢時代には黃老を並稱す…老莊と並稱せらるゝは東漢以後に始まる…史記の莊子傳…莊子は蒙人並に蒙の地理…莊子と孟子…莊子は唯是れ楊朱の學…莊子を以て楚人とせしは朱子に始まる…莊子も亦楊墨を距ぐ…莊子は孟子と會見せず…孟子楊墨を闢きて老莊を排擊せず…儒家の老莊一派を攻擊するは荀子より始まる…莊子は純然たる老子學者にあらず…莊子と孔門との關係…莊子の旨義亦孔子と一致する所あり…莊子の旨義大要は老教に傾けり…司馬遷の莊子論…莊子自ら著書の性質を語る…巵言重言寓言…莊子の大膽的に放言せし所以…莊子自ら其文を評して瓌瑋諔詭と爲す…莊子の文章は眞に天地不朽の絕妙文章…著述の本意…鄙儒小拘の莊周…王安石蘇東坡の莊子觀…莊子の書僞作攙入あり…莊子儒墨を剽剝す…戰國儒者の醜陋…莊子の書儒墨を攻擊せるは多く外雜兩篇に在り…莊子は大人物…何王二氏の莊子觀…莊子の出處進退…莊子眞に犧を畏るにあらず…莊子は好みて放慢的無責任論を爲すにあらず…史記に莊子の歿年壽を載せざる所以…莊子の時代は史記信に近し…莊子年表

第三章　莊子歿後の莊學……二三

莊子は孟荀墨の如く高足弟子を有せず…莊子は兩漢の際に始めて著はる…嚴君平と班嗣…魏晉の間清談流行す…阮籍の達莊論…阮瞻の將無同…王衍輔弼に居て唯だ老莊を談ず…老莊の學國家を誤る…晉書懷帝紀論…老莊清談の

り。

一　書中、名言の記誦して論談文章等の資料と爲すべき者は、毎篇の末に、名言の一目を設け、之を摘錄したり。

一　本文の讀み方は、亦墨子國字解の例言に仍り、從來漢文家の讀法を用ひたり、故に必ずしも國文法と一致を爲ざる者あり、讀者之を諒せよ。

大正三年三月

述　者　識

然れども時に或は省略して徑に管見を先輩の成説に接する者ありて、其例必しも畫一ならず。又前人の說を擧ぐるに或は其の姓名を書し、或は單に姓のみを記せる者ありて亦一定せず。然れども其の初見の處は姓名若くは字號を具書せり。

一 莊子の奧旨大義は主として內篇に存せり。外雜二篇に至りては、內篇の旨義を敷衍反覆して說きたるに過ぎず。胠篋盜跖漁父讓王諸篇の如きは、古人已に後世の僞託を疑へり。今予の解、內篇は務めて詳明を期し、外雜二篇は較〻簡要に從へり。且其の訓詁既に內篇に見えし者は、復た一一を釋せず、往々「已に某篇に見ゆ」の語を以て、其の在處を指示したり。然れども重要なる語句、及び難解易忘の字義は、重複を厭はず解釋したり。

一 本文中理義の幽玄、文章の艱深にして、應に遽かに主旨を解するに苦むべき者は、特に備考の一目を設け、其の概要を說明したる

て漏脱誤謬の多きを知る。覽者幸に予が不逮を輔けて是正を吝む勿れ。

一　莊子の解釋、和漢古今甚だ衆きことは序説中に之を辯じたり。國字解講義錄の類亦決して少からず。然れども其の高き者は理趣を主として文義を略し、卑き者は淺陋傳承して、旣に理趣を沒し、又文義を謬り、遂に千古鴻匠碩哲の名著大作をして、意趣滅裂、文義晦澁し、誤解相因らしむ。是れ識者の夙に嘆惜する所なり。今予の不敏、妄に揣らず此著を起艸せし者は、聊か莊子の文義理趣を初學者に語り幷に敎を大方家に乞はんと欲すればなり。敢て自ら己を是とし人を非とするにあらず。

一　本書の講説は、時に較々繁宂に失する嫌あるも、務めて意義の明瞭ならんことを期したり。字句の解義は、往々羣説を摘鈔し、其の間に臆説を雜ふる者は「愚案ずるに」の語を以て之を標明せり。

先哲遺著 漢籍國字解全書第廿八卷

解題

莊子

牧野藻洲講述

【本書の解題】莊子に關する詳細なる研究は、本書の序說として掲げられたれば、今は單に國字解の必要ある所以を一言するに止めんとす。

周代の大哲學者莊周の書なるを以て莊子と名く。此書が老聃の學を繼承して虛無の道を闡明せしことは言ふに及ばず。思ふに孔老二家の說は、上世以來、東洋思想の中心となれるを以て、學問的に支那思想を研究せんとする者は、孔敎の經典たる論語を繙くべきと共に、老敎の經典たる老子を讀まざるべからず。然るに老子は文章簡古、理義艱深にして容易に讀むべからず、故に老子

BL
1900
C5M35
1914
v.1

第二十八卷

莊子　上

牧野藻洲講

内篇全部と外篇の上半とを網羅す

LIBRARY
DEC 15 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

先哲遺著追補

漢籍國字解全書

早稻田大學出版部藏版

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

BL Chuang-tzu
1900 Soshi
C5M35
1914
v.1

East Asia

漢籍國字解全書